

JP1 Version 12

**JP1/Performance Management - Agent Option
for HiRDB**

解説・文法書

3021-3-D87-10

前書き

■ 対象製品

適用 OS のバージョン、対象製品が前提とするサービスパックやパッチなどの詳細は、リリースノートで確認してください。

●JP1/Performance Management - Manager (適用 OS : Windows Server 2012, Windows Server 2016, Windows Server 2019)

P-2A2C-AACL JP1/Performance Management - Manager 12-00

製品構成一覧および内訳形名

P-CC2A2C-5ACL JP1/Performance Management - Manager 12-00

P-CC2A2C-5RCL JP1/Performance Management - Web Console 12-00

●JP1/Performance Management - Manager (適用 OS : CentOS 6 (x64), CentOS 7, Linux 6 (x64), Linux 7, Oracle Linux 6 (x64), Oracle Linux 7, SUSE Linux 12, SUSE Linux 15)

P-812C-AACL JP1/Performance Management - Manager 12-00

製品構成一覧および内訳形名

P-CC812C-5ACL JP1/Performance Management - Manager 12-00

P-CC812C-5RCL JP1/Performance Management - Web Console 12-00

●JP1/Performance Management - Agent Option for HiRDB (適用 OS : Windows Server 2012, Windows Server 2016, Windows Server 2019, Windows Server 2022)

P-2A2C-AKCL JP1/Performance Management - Agent Option for HiRDB 12-00

製品構成一覧および内訳形名

P-CC2A2C-FKCL JP1/Performance Management - Agent Option for HiRDB 12-00

P-CC2A2C-AJCL JP1/Performance Management - Base 12-00

●JP1/Performance Management - Agent Option for HiRDB (適用 OS : Linux 6 (x64), Linux 7, Linux 8, Oracle Linux 8)

P-812C-AKCL JP1/Performance Management - Agent Option for HiRDB 12-00

製品構成一覧および内訳形名

P-CC812C-FKCL JP1/Performance Management - Agent Option for HiRDB 12-00

P-CC812C-AJCL JP1/Performance Management - Base 12-00

●JP1/Performance Management - Agent Option for HiRDB (適用 OS : Linux 9)

P-842C-AKCL JP1/Performance Management - Agent Option for HiRDB 12-00

製品構成一覧および内訳形名

P-CC842C-FKCL JP1/Performance Management - Agent Option for HiRDB 12-00

P-CC842C-AJCL JP1/Performance Management - Base 12-00

●JP1/Performance Management - Agent Option for HiRDB (適用 OS : AIX V7.1, AIX V7.2, AIX 7.3)

P-1M2C-AKCL JP1/Performance Management - Agent Option for HiRDB 12-00

製品構成一覧および内訳形名

P-CC1M2C-FKCL JP1/Performance Management - Agent Option for HiRDB 12-00

P-CC1M2C-AJCL JP1/Performance Management - Base 12-00

●JP1/Performance Management - Agent Option for HiRDB (適用 OS : HP-UX 11i V3 (IPF))

P-1J2C-AKCL JP1/Performance Management - Agent Option for HiRDB 12-00

製品構成一覧および内訳形名

P-CC1J2C-FKCL JP1/Performance Management - Agent Option for HiRDB 12-00

P-CC1J2C-AJCL JP1/Performance Management - Base 12-00

これらの製品には、他社からライセンスを受けて開発した部分が含まれています。

■ 輸出時の注意

本製品を輸出される場合には、外国為替及び外国貿易法の規制並びに米国輸出管理規則など外国の輸出関連法規をご確認の上、必要な手続きをお取りください。

なお、不明な場合は、弊社担当営業にお問い合わせください。

■ 商標類

記載の会社名、製品名などは、それぞれの会社の商標もしくは登録商標です。

■ マイクロソフト製品の表記について

このマニュアルでは、マイクロソフト製品の名称を次のように表記しています。

表記	製品名
Internet Explorer	Windows(R) Internet Explorer(R)
Windows Server 2012	Microsoft(R) Windows Server(R) 2012 Datacenter
	Microsoft(R) Windows Server(R) 2012 Standard
	Microsoft(R) Windows Server(R) 2012 R2 Datacenter
	Microsoft(R) Windows Server(R) 2012 R2 Standard

表記		製品名
Windows Server 2016	Windows Server 2016 Standard	Microsoft(R) Windows Server(R) 2016 Standard
	Windows Server 2016 Datacenter	Microsoft(R) Windows Server(R) 2016 Datacenter
Windows Server 2019	Windows Server 2019 Standard	Microsoft(R) Windows Server(R) 2019 Standard
	Windows Server 2019 Datacenter	Microsoft(R) Windows Server(R) 2019 Datacenter
Windows Server 2022	Windows Server 2022 standard	Microsoft(R) Windows Server(R) 2022 Standard
	Windows Server 2022 Datacenter	Microsoft(R) Windows Server(R) 2022 Datacenter
WSFC		Windows Server Failover Cluster

Windows Server 2012, Windows Server 2016, Windows Server 2019, および Windows Server 2022 を総称して、Windows と表記することがあります。

■ 発行

2025 年 7 月 3021-3-D87-10

■ 著作権

All Rights Reserved. Copyright (C) 2019, 2025, Hitachi, Ltd.

All Rights Reserved. Copyright (C) 2019, 2025, Hitachi Solutions, Ltd.

変更内容

変更内容(3021-3-D87-10) JP1/Performance Management - Agent Option for HiRDB 12-00

追加・変更内容	変更箇所
リモート実行およびファイル転送コマンド選択機能をサポートしました。 これによって、PI_FSST, PI_SSYS, PI_RDFL, または PI_RDFS レコードを収集する場合に、コマンドのリモート実行やファイル転送で使用する OS コマンドを指定できるようにしました。	3.4.3(1) , 3.4.3(2)
PFM - Agent for HiRDB のメッセージの出力先一覧に次のメッセージを追加しました。 <ul style="list-style-type: none">• KAVF15076, KAVF15077, KAVF15078	7.3
syslog と Windows イベントログ出力メッセージ情報一覧に次のメッセージを追加しました。 <ul style="list-style-type: none">• KAVF15076-I, KAVF15077-W, KAVF15078-W	7.4
<ul style="list-style-type: none">• 次のメッセージを追加しました。 KAVF15076-I, KAVF15077-W, KAVF15078-W• 次のメッセージを変更しました。 KAVF15010-E, KAVF15013-E, KAVF15020-W, KAVF15022-W, KAVF15023-E, KAVF15026-E, KAVF15029-E, KAVF15045-E, KAVF15046-E, KAVF15051-E, KAVF15052-E, KAVF15057-E, KAVF15062-W, KAVF15063-W, KAVF15065-W	7.5
適用 OS に次の OS を追加しました。 <ul style="list-style-type: none">• Windows Server 2019• Windows Server 2022• SUSE Linux 15• Linux 8• Oracle Linux 8• Linux 9• AIX 7.3	—
次の OS をサポートする OS から削除しました。 <ul style="list-style-type: none">• Windows Server 2008	—

単なる誤字・脱字などはお断りなく訂正しました。

はじめに

このマニュアルは、JP1/Performance Management - Agent Option for HiRDB の機能や収集レコードなどについて説明したものです。

■ 対象読者

このマニュアルは、次の方を対象としています。

- JP1/Performance Management - Agent Option for HiRDB の機能および収集レコードについて知りたい方
- JP1/Performance Management を使用したシステムを構築、運用して、HiRDB のパフォーマンスデータを収集したい方

また、HiRDB について熟知していることを前提としています。

なお、JP1/Performance Management を使用したシステムの構築、運用方法については、次のマニュアルをご使用ください。

- JP1/Performance Management 設計・構築ガイド
- JP1/Performance Management 運用ガイド
- JP1/Performance Management リファレンス

■ マニュアルの構成

このマニュアルは、次に示す編から構成されています。なお、このマニュアルは、Windows、HP-UX、AIX、およびLinux(R)の各 OS (Operating System) に共通のマニュアルです。OS ごとに差異がある場合は、本文中でそのつど内容を書き分けています。

第1編 概要編

JP1/Performance Management - Agent Option for HiRDB の概要について説明しています。

第2編 構築・運用編

JP1/Performance Management - Agent Option for HiRDB のインストール、セットアップ、およびクラスタシステムでの運用について説明しています。

第3編 リファレンス編

JP1/Performance Management - Agent Option for HiRDB の監視テンプレート、レコード、コマンド、およびメッセージについて説明しています。

第4編 トラブルシューティング編

JP1/Performance Management - Agent Option for HiRDB でトラブルが発生したときの対処方法について説明しています。

■ 読書手順

このマニュアルは、利用目的に合わせて章を選択して読むことができます。利用目的別にお読みいただくことをお勧めします。

マニュアルを読む目的	記述箇所
JP1/Performance Management - Agent Option for HiRDB の特長を知りたい。	1 章
JP1/Performance Management - Agent Option for HiRDB の機能概要を知りたい。	1 章
JP1/Performance Management - Agent Option for HiRDB の導入時の作業を知りたい。	2 章, 3 章
JP1/Performance Management - Agent Option for HiRDB のクラスタシステムでの運用を知りたい。	4 章
JP1/Performance Management - Agent Option for HiRDB の監視テンプレートについて知りたい。	5 章
JP1/Performance Management - Agent Option for HiRDB のレコードについて知りたい。	6 章
JP1/Performance Management - Agent Option for HiRDB のメッセージについて知りたい。	7 章
トラブルが起こったときの対処方法について知りたい。	8 章

■ このマニュアルで使用する書式

このマニュアルで使用する書式を次に示します。

書式	説明
文字列	可変の値を示します。 (例) 日付は YYYYMMDD の形式で指定します。
[]	ウィンドウ, ダイアログボックス, タブ, メニュー, ボタンなどの画面上の要素名を示します。
[] – []	メニューを連続して選択することを示します。 (例) [ファイル] – [新規作成] を選択します。 上記の例では, [ファイル] メニュー内の [新規作成] を選択することを示します。

■ このマニュアルのコマンドの文法で使用する記号

このマニュアルのコマンドとパラメーターの説明で使用する記号を次のように定義します。

記号	意味
	複数の項目に対して項目間の区切りを示し, 「または」の意味を示します。

記号	意味
(ストローク)	<p>(例) 「A B C」は、「A, B または C」を示します。</p>
< >	<p>可変値の項目を表します。</p> <p>(例) 「PFM - Agent for HiRDB <インスタンス名>」は、インスタンス名が可変値の項目であることを示します。</p>
{ }	<p>この記号で囲まれている複数の項目の中から、必ず 1 組の項目が該当することを示します。項目の区切りは で示します。</p> <p>(例) {A B C} は「A, B, または C のどれかが該当する」ことを示します。</p>
[]	<p>この記号で囲まれている項目は任意に指定できます（省略もできます）。複数の項目が記述されている場合には、すべてを省略するか、どれか 1 つを選択します。</p> <p>(例) [A]は「何も指定しない」か「A を指定する」ことを示します。 [B C]は「何も指定しない」か「B または C を指定する」ことを示します。</p>

■ フォルダおよびディレクトリの統一表記

このマニュアルでは、Windows で使用されている「フォルダ」と UNIX で使用されている「ディレクトリ」とが同じ場合、原則として、「ディレクトリ」と統一表記しています。

目次

前書き 2

変更内容 5

はじめに 6

第1編 概要編

1	PFM - Agent for HiRDB の概要 18
1.1	PFM - Agent for HiRDB の特長 19
1.1.1	HiRDB のパフォーマンスデータを収集できます 19
1.1.2	パフォーマンスデータの性質に応じた方法で収集できます 20
1.1.3	パフォーマンスデータを保存できます 20
1.1.4	HiRDB の運用上の問題点を通知できます 21
1.1.5	アラームおよびレポートを定義できます 21
1.1.6	クラスタシステムで運用できます 22
1.1.7	HiRDB/シングルサーバ、HiRDB/パラレルサーバのどちらの構成でも運用できます 22
1.2	パフォーマンスデータの収集と管理の概要 25
1.3	パフォーマンス監視の運用例 26
1.3.1	ベースラインの選定 26
1.3.2	システムの稼働に関する統計情報の監視 26
1.3.3	グローバルバッファヒット率の監視 27
1.3.4	RD エリアの稼働状況の監視 28
1.3.5	HiRDB ファイルシステム領域の稼働状況の監視 30

第2編 構築・運用編

2	インストールとセットアップ (Windows の場合) 32
2.1	インストールとセットアップの流れ 33
2.2	インストールの前に確認すること 34
2.2.1	前提 OS 34
2.2.2	ネットワークの環境設定 34
2.2.3	インストールに必要な OS ユーザー権限について 36
2.2.4	前提プログラム 36
2.2.5	クラスタシステムでのインストールとセットアップについて 37
2.2.6	障害発生時の資料採取の準備 38
2.2.7	インストール前の注意事項 39

2.3	インストール 42
2.3.1	プログラムのインストール順序 42
2.3.2	PFM - Agent for HiRDB のインストール手順 42
2.4	セットアップ 44
2.4.1	言語環境の設定 44
2.4.2	PFM - Manager および PFM - Web Console への PFM - Agent for HiRDB の登録 〈オプション〉 44
2.4.3	インスタンス環境の設定 47
2.4.4	ネットワークの設定 〈オプション〉 59
2.4.5	ログのファイルサイズ変更 〈オプション〉 60
2.4.6	パフォーマンスデータの格納先の変更 〈オプション〉 60
2.4.7	PFM - Agent for HiRDB の接続先 PFM - Manager の設定 61
2.4.8	動作ログ出力の設定 〈オプション〉 62
2.5	アンインストール 63
2.5.1	アンインストール前の注意事項 63
2.5.2	インスタンス環境のアンセットアップ 64
2.5.3	接続先 PFM - Manager の解除 65
2.5.4	アンインストール手順 66
2.6	PFM - Agent for HiRDB のシステム構成の変更 67
2.7	PFM - Agent for HiRDB の運用方式の変更 68
2.7.1	パフォーマンスデータの格納先の変更 68
2.7.2	Store バージョン 2.0 への移行 71
2.7.3	インスタンス環境の更新 73
2.8	バックアップとリストア 76
2.8.1	バックアップ 76
2.8.2	リストア 76
2.9	Web ブラウザでマニュアルを参照するための設定 78
2.9.1	マニュアルを参照するための設定 78
2.9.2	マニュアルの参照手順 79

3 インストールとセットアップ (UNIX の場合) 80

3.1	インストールとセットアップの流れ 81
3.2	インストールの前に確認すること 82
3.2.1	前提 OS 82
3.2.2	ネットワークの環境設定 82
3.2.3	インストールに必要な OS ユーザー権限について 84
3.2.4	前提プログラム 84
3.2.5	クラスタシステムでのインストールとセットアップについて 85
3.2.6	障害発生時の資料採取の準備 86

3.2.7	インストール前の注意事項	86
3.3	インストール手順	91
3.3.1	プログラムのインストール順序	91
3.3.2	PFM - Agent for HiRDB のインストール手順	91
3.4	セットアップ	95
3.4.1	LANG 環境変数の設定	95
3.4.2	PFM - Manager および PFM - Web Console への PFM - Agent for HiRDB の登録 〈オプション〉	96
3.4.3	インスタンス環境の設定	99
3.4.4	ネットワークの設定 〈オプション〉	112
3.4.5	ログのファイルサイズ変更 〈オプション〉	113
3.4.6	パフォーマンスデータの格納先の変更 〈オプション〉	113
3.4.7	PFM - Agent for HiRDB の接続先 PFM - Manager の設定	114
3.4.8	動作ログ出力の設定 〈オプション〉	114
3.5	アンインストール	115
3.5.1	アンインストール前の注意事項	115
3.5.2	インスタンス環境のアンセットアップ	116
3.5.3	接続先 PFM - Manager の解除	117
3.5.4	アンインストール手順	118
3.6	PFM - Agent for HiRDB のシステム構成の変更	119
3.7	PFM - Agent for HiRDB の運用方式の変更	120
3.7.1	パフォーマンスデータの格納先の変更	120
3.7.2	Store バージョン 2.0 への移行	124
3.7.3	インスタンス環境の更新	126
3.8	バックアップとリストア	128
3.8.1	バックアップ	128
3.8.2	リストア	128
3.9	Web ブラウザでマニュアルを参照するための設定	130
3.9.1	マニュアルを参照するための設定	130
3.9.2	マニュアルの参照手順	131
4	クラスタシステムでの運用	132
4.1	クラスタシステムの概要	133
4.1.1	HA クラスタシステム	133
4.2	フェールオーバー時の処理	135
4.2.1	PFM - Agent ホストに障害が発生した場合のフェールオーバー	135
4.2.2	PFM - Manager が停止した場合の影響	136
4.3	クラスタシステムでのインストールとセットアップ (Windows の場合)	137
4.3.1	クラスタシステムでのインストールとセットアップの前に確認すること (Windows の場合)	137

4.3.2	クラスタシステムでのインストールとセットアップの流れ（Windows の場合）	139
4.3.3	クラスタシステムでのインストール手順（Windows の場合）	141
4.3.4	クラスタシステムでのセットアップ手順（Windows の場合）	141
4.4	クラスタシステムでのインストールとセットアップ（UNIX の場合）	148
4.4.1	クラスタシステムでのインストールとセットアップの前に確認すること（UNIX の場合）	148
4.4.2	クラスタシステムでのインストールとセットアップの流れ（UNIX の場合）	150
4.4.3	クラスタシステムでのインストール手順（UNIX の場合）	152
4.4.4	クラスタシステムでのセットアップ手順（UNIX の場合）	152
4.5	クラスタシステムでのアンインストールとアンセットアップ（Windows の場合）	159
4.5.1	クラスタシステムでのアンインストールとアンセットアップの流れ（Windows の場合）	159
4.5.2	クラスタシステムでのアンセットアップ手順（Windows の場合）	160
4.5.3	クラスタシステムでのアンインストール手順（Windows の場合）	164
4.6	クラスタシステムでのアンインストールとアンセットアップ（UNIX の場合）	165
4.6.1	クラスタシステムでのアンインストールとアンセットアップの流れ（UNIX の場合）	165
4.6.2	クラスタシステムでのアンセットアップ手順（UNIX の場合）	166
4.6.3	クラスタシステムでのアンインストール手順（UNIX の場合）	171
4.7	クラスタシステムで運用する場合の注意事項	172
4.7.1	クラスタシステム運用時に収集するパフォーマンスデータ中のホスト名について	172
4.7.2	レコード収集中のフェールオーバー	172
4.8	PFM - Agent for HiRDB のシステム構成の変更	175
4.9	クラスタシステムでの PFM - Agent for HiRDB の運用方式の変更	176
4.9.1	クラスタシステムでのインスタンス環境の更新	176
4.9.2	クラスタシステムでの論理ホスト環境定義ファイルのエクスポート・インポート	177

第3編 リファレンス編

5	監視テンプレート	179
	監視テンプレートの概要	180
	アラームの記載形式	181
	アラーム一覧	182
	Buffer Hit Rate	183
	Buffer Hit Rate 0506	185
	Log Read Error	187
	Log Wait Thread	189
	Log Write Error	191
	Rdarea File Space	193
	Rdarea Space	195
	Rdarea Status	197
	Reorg Resource ROT1	199
	Reorg Resource ROT2	201
	Rollback Rate	203
	Sync Point Interval	205

Work File	207
レポートの記載形式	209
レポートのフォルダ構成	211
レポート一覧	214
Buffer Daily Detail	221
Buffer Daily Detail 0506	222
Buffer Daily Detail Chart	223
Buffer Daily Detail Chart 0506	224
Buffer Daily Detail Chart for Reference Hit Rate	225
Buffer Daily Detail Chart for Reference Hit Rate 0506	226
Buffer Daily Detail Chart for Update Hit Rate	227
Buffer Daily Detail Chart for Update Hit Rate 0506	228
Buffer Flush	229
Buffer Flush 0506	230
Buffer Flush Detail	231
Buffer Flush Detail 0506	232
Buffer Monthly Detail	233
Buffer Monthly Detail 0506	234
Buffer Monthly Detail Chart	235
Buffer Monthly Detail Chart 0506	236
Buffer Monthly Detail Chart for Reference Hit Rate	237
Buffer Monthly Detail Chart for Reference Hit Rate 0506	238
Buffer Monthly Detail Chart for Update Hit Rate	239
Buffer Monthly Detail Chart for Update Hit Rate 0506	240
Buffer Status	241
Buffer Status 0506	242
Buffer Status Chart	243
Buffer Status Chart 0506	244
Buffer Trend	245
Buffer Trend 0506	246
Buffer Trend Chart	247
Buffer Trend Chart 0506	248
Commit Chart (4.5)	249
Commit Daily Chart (4.5)	250
Connect Requests Chart (4.5)	251
Connect Requests Daily Chart (4.5)	252
DB Maintenance Info ROT1 (5.0)	253
DB Maintenance Info ROT2 (5.0)	255
HiRDB Message Log (4.0)	257
HiRDB Message Log 1 Hour (4.0)	258
Process Request Over Chart (4.5)	259
Process Request Over Daily Chart (4.5)	260
Rdarea Available Space Daily (4.5)	261
Rdarea Available Space Monthly (4.5)	262
Rdarea File I/O Daily (4.5)	263

Rdarea File I/O Monthly (4.5)	264
Rdarea File Space Daily (4.5)	265
Rdarea File Space Monthly (4.5)	267
Rdarea Space Daily (4.0)	268
Rdarea Space Daily (4.5)	269
Rdarea Space Daily Chart (4.0)	270
Rdarea Space Daily Chart (4.5)	271
Rdarea Space Monthly (4.0)	272
Rdarea Space Monthly (4.5)	273
Rdarea Space Monthly Chart (4.0)	274
Rdarea Space Monthly Chart (4.5)	275
Rdarea Space Status (4.0)	276
Rdarea Space Status Chart (4.0)	277
Rdarea Space Status Chart Worst 5 (4.0)	278
Rdarea Space Status Worst 5 (4.0)	279
Rdarea Space Trend (4.0)	280
Rdarea Space Trend Chart (4.0)	281
Rdarea Space Trend Chart Worst 5 (4.0)	282
Rdarea Space Trend Worst 5 (4.0)	283
Rdarea Status (4.0)	284
Rollback Chart (4.5)	285
Rollback Daily Chart (4.5)	286
Server Calls From Others (4.5)	287
Server Calls From Others Daily (4.5)	288
Server Calls On Unit (4.5)	289
Server Calls On Unit Daily (4.5)	290
Server Exec Time From Others (4.5)	291
Server Exec Time From Others Daily (4.5)	292
Server Exec Time On Unit (4.5)	293
Server Exec Time On Unit Daily (4.5)	294
Server Process Count Chart (4.5)	295
Server Process Count Daily Chart (4.5)	296
Server Status (4.0)	297
System Daily Summary SYS (4.5)	298
System Monthly Summary SYS (4.5)	302
System Summary SYS (4.5)	307
Work File Chart (4.5)	312
Work File Daily Chart (4.5)	313

6

レコード 314

データモデルについて	315
レコードの記載形式	316
ODBC キーフィールド一覧	319
要約ルール	320
データ型一覧	322

フィールドの値	323
Store データベースに記録されるときだけ追加されるフィールド	326
レコードの収集に関する注意事項	328
レコード一覧	329
DB Global Buffer Status for version 05-06 (PI_GB05)	331
DB Global Buffer Status for version 06-00, or later (PI_GBUF)	335
Detail Communication Control Status (PD_CNST)	339
Forecast Time of DB Reorg.Function Level 1 (PD_ROT1)	342
Forecast Time of DB Reorg.Function Level 2 (PD_ROT2)	347
HiRDB File System Area Status (PI_FSST)	352
HiRDB Message (PD_MLOG)	356
HiRDB Product Detail (PD)	360
HiRDB Server Status (PD_SVST)	361
HiRDB Statistical Information SYS (PI_SSYS)	364
HiRDB System (PD_HRDS)	396
RDAREA Detailed Status (PI_RDDS)	397
RDAREA HiRDB File (PI_RDFL)	407
RDAREA HiRDB File System Area (PI_RDFS)	412
RDAREA Status (PI_RDST)	418
Server Lock Control Status (PI_LKST)	423
System Summary Record (PI)	425

7 メッセージ 428

7.1	メッセージの出力形式	429
7.2	メッセージの記載形式	431
7.3	メッセージの出力先一覧	432
7.4	syslog と Windows イベントログの一覧	435
7.5	メッセージ一覧	437

第4編 トラブルシューティング編

8 トラブルへの対処方法 463

8.1	対処の手順	464
8.2	トラブルシューティング	465
8.2.1	パフォーマンスデータの収集と管理に関するトラブルシューティング	466
8.2.2	セットアップやサービスの起動に関するトラブルシューティング	469
8.2.3	その他のトラブルに関するトラブルシューティング	470
8.3	トラブルシューティング時に採取するログ情報	471
8.3.1	トラブルシューティング時に採取するログ情報の種類	471
8.3.2	ログファイルおよびディレクトリー一覧	472
8.4	トラブル発生時に採取が必要な資料	474
8.4.1	トラブル発生時に Windows 環境で採取が必要な資料	474
8.4.2	トラブル発生時に UNIX 環境で採取が必要な資料	477

8.5	資料の採取方法	481
8.5.1	トラブルシューティング時に Windows 環境で採取する資料の採取方法	481
8.5.2	トラブルシューティング時に UNIX 環境で採取する資料の採取方法	484
8.6	Performance Management の障害検知	487
8.7	Performance Management の障害回復	488

付録 489

付録 A	システム見積もり	490
付録 A.1	メモリー所要量	490
付録 A.2	ディスク占有量	490
付録 A.3	クラスタ運用時のディスク占有量	490
付録 B	カーネルパラメーター	491
付録 C	識別子一覧	492
付録 D	プロセス一覧	493
付録 E	ポート番号一覧	494
付録 E.1	PFM - Agent for HiRDB のポート番号	494
付録 E.2	ファイアウォールの通過方向	494
付録 E.3	Windows ファイアウォール環境での設定方法	495
付録 E.4	Linux 環境でのファイアウォール設定方法 (iptables, ip6tables が有効な場合)	496
付録 E.5	Linux 環境でのファイアウォール設定方法 (firewalld が有効な場合)	498
付録 E.6	Windows ファイアウォール環境での設定削除方法	499
付録 E.7	Linux 環境でのファイアウォール設定削除方法 (iptables, ip6tables が有効な環境)	500
付録 E.8	Linux 環境でのファイアウォール設定削除方法 (firewalld が有効な環境)	500
付録 F	PFM - Agent for HiRDB のプロパティ	501
付録 F.1	Agent Store サービスのプロパティー一覧	501
付録 F.2	Agent Collector サービスのプロパティー一覧	505
付録 G	ファイルおよびディレクトリー一覧	514
付録 G.1	PFM - Agent for HiRDB のファイルおよびディレクトリー一覧	514
付録 H	バージョンアップ手順とバージョンアップ時の注意事項	520
付録 I	バージョン互換	521
付録 J	動作ログの出力	522
付録 J.1	動作ログに出力される事象の種別	522
付録 J.2	動作ログの保存形式	522
付録 J.3	動作ログの出力形式	523
付録 J.4	動作ログを出力するための設定	528
付録 K	JP1/SLM との連携	531
付録 L	各バージョンの変更内容	532
付録 L.1	12-00 訂正版の変更内容	532
付録 L.2	12-00 の変更内容	532

付録 L.3	11-00 の変更内容	533
付録 L.4	10-00 の変更内容	534
付録 M	このマニュアルの参考情報	535
付録 M.1	関連マニュアル	535
付録 M.2	このマニュアルでの表記	537
付録 M.3	このマニュアルで使用する英略語	541
付録 M.4	このマニュアルでのプロダクト名, サービス ID, およびサービスキーの表記	542
付録 M.5	Performance Management のインストール先フォルダの表記	542
付録 M.6	KB (キロバイト) などの単位表記について	543
付録 N	用語解説	544

索引 552

1

PFM - Agent for HiRDB の概要

この章では、PFM - Agent for HiRDB の概要について説明します。

1.1 PFM - Agent for HiRDB の特長

PFM - Agent for HiRDB は、HiRDB のパフォーマンスを監視するために、パフォーマンスデータを収集および管理するプログラムです。

PFM - Agent for HiRDB の特長を次に示します。

- HiRDB の稼働状況を分析できる

監視対象の HiRDB から、排他資源テーブルの使用率やサーバプロセス数などのパフォーマンスデータを PFM - Agent for HiRDB で収集および集計し、その傾向や推移を図示することで、HiRDB の稼働状況を容易に分析できます。

- HiRDB の運用上の問題点を早期に発見し、原因を調査する資料を作成できる

監視対象の HiRDB で、排他資源テーブルの使用率が大きくなるなどのパフォーマンスの低下が発生した場合、E メールなどを使ってユーザーに通知することで、問題点を早期に発見できます。また、その問題点に関連する情報を図示することで、原因を調査する資料を作成できます。

PFM - Agent for HiRDB を使用するには、PFM - Manager および PFM - Web Console が必要です。 PFM - Manager と PFM - Agent for HiRDB を同一マシンにインストールしない場合、PFM - Base が必要です。

PFM - Agent for HiRDB について次に説明します。

1.1.1 HiRDB のパフォーマンスデータを収集できます

PFM - Agent for HiRDB を使用すると、対象ホスト上で動作している HiRDB の排他資源テーブル使用率などのパフォーマンスデータが収集できます。

注意

PFM - Agent for HiRDB では、7 ビットアスキー以外の文字が含まれるパフォーマンスデータは収集できません。

PFM - Agent for HiRDB では、パフォーマンスデータを次のように利用できます。

- HiRDB の稼働状況をグラフィカルに表示する

パフォーマンスデータは、PFM - Web Console を使用して、「レポート」と呼ばれるグラフィカルな形式に加工し、表示できます。レポートによって、HiRDB の稼働状況がよりわかりやすく分析できるようになります。

レポートには、次の種類があります。

- リアルタイムレポート

監視している HiRDB の現在の状況を示すレポートです。主に、システムの現在の状態や問題点を確認するために使用します。リアルタイムレポートの表示には、収集した時点のパフォーマンスデータが直接使用されます。

- 履歴レポート
監視している HiRDB の過去から現在までの状況を示すレポートです。主に、システムの傾向を分析するために使用します。履歴レポートの表示には、 PFM - Agent for HiRDB のデータベースに格納されたパフォーマンスデータが使用されます。
- 問題が起こったかどうかの判定条件として使用する
収集されたパフォーマンスデータの値が何らかの異常を示した場合、ユーザーに通知するなどの処置を取るよう設定できます。

1.1.2 パフォーマンスデータの性質に応じた方法で収集できます

パフォーマンスデータは、「レコード」の形式で収集されます。各レコードは、「フィールド」と呼ばれるさらに細かい単位に分けられます。レコードおよびフィールドの総称を「データモデル」と呼びます。

レコードは、性質によって 2 つのレコードタイプに分けられます。どのレコードでどのパフォーマンスデータが収集されるかは、 PFM - Agent for HiRDB で定義されています。ユーザーは、 PFM - Web Console を使用して、どのパフォーマンスデータのレコードを収集するか選択します。

PFM - Agent for HiRDB のレコードタイプを次に示します。

- Product Interval レコードタイプ（以降、 PI レコードタイプと表記します）
PI レコードタイプのレコードには、 1 分ごとのプロセス数など、ある一定の時間（インターバル）ごとのパフォーマンスデータが収集されます。 PI レコードタイプは、時間の経過に伴うシステムの状態の変化や傾向を分析したい場合に使用します。
- Product Detail レコードタイプ（以降、 PD レコードタイプと表記します）
PD レコードタイプのレコードには、現在起動しているプロセスの詳細情報など、ある時点でのシステムの状態を示すパフォーマンスデータが収集されます。 PD レコードタイプは、ある時点でのシステムの状態を知りたい場合に使用します。

各レコードについては、「[6. レコード](#)」を参照してください。

1.1.3 パフォーマンスデータを保存できます

収集したパフォーマンスデータを、 PFM - Agent for HiRDB の「Store データベース」と呼ばれるデータベースに格納することで、現在までのパフォーマンスデータを保存し、 HiRDB の稼働状況について、過去から現在までの傾向を分析できます。傾向を分析するためには、履歴レポートを使用します。

ユーザーは、 PFM - Web Console を使用して、どのパフォーマンスデータのレコードを Store データベースに格納するか選択します。 PFM - Web Console でのレコードの選択方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、稼働監視データの管理について説明している章を参照してください。

1.1.4 HiRDB の運用上の問題点を通知できます

PFM - Agent for HiRDB で収集したパフォーマンスデータは、HiRDB のパフォーマンスをレポートとして表示するのに利用できるだけでなく、HiRDB を運用していて問題が起こったり、障害が発生したりした場合にユーザーに警告することもできます。

例えば、各サーバの排他資源テーブルの平均使用率が 80%を上回った場合、ユーザーに E メールで通知するとします。このように運用するために、「各サーバの排他資源テーブルの平均使用率が 80%を上回る」を異常条件のしきい値として、そのしきい値に達した場合、E メールをユーザーに送信するように設定します。しきい値に達した場合に取る動作を「アクション」と呼びます。アクションには、次の種類があります。

- E メールの送信
- コマンドの実行
- SNMP トランプの発行
- JP1 イベントの発行

しきい値やアクションを定義したものを「アラーム」と呼びます。1 つ以上のアラームを 1 つのテーブルにまとめたものを「アラームテーブル」と呼びます。アラームテーブルを定義したあと、PFM - Agent for HiRDB と関連づけます。アラームテーブルと PFM - Agent for HiRDB とを関連づけることを「バインド」と呼びます。バインドすると、PFM - Agent for HiRDB によって収集されているパフォーマンスデータが、アラームで定義したしきい値に達した場合、ユーザーに通知できるようになります。

このように、アラームおよびアクションを定義すると、HiRDB の運用上の問題を早期に発見し、対処できます。

アラームおよびアクションの設定方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、アラームによる稼働監視について説明している章を参照してください。

1.1.5 アラームおよびレポートを定義できます

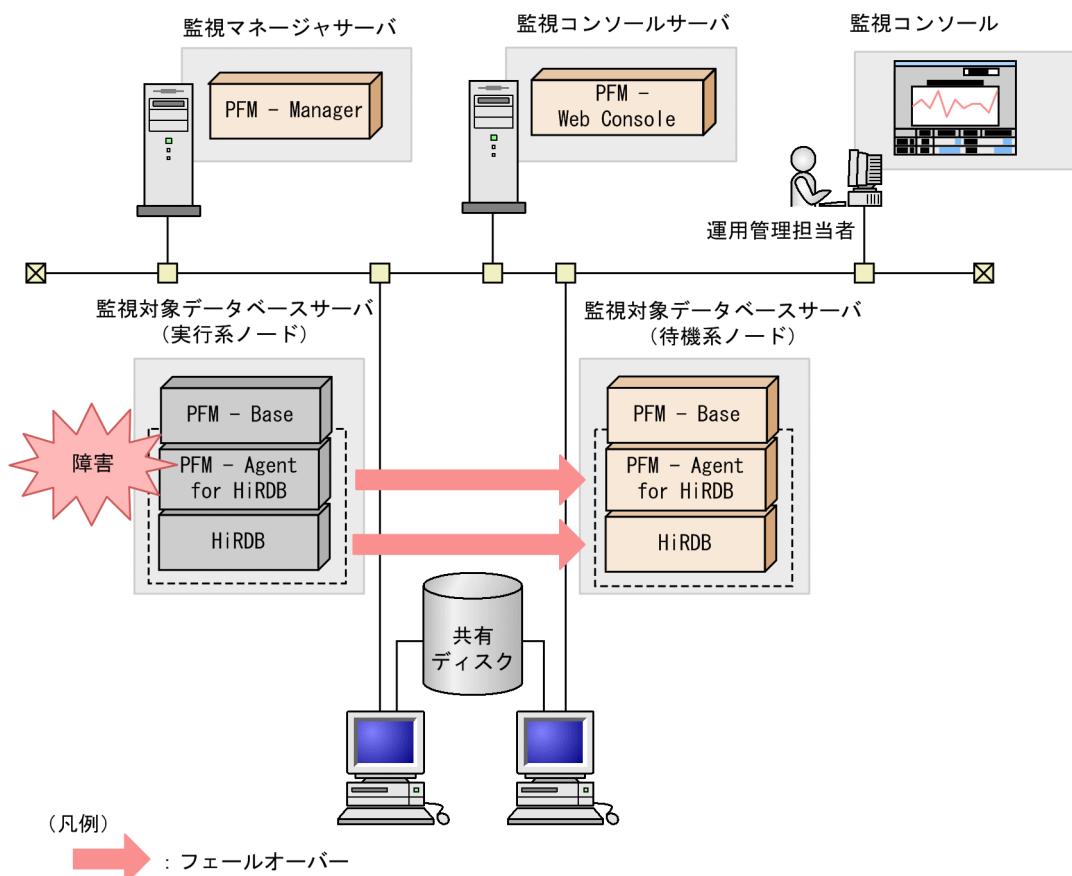
PFM - Agent for HiRDB では、「監視テンプレート」と呼ばれる、必要な情報があらかじめ定義されたレポートおよびアラームを提供しています。この監視テンプレートを使うと、複雑な定義をしなくても HiRDB の運用状況を監視する準備ができるようになります。監視テンプレートは、ユーザーの環境に合わせてカスタマイズすることもできます。監視テンプレートの使用方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、レポートの定義と操作またはアラームの定義と操作について説明している章を参照してください。また、監視テンプレートの詳細については、「[5. 監視テンプレート](#)」を参照してください。

1.1.6 クラスタシステムで運用できます

クラスタシステムを使うと、システムに障害が発生した場合にも継続して業務を運用できる、信頼性の高いシステムが構築できます。このため、システムに障害が発生した場合でも Performance Management の 24 時間稼働および 24 時間監視ができます。

クラスタシステムで PFM - Agent ホストに障害が発生した場合の運用例を次の図に示します。

図 1-1 クラスタシステムの運用例



同じ設定の環境を二つ構築し、通常運用する方を「実行系ノード」、障害発生時に使う方を「待機系ノード」として定義しておきます。

クラスタシステムでの Performance Management の運用の詳細については、「[4. クラスタシステムでの運用](#)」を参照してください。

1.1.7 HiRDB/シングルサーバ、HiRDB/パラレルサーバのどちらの構成でも運用できます

HiRDB/シングルサーバ、HiRDB/パラレルサーバのどちらの構成でもパフォーマンス監視できます。

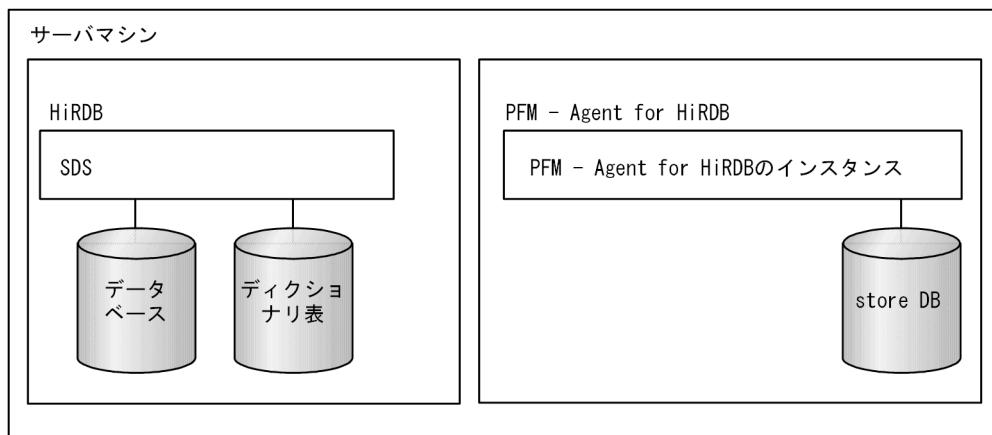
HiRDB/シングルサーバ、および HiRDB/パラレルサーバについては、マニュアル「HiRDB 解説」の「HiRDB システムの構成」について説明している章を参照してください。

(1) HiRDB/シングルサーバ構成を運用する場合

HiRDB/シングルサーバをパフォーマンス監視する場合、HiRDB が動作するマシンに PFM - Agent for HiRDB をインストールする必要があります。インストール後に PFM - Agent for HiRDB のインスタンスをセットアップしてください。

HiRDB/シングルサーバの場合の構成例を次の図に示します。

図 1-2 HiRDB/シングルサーバの場合の構成例



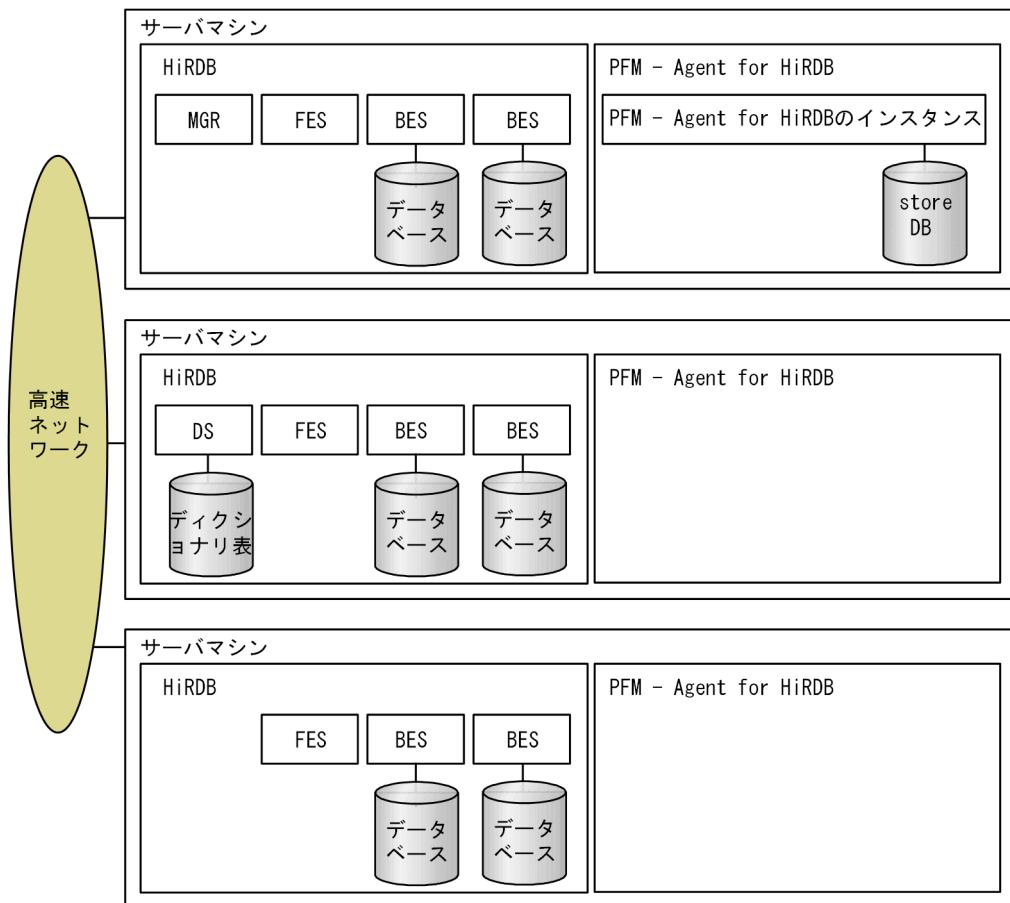
(2) HiRDB/パラレルサーバ構成を運用する場合

HiRDB/パラレルサーバをパフォーマンス監視する場合、MGR ノード、非 MGR ノードの区別なく、HiRDB が動作するすべてのマシンに PFM - Agent for HiRDB をインストールする必要があります。また、MGR ノードが動作するマシンにだけ PFM - Agent for HiRDB のインスタンスをセットアップします。HiRDB/パラレルサーバのすべてのパフォーマンス情報は PFM - Agent for HiRDB のインスタンスをセットアップしたマシンの store DB に格納されます。

なお、MGR ノードが動作するマシン以外のマシンに PFM - Agent for HiRDB のインスタンスをセットアップするとパフォーマンス情報を正しく収集できません。

HiRDB/パラレルサーバの場合の構成例を次の図に示します。

図 1-3 HiRDB/パラレルサーバの場合の構成例



1.2 パフォーマンスデータの収集と管理の概要

パフォーマンスデータの収集方法と管理方法は、パフォーマンスデータが格納されるレコードのレコードタイプによって異なります。PFM - Agent for HiRDB のレコードは、次の 2 つのレコードタイプに分けられます。

- PI レコードタイプ
- PD レコードタイプ

パフォーマンスデータの収集方法と管理方法については、次の説明を参照してください。

- パフォーマンスデータの収集方法

パフォーマンスデータの収集方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、Performance Management の機能について説明している章を参照してください。

収集されるパフォーマンスデータの値については、「[6. レコード](#)」を参照してください。

- パフォーマンスデータの管理方法

パフォーマンスデータの管理方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、Performance Management の機能について説明している章を参照してください。

PFM - Agent で収集および管理されているレコードのうち、どのパフォーマンスデータを利用するかは、PFM - Web Console で選択します。選択方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、稼働監視データの管理について説明している章を参照してください。

1.3 パフォーマンス監視の運用例

システムを安定稼働させるためには、パフォーマンスを監視してシステムの状態を把握することが重要です。この節では、PFM - Agent for HiRDB を用いてパフォーマンスを監視する方法について説明します。

なお、監視テンプレートで異常条件および警告条件として設定している値はあくまで参考値です。具体的な設定項目については、システムの運用形態に合わせて検討してください。

1.3.1 ベースラインの選定

ベースラインの選定とは、システム運用で問題なしと想定されるラインをパフォーマンス測定結果から選定する作業です。

PFM 製品では、ベースラインの値をしきい値としてシステムの運用監視をします。ベースラインの選定はしきい値を決定し、パフォーマンスを監視する上での重要な作業となります。

なお、ベースラインの選定では、次の注意事項を考慮してください。

- ・運用環境の高負荷テスト時など、ピーク時の状態を測定することをお勧めします。
- ・システム構成によってしきい値が大きく異なるため、システムリソースや運用環境を変更する場合は、再度ベースラインを測定することをお勧めします。

1.3.2 システムの稼働に関する統計情報の監視

HiRDB のスループットの低下を防ぐために、システムの稼働に関する統計情報を監視することは重要です。HiRDB が正常に稼働しているかどうかは、次に示す項目を監視することで確認できます。

- ・システムログファイルへの I/O エラー発生回数
- ・システムログファイルへの出力待ち発生回数
- ・ロールバック率
- ・シンクポイントダンプ取得間隔時間

(1) 関連する監視テンプレート

システムの稼働に関する統計情報を監視するために使用できる監視テンプレートを次の表に示します。

表 1-1 システムの稼働に関する統計情報の監視で使用できる監視テンプレート

アラーム	使用レコード	使用フィールド	異常条件	警告条件
Log Read Error	PI_SSYS	ログ読み出しエラー回数	Log Read Error > 0	Log Read Error > 0

アラーム	使用レコード	使用フィールド	異常条件	警告条件
Log Wait Thread	PI_SSYS	カレントバッファなしによるログ出力待ち回数	Log Wait Thread > 0	Log Wait Thread > 0
Log Write Error	PI_SSYS	ログ書き込みエラー回数	Log Write Error > 0	Log Write Error > 0
Rollback Rate	PI_SSYS	ロールバック率	Rollback Rate > 10	Rollback Rate > 5
Sync Point Interval	PI_SSYS	シンクポイントダンプ取得間隔時間の最小値	Sync Get Interval Time Min > 0 AND Sync Get Interval Time Min < 60000	Sync Get Interval Time Min > 0 AND Sync Get Interval Time Min < 300000

(2) 監視方法

システムログファイルへの I/O エラー発生回数の監視

システムログファイルの読み出しエラー発生回数は、Log Read Error アラームを使用して監視できます。また、システムログファイルの書き込みエラー発生回数は、Log Write Error アラームを使用して監視できます。

システムログファイル出力待ち発生回数の監視

システムログファイル出力待ち発生回数は、Log Wait Thread アラームを使用して監視できます。

ロールバック率の監視

ロールバック率は、Rollback Rate アラームを使用して監視できます。

シンクポイントダンプ取得間隔時間の監視

シンクポイントダンプ取得間隔時間は、Sync Point Interval アラームを使用して監視できます。

ここで説明したアラームによって異常を検知した場合、次に示す監視テンプレートを使用することでシステムの稼働に関する統計情報を確認できます。

- System Monthly Summary SYS (4.5) レポート

System Monthly Summary SYS (4.5) レポートによって、システムログファイルへの I/O エラー発生回数、ロールバック率、シンクポイントダンプ取得間隔時間などを確認できます。

さらに詳細な状況や原因を調査したい場合は、HiRDB や OS が output するログ、提供コマンドなどを使用してください。

1.3.3 グローバルバッファヒット率の監視

グローバルバッファヒット率が低下した場合、RD エリアへのアクセスが増大し、スループットの低下が発生することがあります。

このため、グローバルバッファヒット率を監視することは重要です。

(1) 関連する監視テンプレート

グローバルバッファヒット率を監視するために使用できる監視テンプレートを次の表に示します。

表 1-2 グローバルバッファヒット率の監視で使用できる監視テンプレート

アラーム	使用レコード	使用フィールド	異常条件	警告条件
Buffer Hit Rate	PI_GBUF	グローバルバッファ プールのヒット率	Buffer Pool Hit Rate < 80	Buffer Pool Hit Rate < 90

(2) 監視方法

グローバルバッファヒット率の監視

グローバルバッファヒット率は、Buffer Hit Rate アラームを使用して監視できます。

Buffer Hit Rate アラームによって異常を検知した場合、次に示す監視テンプレートを使用することでグローバルバッファヒット率を確認できます。

- Buffer Status レポート

Buffer Status レポートによって、グローバルバッファヒット率、参照要求グローバルバッファヒット率、更新要求グローバルバッファヒット率などを確認できます。

さらに詳細な状況や原因を調査したい場合は、HiRDB や OS が output するログ、提供コマンドなどを使用してください。

1.3.4 RD エリアの稼働状況の監視

RD エリアの未使用セグメント率が低下すると、データを格納することができなくなるおそれがあります。また、RD エリアの状態が”OPEN”以外になると、RD エリアに対する操作を行えなくなるおそれがあります。

このため、RD エリアの稼働状況を監視することは重要です。

(1) 関連する監視テンプレート

RD エリアの稼働状況を監視するために使用できる監視テンプレートを次の表に示します。

表 1-3 RD エリアの稼働状況を監視するために使用できる監視テンプレート

アラーム	使用レコード	使用フィールド	異常条件	警告条件
Rdarea Space	PI_RDST	未使用セグメントの 割合	Free % < 10	Free % < 20

アラーム	使用レコード	使用フィールド	異常条件	警告条件
Rdarea Status	PI_RDST	RD エリアの状態	RDAREA Status < D	RDAREA Status < I
Reorg Resource ROT1	PD_ROT1	メンテナンス要否	Maintenance Necessity = "Y"	Maintenance Necessity = "Y"
Reorg Resource ROT2	PD_ROT2	メンテナンス要否	Maintenance Necessity = "Y"	Maintenance Necessity = "Y"

(2) 監視方法

未使用セグメント率の監視

未使用セグメント率は、Rdarea Space アラームを使用して監視できます。

RD エリアの状態の監視

RD エリアの状態は、Rdarea Status アラームを使用して監視できます。

予測レベル 1 の再編成時期予測機能の実行結果の監視

予測レベル 1 の再編成時期予測機能の実行結果は、Reorg Resource ROT1 アラームを使用して監視できます。

予測レベル 2 の再編成時期予測機能の実行結果の監視

予測レベル 2 の再編成時期予測機能の実行結果は、Reorg Resource ROT2 アラームを使用して監視できます。

Rdarea Space アラームまたはRdarea Status アラームまたはReorg Resource ROT1 アラームまたはReorg Resource ROT2 アラームによって異常を検知した場合、次に示す監視テンプレートを使用することで RD エリアの稼働状況を確認できます。

- Rdarea Space Status (4.0) レポート

Rdarea Space Status (4.0) レポートによって、未使用セグメント率、RD エリア内の全セグメント数、RD エリア内の未使用セグメント数などを確認できます。

- Rdarea Status (4.0) レポート

Rdarea Status (4.0) レポートによって、RD エリアの状態などを確認できます。

- DB Maintenance Info ROT1 (5.0) レポート

DB Maintenance Info ROT1 (5.0) レポートによって、予測レベル 1 の再編成時期予測機能の実行結果を確認できます。

- DB Maintenance Info ROT2 (5.0) レポート

DB Maintenance Info ROT2 (5.0) レポートによって、予測レベル 2 の再編成時期予測機能の実行結果を確認できます。

さらに詳細な状況や原因を調査したい場合は、HiRDB や OS が output するログ、提供コマンドなどを使用してください。

1.3.5 HiRDB ファイルシステム領域の稼働状況の監視

RD エリア用 HiRDB ファイルシステム領域の未使用率が低下すると、データを格納することができなくなるおそれがあります。また、作業表用ファイル用の HiRDB ファイルシステム領域の最大使用率が大きくなると、SQL 文を実行できなくなるおそれがあります。

このため、HiRDB ファイルシステム領域の稼働状況を監視することは重要です。

(1) 関連する監視テンプレート

HiRDB ファイルシステム領域の稼働状況を監視するために使用できる監視テンプレートを次の表に示します。

表 1-4 HiRDB ファイルシステム領域の稼働状況を監視するために使用できる監視テンプレート

アラーム	使用レコード	使用フィールド	異常条件	警告条件
Rdarea File Space	PI_RDFS	(ユーザー領域中の未使用領域 (HiRDB ファイルとして割り当てられていない領域) の容量/ユーザー領域の総量) *100	Free % < 10	Free % < 20
Work File	PI_FSST	HiRDB ファイルシステム領域で一つのファイルとして確保できる容量の最大値に対する現時点でのユーザー最大使用量の使用率	Peak Usage % >= 90	Peak Usage % >= 80

(2) 監視方法

RD エリア用 HiRDB ファイルシステム領域の監視

RD エリア用 HiRDB ファイルシステム領域の未使用率は、Rdarea File Space アラームを使用して監視できます。

作業表用ファイル用の HiRDB ファイルシステム領域の監視

作業表用ファイル用の HiRDB ファイルシステム領域の最大使用率は、Work File アラームを使用して監視できます。

Rdarea File Space アラームまたは Work File アラームによって異常を検知した場合、次に示す監視テンプレートを使用することで HiRDB ファイルシステム領域の稼働状況を確認できます。

- Rdarea File Space Monthly (4.5) レポート

Rdarea File Space Monthly (4.5) レポートによって、RD エリア用 HiRDB ファイルシステム領域の未使用率などを確認できます。

- Work File Chart (4.5) レポート

Work File Chart (4.5) レポートによって、作業表用ファイル用の HiRDB ファイルシステム領域の最大使用率などを確認できます。

さらに詳細な状況や原因を調査したい場合は、HiRDB や OS が output するログ、提供コマンドなどを使用してください。

2

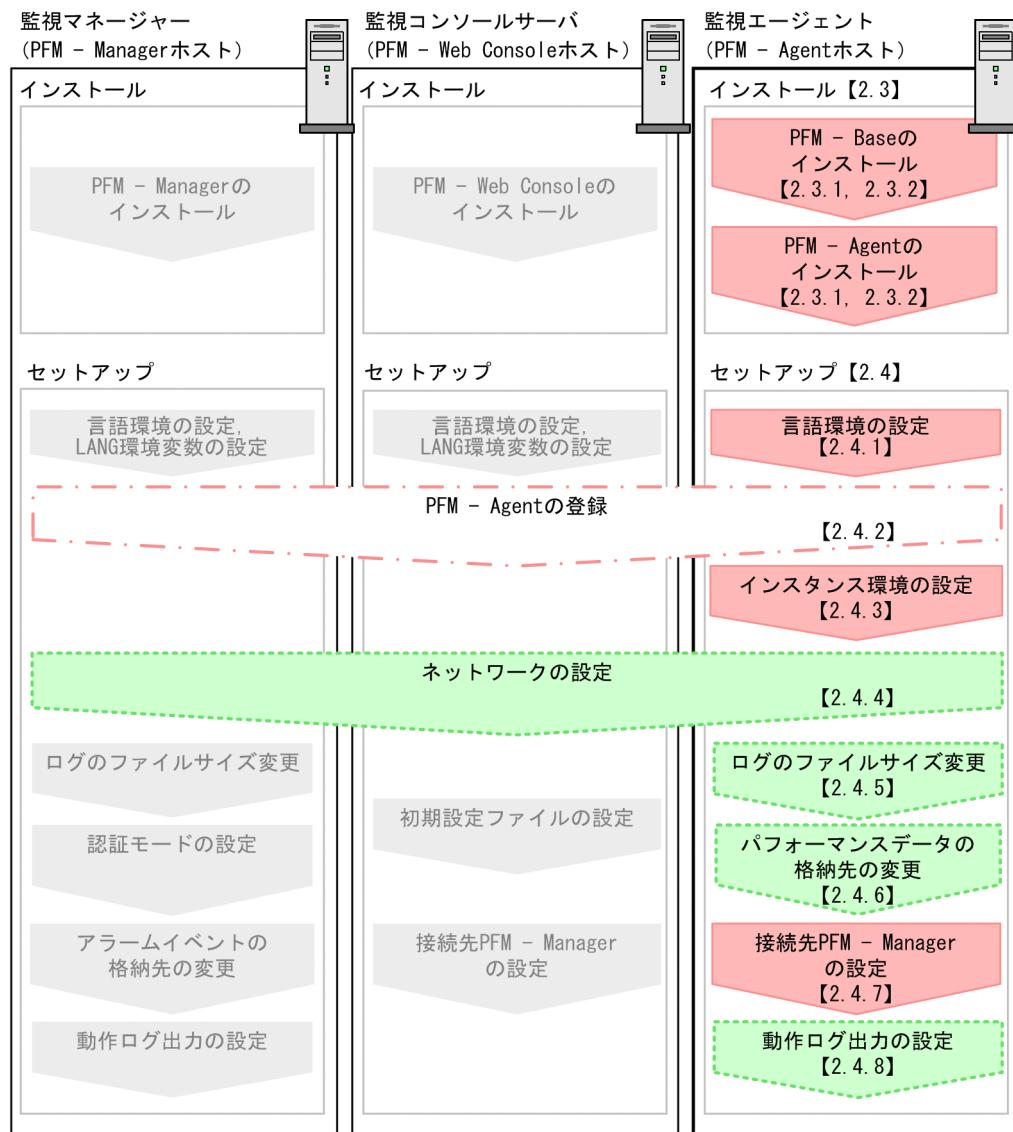
インストールとセットアップ (Windows の場合)

この章では、PFM - Agent for HiRDB のインストールおよびセットアップ方法について説明します。Performance Management システム全体のインストールおよびセットアップ方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

2.1 インストールとセットアップの流れ

PFM - Agent for HiRDB をインストールおよびセットアップする流れを説明します。

図 2-1 インストールとセットアップの流れ



(凡例)

- : 必須セットアップ項目
- : 場合によって必須となるセットアップ項目
- : オプションのセットアップ項目
- : マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」に手順が記載されている項目
- 【 】: 参照先

PFM - Manager および PFM - Web Console のインストールおよびセットアップの手順は、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

2.2 インストールの前に確認すること

PFM - Agent for HiRDB をインストールおよびセットアップする前に確認しておくことを説明します。

2.2.1 前提 OS

PFM - Agent for HiRDB が動作する OS を次に示します。

- Windows Server 2012
- Windows Server 2016
- Windows Server 2019
- Windows Server 2022

2.2.2 ネットワークの環境設定

Performance Management が動作するためのネットワーク環境について説明します。

(1) IP アドレスの設定

PFM - Agent のホストは、ホスト名で IP アドレスが解決できる環境を設定してください。IP アドレスが解決できない環境では、PFM - Agent は起動できません。

監視ホスト名 (Performance Management システムのホスト名として使用する名前) には、実ホスト名またはエイリアス名を使用できます。

- 監視ホスト名に実ホスト名を使用している場合

`hostname` コマンドを実行して確認したホスト名で、IP アドレスを解決できるように環境を設定してください。

- 監視ホスト名にエイリアス名を使用している場合

設定しているエイリアス名で IP アドレスを解決できるように環境を設定してください。

監視ホスト名の設定については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

ホスト名と IP アドレスは、次のどれかの方法で設定してください。

- Performance Management のホスト情報設定ファイル (`jpchosts` ファイル)
- `hosts` ファイル
- DNS

注意事項

- Performance Management は、DNS 環境でも運用できますが、FQDN (Fully Qualified Domain Name) 形式のホスト名には対応していません。このため、監視ホスト名は、ドメイン名を除いて指定してください。
- 複数の LAN 環境で使用する場合は、`jpchosts` ファイルで IP アドレスを設定してください。 詳細は、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。
- Performance Management は、DHCP による動的な IP アドレスが割り振られているホスト上では運用できません。Performance Management を導入するすべてのホストに、固定の IP アドレスを設定してください。

(2) ポート番号の設定

Performance Management プログラムのサービスは、デフォルトで次の表に示すポート番号が割り当てられています。これ以外のサービスまたはプログラムに対しては、サービスを起動するたびに、そのときシステムで使用されていないポート番号が自動的に割り当てられます。また、ファイアウォール環境で、Performance Management を使用するときは、ポート番号を固定してください。ポート番号の固定の手順は、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」のインストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

表 2-1 デフォルトのポート番号と Performance Management プログラムのサービス
(Windows の場合)

機能	サービス名	パラメーター	ポート番号	備考
サービス構成情報管理機能	Name Server	<code>jp1pcnsvr</code>	22285	PFM - Manager の Name Server サービスで使用されるポート番号。 Performance Management のすべてのホストで設定される。
サービス状態管理機能	Status Server	<code>jp1pcstatsvr</code>	22350	PFM - Manager および PFM - Base の Status Server サービスで使用されるポート番号。 PFM - Manager および PFM - Base がインストールされているホストで設定される。
JP1/SLM 連携機能	JP1/ITSLM	-	20905	JP1/SLM で設定されるポート番号。

(凡例)

- : なし

これらの PFM - Agent が使用するポート番号で通信できるように、ネットワークを設定してください。

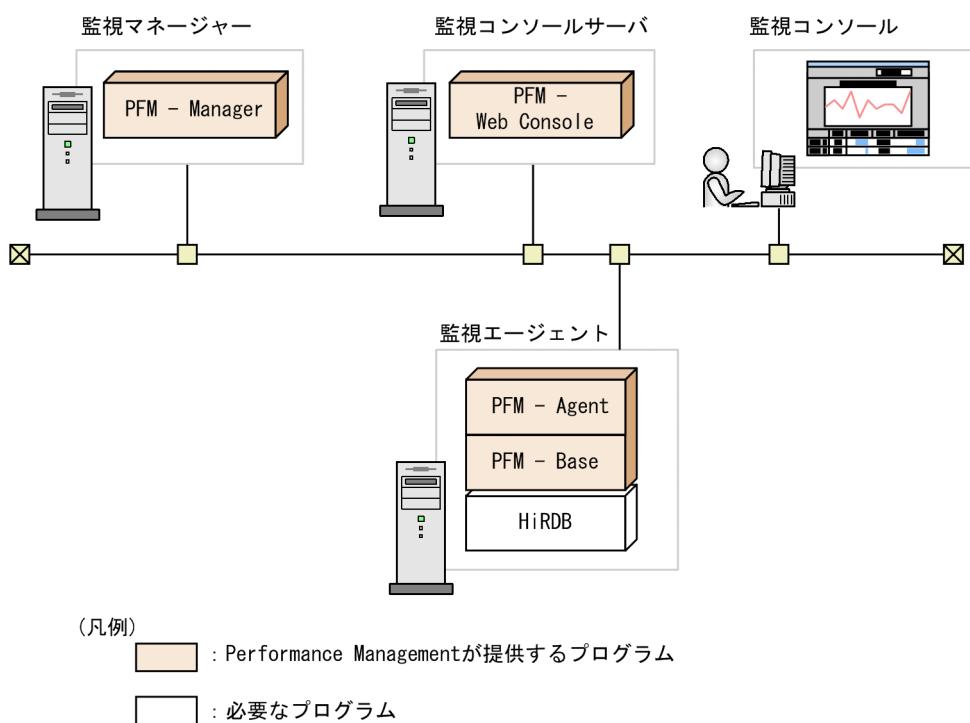
2.2.3 インストールに必要な OS ユーザー権限について

PFM - Agent for HiRDB をインストールするときは、必ず、Administrators 権限を持つアカウントで実行してください。

2.2.4 前提プログラム

ここでは、PFM - Agent for HiRDB をインストールする場合に必要な前提プログラムを説明します。プログラムの構成を次に示します。

図 2-2 プログラムの構成



(1) 監視対象プログラム

PFM - Agent for HiRDB の監視対象プログラムを次に示します。

- HiRDB

監視対象プログラムは、PFM - Agent for HiRDB と同一ホストにインストールする必要があります。

注意事項

- HiRDB のバージョンアップまたはセットアップを実行する前に、PFM-Agent for HiRDB のサービスを停止させてください。

- HiRDB システム共通定義ファイル (pdsys ファイル) で pdunit オペランドを指定しないで HiRDB を起動できる場合でも、必ず pdunit オペランドを指定してください。
- HiRDB ユニットの環境変数 PDCONFPATH に定義したパス名と、HiRDB ユニットの環境変数 PDDIR¥conf で定義したパス名と同じにしてください。
- HiRDB/パラレルサーバの場合は、HiRDB システムを構成するすべてのホストに PFM - Agent for HiRDB をインストールします。ただし、Windows の場合で、同一名称の論理ホストが異なるマシンに存在するときはインストール先フォルダのパスと同じにしてください。
- マルチ HiRDB のサーバでは、HiRDB ごとに別々の HiRDB 管理者を登録してください。
- HiRDB/パラレルサーバの場合、PFM - Agent for HiRDB は MGR ノードに配置されたエージェントから HiRDB サーバに接続して SQL を実行します。このため、IP アドレス接続制限機能を使用する場合は MGR ノードの IP アドレスを許可登録してください。なお、IP アドレス接続制限機能の詳細は、マニュアル「HiRDB システム運用ガイド」の CONNECT 関連セキュリティ機能について説明している章を参照してください。
- PI_RDDS レコードまたは PI_RDST レコードを収集する場合は、HiRDB サーバに対して 1 ユーザー分の接続を行います。必要に応じて pd_max_users の設定を見直してください。PI_RDDS レコードおよび PI_RDST レコードの詳細は「[6. レコード](#)」を参照してください。また、pd_max_users の詳細はマニュアル「HiRDB システム定義」を参照してください。

(2) Performance Management プログラム

監視エージェントには、PFM - Agent と PFM - Base をインストールします。PFM - Base は PFM - Agent の前提プログラムです。同一ホストに複数の PFM - Agent をインストールする場合でも、PFM - Base は 1 つだけですかいません。

ただし、PFM - Manager と PFM - Agent を同一ホストにインストールする場合、PFM - Base は不要です。

Performance Management プログラムを導入するホストとバージョンの関係については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、システム構成のバージョン互換について説明している章を参照してください。

また、PFM - Agent for HiRDB を使って HiRDB の稼働監視を行うためには、PFM - Manager および PFM - Web Console が必要です。

2.2.5 クラスタシステムでのインストールとセットアップについて

クラスタシステムでのインストールとセットアップは、前提となるネットワーク環境やプログラム構成が、通常の構成のセットアップとは異なります。また、実行系ノードと待機系ノードでの作業が必要になります。詳細については、「[4. クラスタシステムでの運用](#)」を参照してください。

2.2.6 障害発生時の資料採取の準備

トラブルが発生した場合にメモリーダンプ、ユーザーモードプロセスダンプなどが必要となることがあります。トラブル発生時にこれらのダンプを採取する場合は、あらかじめメモリーダンプ、ユーザーモードプロセスダンプが出力されるように設定してください。

メモリーダンプの出力設定

1. [コントロールパネル] から [システム] をダブルクリックする。
2. [詳細設定] ページの [起動と回復] の [設定] ボタンをクリックする。
3. [デバッグ情報の書き込み] で、[完全メモリダンプ] を選択し、出力先のファイルを指定する。

注意事項

メモリーダンプのサイズは、実メモリーのサイズによって異なります。搭載している物理メモリーが大きいと、メモリーダンプのサイズも大きくなります。メモリーダンプを採取できるだけのディスク領域を確保してください。詳細は、OS付属のドキュメントを参照してください。

ユーザーモードプロセスダンプの出力設定

次のレジストリを設定することによって、アプリケーションプログラムの異常終了時、即座に調査資料のユーザーモードプロセスダンプを取得できます。

HKEY_LOCAL_MACHINE\Software\Microsoft\Windows\Windows Error Reporting\LocalDumps

このレジストリキーに、次のレジストリ値を設定します。

- DumpFolder : REG_EXPAND_SZ <ユーザーモードプロセスダンプ出力先のフォルダ名>
(出力先フォルダには書き込み権限が必要です)
- DumpCount : REG_DWORD <保存するユーザーモードプロセスダンプの数>
- DumpType : REG_DWORD 2

注意

- レジストリを設定することで、JP1 だけでなくほかのアプリケーションプログラムでもユーザーモードプロセスダンプが出力されるようになります。ユーザーモードプロセスダンプの出力を設定する場合はこの点にご注意ください。
- ユーザーモードプロセスダンプが出力されると、その分ディスク容量が圧迫されます。ユーザーモードプロセスダンプが出力されるように設定する場合は、十分なディスク領域が確保されているユーザーモードプロセスダンプ出力先のフォルダを設定してください。

2.2.7 インストール前の注意事項

ここでは、Performance Management をインストールおよびセットアップするときの注意事項を説明します。

(1) 環境変数に関する注意事項

Performance Management では JPC_HOSTNAME を環境変数として使用しているため、ユーザー独自に環境変数として設定しないでください。設定した場合は、Performance Management が正しく動作しません。

(2) 同一ホストに Performance Management プログラムを複数インストール、セットアップするときの注意事項

Performance Management は、同一ホストに PFM - Manager, PFM - Web Console, および PFM - Agent をインストールすることもできます。その場合の注意事項を次に示します。

- PFM - Manager と PFM - Agent を同一ホストにインストールする場合、PFM - Base は不要です。この場合、PFM - Agent の前提プログラムは PFM - Manager になるため、PFM - Manager をインストールしてから PFM - Agent をインストールしてください。
- PFM - Base と PFM - Manager は同一ホストにインストールできません。PFM - Base と PFM - Agent がインストールされているホストに PFM - Manager をインストールする場合は、PFM - Web Console 以外のすべての Performance Management プログラムをアンインストールしたあとに PFM - Manager → PFM - Agent の順でインストールしてください。また、PFM - Manager と PFM - Agent がインストールされているホストに PFM - Base をインストールする場合も同様に、PFM - Web Console 以外のすべての Performance Management プログラムをアンインストールしたあとに PFM - Base → PFM - Agent の順でインストールしてください。
- PFM - Manager がインストールされているホストに PFM - Agent をインストールすると、接続先 PFM - Manager はローカルホストの PFM - Manager となります。この場合、接続先 PFM - Manager をリモートホストの PFM - Manager に変更できません。リモートホストの PFM - Manager に接続したい場合は、インストールするホストに PFM - Manager がインストールされていないことを確認してください。
- PFM - Agent がインストールされているホストに PFM - Manager をインストールすると、PFM - Agent の接続先 PFM - Manager は自ホスト名に設定し直されます。共通メッセージログに設定結果が出力されています。結果を確認してください。
- PFM - Web Console がインストールされているホストに、PFM - Agent をインストールする場合は、Web ブラウザの画面をすべて閉じてからインストールを実施してください。
- Performance Management プログラムを新規にインストールした場合は、ステータス管理機能がデフォルトで有効になります。ただし、07-50 から 08-00 以降にバージョンアップインストールした場合は、ステータス管理機能の設定状態はバージョンアップ前のままとなります。ステータス管理機能の

設定を変更する場合は、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の Performance Management の障害検知について説明している章を参照してください。

■ ポイント

システムの性能や信頼性を向上させるため、PFM - Manager, PFM - Web Console, および PFM - Agent はそれぞれ別のホストで運用することをお勧めします。

(3) バージョンアップの注意事項

Performance Management プログラムをバージョンアップする場合の注意事項については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」のインストールとセットアップの章にある、バージョンアップの注意事項について説明している個所を参照してください。

PFM - Agent for HiRDB をバージョンアップする場合の注意事項については、「[付録 H バージョンアップ手順とバージョンアップ時の注意事項](#)」を参照してください。

なお、バージョンアップについての詳細は、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の付録を参照してください。

(4) Performance Management インストール時の注意事項

- Performance Management のプログラムをインストールする場合、次に示すセキュリティ関連プログラムがインストールされていないかどうか確認してください。インストールされている場合、次の説明に従って対処してください。

- セキュリティ監視プログラム

セキュリティ監視プログラムを停止するかまたは設定を変更して、Performance Management のプログラムのインストールを妨げないようにしてください。

- ウィルス検出プログラム

ウィルス検出プログラムを停止してから Performance Management のプログラムをインストールすることを推奨します。

Performance Management のプログラムのインストール中にウィルス検出プログラムが稼働している場合、インストールの速度が低下したり、インストールが実行できなかったり、または正しくインストールできなかったりすることがあります。

- プロセス監視プログラム

プロセス監視プログラムを停止するかまたは設定を変更して、Performance Management のサービスまたはプロセス、および共通コンポーネントのサービスまたはプロセスを監視しないようにしてください。

Performance Management のプログラムのインストール中に、プロセス監視プログラムによって、これらのサービスまたはプロセスが起動されたり停止されたりすると、インストールに失敗することがあります。

- Performance Management のプログラムが 1 つもインストールされていない環境に新規インストールする場合は、インストール先フォルダにファイルやフォルダがないことを確認してください。
- Performance Management のプログラムおよびサービスや、Performance Management のファイルを参照するような他プログラム（例えば Windows のイベントビューアなど）を起動したままインストールした場合、システムの再起動を促すメッセージが表示されることがあります。この場合は、メッセージに従ってシステムを再起動し、インストールを完了させてください。
- Performance Management のプログラムおよびサービスや、Performance Management のファイルを参照するような他プログラム（例えば Windows のイベントビューアなど）を起動したままの状態、ディスク容量が不足している状態、またはディレクトリ権限がない状態でインストールした場合、ファイルの展開に失敗することがあります。Performance Management のプログラムおよびサービスや、Performance Management のファイルを参照するような他プログラムが起動している場合はすべて停止してからインストールし直してください。ディスク容量不足やディレクトリ権限不足が問題である場合は、問題を解決したあとでインストールし直してください。

(5) スキャン対象から除外するフォルダおよびファイルに関する注意事項

ウィルススキャン製品やバックアップソフトウェアなどで PFM - Agent for HiRDB が使用するファイルにアクセスすると、I/O 遅延やファイル排他などによって障害が発生するおそれがあります。これを防止するため、PFM - Agent for HiRDB 稼働中はウィルススキャン製品のスキャン対象やバックアップソフトウェアのバックアップ対象から、インストールフォルダおよびインストールフォルダ配下すべてを除いてください。ログファイルの指定でデフォルト以外のファイルを使用している場合など、インストールフォルダ配下とは別に指定しているファイルがあれば、あわせて除去してください。

2.3 インストール

ここでは、PFM - Agent for HiRDB のプログラムをインストールする順序と提供媒体からプログラムをインストールする手順を説明します。

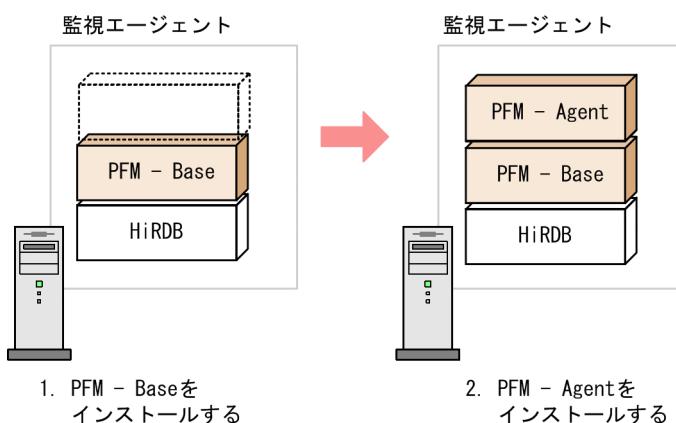
2.3.1 プログラムのインストール順序

まず、PFM - Base をインストールし、次に PFM - Agent をインストールします。PFM - Base がインストールされていないホストに PFM - Agent をインストールすることはできません。

なお、PFM - Manager と同一ホストに PFM - Agent をインストールする場合は、PFM - Manager → PFM - Agent の順でインストールしてください。また、Store データベースのバージョン 1.0 からバージョン 2.0 にバージョンアップする場合、PFM - Agent と PFM - Manager または PFM - Base のインストール順序によって、セットアップ方法が異なります。Store バージョン 2.0 のセットアップ方法については、「[2.7.2 Store バージョン 2.0 への移行](#)」を参照してください。

同一ホストに複数の PFM - Agent をインストールする場合、PFM - Agent 相互のインストール順序は問いません。

図 2-3 プログラムのインストール順序



2.3.2 PFM - Agent for HiRDB のインストール手順

Windows ホストに Performance Management プログラムをインストールするには、提供媒体を使用する方法と、JP1/NETM/DM（JP1/NETM/DM は日本国内の製品名称です）を使用してリモートインストールする方法があります。JP1/NETM/DM を使用する方法については、マニュアル「JP1/NETM/DM 運用ガイド 1 (Windows(R)用)」を参照してください。

注意事項

OS のユーザーアカウント制御機能 (UAC) を有効にしている場合は、インストール中にユーザーアカウント制御のダイアログが表示されることがあります。ダイアログが表示された場合は、[続行] ボ

タンをクリックしてインストールを続行してください。[キャンセル] ボタンをクリックした場合は、インストールが中止されます。

提供媒体を使用する場合のインストール手順を次に示します。

1. プログラムをインストールするホストに、Administrators 権限でログオンする。
2. ローカルホストで起動している Performance Management のサービスがあれば、すべて停止する。
停止するサービスは、物理ホストおよび論理ホスト上の Performance Management のサービスです。
サービスの停止方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の Performance Management の起動と停止について説明している章を参照してください。

3. 提供媒体をセットし、インストーラーを実行する。

起動したインストーラーの指示に従ってインストールを進めると、PFM - Manager または PFM - Base のインストール時に設定された次の項目が表示され、確認できます。

- ユーザー情報
- インストール先のフォルダ
- プログラムフォルダ

4. [インストール] ボタンをクリックして、インストールを開始する。

2.4 セットアップ

ここでは、PFM - Agent for HiRDB を運用するための、セットアップについて説明します。

〈オプション〉は使用する環境によって必要になるセットアップ項目、またはデフォルトの設定を変更する場合のオプションのセットアップ項目を示します。

2.4.1 言語環境の設定

Windows は言語環境を設定する個所が複数ありますが、設定はすべて統一しておく必要があります。

言語環境の設定手順については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の言語環境の設定について説明している個所を参照してください。

2.4.2 PFM - Manager および PFM - Web Console への PFM - Agent for HiRDB の登録 〈オプション〉

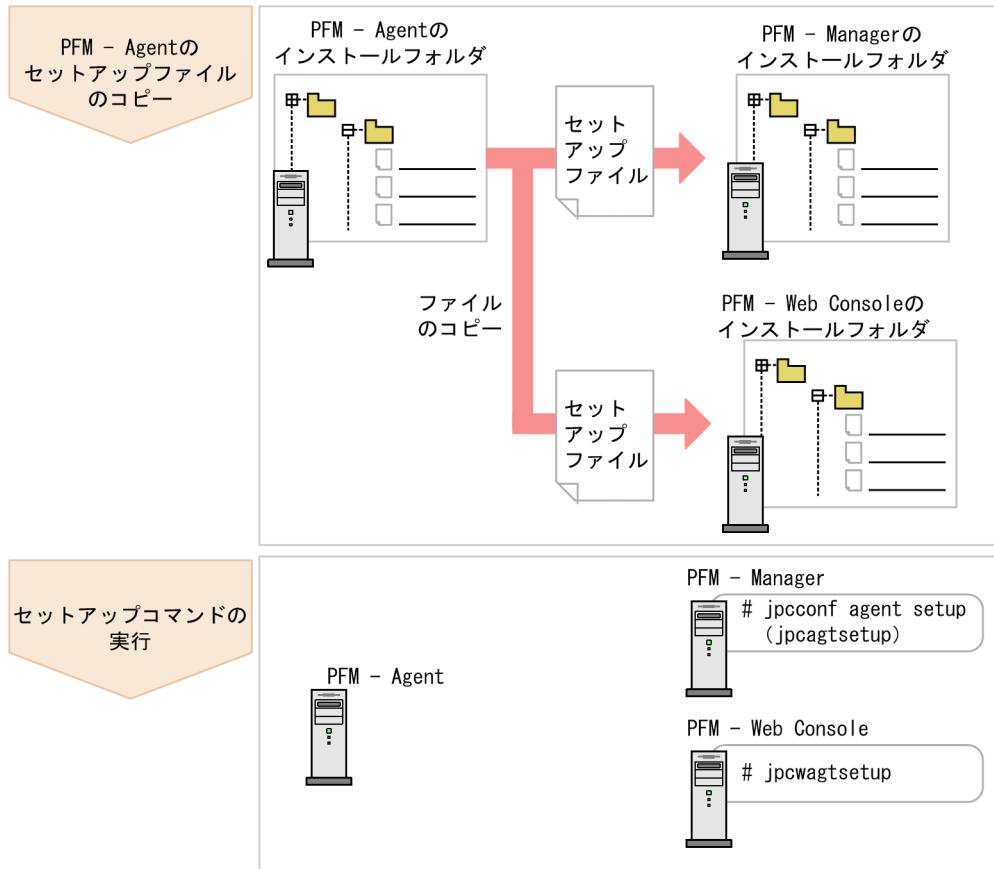
PFM - Manager および PFM - Web Console を使って PFM - Agent を一元管理するために、PFM - Manager および PFM - Web Console に PFM - Agent for HiRDB を登録する手順を説明します。

PFM - Manager のバージョンが 08-50 以降の場合、PFM - Agent の登録は自動で行われるため、ここで説明する手順は不要です。

ただし、PFM - Manager よりリリース時期が新しい PFM - Agent または PFM - RM については手動登録が必要になる場合があります。手動登録の要否については、PFM - Manager のリリースノートを参照してください。

PFM - Agent の登録の流れを次に示します。

図 2-4 PFM - Agent の登録の流れ



注意事項

- PFM - Agent の登録は、インスタンス環境を設定する前に実施してください。
- すでに PFM - Agent for HiRDB の情報が登録されている Performance Management システムに、新たに同じバージョンの PFM - Agent for HiRDB を追加した場合、PFM - Agent の登録は必要ありません。
- バージョンが異なる PFM - Agent for HiRDB を、異なるホストにインストールする場合、古いバージョン、新しいバージョンの順でセットアップしてください。
- PFM - Manager と同じホストに PFM - Agent をインストールした場合、`jpcconf agent setup` コマンドが自動的に実行されます。共通メッセージログに「KAVE05908-I エージェント追加セットアップは正常に終了しました」と出力されるので、結果を確認してください。コマンドが正しく実行されていない場合は、コマンドを実行し直してください。コマンドの実行方法については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」のコマンドの章を参照してください。
- PFM - Agent for HiRDB の情報を登録する作業では、PFM - Web Console の [レポート階層] タブの [System Reports] に「HiRDB」という名前のフォルダが作成されます。

(1) PFM - Agent for HiRDB のセットアップファイルをコピーする

PFM - Agent for HiRDB をインストールしたホストにあるセットアップファイルを PFM - Manager および PFM - Web Console をインストールしたホストにコピーします。手順を次に示します。

1. PFM - Web Console が起動されている場合は、停止する。

2. PFM - Agent のセットアップファイルをバイナリーモードでコピーする。

ファイルが格納されている場所およびファイルをコピーする場所を次の表に示します。

表 2-2 コピーするセットアップファイル

PFM - Agent の セットアップファイル	コピー先		
	PFM プログラム名	OS	コピー先フォルダ
インストール先フォルダ ¥setup¥jpcagtbw.EXE	PFM - Manager	Windows	インストール先フォルダ¥setup¥
インストール先フォルダ ¥setup¥jpcagtbu.Z		UNIX	/opt/jp1pc/setup/
インストール先フォルダ ¥setup¥jpcagtbw.EXE	PFM - Web Console	Windows	インストール先フォルダ¥setup¥
インストール先フォルダ ¥setup¥jpcagtbu.Z		UNIX	/opt/jp1pcwebcon/setup/

(2) PFM - Manager ホストでセットアップコマンドを実行する

PFM - Manager で PFM - Agent for HiRDB をセットアップするための次のコマンドを実行します。

```
jpcconf agent setup -key HiRDB
```

注意事項

コマンドを実行するローカルホストの Performance Management のプログラムおよびサービスが完全に停止していない状態で jpcconf agent setup コマンドを実行した場合、エラーが発生することがあります。その場合は、Performance Management のプログラムおよびサービスが完全に停止したことを確認したあと、再度 jpcconf agent setup コマンドを実行してください。

PFM - Manager ホストにある PFM - Agent のセットアップファイルは、この作業が終了したあと、削除してもかまいません。

(3) PFM - Web Console ホストでセットアップコマンドを実行する

PFM - Web Console で PFM - Agent for HiRDB をセットアップするための次のコマンドを実行します。

```
jpcwagtsetup
```

PFM - Web Console ホストにある PFM - Agent のセットアップファイルは、この作業が終了したあと削除してもかまいません。

2.4.3 インスタンス環境の設定

インスタンス環境の設定について説明します。

インスタンス環境の設定は、HiRDB のシステムマネージャが稼働するホストで実施してください。なお、HiRDB のシステムマネージャが稼働していないホストでは、インスタンス環境の設定は実施しないでください。HiRDB のシステムマネージャが稼働していないホストにインスタンス環境を設定した場合、不当に履歴情報が収集され、正しい情報が取得できません。

複数のインスタンス環境を設定する場合は、この手順を繰り返し実施して、すべて異なる名称で設定してください。PFM - Agent for HiRDB は、一時的に作成するフォルダの名称にインスタンス名を使用します。このため、同一名称のインスタンスが複数存在する場合、タイミングによって内部ファイルの競合が発生し、誤った情報の収集や異常終了の原因となります。

設定するインスタンス情報を次の表に示します。セットアップの操作を始める前に、これらの情報をあらかじめ確認してください。特に監視対象 HiRDB が識別子付きセットアップでセットアップされていて、同一ホスト上に標準セットアップされた HiRDB システムが存在する場合、次に示す HiRDB のクライアント環境定義の内容に注意してください。

PDDIR, PDCONFPATH, PDHOST, PDNAMEPORT, PDUSER, PDUXPLDIR

HiRDB のクライアント環境定義の詳細については、マニュアル「HiRDB UAP 開発ガイド」を参照してください。

表 2-3 PFM - Agent for HiRDB のインスタンス情報

項目	説明	設定できる値	デフォルト値
PDDIR	監視対象の HiRDB システムのシステムマネージャを含む HiRDB ユニットの HiRDB 運用ディレクトリのパス（環境変数 PDDIR の値）。	200 バイト以内のパス名	なし
PDCONFPATH	監視対象の HiRDB システムのシステムマネージャを含む HiRDB ユニットの環境変数 PDCONFPATH の値。 「PDDIR の値¥conf」が設定されます。	205 バイト以内のパス名	
HiRDB_user	DBA 権限を持つ HiRDB 認可識別子。大文字と小文字を区別する場合は全体を"（引用符）で囲んでください。囲まなければすべて大文字として扱われます。	10 バイト以内の文字列	

項目	説明	設定できる値	デフォルト値
HiRDB_password	HiRDB_user に対応するパスワード。大文字と小文字を区別する場合は全体を"（引用符）で囲んでください。囲まなければすべて大文字として扱われます。	32 バイト以内の文字列	なし
HiRDB_admin	HiRDB 管理者。大文字と小文字を区別する場合でも"（引用符）で囲まないでください。	128 バイト以内の文字列	
Store Version	Store バージョン。	{1.0 2.0}	2.0

インスタンス環境を構築するには、 `jpcconf inst setup` コマンドを使用します。インスタンス環境の構築手順を次に示します。

1. サービスキーおよびインスタンス名を指定して、 `jpcconf inst setup` コマンドを実行する。

例えば、 PFM - Agent for HiRDB のインスタンス名 HRD1 のインスタンス環境を構築する場合、 次のように指定してコマンドを実行します。

```
jpcconf inst setup -key HiRDB -inst HRD1
```

agtb : HiRDB エージェントを示します。

`jpcconf inst setup` コマンドの詳細については、 マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」を参照してください。

2. HiRDB のインスタンス情報を設定する。

表 2-3 に示した項目を、 コマンドの指示に従って入力してください。各項目とも省略できません。

すべての入力が終了すると、 インスタンス環境が構築されます。構築時に入力したインスタンス情報を変更したい場合は、 再度 `jpcconf inst setup` コマンドを実行し、 インスタンス環境を更新してください。インスタンス環境の更新については、「[2.7.3 インスタンス環境の更新](#)」を参照してください。

構築されるインスタンス環境を次に示します。

- インスタンス環境のフォルダ構成

次のフォルダ下にインスタンス環境が構築されます。

物理ホストの場合：インストール先フォルダ￥agtb

論理ホストの場合：環境フォルダ※￥agtb

注※

環境フォルダとは、 論理ホスト作成時に指定した共有ディスク上のフォルダです。

構築されるインスタンス環境のフォルダ構成を次に示します。

表 2-4 インスタンス環境のフォルダ構成

フォルダ名・ファイル名		説明
agent	インスタンス名	jpcagt.ini

2. インストールとセットアップ (Windows の場合)

フォルダ名・ファイル名		説明	
agent	インスタンス名	jpcagt.ini.model※	Agent Collector サービス起動情報ファイルのモデルファイル
		jpcagtbdef.ini	インスタンス設定ファイル
		jpcagtbdef.ini.model※	インスタンス設定ファイルのモデルファイル
		inssetup.bat	インスタンス設定用パッチファイル
		log	ログファイル格納フォルダ
store	インスタンス名	jpcsto.ini	Agent Store サービス起動情報ファイル
		jpcsto.ini.model※	Agent Store サービス起動情報ファイルの初期化用ファイル
		*.DAT	データモデル定義ファイル
		dump	エクスポート先フォルダ
		backup	バックアップ先フォルダ
		log	ログファイル格納フォルダ
		partial	標準のデータベース部分バックアップ先フォルダ (Store バージョン 2.0 の場合)
		import	標準のデータベースインポート先フォルダ (Store バージョン 2.0 の場合)
		STPD	PD レコードタイプのパフォーマンスデータ格納先フォルダ (Store バージョン 2.0 の場合)
		STPI	PI レコードタイプのパフォーマンスデータ格納先フォルダ (Store バージョン 2.0 の場合)
		STPL	PL レコードタイプのパフォーマンスデータ格納先フォルダ (Store バージョン 2.0 の場合)

注※

インスタンス環境を構築した時点の設定値に戻したいときに使用します。

- インスタンス環境のサービス ID

インスタンス環境のサービス ID は次のようにになります。

プロダクト ID 機能 ID インスタンス番号 インスタンス名 [ホスト名]

PFM - Agent for HiRDB の場合、インスタンス名には jpcconf inst setup コマンドで指定したインスタンス名が表示されます。

サービス ID については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、付録を参照してください。

- インスタンス環境の Windows のサービス名

インスタンス環境の Windows のサービス名は次のようにになります。

- Agent Collector サービス：PFM - Agent for HiRDB インスタンス名[論理ホスト名]

- Agent Store サービス：PFM - Agent Store for HiRDB インスタンス名[論理ホスト名]

Windows のサービス名については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、付録を参照してください。

(1) インスタンス設定ファイルを作成する

インスタンス設定ファイル（インストール先フォルダ¥agtb¥agent¥インスタンス名¥jpcagtbdef.ini）に次の構成および情報を設定します。

- HiRDB 運用ディレクトリに関する情報
- HiRDB/パラレルサーバの構成
- HiRDB のシステムマネージャが稼働しないホストに関する情報
- PD_ROT1, PD_ROT2 レコードの収集に関する情報
- PI_RDST, PI_RDDS レコード収集時の収集対象 RD エリアに関する情報
- PI_FSST レコード, PI_SSYS レコード, PI_RDFL レコードおよび PI_RDFS レコード収集時のリモート実行に関する情報
- PI_SSYS レコード, PI_RDFL レコードおよび PI_RDFS レコード収集時にに関する情報
- PFM-Agent for HiRDB がレコードを収集する上での共通機能オプション情報

なお、インスタンスを作成すると、jpcagtbdef.ini ファイルは初期化されます。

インスタンス設定ファイルのフォーマットを次の図に示します。

図 2-5 インスタンス設定ファイル jpcagtbdef.ini のフォーマット (Windows の場合)

```
[AGTBPATH]
リモートホスト名1=リモートホスト名1上のPFMのインストール先フォルダのパス名
リモートホスト名2=リモートホスト名2上のPFMのインストール先フォルダのパス名
リモートホスト名3=リモートホスト名3上のPFMのインストール先フォルダのパス名
:

[PDDIR]
ユニット識別子1=ユニット識別子1の環境変数PDDIRの値
ユニット識別子2=ユニット識別子2の環境変数PDDIRの値
ユニット識別子3=ユニット識別子3の環境変数PDDIRの値
:

[PDCONFPATH]
ユニット識別子1=ユニット識別子1の環境変数PDCONFPATHの値
ユニット識別子2=ユニット識別子2の環境変数PDCONFPATHの値
ユニット識別子3=ユニット識別子3の環境変数PDCONFPATHの値
:

[ROT1_Options]
Option_c=基準値定義ファイルの絶対パス (PD_ROT1用)
Option_R=監視期間 [, メンテナンス延長期間] (PD_ROT1用)

[ROT2_Options]
Option_c=基準値定義ファイルの絶対パス (PD_ROT2用)
Option_R=監視期間 [, メンテナンス延長期間] (PD_ROT2用)

[RDST_RDAREA]
RDAREA_NAME=収集対象RDエリア名1 [, 収集対象RDエリア名2] … (PI_RDST用)

[RDDS_RDAREA]
RDAREA_NAME=収集対象RDエリア名1 [, 収集対象RDエリア名2] … (PI_RDDS用)

[REMOTE_OPERATION_FOR_ACTIVITY]
SETTING=ON

[NOT_EXECUTE_PDSTJSYNC]
SETTING=ON

[COMMON_OPTION]
OPTIMIZE_LEVEL=1
```

注意

- 各情報は「ラベル=値」という形式で指定します。ラベルの前後、および値の前後には、余分な文字（空白文字、引用符など）を記述しないでください。
- 1カラム目が「;」（半角セミコロン）の行はコメント行です。
- AGTBPATH セクション
2ユニット以上の HiRDB/パラレルサーバを監視する場合に指定します。
ホスト名と PFM - Agent for HiRDB のインストール先フォルダのパス名を指定します。PI_FSST, PI_SSYS, PI_RDFL または PI_RDFS レコードを収集する場合に必要です。
記述がない場合は、該当するホストに存在するユニットの、サーバの作業表用 HiRDB ファイルシステム領域の情報や統計情報を収集しません。
AGTBPATH セクションに設定するラベルと値を次に示します。

表 2-5 AGTBPATH セクションに設定するラベルと値

ラベル	値
リモートホスト名※1※2	「リモートホスト名」で示されたホスト上の PFM のインストール先フォルダのパス。絶対パスで指定すること。

注※1

リモートホスト名には、次に示す表のホスト名を指定してください。ただし、監視対象の HiRDB システムのシステムマネージャが稼働するホストは指定しないでください。

注※2

同一ホスト上に複数の監視対象 HiRDB ユニットがある場合、そのホスト名は 1 回だけ設定してください。

表 2-6 HiRDB ユニットの系切り替え構成とリモートホスト名の指定方法

HiRDB ユニットの系切り替え構成	リモートホスト名の指定方法
系切り替えなし	該当するユニット識別子の-u に指定されている、pdsys の pdunit オペランド-x に指定したホスト名を指定する。
IP アドレス引き継ぎありスタンバイ型系切り替え	
1:1 スタンバイレス型系切り替え	
影響分散スタンバイレス型系切り替え	
IP アドレス引き継ぎなしスタンバイ型系切り替え	該当するユニット識別子の-u に指定されている、pdsys の pdunit オペランド -x に指定したホスト名および-c に指定したホスト名を指定する。

- PDDIR セクション

2 ユニット以上の HiRDB/パラレルサーバを監視する場合に指定します。

ユニット名と PDDIR を指定します。次の条件をすべて満たす場合は、該当するユニットに PDDIR を設定してください。

- PI_FSST, PI_SSYS, PI_RDFL, または PI_RDFS レコードを収集する場合
- HiRDB システム共通定義ファイル (pdsys ファイル) の pdunit オペランド-d オプションの指定がない場合

この指定がない場合、HiRDB のシステムマネージャが稼働しないホストに存在するユニットの作業表用 HiRDB ファイルシステム領域の情報や統計情報を収集しません。

PDDIR セクションに設定するラベルと値を次に示します。

表 2-7 PDDIR セクションに設定するラベルと値

ラベル	値
ユニット識別子	「ユニット識別子」で示される HiRDB ユニットの環境変数 PDDIR の値を指定する。

- PDCONFPATH セクション

2 ユニット以上の HiRDB/パラレルサーバを監視する場合に指定します。

ユニット名と PDCONFPATH を指定します。PI_FSST, PI_SSYS, PI_RDFL, または PI_RDFS レコードを収集する場合に必要です。

この指定がない場合、HiRDB のシステムマネージャが稼働しないホストに存在するユニットの作業表用 HiRDB ファイルシステム領域の情報や統計情報を収集しません。

PDCONFPATH セクションに設定するラベルと値を次に示します。

表 2-8 PDCONFPATH セクションに設定するラベルと値

ラベル	値
ユニット識別子	「ユニット識別子」で示される HiRDB ユニットの環境変数 PDCONFPATH の値を指定する。

- ROT1_Options セクション

PD_ROT1_Options セクションには、PD_ROT1 収集時に実行する、pddbse -k pred コマンドのコマンドオプションを指定します。省略すると、監視期間または基準定義ファイルが指定されていない状態の情報が収集されます。

表 2-9 PD_ROT1 セクションに設定するラベルと値

ラベル	値
Option_c	pddbse -k pred コマンドの-c オプションに使用する「基準定義ファイル」の絶対パス (590 バイト以内) を指定する。
Option_R	pddbse -k pred コマンドの-R オプションに使用する「監視期間」および「メンテナス延長期間」を指定する。

- ROT2_Options セクション

PD_ROT2_Options セクションには、PD_ROT2 収集時に実行する、pddbse -k pred コマンドのコマンドオプションを指定します。省略すると、監視期間または基準定義ファイルが指定されていない状態の情報が収集されます。

表 2-10 PD_ROT2 セクションに設定するラベルと値

ラベル	値
Option_c	pddbse -k pred コマンドの-c オプションに使用する「基準定義ファイル」の絶対パス (590 バイト以内) を指定する。
Option_R	pddbse -k pred コマンドの-R オプションに使用する「監視期間」および「メンテナス延長期間」を指定する。

- RDST_RDAREA セクション

RDST_RDAREA セクションには、PI_RDST レコード収集時にデータ収集したい RD エリア名を、コンマ区切りで指定します。指定した RD エリアに関するパフォーマンスデータが収集されます。

HiRDB の pddbls コマンドと同様に、RD エリア名は RD エリア名一括指定ができます。

RD エリア名一括指定については、マニュアル「HiRDB コマンドリファレンス」を参照してください。

RD エリア名は重複して指定できません。RD エリア名を重複指定した場合、重複排除をした RD エリアに関するパフォーマンスデータが収集されます。

例えば、RDST_RDAREA セクションに RD エリア名を指定する場合は次のようになります。

- HiRDB 環境の RD エリアの構成：

RDMAST, RDDIRT, RDDICT, RDDATA10, RDDATA20, RDDATA30, RDINDX10, RDINDX20, RDINDX30

- RDST_RDAREA セクションの指定：

[RDST_RDAREA]

RDAREA_NAME=RDMAST,RDDATA10,RDDATA*,*RDDATA*

- PI_RDST レコードで収集対象となる RD エリア：

RDMAST, RDDATA10, RDDATA20, RDDATA30

■ 注意事項

- RD エリア名はアポストロフィ('), 引用符("), エスケープ文字+引用符(\\$")などの区切り文字を指定しないでください。
- RD エリア名の前方および後方に空白文字を含む RD エリアについては、動作が保証されません。
- RDAREA_NAME ラベルに値を指定していない場合は、すべての RD エリアに関するパフォーマンスデータが収集されます。
- RDAREA_NAME ラベルの一部の指定に誤りがある場合は、正しく設定された RD エリアに関するパフォーマンスデータだけが収集されます。

表 2-11 RDST_RDAREA セクションに設定するラベルと値

ラベル	値
RDAREA_NAME	PI_RDST レコード収集時にデータを収集したい RD エリア名をコンマ区切りで指定する。設定できるサイズはラベル名 (RDAREA_NAME) を含む 8,192 バイト以内。

- RDDS_RDAREA セクション

RDDS_RDAREA セクションには、PI_RDDDS レコード収集時にデータ収集したい RD エリア名を、コンマ区切りで指定します。指定した RD エリアに関するパフォーマンスデータが収集されます。

HiRDB の pddbls コマンドと同様に、RD エリア名は RD エリア名一括指定ができます。

RD エリア名一括指定については、マニュアル「HiRDB コマンドリファレンス」を参照してください。

RD エリア名は重複して指定できません。RD エリア名を重複指定した場合、重複排除をした RD エリアに関するパフォーマンスデータが収集されます。

例えば、RDDS_RDAREA セクションに RD エリア名を指定する場合は次のようになります。

- HiRDB 環境の RD エリアの構成：

RDMAST, RDDIRT, RDDICT, RDDATA10, RDDATA20, RDDATA30, RDINDX10, RDINDX20, RDINDX30

- RDDS_RDAREA セクションの指定：

[RDDS_RDAREA]

RDAREA_NAME=RDMAST,RDDATA10,RDDATA*,*RDDATA*

- PI_RDDS レコードで収集対象となる RD エリア：

RDMAST, RDDATA10, RDDATA20, RDDATA30

注意事項

- RD エリア名はアポストロフィ('), 引用符("), エスケープ文字+引用符(¥")などの区切り文字を指定しないでください。
- RD エリア名の前方および後方に空白文字を含む RD エリアについては、動作が保証されません。
- RDAREA_NAME ラベルに値を指定していない場合は、すべての RD エリアに関するパフォーマンスデータが収集されます。
- RDAREA_NAME ラベルの一部の指定に誤りがある場合は、正しく設定された RD エリアに関するパフォーマンスデータだけが収集されます。

表 2-12 RDDS_RDAREA セクションに設定するラベルと値

ラベル	値
RDAREA_NAME	PI_RDDS レコード収集時にデータを収集したい RD エリア名をコンマ区切りで指定する。設定できるサイズはラベル名 (RDAREA_NAME) を含む 8,192 バイト以内。

- REMOTE_OPERATION_FOR_ACTIVITY セクション

HiRDB/パラレルサーバで、稼働している HiRDB ユニットのパフォーマンスデータだけを取得するときに、「SETTING=ON」を指定します。デフォルトは指定なしです。

「SETTING=ON」を指定すると、HiRDB のシステムマネージャが存在するホストからほかのホストに対して、パフォーマンスデータを取得するコマンドがリモート実行されます。パフォーマンスデータの取得がシステムマネージャの稼働が前提となるため、ネットワークとログの容量の負荷を軽減できます。指定を省略すると、システムマネージャが停止している場合でも、HiRDB/パラレルサーバを構成する各サーバのパフォーマンスデータが取得されます。システムマネージャが停止していても、ほかの HiRDB サーバのパフォーマンスデータを継続して取得できますが、ネットワークとログの容量の負荷が高くなることがあります。

このセクションは、インスタンス単位に設定できますが、レコード単位には設定できません。

レコードの種類によってリモート実行する判断方法が異なります。

REMOTE_OPERATION_FOR_ACTIVITY セクションに設定するラベルと値を次の表に示します。

表 2-13 REMOTE_OPERATION_FOR_ACTIVITY セクションに設定するラベルと値

ラベル	値
SETTING	PI_FSST レコード収集時に、ユニットのステータスが ACTIVE であるホストに対してだけリモート実行する場合に「ON」と指定する。

ラベル	値
SETTING	コマンドを実行できない状態 (pdls -d svr コマンドの実行結果が KFPS01853-W) のホストには、リモート実行されません。
	PI_SSYS, PI_RDFL および PI_RDFS レコード収集時に、pdls -d stj コマンドの実行結果から、統計情報の取得状況が判明しているユニットが存在するホストに対してだけリモート実行する場合に、「ON」と指定する。

HiRDB の状態 (pdls -d svr コマンドの実行結果) および REMOTE_OPERATION_FOR_ACTIVITY セクションの設定と、リモート実行されるかどうかの関係を次の表に示します。

表 2-14 HiRDB の状態および REMOTE_OPERATION_FOR_ACTIVITY セクションの設定とリモート実行有無の関係

システムマネージャのホスト	システムマネージャ以外のホスト	REMOTE_OPERATION_FOR_ACTIVITY	リモート実行有無
コマンド実行可 (KFPS01853-W が出力されない)	ACTIVE	SETTING=ON	○
		上記以外 (指定なしも含む)	○
	上記以外	SETTING=ON	×
		上記以外 (指定なしも含む)	○
コマンド実行不可 (KFPS01853-W が出力される)	ACTIVE	SETTING=ON	×
		上記以外 (指定なしも含む)	○
	上記以外	SETTING=ON	×
		上記以外 (指定なしも含む)	○

(凡例)

○：リモート実行します

×：リモート実行しません

REMOTE_OPERATION_FOR_ACTIVITY セクションの設定内容のメリットおよびデメリットを次の表に示します。

表 2-15 REMOTE_OPERATION_FOR_ACTIVITY セクションの設定内容のメリットおよびデメリット

REMOTE_OPERATION_FOR_ACTIVITY	メリット	デメリット
SETTING=ON	PFM - Agent for HiRDB が実行するリモート実行で、ネットワーク障害などによって不要な負荷が掛からない (ただし、HiRDB サーバのユニット間通信の監視で起こるタイムラグによるステータス誤認識を除く)。	システムマネージャが停止していると、ユニット全体のパフォーマンスデータが収集されない。 また、システムマネージャが稼働していて、システムマネージャ以外のユニットが停止している場合、そのシステムマネージャ以

REMOTE_OPERATION_FOR_ACTIVITY	メリット	デメリット
SETTING=ON	PFM - Agent for HiRDB が実行するリモート実行で、ネットワーク障害などによって不要な負荷が掛からない（ただし、HiRDB サーバのユニット間通信の監視で起こるタイムラグによるステータス誤認識を除く）。	外のユニットに対するパフォーマンスデータは収集されない。
上記以外（指定なしも含む）	HiRDB/パラレルサーバ内のシステムマネージャが停止していても、ユニット全体のパフォーマンスデータが収集される。	PFM - Agent for HiRDB が実行するリモート実行で、ネットワーク障害などによって不要な負荷が掛かることがある。

- NOT_EXECUTE_PDSTJSYNC セクション

PFM-Agent for HiRDB は、システムの稼働に関する統計情報（sys 統計情報）やデータベース操作に関する HiRDB ファイルの統計情報（fil 統計情報）を取得するため、`pdstjsync` コマンドを実行します。`pdstjsync` コマンドには、コマンド実行時点での sys 統計情報の取得を抑止し、指定した時間間隔でだけ sys 統計情報を取得するオプション（-m オプション）があります。-m オプションを省略すると、指定した時間間隔とは別に、コマンド実行時点の sys 統計情報が取得され、異なる時間間隔の sys 統計情報が混在することがあります。そのため、PFM-Agent for HiRDB は-m オプション付きの動作で統計情報を取得しています。

ただし、`pdstjsync` コマンドの-m オプションをサポートしていない HiRDB を使用する場合は、上記の統計情報の混在が起こります。この混在を防止するため、`pdstjsync` コマンドの実行を抑止する場合に、NOT_EXECUTE_PDSTJSYNC セクションに「SETTING=ON」と指定します。指定すると、PI_SSYS レコード、PI_RDFL レコードおよび PI_RDFS レコード収集時に、`pdstjsync` コマンドの実行による異なる時間間隔の sys 統計情報の混在を防止できます。

NOT_EXECUTE_PDSTJSYNC セクションは、-m オプションをサポートしていない HiRDB 用の指定であるため、`pdstjsync` コマンドの-m オプションをサポートしている HiRDB の場合、NOT_EXECUTE_PDSTJSYNC セクションの指定値は無視されます。

`pdstjsync` コマンドの-m オプションをサポートしていない HiRDB の場合、「SETTING=ON」以外の値を指定すると、エラーメッセージが出力されますが、指定は無視され処理は続行されます。

このセクションは、インスタンス単位に設定できますが、レコード単位には設定できません。

NOT_EXECUTE_PDSTJSYNC セクションに設定するラベルと値を次の表に示します。

表 2-16 NOT_EXECUTE_PDSTJSYNC セクションに設定するラベルと値

ラベル	値
SETTING	PI_SSYS レコード、PI_RDFL レコードおよび PI_RDFS レコード収集時に、 <code>pdstjsync</code> コマンドの-m オプションをサポートしていない HiRDB を使用してい、 <code>pdstjsync</code> コマンドを実行したくない場合に、「ON」と指定する。

NOT_EXECUTE_PDSTJSYNC セクションには、SETTING=ON の指定を推奨します。なお、使用する HiRDB のバージョンと NOT_EXECUTE_PDSTJSYNC セクションの設定によって、`pdstjsync` コマンドの実行有無が変わります。その内容を次の表に示します。

表 2-17 HiRDB のバージョンでの pdstjsync コマンド実行有無

推奨順	HiRDB のバージョン	NOT_EXECUTE_PDSTJSYNC	pdstjsync コマンド実行有無
1	pdstjsync コマンドの-m オプションをサポートしているバージョンの HiRDB	SETTING=ON	◎
		上記以外 (指定なしも含む)	◎
2	pdstjsync コマンドの-m オプションをサポートしていないバージョンの HiRDB	SETTING=ON	×
		上記以外 (指定なしも含む)	○※

(凡例)

◎ : pdstjsync コマンドの-m オプションを実行します

○ : pdstjsync コマンドを実行します

× : pdstjsync コマンドを実行しません

注※

指定に誤りがある場合だけ、エラーメッセージが出力されます。

pdstjsync コマンドの-m オプションをサポートしていない HiRDB の場合の、 NOT_EXECUTE_PDSTJSYNC セクションの指定内容のメリットおよびデメリットを次の表に示します。

表 2-18 NOT_EXECUTE_PDSTJSYNC セクションの指定内容のメリットおよびデメリット
(pdstjsync コマンド -m オプション未サポートの HiRDB の場合)

NOT_EXECUTE_PDSTJSYNC	メリット	デメリット
SETTING=ON	HiRDB の sys 統計情報を出力する時間間隔以外に sys 統計情報が出力されない。	収集契機が直近の、 HiRDB の sys 統計情報および fil 統計情報を収集できない。
上記以外 (指定なしも含む)	収集契機が直近の、 HiRDB の sys 統計情報および fil 統計情報を収集できる。	HiRDB の sys 統計情報を出力する時間間隔以外にも sys 統計情報が出力される。

- COMMON_OPTION セクション

COMMON_OPTION セクションには、 PFM-Agent for HiRDB がレコードを収集するまでの共通機能オプションを指定します。

表 2-19 COMMON_OPTION セクションに設定するラベルと値

ラベル	値	機能
OPTIMIZE_LEVEL※	0	共通機能オプションが無効になる (デフォルト (指定なしも含む))。
	1	RD エリア数が 1,000 個以上の HiRDB 環境で、 PI_RDST, PI_RDDS レコードの収集時間の短縮を見込むことができるグローバルバッファ名取得処理高速化オプションが有効になる。この機能は RD エリア数にだけ依存し、グローバルバッファ数には依存しない。なお、インスタンス単位の設定となり、レコード単位の設定はできない。
	上記以外	KAVF15068-W メッセージを出力し、0 を指定した場合と同じになる。

注※

OPTIMIZE_LEVEL の値には半角数字を指定してください。

(2) 2 ユニット以上の HiRDB/パラレルサーバを監視する場合の設定

PFM - Agent for HiRDB のインスタンスで 2 ユニット以上の HiRDB/パラレルサーバを監視する場合、インスタンスをセットアップしたあとに、次に示す手順でサービスのアカウントを HiRDB と同じアカウントに変更してください。アカウントを変更しなかった場合には、PFM - Agent for HiRDB が HiRDB のシステムマネージャ以外のユニットの情報を収集できないことがあります。

1. [コントロールパネル] の [サービス] をダブルクリックする。
2. [サービス] に表示されているリストボックスから [PFM - Agent for HiRDB<インスタンス名>] を選択し、「停止」をクリックする。
PFM - Agent for HiRDB <インスタンス名>のサービスが開始状態でないことを確認します。
3. [サービス] に表示されているリストボックスから [PFM - Agent for HiRDB<インスタンス名>] を選択し、サービスのプロパティを開く。
4. 「ログオン」が「ローカルシステムアカウント」に設定されているので、「アカウント」を選択する。
5. 「アカウント」の右にあるボタンをクリックし、[ユーザの選択] を開く。
6. 名前の一覧から、HiRDB と同じユーザーを選択し、「OK」をクリックする。
7. [パスワード] ボックスに該当ユーザーのパスワードを入力する。同じパスワードを [パスワードの確認入力] ボックスにも入力する。
8. 「OK」をクリックする。
9. [サービス] に表示されているリストボックスから [PFM - Agent for HiRDB<インスタンス名>] を選択し、「開始」をクリックする。

次に示す HiRDB のクライアント環境定義は、このアカウントのユーザー環境変数に定義してください。

PDDIR, PDCONFPATH, PDHOST, PDNAMEPORT, PDUSER, PDUXPLDIR

2.4.4 ネットワークの設定 ◇オプション

Performance Management を使用するネットワーク構成に応じて、変更する場合にだけ必要な設定です。

ネットワークの設定では次の 3 つの項目を設定できます。

- IP アドレスを設定する

Performance Management を複数の LAN に接続されたネットワークで使用するときに設定します。複数の IP アドレスを設定するには、jpchosts ファイルにホスト名と IP アドレスを定義します。設定した jpchosts ファイルは Performance Management システム全体で統一させてください。

詳細についてはマニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

- **ポート番号を設定する**

Performance Management が使用するポート番号を設定できます。運用での混乱を避けるため、ポート番号とサービス名は、Performance Management システム全体で統一させてください。

ポート番号の設定の詳細についてはマニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

- **ファイアウォールを設定する**

ファイアウォールを有効にした環境で運用する場合、インストールしたあとで、実行に必要なポート番号をファイアウォールの規則に登録して、ファイアウォールを透過できるように設定してください。

ファイアウォール環境でのポート番号の設定方法は、「[付録 E.3 Windows ファイアウォール環境での設定方法](#)」を参照してください。

2.4.5 ログのファイルサイズ変更 ◀オプション▶

Performance Management の稼働状況を、Performance Management 独自のログファイルに出力します。このログファイルを「共通メッセージログ」と呼びます。このファイルサイズを変更したい場合にだけ、必要な設定です。

詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

2.4.6 パフォーマンスデータの格納先の変更 ◀オプション▶

PFM - Agent for HiRDB で管理されるパフォーマンスデータを格納するデータベースの保存先、バックアップ先またはエクスポート先のフォルダを変更したい場合にだけ、必要な設定です。

パフォーマンスデータは、デフォルトで、次の場所に保存されます。

- 保存先：インストール先フォルダ¥agtb¥store¥インスタンス名¥
- バックアップ先：インストール先フォルダ¥agtb¥store¥インスタンス名¥backup¥
- 部分バックアップ先※：インストール先フォルダ¥agtb¥store¥インスタンス名¥partial¥
- エクスポート先：インストール先フォルダ¥agtb¥store¥インスタンス名¥dump¥
- インポート先※：インストール先フォルダ¥agtb¥store¥インスタンス名¥import¥

注※

Store バージョン 2.0 を使用時だけ設定できます。

注意事項

論理ホストで運用する場合のデフォルトの保存先については、「インストール先フォルダ」を「環境フォルダ¥jp1pc」に読み替えてください。

詳細については、「[2.7.1 パフォーマンスデータの格納先の変更](#)」を参照してください。

2.4.7 PFM - Agent for HiRDB の接続先 PFM - Manager の設定

PFM - Agent がインストールされているホストで、その PFM - Agent を管理する PFM - Manager を設定します。接続先の PFM - Manager を設定するには、`jpcconf mgrhost define` コマンドを使用します。

注意事項

- 同一ホスト上に、複数の PFM - Agent がインストールされている場合でも、接続先に指定できる PFM - Manager は、1つだけです。PFM - Agent ごとに異なる PFM - Manager を接続先に設定することはできません。
- PFM - Agent と PFM - Manager が同じホストにインストールされている場合、接続先 PFM - Manager はローカルホストの PFM - Manager となります。この場合、接続先の PFM - Manager をほかの PFM - Manager に変更できません。

手順を次に示します。

1. Performance Management のプログラムおよびサービスを停止する

セットアップを実施する前に、ローカルホストで Performance Management のプログラムおよびサービスが起動されている場合は、すべて停止してください。サービスの停止方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、サービスの起動と停止について説明している章を参照してください。

`jpcconf mgrhost define` コマンド実行時に、Performance Management のプログラムおよびサービスが起動されている場合は、停止を問い合わせるメッセージが表示されます。

2. 接続先の PFM - Manager ホストのホスト名を指定して、`jpcconf mgrhost define` コマンドを実行する

例えば、接続先の PFM - Manager がホスト host01 上にある場合、次のように指定します。

```
jpcconf mgrhost define -host host01
```

2.4.8 動作ログ出力の設定 ◀オプション

PFM サービスの起動・停止時や、PFM - Managerとの接続状態の変更時に動作ログを出力したい場合に必要な設定です。動作ログとは、システム負荷などのしきい値オーバーに関するアラーム機能と連動して出力される履歴情報です。

設定方法については、「[付録 J 動作ログの出力](#)」を参照してください。

2.5 アンインストール

ここでは、PFM - Agent for HiRDB をアンインストールおよびアンセットアップする手順を示します。

2.5.1 アンインストール前の注意事項

ここでは、PFM - Agent for HiRDB をアンインストールおよびアンセットアップするときの注意事項を次に示します。

(1) アンインストールに必要な OS ユーザー権限に関する注意事項

PFM - Agent をアンインストールするときは、必ず、Administrators 権限を持つアカウントで実行してください。

(2) ネットワークに関する注意事項

Performance Management プログラムをアンインストールしても、`services` ファイルに定義されたポート番号は削除されません。

また、ファイアウォールの規則に登録したポート番号を削除する必要があります。削除方法は、「[付録 E.6 Windows ファイアウォール環境での設定削除方法](#)」を参照してください。

(3) プログラムに関する注意事項

- Performance Management のプログラムおよびサービスや、Performance Management のファイルを参照するような他プログラム（例えば Windows のイベントビューアなど）を起動したままアンインストールした場合、ファイルやフォルダが残ることがあります。この場合は、手動でインストール先フォルダ以下をすべて削除してください。
- Performance Management のプログラムおよびサービスや、Performance Management のファイルを参照するような他プログラム（例えば Windows のイベントビューアなど）を起動したままアンインストールした場合、システムの再起動を促すメッセージが出力されることがあります。この場合、システムを再起動して、アンインストールを完了させてください。
- PFM - Base と PFM - Agent がインストールされているホストの場合、PFM - Base のアンインストールは PFM - Agent をアンインストールしないと実行できません。この場合、PFM - Agent → PFM - Base の順にアンインストールしてください。また、PFM - Manager と PFM - Agent がインストールされているホストの場合も同様に、PFM - Manager のアンインストールは PFM - Agent をアンインストールしないと実行できません。この場合、PFM - Agent → PFM - Manager の順にアンインストールしてください。

(4) サービスに関する注意事項

PFM - Agent をアンインストールしただけでは、`jpcctl service list` コマンドで表示できるサービスの情報は削除されません。サービス情報の削除方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップの章にあるサービスの削除の説明を参照してください。

(5) その他の注意事項

- PFM - Web Console がインストールされているホストから、Performance Management プログラムをアンインストールする場合は、Web ブラウザの画面をすべて閉じてからアンインストールを実施してください。
- アンインストールを実行する前に `jpcconf inst setup` コマンドまたは PFM - Web Console で、エージェントログの出力先フォルダを確認してください。エージェントログの出力先をデフォルト値（インストール先フォルダ￥agtb￥store￥インスタンス名￥log￥）以外に設定している場合、アンインストールしてもエージェントログファイルは削除されません。この場合、アンインストール実行後にエージェントログファイルを手動で削除してください。

2.5.2 インスタンス環境のアンセットアップ

インスタンス環境をアンセットアップするには、まず、インスタンス名を確認し、インスタンス環境を削除します。インスタンス環境の削除は、PFM - Agent ホストで実施します。

インスタンス名を確認するには、`jpcconf inst list` コマンドを使用します。また、構築したインスタンス環境を削除するには、`jpcconf inst unsetup` コマンドを使用します。

インスタンス環境をアンセットアップする手順を次に示します。

1. インスタンス名を確認する。

PFM - Agent for HiRDB を示すサービスキーを指定して、`jpcconf inst list` コマンドを実行します。

```
jpcconf inst list -key HiRDB
```

設定されているインスタンス名が HRD1 の場合、HRD1 と表示されます。

2. インスタンス環境の PFM - Agent のサービスが起動されている場合は、停止する。

サービスの停止方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、サービスの起動と停止について説明している章を参照してください。

3. インスタンス環境を削除する。

PFM - Agent for HiRDB を示すサービスキーおよびインスタンス名を指定して、`jpcconf inst unsetup` コマンドを実行します。

設定されているインスタンス名が HRD1 の場合、次のように指定します。

```
jpcconf inst unsetup -key HiRDB -inst HRD1
```

jpcconf inst unsetup コマンドが正常終了すると、インスタンス環境として構築されたフォルダ、サービス ID および Windows のサービスが削除されます。

注意

インスタンス環境をアンセットアップしても、jpctool service list コマンドで表示できるサービスの情報は削除されません。この場合、jpctool service delete コマンドを使用してサービスの情報を削除してください。次に指定例を示します。

- インスタンス名 : HRD1
- ホスト名 : host01
- Agent Collector サービスのサービス ID : BA1HRD1[host01]
- Agent Store サービスのサービス ID : BS1HRD1[host01]

```
jpctool service delete -id サービスID -host host01
```

コマンドについては、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、コマンドについて説明している章を参照してください。

また、インスタンス環境をアンセットアップしても、フォルダおよびファイルが残ることがあります。その場合、必要に応じて削除してください。

アンセットアップ後に削除した方がよいフォルダを次の表に示します。

表 2-20 アンセットアップ後に削除した方がよいフォルダ（Windows の場合）

フォルダ名	対象ホスト	フォルダが生成される場面
インストール先フォルダ¥agtb¥agtbttmp¥インスタンス名¥	HiRDB システムマネジャホスト	次のレコードの収集時 <ul style="list-style-type: none">• PD_ROT1 レコード• PD_ROT2 レコード
インストール先フォルダ¥agtb¥sttmp¥HiRDBシステムマネジャホスト名¥インスタンス名¥	すべての HiRDB ホスト	次のレコードの収集時 <ul style="list-style-type: none">• PI_SSYS レコード• PI_RDFL レコード• PI_RDFS レコード
インストール先フォルダ¥agtb¥svrttmp¥インスタンス名¥	HiRDB システムマネジャホスト	PI_FSST レコードの収集時

2.5.3 接続先 PFM - Manager の解除

接続先 PFM - Manager を解除する場合は、対象の PFM - Manager に接続している PFM - Agent for HiRDB のサービス情報を削除する必要があります。

サービス情報の削除方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップ（Windows の場合）の章にある、サービス情報の削除手順について説明している個所を参照してください。

なお、接続先を別の PFM - Manager に変更する場合は、「[2.4.7 PFM - Agent for HiRDB の接続先 PFM - Manager の設定](#)」を参照してください。

2.5.4 アンインストール手順

PFM - Agent for HiRDB をアンインストールする手順を説明します。

1. PFM - Agent for HiRDB をアンインストールするホストに、Administrators 権限でログオンする。

2. ローカルホストで Performance Management のプログラムおよびサービスを停止する。

サービス情報を表示して、サービスが起動されていないか確認してください。ローカルホストで Performance Management のプログラムおよびサービスが起動されている場合は、すべて停止してください。なお、停止するサービスは物理ホスト上および論理ホスト上のすべてのサービスです。

サービスの表示方法およびサービス情報の停止方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の起動と停止について説明している章を参照してください。

3. アンインストールする Performance Management プログラムを選択する。

Windows の [コントロールパネル] で [プログラムと機能] * を選択して、アンインストールする Performance Management プログラムを選択します。

注※ Windows のバージョンによって名称が異なる場合があります。

4. [削除] を選択し、[OK] ボタンをクリックする。

選択したプログラムがアンインストールされます。

注意事項

OS のユーザーアカウント制御機能 (UAC) を有効にしている場合は、アンインストール中にユーザーアカウント制御のダイアログが表示されることがあります。ダイアログが表示された場合は、[続行] ボタンをクリックしてアンインストールを続行してください。[キャンセル] ボタンをクリックした場合は、アンインストールが中止されます。

2.6 PFM - Agent for HiRDB のシステム構成の変更

監視対象システムのネットワーク構成の変更や、ホスト名の変更などに応じて、PFM - Agent for HiRDB のシステム構成を変更する場合があります。ここでは、Agent for HiRDB のシステム構成を変更する手順を説明します。

PFM - Agent for HiRDB のシステム構成を変更する場合、PFM - Manager や PFM - Web Console の設定変更もあわせて変更する必要があります。Performance Management のシステム構成を変更する手順の詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

物理ホスト名またはエイリアス名を変更するときに、固有の追加作業が必要な PFM - Agent もあります
が、PFM - Agent for HiRDB の場合、固有の追加作業は必要ありません。

なお、インスタンスをアンセットアップしないでホスト名を変更すると、不要なフォルダおよびファイル
が残ることがあります。その場合、必要に応じて削除してください。

ホスト名の変更後に削除した方がよいフォルダを次の表に示します。

表 2-21 ホスト名の変更後に削除した方がよいフォルダ（Windows の場合）

フォルダ名	対象ホスト	フォルダが生成される場面
インストール先フォルダ¥agtb¥sttmp¥HiRDB システムマネジャホスト名¥	すべての HiRDB ホスト	次のレコードの収集時 <ul style="list-style-type: none">• PI_SSYS レコード• PI_RDFL レコード• PI_RDFS レコード

2.7 PFM - Agent for HiRDB の運用方式の変更

収集した稼働監視データの運用手順の変更などで、 PFM - Agent for HiRDB の運用方式を変更する場合があります。ここでは、 PFM - Agent for HiRDB の運用方式を変更する手順を説明します。Performance Management 全体の運用方式を変更する手順の詳細についてはマニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、 インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

2.7.1 パフォーマンスデータの格納先の変更

PFM - Agent for HiRDB で収集したパフォーマンスデータは、 PFM - Agent for HiRDB の Agent Store サービスの Store データベースで管理しています。ここではパフォーマンスデータの格納先の変更方法について説明します。

(1) `jpcconf db define` コマンドを使用して設定を変更する

Store データベースで管理されるパフォーマンスデータの、 次のデータ格納先フォルダを変更したい場合は、 `jpcconf db define` コマンドで設定します。Store データベースの格納先フォルダを変更する前に収集したパフォーマンスデータが必要な場合は、 `jpcconf db define` コマンドの`-move` オプションを使用してください。`jpcconf db define` コマンドの詳細については、 マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」を参照してください。

- 保存先フォルダ
- バックアップ先フォルダ
- エクスポート先フォルダ
- 部分バックアップ先フォルダ※
- インポート先フォルダ※

注※ Store バージョン 2.0 使用時だけ設定できます。

`jpcconf db define` コマンドで設定するオプション名、 設定できる値の範囲などを次の表に示します。

表 2-22 パフォーマンスデータの格納先を変更するコマンドの設定項目

説明	オプション名	設定できる値 (Store バージョン 1.0)	設定できる値 (Store バージョン 2.0)	デフォルト値
パフォーマンスデータの作成先フォルダ	sd	1~127 バイトの絶対パス名または相対パス名	1~214 バイトの絶対パス名または相対パス名	インストール先フォルダ ¥agtb¥store¥インスタンス名
パフォーマンスデータの退避先	bd	1~127 バイトの絶対パス名または相対パス名	1~211 バイトの絶対パス名または相対パス名	インストール先フォルダ ¥agtb¥store¥インスタンス名 ¥backup

説明	オプション名	設定できる値 (Store バージョン 1.0)	設定できる値 (Store バージョン 2.0)	デフォルト値
フォルダ (フルバックアップ)	bd	1~127 バイトの絶対パス名または相対パス名	1~211 バイトの絶対パス名または相対パス名	インストール先フォルダ¥agtb¥store¥インスタンス名¥backup
パフォーマンスデータの退避先フォルダ (部分バックアップ)	pbd	—	1~214 バイトの絶対パス名または相対パス名	インストール先フォルダ¥agtb¥store¥インスタンス名¥partial
パフォーマンスデータを退避する場合の最大世代番号	bs	1~9	1~9	5
パフォーマンスデータのエクスポート先フォルダ	dd	1~127 バイトの絶対パス名または相対パス名	1~127 バイトの絶対パス名または相対パス名	インストール先フォルダ¥agtb¥store¥インスタンス名¥dump
パフォーマンスデータのインポート先フォルダ	id	—	1~222 バイトの絶対パス名または相対パス名	インストール先フォルダ¥agtb¥store¥インスタンス名¥import

(凡例)

— : 設定できません

(2) jpcsto.ini ファイルを編集して設定を変更する (Store バージョン 1.0 の場合だけ)

Store バージョン 1.0 使用時は、jpcsto.ini を直接編集して変更できます。

(a) jpcsto.ini ファイルの設定項目

jpcsto.ini ファイルは、インストール先フォルダ¥agtb¥store¥インスタンス名に格納されています。

jpcsto.ini ファイルで編集するラベル名、設定できる値の範囲などを次の表に示します。

表 2-23 パフォーマンスデータの格納先の設定項目 (jpcsto.ini の[Data Section]セクション)

説明	ラベル名	設定できる値 (Store バージョン 1.0) ^{*1}	デフォルト値
パフォーマンスデータの作成先フォルダ	Store Dir ^{*2}	1~127 バイトの絶対パス名または相対パス名	インストール先フォルダ¥agtb¥store¥インスタンス名

説明	ラベル名	設定できる値 (Store バージョン 1.0) ^{※1}	デフォルト値
パフォーマンスデータの退避先フォルダ (フルバックアップ)	Backup Dir ^{※2}	1~127 バイトの絶対パス名または相対パス名	インストール先フォルダ¥agtbsstore¥インスタンス名¥backup
パフォーマンスデータを退避する場合の最大世代番号	Backup Save	1~9	5
パフォーマンスデータのエクスポート先フォルダ	Dump Dir ^{※2}	1~127 バイトの絶対パス名または相対パス名	インストール先フォルダ¥agtbsstore¥インスタンス名¥dump

注※1

- 指定できる文字は、次の文字を除く、半角英数字、半角記号および半角空白です。
; , * ? ' " < > |
- 指定値に誤りがある場合、Agent Store サービスは起動できません。

注※2

Store Dir, Backup Dir, および Dump Dir には、それぞれ重複したフォルダを指定できません。

(b) jpcsto.ini ファイルの編集前の準備

- Store データベースの格納先フォルダを変更する場合は、変更後の格納先フォルダを事前に作成してください。
- Store データベースの格納先フォルダを変更すると、変更前に収集したパフォーマンスデータを使用できなくなります。変更前に収集したパフォーマンスデータが必要な場合は、次に示す手順でデータを引き継いでください。
 - jpc tool db backup コマンドで Store データベースに格納されているパフォーマンスデータのバックアップを採取する。
 - 「(c) jpcsto.ini ファイルの編集手順」に従って Store データベースの格納先フォルダを変更する。
 - jpc tool db restore コマンドで変更後のフォルダにバックアップデータをリストアする。

(c) jpcsto.ini ファイルの編集手順

手順を次に示します。

1. PFM - Agent のサービスを停止する。

ローカルホストで PFM -Agent のプログラムおよびサービスが起動されている場合は、すべて停止してください。

2. テキストエディターなどで、jpcsto.ini ファイルを開く。

3. パフォーマンスデータの格納先フォルダなどを変更する。

次に示す網掛け部分を、必要に応じて修正してください。

2. インストールとセットアップ (Windows の場合)

[Data Section]

Store Dir=.

Backup Dir=.\\$backup

Backup Save=5

Dump Dir=.\\$dump

注意事項

- 行頭および「=」の前後には空白文字を入力しないでください。
- 各ラベルの値の「.」は、Agent Store サービスの Store データベースのデフォルト格納先フォルダ（インストール先フォルダ\\$agt\\$store\\$インスタンス名）を示します。格納先を変更する場合、その格納先フォルダからの相対パスか、または絶対パスで記述してください。
- jpcsto.ini ファイルには、データベースの格納先フォルダ以外にも、定義情報が記述されています。[Data Section]セクション以外の値は変更しないようにしてください。[Data Section]セクション以外の値を変更すると、Performance Management が正常に動作しなくなることがあります。

4. jpcsto.ini ファイルを保存して閉じる。

5. Performance Management のプログラムおよびサービスを起動する。

注意

この手順で Store データベースの保存先フォルダを変更した場合、パフォーマンスデータファイルは変更前のフォルダから削除されません。これらのファイルが不要な場合は、次に示すファイルだけを削除してください。

- 拡張子が.DB であるすべてのファイル
- 拡張子が.IDX であるすべてのファイル

2.7.2 Store バージョン 2.0 への移行

Store データベースの保存形式には、バージョン 1.0 と 2.0 の 2 種類あります。Store バージョン 2.0 の詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」を参照してください。

Store バージョン 2.0 は、PFM - Base または PFM - Manager のバージョン 08-10 以降の環境に、08-10 以降の PFM - Agent for HiRDB を新規インストールした場合にだけデフォルトで利用できます。それ以外の場合は、Store バージョン 1.0 形式のままとなっているため、セットアップコマンドによって Store バージョン 2.0 に移行してください。

何らかの理由によって Store バージョン 1.0 に戻す必要がある場合は、Store バージョン 2.0 のアンセットアップを行ってください。

インストール条件に対応する Store バージョン 2.0 の利用可否と利用手順を次の表に示します。

表 2-24 Store バージョン 2.0 の利用可否および利用手順

インストール条件		Store バージョン 2.0 の利用可否	Store バージョン 2.0 の利用手順
インストール済みの PFM - Base, または, PFM - Manager のバージョン	PFM - Agent のインストール方法		
08-10 より前	上書きインストール	利用できない	PFM - Base, または, PFM - Manager を 08-10 にバージョンアップ後, セットアップコマンドを実行
	新規インストール		
08-10 以降	上書きインストール	セットアップ後利用できる	セットアップコマンドを実行
	新規インストール	利用できる	設定不要

(1) Store バージョン 2.0 のセットアップ

1. システムリソース見積もりとリテンションの設定

Store バージョン 2.0 導入に必要なシステムリソースが、実行環境に適しているかどうかを確認してください。必要なシステムリソースを次に示します。

- ・ディスク容量
- ・ファイル数
- ・1 プロセスがオープンするファイル数

これらの値はリテンションの設定によって調節できます。実行環境の保有しているリソースを考慮してリテンションを設定してください。システムリソースの見積もりについては、「[付録 A システム見積もり](#)」を参照してください。

2. フォルダの設定

Store バージョン 2.0 に移行する場合に、Store バージョン 1.0 でのフォルダ設定では、Agent Store サービスが起動しないことがあります。このため、Agent Store サービスが使用するフォルダの設定を見直す必要があります。Agent Store サービスが使用するフォルダの設定は `jpcconf db define` コマンドを使用して表示・変更できます。

Store バージョン 2.0 は、Store データベースの保存先フォルダやバックアップ先フォルダの最大長が Store バージョン 1.0 と異なります。Store バージョン 1.0 でフォルダの設定を相対パスに変更している場合、絶対パスに変換した値が Store バージョン 2.0 でのフォルダ最大長の条件を満たしているか確認してください。Store バージョン 2.0 のフォルダ最大長は 214 バイトです。フォルダ最大長の条件を満たしていない場合は、Agent Store サービスが使用するフォルダの設定を変更したあと、手順 3 以降に進んでください。

3. セットアップコマンドの実行

Store バージョン 2.0 に移行するため、次のコマンドを実行します。

```
jpcconf db vrset -ver 2.0 -key HiRDB -inst インスタンス名
```

jpcconf db vrset コマンドの詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」を参照してください。

4. リテンションの設定

手順 1 の見積もり時に設計したリテンションを設定してください。Agent Store サービスを起動して、PFM - Web Console で設定してください。

(2) Store バージョン 2.0 のアンセットアップ

Store バージョン 2.0 のアンセットアップは jpcconf db vrset -ver 1.0 コマンドを使用します。Store バージョン 2.0 をアンセットアップすると、Store データベースのデータはすべて初期化され、Store バージョン 1.0 に戻ります。

jpcconf db vrset コマンドの詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」を参照してください。

(3) 注意事項

(a) Store バージョン 1.0 から Store バージョン 2.0 に変更する場合

Store バージョン 1.0 から Store バージョン 2.0 に変更した場合、PI レコードは変更前と変更後でデータの内容は変わりません。PD レコードは、Store バージョン 1.0 のデータを参照できないおそれがあります。このため、Store バージョン 2.0 に変更する前に、jpctool db dump コマンドで Store バージョン 1.0 の情報を出力してください。

例えば、Store バージョン 1.0 の PD レコードが 10,000 レコードで 2006/01/01 から 2006/12/31 の 365 日分保存されている場合、Store バージョン 2.0 に変更すると、デフォルトの保存期間が 10 日であるため、過去 355 日分のデータは削除されます。Store バージョン 2.0 でのデフォルト保存日数については、「[付録 A.2 ディスク占有量](#)」を参照してください。

(b) Store バージョン 2.0 から Store バージョン 1.0 に戻す場合

Store バージョン 1.0 に戻すと、データは初期化されます。このため、Store バージョン 1.0 に変更する前に、jpctool db dump コマンドで Store バージョン 2.0 の情報を出力してください。

2.7.3 インスタンス環境の更新

インスタンス環境を更新したい場合は、インスタンス名を確認し、インスタンス情報を更新します。インスタンス情報の設定は、PFM - Agent ホストで実施します。

インスタンス名を確認するには、jpcconf inst list コマンドを使用します。また、インスタンス環境を更新するには、jpcconf inst setup コマンドを使用します。

インスタンス環境を更新する手順を次に示します。複数のインスタンス環境を更新する場合は、この手順を繰り返し実施します。

1. インスタンス名を確認する。

インスタンス環境で動作している PFM - Agent for HiRDB を示すサービスキーを指定して、`jpcconf inst list` コマンドを実行します。

例えば、PFM - Agent for HiRDB のインスタンス名を確認したい場合、次のように指定してコマンドを実行します。

```
jpcconf inst list -key HiRDB
```

設定されているインスタンス名が HRD1 の場合、HRD1 と表示されます。

2. 更新する情報を確認する。

インスタンス環境で更新できる情報を次に示します。

表 2-25 PFM - Agent for HiRDB のインスタンス情報

項目	説明	設定できる値	デフォルト値
PDDIR	監視対象の HiRDB システムのシステムマネージャを含む HiRDB ユニットの HiRDB 運用ディレクトリのパス（環境変数 PDDIR の値）。	200 バイト以内のパス名	インスタンス環境の更新前の設定値
PDCONFPATH	監視対象の HiRDB システムのシステムマネージャを含む HiRDB ユニットの環境変数 PDCONFPATH の値。 「PDDIR の値¥conf」が設定されます。	205 バイト以内のパス名	
HiRDB_user	DBA 権限を持つ HiRDB 認可識別子。大文字と小文字を区別する場合は全体を"（引用符）で囲んでください。囲まなければすべて大文字として扱われます。	10 バイト以内の文字列	
HiRDB_password	HiRDB_user に対応するパスワード。大文字と小文字を区別する場合は全体を"（引用符）で囲んでください。囲まなければすべて大文字として扱われます。	32 バイト以内の文字列	
HiRDB_admin	HiRDB 管理者。大文字と小文字を区別する場合でも"（引用符）で囲まないでください。	128 バイト以内の文字列	

3. 更新したいインスタンス環境の PFM - Agent for HiRDB のサービスが起動されている場合は、停止する。

`jpcconf inst setup` コマンド実行時に、更新したいインスタンス環境のサービスが起動されている場合は、確認メッセージが表示され、サービスを停止できます。サービスを停止した場合は、更新処理が続行されます。サービスを停止しなかった場合は、更新処理が中断されます。

4. 更新したいインスタンス環境の PFM - Agent for HiRDB を示すサービスキーおよびインスタンス名を指定して、`jpcconf inst setup` コマンドを実行する。

例えば、PFM - Agent for HiRDB のインスタンス名 **HRD1** のインスタンス環境を更新する場合、次のように指定してコマンドを実行します。

```
jpcconf inst setup -key HiRDB -inst HRD1
```

5. HiRDB のインスタンス情報を更新する。

表 2-25 に示した項目を、コマンドの指示に従って入力します。現在設定されている値が表示されます（ただし **HiRDB_password** の値は表示されません）。表示された値を変更しない場合は、リターンキーだけを押してください。すべての入力が終了すると、インスタンス環境が更新されます。

6. 更新したインスタンス環境のサービスを再起動する。

サービスの起動方法および停止方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、サービスの起動と停止について説明している章を参照してください。コマンドの詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」を参照してください。

2.8 バックアップとリストア

PFM - Agent for HiRDB のバックアップおよびリストアについて説明します。

障害が発生してシステムが壊れた場合に備えて、PFM - Agent for HiRDB の設定情報のバックアップを取得してください。また、PFM - Agent for HiRDB をセットアップしたときなど、システムを変更した場合にもバックアップを取得してください。

なお、Performance Management システム全体のバックアップおよびリストアについては、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、バックアップとリストアの説明を参照してください。

2.8.1 バックアップ

バックアップはファイルをコピーするなど、任意の方法で取得してください。バックアップを取得する際は、PFM - Agent for HiRDB のサービスを停止した状態で行ってください。

PFM - Agent for HiRDB の設定情報のバックアップ対象ファイルを次の表に示します。

表 2-26 PFM - Agent for HiRDB のバックアップ対象ファイル

ファイル名	説明
インストール先フォルダ¥agtb¥agent¥インスタンス名**.ini ファイル	Agent Collector サービスの設定ファイル
インストール先フォルダ¥agtb¥store¥インスタンス名**.ini ファイル	Agent Store サービスの設定ファイル

注意事項

- 論理ホストで運用する場合のファイル名については、「インストール先フォルダ」を「環境フォルダ¥jp1pc」に読み替えてください。
- PFM - Agent for HiRDB のバックアップを取得する際は、取得した環境の製品バージョン番号を管理するようにしてください。製品バージョン番号の詳細については、リリースノートを参照してください。

2.8.2 リストア

PFM - Agent for HiRDB の設定情報をリストアする場合は、次に示す前提条件を確認した上で、バックアップ対象ファイルを元の位置にコピーしてください。バックアップした設定情報ファイルで、ホスト上の設定情報ファイルを上書きします。

前提条件

- PFM - Agent for HiRDB がインストール済みであること。

- PFM - Agent for HiRDB のサービスが停止していること。
- システム構成がバックアップしたときと同じであること。
- それぞれのホストで、バックアップしたホスト名とリストアするホスト名が一致していること。
- バックアップ環境の PFM 製品構成情報がリストア対象の PFM 製品構成情報と一致していること。

■ 注意事項

PFM - Agent for HiRDB の設定情報をリストアする場合、バックアップを取得した環境とリストアする環境の製品バージョン番号が完全に一致している必要があります。製品バージョン番号の詳細については、リリースノートを参照してください。リストアの可否についての例を次に示します。

リストアできるケース

PFM - Agent for HiRDB 10-00 でバックアップした設定情報を PFM - Agent for HiRDB 10-00 にリストアする。

リストアできないケース

- PFM - Agent for HiRDB 10-00 でバックアップした設定情報を PFM - Agent for HiRDB 09-00 にリストアする。
- PFM - Agent for HiRDB 08-50 でバックアップした設定情報を PFM - Agent for HiRDB 08-50-05 にリストアする。

2.9 Web ブラウザでマニュアルを参照するための設定

Performance Management では、PFM - Web Console がインストールされているホストに、プログラムプロダクトに標準添付されているマニュアル提供媒体からマニュアルをコピーすることで、Web ブラウザでマニュアルを参照できるようになります。なお、PFM - Web Console をクラスタ運用している場合は、実行系、待機系それぞれの物理ホストでマニュアルをコピーしてください。

2.9.1 マニュアルを参照するための設定

(1) PFM - Web Console のヘルプからマニュアルを参照する場合

1. PFM - Web Console のセットアップ手順に従い、PFM - Web Console に PFM - Agent を登録する (PFM - Agent の追加セットアップを行う)。
2. PFM - Web Console がインストールされているホストに、マニュアルのコピー先フォルダを作成する。
 - Windows の場合 : Web Console のインストール先フォルダ¥doc¥ja¥×××
 - UNIX の場合 : /opt/jplpcwebcon/doc/ja/×××

×××には、PFM - Agent のヘルプ ID を指定してください。ヘルプ ID については、「[付録 C 識別子一覧](#)」を参照してください。
3. 手順 2 で作成したフォルダの直下に、マニュアル提供媒体から次のファイルおよびフォルダをコピーする。

HTML マニュアルの場合

Windows の場合 : 該当するドライブ¥MAN¥3021¥資料番号 (03004A0D など) 下の、すべての HTML ファイル、CSS ファイル、および FIGURE フォルダ

UNIX の場合 : /提供媒体のマウントポイント/MAN/3021/資料番号 (03004A0D など) 下の、すべての HTML ファイル、CSS ファイル、および FIGURE ディレクトリ

PDF マニュアルの場合

Windows の場合 : 該当するドライブ¥MAN¥3021¥資料番号 (03004A0D など) 下の PDF ファイル

UNIX の場合 : /提供媒体のマウントポイント/MAN/3021/資料番号 (03004A0D など) 下の PDF ファイル

コピーの際、HTML マニュアルの場合は INDEX.HTM ファイルが、PDF マニュアルの場合は PDF ファイル自体が、作成したフォルダ直下に配置されるようにしてください。

4. PFM - Web Console を再起動する。

(2) お使いのマシンのハードディスクからマニュアルを参照する場合

提供媒体の setup.exe を使ってインストールするか、または直接 HTML ファイル、CSS ファイル、PDF ファイル、および GIF ファイルを任意のフォルダにコピーしてください。HTML マニュアルの場合、次のフォルダ構成になるようにしてください。

```
html (HTMLファイルおよびCSSファイルを格納)
└ FIGURE (GIFファイルを格納)
```

2.9.2 マニュアルの参照手順

マニュアルの参照手順を次に示します。

1. PFM - Web Console の [メイン] 画面のメニューバーフレームにある [ヘルプ] メニューをクリックし、[ヘルプ選択] 画面を表示する。
2. マニュアル名またはマニュアル名の後ろの [PDF] をクリックする。

マニュアル名をクリックすると HTML 形式のマニュアルが表示されます。[PDF] をクリックすると PDF 形式のマニュアルが表示されます。

Web ブラウザでの文字の表示に関する注意事項

Windows の場合、[スタート] メニューからオンラインマニュアルを表示させると、すでに表示されている Web ブラウザの画面上に HTML マニュアルが表示されることがあります。

3

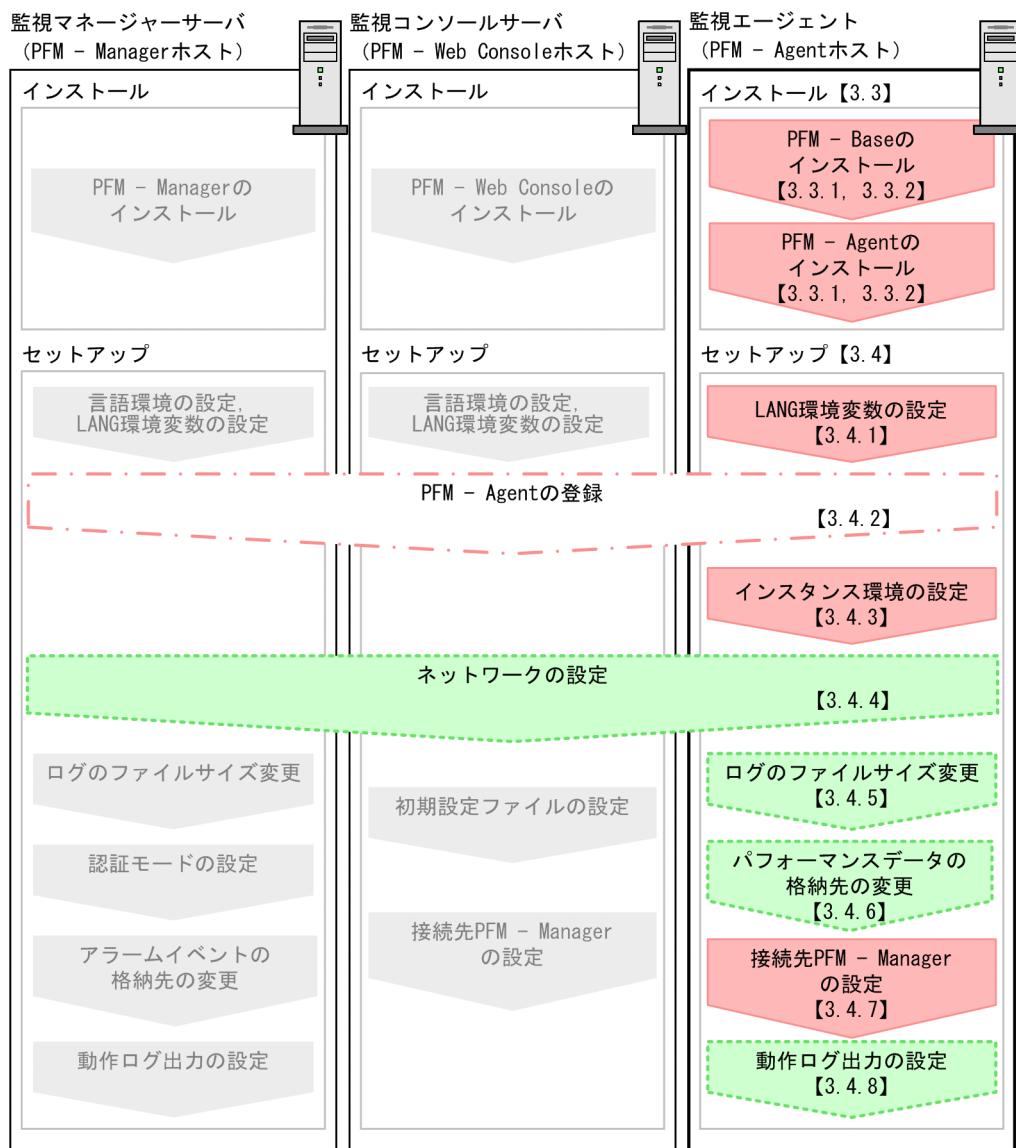
インストールとセットアップ (UNIX の場合)

この章では、PFM - Agent for HiRDB のインストールおよびセットアップ方法について説明します。Performance Management システム全体のインストールおよびセットアップ方法についてはマニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

3.1 インストールとセットアップの流れ

PFM - Agent for HiRDB をインストールおよびセットアップする流れを説明します。

図 3-1 インストールとセットアップの流れ



(凡例)

- : 必須セットアップ項目
- : 場合によって必須となるセットアップ項目
- : オプションのセットアップ項目
- : マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」に手順が記載されている項目
- : 参照先

PFM - Manager および PFM - Web Console のインストールおよびセットアップの手順は、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

3.2 インストールの前に確認すること

PFM - Agent for HiRDB をインストールおよびセットアップする前に確認しておくことを説明します。

3.2.1 前提 OS

PFM - Agent for HiRDB が動作する OS を次に示します。

- HP-UX
- AIX
- Linux

3.2.2 ネットワークの環境設定

Performance Management が動作するためのネットワーク環境について説明します。

(1) IP アドレスの設定

PFM - Agent のホストは、ホスト名で IP アドレスが解決できる環境を設定してください。IP アドレスが解決できない環境では、PFM - Agent は起動できません。

監視ホスト名 (Performance Management システムのホスト名として使用する名前) には、実ホスト名またはエイリアス名を使用できます。

- 監視ホスト名に実ホスト名を使用している場合

UNIX システムでは `uname -n` コマンドを実行して確認したホスト名で、IP アドレスを解決できるように環境を設定してください。なお、UNIX システムでは、`hostname` コマンドで取得するホスト名を使用することもできます。

- 監視ホスト名にエイリアス名を使用している場合

設定しているエイリアス名で IP アドレスを解決できるように環境を設定してください。

監視ホスト名の設定については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

ホスト名と IP アドレスは、次のどれかの方法で設定してください。

- Performance Management のホスト情報設定ファイル (`jpchosts` ファイル)
- `hosts` ファイル
- DNS

注意事項

- Performance Management は、DNS 環境でも運用できますが、FQDN 形式のホスト名には対応していません。このため、監視ホスト名は、ドメイン名を除いて指定してください。
- 複数の LAN 環境で使用する場合は、jpchosts ファイルで IP アドレスを設定してください。 詳細は、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。
- Performance Management は、DHCP による動的な IP アドレスが割り振られているホスト上では運用できません。Performance Management を導入するすべてのホストに、固定の IP アドレスを設定してください。

(2) ポート番号の設定

Performance Management プログラムのサービスは、デフォルトで次の表に示すポート番号が割り当てられています。これ以外のサービスまたはプログラムに対しては、サービスを起動するたびに、そのときシステムで使用されていないポート番号が自動的に割り当てられます。また、ファイアウォール環境で、Performance Management を使用するときは、ポート番号を固定してください。ポート番号の固定の手順は、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」のインストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

表 3-1 デフォルトのポート番号と Performance Management プログラムのサービス (UNIX の場合)

機能	サービス名	パラメーター	ポート番号	備考
サービス構成情報管理機能	Name Server	jp1pcnsvr	22285	PFM - Manager の Name Server サービスで使用されるポート番号。 Performance Management のすべてのホストで設定される。
サービス状態管理機能	Status Server	jp1pcstatsvr	22350	PFM - Manager および PFM - Base の Status Server サービスで使用されるポート番号。 PFM - Manager および PFM - Base がインストールされているホストで設定される。
JP1/SLM 連携機能	JP1/ITSLM	—	20905	JP1/SLM で設定されるポート番号。

(凡例)

—：なし

これらの PFM - Agent が使用するポート番号で通信できるように、ネットワークを設定してください。

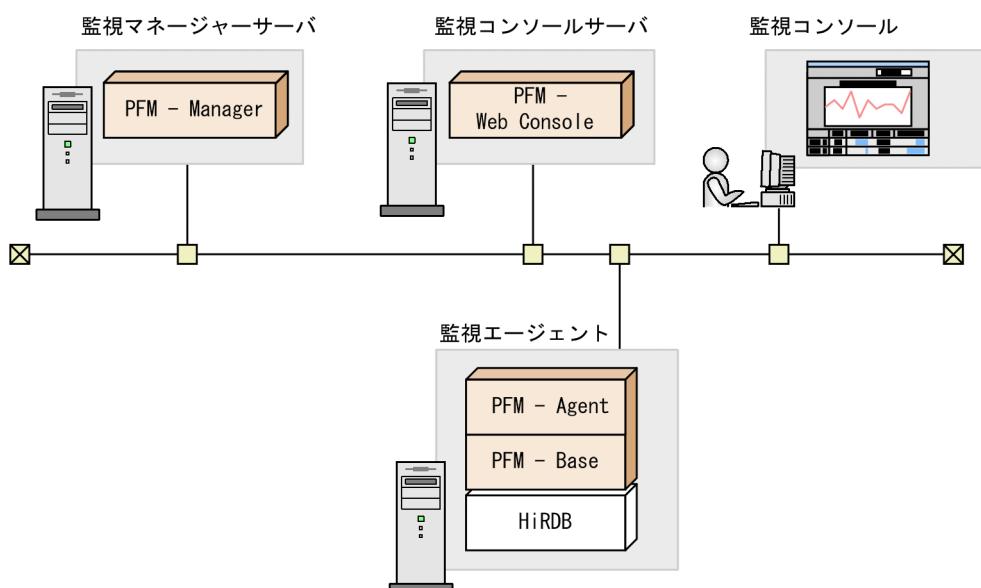
3.2.3 インストールに必要な OS ユーザー権限について

PFM - Agent for HiRDB をインストールするときは、必ず、スーパーユーザー権限を持つアカウントで実行してください。

3.2.4 前提プログラム

ここでは、PFM - Agent for HiRDB をインストールする場合に必要な前提プログラムを説明します。プログラムの構成を次に示します。

図 3-2 プログラムの構成



(凡例)

: Performance Managementが提供するプログラム

: 必要なプログラム

(1) 監視対象プログラム

PFM - Agent for HiRDB の監視対象プログラムを次に示します。

- HiRDB

監視対象プログラムは、PFM - Agent for HiRDB と同一ホストにインストールする必要があります。

注意事項

- HiRDB のバージョンアップまたはセットアップを実行する前に、PFM-Agent for HiRDB のサービスを停止させてください。

- HiRDB システム共通定義ファイル（pdsys ファイル）で pdunit オペランドを指定しないで HiRDB を起動できる場合でも、必ず pdunit オペランドを指定してください。
- HiRDB ユニットの環境変数 PDCONFPATH に定義したパス名と、HiRDB ユニットの環境変数 PDDIR/conf で定義したパス名と同じにしてください。
- HiRDB/パラレルサーバの場合は、HiRDB システムを構成するすべてのホストに PFM - Agent for HiRDB をインストールします。
- マルチ HiRDB のサーバでは、HiRDB ごとに別々の HiRDB 管理者を登録してください。
- HiRDB/パラレルサーバの場合、PFM - Agent for HiRDB は MGR ノードに配置されたエージェントから HiRDB サーバに接続して SQL を実行します。このため、IP アドレス接続制限機能を使用する場合は MGR ノードの IP アドレスを許可登録してください。なお、IP アドレス接続制限機能の詳細は、マニュアル「HiRDB システム運用ガイド」の CONNECT 関連セキュリティ機能について説明している章を参照してください。
- PI_RDDS レコードまたは PI_RDST レコードを収集する場合は、HiRDB サーバに対して 1 ユーザー分の接続を行います。必要に応じて pd_max_users の設定を見直してください。PI_RDDS レコードおよび PI_RDST レコードの詳細は「[6. レコード](#)」を参照してください。また、pd_max_users の詳細はマニュアル「HiRDB システム定義」を参照してください。

(2) Performance Management プログラム

監視エージェントには、PFM - Agent と PFM - Base をインストールします。PFM - Base は PFM - Agent の前提プログラムです。同一ホストに複数の PFM - Agent をインストールする場合でも、PFM - Base は 1 つだけがまいません。

ただし、PFM - Manager と PFM - Agent を同一ホストにインストールする場合、PFM - Base は不要です。

Performance Management プログラムを導入するホストとバージョンの関係については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」のシステム構成のバージョン互換について説明している章を参照してください。

また、PFM - Agent for HiRDB を使って HiRDB の稼働監視を行うためには、PFM - Manager および PFM - Web Console が必要です。

3.2.5 クラスタシステムでのインストールとセットアップについて

クラスタシステムでのインストールとセットアップは、前提となるネットワーク環境やプログラム構成が、通常の構成のセットアップとは異なります。また、実行系ノードと待機系ノードでの作業が必要になります。詳細については、「[4. クラスタシステムでの運用](#)」を参照してください。

3.2.6 障害発生時の資料採取の準備

トラブルが発生した場合に調査資料として、コアダンプファイルが必要になることがあります。コアダンプファイルの出力はユーザーの環境設定に依存するため、次に示す設定を確認しておいてください。

コアダンプファイルのサイズ設定

コアダンプファイルの最大サイズは、rootユーザーのコアダンプファイルのサイズ設定（ulimit -c）によって制限されます。次のようにスクリプトを設定してください。

```
ulimit -c unlimited
```

この設定が、ご使用のマシンのセキュリティポリシーに反する場合は、これらのスクリプトの設定を次のようにコメント行にしてください。

```
# ulimit -c unlimited
```

注意事項

コメント行にした場合、プロセスで発生したセグメンテーション障害やバス障害などのコアダンプファイルの出力契機に、コアダンプが出力されないため、調査できないおそれがあります。

コアダンプに関連するカーネルパラメーターの設定 (Linux 限定)

Linux のカーネルパラメーター (kernel.core_pattern) で、コアダンプファイルの出力先、およびファイル名をデフォルトの設定から変更している場合、コアダンプファイルを採取できないときがあります。このため、Linux のカーネルパラメーター (kernel.core_pattern) の設定は変更しないことをお勧めします。

3.2.7 インストール前の注意事項

ここでは、Performance Management をインストールおよびセットアップするときの注意事項を説明します。

(1) 環境変数に関する注意事項

Performance Management では JPC_HOSTNAME を環境変数として使用しているため、ユーザー独自に環境変数として設定しないでください。設定した場合は、Performance Management が正しく動作しません。

PFM - Agent for HiRDB を起動するユーザー（root ユーザー）の環境変数に TMPDIR がある場合は、TMPDIR を無効にしてから PFM - Agent for HiRDB のインスタンスを起動（jpcspm start）してください。無効にしないで起動すると、パフォーマンスデータの収集に失敗するおそれがあります。

(2) 同一ホストに Performance Management プログラムを複数インストール、セットアップするときの注意事項

Performance Management は、同一ホストに PFM - Manager, PFM - Web Console, および PFM - Agent をインストールすることもできます。その場合の注意事項を次に示します。

- PFM - Manager と PFM - Agent を同一ホストにインストールする場合、PFM - Base は不要です。この場合、PFM - Agent の前提プログラムは PFM - Manager になるため、PFM - Manager をインストールしてから PFM - Agent をインストールしてください。
- PFM - Base と PFM - Manager は同一ホストにインストールできません。PFM - Base と PFM - Agent がインストールされているホストに PFM - Manager をインストールする場合は、PFM - Web Console 以外のすべての Performance Management プログラムをアンインストールしたあとに PFM - Manager → PFM - Agent の順でインストールしてください。また、PFM - Manager と PFM - Agent がインストールされているホストに PFM - Base をインストールする場合も同様に、PFM - Web Console 以外のすべての Performance Management プログラムをアンインストールしたあとに PFM - Base → PFM - Agent の順でインストールしてください。
- PFM - Manager がインストールされているホストに PFM - Agent をインストールすると、接続先 PFM - Manager はローカルホストの PFM - Manager となります。この場合、接続先 PFM - Manager をリモートホストの PFM - Manager に変更できません。リモートホストの PFM - Manager に接続したい場合は、インストールするホストに PFM - Manager がインストールされていないことを確認してください。
- PFM - Agent がインストールされているホストに PFM - Manager をインストールすると、PFM - Agent の接続先 PFM - Manager は自ホスト名に設定し直されます。共通メッセージログに設定結果が出力されています。結果を確認してください。
- PFM - Web Console がインストールされているホストに、PFM - Agent をインストールする場合は、Web ブラウザの画面をすべて閉じてからインストールを実施してください。
- Performance Management プログラムを新規にインストールした場合は、ステータス管理機能がデフォルトで有効になります。ただし、07-50 から 08-00 以降にバージョンアップインストールした場合は、ステータス管理機能の設定状態はバージョンアップ前のままとなります。ステータス管理機能の設定を変更する場合は、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の Performance Management の障害検知について説明している章を参照してください。

■ ポイント

システムの性能や信頼性を向上させるため、PFM - Manager, PFM - Web Console, および PFM - Agent はそれぞれ別のホストで運用することをお勧めします。

(3) バージョンアップの注意事項

Performance Management プログラムをバージョンアップする場合の注意事項については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」のインストールとセットアップの章にある、バージョンアップの注意事項について説明している個所を参照してください。

PFM - Agent for HiRDB をバージョンアップする場合の注意事項については、「[付録 H バージョンアップ手順とバージョンアップ時の注意事項](#)」を参照してください。

なお、バージョンアップについての詳細は、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の付録を参照してください。

- Performance Management のプログラムをインストールするときは、ローカルホストの Performance Management のプログラムおよびサービスをすべて停止しておいてください。なお、停止するサービスは物理ホスト上および論理ホスト上のすべてのサービスです。サービスの停止方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の起動と停止について説明している章を参照してください。
- PFM - Base と PFM - Manager は同一ホストにインストールできません。PFM - Base と PFM - Agent がインストールされているホストに PFM - Manager をインストールする場合は、PFM - Web Console 以外のすべての Performance Management プログラムをアンインストールしたあとに PFM - Manager → PFM - Agent の順でインストールしてください。また、PFM - Manager と PFM - Agent がインストールされているホストに PFM - Base をインストールする場合も同様に、PFM - Web Console 以外のすべての Performance Management プログラムをアンインストールしたあとに PFM - Base → PFM - Agent の順でインストールしてください。
- バージョン 08-00 以降の Performance Management プログラムでは、Store 実行プログラム (jpcst0 および stpq1pr) の配置先が変更されています。PFM - Agent を 08-00 以降にバージョンアップする際に、旧配置先の Store 実行モジュールは削除されます。
- バージョンアップで Store データベースのデータモデルバージョンが変更される場合、既存の Store データベースが自動的にバージョンアップされるため、一時的に Store データベースのディスク占有量が 2 倍になります。バージョンアップインストールする前に、Store データベースの格納先のディスクに十分な空き容量があるかどうか確認してください。必要な空き容量は、現在の Store データベースの合計サイズを基準に考慮してください。例えば、現在の Store データベースの合計サイズが 100 ギガバイトの場合、バージョンアップインストールに必要なディスクの空き容量は 200 ギガバイト以上です。Store データベースの格納先ディスクを変更している場合は、変更後のディスク容量に対して考慮してください。

(4) Performance Management インストール時の注意事項

- Performance Management のプログラムをインストールする場合、次に示すセキュリティ関連プログラムがインストールされていないかどうか確認してください。インストールされている場合、次の説明に従って対処してください。
 - セキュリティ監視プログラム

セキュリティ監視プログラムを停止するかまたは設定を変更して、Performance Management のプログラムのインストールを妨げないようにしてください。

- ウィルス検出プログラム

ウィルス検出プログラムを停止してから Performance Management のプログラムをインストールすることを推奨します。

Performance Management のプログラムのインストール中にウィルス検出プログラムが稼働している場合、インストールの速度が低下したり、インストールが実行できなかったり、または正しくインストールできなかったりすることがあります。

- プロセス監視プログラム

プロセス監視プログラムを停止するかまたは設定を変更して、Performance Management のサービスまたはプロセス、および共通コンポーネントのサービスまたはプロセスを監視しないようにしてください。

Performance Management のプログラムのインストール中に、プロセス監視プログラムによって、これらのサービスまたはプロセスが起動されたり停止されたりすると、インストールに失敗することがあります。

- Performance Management のプログラムが一つもインストールされていない環境に新規インストールする場合は、インストール先ディレクトリにファイルやディレクトリがないことを確認してください。
- インストール時のステータスバーに「*Installation failed.*」と表示されてインストールが失敗した場合、インストールログを採取してください。なお、このログファイルは、次にインストールすると上書きされるため、必要に応じてバックアップを採取してください。インストールログのデフォルトのファイル名については、「[8.4.2\(2\) Performance Management の情報](#)」を参照してください。
- インストール先ディレクトリにリンクを張り Performance Management のプログラムをインストールした場合、全 Performance Management のプログラムをアンインストールしても、リンク先のディレクトリに一部のファイルやディレクトリが残る場合があります。削除する場合は、手動で行ってください。また、リンク先にインストールする場合、リンク先に同名のファイルやディレクトリがあるときは、Performance Management のプログラムのインストール時に上書きされるので、注意してください。
- `/opt/jp1pc/setup` ディレクトリに PFM - Agent for HiRDB のセットアップファイルがある場合、新規 PFM - Agent for HiRDB の追加セットアップが実行されます。PFM - Agent for HiRDB の追加セットアップが成功した場合の実行結果は共通メッセージログに「*KAVE05908-I エージェント追加セットアップは正常に終了しました*」と出力されます。確認してください。

(5) スキャン対象から除外するフォルダおよびファイルに関する注意事項

ウィルススキャン製品やバックアップソフトウェアなどで PFM - Agent for HiRDB が使用するファイルにアクセスすると、I/O 遅延やファイル排他などによって障害が発生するおそれがあります。これを防止するため、PFM - Agent for HiRDB 稼働中はウィルススキャン製品のスキャン対象やバックアップソフトウェアのバックアップ対象から、インストールフォルダおよびインストールフォルダ配下すべてを除いてください。ログファイルの指定でデフォルト以外のファイルを使用している場合など、インストールフォルダ配下とは別に指定しているファイルがあれば、あわせて除いてください。

(6) その他の注意事項

- PFM - Agent for HiRDB のインスタンスで 2 ユニット以上の HiRDB/パラレルサーバを監視する場合、レコードを収集する間隔が短い、または短期間に多種のレコードを収集すると rsh (remsh, rcp) 用のポートが枯渇するおそれがあります。

事前に、rsh (remsh, rcp) 用のポートの使用状況を確認し、必要であればレコードの収集間隔を調整してください。

rsh (remsh, rcp) 用のポートの使用状況は、netstat コマンドなどで確認してください。

また、HiRDB 10-03 以降のバージョンでは、pd_cmd_rmode で ssh を指定することも検討してください。pd_cmd_rmode の詳細は、マニュアル「HiRDB システム定義」を参照してください。

- PFM - Agent for HiRDB をインストールしたマシンのカーネルパラメーター nproc は、root ユーザーの nproc の値 \geq HiRDB 管理者ユーザーの nproc の値となるように設定してください。この設定をしない場合、PFM - Agent for HiRDB のサービスが起動しない、または一部のレコードの収集に失敗するおそれがあります。OS の ulimit -u コマンドを使用して、nproc の指定値が十分であるかどうかを確認してください。
- PFM - Agent for HiRDB のインスタンスで 2 ユニット以上の HiRDB/パラレルサーバを監視する場合、rsh (remsh) および rcp サービスを停止しないでください。

3.3 インストール手順

ここでは、PFM - Agent for HiRDB のプログラムをインストールする順序と提供媒体からプログラムをインストールする手順を説明します。

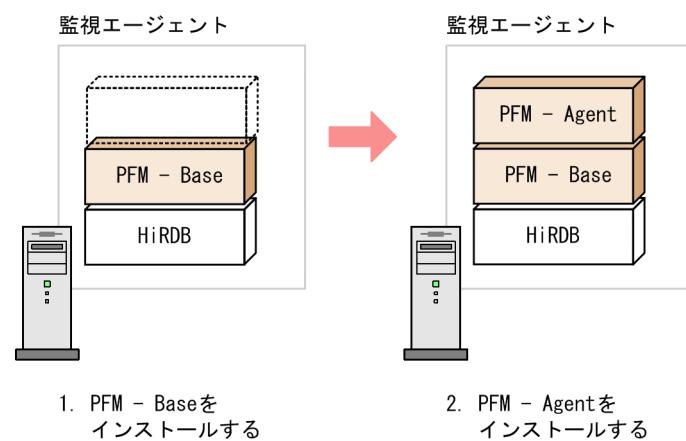
3.3.1 プログラムのインストール順序

まず、PFM - Base をインストールし、次に PFM - Agent をインストールします。PFM - Base がインストールされていないホストに PFM - Agent をインストールすることはできません。

なお、PFM - Manager と同一ホストに PFM - Agent をインストールする場合は、PFM - Manager → PFM - Agent の順でインストールしてください。また、Store データベースのバージョン 1.0 からバージョン 2.0 にバージョンアップする場合、PFM - Agent と PFM - Manager または PFM - Base のインストール順序によって、セットアップ方法が異なります。Store バージョン 2.0 のセットアップ方法については、「[3.7.2 Store バージョン 2.0 への移行](#)」を参照してください。

同一ホストに複数の PFM - Agent をインストールする場合、PFM - Agent 相互のインストール順序は問いません。

図 3-3 プログラムのインストール順序



3.3.2 PFM - Agent for HiRDB のインストール手順

UNIX ホストに Performance Management プログラムをインストールするには、提供媒体を使用する方法と、JP1/NETM/DM を使用してリモートインストールする方法があります。

JP1/NETM/DM を使用する方法については、次のマニュアルを参照してください。

- ・「JP1/NETM/DM Manager」
- ・「JP1/NETM/DM SubManager (UNIX(R)用)」
- ・「JP1/NETM/DM Client (UNIX(R)用)」

3. インストールとセットアップ (UNIX の場合)

提供媒体を使用する場合のインストール手順を OS ごとに示します。

(1) HP-UX の場合

1. プログラムをインストールするホストに、スーパーユーザーでログインするか、または su コマンドでユーザーをスーパーユーザーに変更する。
2. ローカルホストで起動している Performance Management のサービスがあれば、すべて停止する。
停止するサービスは、物理ホストおよび論理ホスト上の Performance Management のサービスです。サービスの停止方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の Performance Management の起動と停止について説明している章を参照してください。
3. 提供媒体をセットする。
4. mount コマンドを実行して、該当する装置をマウントする。

例えば、該当する装置を /cdrom にマウントする場合、次のように指定してコマンドを実行します。

```
/usr/sbin/mount -F cdfs -r デバイススペシャルファイル名 /cdrom
```

下線部は、ご使用になるマウントディレクトリ名を指定してください。

なお、指定するコマンドは、使用する環境によって異なります。

5. 次のコマンドを実行して、Hitachi PP Installer を起動する。

```
/cdrom/IPFHPUX/SETUP /cdrom
```

下線部のデバイススペシャルファイル名およびマウントディレクトリ名は、環境によって異なりますので、ご注意ください。

Hitachi PP Installer が起動され、初期画面が表示されます。

6. 初期画面で「I」を入力する。

インストールできるプログラムの一覧が表示されます。

7. インストールしたい Performance Management のプログラムを選択して、「I」を入力する。

選択したプログラムがインストールされます。なお、プログラムを選択するには、カーソルを移動させ、スペースキーで選択します。

8. インストールが正常終了したら、「Q」を入力する。

Hitachi PP Installer の初期画面に戻ります。

(2) AIX の場合

1. プログラムをインストールするホストに、スーパーユーザーでログインするか、または su コマンドでユーザーをスーパーユーザーに変更する。
2. ローカルホストで起動している Performance Management のサービスがあれば、すべて停止する。

停止するサービスは、物理ホストおよび論理ホスト上の Performance Management のサービスです。サービスの停止方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の Performance Management の起動と停止について説明している章を参照してください。

3. 提供媒体をセットする。

4. mount コマンドを実行して、該当する装置をマウントする。

例えば、該当する装置を /cdrom にマウントする場合、次のように指定してコマンドを実行します。

```
/usr/sbin/mount -r -v cdrfs /dev/cd0 /cdrom
```

下線部は、ご使用になるマウントディレクトリ名を指定してください。

5. 次のコマンドを実行して、Hitachi PP Installer を起動する。

```
/cdrom/AIX/SETUP /cdrom
```

下線部のデバイススペシャルファイル名およびマウントディレクトリ名は、環境によって異なりますので、ご注意ください。

Hitachi PP Installer が起動され、初期画面が表示されます。

6. 初期画面で「I」を入力する。

インストールできるプログラムの一覧が表示されます。

7. インストールしたいプログラムを選択して、「I」を入力する。

選択したプログラムがインストールされます。なお、プログラムを選択するには、カーソルを移動させ、スペースキーで選択します。

8. インストールが正常終了したら、「Q」を入力する。

Hitachi PP Installer の初期画面に戻ります。

(3) Linux の場合

1. プログラムのインストール先ディレクトリが実ディレクトリであることを確認する。

2. プログラムをインストールするホストに、スーパーユーザーでログインするか、または su コマンドでユーザーをスーパーユーザーに変更する。

3. ローカルホストで起動している Performance Management のサービスがあれば、すべて停止する。

停止するサービスは、物理ホストおよび論理ホスト上の Performance Management のサービスです。サービスの停止方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の Performance Management の起動と停止について説明している章を参照してください。

4. 提供媒体をセットする。

5. 次のコマンドを実行して、Hitachi PP Installer を起動する。※

```
/mnt/cdrom/X64LIN/SETUP /mnt/cdrom
```

下線部のデバイススペシャルファイル名およびマウントディレクトリ名は、環境によって異なりますので、ご注意ください。

Hitachi PP Installer が起動され、初期画面が表示されます。

6. 初期画面で「I」を入力する。

インストールできるプログラムの一覧が表示されます。

7. インストールしたいプログラムを選択して、「I」を入力する。

選択したプログラムがインストールされます。なお、プログラムを選択するには、カーソルを移動させ、スペースキーで選択します。

8. インストールが正常終了したら、「Q」を入力する。

Hitachi PP Installer の初期画面に戻ります。

注※

自動マウント機能を解除している環境では、Hitachi PP Installer を起動する前に、`/bin/mount` コマンドを次のように指定して該当する装置をマウントしてください。

```
/bin/mount -r -o mode=0544 /dev/cdrom /media/cdrecorder
```

なお、指定するコマンド、下線部のデバイススペシャルファイル名およびマウントディレクトリ名は、使用する環境によって異なります。

3.4 セットアップ

ここでは、PFM - Agent for HiRDB を運用するための、セットアップについて説明します。

〈オプション〉は使用する環境によって必要になるセットアップ項目、またはデフォルトの設定を変更する場合のオプションのセットアップ項目を示します。

3.4.1 LANG 環境変数の設定

LANG 環境変数を設定します。

これらの LANG 環境変数を設定する前に、設定する言語環境が正しくインストール・構築されていることを確認してください。正しくインストール・構築されていない場合、文字化けが発生したり、定義データが不当に書き換わってしまったりすることがあります。

注意

共通メッセージログの言語は、サービス起動時やコマンド実行時に設定されている LANG 環境変数によって決まります。そのため、日本語や英語など、複数の言語コードの文字列が混在することがあります。

PFM - Agent for HiRDB で使用できる LANG 環境変数を次の表に示します。なお、表に示す以外の言語（中国語、ドイツ語、フランス語、スペイン語、韓国語、およびロシア語）を設定した場合、LANG 環境変数の値は「C」で動作します。

表 3-2 PFM - Agent for HiRDB で使用できる LANG 環境変数

OS	言語種別	文字コード	LANG 環境変数の値
HP-UX	日本語	Shift-JIS (SJIS)	<ul style="list-style-type: none">ja_JP.SJISjapanese
		EUC	<ul style="list-style-type: none">ja_JP.eucJPjapanese.euc
		UTF-8	<ul style="list-style-type: none">ja_JP.utf8
	英語	ASCII	<ul style="list-style-type: none">C
AIX	日本語	Shift-JIS (SJIS)	<ul style="list-style-type: none">Ja_JPJa_JP. IBM-932
		EUC	<ul style="list-style-type: none">ja_JPja_JP. IBM-eucJP (PFM - Manager では使用できません)
		UTF-8	<ul style="list-style-type: none">JA_JPJA_JP.UTF-8

OS	言語種別	文字コード	LANG 環境変数の値
AIX	英語	ASCII	• C
Linux	日本語	Shift-JIS (SJIS)	–
		EUC	–
		UTF-8	• ja_JP.UTF-8 • ja_JP.utf8
	英語	ASCII	• C

(凡例)

– : 該当しない

3.4.2 PFM - Manager および PFM - Web Console への PFM - Agent for HiRDB の登録 オプション

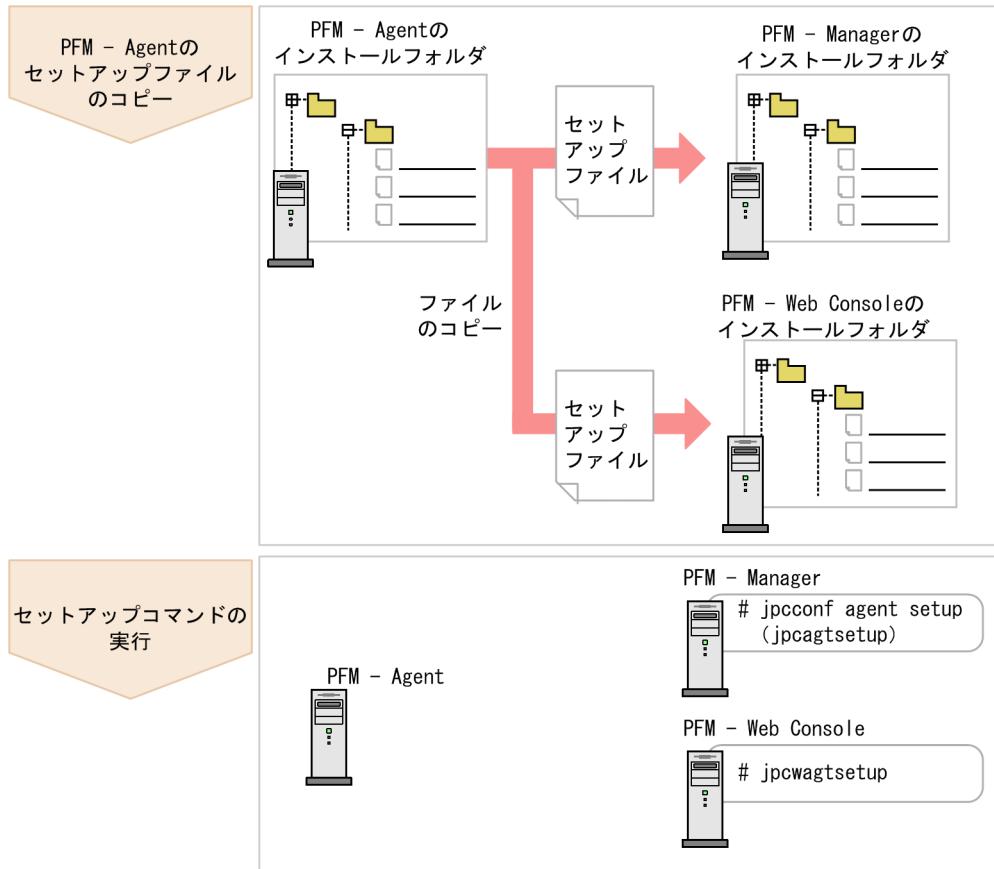
PFM - Manager および PFM - Web Console を使って PFM - Agent を一元管理するために、 PFM - Manager および PFM - Web Console に PFM - Agent for HiRDB を登録する手順を説明します。

PFM - Manager のバージョンが 08-50 以降の場合、 PFM - Agent の登録は自動で行われるため、ここで説明する手順は不要です。

ただし、 PFM - Manager よりリリース時期が新しい PFM - Agent または PFM - RM については、手動登録が必要になる場合があります。手動登録の要否については、 PFM - Manager のリリースノートを参照してください。

PFM - Agent の登録の流れを次に示します。

図 3-4 PFM - Agent の登録の流れ



注意事項

- PFM - Agent の登録は、インスタンス環境を設定する前に実施してください。
- すでに PFM - Agent for HiRDB の情報が登録されている Performance Management システムに、新たに同じバージョンの PFM - Agent for HiRDB を追加した場合、PFM - Agent の登録は必要ありません。
- バージョンが異なる PFM - Agent for HiRDB を、異なるホストにインストールする場合、古いバージョン、新しいバージョンの順でセットアップしてください。
- PFM - Manager と同じホストに PFM - Agent をインストールした場合、`jpcconf agent setup` コマンドが自動的に実行されます。共通メッセージログに「KAVE05908-I エージェント追加セットアップは正常に終了しました」と出力されるので、結果を確認してください。コマンドが正しく実行されていない場合は、コマンドを実行し直してください。コマンドの実行方法については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」のコマンドの章を参照してください。
- PFM - Agent for HiRDB の情報を登録する作業では、PFM - Web Console の [レポート階層] タブの [System Reports] に「HiRDB」という名前のフォルダが作成されます。

(1) PFM - Agent for HiRDB のセットアップファイルをコピーする

PFM - Agent for HiRDB をインストールしたホストにあるセットアップファイルを PFM - Manager および PFM - Web Console をインストールしたホストにコピーします。手順を次に示します。

1. PFM - Web Console が起動されている場合は、停止する。

2. PFM - Agent のセットアップファイルをバイナリーモードでコピーする。

ファイルが格納されている場所およびファイルをコピーする場所を次の表に示します。

表 3-3 コピーするセットアップファイル

PFM - Agent の セットアップファイル	コピー先		
	PFM プログラム名	OS	コピー先ディレクトリ
/opt/jp1pc/setup/jpcagtbw.EXE	PFM - Manager	Windows	インストール先フォルダ¥setup¥
/opt/jp1pc/setup/jpcagtbu.Z		UNIX	/opt/jp1pc/setup/
/opt/jp1pc/setup/jpcagtbw.EXE	PFM - Web Console	Windows	インストール先フォルダ¥setup¥
/opt/jp1pc/setup/jpcagtbu.Z		UNIX	/opt/jp1pcwebcon/setup/

(2) PFM - Manager ホストでセットアップコマンドを実行する

PFM - Manager で PFM - Agent for HiRDB をセットアップするための次のコマンドを実行します。

```
jpcconf agent setup -key HiRDB
```

注意事項

コマンドを実行するローカルホストの Performance Management のプログラムおよびサービスが完全に停止していない状態で jpcconf agent setup コマンドを実行した場合、エラーが発生することがあります。その場合は、Performance Management のプログラムおよびサービスが完全に停止したことを確認したあと、再度 jpcconf agent setup コマンドを実行してください。

PFM - Manager ホストにある PFM - Agent のセットアップファイルは、この作業が終了したあと、削除してもかまいません。

(3) PFM - Web Console ホストでセットアップコマンドを実行する

PFM - Web Console で PFM - Agent for HiRDB をセットアップするための次のコマンドを実行します。

```
jpcwagtsetup
```

PFM - Web Console ホストにある PFM - Agent のセットアップファイルは、この作業が終了したあと削除してもかまいません。

3.4.3 インスタンス環境の設定

インスタンス環境の設定について説明します。

インスタンス環境の設定は、HiRDB のシステムマネージャが稼働するホストで実施してください。なお、HiRDB のシステムマネージャが稼働していないホストでは、インスタンス環境の設定は実施しないでください。HiRDB のシステムマネージャが稼働していないホストにインスタンス環境を設定した場合、不正に履歴情報が収集され、正しい情報が取得できません。

複数のインスタンス環境を設定する場合は、この手順を繰り返し実施して、すべて異なる名称で設定してください。PFM - Agent for HiRDB は、一時的に作成するフォルダの名称にインスタンス名を使用します。このため、同一名称のインスタンスが複数存在する場合、タイミングによって内部ファイルの競合が発生し、誤った情報の収集や異常終了の原因となります。

設定するインスタンス情報を次の表に示します。セットアップの操作を始める前に、これらの情報をあらかじめ確認してください。HiRDB のインスタンス情報の詳細については、HiRDB のマニュアルを参照してください。

表 3-4 PFM - Agent for HiRDB のインスタンス情報

項目	説明	設定できる値	デフォルト値
PDDIR	監視対象の HiRDB システムのシステムマネージャを含む HiRDB ユニットの HiRDB 運用ディレクトリのパス（環境変数 PDDIR の値）。	200 バイト以内のパス名	なし
PDCONFPATH	監視対象の HiRDB システムのシステムマネージャを含む HiRDB ユニットの環境変数 PDCONFPATH の値。 「PDDIR の値/conf」が設定されます。	512 バイト以内のパス名	
HiRDB_user	DBA 権限を持つ HiRDB 認可識別子。大文字と小文字を区別する場合は全体を"（引用符）で囲んでください。囲まなければすべて大文字として扱われます。	10 バイト以内の文字列	
HiRDB_password	HiRDB_user に対応するパスワード。大文字と小文字を区別する場合は全体を"（引用符）で囲んでください。囲まなければすべて大文字として扱われます。	32 バイト以内の文字列	
LANG	監視対象の HiRDB で使用する文字コードに対応する OS のロケール。※	256 バイト以内の文字列	
HiRDB_admin	HiRDB 管理者。大文字と小文字を区別する場合でも"（引用符）で囲まないでください。	8 バイト以内の文字列	
Store Version	Store バージョン。	{1.0 2.0}	2.0

注※

HiRDB サーバの文字コード (HiRDB の pdsetup, または pdntenv で指定した文字コード) に従って設定します。対応するロケールが OS ない場合は、HiRDB クライアント環境定義 PDLANG を設定してから、PFM - Agent for HiRDB を起動してください。詳細は、マニュアル「HiRDB UAP 開発ガイド」の「UAP 実行時の注意事項」について説明している章を参照してください。

HiRDB サーバの文字コードは、HiRDB の pdadmvr -c で確認できます。pdadmvr については、マニュアル「HiRDB コマンドリファレンス」を参照してください。

設定できる組み合わせは次のとおりです。

なお、環境変数 LANG の値は任意です。「3.4.1 LANG 環境変数の設定」の表に従って設定してください。

HP-UX の場合

HiRDB サーバの文字コード 種別	jpcconf inst setup コマンドで設定する LANG	HiRDB クライアント環境定義 PDLANG	環境変数 LANG
lang-c	C	(設定しない)	任意
sjis	ja_JP.SJIS	(設定しない)	任意
ujis	ja_JP.eucJP	(設定しない)	任意
chinese	C	CHINESE	任意
utf-8 または utf-8_ivs	ja_JP.utf8	UTF-8	任意
chinese-gb18030	C	CHINESE-GB18030	任意

AIX の場合

HiRDB サーバの文字コード 種別	jpcconf inst setup コマンド で設定する LANG	HiRDB クライアント環境定義 PDLANG	環境変数 LANG
lang-c	C	(設定しない)	任意
sjis	Ja_JP	(設定しない)	任意
ujis	ja_JP	(設定しない)	任意
chinese	C	CHINESE	任意
utf-8 または utf-8_ivs	JA_JP または JA_JP.UTF-8	UTF-8	任意
chinese-gb18030	C	CHINESE-GB18030	任意

Linux の場合

HiRDB サーバの文字コード 種別	jpcconf inst setup コマン ドで設定する LANG	HiRDB クライアント環境定義 PDLANG	環境変数 LANG
lang-c	C	(設定しない)	任意
sjis	C	SJIS	任意
ujis	ja_JP または ja_JP.eucJP	(設定しない)	任意

HiRDB サーバの文字コード種別	jpcconf inst setup コマンドで設定する LANG	HiRDB クライアント環境定義 PDLANG	環境変数 LANG
chinese	C	CHINESE	任意
utf-8 または utf-8_ivs	ja_JP.UTF-8 または ja_JP.utf8	UTF-8	任意
chinese-gb18030	C	CHINESE-GB18030	任意

インスタンス環境を構築するには、 `jpcconf inst setup` コマンドを使用します。インスタンス環境の構築手順を次に示します。

1. サービスキーおよびインスタンス名を指定して、 `jpcconf inst setup` コマンドを実行する。

例えば、 PFM - Agent for HiRDB のインスタンス名 HRD1 のインスタンス環境を構築する場合、 次のように指定してコマンドを実行します。

```
jpcconf inst setup -key HiRDB -inst HRD1
```

agt : HiRDB エージェントを示します。

`jpcconf inst setup` コマンドの詳細については、 マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」を参照してください。

2. HiRDB のインスタンス情報を設定する。

表 3-4 に示した項目を、 コマンドの指示に従って入力してください。各項目とも省略できません。

すべての入力が終了すると、 インスタンス環境が構築されます。構築時に入力したインスタンス情報を変更したい場合は、 再度 `jpcconf inst setup` コマンドを実行し、 インスタンス環境を更新してください。インスタンス環境の更新については、「[3.7.3 インスタンス環境の更新](#)」を参照してください。

構築されるインスタンス環境を次に示します。

- インスタンス環境のディレクトリ構成

次のディレクトリ下にインスタンス環境が構築されます。

物理ホストの場合 : /opt/jp1pc/agt

論理ホストの場合 : 環境ディレクトリ*/agt

注※

環境ディレクトリとは、 論理ホスト作成時に指定した共有ディスク上のディレクトリです。

構築されるインスタンス環境のディレクトリ構成を次の表に示します。

表 3-5 インスタンス環境のディレクトリ構成

ディレクトリ名・ファイル名			説明
agent	インスタンス名	jpcagt.ini	Agent Collector サービス起動情報ファイル
		jpcagt.ini.model*	Agent Collector サービス起動情報ファイルのモデルファイル

3. インストールとセットアップ (UNIX の場合)

ディレクトリ名・ファイル名		説明	
agent	インスタンス名	jpcagtbdef.ini	インスタンス設定ファイル
		jpcagtbdef.ini.model※	インスタンス設定ファイルのモデルファイル
		inssetup	インスタンス設定用スクリプトファイル
		log	ログファイル格納ディレクトリ
store	インスタンス名	jpcsto.ini	Agent Store サービス起動情報ファイル
		jpcsto.ini.model※	Agent Store サービス起動情報ファイルの初期化用ファイル
		*.DAT	データモデル定義ファイル
		dump	エクスポート先ディレクトリ
		backup	バックアップ先ディレクトリ
		log	ログファイル格納ディレクトリ
		partial	標準のデータベース部分バックアップ先ディレクトリ (Store バージョン 2.0 の場合)
		import	標準のデータベースインポート先ディレクトリ (Store バージョン 2.0 の場合)
		STPD	PD レコードタイプのパフォーマンスデータ格納先ディレクトリ (Store バージョン 2.0 の場合)
		STPI	PI レコードタイプのパフォーマンスデータ格納先ディレクトリ (Store バージョン 2.0 の場合)
		STPL	PL レコードタイプのパフォーマンスデータ格納先ディレクトリ (Store バージョン 2.0 の場合)

注※

インスタンス環境を構築する前の時点の設定値に戻したいときに使います。

- インスタンス環境のサービス ID

インスタンス環境のサービス ID は次のようにになります。

プロダクトID 機能ID インスタンス番号 インスタンス名 [ホスト名]

PFM - Agent for HiRDB の場合、インスタンス名には jpcconf inst setup コマンドで指定したインスタンス名が表示されます。

サービス ID については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、付録を参照してください。

(1) インスタンス設定ファイルを作成する

インスタンス設定ファイル (/opt/jp1pc/agt/agent/インスタンス名/jpcagtbdef.ini) に次の構成および情報を設定します。

- HiRDB 運用ディレクトリに関する情報
- HiRDB/パラレルサーバの構成
- HiRDB のシステムマネージャが稼働しないホストに関する情報
- PD_ROT1, PD_ROT2 レコードの収集に関する情報
- PI_RDST, PI_RDDS レコード収集時の収集対象 RD エリアに関する情報
- PI_FSST レコード, PI_SSYS レコード, PI_RDFL レコードおよび PI_RDFS レコード収集時のリモート実行に関する情報
- PI_SSYS レコード, PI_RDFL レコードおよび PI_RDFS レコード収集時にに関する情報
- PFM-Agent for HiRDB がレコードを収集する上での共通機能オプション情報

なお、インスタンスを作成すると、jpcagtbdef.ini ファイルは初期化されます。

インスタンス設定ファイルのフォーマットを次の図に示します。

図 3-5 インスタンス設定ファイル jpcagtbdef.ini のフォーマット (UNIX の場合)

```
[PDDIR]
ユニット識別子1=ユニット識別子1の環境変数PDDIRの値
ユニット識別子2=ユニット識別子2の環境変数PDDIRの値
ユニット識別子3=ユニット識別子3の環境変数PDDIRの値
:

[PDCONFPATH]
ユニット識別子1=ユニット識別子1の環境変数PDCONFPATHの値
ユニット識別子2=ユニット識別子2の環境変数PDCONFPATHの値
ユニット識別子3=ユニット識別子3の環境変数PDCONFPATHの値
:

[ROT1_Options]
Option_c=基準値定義ファイルの絶対パス (PD_ROT1用)
Option_R=監視期間 [, メンテナンス延長期間] (PD_ROT1用)

[ROT2_Options]
Option_c=基準値定義ファイルの絶対パス (PD_ROT2用)
Option_R=監視期間 [, メンテナンス延長期間] (PD_ROT2用)

[RDST_RDAREA]
RDAREA_NAME=収集対象RDエリア名1 [, 収集対象RDエリア名2] … (PI_RDST用)

[RDDS_RDAREA]
RDAREA_NAME=収集対象RDエリア名1 [, 収集対象RDエリア名2] … (PI_RDDS用)

[REMOTE_OPERATION_FOR_ACTIVITY]
SETTING=ON

[NOT_EXECUTE_PDSTJSYNC]
SETTING=ON

[COMMON_OPTION]
OPTIMIZE_LEVEL=1
CMD_RMODE=ssh
CMD_RCONFIG=SSH クライアント設定ファイル
```

注意

- 各情報は「ラベル=値」という形式で指定します。ラベルの前後、および値の前後には、余分な文字（空白文字、引用符など）を記述しないでください。
- 1カラム目が「;」（半角セミコロン）の行はコメント行です。
- PDDIR セクション
2ユニット以上の HiRDB/パラレルサーバを監視する場合に指定します。
ユニット名と PDDIR を指定します。次の条件をすべて満たす場合は、該当するユニットに PDDIR を設定してください。
 - PI_FSST, PI_SSYS, PI_RDFL、または PI_RDFS レコードを収集する場合
 - HiRDB システム共通定義ファイル (pdsys ファイル) の pdunit オペランドに-d オプションの指定がない場合

この指定がない場合、HiRDB のシステムマネージャが稼働しないホストに存在するユニットの作業表用 HiRDB ファイルシステム領域の情報や統計情報を収集しません。

PDDIR セクションに設定するラベルと値を次に示します。

表 3-6 PDDIR セクションに設定するラベルと値

ラベル	値
ユニット識別子	「ユニット識別子」で示される HiRDB ユニットの環境変数 PDDIR の値を指定する。

- PDCONFPATH セクション
2ユニット以上の HiRDB/パラレルサーバを監視する場合に指定します。
ユニット名と PDCONFPATH を指定します。PI_FSST, PI_SSYS, PI_RDFL、または PI_RDFS レコードを収集する場合に必要です。
この指定がない場合、HiRDB のシステムマネージャが稼働しないホストに存在するユニットの作業表用 HiRDB ファイルシステム領域の情報や統計情報を収集しません。
PDCONFPATH セクションに設定するラベルと値を次に示します。

表 3-7 PDCONFPATH セクションに設定するラベルと値

ラベル	値
ユニット識別子	「ユニット識別子」で示される HiRDB ユニットの環境変数 PDCONFPATH の値を指定する。

- ROT1_Options セクション
PD_ROT1_Options セクションには、PD_ROT1 収集時に実行する、pddbse -k pred コマンドのコマンドオプションを指定します。省略すると、監視期間または基準定義ファイルが指定されていない状態の情報が収集されます。

表 3-8 PD_ROT1 セクションに設定するラベルと値

ラベル	値
Option_c	pddbst -k pred コマンドの-c オプションに使用する「基準値定義ファイル」の絶対パス (590 バイト以内) を指定する。
Option_R	pddbst -k pred コマンドの-R オプションに使用する「監視期間」および「メンテナス延長期間」を指定する。

- ROT2_Options セクション

PD_ROT2_Options セクションには、PD_ROT2 収集時に実行する、pddbst -k pred コマンドオプションを指定します。省略すると、監視期間または基準定義ファイルが指定されていない状態の情報が収集されます。

表 3-9 PD_ROT2 セクションに設定するラベルと値

ラベル	値
Option_c	pddbst -k pred コマンドの-c オプションに使用する「基準値定義ファイル」の絶対パス (590 バイト以内) を指定する。
Option_R	pddbst -k pred コマンドの-R オプションに使用する「監視期間」および「メンテナス延長期間」を指定する。

- RDST_RDAREA セクション

RDST_RDAREA セクションには、PI_RDST レコード収集時にデータ収集したい RD エリア名を、コンマ区切りで指定します。指定した RD エリアに関するパフォーマンスデータが収集されます。

HiRDB の pddbls コマンドと同様に、RD エリア名は RD エリア名一括指定ができます。

RD エリア名一括指定については、マニュアル「HiRDB コマンドリファレンス」を参照してください。RD エリア名は重複して指定できません。RD エリア名を重複指定した場合、重複排除をした RD エリアに関するパフォーマンスデータが収集されます。

例えば、RDST_RDAREA セクションに RD エリア名を指定する場合は次のようにになります。

- HiRDB 環境の RD エリアの構成：

RDMAST, RDDIRT, RDDICT, RDDATA10, RDDATA20, RDDATA30, RDINDEX10, RDINDEX20, RDINDEX30

- RDST_RDAREA セクションの指定：

[RDST_RDAREA]

RDAREA_NAME=RDMAST,RDDATA10,RDDATA*,*RDDATA*

- PI_RDST レコードで収集対象となる RD エリア：

RDMAST, RDDATA10, RDDATA20, RDDATA30

注意事項

- RD エリア名はアポストロフィ('), 引用符("), エスケープ文字+引用符(¥")などの区切り文字を指定しないでください。

- RD エリア名の前方および後方に空白文字を含む RD エリアについては、動作が保証されません。
- RDAREA_NAME ラベルに値を指定していない場合は、すべての RD エリアに関するパフォーマンスデータが収集されます。
- RDAREA_NAME ラベルの一部の指定に誤りがある場合は、正しく設定された RD エリアに関するパフォーマンスデータだけが収集されます。

表 3-10 RDST_RDAREA セクションに設定するラベルと値

ラベル	値
RDAREA_NAME	PI_RDST レコード収集時にデータを収集したい RD エリア名をコンマ区切りで指定する。設定できるサイズはラベル名 (RDAREA_NAME) を含む 8,192 バイト以内。

- RDDS_RDAREA セクション

RDDS_RDAREA セクションには、PI_RDDS レコード収集時にデータ収集したい RD エリア名を、コンマ区切りで指定します。指定した RD エリアに関するパフォーマンスデータが収集されます。

HiRDB の pddbls コマンドと同様に、RD エリア名は RD エリア名一括指定ができます。

RD エリア名一括指定については、マニュアル「HiRDB コマンドリファレンス」を参照してください。RD エリア名は重複して指定できません。RD エリア名を重複指定した場合、重複排除をした RD エリアに関するパフォーマンスデータが収集されます。

例えば、RDDS_RDAREA セクションに RD エリア名を指定する場合は次のようになります。

- HiRDB 環境の RD エリアの構成：

RDMAST, RDDIRT, RDDICT, RDDATA10, RDDATA20, RDDATA30, RDIDX10, RDIDX20, RDIDX30

- RDDS_RDAREA セクションの指定：

[RDDS_RDAREA]

RDAREA_NAME=RDMAST,RDDATA10,RDDATA*,*RDDATA*

- PI_RDDS レコードで収集対象となる RD エリア：

RDMAST, RDDATA10, RDDATA20, RDDATA30

注意事項

- RD エリア名はアポストロフィ('), 引用符("), エスケープ文字 + 引用符(¥")などの区切り文字を指定しないでください。
- RD エリア名の前方および後方に空白文字を含む RD エリアについては、動作が保証されません。
- RDAREA_NAME ラベルに値を指定していない場合は、すべての RD エリアに関するパフォーマンスデータが収集されます。

- RDAREA_NAME ラベルの一部の指定に誤りがある場合は、正しく設定された RD エリアに関するパフォーマンスデータだけが収集されます。

表 3-11 RDDS_RDAREA セクションに設定するラベルと値

ラベル	値
RDAREA_NAME	PI_RDDS レコード収集時にデータを収集したい RD エリア名をコンマ区切りで指定する。設定できるサイズはラベル名 (RDAREA_NAME) を含む 8,192 バイト以内。

• REMOTE_OPERATION_FOR_ACTIVITY セクション

HiRDB/パラレルサーバで、稼働している HiRDB ユニットのパフォーマンスデータだけを取得するときに、「SETTING=ON」を指定します。デフォルトは指定なしです。

「SETTING=ON」を指定すると、HiRDB のシステムマネージャが存在するホストからほかのホストに対して、パフォーマンスデータを取得するコマンドがリモート実行されます。パフォーマンスデータの取得がシステムマネージャの稼働が前提となるため、ネットワークとログの容量の負荷を軽減できます。指定を省略すると、システムマネージャが停止している場合でも、HiRDB/パラレルサーバを構成する各サーバのパフォーマンスデータが取得されます。システムマネージャが停止していても、ほかの HiRDB サーバのパフォーマンスデータを継続して取得できますが、ネットワークとログの容量の負荷が高くなることがあります。

このセクションは、インスタンス単位に設定できますが、レコード単位には設定できません。

レコードの種類によってリモート実行する判断方法が異なります。

REMOTE_OPERATION_FOR_ACTIVITY セクションに設定するラベルと値を次の表に示します。

表 3-12 REMOTE_OPERATION_FOR_ACTIVITY セクションに設定するラベルと値

ラベル	値
SETTING	PI_FSST レコード収集時に、ユニットのステータスが ACTIVE であるホストに対してだけリモート実行する場合に「ON」と指定する。 コマンドを実行できない状態 (pdls -d svr コマンドの実行結果が KFPS01853-W) のホストには、リモート実行されません。

HiRDB の状態 (pdls -d svr コマンドの実行結果) および

REMOTE_OPERATION_FOR_ACTIVITY セクションの設定と、リモート実行されるかどうかの関係を次の表に示します。

表 3-13 HiRDB の状態および REMOTE_OPERATION_FOR_ACTIVITY セクションの設定とリモート実行有無の関係

システムマネージャのホスト	システムマネージャ以外のホスト	REMOTE_OPERATION_FOR_ACTIVITY	リモート実行有無
コマンド実行可 (KFPS01853-W が出力されない)	ACTIVE	SETTING=ON	○
		上記以外 (指定なしも含む)	○
	上記以外	SETTING=ON	×
		上記以外 (指定なしも含む)	○
コマンド実行不可 (KFPS01853-W が出力される)	ACTIVE	SETTING=ON	×
		上記以外 (指定なしも含む)	○
	上記以外	SETTING=ON	×
		上記以外 (指定なしも含む)	○

(凡例)

○：リモート実行します

×：リモート実行しません

REMOTE_OPERATION_FOR_ACTIVITY セクションの設定内容のメリットおよびデメリットを次の表に示します。

表 3-14 REMOTE_OPERATION_FOR_ACTIVITY セクションの設定内容のメリットおよびデメリット

REMOTE_OPERATION_FOR_ACTIVITY	メリット	デメリット
SETTING=ON	PFM - Agent for HiRDB が実行するリモート実行で、ネットワーク障害などによって不要な負荷が掛からない（ただし、HiRDB サーバのユニット間通信の監視で起こるタイムラグによるステータス誤認識を除く）。	システムマネージャが停止していると、ユニット全体のパフォーマンスデータが収集されない。 また、システムマネージャが稼働していて、システムマネージャ以外のユニットが停止している場合、そのシステムマネージャ以外のユニットに対するパフォーマンスデータは収集されない。
上記以外 (指定なしも含む)	HiRDB/パラレルサーバ内のシステムマネージャが停止していても、ユニット全体のパフォーマンスデータが収集される。	PFM - Agent for HiRDB が実行するリモート実行で、ネットワーク障害などによって不要な負荷が掛かることがある。

- NOT_EXECUTE_PDSTJSYNC セクション

PFM-Agent for HiRDB は、システムの稼働に関する統計情報 (sys 統計情報) やデータベース操作に関する HiRDB ファイルの統計情報 (fil 統計情報) を取得するため、pdstjsync コマンドを実行します。pdstjsync コマンドには、コマンド実行時点での sys 統計情報の取得を抑止し、指定した時間間隔でだけ sys 統計情報を取得するオプション (-m オプション) があります。-m オプションを省略すると、

指定した時間間隔とは別に、コマンド実行時点の sys 統計情報が取得され、異なる時間間隔の sys 統計情報が混在することがあります。そのため、PFM-Agent for HiRDB は-m オプション付きの動作で統計情報を取得しています。

ただし、pdstjsync コマンドの-m オプションをサポートしていない HiRDB を使用する場合は、上記の統計情報の混在が起こります。この混在を防止するため、pdstjsync コマンドの実行を抑止する場合に、NOT_EXECUTE_PDSTJSYNC セクションに「SETTING=ON」と指定します。指定すると、PI_SSYS レコード、PI_RDFL レコードおよび PI_RDFS レコード収集時に、pdstjsync コマンドの実行による異なる時間間隔の sys 統計情報の混在を防止できます。

NOT_EXECUTE_PDSTJSYNC セクションは、-m オプションをサポートしていない HiRDB 用の指定であるため、pdstjsync コマンドの-m オプションをサポートしている HiRDB の場合、NOT_EXECUTE_PDSTJSYNC セクションの指定値は無視されます。

pdstjsync コマンドの-m オプションをサポートしていない HiRDB の場合、「SETTING=ON」以外の値を指定すると、エラーメッセージが output されますが、指定は無視され処理は続行されます。

このセクションは、インスタンス単位に設定できますが、レコード単位には設定できません。

NOT_EXECUTE_PDSTJSYNC セクションに設定するラベルと値を次の表に示します。

表 3-15 NOT_EXECUTE_PDSTJSYNC セクションに設定するラベルと値

ラベル	値
SETTING	PI_SSYS レコード、PI_RDFL レコードおよび PI_RDFS レコード収集時に、pdstjsync コマンドの-m オプションをサポートしていない HiRDB を使用している、pdstjsync コマンドを実行したくない場合に、「ON」と指定する。

NOT_EXECUTE_PDSTJSYNC セクションには、SETTING=ON の指定を推奨します。なお、使用的 HiRDB のバージョンと NOT_EXECUTE_PDSTJSYNC セクションの設定によって、pdstjsync コマンドの実行有無が変わります。その内容を次の表に示します。

表 3-16 HiRDB のバージョンでの pdstjsync コマンド実行有無

推奨順	HiRDB のバージョン	NOT_EXECUTE_PDSTJSYNC	pdstjsync コマンド実行有無
1	pdstjsync コマンドの-m オプションをサポートしているバージョンの HiRDB	SETTING=ON	◎
		上記以外（指定なしも含む）	◎
2	pdstjsync コマンドの-m オプションをサポートしていないバージョンの HiRDB	SETTING=ON	×
		上記以外（指定なしも含む）	○*

(凡例)

◎ : pdstjsync コマンドの-m オプションを実行します

○ : pdstjsync コマンドを実行します

× : pdstjsync コマンドを実行しません

注※

指定に誤りがある場合だけ、エラーメッセージが出力されます。

`pdstjsync` コマンドの`-m` オプションをサポートしていない HiRDB の場合の、`NOT_EXECUTE_PDSTJSYNC` セクションの指定内容のメリットおよびデメリットを次の表に示します。

表 3-17 `NOT_EXECUTE_PDSTJSYNC` セクションの指定内容のメリットおよびデメリット
(`pdstjsync` コマンド `-m` オプション未サポートの HiRDB の場合)

<code>NOT_EXECUTE_PDSTJSYNC</code>	メリット	デメリット
<code>SETTING=ON</code>	HiRDB の sys 統計情報を出力する時間間隔以外に sys 統計情報が出力されない。	収集契機が直近の、 HiRDB の sys 統計情報および fil 統計情報を収集できない。
上記以外 (指定なしも含む)	収集契機が直近の、 HiRDB の sys 統計情報および fil 統計情報を収集できる。	HiRDB の sys 統計情報を出力する時間間隔以外にも sys 統計情報が出力される。

- COMMON_OPTION セクション

COMMON_OPTION セクションには、 PFM-Agent for HiRDB がレコードを収集する上で共通機能オプションを指定します。`OPTIMIZE_LEVEL` は、 `PI_RDST` および `PI_RDDS` レコード収集時のオプションです。`CMD_RMODE` および `CMD_RCONFIG` は、 `PI_FSST`, `PI_SSYS`, `PI_RDFL`, および `PI_RDFS` レコード収集時のオプションです。

表 3-18 COMMON_OPTION セクションに設定するラベルと値

ラベル	値	機能
<code>OPTIMIZE_LEVEL</code> *	0	最適化オプションが無効になる (デフォルト (指定なしも含む))。
	1	RD エリア数が 1,000 個以上の HiRDB 環境にて、 <code>PI_RDST</code> , <code>PI_RDDS</code> レコードの収集時間の短縮を見込むことができるグローバルバッファ名取得処理高速化オプションが有効になる。本機能は RD エリア数にだけ依存し、 グローバルバッファ数には依存しない。なお、 インスタンス単位の設定となり、 レコード単位の設定はできない。
	上記以外	KAVF15068-W メッセージを出力し、 0 を指定した場合と同じになる。
<code>CMD_RMODE</code>	rsh	rsh, scp コマンドを使用してリモート実行やファイル転送をする (デフォルト (指定なしも含む))。
	ssh	ssh, scp コマンドを使用してリモート実行やファイル転送をする。
	上記以外	KAVF15077-W メッセージを出力し、 rsh を指定した場合と同じになる。
<code>CMD_RCONFIG</code>	SSH クライアント設定ファイル	このオプションは、 <code>CMD_RMODE</code> に ssh を指定した場合に有効になる。 リモート実行やファイル転送で ssh, scp コマンドを使用する場合に、 コマンドに指定する SSH クライアント設定ファイルを絶対パス名 (255 文字以内) で指定する。指定したファイルは、 プログラム内で、 ssh, scp コマンドの <code>-F</code> オプションに指定されて動作する。 SSH クライアント設定ファイルは、 HiRDB 管理者に参照権限があるものとし、 監視するすべてのサーバマシンで、 同一の絶対パス名で格納すること。

ラベル	値	機能
CMD_RCONFIG	SSH クライアント設定ファイル	<p>SSH クライアント設定ファイルは、 ssh, scp コマンドを実行する場合に、 ユーザ設定ファイル (<code>~/.ssh/config</code>) やシステム全体の設定ファイル (<code>/etc/ssh/ssh_config</code>) とは異なる設定を適用したいときに指定する。</p> <p>SSH クライアント設定ファイルに、 User を指定する場合は、 root を指定すること。</p> <p>詳細は OS のマニュアルを参照のこと。</p>

注※

OPTIMIZE_LEVEL の値には半角数字を指定してください。

(2) 2 ユニット以上の HiRDB/パラレルサーバを監視する場合の設定

PFM - Agent for HiRDB のインスタンスで 2 ユニット以上の HiRDB/パラレルサーバを監視する場合、 rsh, rcp や ssh, scp を使用します。HiRDB のシステムマネージャが稼働する HiRDB ホストと HiRDB のシステムマネージャが稼働しない HiRDB ホストとの間で、コマンドのリモート実行やファイル転送をします。

HiRDB のシステムマネージャが稼働する HiRDB ホストと HiRDB のシステムマネージャが稼働しない HiRDB ホストとの間では、 root および HiRDB 管理者で相互にログインができるようにしてください。

また、 HiRDB のシステムマネージャが稼働する HiRDB ホストから稼働しない HiRDB ホストへは、 root から HiRDB 管理者としてもログインできるようにしてください。

ログインの設定については、次の表を参照してください。

rsh, rcp を使用する場合は、 `/etc/hosts.equiv` または `$HOME/.rhosts` を設定してください。

なお、 `$HOME/.cshrc` ファイルを作成する場合、 登録端末がないときは標準出力または標準エラーファイルにデータを出力しない構造にしてください。

ssh, scp を使用する場合は、 監視するすべてのサーバマシンで SSH プロトコルを利用できるように設定する必要があります。ログイン時にパスワードやパスフレーズの入力など、プロンプトに入力をしなくてもログインできるよう設定してください。

また、 標準エラー出力に情報が出力されると失敗と判断するため、 ssh が標準エラー出力に情報を出力しないよう設定してください（LogLevel に VERBOSE 以上を設定するなど）。詳細は OS のマニュアルを参照してください。

この設定をしない場合、 PFM - Agent for HiRDB が HiRDB のシステムマネージャ以外のユニットの情報を収集できないおそれがあります。

表 3-19 root から HiRDB 管理者としてログインするためには必要な設定

転送元	転送先	必要な設定
MGR の root	非 MGR の root	プロンプトに入力しなくともログインできる設定
	非 MGR の HiRDB 管理者	プロンプトに入力しなくともログインできる設定
MGR の HiRDB 管理者	非 MGR の root	設定不要
	非 MGR の HiRDB 管理者	プロンプトに入力しなくともログインできる設定
非 MGR の root	MGR の root	プロンプトに入力しなくともログインできる設定
	MGR の HiRDB 管理者	設定不要
非 MGR の HiRDB 管理者	MGR の root	設定不要
	MGR の HiRDB 管理者	プロンプトに入力しなくともログインできる設定

(凡例)

MGR : HiRDB のシステムマネージャが稼働する HiRDB ホスト

非 MGR : HiRDB のシステムマネージャが稼働しない HiRDB ホスト

3.4.4 ネットワークの設定 ◇オプション

Performance Management を使用するネットワーク構成に応じて、変更する場合にだけ必要な設定です。

ネットワークの設定では次の 3 つの項目を設定できます。

- IP アドレスを設定する

Performance Management を複数の LAN に接続されたネットワークで使用するときに設定します。複数の IP アドレスを設定するには、jpchosts ファイルにホスト名と IP アドレスを定義します。設定した jpchosts ファイルは Performance Management システム全体で統一させてください。

詳細についてはマニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

- ポート番号を設定する

Performance Management が使用するポート番号を設定できます。運用での混乱を避けるため、ポート番号とサービス名は、Performance Management システム全体で統一させてください。

ポート番号の設定の詳細についてはマニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

- ファイアウォールを設定する

ファイアウォールを有効にした環境で運用する場合、インストールしたあとで、実行に必要なポート番号をファイアウォールの規則に登録して、ファイアウォールを透過できるように設定してください。

ファイアウォール環境でのポート番号の設定方法は、「[付録 E.4 Linux 環境でのファイアウォール設定方法 \(iptables, ip6tables が有効な場合\)](#)」または「[付録 E.5 Linux 環境でのファイアウォール設定方法 \(firewalld が有効な場合\)](#)」を参照してください。

3.4.5 ログのファイルサイズ変更 オプション

Performance Management の稼働状況を、Performance Management 独自のログファイルに出力します。このログファイルを「共通メッセージログ」と呼びます。このファイルサイズを変更したい場合にだけ、必要な設定です。

詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

3.4.6 パフォーマンスデータの格納先の変更 オプション

PFM - Agent for HiRDB で管理されるパフォーマンスデータを格納するデータベースの保存先、バックアップ先またはエクスポート先のディレクトリを変更したい場合にだけ、必要な設定です。

パフォーマンスデータは、デフォルトで、次の場所に保存されます。

- 保存先 : /opt/jp1pc/agtbt/store/インスタンス名/
- バックアップ先 : /opt/jp1pc/agtbt/store/インスタンス名/backup/
- 部分バックアップ先※ : /opt/jp1pc/agtbt/store/インスタンス名/partial/
- エクスポート先 : /opt/jp1pc/agtbt/store/インスタンス名/dump/
- インポート先※ : /opt/jp1pc/agtbt/store/インスタンス名/import/

注※

Store バージョン 2.0 使用時だけ設定できます。

注意事項

論理ホストで運用する場合のデフォルトの保存先については、「/opt/jp1pc」を「環境ディレクトリ/jp1pc」に読み替えてください。

詳細については、「[3.7.1 パフォーマンスデータの格納先の変更](#)」を参照してください。

3.4.7 PFM - Agent for HiRDB の接続先 PFM - Manager の設定

PFM - Agent がインストールされているホストで、その PFM - Agent を管理する PFM - Manager を設定します。接続先の PFM - Manager を設定するには、`jpcconf mgrhost define` コマンドを使用します。

注意事項

- 同一ホスト上に、複数の PFM - Agent がインストールされている場合でも、接続先に指定できる PFM - Manager は、1つだけです。PFM - Agent ごとに異なる PFM - Manager を接続先に設定することはできません。
- PFM - Agent と PFM - Manager が同じホストにインストールされている場合、接続先 PFM - Manager はローカルホストの PFM - Manager となります。この場合、接続先の PFM - Manager をほかの PFM - Manager に変更できません。

手順を次に示します。

1. Performance Management のプログラムおよびサービスを停止する

セットアップを実施する前に、ローカルホストで Performance Management のプログラムおよびサービスが起動されている場合は、すべて停止してください。サービスの停止方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、サービスの起動と停止について説明している章を参照してください。

`jpcconf mgrhost define` コマンド実行時に、Performance Management のプログラムおよびサービスが起動されている場合は、停止を問い合わせるメッセージが表示されます。

2. 接続先の PFM - Manager ホストのホスト名を指定して、`jpcconf mgrhost define` コマンドを実行する

例えば、接続先の PFM - Manager がホスト host01 上にある場合、次のように指定します。

```
jpcconf mgrhost define -host host01
```

3.4.8 動作ログ出力の設定 ◎オプション◎

PFM サービスの起動・停止時や、PFM - Manager との接続状態の変更時に動作ログを出力したい場合に必要な設定です。動作ログとは、システム負荷などのしきい値オーバーに関するアラーム機能と連動して出力される履歴情報です。

設定方法については、「[付録 J 動作ログの出力](#)」を参照してください。

3.5 アンインストール

ここでは、PFM - Agent for HiRDB をアンインストールおよびアンセットアップする手順を示します。

3.5.1 アンインストール前の注意事項

ここでは、PFM - Agent for HiRDB をアンインストールおよびアンセットアップするときの注意事項を次に示します。

(1) アンインストールに必要な OS ユーザー権限に関する注意事項

Performance Management プログラムをアンインストールしても、`services` ファイルに定義されたポート番号は削除されません。

また、ファイアウォールの規則に登録したポート番号を削除する必要があります。削除方法は、「[付録 E.7 Linux 環境でのファイアウォール設定削除方法 \(iptables, ip6tables が有効な環境\)](#)」または「[付録 E.8 Linux 環境でのファイアウォール設定削除方法 \(firewalld が有効な環境\)](#)」を参照してください。

(2) ネットワークに関する注意事項

Performance Management プログラムをアンインストールしても、`services` ファイルに定義されたポート番号は削除されません。

(3) プログラムに関する注意事項

- Performance Management のプログラムおよびサービスや、Performance Management のファイルを参照するような他プログラムを起動したままアンインストールした場合、ファイルやディレクトリが残ることがあります。この場合は、手動でインストール先ディレクトリ以下をすべて削除してください。
- PFM - Base と PFM - Agent がインストールされているホストの場合、PFM - Base のアンインストールは PFM - Agent をアンインストールしないと実行できません。この場合、PFM - Agent → PFM - Base の順にアンインストールしてください。また、PFM - Manager と PFM - Agent がインストールされているホストの場合も同様に、PFM - Manager のアンインストールは PFM - Agent をアンインストールしないと実行できません。この場合、PFM - Agent → PFM - Manager の順にアンインストールしてください。

(4) サービスに関する注意事項

PFM - Agent をアンインストールしただけでは、`jptool service list` コマンドで表示できるサービスの情報は削除されません。サービス情報の削除方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」のインストールとセットアップの章にあるサービスの削除の説明を参照してください。

(5) その他の注意事項

- PFM - Web Console がインストールされているホストから、Performance Management プログラムをアンインストールする場合は、Web ブラウザの画面をすべて閉じてからアンインストールを実施してください。
- アンインストールを実行する前に `jpcconf inst setup` コマンドまたは PFM - Web Console で、エージェントログの出力先ディレクトリを確認してください。エージェントログの出力先をデフォルト値 (`/opt/jp1pc/agtbt/store/インスタンス名/log/`) 以外に設定している場合、アンインストールしてもエージェントログファイルは削除されません。この場合、アンインストール実行後にエージェントログファイルを手動で削除してください。

3.5.2 インスタンス環境のアンセットアップ

インスタンス環境をアンセットアップするには、まず、インスタンス名を確認し、インスタンス環境を削除します。インスタンス環境の削除は、PFM - Agent ホストで実施します。

インスタンス名を確認するには、`jpcconf inst list` コマンドを使用します。また、構築したインスタンス環境を削除するには、`jpcconf inst unsetup` コマンドを使用します。

インスタンス環境を削除する手順を次に示します。

1. インスタンス名を確認する。

PFM - Agent for HiRDB を示すサービスキーを指定して、`jpcconf inst list` コマンドを実行します。

```
jpcconf inst list -key HiRDB
```

設定されているインスタンス名が HRD1 の場合、HRD1 と表示されます。

2. インスタンス環境の PFM - Agent のサービスが起動されている場合は、停止する。

サービスの停止方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、サービスの起動と停止について説明している章を参照してください。

3. インスタンス環境を削除する。

PFM - Agent for HiRDB を示すサービスキーおよびインスタンス名を指定して、`jpcconf inst unsetup` コマンドを実行します。

設定されているインスタンス名が HRD1 の場合、次のように指定します。

```
jpcconf inst unsetup -key HiRDB -inst HRD1
```

`jpcconf inst unsetup` コマンドが正常終了すると、インスタンス環境として構築されたディレクトリ、サービス ID が削除されます。

注意

インスタンス環境をアンセットアップしても、jpctool service list コマンドで表示できるサービスの情報は削除されません。この場合、jpctool service delete コマンドを使用してサービスの情報を削除してください。次に指定例を示します。

- インスタンス名 : HRD1
- ホスト名 : host01
- Agent Collector サービスのサービス ID : BA1HRD1[host01]
- Agent Store サービスのサービス ID : BS1HRD1[host01]

```
jpctool service delete -id サービスID -host host01
```

コマンドについては、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、コマンドについて説明している章を参照してください。

また、インスタンス環境をアンセットアップしても、ディレクトリおよびファイルが残ることがあります。その場合、必要に応じて削除してください。

アンセットアップ後に削除した方がよいディレクトリを次の表に示します。

表 3-20 アンセットアップ後に削除した方がよいディレクトリ (UNIX の場合)

ディレクトリ名	対象ホスト	ディレクトリが生成される場面
/opt/jp1pc/agtbt/agtbttmp/インスタンス名/	HiRDB システムマネジャホスト	次のレコードの収集時 • PD_ROT1 レコード • PD_ROT2 レコード
/opt/jp1pc/agtbt/cmdtmp/インスタンス名/	すべての HiRDB ホスト	任意のレコードの収集時※
/opt/jp1pc/agtbt/sttmp/HiRDB システムマネジャホスト名/インスタンス名/	すべての HiRDB ホスト	次のレコードの収集時 • PI_SSYS レコード • PI_RDFL レコード • PI_RDFS レコード
/opt/jp1pc/agtbt/svrtmp/インスタンス名/	HiRDB システムマネジャホスト	PI_FSST レコードの収集時

注※

OS が Linux の場合だけ生成されます。

3.5.3 接続先 PFM - Manager の解除

接続先 PFM - Manager を解除する場合は、対象の PFM - Manager に接続している PFM - Agent for HiRDB のサービス情報を削除する必要があります。

サービス情報の削除方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」のインストールとセットアップ (UNIX の場合) の章にある、サービス情報の削除手順について説明している個所を参照してください。

なお、接続先を別の PFM - Manager に変更する場合は、「[3.4.7 PFM - Agent for HiRDB の接続先 PFM - Manager の設定](#)」を参照してください。

3.5.4 アンインストール手順

PFM - Agent for HiRDB をアンインストールする手順を説明します。

1. Performance Management のプログラムをアンインストールするホストに、スーパーユーザーでログインするか、または su コマンドでユーザーをスーパーユーザーに変更する。

2. ローカルホストで Performance Management のプログラムおよびサービスを停止する。

サービス情報を表示して、サービスが起動されていないか確認してください。ローカルホストで Performance Management のプログラムおよびサービスが起動されている場合は、すべて停止してください。なお、停止するサービスは物理ホスト上および論理ホスト上のすべてのサービスです。

サービスの表示方法およびサービス情報の停止方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の起動と停止について説明している章を参照してください。

3. 次のコマンドを実行して、Hitachi PP Installer を起動する。

```
/etc/hitachi_setup
```

Hitachi PP Installer が起動され、初期画面が表示されます。

4. 初期画面で「D」を入力する。

アンインストールできるプログラムの一覧が表示されます。

5. アンインストールしたい Performance Management のプログラムを選択して、「D」を入力する。

選択したプログラムがアンインストールされます。なお、プログラムを選択するには、カーソルを移動させ、スペースキーで選択します。

6. アンインストールが正常終了したら、「Q」を入力する。

Hitachi PP Installer の初期画面に戻ります。

3.6 PFM - Agent for HiRDB のシステム構成の変更

監視対象システムのネットワーク構成の変更や、ホスト名の変更などに応じて、PFM - Agent for HiRDB のシステム構成を変更する場合があります。ここでは、Agent for HiRDB のシステム構成を変更する手順を説明します。

PFM - Agent for HiRDB のシステム構成を変更する場合、PFM - Manager や PFM - Web Console の設定もあわせて変更する必要があります。Performance Management のシステム構成を変更する手順の詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

物理ホスト名またはエイリアス名を変更するときに、固有の追加作業が必要な PFM - Agent もあります。が、PFM - Agent for HiRDB の場合、固有の追加作業は必要ありません。

なお、インスタンスをアンセットアップしないでホスト名を変更すると、不要なディレクトリおよびファイルが残ることがあります。その場合、必要に応じて削除してください。

ホスト名の変更後に削除した方がよいディレクトリを次の表に示します。

表 3-21 ホスト名の変更後に削除した方がよいディレクトリ (UNIX の場合)

ディレクトリ名	対象ホスト	ディレクトリが生成される場面
/opt/jp1pc/agtbsstmp/HiRDB システムマネジヤホスト名/インスタンス名/	すべての HiRDB ホスト	次のレコードの収集時 <ul style="list-style-type: none">• PI_SSYS レコード• PI_RDFL レコード• PI_RDFS レコード

3.7 PFM - Agent for HiRDB の運用方式の変更

収集した稼働監視データの運用手順の変更などで、 PFM - Agent for HiRDB の運用方式を変更する場合があります。ここでは、 PFM - Agent for HiRDB の運用方式を変更する手順を説明します。Performance Management 全体の運用方式を変更する手順の詳細についてはマニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、 インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

3.7.1 パフォーマンスデータの格納先の変更

PFM - Agent for HiRDB で収集したパフォーマンスデータは、 PFM - Agent for HiRDB の Agent Store サービスの Store データベースで管理しています。ここではパフォーマンスデータの格納先の変更方法について説明します。

(1) `jpcconf db define` コマンドを使用して設定を変更する

Store データベースで管理されるパフォーマンスデータの、 次のデータ格納先ディレクトリを変更したい場合は、 `jpcconf db define` コマンドで設定します。Store データベースの格納先ディレクトリを変更する前に収集したパフォーマンスデータが必要な場合は、 `jpcconf db define` コマンドの`-move` オプションを使用してください。`jpcconf db define` コマンドの詳細については、 マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」を参照してください。

- 保存先ディレクトリ
- バックアップ先ディレクトリ
- エクスポート先ディレクトリ
- 部分バックアップ先ディレクトリ※
- インポート先ディレクトリ※

注※ Store バージョン 2.0 使用時だけ設定できます。

`jpcconf db define` コマンドで設定するオプション名、 設定できる値の範囲などを次の表に示します。

表 3-22 パフォーマンスデータの格納先を変更するコマンドの設定項目

説明	オプション名	設定できる値 (Store バージョン 1.0)	設定できる値 (Store バージョン 2.0)	デフォルト値
パフォーマンスデータの作成先ディレクトリ	sd	1~127 バイトの絶対パス名または相対パス名	1~214 バイトの絶対パス名または相対パス名	/opt/jp1pc/agtbs/store/インスタンス名

説明	オプション名	設定できる値 (Store バージョン 1.0)	設定できる値 (Store バージョン 2.0)	デフォルト値
パフォーマンスデータの退避先ディレクトリ (フルバックアップ)	bd	1~127 バイトの絶対パス名または相対パス名	1~211 バイトの絶対パス名または相対パス名	/opt/jp1pc/agtbs/store/インスタンス名/backup
パフォーマンスデータの退避先ディレクトリ (部分バックアップ)	pbd	—	1~214 バイトの絶対パス名または相対パス名	/opt/jp1pc/agtbs/store/インスタンス名/partial
パフォーマンスデータを退避する場合の最大世代番号	bs	1~9	1~9	5
パフォーマンスデータのエクスポート先ディレクトリ	dd	1~127 バイトの絶対パス名または相対パス名	1~127 バイトの絶対パス名または相対パス名	/opt/jp1pc/agtbs/store/インスタンス名/dump
パフォーマンスデータのインポート先ディレクトリ	id	—	1~222 バイトの絶対パス名または相対パス名	/opt/jp1pc/agtbs/store/インスタンス名/import

(凡例)

— : 設定できません

(2) jpcsto.ini ファイルを編集して設定を変更する (Store バージョン 1.0 の場合だけ)

Store バージョン 1.0 使用時は、jpcsto.ini を直接編集して変更できます。

(a) jpcsto.ini ファイルの設定項目

jpcsto.ini ファイルは、/opt/jp1pc/agtbs/store/インスタンス名に格納されています。

jpcsto.ini ファイルで編集するラベル名、設定できる値の範囲などを次の表に示します。

表 3-23 パフォーマンスデータの格納先の設定項目 (jpcsto.ini の[Data Section]セクション)

説明	ラベル名	設定できる値 (Store バージョン 1.0) ^{※1}	デフォルト値
パフォーマンスデータの作成先ディレクトリ	Store Dir ^{※2}	1~127 バイトの絶対パス名または相対パス名	/opt/jp1pc/agtb/store/インスタンス名
パフォーマンスデータの退避先ディレクトリ (フルバックアップ)	Backup Dir ^{※2}	1~127 バイトの絶対パス名または相対パス名	/opt/jp1pc/agtb/store/インスタンス名/backup
パフォーマンスデータを退避する場合の最大世代番号	Backup Save	1~9	5
パフォーマンスデータのエクスポート先ディレクトリ	Dump Dir ^{※2}	1~127 バイトの絶対パス名または相対パス名	/opt/jp1pc/agtb/store/インスタンス名/dump

注※1

- ・ 指定できる文字は、次の文字を除く、半角英数字、半角記号および半角空白です。
; , * ? ' " < > |
- ・ 指定値に誤りがある場合、Agent Store サービスは起動できません。

注※2

Store Dir, Backup Dir, および Dump Dir には、それぞれ重複したディレクトリを指定できません。

(b) jpcsto.ini ファイルの編集前の準備

- ・ Store データベースの格納先ディレクトリを変更する場合は、変更後の格納先ディレクトリを事前に作成しておいてください。
- ・ Store データベースの格納先ディレクトリを変更すると、変更前に収集したパフォーマンスデータを使用できなくなります。変更前に収集したパフォーマンスデータが必要な場合は、次に示す手順でデータを引き継いでください。
 1. jpctool db backup コマンドで Store データベースに格納されているパフォーマンスデータのバックアップを採取する。
 2. 「(c) jpcsto.ini ファイルの編集手順」に従って Store データベースの格納先ディレクトリを変更する。
 3. jpctool db restore コマンドで変更後のディレクトリにバックアップデータをリストアする。

(c) jpcsto.ini ファイルの編集手順

手順を次に示します。

1. PFM - Agent のサービスを停止する。

3. インストールとセットアップ (UNIX の場合)

ローカルホストで PFM -Agent のプログラムおよびサービスが起動されている場合は、すべて停止してください。

2. テキストエディターなどで、 jpcsto.ini ファイルを開く。

3. パフォーマンスデータの格納先ディレクトリなどを変更する。

次に示す網掛け部分を、必要に応じて修正してください。

:

[Data Section]

Store Dir=.

Backup Dir=./backup

Backup Save=5

Dump Dir=./dump

:

注意事項

- 行頭および「=」の前後には空白文字を入力しないでください。
- 各ラベルの値の「.」は、Agent Store サービスの Store データベースのデフォルト格納先ディレクトリ（/opt/jp1pc/agtbs/store/インスタンス名）を示します。格納先を変更する場合、その格納先ディレクトリからの相対パスか、または絶対パスで記述してください。
- jpcsto.ini ファイルには、データベースの格納先ディレクトリ以外にも、定義情報が記述されています。[Data Section]セクション以外の値は変更しないようにしてください。[Data Section]セクション以外の値を変更すると、Performance Management が正常に動作しなくなることがあります。

4. jpcsto.ini ファイルを保存して閉じる。

5. Performance Management のプログラムおよびサービスを起動する。

注意

この手順で Store データベースの保存先ディレクトリを変更した場合、パフォーマンスデータファイルは変更前のディレクトリから削除されません。これらのファイルが不要な場合は、次に示すファイルだけを削除してください。

- 拡張子が.DB であるすべてのファイル
- 拡張子が.IDX であるすべてのファイル

3.7.2 Store バージョン 2.0への移行

Store データベースの保存形式には、バージョン 1.0 と 2.0 の 2 種類あります。Store バージョン 2.0 の詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」を参照してください。

Store バージョン 2.0 は、PFM - Base または PFM - Manager のバージョン 08-10 以降の環境に、08-10 以降の PFM - Agent for HiRDB を新規インストールした場合にだけデフォルトで利用できます。それ以外の場合は、Store バージョン 1.0 形式のままとなっているため、セットアップコマンドによって Store バージョン 2.0 に移行してください。

何らかの理由によって Store バージョン 1.0 に戻す必要がある場合は、Store バージョン 2.0 のアンセットアップを行ってください。

インストール条件に対応する Store バージョン 2.0 の利用可否と利用手順を次の表に示します。

表 3-24 Store バージョン 2.0 の利用可否および利用手順

インストール条件		Store バージョン 2.0 の利用可否	Store バージョン 2.0 の利用手順
インストール済みの PFM - Base、または、PFM - Manager のバージョン	PFM - Agent のインストール方法	利用できない	PFM - Base、または、PFM - Manager を 08-10 にバージョンアップ後、セットアップコマンドを実行
	上書きインストール 新規インストール		
08-10 より前	上書きインストール	利用できない	PFM - Base、または、PFM - Manager を 08-10 にバージョンアップ後、セットアップコマンドを実行
	新規インストール		
08-10 以降	上書きインストール	セットアップ後利用できる	セットアップコマンドを実行
	新規インストール	利用できる	設定不要

(1) Store バージョン 2.0 のセットアップ

1. システムリソース見積もりとリテンションの設定

Store バージョン 2.0 導入に必要なシステムリソースが、実行環境に適しているかどうかを確認してください。必要なシステムリソースを次に示します。

- ディスク容量
- ファイル数
- 1 プロセスがオープンするファイル数

これらの値はリテンションの設定によって調節できます。実行環境の保有しているリソースを考慮してリテンションを設定してください。システムリソースの見積もりについては、「[付録 A システム見積もり](#)」を参照してください。

2. ディレクトリの設定

Store バージョン 2.0 に移行する場合に、Store バージョン 1.0 でのディレクトリ設定では、Agent Store サービスが起動しないことがあります。このため、Agent Store サービスが使用するディレクト

3. インストールとセットアップ (UNIX の場合)

リの設定を見直す必要があります。Agent Store サービスが使用するディレクトリの設定は `jpcconf db define` コマンドを使用して表示・変更できます。

Store バージョン 2.0 は、Store データベースの保存先ディレクトリやバックアップ先ディレクトリの最大長が Store バージョン 1.0 と異なります。Store バージョン 1.0 でディレクトリの設定を相対パスに変更している場合、絶対パスに変換した値が Store バージョン 2.0 でのディレクトリ最大長の条件を満たしているか確認してください。Store バージョン 2.0 のディレクトリ最大長は 214 バイトです。

ディレクトリ最大長の条件を満たしていない場合は、Agent Store サービスが使用するディレクトリの設定を変更したあと、手順 3 以降に進んでください。

3. セットアップコマンドの実行

Store バージョン 2.0 に移行するため、次のコマンドを実行します。

```
jpcconf db vrset -ver 2.0 -key HiRDB -inst インスタンス名
```

`jpcconf db vrset` コマンドの詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」を参照してください。

4. リテンションの設定

手順 1 の見積もり時に設計したリテンションを設定してください。Agent Store サービスを起動して、PFM - Web Console で設定してください。

(2) Store バージョン 2.0 のアンセットアップ

Store バージョン 2.0 のアンセットアップは `jpcconf db vrset -ver 1.0` コマンドを使用します。Store バージョン 2.0 をアンセットアップすると、Store データベースのデータはすべて初期化され、Store バージョン 1.0 に戻ります。

`jpcconf db vrset` コマンドの詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」を参照してください。

(3) 注意事項

(a) Store バージョン 1.0 から Store バージョン 2.0 に変更する場合

Store バージョン 1.0 から Store バージョン 2.0 に変更した場合、PI レコードは変更前と変更後でデータの内容は変わりません。PD レコードは、Store バージョン 1.0 のデータを参照できないおそれがあります。このため、Store バージョン 2.0 に変更する前に、`jpcctl db dump` コマンドで Store バージョン 1.0 の情報を出力してください。

例えば、Store バージョン 1.0 の PD レコードが 10,000 レコードで 2006/01/01 から 2006/12/31 の 365 日分保存されている場合、Store バージョン 2.0 に変更すると、デフォルトの保存期間が 10 日であるため、過去 355 日分のデータは削除されます。Store バージョン 2.0 でのデフォルト保存日数については、「[付録 A.2 ディスク占有量](#)」を参照してください。

(b) Store バージョン 2.0 から Store バージョン 1.0 に戻す場合

Store バージョン 1.0 に戻すと、データは初期化されます。このため、Store バージョン 1.0 に変更する前に、`jpctool db dump` コマンドで Store バージョン 2.0 の情報を出力してください。

3.7.3 インスタンス環境の更新

インスタンス環境を更新したい場合は、インスタンス名を確認し、インスタンス情報を更新します。インスタンス情報の設定は、PFM - Agent ホストで実施します。

インスタンス名を確認するには、`jpcconf inst list` コマンドを使用します。また、インスタンス環境を更新するには、`jpcconf inst setup` コマンドを使用します。

インスタンス環境を更新する手順を次に示します。複数のインスタンス環境を更新する場合は、この手順を繰り返し実施します。

1. インスタンス名を確認する。

PFM - Agent for HiRDB を示すサービスキーを指定して、`jpcconf inst list` コマンドを実行します。

```
jpcconf inst list -key HiRDB
```

設定されているインスタンス名が HRD1 の場合、HRD1 と表示されます。

2. 更新する情報を確認する。

インスタンス環境で更新できる情報を次に示します。

表 3-25 PFM - Agent for HiRDB のインスタンス情報

項目	説明	設定できる値	デフォルト値
PDDIR	監視対象の HiRDB システムのシステムマネジャを含む HiRDB ユニットの HiRDB 運用ディレクトリのパス（環境変数 PDDIR の値）。	200 バイト以内のパス名	インスタンス環境の更新前の設定値
PDCONFPATH	監視対象の HiRDB システムのシステムマネジャを含む HiRDB ユニットの環境変数 PDCONFPATH の値。 「PDDIR の値/conf」が設定されます。	512 バイト以内のパス名	
HiRDB_user	DBA 権限を持つ HiRDB 認可識別子。大文字と小文字を区別する場合は全体を"（引用符）で囲んでください。囲まなければすべて大文字として扱われます。	10 バイト以内の文字列	
HiRDB_password	HiRDB_user に対応するパスワード。大文字と小文字を区別する場合は全体を"（引用符）で囲んでください。囲まなければすべて大文字として扱われます。	32 バイト以内文字列	

3. インストールとセットアップ（UNIX の場合）

項目	説明	設定できる値	デフォルト値
LANG	監視対象の HiRDB で使用する文字コードに対応する OS のロケール。※	256 バイト以内の文字列	インスタンス環境の更新前の設定値
HiRDB_admin	HiRDB 管理者。大文字と小文字を区別する場合でも"（引用符）で囲まないでください。	8 バイト以内の文字列	

注※

詳細は、「[表 3-4 PFM - Agent for HiRDB のインスタンス情報](#)」を参照してください。

3. 更新したいインスタンス環境の PFM - Agent for HiRDB のサービスが起動されている場合は、停止する。

サービスの停止方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、サービスの起動と停止について説明している章を参照してください。

`jpcconf inst setup` コマンド実行時に、更新したいインスタンス環境のサービスが起動されている場合は、確認メッセージが表示され、サービスを停止できます。サービスを停止した場合は、更新処理が続行されます。サービスを停止しなかった場合は、更新処理が中断されます。

4. PFM - Agent for HiRDB を示すサービスキーおよびインスタンス名を指定して、`jpcconf inst setup` コマンドを実行する。

インスタンス名が HRD1 のインスタンス環境を更新する場合、次のように指定してコマンドを実行します。

```
jpcconf inst setup -key HiRDB -inst HRD1
```

5. HiRDB のインスタンス情報を更新する。

表 3-24 に示した項目を、コマンドの指示に従って入力します。現在設定されている値が表示されます（ただし、`HiRDB_password` の値は表示されません）。表示された値を変更しない場合は、リターンキーだけを押してください。すべての入力が終了すると、インスタンス環境が更新されます。

6. 更新したインスタンス環境のサービスを再起動する。

サービスの起動方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、サービスの起動と停止について説明している章を参照してください。

注意

更新できない項目の値を変更したい場合は、インスタンス環境を削除したあと、再作成してください。

コマンドについては、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、コマンドについて説明している章を参照してください。

3.8 バックアップとリストア

PFM - Agent for HiRDB のバックアップおよびリストアについて説明します。

障害が発生してシステムが壊れた場合に備えて、PFM - Agent for HiRDB の設定情報のバックアップを取得してください。また、PFM - Agent for HiRDB をセットアップしたときなど、システムを変更した場合にもバックアップを取得してください。

なお、Performance Management システム全体のバックアップおよびリストアについては、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」のバックアップとリストアの説明を参照してください。

3.8.1 バックアップ

バックアップはファイルをコピーするなど、任意の方法で取得してください。バックアップを取得する際は、PFM - Agent for HiRDB のサービスを停止した状態で行ってください。

PFM - Agent for HiRDB の設定情報のバックアップ対象ファイルを次の表に示します。

表 3-26 PFM - Agent for HiRDB のバックアップ対象ファイル

ファイル名	説明
/opt/jp1pc/agtbt/agent/インスタンス名/*.ini ファイル	Agent Collector サービスの設定ファイル
/opt/jp1pc/agtbt/store/インスタンス名/*.ini ファイル	Agent Store サービスの設定ファイル

注意事項

- 論理ホストで運用する場合のファイル名については「/opt/jp1pc」を「環境ディレクトリ/jp1pc」に読み替えてください。
- PFM - Agent for HiRDB のバックアップを取得する際は、取得した環境の製品バージョン番号を管理するようにしてください。製品バージョン番号の詳細については、リリースノートを参照してください。

3.8.2 リストア

PFM - Agent for HiRDB の設定情報をリストアする場合は、次に示す前提条件を確認した上で、バックアップ対象ファイルを元の位置にコピーしてください。バックアップした設定情報ファイルで、ホスト上の設定情報ファイルを上書きします。

前提条件

- PFM - Agent for HiRDB がインストール済みであること。

- PFM - Agent for HiRDB のサービスが停止していること。
- システム構成がバックアップしたときと同じであること。
- それぞれのホストで、バックアップしたホスト名とリストアするホスト名が一致していること。
- バックアップ環境の PFM 製品構成情報がリストア対象の PFM 製品構成情報と一致していること。

■ 注意事項

PFM - Agent for HiRDB の設定情報をリストアする場合、バックアップを取得した環境とリストアする環境の製品バージョン番号が完全に一致している必要があります。製品バージョン番号の詳細については、リリースノートを参照してください。リストアの可否についての例を次に示します。

リストアできるケース

PFM - Agent for HiRDB 10-00 でバックアップした設定情報を PFM - Agent for HiRDB 10-00 にリストアする。

リストアできないケース

- PFM - Agent for HiRDB 10-00 でバックアップした設定情報を PFM - Agent for HiRDB 09-00 にリストアする。
- PFM - Agent for HiRDB 08-50 でバックアップした設定情報を PFM - Agent for HiRDB 08-50-05 にリストアする。

3.9 Web ブラウザでマニュアルを参照するための設定

Performance Management では、 PFM - Web Console がインストールされているホストに、プログラムプロダクトに標準添付されているマニュアル提供媒体からマニュアルをコピーすることで、 Web ブラウザでマニュアルを参照できるようになります。なお、 PFM - Web Console をクラスタ運用している場合は、実行系、待機系それぞれの物理ホストでマニュアルをコピーしてください。

3.9.1 マニュアルを参照するための設定

(1) PFM - Web Console のヘルプからマニュアルを参照する場合

1. PFM - Web Console のセットアップ手順に従い、 PFM - Web Console に PFM - Agent を登録する (PFM - Agent の追加セットアップを行う)。
2. PFM - Web Console がインストールされているホストに、マニュアルのコピー先ディレクトリを作成する。
 - Windows の場合 : Web Console のインストール先ディレクトリ￥doc￥ja￥××××
 - UNIX の場合 : /opt/jp1pcwebcon/doc/ja/×××
×××には、 PFM - Agent のヘルプ ID を指定してください。ヘルプ ID については、「[付録 C 識別子一覧](#)」を参照してください。
3. 手順 2 で作成したディレクトリの直下に、マニュアル提供媒体から次のファイルおよびディレクトリをコピーする。

HTML マニュアルの場合

Windows の場合 : 該当するドライブ￥MAN￥3021￥資料番号 (03004A0D など) 下の、すべての HTML ファイル、 CSS ファイル、および FIGURE ディレクトリ
UNIX の場合 : /提供媒体のマウントポイント/MAN/3021/資料番号 (03004A0D など) 下の、すべての HTML ファイル、 CSS ファイル、および FIGURE ディレクトリ

PDF マニュアルの場合

Windows の場合 : 該当するドライブ￥MAN￥3021￥資料番号 (03004A0D など) 下の PDF ファイル
UNIX の場合 : /提供媒体のマウントポイント/MAN/3021/資料番号 (03004A0D など) 下の PDF ファイル

コピーの際、 HTML マニュアルの場合は INDEX.HTM ファイルが、 PDF マニュアルの場合は PDF ファイル自体が、作成したディレクトリ直下に配置されるようにしてください。

4. PFM - Web Console を再起動する。

(2) お使いのマシンのハードディスクからマニュアルを参照する場合

提供媒体から直接 HTML ファイル, CSS ファイル, PDF ファイル, および GIF ファイルを任意のディレクトリにコピーしてください。HTML マニュアルの場合, 次のディレクトリ構成になるようにしてください。

```
html (HTMLファイルおよびCSSファイルを格納)
└ FIGURE (GIFファイルを格納)
```

3.9.2 マニュアルの参照手順

マニュアルの参照手順を次に示します。

1. PFM - Web Console の [メイン] 画面のメニュー バーフレームにある [ヘルプ] メニューをクリックし, [ヘルプ選択] 画面を表示する。
2. マニュアル名またはマニュアル名の後ろの [PDF] をクリックする。

マニュアル名をクリックすると HTML 形式のマニュアルが表示されます。[PDF] をクリックすると PDF 形式のマニュアルが表示されます。

Web ブラウザでの文字の表示に関する注意事項

Windows の場合, [スタート] メニューからオンラインマニュアルを表示させると, すでに表示されている Web ブラウザの画面上に HTML マニュアルが表示されることがあります。

4

クラスタシステムでの運用

この章では、クラスタシステムで PFM - Agent for HiRDB を運用する場合のインストール、セットアップ、およびクラスタシステムで PFM - Agent for HiRDB を運用しているときの処理の流れなどについて説明します。

4.1 クラスタシステムの概要

クラスタシステムとは、複数のサーバシステムを連携して1つのシステムとして運用するシステムです。PFM - Agent for HiRDB の監視対象プログラムである、HiRDB は、次のクラスタシステムで運用できます。

- HA (High Availability) クラスタシステム構成の HiRDB
- HiRDB/High Availability
- HiRDB/Advanced High Availability

PFM - Agent for HiRDB は HiRDB システムを構成するすべてのホストにインストールしますが、クラスタシステムはシステムマネージャが稼働するホスト間だけに構築してください。

ここでは、クラスタシステムで PFM - Agent for HiRDB を運用する場合の構成について説明します。クラスタシステムの概要、および Performance Management システムをクラスタシステムで運用する場合のシステム構成については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、クラスタシステムでの構築と運用について説明している章を参照してください。

なお、この章で、単に「クラスタシステム」と記述している場合は、HA クラスタシステムを指します。

4.1.1 HA クラスタシステム

(1) HA クラスタシステムでの HiRDB の構成

HiRDB を HA クラスタシステムで運用すると、障害発生時にフェールオーバーでき、可用性が向上します。

HiRDB を HA クラスタシステムで運用する場合、一般的には、実行系ノードと待機系ノードの両方で同じ HiRDB が実行できる環境を構築し、HiRDB のデータ（マスタファイル、ディクショナリファイル、ユーザー用 RD エリアなど）一式を共有ディスクに格納した構成にします。

また、クラスタシステムでの HiRDB の構成や運用方法はシステムによって異なる場合があります。詳細は HiRDB のマニュアルを参照してください。

(2) HA クラスタシステムでの PFM - Agent for HiRDB の構成

PFM - Agent for HiRDB は、HA クラスタシステムで運用でき、クラスタ構成の HiRDB を監視できます。HA クラスタシステムで PFM - Agent for HiRDB を運用する場合は、次の図のような構成で運用します。

図 4-1 HA クラスタシステムでの PFM - Agent for HiRDB の構成例

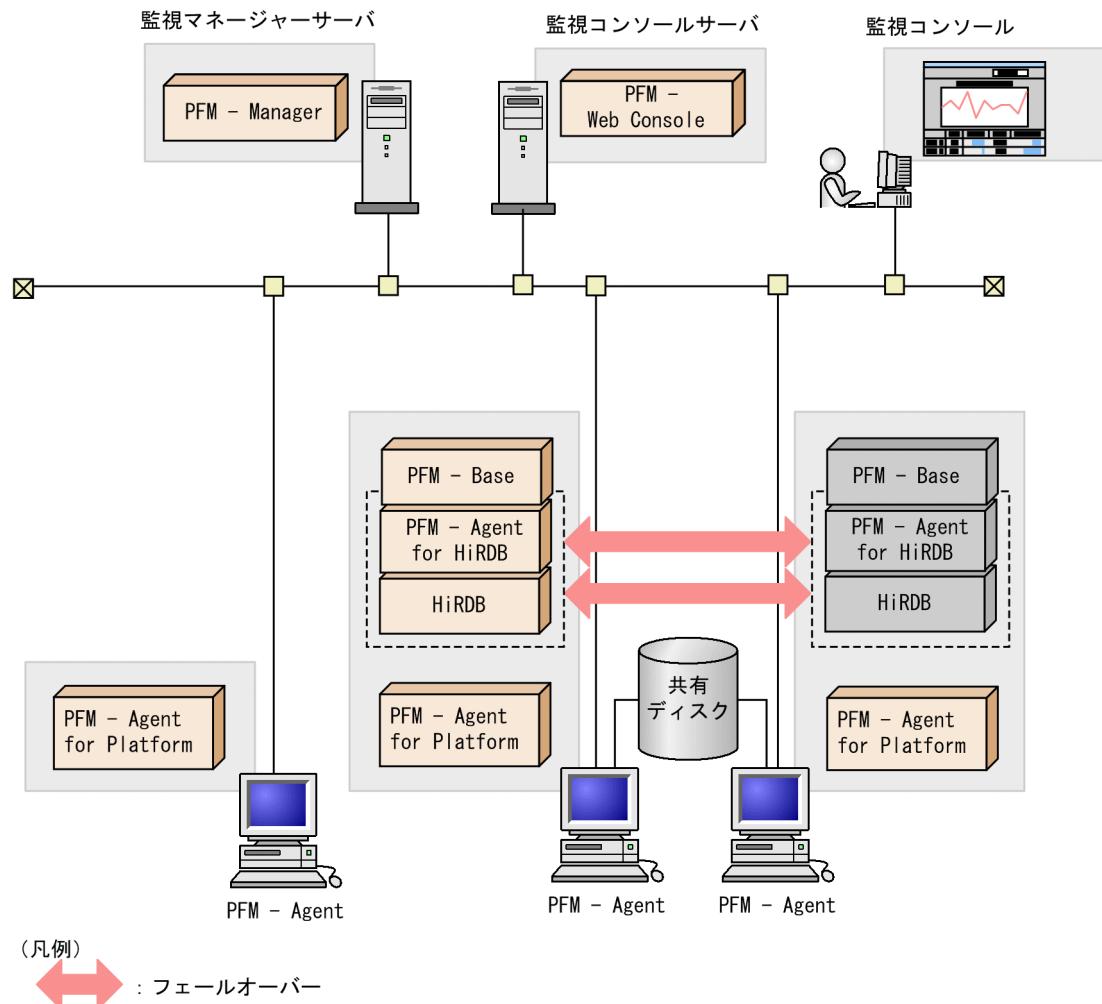


図 4-1 に示すように、PFM - Agent for HiRDB はクラスタ構成の HiRDB と同じ論理ホスト環境で動作し、HiRDB を監視します。障害発生時は HiRDB のフェールオーバーに連動して PFM - Agent for HiRDB もフェールオーバーし、監視を継続できます。

また、共有ディスクに定義情報やパフォーマンス情報を格納し、フェールオーバー時に引き継ぎます。1 つの論理ホストに複数の Performance Management のプログラムがある場合は、それぞれが同じ共有ディレクトリを使います。

1 つのノードで PFM - Agent for HiRDB を複数実行できます。クラスタ構成の HiRDB が複数ある構成（アクティブ・アクティブ構成）の場合、それぞれの論理ホスト環境で、PFM - Agent for HiRDB を実行してください。それぞれの PFM - Agent for HiRDB は独立して動作し、別々にフェールオーバーできます。

4.2 フェールオーバー時の処理

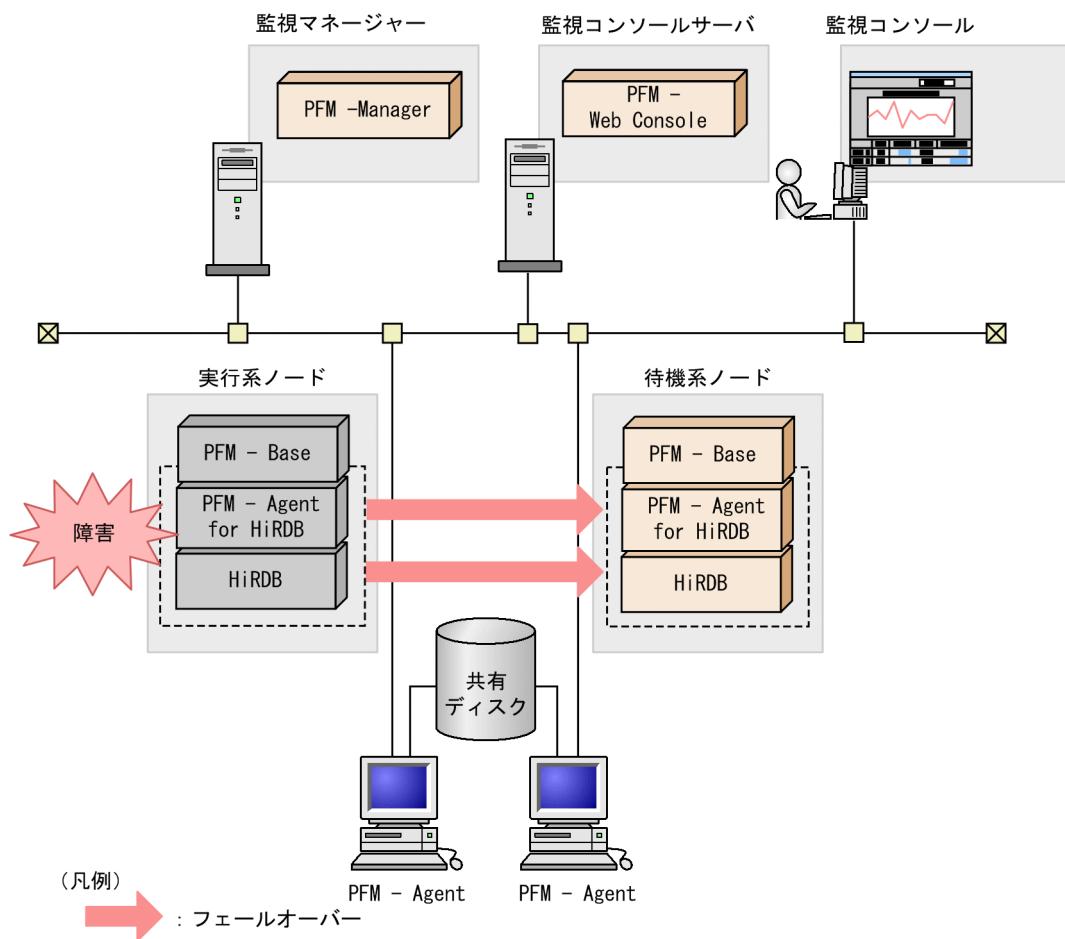
実行系ホストに障害が発生すると、処理が待機系ホストに移ります。

ここでは、PFM - Agent for HiRDB に障害が発生した場合のフェールオーバー時の処理について説明します。また、PFM - Manager に障害が発生した場合の、PFM - Agent for HiRDB への影響について説明します。

4.2.1 PFM - Agent ホストに障害が発生した場合のフェールオーバー

PFM - Agent for HiRDB を実行している PFM - Agent ホストにフェールオーバーが発生した場合の処理を次の図に示します。

図 4-2 PFM - Agent ホストにフェールオーバーが発生した場合の処理



PFM - Agent for HiRDB のフェールオーバー中に、PFM - Web Console で操作すると、「There was no answer(-6)」というメッセージが表示されます。この場合は、フェールオーバーが完了するまで待ってから操作してください。

PFM - Agent for HiRDB のフェールオーバー後に、PFM - Web Console で操作すると、フェールオーバー先のノードで起動した PFM - Agent for HiRDB に接続されます。

4.2.2 PFM - Manager が停止した場合の影響

PFM - Manager が停止すると、Performance Management システム全体に影響があります。

PFM - Manager は、各ノードで動作している PFM - Agent for HiRDB のエージェント情報を一括管理しています。また、PFM - Agent for HiRDB がパフォーマンス監視中にしきい値を超えた場合のアラームイベントの通知や、アラームイベントを契機としたアクションの実行を制御しています。このため、PFM - Manager が停止すると、Performance Management システムに次の表に示す影響があります。

表 4-1 PFM - Manager が停止した場合の PFM - Agent for HiRDB への影響

プログラム名	影響	対処
PFM - Agent for HiRDB	<p>PFM - Agent for HiRDB が動作中に、PFM - Manager が停止した場合、次のように動作する。</p> <ul style="list-style-type: none">パフォーマンスデータは継続して収集される。発生したアラームイベントを PFM - Manager に通知できないため、アラーム定義ごとにアラームイベントが保持され、PFM - Manager が起動するまで通知をリトライする。保持しているアラームイベントが 3 つを超えると、古いアラームイベントは上書きされる。また、PFM - Agent for HiRDB を停止すると、保持しているアラームイベントは削除される。PFM - Manager に通知済みのアラームステータスは、PFM - Manager が再起動したときに一度リセットされる。その後、PFM - Manager が PFM - Agent for HiRDB の状態を確認したあと、アラームステータスは最新の状態となる。PFM - Agent for HiRDB を停止しようとした場合、PFM - Manager に停止することを通知できないため、停止に時間が掛かる。	PFM - Manager を起動してください。動作中の PFM - Agent for HiRDB はそのまま運用できます。ただし、アラームが期待したとおり通知されない場合があるため、PFM - Manager 復旧後に、PFM - Agent の共通メッセージログに出力されているメッセージ KAVE00024-I を確認してください。

PFM - Manager が停止した場合の影響を考慮の上、運用方法を検討してください。なお、トラブル以外にも、構成変更やメンテナンスの作業などで PFM - Manager の停止が必要になる場合もあります。運用への影響が少ないとときに、メンテナンスをすることをお勧めします。

4.3 クラスタシステムでのインストールとセットアップ (Windows の場合)

ここでは、クラスタシステムでの PFM - Agent for HiRDB のインストールとセットアップの手順について説明します。

なお、PFM - Manager のインストールとセットアップの手順については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、クラスタシステムでの構築と運用について説明している章を参照してください。

4.3.1 クラスタシステムでのインストールとセットアップの前に確認すること (Windows の場合)

インストールおよびセットアップを開始する前提条件、必要な情報、および注意事項について説明します。

(1) 前提条件

PFM - Agent for HiRDB をクラスタシステムで使用する場合、次に示す前提条件があります。

(a) クラスタシステム

次の条件が整っていることを確認してください。

- クラスタシステムがクラスタソフトによって制御されていること。
- クラスタソフトが論理ホスト運用する PFM - Agent for HiRDB の起動や停止などを制御するように設定されていること。このとき、PFM - Agent for HiRDB が、監視対象の HiRDB と連動してフェールオーバーするように設定すること。

注意

- Windows では、アプリケーションエラーが発生すると、Microsoft ヘエラーを報告するダイアログボックスが表示されます。このダイアログボックスが表示されるとフェールオーバーできないおそれがあるため、エラー報告を抑止する必要があります。抑止手順については、OS のマニュアルを参照してください。

(b) 共有ディスク

次の条件が整っていることを確認してください。

- 論理ホストごとに共有ディスクがあり、実行系ノードから待機系ノードへ引き継げること。
- 共有ディスクが、各ノードに物理的に Fibre Channel や SCSI で接続されていること。

Performance Management では、ネットワークドライブや、ネットワーク経由でレプリケーションしたディスクを共有ディスクとして使う構成はサポートされていません。

- ・ フェールオーバーの際に、何らかの問題によって共有ディスクを使用中のプロセスが残った場合でも、クラスタソフトなどの制御によって強制的に共有ディスクをオフラインにしてフェールオーバーできること。
- ・ 一つの論理ホストで複数の PFM 製品を運用する場合、共有ディスクのディレクトリ名が同じであること。
なお、Store データベースについては格納先を変更して、共有ディスク上のはかのディレクトリに格納できます。

(c) 論理ホスト名、論理 IP アドレス

次の条件が整っていることを確認してください。

- ・ 論理ホストごとに論理ホスト名、および論理ホスト名と対応する論理 IP アドレスがあり、実行系ノードから待機系ノードに引き継げること。
- ・ 論理ホスト名と論理 IP アドレスが、hosts ファイルやネームサーバに設定されていること。
- ・ DNS 運用している場合は、FQDN 名ではなく、ドメイン名を除いたホスト名を論理ホスト名として使用していること。
- ・ 物理ホスト名と論理ホスト名は、システムの中でユニークであること。

注意

- ・ 論理ホスト名に、物理ホスト名（hostname コマンドで表示されるホスト名）を指定しないでください。正常に通信処理がされなくなるおそれがあります。
- ・ 論理ホスト名に使用できる文字は、1～32 バイトの半角英数字です。次の記号および空白文字は指定できません。
/ ¥ : ; * ? ' " < > | & = , .
- ・ 論理ホスト名には、「localhost」、IP アドレス、「-」から始まるホスト名を指定できません。

(2) 論理ホスト運用する PFM - Agent for HiRDB のセットアップに必要な情報

論理ホスト運用する PFM - Agent for HiRDB をセットアップするには、通常の PFM - Agent for HiRDB のセットアップで必要になる環境情報に加えて、次の表の情報が必要です。

表 4-2 論理ホスト運用の PFM - Agent for HiRDB のセットアップに必要な情報

項目	例
論理ホスト名	jp1-halhrd
論理 IP アドレス	172.16.92.100
共有ディスク	S:¥jp1

なお、1つの論理ホストで論理ホスト運用する Performance Management のプログラムが複数ある場合も、同じ共有ディスクのディレクトリを使用します。

共有ディスクに必要な容量については、「[付録 A システム見積もり](#)」を参照してください。

(3) PFM - Agent for HiRDB で論理ホストをフェールオーバーさせる場合の注意事項

PFM - Agent for HiRDB を論理ホスト運用するシステム構成の場合、PFM - Agent for HiRDB の障害によって論理ホスト全体をフェールオーバーさせるかどうかを検討してください。

PFM - Agent for HiRDB の障害で論理ホスト全体をフェールオーバーさせると、PFM - Agent for HiRDB が監視対象としている同じ論理ホストで運用する業務アプリケーションもフェールオーバーすることになり、業務に影響を与えるおそれがあります。

通常は、PFM - Agent for HiRDB に異常が発生しても、HiRDB の動作に影響がないように、次のどちらかのようにクラスタソフトで設定することをお勧めします。

- PFM - Agent for HiRDB の動作監視をしない
- PFM - Agent for HiRDB の異常を検知してもフェールオーバーしない

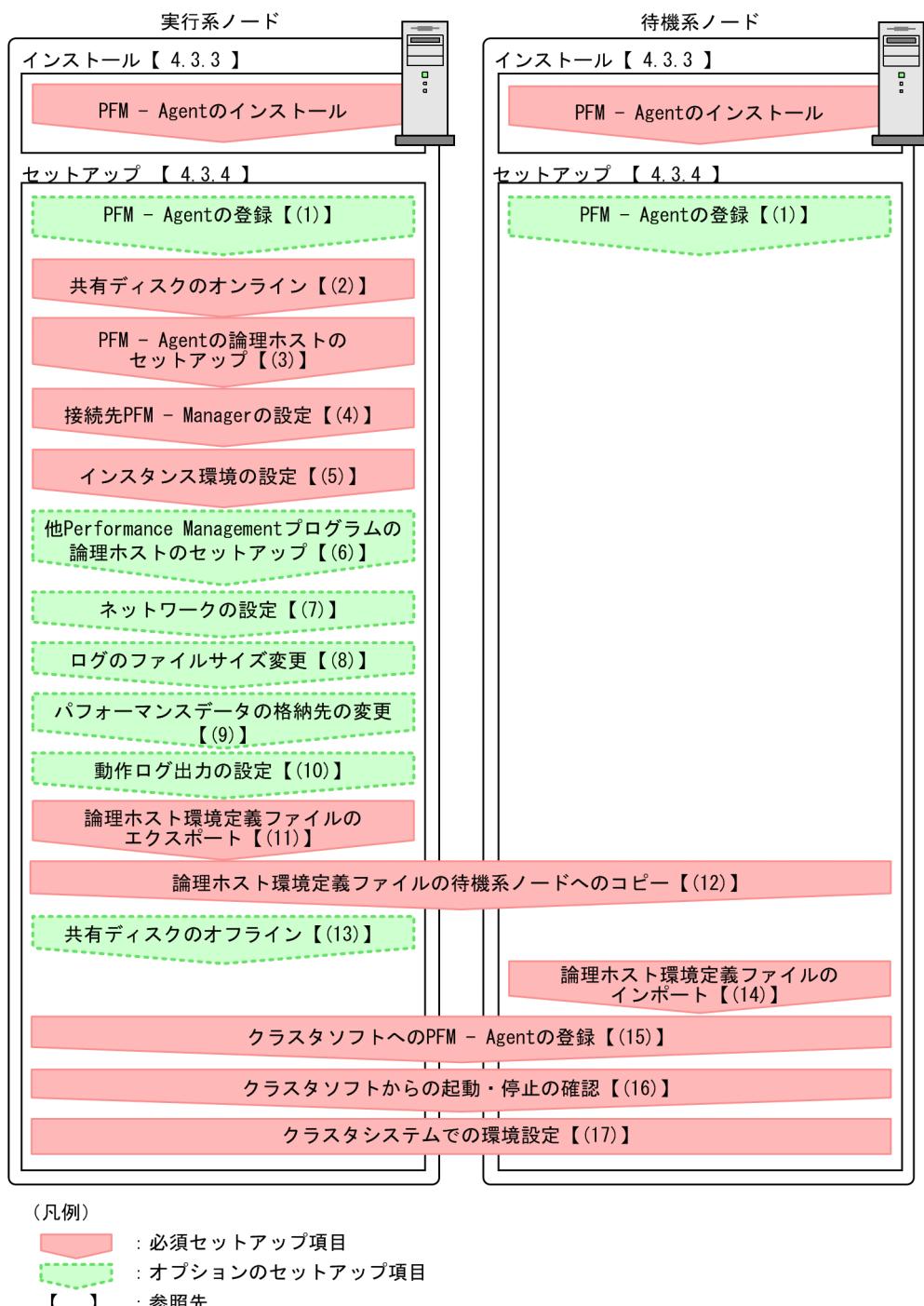
(4) 論理ホスト運用時のバージョンアップに関する注意事項

論理ホスト運用の PFM - Agent for HiRDB をバージョンアップする場合は、実行系ノードまたは待機系ノードのどちらか一方で、共有ディスクをオンラインにする必要があります。

4.3.2 クラスタシステムでのインストールとセットアップの流れ (Windows の場合)

クラスタシステムで、論理ホスト運用する PFM - Agent for HiRDB のインストールおよびセットアップの流れを次の図に示します。

図 4-3 クラスタシステムで論理ホスト運用する PFM - Agent for HiRDB のインストールおよびセットアップの流れ (Windows の場合)



注意

論理ホスト環境の PFM - Agent をセットアップしても、物理ホスト環境の PFM - Agent の定義内容は引き継がれません。論理ホスト環境および物理ホスト環境では、インスタンス環境を設定した時点で、新規に環境が作成されます。

4.3.3 クラスタシステムでのインストール手順 (Windows の場合)

実行系ノードおよび待機系ノードのそれぞれに PFM - Agent for HiRDB をインストールします。

注意事項

インストール先はローカルディスクです。共有ディスクにはインストールしないでください。

インストール手順は非クラスタシステムの場合と同じです。インストール手順については、「[2.3 インストール](#)」を参照してください。

4.3.4 クラスタシステムでのセットアップ手順 (Windows の場合)

ここでは、クラスタシステムで Performance Management を運用するための、セットアップについて説明します。

セットアップ手順には、実行系ノードの手順と、待機系ノードの手順があります。実行系ノード、待機系ノードの順にセットアップしてください。

実行系 は実行系ノードで行う項目を、**待機系** は待機系ノードで行う項目を示します。また、**<オプション>** は使用する環境によって必要になるセットアップ項目、またはデフォルトの設定を変更する場合のオプションのセットアップ項目を示します。

(1) PFM - Agent の登録 実行系 待機系 <オプション>

PFM - Manager および PFM - Web Console を使って PFM - Agent を一元管理するために、PFM - Manager および PFM - Web Console に PFM - Agent for HiRDB を登録する必要があります。

PFM - Agent for HiRDB を登録する必要があるのは次の場所です。

- Performance Management システムに新しく PFM - Agent for HiRDB を追加する場合
- すでに登録している PFM - Agent for HiRDB のデータモデルのバージョンを更新する場合

登録は PFM - Manager 上および PFM - Web Console 上で実施します。手順は非クラスタシステムの場合と同じです。

手順については、「[2.4.2 PFM - Manager および PFM - Web Console への PFM - Agent for HiRDB の登録](#)」を参照してください。

(2) 共有ディスクのオンライン 実行系

共有ディスクがオンラインになっていることを確認します。共有ディスクがオンラインになっていない場合は、クラスタソフトからの操作やボリュームマネージャの操作などで、共有ディスクをオンラインにしてください。

(3) PFM - Agent の論理ホストのセットアップ

実行系

jpcconf ha setup コマンドを実行して論理ホスト環境を作成します。コマンドを実行すると、共有ディスクに必要なデータがコピーされ、論理ホスト用の定義が設定されて、論理ホスト環境が作成されます。

注意

コマンドを実行する前に、Performance Management システム全体で、Performance Management のプログラムおよびサービスをすべて停止してください。サービスの停止方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の Performance Management の起動と停止について説明している章を参照してください。

手順を次に示します。

1. jpcconf ha setup コマンドを実行して、PFM - Agent for HiRDB の論理ホスト環境を作成する。

次のようにコマンドを実行します。

```
jpcconf ha setup -key HiRDB -lhost jp1-ha1hrd -d S:¥jp1
```

論理ホスト名は、-lhost オプションで指定します。ここでは、論理ホスト名を jp1-ha1hrd としています。DNS 運用をしている場合はドメイン名を省略した論理ホスト名を指定してください。

共有ディスクのディレクトリ名は、-d オプションの環境ディレクトリ名に指定します。例えば-d S:¥jp1 と指定すると S:¥jp1¥jp1pc が作成されて、論理ホスト環境のファイルが作成されます。

2. jpcconf ha list コマンドを実行して、論理ホストの設定を確認する。

次のようにコマンドを実行します。

```
jpcconf ha list -key all
```

作成した論理ホスト環境が正しいことを確認してください。

(4) 接続先 PFM - Manager の設定

実行系

jpcconf mgrhost define コマンドを実行して、PFM - Agent for HiRDB を管理する PFM - Manager を設定します。

1. jpcconf mgrhost define コマンドを実行して、接続先 PFM - Manager を設定する。

次のようにコマンドを実行します。

```
jpcconf mgrhost define -host jp1-hal -lhost jp1-ha1hrd
```

接続先 PFM - Manager のホスト名は、-host オプションで指定します。接続先 PFM - Manager が論理ホスト運用されている場合は、-host オプションに接続先 PFM - Manager の論理ホスト名を指定します。ここでは、PFM - Manager の論理ホスト名を jp1-hal としています。

また、PFM - Agent for HiRDB の論理ホスト名は、-lhost オプションで指定します。ここでは、PFM - Agent for HiRDB の論理ホスト名を jp1-ha1hrd としています。

(5) インスタンス環境の設定

実行系

`jpcconf inst setup` コマンドを実行して、PFM - Agent for HiRDB のインスタンス環境を設定します。

設定手順は、非クラスタシステムの場合と同じです。ただし、クラスタシステムの場合、`jpcconf inst setup` コマンドの実行時に、「-lhost」で論理ホスト名を指定する必要があります。

クラスタシステムの場合の `jpcconf inst setup` コマンドの指定方法を次に示します。

```
jpcconf inst setup -key HiRDB -lhost 論理ホスト名 -inst インスタンス名
```

設定するインスタンス環境は、非クラスタシステムの場合と同じです。インスタンスはすべて異なる名称で設定してください。設定するインスタンス情報については、「[2.4 セットアップ](#)」を参照してください。

(6) 他 Performance Management プログラムの論理ホストのセットアップ

実行系

オプション

PFM - Agent for HiRDB のほかに、同じ論理ホストにセットアップする PFM - Manager や PFM - Agent がある場合は、この段階でセットアップしてください。

セットアップ手順については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、クラスタシステムでの構築と運用について説明している章、または各 PFM - Agent マニュアルの、クラスタシステムでの運用について説明している章を参照してください。

(7) ネットワークの設定

実行系

オプション

Performance Management を使用するネットワーク構成に応じて、変更する場合にだけ必要な設定です。

ネットワークの設定では次の 2 つの項目を設定できます。

- IP アドレスを設定する

複数の LAN に接続されたネットワーク環境で Performance Management を運用するときに使用する IP アドレスを指定したい場合には、`jpchosts` ファイルの内容を直接編集します。

このとき、編集した `jpchosts` ファイルは、実行系ノードから待機系ノードにコピーしてください。

IP アドレスの設定方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」のインストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

- ポート番号を設定する

ファイアウォール経由で Performance Management のプログラム間の通信をする場合には、`jpcconf port` コマンドを使用してポート番号を設定します。

ポート番号の設定方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章、およびマニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、クラスタシステムでの構築と運用について説明している章を参照してください。

(8) ログのファイルサイズ変更 実行系 オプション

Performance Management の稼働状況を、Performance Management 独自のログファイルに出力します。このログファイルを「共通メッセージログ」と呼びます。このファイルサイズを変更したい場合に必要な設定です。

詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

(9) パフォーマンスデータの格納先の変更 実行系 オプション

PFM - Agent で管理されるパフォーマンスデータを格納するデータベースの保存先、バックアップ先、エクスポート先、またはインポート先のフォルダを変更したい場合に必要な設定です。

設定方法については、「[2.7.1 パフォーマンスデータの格納先の変更](#)」を参照してください。

(10) 動作ログ出力の設定 実行系 オプション

アラーム発生時に動作ログを出力したい場合に必要な設定です。動作ログとは、システム負荷などのしきい値オーバーに関するアラーム機能と連動して出力される履歴情報です。

設定方法については、「[付録 動作ログの出力](#)」を参照してください。

(11) 論理ホスト環境定義ファイルのエクスポート 実行系

PFM - Agent for HiRDB の論理ホスト環境が作成できたら、環境定義をファイルにエクスポートします。エクスポートでは、その論理ホストにセットアップされている Performance Management のプログラムの定義情報を一括してファイル出力します。同じ論理ホストにほかの Performance Management のプログラムをセットアップする場合は、セットアップが一とおり済んだあとにエクスポートしてください。

論理ホスト環境定義をエクスポートする手順を次に示します。

1. `jpcconf ha export` コマンドを実行して、論理ホスト環境定義をエクスポートする。

これまでの手順で作成した論理ホスト環境の定義情報を、エクスポートファイルに出力します。エクスポートファイル名は任意です。

例えば、`lhostexp.txt` ファイルに論理ホスト環境定義をエクスポートする場合、次のようにコマンドを実行します。

```
jpcconf ha export -f lhostexp.txt
```

(12) 論理ホスト環境定義ファイルの待機系ノードへのコピー 実行系

待機系

「(11) 論理ホスト環境定義ファイルのエクスポート」でエクスポートした論理ホスト環境定義ファイルを、実行系ノードから待機系ノードにコピーします。

(13) 共有ディスクのオフライン

実行系

オプション

クラスタソフトからの操作やボリュームマネージャの操作などで、共有ディスクをオフラインにして、作業を終了します。なお、その共有ディスクを続けて使用する場合は、オフラインにする必要はありません。

(14) 論理ホスト環境定義ファイルのインポート

待機系

実行系ノードからコピーしたエクスポートファイルを、待機系ノードにインポートします。

実行系ノードで作成した論理ホストの Performance Management のプログラムを、待機系ノードで実行するための設定には、`jpcconf ha import` コマンドを使用します。1つの論理ホストに複数の Performance Management のプログラムがセットアップされている場合は、一括してインポートされます。

なお、このコマンドを実行するときには、共有ディスクをオンラインにしておく必要はありません。

1. `jpcconf ha import` コマンドを実行して、論理ホスト環境定義をインポートする。

次のようにコマンドを実行します。

```
jpcconf ha import -f lhostexp.txt
```

コマンドを実行すると、待機系ノードの環境を、エクスポートファイルの内容と同じ環境になるように設定変更します。これによって、論理ホストの PFM - Agent for HiRDB を起動するための設定が実施されます。

また、セットアップ時に `jpcconf port` コマンドで固定のポート番号を設定している場合も、同様に設定されます。

2. `jpcconf ha list` コマンドを実行して、論理ホスト設定を確認する。

次のようにコマンドを実行します。

```
jpcconf ha list -key all
```

実行系ノードで `jpcconf ha list` を実行した時と同じ内容が表示されることを確認してください。

(15) クラスタソフトへの PFM - Agent の登録

実行系

待機系

Performance Management のプログラムを論理ホスト環境で運用する場合は、クラスタソフトに登録して、クラスタソフトからの制御で Performance Management のプログラムを起動したり停止したりするように環境設定します。

クラスタソフトへ PFM - Agent for HiRDB を登録する方法は、クラスタソフトのマニュアルを参照してください。

PFM - Agent for HiRDB をクラスタソフトに登録するときの設定内容を、WSFC に登録する項目を例として説明します。

PFM - Agent for HiRDB の場合、次の表のサービスをクラスタに登録します。

表 4-3 クラスタソフトに登録する PFM - Agent for HiRDB のサービス

項目番	名前	サービス名	依存関係
1	PFM - Agent Store for HiRDB インスタンス名 [LHOST]	JP1PCAGT_BS_インスタンス名 [LHOST]	IP アドレスリソース 物理ディスクリソース HiRDB Database リソース
2	PFM - Agent for HiRDB インスタンス名 [LHOST]	JP1PCAGT_BA_インスタンス名 [LHOST]	項目 1 のクラスタリソース
3	PFM - Action Handler [LHOST]	JP1PCMGR_PH [LHOST]	IP アドレスリソース 物理ディスクリソース

[LHOST]の部分は、論理ホスト名に置き換えてください。インスタンス名が HRD1、論理ホスト名が jpl-hal の場合、サービスの名前は「PFM - Agent Store for HiRDB HRD1 [jpl-hal]」、サービス名は「JP1PCAGT_BS_HRD1 [jpl-hal]」のようになります。

WSFC の場合は、これらのサービスを WSFC のリソースとして登録します。各リソースの設定は次のようにします。下記の [] は、WSFC の設定項目です。

- ・[リソースの種類] は「汎用サービス」として登録する。
- ・[リソース名], [依存関係], および [サービス名] を表 4-3 のとおりに設定する。
なお、リソース名はサービスを表示するときの名称で、サービス名は WSFC から制御するサービスを指定するときの名称です。
- ・[セットアップパラメータ] および [レジストリのレプリケーション] は設定しない。
- ・プロパティの [ポリシー] タブは、Performance Management のプログラムの障害時にフェールオーバーするかしないかの運用に合わせて設定する。

例えば、PFM - Agent for HiRDB の障害時に、フェールオーバーするように設定するには、次のように設定します。

[リソースが失敗状態になった場合は、現在のノードで再起動を試みる] : チェックする

[再起動に失敗した場合は、このサービスまたはアプリケーションのすべてのリソースをフェールオーバーする] : チェックする

[指定期間内での再起動の試行回数] : 3※

注※

[指定期間内での再起動の試行回数] は 3 回を目安に設定してください。

注意

- ・クラスタに登録するサービスは、クラスタから起動および停止を制御しますので、OS 起動時に自動起動しないよう [スタートアップの種類] を [手動] に設定してください。なお、jpcconf ha setup コマンドでセットアップした直後のサービスは [手動] に設定されています。また、次のコマンドで強制停止しないでください。

```
jpcspm stop -key all -lhost 論理ホスト名 -kill immediate
```

- ・ 統合管理製品 (JP1/IM) と連携している場合は、JP1/Base のサービスが停止する前に PFM - Agent for HiRDB のサービスが停止する依存関係を設定してください。

(16) クラスタソフトからの起動・停止の確認

実行系

待機系

クラスタソフトからの操作で、Performance Management のプログラムの起動および停止を各ノードで実行し、正常に動作することを確認してください。

(17) クラスタシステムでの環境設定

実行系

待機系

Performance Management のプログラムのセットアップ終了後、PFM - Web Console から、運用に合わせて監視対象の稼働状況についてのレポートを表示できるようにしたり、監視対象で問題が発生したときにユーザーに通知できるようにしたりするために、Performance Management のプログラムの環境を設定します。

Performance Management のプログラムの環境設定方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、クラスタシステムでの構築と運用について説明している章を参照してください。

4.4 クラスタシステムでのインストールとセットアップ (UNIX の場合)

ここでは、クラスタシステムでの PFM - Agent for HiRDB のインストールとセットアップの手順について説明します。

なお、PFM - Manager のインストールとセットアップの手順については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、クラスタシステムでの構築と運用について説明している章を参照してください。

4.4.1 クラスタシステムでのインストールとセットアップの前に確認すること (UNIX の場合)

インストールおよびセットアップを開始する前提条件、必要な情報、および注意事項について説明します。

(1) 前提条件

PFM - Agent for HiRDB をクラスタシステムで使用する場合、次に示す前提条件があります。

(a) クラスタシステム

次の条件が整っていることを確認してください。

- クラスタシステムがクラスタソフトによって制御されていること。
- クラスタソフトが論理ホスト運用する PFM - Agent for HiRDB の起動や停止などを制御するように設定されていること。このとき、PFM - Agent for HiRDB が、監視対象の HiRDB と連動してフェールオーバーするように設定すること。

(b) 共有ディスク

次の条件が整っていることを確認してください。

- 論理ホストごとに共有ディスクがあり、実行系ノードから待機系ノードへ引き継げること。
- 共有ディスクが、各ノードに物理的に Fibre Channel や SCSI で接続されていること。
Performance Management では、ネットワークドライブや、ネットワーク経由でレプリケーションしたディスクを共有ディスクとして使う構成はサポートされていません。
- フェールオーバーの際に、何らかの問題によって共有ディスクを使用中のプロセスが残った場合でも、クラスタソフトなどの制御によって強制的に共有ディスクをオフラインにしてフェールオーバーできること。
- 1 つの論理ホストで複数の PFM 製品を運用する場合、共有ディスクのディレクトリ名が同じであること。
なお、Store データベースについては格納先を変更して、共有ディスク上のほかのディレクトリに格納できます。

(c) 論理ホスト名, 論理 IP アドレス

次の条件が整っていることを確認してください。

- 論理ホストごとに論理ホスト名, および論理ホスト名と対応する論理 IP アドレスがあり, 実行系ノードから待機系ノードに引き継げること。
- 論理ホスト名と論理 IP アドレスが, hosts ファイルやネームサーバに設定されていること。
- DNS 運用している場合は, FQDN 名ではなく, ドメイン名を除いたホスト名を論理ホスト名として使用していること。
- 物理ホスト名と論理ホスト名は, システムの中でユニークであること。

注意

- 論理ホスト名に, 物理ホスト名 (uname -n コマンドで表示されるホスト名) を指定しないでください。正常に通信処理がされなくなるおそれがあります。
- 論理ホスト名に使用できる文字は, 1~32 バイトの半角英数字です。次の記号および空白文字は指定できません。
/ ¥ : ; * ? ' " < > | & = , .
- 論理ホスト名には, 「localhost」, IP アドレス, 「-」 から始まるホスト名を指定できません。

(2) 論理ホスト運用する PFM - Agent for HiRDB のセットアップに必要な情報

論理ホスト運用する PFM - Agent for HiRDB をセットアップするには, 通常の PFM - Agent for HiRDB のセットアップで必要になる環境情報に加えて, 次の表の情報が必要です。

表 4-4 論理ホスト運用の PFM - Agent for HiRDB のセットアップに必要な情報

項目	例
論理ホスト名	jp1-ha1
論理 IP アドレス	172.16.92.100
共有ディスク	/jp1

なお, 一つの論理ホストで論理ホスト運用する Performance Management のプログラムが複数ある場合も, 同じ共有ディスクのディレクトリを使用します。

共有ディスクに必要な容量については, 「[付録 A システム見積もり](#)」を参照してください。

(3) PFM - Agent for HiRDB で論理ホストをフェールオーバーさせる場合の注意事項

PFM - Agent for HiRDB を論理ホスト運用するシステム構成の場合、PFM - Agent for HiRDB の障害によって論理ホスト全体をフェールオーバーさせるかどうかを検討してください。

PFM - Agent for HiRDB の障害で論理ホスト全体をフェールオーバーさせると、PFM - Agent for HiRDB が監視対象としている同じ論理ホストで運用する業務アプリケーションもフェールオーバーすることになり、業務に影響を与えるおそれがあります。

通常は、PFM - Agent for HiRDB に異常が発生しても、HiRDB の動作に影響がないように、次のどちらかのようにクラスタソフトで設定することをお勧めします。

- PFM - Agent for HiRDB の動作監視をしない
- PFM - Agent for HiRDB の異常を検知してもフェールオーバーしない

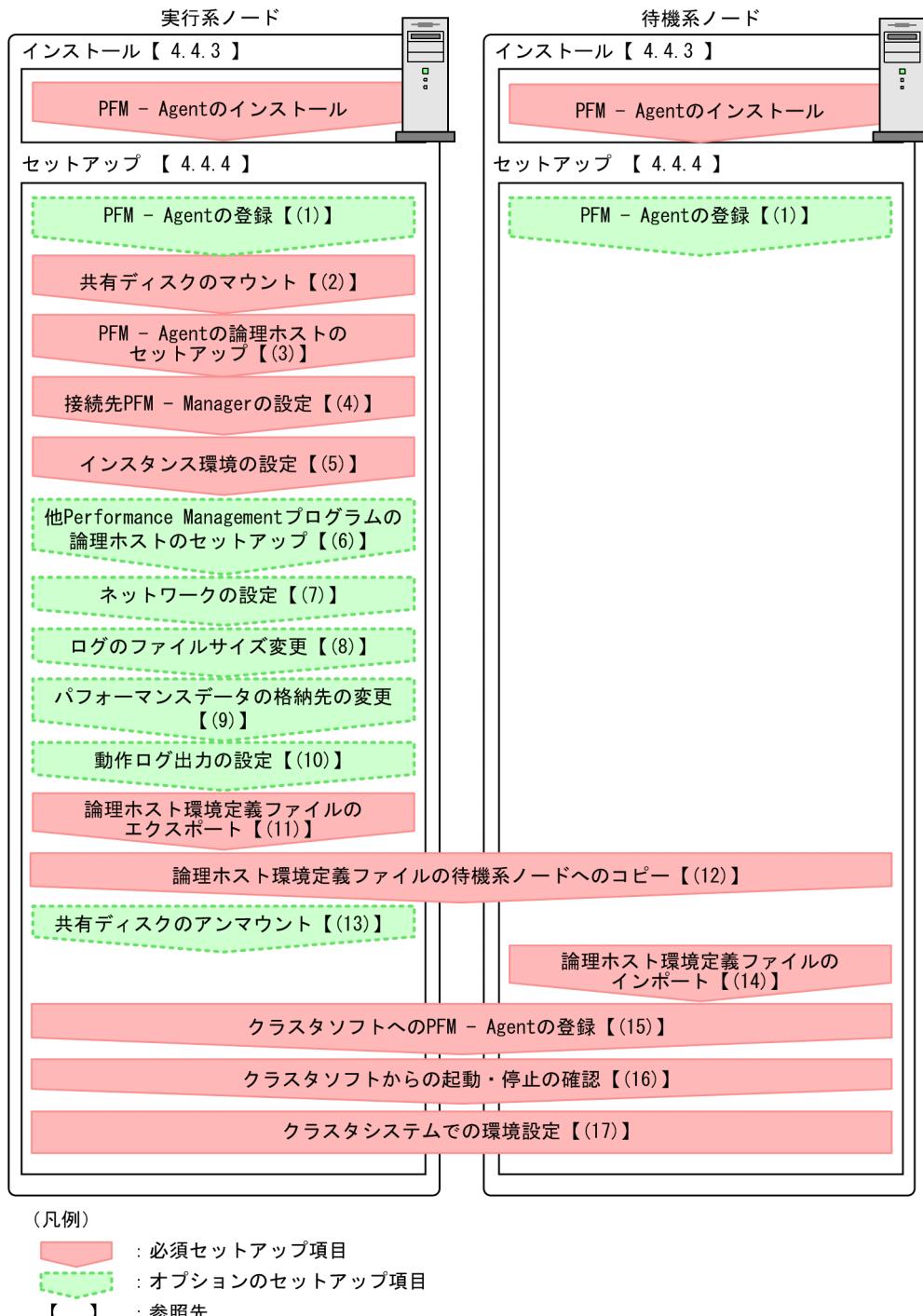
(4) 論理ホスト運用時のバージョンアップに関する注意事項

論理ホスト運用の PFM - Agent for HiRDB をバージョンアップする場合は、実行系ノードまたは待機系ノードのどちらか一方で、共有ディスクをオンラインにする必要があります。

4.4.2 クラスタシステムでのインストールとセットアップの流れ（UNIX の場合）

クラスタシステムで、論理ホスト運用する PFM - Agent for HiRDB のインストールおよびセットアップの流れを次の図に示します。

図 4-4 クラスタシステムで論理ホスト運用する PFM - Agent for HiRDB のインストールおよびセットアップの流れ (UNIX の場合)



注意

論理ホスト環境の PFM - Agent をセットアップしても、物理ホスト環境の PFM - Agent の定義内容は引き継がれません。論理ホスト環境および物理ホスト環境では、インスタンス環境を設定した時点で、新規に環境が作成されます。

4.4.3 クラスタシステムでのインストール手順 (UNIX の場合)

実行系ノードおよび待機系ノードに PFM - Agent for HiRDB をインストールします。

注意事項

インストール先はローカルディスクです。共有ディスクにはインストールしないでください。

インストール手順は非クラスタシステムの場合と同じです。インストール手順については、「[3.3 インストール手順](#)」を参照してください。

4.4.4 クラスタシステムでのセットアップ手順 (UNIX の場合)

ここでは、クラスタシステムで Performance Management を運用するための、セットアップについて説明します。

セットアップ手順には、実行系ノードの手順と、待機系ノードの手順があります。実行系ノード、待機系ノードの順にセットアップしてください。

実行系 は実行系ノードで行う項目を、**待機系** は待機系ノードで行う項目を示します。また、**〈オプション〉** は使用する環境によって必要になるセットアップ項目、またはデフォルトの設定を変更する場合のオプションのセットアップ項目を示します。

(1) PFM - Agent の登録 実行系 待機系 〈オプション〉

PFM - Manager および PFM - Web Console を使って PFM - Agent を一元管理するために、PFM - Manager および PFM - Web Console に PFM - Agent for HiRDB を登録する必要があります。PFM - Agent for HiRDB を登録する必要があるのは次の場合です。

- Performance Management システムに新しく PFM - Agent for HiRDB を追加する場合
- すでに登録している PFM - Agent for HiRDB のデータモデルのバージョンを更新する場合

登録は PFM - Manager 上および PFM - Web Console 上で実施します。手順は非クラスタシステムの場合と同じです。

手順については、「[3.4.2 PFM - Manager および PFM - Web Console への PFM - Agent for HiRDB の登録](#)」を参照してください。

(2) 共有ディスクのマウント 実行系

共有ディスクがマウントされていることを確認します。共有ディスクがマウントされていない場合は、クラスタソフトからの操作やボリュームマネージャの操作などで、共有ディスクをマウントしてください。

(3) PFM - Agent の論理ホストのセットアップ

実行系

jpcconf ha setup コマンドを実行して論理ホスト環境を作成します。コマンドを実行すると、共有ディスクに必要なデータがコピーされ、論理ホスト用の定義を設定されて、論理ホスト環境が作成されます。

注意

コマンドを実行する前に、Performance Management システム全体で、Performance Management のプログラムおよびサービスをすべて停止してください。サービスの停止方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の Performance Management の起動と停止について説明している章を参照してください。

手順を次に示します。

1. jpcconf ha setup コマンドを実行して、PFM - Agent for HiRDB の論理ホスト環境を作成する。

次のようにコマンドを実行します。

```
jpcconf ha setup -key HiRDB -lhost jp1-ha1hrd -d /jp1
```

論理ホスト名は、-lhost オプションで指定します。ここでは、論理ホスト名を jp1-ha1hrd としています。DNS 運用をしている場合はドメイン名を省略した論理ホスト名を指定してください。

共有ディスクのディレクトリ名は、-d オプションの環境ディレクトリ名に指定します。例えば-d /jp1 と指定すると/jp1/jp1pc が作成されて、論理ホスト環境のファイルが作成されます。

2. jpcconf ha list コマンドを実行して、論理ホストの設定を確認する。

次のようにコマンドを実行します。

```
jpcconf ha list -key all
```

作成した論理ホスト環境が正しいことを確認してください。

(4) 接続先 PFM - Manager の設定

実行系

jpcconf mgrhost define コマンドを実行して、PFM - Agent for HiRDB を管理する PFM - Manager を設定します。

1. jpcconf mgrhost define コマンドを実行して、接続先 PFM - Manager を設定する。

次のようにコマンドを実行します。

```
jpcconf mgrhost define -host jp1-hal -lhost jp1-ha1hrd
```

接続先 PFM - Manager のホスト名は、-host オプションで指定します。接続先 PFM - Manager が論理ホスト運用されている場合は、-host オプションに接続先 PFM - Manager の論理ホスト名を指定します。ここでは、PFM - Manager の論理ホスト名を jp1-hal としています。

また、PFM - Agent for HiRDB の論理ホスト名は、-lhost で指定します。ここでは、PFM - Agent for HiRDB の論理ホスト名を jp1-ha1hrd としています。

(5) インスタンス環境の設定

実行系

`jpcconf inst setup` コマンドを実行して、PFM - Agent for HiRDB のインスタンス環境を設定します。

設定手順は、非クラスタシステムの場合と同じです。ただし、クラスタシステムの場合、`jpcconf inst setup` コマンドの実行時に、「-lhost」で論理ホスト名を指定する必要があります。

クラスタシステムの場合の `jpcconf inst setup` コマンドの指定方法を次に示します。

```
jpcconf inst setup -key HiRDB -lhost 論理ホスト名 -inst インスタンス名
```

設定するインスタンス環境は、非クラスタシステムの場合と同じです。インスタンスはすべて異なる名称で設定してください。設定するインスタンス情報については、「[3.4 セットアップ](#)」を参照してください。

(6) 他 Performance Management プログラムの論理ホストのセットアップ

実行系

オプション

PFM - Agent for HiRDB のほかに、同じ論理ホストにセットアップする PFM - Manager や PFM - Agent がある場合は、この段階でセットアップしてください。

セットアップ手順については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、クラスタシステムでの構築と運用について説明している章、または各 PFM - Agent マニュアルの、クラスタシステムでの運用について説明している章を参照してください。

(7) ネットワークの設定

実行系

オプション

Performance Management を使用するネットワーク構成に応じて、変更する場合にだけ必要な設定です。

ネットワークの設定では次の 2 つの項目を設定できます。

- IP アドレスを設定する

複数の LAN に接続されたネットワーク環境で Performance Management を運用するときに使用する IP アドレスを指定したい場合には、`jpchosts` ファイルの内容を直接編集します。

このとき、編集した `jpchosts` ファイルは、実行系ノードから待機系ノードにコピーしてください。

IP アドレスの設定方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」のインストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

- ポート番号を設定する

ファイアウォール経由で Performance Management のプログラム間の通信をする場合には、`jpcconf port` コマンドを使用してポート番号を設定します。

ポート番号の設定方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章、およびマニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、クラスタシステムでの運用について説明している章を参照してください。

(8) ログのファイルサイズ変更 実行系 オプション

Performance Management の稼働状況を、Performance Management 独自のログファイルに出力します。このログファイルを「共通メッセージログ」と呼びます。このファイルサイズを変更したい場合に必要な設定です。

詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

(9) パフォーマンスデータの格納先の変更 実行系 オプション

PFM - Agent で管理されるパフォーマンスデータを格納するデータベースの保存先、バックアップ先、エクスポート先、またはインポート先のフォルダを変更したい場合に必要な設定です。

設定方法については、「[3.7.1 パフォーマンスデータの格納先の変更](#)」を参照してください。

(10) 動作ログ出力の設定 実行系 オプション

アラーム発生時に動作ログを出力したい場合に必要な設定です。動作ログとは、システム負荷などのしきい値オーバーに関するアラーム機能と連動して出力される履歴情報です。

設定方法については、「[付録 動作ログの出力](#)」を参照してください。

(11) 論理ホスト環境定義ファイルのエクスポート 実行系

PFM - Agent for HiRDB の論理ホスト環境が作成できたら、環境定義をファイルにエクスポートします。エクスポートでは、その論理ホストにセットアップされている Performance Management のプログラムの定義情報を一括してファイル出力します。同じ論理ホストにほかの Performance Management のプログラムをセットアップする場合は、セットアップが一とおり済んだあとにエクスポートしてください。

論理ホスト環境定義をエクスポートする手順を次に示します。

1. `jpcconf ha export` コマンドを実行して、論理ホスト環境定義をエクスポートする。

これまでの手順で作成した論理ホスト環境の定義情報を、エクスポートファイルに出力します。エクスポートファイル名は任意です。

例えば、`lhostexp.txt` ファイルに論理ホスト環境定義をエクスポートする場合、次のようにコマンドを実行します。

```
jpcconf ha export -f lhostexp.txt
```

(12) 論理ホスト環境定義ファイルの待機系ノードへのコピー 実行系

待機系

「(11) 論理ホスト環境定義ファイルのエクスポート」でエクスポートした論理ホスト環境定義ファイルを、実行系ノードから待機系ノードにコピーします。

(13) 共有ディスクのアンマウント

実行系

〈オプション〉

ファイルシステムをアンマウントして、作業を終了します。なお、その共有ディスクを続けて使用する場合は、ファイルシステムをアンマウントする必要はありません。

注意

共有ディスクがアンマウントされていても、指定した環境ディレクトリに `jp1pc` ディレクトリがあり、`jp1pc` ディレクトリ以下にファイルがある場合は、共有ディスクをマウントしないでセットアップしています。この場合は次の手順で対処してください。

1. ローカルディスク上の指定した環境ディレクトリにある `jp1pc` ディレクトリを `tar` コマンドでアーカイブする。
2. 共有ディスクをマウントする。
3. 共有ディスク上に指定した環境ディレクトリがない場合は、環境ディレクトリを作成する。
4. 共有ディスク上の環境ディレクトリに `tar` ファイルを展開する。
5. 共有ディスクをアンマウントする。
6. ローカルディスク上の指定した環境ディレクトリにある `jp1pc` ディレクトリ以下を削除する。

(14) 論理ホスト環境定義ファイルのインポート

待機系

実行系ノードからコピーしたエクスポートファイルを、待機系ノードにインポートします。

実行系ノードで作成した論理ホストの Performance Management のプログラムを、待機系ノードで実行するための設定には、`jpcconf ha import` コマンドを使用します。1つの論理ホストに複数の Performance Management のプログラムがセットアップされている場合は、一括してインポートされます。

なお、このコマンドを実行するときには、共有ディスクをマウントしておく必要はありません。

1. `jpcconf ha import` コマンドを実行して、論理ホスト環境定義をインポートする。

次のようにコマンドを実行します。

```
jpcconf ha import -f lhostexp.txt
```

コマンドを実行すると、待機系ノードの環境を、エクスポートファイルの内容と同じ環境になるように設定変更します。これによって、論理ホストの PFM - Agent for HiRDB を起動するための設定が実施されます。

また、セットアップ時に `jpcconf port` コマンドで固定のポート番号を設定している場合も、同様に設定されます。

2. `jpcconf ha list` コマンドを実行して、論理ホスト設定を確認する。

次のようにコマンドを実行します。

```
jpcconf ha list -key all
```

実行系ノードで `jpcconf ha list` を実行した時と同じ内容が表示されることを確認してください。

(15) クラスタソフトへの PFM - Agent の登録

実行系

待機系

Performance Management のプログラムを論理ホスト環境で運用する場合は、クラスタソフトに登録して、クラスタソフトからの制御で Performance Management のプログラムを起動したり停止したりするように環境設定します。

クラスタソフトへ PFM - Agent for HiRDB を登録する方法は、クラスタソフトのマニュアルを参照してください。

ここでは、PFM - Agent for HiRDB をクラスタソフトに登録するときに設定する内容を説明します。

一般に UNIX のクラスタソフトに、アプリケーションを登録する場合に必要な項目は「起動」「停止」「動作監視」「強制停止」の 4 つがあります。

PFM - Agent for HiRDB での設定方法を次の表に示します。

表 4-5 クラスタソフトに登録する PFM - Agent for HiRDB の制御方法

項目	説明
起動	<p>次のコマンドを順に実行して、PFM - Agent for HiRDB を起動する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"><code>/opt/jp1pc/tools/jpcspm start -key AH -lhost 論理ホスト名 /opt/jp1pc/tools/jpcspm start -key HiRDB -lhost 論理ホスト名</code></div> <p>起動するタイミングは、共有ディスクおよび論理 IP アドレスが使用できる状態になったあととする。</p>
停止	<p>次のコマンドを順に実行して、PFM - Agent for HiRDB を停止する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"><code>/opt/jp1pc/tools/jpcspm stop -key HiRDB -lhost 論理ホスト名 /opt/jp1pc/tools/jpcspm stop -key AH -lhost 論理ホスト名</code></div> <p>停止するタイミングは、共有ディスクおよび論理 IP アドレスを使用できない状態にする前とする。</p> <p>なお、障害などでサービスが停止しているときは、jpcspm stop コマンドの戻り値が 3 になる。この場合はサービスが停止されているので、正常終了と扱う。戻り値で実行結果を判定するクラスタソフトの場合は、戻り値を 0 にするなどで対応すること。</p>
動作監視	<p>次のプロセスが動作していることを、ps コマンドで確認する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"><code>ps -ef grep "プロセス名 論理ホスト名.*インスタンス名" grep -v "grep.*監視対象のプロセス"</code></div> <p>監視対象のプロセスは、次のとおり。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"><code>jpcagtb_main, agtb/jpcsto_インスタンス名, jpcah</code></div> <p>プロセス名については、「付録 D プロセス一覧」およびマニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の付録を参照のこと。なお、運用中にメンテナンスなどで Performance Management を一時的に停止する場合を想定して、動作監視を抑止する方法（例えば、メンテナンス中のファイルがあると監視しないなど）を用意しておくことをお勧めします。</p>
強制停止	<p>強制停止が必要な場合は、次のコマンドを実行する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"><code>jpcspm stop -key all -lhost 論理ホスト名 -kill immediate</code></div> <p>第 1 引数のサービスキーに指定できるのは、all だけである。</p>

項目	説明
強制停止	<p>注意</p> <p>コマンドを実行すると、指定した論理ホスト環境すべての Performance Management のプロセスが、SIGKILL 送信によって強制停止される。このとき、サービス単位ではなく、論理ホスト単位で Performance Management が強制停止される。</p> <p>なお、強制停止は、通常の停止を実行しても停止できない場合に限って実行するよう設定すること。</p>

注意

- ・ クラスタに登録する Performance Management のプログラムは、クラスタから起動および停止を制御しますので、OS 起動時の自動起動設定をしないでください。
- ・ Performance Management のプログラムを日本語環境で実行する場合、クラスタソフトに登録するスクリプトで LANG 環境変数を設定してから、Performance Management のコマンドを実行するようにしてください。
- ・ クラスタソフトがコマンドの戻り値で実行結果を判定する場合は、Performance Management のコマンドの戻り値をクラスタソフトの期待する値に変換するように設定してください。Performance Management のコマンドの戻り値については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」を参照してください。
- ・ ps コマンドで動作を監視する場合、事前に ps コマンドを実行して、論理ホスト名とインスタンス名をつなげた文字列がすべて表示されることを確認してください。文字列が途中までしか表示されない場合は、インスタンス名を短くしてください。
- ・ 統合管理製品（JP1/IM）と連携している場合は、JP1/Base のサービスが停止する前に PFM - Agent for HiRDB のサービスが停止する依存関係を設定してください。

(16) クラスタソフトからの起動・停止の確認

実行系

待機系

クラスタソフトからの操作で、Performance Management のプログラムの起動および停止を各ノードで実行し、正常に動作することを確認してください。

(17) クラスタシステムでの環境設定

実行系

待機系

Performance Management のプログラムのセットアップ終了後、PFM - Web Console から、運用に合わせて監視対象の稼働状況についてのレポートを表示できるようにしたり、監視対象で問題が発生したときにユーザーに通知できるようにしたりするために、Performance Management のプログラムの環境を設定します。

Performance Management のプログラムの環境設定方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、クラスタシステムでの構築と運用について説明している章を参照してください。

4.5 クラスタシステムでのアンインストールとアンセットアップ (Windows の場合)

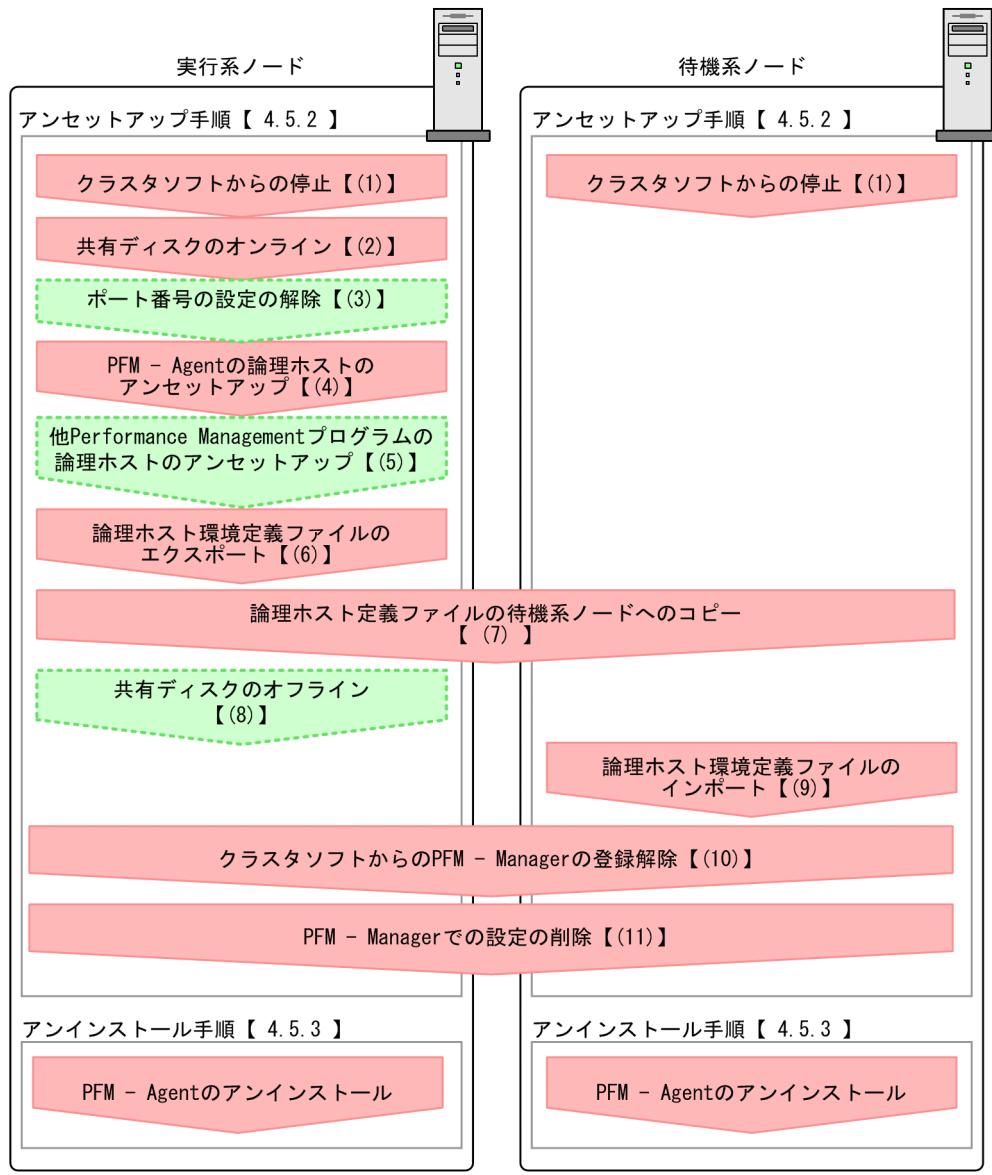
ここでは、クラスタシステムで運用していた PFM - Agent for HiRDB を、アンインストールする方法とアンセットアップする方法について説明します。

なお、PFM - Manager のアンインストールとアンセットアップについては、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、クラスタシステムでの構築と運用について説明している章を参照してください。

4.5.1 クラスタシステムでのアンインストールとアンセットアップの流れ (Windows の場合)

クラスタシステムで運用していた PFM - Agent for HiRDB のアンインストールおよびアンセットアップの流れを次の図に示します。

図 4-5 クラスタシステムで論理ホスト運用する PFM - Agent for HiRDB のアンインストールおよびアンセットアップの流れ (Windows の場合)



(凡例)

: 必須項目

: オプション項目

【 】 : 参照先

4.5.2 クラスタシステムでのアンセットアップ手順 (Windows の場合)

論理ホスト環境をアンセットアップします。アンセットアップ手順には、実行系ノードの手順と、待機系ノードの手順があります。実行系ノード、待機系ノードの順にアンセットアップしてください。

実行系 は実行系ノードで行う項目を、**待機系** は待機系ノードで行う項目を示します。また、**<オプション>** は使用する環境によって必要になるセットアップ項目、またはデフォルトの設定を変更する場合のオプションのセットアップ項目を示します。

PFM - Agent for HiRDB のアンセットアップ手順について説明します。

(1) クラスタソフトからの停止 実行系 待機系

クラスタソフトからの操作で、実行系ノードと待機系ノードで起動している Performance Management のプログラムおよびサービスを停止してください。停止する方法については、クラスタソフトのマニュアルを参照してください。

(2) 共有ディスクのオンライン 実行系

共有ディスクがオンラインになっていることを確認します。共有ディスクがオンラインになっていない場合は、クラスタソフトからの操作やボリュームマネージャの操作などで、共有ディスクをオンラインにしてください。

(3) ポート番号の設定の解除 実行系 <オプション>

この手順は、ファイアウォールを使用する環境で、セットアップ時に `jpcconf port` コマンドでポート番号を設定した場合だけに必要な手順です。

ポート番号の解除方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章、およびマニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、クラスタシステムでの構築と運用について説明している章を参照してください。

(4) PFM - Agent の論理ホストのアンセットアップ 実行系

手順を次に示します。

注意

共有ディスクがオフラインになっている状態で論理ホスト環境を削除した場合は、物理ホスト上に存在する論理ホストの設定だけが削除され、共有ディスク上のディレクトリやファイルは削除されません。この場合、共有ディスクをオンラインにし、環境ディレクトリ以下の `jp1pc` ディレクトリを手動で削除する必要があります。

1. `jpcconf ha list` コマンドを実行して、論理ホスト設定を確認する。

次のようにコマンドを実行します。

```
jpcconf ha list -key all -lhost jp1-ha1hrd
```

論理ホスト環境をアンセットアップする前に、現在の設定を確認します。論理ホスト名や共有ディスクのパスなどを確認してください。

2. PFM - Agent for HiRDB のインスタンス環境を削除する。

次のようにコマンドを実行します。

```
jpcconf inst unsetup -key HiRDB -lhost jp1-ha1hrd -inst HRD1
```

jpcconf inst unsetup コマンドを実行すると、論理ホストのインスタンスを起動するための設定が削除されます。また、共有ディスク上のインスタンス用のファイルが削除されます。

3. jpcconf ha unsetup コマンドを実行して、PFM - Agent for HiRDB の論理ホスト環境を削除する。

次のようにコマンドを実行します。

```
jpcconf ha unsetup -key HiRDB -lhost jp1-ha1hrd
```

jpcconf ha unsetup コマンドを実行すると、論理ホストの PFM - Agent for HiRDB を起動するための設定が削除されます。また、共有ディスク上の論理ホスト用のファイルが削除されます。

4. jpcconf ha list コマンドで、論理ホスト設定を確認する。

次のようにコマンドを実行します。

```
jpcconf ha list -key all
```

論理ホスト環境から PFM - Agent for HiRDB が削除されていることを確認してください。

5. HiRDB の初期化パラメーターを元に戻す。

PFM - Agent for HiRDB のレコード収集のために、HiRDB の初期化パラメーター「TIMED_STATISTICS」の値を変更している場合は、必要に応じて元に戻してください。

(5) 他 Performance Management プログラムの論理ホストのアンセットアップ

アップ 実行系 <オプション>

PFM - Agent for HiRDB のほかに、同じ論理ホストからアンセットアップする Performance Management のプログラムがある場合は、この段階でアンセットアップしてください。

アンセットアップ手順については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、クラスタシステムでの構築と運用について説明している章、または各 PFM - Agent マニュアルの、クラスタシステムでの運用について説明している章を参照してください。

(6) 論理ホスト環境定義ファイルのエクスポート 実行系

論理ホストの PFM - Agent for HiRDB を削除したら、環境定義をファイルにエクスポートします。

Performance Management では、環境定義のエクスポートおよびインポートによって実行系と待機系の環境を合わせる方式を採用しています。

実行系ノードでエクスポートした環境定義（Performance Management の定義が削除されている）を、待機系ノードにインポートすると、待機系ノードの既存の環境定義（Performance Management の定義

が削除前のままの状態で定義が残っている)と比較して差分(実行系ノードで削除された部分)を確認してPerformance Managementの環境定義を削除します。

手順を次に示します。

1. jpcconf ha export コマンドを実行して、論理ホスト環境定義をエクスポートする。

Performance Managementの論理ホスト環境の定義情報を、エクスポートファイルに出力します。エクスポートファイル名は任意です。

例えば、lhostexp.txtファイルに論理ホスト環境定義をエクスポートする場合、次のようにコマンドを実行します。

```
jpcconf ha export -f lhostexp.txt
```

(7) 論理ホスト環境定義ファイルの待機系ノードへのコピー

実行系

待機系

「(6) 論理ホスト環境定義ファイルのエクスポート」でエクスポートしたファイルを、実行系ノードから待機系ノードにコピーします。

(8) 共有ディスクのオフライン

実行系

〈オプション〉

クラスタソフトからの操作やボリュームマネージャの操作などで、共有ディスクをオフラインにして、作業を終了します。なお、その共有ディスクを続けて使用する場合は、オフラインにする必要はありません。

(9) 論理ホスト環境定義ファイルのインポート

待機系

実行系ノードからコピーしたエクスポートファイルを、待機系ノードに反映させるためにインポートします。なお、待機系ノードでは、インポート時に共有ディスクをオフラインにする必要はありません。

手順を次に示します。

1. jpcconf ha import コマンドを実行して、論理ホスト環境定義をインポートする。

```
jpcconf ha import -f lhostexp.txt
```

コマンドを実行すると、待機系ノードの環境を、エクスポートファイルの内容と同じ環境になるように設定変更します。これによって、論理ホストのPFM - Agent for HiRDBを起動するための設定が削除されます。ほかの論理ホストのPerformance Managementシリーズプログラムをアンセットアップしている場合は、それらの設定も削除されます。

また、セットアップ時にjpcconf portコマンドで固定のポート番号を設定している場合も、解除されます。

2. jpcconf ha list コマンドを実行して、論理ホスト設定を確認する。

次のようにコマンドを実行します。

```
jpcconf ha list -key all
```

実行系ノードで `jpcconf ha list` コマンドを実行したときと同じ内容が表示されることを確認してください。

(10) クラスタソフトからの PFM - Agent の登録解除

実行系

待機系

クラスタソフトから、論理ホストの PFM - Agent for HiRDB に関する設定を削除してください。

設定を削除する方法は、クラスタソフトのマニュアルを参照してください。

(11) PFM - Manager での設定の削除

実行系

待機系

PFM - Web Console で PFM - Manager にログインし、アンセットアップする PFM - Agent for HiRDB に関する定義を削除してください。

手順を次に示します。

1. PFM - Web Console から、エージェントを削除する。

2. PFM - Manager のエージェント情報を削除する。

例えば、PFM-Manager が論理ホスト `jp1-ha2` 上で動作し、PFM - Agent for HiRDB が論理ホスト `jp1-ha1` 上で動作している場合、次のように指定してコマンドを実行します。

```
jpctool service delete -id サービスID -host jp1-ha1hrd -lhost jp1-ha1
```

サービス ID には削除するエージェントのサービス ID を指定してください。

3. PFM - Manager サービスを再起動する。

サービスの起動方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の起動と停止について説明している章を参照してください。

4.5.3 クラスタシステムでのアンインストール手順 (Windows の場合)

PFM - Agent for HiRDB を実行系ノード、待機系ノードそれからアンインストールします。

アンインストール手順は、非クラスタシステムの場合と同じです。詳細は、「[2.5.4 アンインストール手順](#)」を参照してください。

注意

- PFM - Agent for HiRDB をアンインストールする場合は、PFM - Agent for HiRDB をアンインストールするノードの Performance Management のプログラムおよびサービスをすべて停止してください。
- 論理ホスト環境を削除しないで PFM - Agent for HiRDB をアンインストールした場合、環境ディレクトリが残ることがあります。その場合は、環境ディレクトリを削除してください。

4.6 クラスタシステムでのアンインストールとアンセットアップ (UNIX の場合)

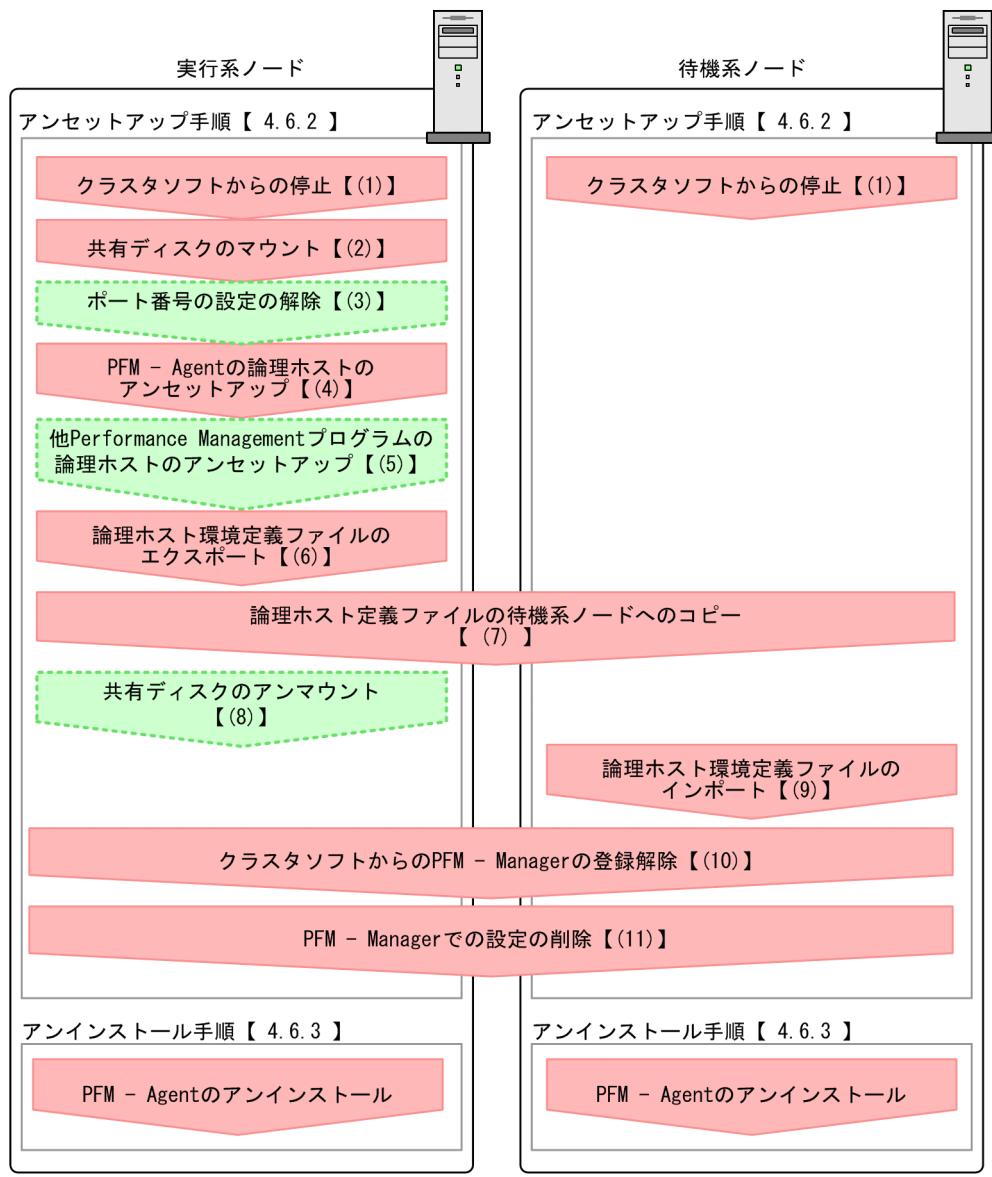
ここでは、クラスタシステムで運用していた PFM - Agent for HiRDB を、アンインストールする方法とアンセットアップする方法について説明します。

なお、PFM - Manager のアンインストールとアンセットアップについては、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、クラスタシステムでの構築と運用について説明している章を参照してください。

4.6.1 クラスタシステムでのアンインストールとアンセットアップの流れ (UNIX の場合)

クラスタシステムで運用していた PFM - Agent for HiRDB のアンインストールおよびアンセットアップの流れを次の図に示します。

図 4-6 クラスタシステムで論理ホスト運用する PFM - Agent for HiRDB のアンインストールおよびアンセットアップの流れ (UNIX の場合)



(凡例)

: 必須項目

: オプション項目

【 】 : 参照先

4.6.2 クラスタシステムでのアンセットアップ手順 (UNIX の場合)

論理ホスト環境をアンセットアップします。アンセットアップ手順には、実行系ノードの手順と、待機系ノードの手順があります。実行系ノード、待機系ノードの順にアンセットアップしてください。

実行系 は実行系ノードで行う項目を、**待機系** は待機系ノードで行う項目を示します。また、**〈オプション〉** は使用する環境によって必要になるセットアップ項目、またはデフォルトの設定を変更する場合のオプションのセットアップ項目を示します。

PFM - Agent for HiRDB のアンセットアップ手順について説明します。

(1) クラスタソフトからの停止 実行系 待機系

クラスタソフトからの操作で、実行系ノードと待機系ノードで起動している Performance Management のプログラムおよびサービスを停止してください。停止する方法については、クラスタソフトのマニュアルを参照してください。

(2) 共有ディスクのマウント 実行系

共有ディスクがマウントされていることを確認します。共有ディスクがマウントされていない場合は、クラスタソフトからの操作やボリュームマネージャの操作などで、共有ディスクをマウントしてください。

注意

共有ディスクがアンマウントされている場合でも、アンセットアップする論理ホストの環境ディレクトリに `jp1pc` ディレクトリがあり、`jp1pc` ディレクトリ以下にファイルがある場合は、共有ディスクをマウントしないでセットアップしています。この場合は次の手順で対処してください。

1. ローカルディスク上のアンセットアップする論理ホストの環境ディレクトリにある `jp1pc` ディレクトリを `tar` コマンドでアーカイブする。
2. 共有ディスクをマウントする。
3. 共有ディスク上にアンセットアップする論理ホストの環境ディレクトリがない場合は、環境ディレクトリを作成する。
4. 共有ディスク上のアンセットアップする論理ホストの環境ディレクトリに `tar` ファイルを展開する。
5. 共有ディスクをアンマウントする。
6. ローカルディスク上のアンセットアップする論理ホストの環境ディレクトリにある `jp1pc` ディレクトリ以下を削除する。

(3) ポート番号の設定の解除 実行系 オプション

この手順は、ファイアウォールを使用する環境で、セットアップ時に `jpcconf port` コマンドでポート番号を設定した場合だけに必要な手順です。

ポート番号の解除方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章、およびマニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、クラスタシステムでの運用について説明している章を参照してください。

(4) PFM - Agent の論理ホストのアンセットアップ

実行系

手順を次に示します。

注意

共有ディスクがマウントされていない状態で論理ホスト環境を削除した場合は、物理ホスト上に存在する論理ホストの設定が削除され、共有ディスク上のディレクトリやファイルは削除されません。この場合、共有ディスクをマウントして、環境ディレクトリ以下の jpcconf ディレクトリを手動で削除する必要があります。

1. jpcconf ha list コマンドを実行して、論理ホスト設定を確認する。

次のようにコマンドを実行します。

```
jpcconf ha list -key all -lhost jp1-ha1hrd
```

論理ホスト環境をアンセットアップする前に、現在の設定を確認します。論理ホスト名や共有ディスクのパスなどを確認してください。

2. PFM - Agent for HiRDB のインスタンス環境を削除する。

次のようにコマンドを実行します。

```
jpcconf inst unsetup -key HiRDB -lhost jp1-ha1hrd -inst HRD1
```

jpcconf inst unsetup コマンドを実行すると、論理ホストのインスタンスを起動するための設定が削除されます。また、共有ディスク上のインスタンス用のファイルが削除されます。共用ディスクがアンマウントされている場合は、論理ホストの設定だけが削除されます。共有ディスク上のディレクトリやファイルは削除されません。

3. jpcconf ha unsetup コマンドを実行して、PFM - Agent for HiRDB の論理ホスト環境を削除する。

次のようにコマンドを実行します。

```
jpcconf ha unsetup -key HiRDB -lhost jp1-ha1hrd
```

jpcconf ha unsetup コマンドを実行すると、論理ホストの PFM - Agent for HiRDB を起動するための設定が削除されます。また、共有ディスク上の論理ホスト用のファイルが削除されます。共用ディスクがマウントされていない場合は、論理ホストの設定だけが削除されます。共有ディスク上のディレクトリやファイルは削除されません。

4. jpcconf ha list コマンドで、論理ホスト設定を確認する。

次のようにコマンドを実行します。

```
jpcconf ha list -key all
```

論理ホスト環境から PFM - Agent for HiRDB が削除されていることを確認してください。

5. HiRDB の初期化パラメーターを元に戻す。

PFM - Agent for HiRDB のレコード収集のために、HiRDB の初期化パラメーター「TIMED_STATISTICS」の値を変更している場合は、必要に応じて元に戻してください。

(5) 他 Performance Management プログラムの論理ホストのアンセット

アップ 実行系 <オプション>

PFM - Agent for HiRDB のほかに、同じ論理ホストからアンセットアップする PFM - Agent がある場合は、この段階でアンセットアップしてください。

アンセットアップ手順については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、クラスタシステムでの構築と運用について説明している章、または各 PFM - Agent マニュアルの、クラスタシステムでの運用について説明している章を参照してください。

(6) 論理ホスト環境定義ファイルのエクスポート 実行系

論理ホストの PFM - Agent for HiRDB を削除したら、環境定義をファイルにエクスポートします。

Performance Management では、環境定義のエクスポートおよびインポートによって実行系と待機系の環境を合わせる方式を採用しています。

実行系ノードでエクスポートした環境定義（Performance Management の定義が削除されている）を、待機系ノードにインポートすると、待機系ノードの既存の環境定義（Performance Management の定義が削除前のままの状態で定義が残っている）と比較して差分（実行系ノードで削除された部分）を確認して Performance Management の環境定義を削除します。

手順を次に示します。

1. `jpcconf ha export` コマンドを実行して、論理ホスト環境定義をエクスポートする。

Performance Management の論理ホスト環境の定義情報を、エクスポートファイルに出力します。エクスポートファイル名は任意です。

例えば、`lhostexp.txt` ファイルに論理ホスト環境定義をエクスポートする場合、次のようにコマンドを実行します。

```
jpcconf ha export -f lhostexp.txt
```

(7) 論理ホスト環境定義ファイルの待機系ノードへのコピー 実行系

待機系

「(6) 論理ホスト環境定義ファイルのエクスポート」でエクスポートしたファイルを、実行系ノードから待機系ノードにコピーします。

(8) 共有ディスクのアンマウント 実行系 <オプション>

ファイルシステムをアンマウントして、作業を終了します。なお、その共有ディスクを続けて使用する場合は、ファイルシステムをアンマウントする必要はありません。

(9) 論理ホスト環境定義ファイルのインポート

待機系

実行系ノードからコピーしたエクスポートファイルを、待機系ノードに反映させるためにインポートします。なお、待機系ノードでは、インポート時に共有ディスクをアンマウントする必要はありません。

手順を次に示します。

1. `jpcconf ha import` コマンドを実行して、論理ホスト環境定義をインポートする。

次のようにコマンドを実行します。

```
jpcconf ha import -f lhostexp.txt
```

コマンドを実行すると、待機系ノードの環境を、エクスポートファイルの内容と同じ環境になるように設定変更します。これによって、論理ホストの PFM - Agent for HiRDB を起動するための設定が削除されます。ほかの論理ホストの Performance Management のプログラムをアンセットアップしている場合は、それらの設定も削除されます。

また、セットアップ時に `jpcconf port` コマンドで固定のポート番号を設定している場合も、解除されます。

2. `jpcconf ha list` コマンドを実行して、論理ホスト設定を確認する。

次のようにコマンドを実行します。

```
jpcconf ha list -key all
```

実行系ノードで `jpcconf ha list` コマンドを実行したときと同じ内容が表示されることを確認してください。

(10) クラスタソフトからの PFM - Agent の登録解除

実行系

待機系

クラスタソフトから、論理ホストの PFM - Agent for HiRDB に関する設定を削除してください。

設定を削除する方法は、クラスタソフトのマニュアルを参照してください。

(11) PFM - Manager での設定の削除

実行系

待機系

PFM - Web Console で PFM - Manager にログインし、アンセットアップする PFM - Agent for HiRDB に関する定義を削除してください。

手順を次に示します。

1. PFM - Web Console から、エージェントを削除する。

2. PFM - Manager のエージェント情報を削除する。

例えば、PFM-Manager が論理ホスト `jp1-ha2` 上で動作し、PFM - Agent for HiRDB が論理ホスト `jp1-ha1` 上で動作している場合、次のように指定してコマンドを実行します。

```
jpctool service delete -id サービスID -host jp1-ha1hrd -lhost jp1-ha1
```

サービス ID には削除するエージェントのサービス ID を指定してください。

3. PFM - Manager サービスを再起動する。

サービスの起動方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の起動と停止について説明している章を参照してください。

4.6.3 クラスタシステムでのアンインストール手順（UNIX の場合）

PFM - Agent for HiRDB を実行系ノード、待機系ノードそれぞれからアンインストールします。

アンインストール手順は、非クラスタシステムの場合と同じです。詳細は、「[3.5.4 アンインストール手順](#)」を参照してください。

注意

- PFM - Agent for HiRDB をアンインストールする場合は、PFM - Agent for HiRDB をアンインストールするノードの Performance Management のプログラムおよびサービスをすべて停止してください。
- 論理ホスト環境を削除しないで PFM - Agent for HiRDB をアンインストールした場合、環境ディレクトリが残ることがあります。その場合は、環境ディレクトリを削除してください。

4.7 クラスタシステムで運用する場合の注意事項

ここでは、PFM - Agent for HiRDB をクラスタシステムで運用する場合の注意事項について説明します。

4.7.1 クラスタシステム運用時に収集するパフォーマンスデータ中のホスト名について

PFM - Agent for HiRDB が収集するパフォーマンスデータには、ホスト名に関するフィールドが含まれているレコードがあります。

パフォーマンスデータ中のホスト名に関するフィールドを次の表に示します。

表 4-6 パフォーマンスデータ中のホスト名に関するフィールド

レコード名	フィールド名	格納されるホスト名	説明
Detail Communication Control Status (PD_CNST)	Host	物理/論理ホスト	接続しているインスタンスが起動しているホスト名。
HiRDB Message (PD_MLOG)	Host	物理/論理ホスト	HiRDB のメッセージを出力した HiRDB ユニットが稼働するホスト名。
HiRDB Server Status (PD_SVST)	Active Host	物理/論理ホスト	HiRDB サーバまたは HiRDB ユニットが稼働する実行系ホスト名。
	Host	物理/論理ホスト	HiRDB サーバまたは HiRDB ユニットが稼働する現用系ホスト名。
HiRDB Statistical Information SYS (PI_SSYS)	Host	物理/論理ホスト	HiRDB サーバの実行系ホスト名。
RDAREA HiRDB File (PI_RDFL)	Host	物理/論理ホスト	HiRDB ファイルが存在する実行系ホスト名。
RDAREA HiRDB File System Area (PI_RDFS)	Host	物理/論理ホスト	HiRDB ファイルシステム領域が存在する実行系ホスト名。
Server Lock Control Status (PI_LKST)	Host	物理/論理ホスト	接続しているインスタンスが起動しているホスト名。

4.7.2 レコード収集中のフェールオーバー

PI_SSYS レコード、PI_RDFS レコード、または PI_RDFL レコードの収集中に系切り替えが発生すると、統計情報を収集できないことがあります。統計情報が収集できない場合、フィールド値が 0% や 100% となるなどの不完全なレコードを出力することができます。次に例を示します。

図 4-7 HiRDB/シングルサーバが系切り替えした場合

a5, a6, b1, b4の統計情報を収集できません。

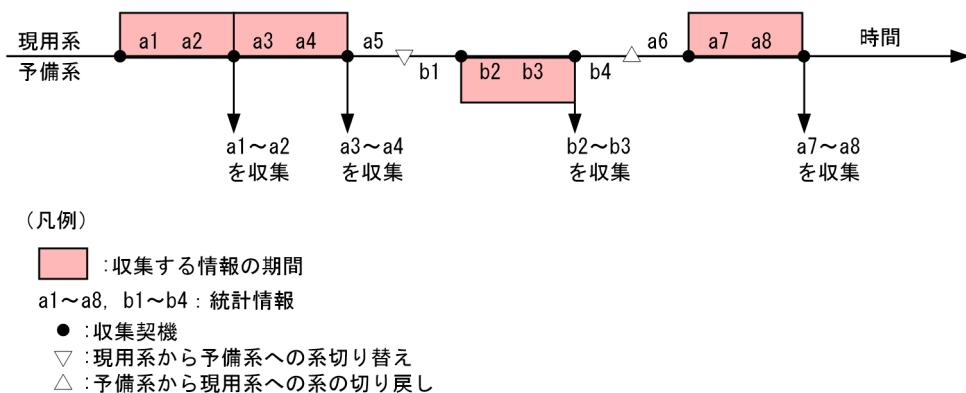
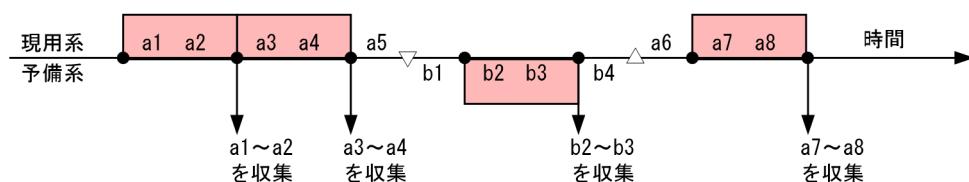


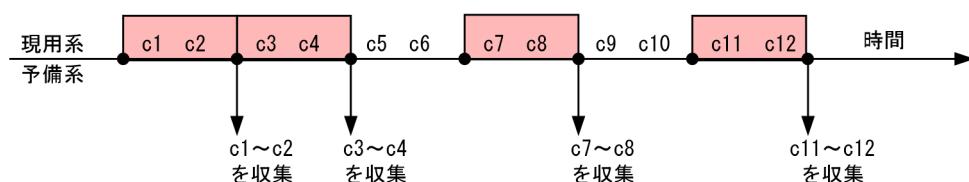
図 4-8 HiRDB/パラレルサーバのシステムマネージャが稼働しているユニットだけが系切り替えした場合

a5, a6, b1, b4, c5, c6, c9, c10の統計情報を収集することができません。

<システムマネージャが稼働しているユニット>



<システムマネージャが稼働していないユニット>



(凡例)

: 収集する情報の期間

a1~a8, b1~b4, c1~c12 : 統計情報

● : 収集契機

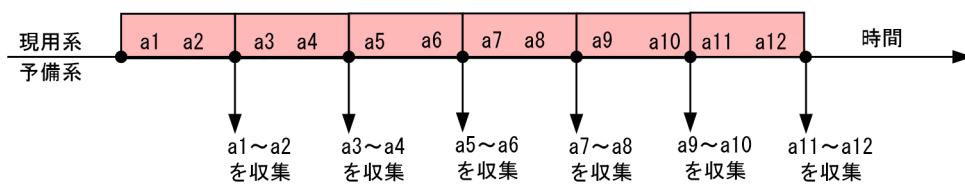
▽ : 現用系から予備系への系切り替え

△ : 予備系から現用系への系の切り戻し

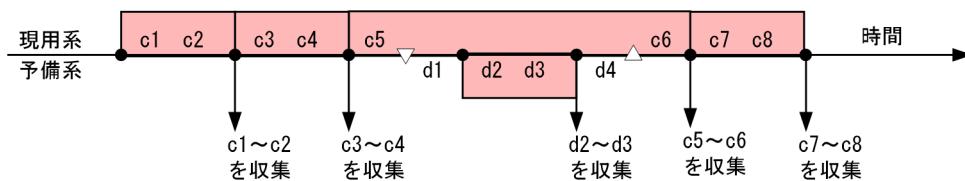
図 4-9 HiRDB/パラレルサーバのシステムマネージャが稼働していないユニットだけが系切り替えした場合

d1, d4の統計情報を収集することができません。

<システムマネージャが稼働しているユニット>



<システムマネージャが稼働していないユニット>



(凡例)

 : 収集する情報の期間

a1～a12, c1～c8, d1～d4 : 統計情報

● : 収集契機

▽ : 現用系から予備系への系切り替え

△ : 予備系から現用系への切り戻し

4.8 PFM - Agent for HiRDB のシステム構成の変更

監視対象システムのネットワーク構成の変更や、ホスト名の変更などに応じて、PFM - Agent for HiRDB のシステム構成を変更する場合があります。

PFM - Agent for HiRDB のシステム構成を変更する場合、PFM - Manager や PFM - Web Console の設定変更もあわせて行う必要があります。Performance Management のシステム構成を変更する手順の詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

論理ホスト名を変更するときに、固有の追加作業が必要な PFM - Agent もありますが、PFM - Agent for HiRDB の場合、固有の追加作業は必要ありません。

なお、インスタンスをアンセットアップしないでホスト名を変更すると、不要なディレクトリおよびファイルが残ることがあります。その場合、必要に応じて削除してください。

ホスト名の変更後に削除した方がよいディレクトリを次の表に示します。

表 4-7 ホスト名の変更後に削除した方がよいフォルダ（Windows の場合）

フォルダ名	対象ホスト	フォルダが生成される場面
インストール先フォルダ¥agtb¥sttmp¥HiRDB システムマネジャホスト名¥	すべての HiRDB ホスト	次のレコードの収集時 PI_SSYS レコード PI_RDFL レコード PI_RDFS レコード

表 4-8 ホスト名の変更後に削除した方がよいディレクトリ（UNIX の場合）

ディレクトリ名	対象ホスト	ディレクトリが生成される場面
/opt/jp1pc/agtb/sttmp/HiRDB システムマネ ジヤホスト名/インスタンス名/	すべての HiRDB ホスト	次のレコードの収集時 PI_SSYS レコード PI_RDFL レコード PI_RDFS レコード

4.9 クラスタシステムでの PFM - Agent for HiRDB の運用方式の変更

ここでは、クラスタシステムで PFM - Agent for HiRDB の運用方式を変更する手順を説明します。Performance Management 全体の運用方式を変更する手順については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

4.9.1 クラスタシステムでのインスタンス環境の更新

クラスタシステムでインスタンス環境を更新したい場合は、論理ホスト名とインスタンス名を確認し、インスタンス情報を更新します。インスタンス情報の設定は、実行系ノードの PFM - Agent ホストで実施します。

更新する情報については、「[2.7.3 インスタンス環境の更新](#)」(Windows の場合)、または「[3.7.3 インスタンス環境の更新](#)」(UNIX の場合) を参照して、あらかじめ確認してください。HiRDB のインスタンス情報については、HiRDB のマニュアルを参照してください。

論理ホスト名とインスタンス名を確認するには、`jpcconf ha list` コマンドを使用します。また、インスタンス環境を更新するには、`jpcconf inst setup` コマンドを使用します。

インスタンス環境を更新する手順を次に示します。複数のインスタンス環境を更新する場合は、この手順を繰り返し実施します。

1. 論理ホスト名とインスタンス名を確認する。

更新したいインスタンス環境で動作している PFM - Agent for HiRDB を示すサービスキーを指定して、`jpcconf ha list` コマンドを実行します。

例えば、PFM - Agent for HiRDB の論理ホスト名とインスタンス名を確認したい場合、次のように指定してコマンドを実行します。

```
jpcconf ha list -key HiRDB
```

設定されている論理ホスト名が `jp1-halhrd`、インスタンス名が `HRD1` の場合、次のように表示されます。

Logical Host Name	Key	Environment Directory	Instance Name
<code>jp1-halhrd</code>	<code>agt8</code>	論理ホストのパス	<code>HRD1</code>

2. 更新したいインスタンス環境の PFM - Agent for HiRDB のサービスが起動されている場合は、クラスタソフトからサービスを停止する。

3. 手順 2 で共有ディスクがアンマウントされる場合は、クラスタソフトからの操作やボリュームマネージャの操作などで、共有ディスクをマウントする。

4. 更新したいインスタンス環境の PFM - Agent for HiRDB を示すサービスキーおよびインスタンス名を指定して、`jpcconf inst setup` コマンドを実行する。

例えば、PFM - Agent for HiRDB の論理ホスト名が jp1-ha1hrd、インスタンス名が HRD1 のインスタンス環境を更新する場合、次のように指定してコマンドを実行します。

```
jpccconf inst setup -key HiRDB -lhost jp1-ha1hrd -inst HRD1
```

5. HiRDB のインスタンス情報を更新する。

PFM - Agent for HiRDB のインスタンス情報を、コマンドの指示に従って入力します。PFM - Agent for HiRDB のインスタンス情報については、「[2.7.3 インスタンス環境の更新](#)」(Windows の場合)、または「[3.7.3 インスタンス環境の更新](#)」(UNIX の場合) を参照してください。現在設定されている値が表示されます（ただし `HiRDB_password` の値は表示されません）。表示された値を変更しない場合は、リターンキーだけを押してください。すべての入力が終了すると、インスタンス環境が更新されます。

6. 更新したインスタンス環境のサービスを、クラスタソフトから再起動する。

サービスの起動方法および停止方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の起動と停止について説明している章を参照してください。

注意

更新できない項目の値を変更したい場合は、インスタンス環境を削除したあと、再作成してください。

コマンドについては、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」を参照してください。

4.9.2 クラスタシステムでの論理ホスト環境定義ファイルのエクスポート・インポート

論理ホスト環境定義ファイルのエクスポート・インポートは、次の操作を実行した場合だけ実施します。

- 論理ホストのセットアップ、またはインスタンス環境の設定時に、論理ホスト上のノード構成を変更した。

PFM - Agent の論理ホストのセットアップ方法については、次の説明を参照してください。

- Windows の場合：[「4.3.4\(3\) PFM - Agent の論理ホストのセットアップ」](#)
- UNIX の場合：[「4.4.4\(3\) PFM - Agent の論理ホストのセットアップ」](#)

また、インスタンス環境の設定方法については、次の説明を参照してください。

- Windows の場合：[「4.3.4\(5\) インスタンス環境の設定」](#)
- UNIX の場合：[「4.4.4\(5\) インスタンス環境の設定」](#)

- 他 Performance Management プログラムの論理ホストのセットアップ時に、論理ホスト環境定義ファイルのエクスポートが必要な操作を実行した。

他 Performance Management プログラムの論理ホストのセットアップ方法については、次の説明を参照してください。

- Windows の場合：「[4.3.4\(6\) 他 Performance Management プログラムの論理ホストのセットアップ](#)」
- UNIX の場合：「[4.4.4\(6\) 他 Performance Management プログラムの論理ホストのセットアップ](#)」
- ネットワークの設定時に、ポート番号を設定した。
ネットワークの設定方法については、次の説明を参照してください。
 - Windows の場合：「[4.3.4\(7\) ネットワークの設定](#)」
 - UNIX の場合：「[4.4.4\(7\) ネットワークの設定](#)」

論理ホスト環境定義ファイルのエクスポート・インポートの手順については次の説明を参照してください。

- Windows の場合：「[4.3.4\(11\) 論理ホスト環境定義ファイルのエクスポート](#)」～「[4.3.4\(14\) 論理ホスト環境定義ファイルのインポート](#)」
- UNIX の場合：「[4.4.4\(11\) 論理ホスト環境定義ファイルのエクスポート](#)」～「[4.4.4\(14\) 論理ホスト環境定義ファイルのインポート](#)」

なお、インスタンス環境の更新だけを実施した場合は、論理ホスト環境定義ファイルのエクスポート・インポートは不要です。

インスタンス環境の更新方法については、「[4.9.1 クラスタシステムでのインスタンス環境の更新](#)」を参照してください。

5

監視テンプレート

この章では、PFM - Agent for HiRDB の監視テンプレートについて説明します。

監視テンプレートの概要

Performance Management では、次の方法でアラームとレポートを定義できます。

- PFM - Agent で定義されているアラームやレポートをそのまま使用する
- PFM - Agent で定義されているアラームやレポートをコピーしてカスタマイズする
- ウィザードを使用して新規に定義する

PFM - Agent で用意されているアラームやレポートを「監視テンプレート」と呼びます。監視テンプレートのレポートとアラームは、必要な情報があらかじめ定義されているので、コピーしてそのまま使用したり、ユーザーの環境に合わせてカスタマイズしたりできます。そのため、ウィザードを使用して新規に定義をしなくとも、監視対象の運用状況を監視する準備が容易にできるようになります。

この章では、PFM - Agent for HiRDB で定義されている監視テンプレートのアラームとレポートの設定内容について説明します。

監視テンプレートの使用方法の詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、稼働分析のためのレポートの作成またはアラームによる稼働監視について説明している章を参照してください。

アラームの記載形式

ここでは、アラームの記載形式を示します。アラームは、アルファベット順に記載しています。

アラーム名

監視テンプレートのアラーム名を示します。

概要

このアラームで監視できる監視対象の概要について説明します。

主な設定

このアラームの主な設定値を表で説明します。この表では、アラームの設定値と、PFM - Web Console の [アラーム階層] タブでアラームアイコンをクリックし、[プロパティの表示] メソッドをクリックしたときに表示される、[プロパティ] 画面の設定項目との対応を示しています。各アラームの設定の詳細については、PFM - Web Console のアラームの [プロパティ] 画面で確認してください。

設定値の「-」は、設定が常に無効であることを示します。

なお、条件式で異常条件と警告条件が同じ場合は、アラームイベントは異常のものだけが発行されます。

対策

このアラームの対策について説明します。

関連レポート

このアラームに関連する、監視テンプレートのレポートを示します。PFM - Web Console の [エージェント階層] タブでエージェントアイコンをクリックし、[アラームの状態の表示] メソッドで表示される



アイコンをクリックすると、このレポートを表示できます。

アラーム一覧

PFM - Agent for HiRDB の監視テンプレートで定義されているアラームは、「PFM HiRDB Template Alarms 09.00」というアラームテーブルにまとめられています。「09.00」は、アラームテーブルのバージョンを示します。このアラームテーブルは、PFM - Web Console の [アラーム階層] タブに表示される「HiRDB」フォルダに格納されています。監視テンプレートで定義されているアラームを次の表に示します。

表 5-1 アラーム一覧

アラーム名	監視対象
Buffer Hit Rate 0506	グローバルバッファのバッファヒット率 (HiRDB v0506)。
Buffer Hit Rate	グローバルバッファのバッファヒット率 (HiRDB v0600 以降)。
Log Read Error	ログ読み出しエラー回数。
Log Wait Thread	カレントバッファなしによるログ出力待ち回数。
Log Write Error	ログ書き込みエラー回数。
Rdarea File Space	RD エリアを格納している HiRDB ファイルシステム領域のユーザー領域中の未使用領域 (HiRDB ファイルとして割り当てられていない領域) の容量のユーザー領域の総量に対する比率。
Rdarea Space	全 RD エリアの未使用セグメント率。
Rdarea Status	RD エリアステータス。
Reorg Resource ROT1	再編成時期予測レベル 1 で、データベースのメンテナンスが必要かどうか判断するための情報。
Reorg Resource ROT2	再編成時期予測レベル 2 で、データベースのメンテナンスが必要かどうか判断するための情報。
Rollback Rate	ロールバック率。
Sync Point Interval	シンクポイントダンプ取得間隔時間の最小値。
Work File	HiRDB ファイルシステム領域の使用率。

Buffer Hit Rate

概要

Buffer Hit Rate アラームは、HiRDB（v0600 以降）で使用している全グローバルバッファのバッファヒット率を監視します。ユーザーが DB に対して参照・更新を行わなくても、バッファヒット率がしきい値よりも小さい場合には、警告・異常状態を表示します。

主な設定

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		設定値
項目	詳細項目	
基本情報	プロダクト	HiRDB(5.0)
	アラームメッセージテキスト	The hit rate of a global buffer is too low.
	アラームを有効にする	する
	アラーム通知	状態が変化した時に通知する
	通知対象	アラームの状態変化
	すべてのデータを評価する	しない
	監視時刻範囲	常に監視する
	発生頻度を満たした時にアラーム通知する	しない
	インターバル中	—
	回しきい値超過	—
アラーム条件式	レコード	PI Global Buffer Status above 05 (PL_GBUF)
	フィールド	Buffer Pool Hit Rate
	異常条件	Buffer Pool Hit Rate < 80
	警告条件	Buffer Pool Hit Rate < 90
アクション	E メール	—
	コマンド	—
	SNMP	異常, 警告, 正常

(凡例)

—：設定は常に無効です。

対策

グローバルバッファの定義を次のどれかの方法で改善してください。

- `pdbuffer` オペランドの`-n` オプション（グローバルバッファのバッファ面数）の値を大きくする。
- `pdbuffer` オペランドの指定値を見直す。1つのグローバルバッファに複数の RD エリアを割り当てる場合、特にアクセス頻度が高い表は、1つのグローバルバッファに割り当てる。1つのグローバルバッファに一つの RD エリアを割り当てる場合は、表を横分割する。
- 更新要求ヒット率に対して極端に参照要求ヒット率が低く、参照ページフラッシュ回数が多い場合は、システム共通定義で `pd_dbbuff_lru_option=MIX` を指定する。
- デファードライト処理をする場合（`pd_dbsync_point` オペランドに `sync` を指定する、または省略する場合）は、`pdbuffer` オペランドの`-w` オプションの値（デファードライト処理で出力するページの比率）を大きくする。

関連レポート

Reports/HiRDB/Status Reporting/Daily Trend/Advanced/Buffer Status

Buffer Hit Rate 0506

概要

Buffer Hit Rate 0506 アラームは、HiRDB (v0506) で使用している全グローバルバッファのバッファヒット率を監視します。ユーザーが DB に対して参照・更新を行わなくとも、バッファヒット率がしきい値よりも小さい場合には、警告・異常状態を表示します。

主な設定

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		設定値
項目	詳細項目	
基本情報	プロダクト	HiRDB(5.0)
	アラームメッセージテキスト	The hit rate of a global buffer is too low.
	アラームを有効にする	する
	アラーム通知	状態が変化した時に通知する
	通知対象	アラームの状態変化
	すべてのデータを評価する	しない
	監視時刻範囲	常に監視する
	発生頻度を満たした時にアラーム通知する	しない
	インターバル中	—
	回しきい値超過	—
アラーム条件式	レコード	PI Global Buffer Status 0506 (PI_GB05)
	フィールド	Buffer Pool Hit Rate
	異常条件	Buffer Pool Hit Rate < 80
	警告条件	Buffer Pool Hit Rate < 90
アクション	E メール	—
	コマンド	—
	SNMP	異常, 警告, 正常

(凡例)

—：設定は常に無効です。

対策

グローバルバッファの定義を次のどれかの方法で改善してください。

- `pdbuffer` オペランドの`-n` オプション（グローバルバッファのバッファ面数）の値を大きくする。
- `pdbuffer` オペランドの指定値を見直す。一つのグローバルバッファに複数の RD エリアを割り当てる場合は、特にアクセス頻度が高い表は、1 つのグローバルバッファに割り当てる。1 つのグローバルバッファに 1 つの RD エリアを割り当てる場合は、表を横分割する。
- 更新要求ヒット率に対して極端に参照要求ヒット率が低く、参照ページフラッシュ回数が多い場合は、システム共通定義で `pd_dbbuff_lru_option=MIX` を指定する。
- デファードライト処理をする場合（`pd_dbsync_point` オペランドに `sync` を指定する、または省略する場合）は、`pdbuffer` オペランドの`-w` オプションの値（デファードライト処理で出力するページの比率）を大きくする。

関連レポート

Reports/HiRDB/Status Reporting/Daily Trend/Advanced/Buffer Status 0506

Log Read Error

概要

Log Read Error アラームは、ログ読み出しえラー回数を監視します。

主な設定

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		設定値
項目	詳細項目	
基本情報	プロダクト	HiRDB(5.0)
	アラームメッセージテキスト	Log read error occurred.
	アラームを有効にする	する
	アラーム通知	状態が変化した時に通知する
	通知対象	アラームの状態変化
	すべてのデータを評価する	しない
	監視時刻範囲	常に監視する
	発生頻度を満たした時にアラーム通知する	しない
	インターバル中	—
	回しきい値超過	—
アラーム条件式	レコード	PI Statistical Information SYS (PI_SSYS)
	フィールド	Log Read Error
	異常条件	Log Read Error > 0
	警告条件	Log Read Error > 0
アクション	E メール	—
	コマンド	—
	SNMP	異常, 警告, 正常

(凡例)

— : 設定は常に無効です。

対策

システムログファイルへの I/O でエラーが発生しています。syslog (Windows の場合はイベントログ) に障害メッセージが出力されているので、マニュアルに従って障害回復をしてください。

関連レポート

Reports/HiRDB/Monthly Trend/Advanced/Drilldown Only/System Monthly Summary SYS (4.5)

Log Wait Thread

概要

Log Wait Thread アラームは、カレントバッファなしによるログ出力待ち回数を監視します。

主な設定

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		設定値
項目	詳細項目	
基本情報	プロダクト	HiRDB(5.0)
	アラームメッセージテキスト	Log wait thread event occurred.
	アラームを有効にする	する
	アラーム通知	状態が変化した時に通知する
	通知対象	アラームの状態変化
	すべてのデータを評価する	しない
	監視時刻範囲	常に監視する
	発生頻度を満たした時にアラーム通知する	しない
	インターバル中	—
	回しきい値超過	—
アラーム条件式	レコード	PI Statistical Information SYS (PI_SSYS)
	フィールド	Log Wait Thread
	異常条件	Log Wait Thread > 0
	警告条件	Log Wait Thread > 0
アクション	E メール	—
	コマンド	—
	SNMP	異常, 警告, 正常

(凡例)

— : 設定は常に無効です。

対策

システムログ出力バッファ面数を増やしてください。システムログ出力バッファ面数は次の定義オペランドで指定できます。

- pd_log_write_buff_count

関連レポート

Reports/HiRDB/Monthly Trend/Advanced/Drilldown Only/System Monthly Summary SYS (4.5)

Log Write Error

概要

Log Write Error アラームは、ログ書き込みエラー回数を監視します。

主な設定

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		設定値
項目	詳細項目	
基本情報	プロダクト	HiRDB(5.0)
	アラームメッセージテキスト	Log write error occurred
	アラームを有効にする	する
	アラーム通知	状態が変化した時に通知する
	通知対象	アラームの状態変化
	すべてのデータを評価する	しない
	監視時刻範囲	常に監視する
	発生頻度を満たした時にアラーム通知する	しない
	インターバル中	—
	回しきい値超過	—
アラーム条件式	レコード	PI Statistical Information SYS (PI_SSYS)
	フィールド	Log Write Error
	異常条件	Log Write Error > 0
	警告条件	Log Write Error > 0
アクション	E メール	—
	コマンド	—
	SNMP	異常, 警告, 正常

(凡例)

— : 設定は常に無効です。

対策

システムログファイルへの I/O でエラーが発生しています。syslog (Windows の場合はイベントログ) に障害メッセージが出力されているので、マニュアルに従って障害回復をしてください。

関連レポート

Reports/HiRDB/Monthly Trend/Advanced/Drilldown Only/System Monthly Summary SYS (4.5)

Rdarea File Space

概要

Rdarea File Space アラームは、RD エリアを格納している HiRDB ファイルシステム領域のユーザー領域中の未使用領域（HiRDB ファイルとして割り当てられていない領域）の容量のユーザー領域の総量に対する比率を監視します。

自動増分機能を適用した RD エリアの場合は、自動増分によって RD エリアに割り当てられるセグメント数が増加するため、Rdarea Space アラームを適用すると自動増分によって拡張できる RD エリアについてもアラームが発生します。したがって、自動増分機能を適用した RD エリアの場合は、Rdarea File Space アラームで自動増分に割り当てる領域を監視します。

主な設定

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		設定値
項目	詳細項目	
基本情報	プロダクト	HiRDB(5.0)
	アラームメッセージテキスト	The free space rate of a HiRDB file system area is too low.
	アラームを有効にする	する
	アラーム通知	状態が変化した時に通知する
	通知対象	アラームの状態変化
	すべてのデータを評価する	しない
	監視時刻範囲	常に監視する
	発生頻度を満たした時にアラーム通知する	しない
	インターバル中	—
	回しきい値超過	—
アラーム条件式	レコード	PI_HiRDB File System Area Status (PI_RDFS)
	フィールド	Free %
	異常条件	Free % < 10
	警告条件	Free % < 20
アクション	E メール	—
	コマンド	—
	SNMP	異常, 警告, 正常

(凡例)

- : 設定は常に無効です。

対策

データの格納構造を調べてください。満杯状態のセグメントの割合が高くて、満杯状態のページの割合が高い表は、データが増加している場合、RD エリアを拡張する必要があります。満杯状態のセグメントの割合が高いが、満杯状態のページの割合が低い表は、表を再編成する必要があります。詳細は、マニュアル「HiRDB システム運用ガイド」の RD エリアの運用に関する説明を参照してください。

関連レポート

Reports/HiRDB/Monthly Trend/Advanced/Drilldown Only/Rdarea File Space Monthly (4.5)

概要

Rdarea Space アラームは、HiRDB で使用している全 RD エリアの未使用セグメント率を監視します。

自動増分機能を適用した RD エリアの場合は、自動増分によって RD エリアに割り当てられるセグメント数が増加するため、Rdarea Space アラームを適用すると自動増分によって拡張できる RD エリアについてもアラームが発生します。したがって、自動増分機能を適用した RD エリアの場合は、Rdarea File Space アラームで自動増分に割り当てできる領域を監視します。

主な設定

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		設定値
項目	詳細項目	
基本情報	プロダクト	HiRDB(5.0)
	アラームメッセージテキスト	The free space rate of an RDAREA is too low.
	アラームを有効にする	する
	アラーム通知	状態が変化した時に通知する
	通知対象	アラームの状態変化
	すべてのデータを評価する	しない
	監視時刻範囲	常に監視する
	発生頻度を満たした時にアラーム通知する	しない
	インターバル中	—
	回しきい値超過	—
アラーム条件式	レコード	PI_RDArea Status (PI_RDST)
	フィールド	Free %
	異常条件	Free % < 10
	警告条件	Free % < 20
アクション	E メール	—
	コマンド	—
	SNMP	異常, 警告, 正常

(凡例)

— : 設定は常に無効です。

対策

データの格納構造を調べてください。満杯状態のセグメントの割合が高くて、満杯状態のページの割合が高い表は、データが増加している場合、RD エリアを拡張する必要があります。満杯状態のセグメントの割合が高いが、満杯状態のページの割合が低い表は、表を再編成する必要があります。詳細は、マニュアル「HiRDB システム運用ガイド」の RD エリアの運用に関する説明を参照してください。

関連レポート

Reports/HiRDB/Status Reporting/Daily Trend/Advanced/Rdarea Space Status (4.0)

Rdarea Status

概要

Rdarea Status アラームは、HiRDB で使用している全 RD エリアの RD エリアステータスを監視します。RD エリアがオープン状態ではない場合は異常または警告状態となります。

主な設定

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		設定値
項目	詳細項目	
基本情報	プロダクト	HiRDB(5.0)
	アラームメッセージテキスト	Some RDAREAs are not open.
	アラームを有効にする	する
	アラーム通知	状態が変化した時に通知する
	通知対象	アラームの状態変化
	すべてのデータを評価する	しない
	監視時刻範囲	常に監視する
	発生頻度を満たした時にアラーム通知する	しない
	インターバル中	—
	回しきい値超過	—
アラーム条件式	レコード	PI RDArea Status (PI_RDST)
	フィールド	RDAREA Status
	異常条件	RDAREA Status < D
	警告条件	RDAREA Status < I
アクション	E メール	—
	コマンド	—
	SNMP	異常, 警告, 正常

(凡例)

— : 設定は常に無効です。

対策

RD エリアの状態に問題がないか確認してください。

関連レポート

Reports/HiRDB>Status Reporting/Real-time/Advanced/Rdarea Status (4.0)

Reorg Resource ROT1

概要

Reorg Resource ROT1 アラームは、再編成時期予測レベル 1 で、データベースのメンテナンスが必要かどうか判断するための情報を監視します。

主な設定

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		設定値
項目	詳細項目	
基本情報	プロダクト	HiRDB(5.0)
	アラームメッセージテキスト	It is necessary to reorganize.
	アラームを有効にする	する
	アラーム通知	状態が変化した時に通知する
	通知対象	アラームの状態変化
	すべてのデータを評価する	しない
	監視時刻範囲	常に監視する
	発生頻度を満たした時にアラーム通知する	しない
	インターバル中	—
	回しきい値超過	—
アラーム条件式	レコード	PD Forecast Time of Reorg 1 (PD_ROT1)
	フィールド	Maintenance Necessity
	異常条件	Maintenance Necessity = "Y"
	警告条件	Maintenance Necessity = "Y"
アクション	E メール	—
	コマンド	—
	SNMP	異常, 警告, 正常

(凡例)

— : 設定は常に無効です。

対策

Maintenance Necessity が「Y」になっている行に示された Maintenance Method フィールドを参照して、データベースに対して適切なメンテナンスを実施してください。

関連レポート

HiRDB/Status Reporting/Real-time/Advanced/DB Maintenance Info ROT1 (5.0)

Reorg Resource ROT2

概要

Reorg Resource ROT2 アラームは、再編成時期予測レベル 2 で、データベースのメンテナンスが必要かどうか判断するための情報を監視します。

主な設定

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		設定値
項目	詳細項目	
基本情報	プロダクト	HiRDB(5.0)
	アラームメッセージテキスト	It is necessary to reorganize.
	アラームを有効にする	する
	アラーム通知	状態が変化した時に通知する
	通知対象	アラームの状態変化
	すべてのデータを評価する	しない
	監視時刻範囲	常に監視する
	発生頻度を満たした時にアラーム通知する	しない
	インターバル中	—
	回しきい値超過	—
アラーム条件式	レコード	PD Forecast Time of Reorg 2 (PD_ROT2)
	フィールド	Maintenance Necessity
	異常条件	Maintenance Necessity = "Y"
	警告条件	Maintenance Necessity = "Y"
アクション	E メール	—
	コマンド	—
	SNMP	異常, 警告, 正常

(凡例)

— : 設定は常に無効です。

対策

Maintenance Necessity が「Y」になっている行に示された Maintenance Method フィールドを参照して、データベースに対して適切なメンテナンスを実施してください。

関連レポート

HiRDB/Status Reporting/Real-time/Advanced/DB Maintenance Info ROT2 (5.0)

Rollback Rate

概要

Rollback Rate アラームは、ロールバック率を監視します。

主な設定

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		設定値
項目	詳細項目	
基本情報	プロダクト	HiRDB(5.0)
	アラームメッセージテキスト	The rate of rollback is too high.
	アラームを有効にする	する
	アラーム通知	状態が変化した時に通知する
	通知対象	アラームの状態変化
	すべてのデータを評価する	しない
	監視時刻範囲	常に監視する
	発生頻度を満たした時にアラーム通知する	しない
	インターバル中	—
	回しきい値超過	—
アラーム条件式	レコード	PI Statistical Information SYS (PI_SSYS)
	フィールド	Rollback Rate
	異常条件	Rollback Rate > 10
	警告条件	Rollback Rate > 5
アクション	E メール	—
	コマンド	—
	SNMP	異常, 警告, 正常

(凡例)

— : 設定は常に無効です。

対策

エラー発生など、不当な理由でロールバックが行われている可能性があります。

UAP などを見直し、ロールバックが実行される回数を削減してください。

関連レポート

Reports/HiRDB/Monthly Trend/Advanced/Drilldown Only/System Monthly Summary SYS (4.5)

Sync Point Interval

概要

Sync Point Interval アラームは、シンクポイントダンプ取得間隔時間の最小値を監視します。

主な設定

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		設定値
項目	詳細項目	
基本情報	プロダクト	HiRDB(5.0)
	アラームメッセージテキスト	Sync point interval is too short.
	アラームを有効にする	する
	アラーム通知	状態が変化した時に通知する
	通知対象	アラームの状態変化
	すべてのデータを評価する	しない
	監視時刻範囲	常に監視する
	発生頻度を満たした時にアラーム通知する	しない
	インターバル中	—
	回しきい値超過	—
アラーム条件式	レコード	PI Statistical Information SYS (PI_SSYS)
	フィールド	Sync Get Interval Time Min
	異常条件	Sync Get Interval Time Min > 0 AND Sync Get Interval Time Min < 60000
	警告条件	Sync Get Interval Time Min > 0 AND Sync Get Interval Time Min < 300000
アクション	E メール	—
	コマンド	—
	SNMP	異常, 警告, 正常

(凡例)

— : 設定は常に無効です。

対策

シンクポイント取得間隔が大きい時は、HiRDB 再開始時に読み込むシステムログ量が多くなる場合があります。また、シンクポイント取得間隔が極端に短い場合は、頻繁にシンクポイント処理が行われていてシステム全体の遅延が発生しているおそれがあります。

`pd_log_sdinterval` オペランドの指定値を変更して、最適なシンクポイント取得間隔を設定してください。

関連レポート

Reports/HiRDB/Monthly Trend/Advanced/Drilldown Only/System Monthly Summary SYS (4.5)

Work File

概要

Work File アラームは、作業表用ファイル（SQL 文を実行するときに必要とする一時的な情報を格納するファイル）用の HiRDB ファイルシステム領域の使用率を監視します。

主な設定

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		設定値
項目	詳細項目	
基本情報	プロダクト	HiRDB(5.0)
	アラームメッセージテキスト	The peak usage rate of a work file is too high.
	アラームを有効にする	する
	アラーム通知	状態が変化した時に通知する
	通知対象	アラームの状態変化
	すべてのデータを評価する	しない
	監視時刻範囲	常に監視する
	発生頻度を満たした時にアラーム通知する	しない
	インターバル中	—
	回しきい値超過	—
アラーム条件式	レコード	PI File System Area Status (PI_FSST)
	フィールド	Peak Usage %
	異常条件	Peak Usage % >= 90
	警告条件	Peak Usage % >= 80
アクション	E メール	—
	コマンド	—
	SNMP	異常, 警告, 正常

(凡例)

—：設定は常に無効です。

対策

次の表に示す要因が考えられます。作業表用ファイルの見積もりを見直してどの要因が該当するかを特定してください。作業表用ファイルの見積もりについては、マニュアル「HiRDB システム導入・設計ガイド」の作業表用ファイルの容量の見積もりに関する説明を参照してください。

表 5-2 Work File アラーム発生の要因

項番	要因
1	作業表用ファイル用に割り当てた HiRDB ファイルシステム領域全体の容量が不足している。
2	作成できる作業表用ファイルの数が不足している。
3	1 つの作業表用ファイル用 HiRDB ファイルシステム領域の容量が不足している。

判明した要因と正しい見積もり値を基に、次の手順で作業表用ファイル用の HiRDB ファイルシステム領域を増やしてください。

1. HiRDB を正常停止する。
2. 次のどちらかの方法で作業表用ファイルシステム領域を増やす。要因が項番 3 の場合は (b) を実行すること。
 - (a) 現在の HiRDB ファイルシステム領域を増やす。
 - (b) 新たに HiRDB ファイルシステム領域を追加する。
3. 新たに追加した場合 (2. (b)) は、システム定義の該当する pdwork オペランドを変更する。
4. HiRDB を起動する。

注意

新しい HiRDB ファイルシステム領域を追加した場合、アラームが発生した HiRDB ファイルシステム領域については対策後にアラームが停止するように、pdfstatfs コマンドを-c 指定で実行して HiRDB ファイルシステム領域中に割り当てられた領域の最大値を 0 にクリアしてください。

関連レポート

Reports/HiRDB/Monthly Trend/Advanced/Work File Chart (4.5)

レポートの記載形式

ここでは、レポートの記載形式を示します。レポートは、アルファベット順に記載しています。記載形式を次に示します。

レポート名

監視テンプレートのレポート名を示します。

- レポート名に「(4.0)」が含まれるレポートは、レポートに使用しているレコードのデータモデルが4.0であることを示します。
- レポート名に「(4.5)」が含まれるレポートは、レポートに使用しているレコードのデータモデルが4.5であることを示します。
- レポート名に「(5.0)」が含まれるレポートは、レポートに使用しているレコードのデータモデルが5.0であることを示します。
- レポート名に「(4.0)」「(4.5)」および「(5.0)」も含まれないレポートは、レポートに使用しているレコードのデータモデルが3.0であることを示します。

データモデルについては、「[6. レコード](#)」を参照してください。

概要

このレポートで表示できる情報の概要について説明します。

格納先

このレポートの格納先を示します。

レコード

このレポートで使用するパフォーマンスデータが、格納されているレコードを示します。履歴レポートを表示するためには、この欄に示すレコードを収集するように、あらかじめ設定しておく必要があります。レポートを表示する前に、PFM - Web Console の [エージェント階層] タブでエージェントアイコンをクリックし、[プロパティの表示] メソッドをクリックして表示される [プロパティ] 画面で、このレコードが「Log = Yes」に設定されているか確認してください。リアルタイムレポートの場合、設定する必要はありません。

フィールド

このレポートで使用するレコードのフィールドについて、表で説明します。

ドリルダウンレポート（レポートレベル）

このレポートに関連づけられた、監視テンプレートのレポートを表で説明します。このドリルダウンレポートを表示するには、PFM - Web Console のレポートウィンドウのドリルダウンレポートプルダウンメ

ニューから、該当するドリルダウンレポート名を選択し、[レポートの表示] をクリックしてください。なお、レポートによってドリルダウンレポートを持つものと持たないものがあります。

ドリルダウンレポート（フィールドレベル）

このレポートのフィールドに関連づけられた、監視テンプレートのレポートを表で説明します。このドリルダウンレポートを表示するには、PFM - Web Console のレポートウィンドウのグラフ、一覧、または表をクリックしてください。履歴レポートの場合、時間項目からドリルダウンレポートを表示することで、より詳細な時間間隔でレポートを表示できます。なお、レポートによってドリルダウンレポートを持つものと持たないものがあります。

ドリルダウンレポートについての詳細は、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、稼働分析のためのレポートの作成について説明している章を参照してください。

レポートのフォルダ構成

PFM - Agent for HiRDB のレポートのフォルダ構成を次に示します。< >内は、フォルダ名を示します。

```
<HiRDB>
+-<Monthly Trend>
  +-<Advanced>
    +- Buffer Trend
    +- Buffer Trend 0506
    +- Buffer Trend Chart
    +- Buffer Trend Chart 0506
    +- Commit Chart(4.5)
    +- Connect Requests Chart(4.5)
    +- Process Request Over Chart(4.5)
    +- Rdarea Space Trend(4.0)
    +- Rdarea Space Trend Chart(4.0)
    +- Rdarea Space Trend Chart Worst 5(4.0)
    +- Rdarea Space Trend Worst 5(4.0)
    +- Rollback Chart(4.5)
    +- Server Calls From Others(4.5)
    +- Server Calls On Unit(4.5)
    +- Server Exec Time From Others(4.5)
    +- Server Exec Time On Unit(4.5)
    +- Server Process Count Chart(4.5)
    +- System Summary SYS(4.5)
    +- Work File Chart(4.5)
  +-<Drilldown Only>
    +- Buffer Monthly Detail
    +- Buffer Monthly Detail 0506
    +- Buffer Monthly Detail Chart
    +- Buffer Monthly Detail Chart 0506
    +- Buffer Monthly Detail Chart for Reference Hit Rate
    +- Buffer Monthly Detail Chart for Reference Hit Rate 0506
    +- Buffer Monthly Detail Chart for Update Hit Rate
    +- Buffer Monthly Detail Chart for Update Hit Rate 0506
    +- Rdarea Available Space Monthly(4.5)
    +- Rdarea File I/O Monthly(4.5)
    +- Rdarea File Space Monthly(4.5)
    +- Rdarea Space Monthly(4.0)
    +- Rdarea Space Monthly(4.5)
    +- Rdarea Space Monthly Chart(4.0)
    +- Rdarea Space Monthly Chart(4.5)
    +- System Monthly Summary SYS(4.5)
+-<Status Reporting>
  +-<Daily Trend>
    +-<Advanced>
      +- Buffer Status
      +- Buffer Status 0506
      +- Buffer Status Chart
      +- Buffer Status Chart 0506
      +- Commit Daily Chart(4.5)
      +- Connect Requests Daily Chart(4.5)
      +- Process Request Over Daily Chart (4.5)
      +- Rdarea Space Status(4.0)
      +- Rdarea Space Status Chart(4.0)
      +- Rdarea Space Status Chart Worst 5(4.0)
```

```

+- Rdarea Space Status Worst(4.0)
+- Rollback Daily Chart(4.5)
+- Server Calls From Others Daily(4.5)
+- Server Calls On Unit Daily(4.5)
+- Server Exec Time From Others Daily(4.5)
+- Server Exec Time On Unit Daily(4.5)
+- Server Process Count Daily Chart(4.5)
+- Work File Daily Chart(4.5)
+-<Drilldown Only>
  +- Buffer Daily Detail
  +- Buffer Daily Detail 0506
  +- Buffer Daily Detail Chart
  +- Buffer Daily Detail Chart 0506
  +- Buffer Daily Detail Chart for Reference Hit Rate
  +- Buffer Daily Detail Chart for Reference Hit Rate 0506
  +- Buffer Daily Detail Chart for Update Hit Rate
  +- Buffer Daily Detail Chart for Update Hit Rate 0506
  +- Rdarea Available Space Daily(4.5)
  +- Rdarea File I/O Daily(4.5)
  +- Rdarea File Space Daily(4.5)
  +- Rdarea Space Daily(4.0)
  +- Rdarea Space Daily(4.5)
  +- Rdarea Space Daily Chart(4.0)
  +- Rdarea Space Daily Chart(4.5)
  +- System Daily Summary SYS(4.5)
+-<Real-Time>
  +-<Advanced>
    +- DB Maintenance Info ROT1(5.0)
    +- DB Maintenance Info ROT2(5.0)
    +- Rdarea Status(4.0)
    +- Server Status(4.0)
+-<Troubleshooting>
  +-<Advanced>
    | +- HiRDB Message Log(4.0)
  +-<Real-Time>
    | +-<Advanced>
      +- Buffer Flush
      +- Buffer Flush 0506
      +-<Drilldown Only>
        +- Buffer Flush Detail
        +- Buffer Flush Detail 0506
  +-<Recent Past>
    +-<Advanced>
      +- HiRDB Message Log 1 Hour(4.0)

```

各フォルダの説明を次に示します。

- ・「Monthly Trend」 フォルダ

最近 1 か月間の 1 日ごとに集計された情報を表示するレポートが格納されています。1 か月のシステムの傾向を分析するために使用します。

- ・「Status Reporting」 フォルダ

日、または週ごとに集計された情報を表示するレポートが格納されています。システムの総合的な状態を見るために使用します。また、履歴レポートのほかにリアルタイムレポートの表示もできます。

- ・「Daily Trend」 フォルダ
最近 24 時間の 1 時間ごとに集計された情報を表示するレポートが格納されています。1 日ごとにシステムの状態を確認するために使用します。
- ・「Real-Time」 フォルダ
システムの状態を確認するためのリアルタイムレポートが格納されています。
- ・「Troubleshooting」 フォルダ
トラブルを解決するのに役立つ情報を表示するレポートが格納されています。システムに問題が発生した場合、問題の原因を調査するために使用します。
 - ・「Real-Time」 フォルダ
現在のシステムの状態を確認するためのリアルタイムレポートが格納されています。
 - ・「Recent Past」 フォルダ
最近 1 時間の 1 分ごとに集計された情報を表示する履歴レポートが格納されています。

さらに、これらのフォルダの下位には、次のフォルダがあります。上位のフォルダによって、どのフォルダがあるかは異なります。各フォルダについて次に説明します。

- ・「Advanced」 フォルダ
デフォルトで「Log = No」に設定されているレコードを使用しているレポートが格納されています。このフォルダのレポートを表示するには、使用しているレコードの設定を PFM - Web Console で「Log = Yes」にする必要があります。
- ・「Drilldown Only」 フォルダ
ドリルダウンレポート（フィールドレベル）として表示されるレポートが格納されています。そのレポートのフィールドに関する詳細な情報を表示するために使用します。

レポート一覧

監視テンプレートで定義されているレポートをアルファベット順に次の表に示します。

表 5-3 レポート一覧

レポート名	表示する情報	格納先
Buffer Daily Detail	過去 1 日の 1 時間ごとの全グローバルバッファのバッファヒット率 (リスト)。[HiRDB v0600 以降]	Reports/HiRDB>Status Reporting/Daily Trend/Advanced/Drilldown Only/
Buffer Daily Detail 0506	過去 1 日の 1 時間ごとの全グローバルバッファのバッファヒット率 (リスト)。[HiRDB v0506]	Reports/HiRDB>Status Reporting/Daily Trend/Advanced/Drilldown Only/
Buffer Daily Detail Chart	過去 1 日の 1 時間ごとの全グローバルバッファのバッファヒット率 (グラフ)。[HiRDB v0600 以降]	Reports/HiRDB>Status Reporting/Daily Trend/Advanced/Drilldown Only/
Buffer Daily Detail Chart 0506	過去 1 日の 1 時間ごとの全グローバルバッファのバッファヒット率 (グラフ)。[HiRDB v0506]	Reports/HiRDB>Status Reporting/Daily Trend/Advanced/Drilldown Only/
Buffer Daily Detail Chart for Reference Hit Rate	過去 1 日の 1 時間ごとの全グローバルバッファ参照要求のバッファヒット率 (グラフ)。[HiRDB v0600 以降]	Reports/HiRDB>Status Reporting/Daily Trend/Advanced/Drilldown Only/
Buffer Daily Detail Chart for Reference Hit Rate 0506	過去 1 日の 1 時間ごとの全グローバルバッファの参照要求バッファヒット率 (グラフ)。[HiRDB v0506]	Reports/HiRDB>Status Reporting/Daily Trend/Advanced/Drilldown Only/
Buffer Daily Detail Chart for Update Hit Rate	過去 1 日の 1 時間ごとの全グローバルバッファ更新要求のバッファヒット率 (グラフ)。[HiRDB v0600 以降]	Reports/HiRDB>Status Reporting/Daily Trend/Advanced/Drilldown Only/
Buffer Daily Detail Chart for Update Hit Rate 0506	過去 1 日の 1 時間ごとの全グローバルバッファの更新要求バッファヒット率 (グラフ)。[HiRDB v0506]	Reports/HiRDB>Status Reporting/Daily Trend/Advanced/Drilldown Only/
Buffer Flush	グローバルバッファのバッファフラッシュ回数 (60 秒ごとにリスト更新)。[HiRDB v0600 以降]	Reports/HiRDB>Troubleshooting/Real-Time/Advanced/

レポート名	表示する情報	格納先
Buffer Flush 0506	グローバルバッファのバッファフラッシュ回数 (60 秒ごとにリスト更新)。[HiRDB v0506]	Reports/HiRDB/Troubleshooting/Real-Time/Advanced/
Buffer Flush Detail	過去 1 日の 1 時間ごとのバッファフラッシュ回数。[HiRDB v0600 以降]	Reports/HiRDB/Troubleshooting/Real-Time/Advanced/Drilldown Only/
Buffer Flush Detail 0506	過去 1 日の 1 時間ごとのバッファフラッシュ回数。[HiRDB 0506]	Reports/HiRDB/Troubleshooting/Real-Time/Advanced/Drilldown Only/
Buffer Monthly Detail	最近 1 か月間の 1 日ごとの全グローバルバッファのバッファヒット率 (リスト)。[HiRDB v0600 以降]	Reports/HiRDB/Monthly Trend/Advanced/Drilldown Only/
Buffer Monthly Detail 0506	最近 1 か月間の 1 日ごとの全グローバルバッファのバッファヒット率 (リスト)。[HiRDB v0506]	Reports/HiRDB/Monthly Trend/Advanced/Drilldown Only/
Buffer Monthly Detail Chart	最近 1 か月間の 1 日ごとの全グローバルバッファのバッファヒット率 (グラフ)。[HiRDB v0600 以降]	Reports/HiRDB/Monthly Trend/Advanced/Drilldown Only/
Buffer Monthly Detail Chart 0506	最近 1 か月間の 1 日ごとの全グローバルバッファのバッファヒット率 (グラフ)。[HiRDB v0506]	Reports/HiRDB/Monthly Trend/Advanced/Drilldown Only/
Buffer Monthly Detail Chart for Reference Hit Rate	最近 1 か月間の 1 日ごとの全グローバルバッファ参照要求のバッファヒット率 (グラフ)。[HiRDB v0600 以降]	Reports/HiRDB/Monthly Trend/Advanced/Drilldown Only/
Buffer Monthly Detail Chart for Reference Hit Rate 0506	最近 1 か月間の 1 日ごとの全グローバルバッファの参照要求バッファヒット率 (グラフ)。[HiRDB v0506]	Reports/HiRDB/Monthly Trend/Advanced/Drilldown Only/
Buffer Monthly Detail Chart for Update Hit Rate	最近 1 か月間の 1 日ごとの全グローバルバッファ更新要求のバッファヒット率 (グラフ)。[HiRDB v0600 以降]	Reports/HiRDB/Monthly Trend/Advanced/Drilldown Only/
Buffer Monthly Detail Chart for Update Hit Rate 0506	最近 1 か月間の 1 日ごとの全グローバルバッファの更新要求バッファヒット率 (グラフ)。[HiRDB v0506]	Reports/HiRDB/Monthly Trend/Advanced/Drilldown Only/

5. 監視テンプレート

レポート名	表示する情報	格納先
Buffer Status	全グローバルバッファのバッファヒット率 (60秒ごとに画面更新)。[HiRDB v0600 以降]	Reports/HiRDB>Status Reporting/Daily Trend/Advanced/
Buffer Status 0506	全グローバルバッファのバッファヒット率 (60秒ごとに画面更新)。[HiRDB v0506]	Reports/HiRDB>Status Reporting/Daily Trend/Advanced/
Buffer Status Chart	全グローバルバッファのバッファヒット率 (60秒ごとに画面更新)。[HiRDB v0600 以降]	Reports/HiRDB>Status Reporting/Daily Trend/Advanced/
Buffer Status Chart 0506	全グローバルバッファのバッファヒット率 (60秒ごとに画面更新)。[HiRDB v0506]	Reports/HiRDB>Status Reporting/Daily Trend/Advanced/
Buffer Trend	全グローバルバッファのバッファヒット率 (60秒ごとに画面更新)。[HiRDB v0600 以降]	Reports/HiRDB>Monthly Trend/Advanced/
Buffer Trend 0506	全グローバルバッファのバッファヒット率 (60秒ごとに画面更新)。[HiRDB v0506]	Reports/HiRDB>Monthly Trend/Advanced/
Buffer Trend Chart	全グローバルバッファのバッファヒット率 (60秒ごとに画面更新)。[HiRDB v0600 以降]	Reports/HiRDB>Monthly Trend/Advanced/
Buffer Trend Chart 0506	全グローバルバッファのバッファヒット率 (60秒ごとに画面更新)。[HiRDB v0506]	Reports/HiRDB>Monthly Trend/Advanced/
Commit Chart (4.5)	最近1か月間の1日ごとのコミット数の平均値 (折れ線グラフおよびリスト)。	Reports/HiRDB>Monthly Trend/Advanced/
Commit Daily Chart (4.5)	過去1日の1時間ごとのコミット数の平均値 (折れ線グラフおよびリスト)。	Reports/HiRDB>Status Reporting/Daily Trend/Advanced/
Connect Requests Chart (4.5)	最近1か月間の1日ごとのHiRDB コネクト要求回数 (折れ線グラフおよびリスト)。	Reports/HiRDB>Monthly Trend/Advanced/
Connect Requests Daily Chart (4.5)	過去1日の1時間ごとのHiRDB コネクト要求回数 (折れ線グラフおよびリスト)。	Reports/HiRDB>Status Reporting/Daily Trend/Advanced/
DB Maintenance Info ROT1 (5.0)	再編成時期予測レベル1で、メンテナンスが必要なリソースおよびメンテナンスに必要な情報。	Reports/HiRDB>Status Reporting/Real-Time/Advanced/

5. 監視テンプレート

レポート名	表示する情報	格納先
DB Maintenance Info ROT2 (5.0)	再編成時期予測レベル 2 で、メンテナンスが必要なリソースおよびメンテナンスに必要な情報。	Reports/HiRDB>Status Reporting/Real-Time/Advanced/
HiRDB Message Log (4.0)	指定した期間の HiRDB サーバのシステムログ。	Reports/HiRDB/Troubleshooting/Advanced/
HiRDB Message Log 1 Hour (4.0)	最近 1 時間の HiRDB サーバのシステムログ。	Reports/HiRDB/Troubleshooting/Recent Past/Advanced/
Process Request Over Chart (4.5)	最近 1 か月間の 1 日ごとの最大起動プロセス数を超えたサービス要求数（折れ線グラフおよびリスト）。	Reports/HiRDB/Monthly Trend/Advanced/
Process Request Over Daily Chart (4.5)	過去 1 日の 1 時間ごとの最大起動プロセス数を超えたサービス要求数（折れ線グラフおよびリスト）。	Reports/HiRDB>Status Reporting/Daily Trend/Advanced/
Rdarea Available Space Daily (4.5)	過去 1 日の 1 時間ごとの全 RD エリアの使用中空きページの比率（折れ線グラフおよびリスト）。	Reports/HiRDB>Status Reporting/Daily Trend/Advanced/Drilldown Only/
Rdarea Available Space Monthly (4.5)	最近 1 か月間の 1 日ごとの全 RD エリアの使用中空きページの比率（折れ線グラフおよびリスト）。	Reports/HiRDB>Status Reporting/Daily Trend/Advanced/Drilldown Only/
Rdarea File I/O Daily (4.5)	過去 1 日の 1 時間ごとの RD エリアを格納している HiRDB ファイルシステム領域の I/O（折れ線グラフおよびリスト）。	Reports/HiRDB>Status Reporting/Daily Trend/Advanced/Drilldown Only/
Rdarea File I/O Monthly (4.5)	最近 1 か月間の 1 日ごとの RD エリアを格納している HiRDB ファイルシステム領域の I/O（折れ線グラフおよびリスト）。	Reports/HiRDB/Monthly Trend/Advanced/Drilldown Only/
Rdarea File Space Daily (4.5)	過去 1 日の 1 時間ごとの RD エリアを格納している HiRDB ファイルシステム領域の容量（折れ線グラフおよびリスト）。	Reports/HiRDB>Status Reporting/Daily Trend/Advanced/Drilldown Only/
Rdarea File Space Monthly (4.5)	最近 1 か月間の 1 日ごとの RD エリアを格納している HiRDB ファイルシステム領域の容量（折れ線グラフおよびリスト）。	Reports/HiRDB/Monthly Trend/Advanced/Drilldown Only/
Rdarea Space Daily (4.0)	過去 1 日の 1 時間ごとの全 RD エリアの未使用セグメント率（リスト）。[HiRDB v0700]	Reports/HiRDB>Status Reporting/Daily Trend/Advanced/Drilldown Only/

5. 監視テンプレート

レポート名	表示する情報	格納先
Rdarea Space Daily (4.5)	過去 1 日の 1 時間ごとの全 RD エリアの未使用セグメント率 (リスト)。[HiRDB v0701 以降]	Reports/HiRDB>Status Reporting/Daily Trend/Advanced/Drilldown Only/
Rdarea Space Daily Chart (4.0)	過去 1 日の 1 時間ごとの全 RD エリアの未使用セグメント率 (折れ線グラフ)。[HiRDB v0700]	Reports/HiRDB>Status Reporting/Daily Trend/Advanced/Drilldown Only/
Rdarea Space Daily Chart (4.5)	過去 1 日の 1 時間ごとの全 RD エリアの未使用セグメント率 (折れ線グラフ)。[HiRDB v0701 以降]	Reports/HiRDB>Status Reporting/Daily Trend/Advanced/Drilldown Only/
Rdarea Space Monthly (4.0)	最近 1 か月間の 1 日ごとの全 RD エリアの未使用セグメント率 (リスト)。[HiRDB v0700]	Reports/HiRDB>Monthly Trend/Advanced/Drilldown Only/
Rdarea Space Monthly (4.5)	最近 1 か月間の 1 日ごとの全 RD エリアの未使用セグメント率 (リスト)。[HiRDB v0701 以降]	Reports/HiRDB>Monthly Trend/Advanced/Drilldown Only/
Rdarea Space Monthly Chart (4.0)	最近 1 か月間の 1 日ごとの全 RD エリアの未使用セグメント率 (折れ線グラフ)。[HiRDB v0700]	Reports/HiRDB>Monthly Trend/Advanced/Drilldown Only/
Rdarea Space Monthly Chart (4.5)	最近 1 か月間の 1 日ごとの全 RD エリアの未使用セグメント率 (折れ線グラフ)。[HiRDB v0701 以降]	Reports/HiRDB>Monthly Trend/Advanced/Drilldown Only/
Rdarea Space Status (4.0)	全 RD エリアの未使用セグメント率 (60 秒ごとに画面更新)。	Reports/HiRDB>Status Reporting/Daily Trend/Advanced/
Rdarea Space Status Chart (4.0)	全 RD エリアの未使用セグメント率 (60 秒ごとに画面更新)。	Reports/HiRDB>Status Reporting/Daily Trend/Advanced/
Rdarea Space Status Chart Worst 5 (4.0)	全 RD エリアの未使用セグメント率。未使用セグメント率の低い順に 5 件表示 (60 秒ごとに画面更新)。	Reports/HiRDB>Status Reporting/Daily Trend/Advanced/
Rdarea Space Status Worst 5 (4.0)	全 RD エリアの未使用セグメント率。未使用セグメント率の低い順に 5 件表示 (60 秒ごとに画面更新)。	Reports/HiRDB>Status Reporting/Daily Trend/Advanced/
Rdarea Space Trend (4.0)	全 RD エリアの未使用セグメント率 (60 秒ごとに画面更新)。	Reports/HiRDB>Monthly Trend/Advanced/

5. 監視テンプレート

レポート名	表示する情報	格納先
Rdarea Space Trend Chart (4.0)	全 RD エリアの未使用セグメント率 (60 秒ごとに画面更新)。	Reports/HiRDB/Monthly Trend/Advanced/
Rdarea Space Trend Chart Worst 5 (4.0)	全 RD エリアの未使用セグメント率。未使用セグメント率の低い順に 5 件表示 (60 秒ごとに画面更新)。	Reports/HiRDB/Monthly Trend/Advanced/
Rdarea Space Trend Worst 5 (4.0)	全 RD エリアの未使用セグメント率。未使用セグメント率の低い順に 5 件表示 (60 秒ごとに画面更新)。	Reports/HiRDB/Monthly Trend/Advanced/
Rdarea Status (4.0)	全 RD エリアのステータス情報 (60 秒ごとにリスト更新)。	Reports/HiRDB>Status Reporting/Real-Time/Advanced/
Rollback Chart (4.5)	最近 1 か月間の 1 日ごとのロールバック数 (折れ線グラフおよびリスト)。	Reports/HiRDB/Monthly Trend/Advanced/
Rollback Daily Chart (4.5)	過去 1 日の 1 時間ごとのロールバック数 (折れ線グラフおよびリスト)。	Reports/HiRDB>Status Reporting/Daily Trend/Advanced/
Server Calls From Others (4.5)	最近 1 か月間の 1 日ごとのサーバプロセスコール数 (折れ線グラフおよびリスト)。	Reports/HiRDB/Monthly Trend/Advanced/
Server Calls From Others Daily (4.5)	過去 1 日の 1 時間ごとのサーバプロセスコール数 (折れ線グラフおよびリスト)。	Reports/HiRDB>Status Reporting/Daily Trend/Advanced/
Server Calls On Unit (4.5)	最近 1 か月間の 1 日ごとの自ユニットサーバからの 1 サービス当たりの実行回数の平均値 (折れ線グラフおよびリスト)。	Reports/HiRDB/Monthly Trend/Advanced/
Server Calls On Unit Daily (4.5)	過去 1 日の 1 時間ごとの自ユニットサーバからの 1 サービス当たりの実行回数の平均値 (折れ線グラフおよびリスト)。	Reports/HiRDB>Status Reporting/Daily Trend/Advanced/
Server Exec Time From Others (4.5)	最近 1 か月間の 1 日ごとの他ユニットサーバからの 1 サービス当たりの実行時間の平均値 (折れ線グラフおよびリスト)。	Reports/HiRDB/Monthly Trend/Advanced/
Server Exec Time From Others Daily (4.5)	過去 1 日の 1 時間ごとの他ユニットサーバからの 1 サービス当たりの実行時間の平均値 (折れ線グラフおよびリスト)。	Reports/HiRDB>Status Reporting/Daily Trend/Advanced/
Server Exec Time On Unit (4.5)	最近 1 か月間の 1 日ごとの自ユニットサーバからの 1 サービス	Reports/HiRDB/Monthly Trend/Advanced/

5. 監視テンプレート

レポート名	表示する情報	格納先
Server Exec Time On Unit (4.5)	当たりの実行時間の平均値（折れ線グラフおよびリスト）。	Reports/HiRDB/Monthly Trend/Advanced/
Server Exec Time On Unit Daily (4.5)	過去1日の1時間ごとの自ユニットサーバからの1サービス当たりの実行時間の平均値（折れ線グラフおよびリスト）。	Reports/HiRDB>Status Reporting/Daily Trend/Advanced/
Server Process Count Chart (4.5)	最近1か月間の1日ごとのサービス実行中のサーバプロセス数の最大値（折れ線グラフおよびリスト）。	Reports/HiRDB/Monthly Trend/Advanced/
Server Process Count Daily Chart (4.5)	過去1日の1時間ごとのサービス実行中のサーバプロセス数の最大値（折れ線グラフおよびリスト）。	Reports/HiRDB>Status Reporting/Daily Trend/Advanced/
Server Status (4.0)	サーバ/ユニット間（60秒ごとにリスト更新）。	Reports/HiRDB>Status Reporting/Real-Time/Advanced/
System Daily Summary SYS (4.5)	過去1日の1時間ごとのHiRDBのsys統計情報から得られるシステムの稼働（リスト）。	Reports/HiRDB>Status Reporting/Daily Trend/Advanced/Drilldown Only/
System Monthly Summary SYS (4.5)	最近1か月間の1日ごとのHiRDBのsys統計情報から得られるシステムの稼働（リスト）。	Reports/HiRDB/Monthly Trend/Advanced/Drilldown Only/
System Summary SYS (4.5)	HiRDBのsys統計情報から得られるシステムの稼働（リスト）。	Reports/HiRDB/Monthly Trend/Advanced/
Work File Chart (4.5)	最近1か月間の1日ごとの作業表用ファイル用のHiRDBファイルシステム領域（折れ線グラフおよびリスト）。	Reports/HiRDB/Monthly Trend/Advanced/
Work File Daily Chart (4.5)	過去1日の1時間ごとの作業表用ファイル用のHiRDBファイルシステム領域（折れ線グラフおよびリスト）。	Reports/HiRDB>Status Reporting/Daily Trend/Advanced/

5. 監視テンプレート

Buffer Daily Detail

概要

Buffer Daily Detail レポートは、過去 1 日の 1 時間ごとの HiRDB (v0600 以降) で使用している全グローバルバッファのバッファヒット率についての情報をリスト表示します。

格納先

Reports/HiRDB>Status Reporting/Daily Trend/Advanced/Drilldown Only/

レコード

PI Global Buffer Status above 05 (PI_GBUF)

フィールド

フィールド名	説明
Buffer Name	グローバルバッファ名。
Buffer Pool Hit Rate	グローバルバッファプールのヒット率。Buffer Daily Detail Chart を表示するには、このフィールドをクリックする。
Reference Hit Rate	参照要求のヒット率。Buffer Daily Detail Chart for Reference Hit Rate を表示するには、このフィールドをクリックする。
Server Name	サーバ名。
Update Hit Rate	更新要求のヒット率。Buffer Daily Detail Chart for Update Hit Rate を表示するには、このフィールドをクリックする。

ドリルダウンレポート（フィールドレベル）

レポート名	説明
Buffer Daily Detail Chart	指定したグローバルバッファヒット率の履歴をグラフ表示する。このレポートを表示するには、Buffer Pool Hit Rate フィールドをクリックする。
Buffer Daily Detail Chart for Reference Hit Rate	指定したグローバルバッファ参照要求ヒット率の履歴をグラフ表示する。このレポートを表示するには、Reference Hit Rate フィールドをクリックする。
Buffer Daily Detail Chart for Update Hit Rate	指定したグローバルバッファ更新要求ヒット率の履歴をグラフ表示する。このレポートを表示するには、Update Hit Rate フィールドをクリックする。

Buffer Daily Detail 0506

概要

Buffer Daily Detail 0506 レポートは、過去 1 日の 1 時間ごとの HiRDB (v0506) で使用している全グローバルバッファのバッファヒット率についての情報をリスト表示します。

格納先

Reports/HiRDB>Status Reporting/Daily Trend/Advanced/Drilldown Only/

レコード

PI Global Buffer Status 0506 (PI_GB05)

フィールド

フィールド名	説明
Buffer Name	グローバルバッファ名。
Buffer Pool Hit Rate	グローバルバッファプールのヒット率。Buffer Daily Detail Chart を表示するには、このフィールドをクリックする。
Reference Hit Rate	参照要求のヒット率。Buffer Daily Detail Chart for Reference Hit Rate を表示するには、このフィールドをクリックする。
Server Name	サーバ名。
Update Hit Rate	更新要求のヒット率。Buffer Daily Detail Chart for Update Hit Rate を表示するには、このフィールドをクリックする。

ドリルダウンレポート（フィールドレベル）

レポート名	説明
Buffer Daily Detail Chart for Reference Hit Rate 0506	指定したグローバルバッファ参照要求ヒット率の履歴をグラフ表示する。このレポートを表示するには、Reference Hit Rate フィールドをクリックする。
Buffer Daily Detail Chart for Update Hit Rate 0506	指定したグローバルバッファ更新要求ヒット率の履歴をグラフ表示する。このレポートを表示するには、Update Hit Rate フィールドをクリックする。
Buffer Daily Detail Chart 0506	指定したグローバルバッファヒット率の履歴をグラフ表示する。このレポートを表示するには、Buffer Pool Hit Rate フィールドをクリックする。

Buffer Daily Detail Chart

概要

Buffer Daily Detail Chart レポートは、過去 1 日の 1 時間ごとの HiRDB (v0600 以降) で使用している全グローバルバッファのバッファヒット率についての情報をグラフ表示します。

格納先

Reports/HiRDB/Status Reporting/Daily Trend/Advanced/Drilldown Only/

レコード

PI Global Buffer Status above 05 (PI_GBUF)

フィールド

フィールド名	説明
Buffer Name	グローバルバッファ名。
Buffer Pool Hit Rate	グローバルバッファプールのヒット率。
Server Name	サーバ名。

Buffer Daily Detail Chart 0506

概要

Buffer Daily Detail Chart 0506 レポートは、過去 1 日の 1 時間ごとの HiRDB (v0506) で使用している全グローバルバッファのバッファヒット率についての情報をグラフ表示します。

格納先

Reports/HiRDB>Status Reporting/Daily Trend/Advanced/Drilldown Only/

レコード

PI Global Buffer Status 0506 (PI_GB05)

フィールド

フィールド名	説明
Buffer Name	グローバルバッファ名。
Buffer Pool Hit Rate	グローバルバッファプールのヒット率。
Server Name	サーバ名。

Buffer Daily Detail Chart for Reference Hit Rate

概要

Buffer Daily Detail Chart for Reference Hit Rate レポートは、過去 1 日の 1 時間ごとの HiRDB (v0600 以降) で使用している全グローバルバッファ参照要求ヒット率についての情報をグラフ表示します。

格納先

Reports/HiRDB/Status Reporting/Daily Trend/Advanced/Drilldown Only/

レコード

PI Global Buffer Status above 05 (PI_GBUF)

フィールド

フィールド名	説明
Buffer Name	グローバルバッファ名。
Reference Hit Rate	参照要求のヒット率。
Server Name	サーバ名。

Buffer Daily Detail Chart for Reference Hit Rate 0506

概要

Buffer Daily Detail Chart for Reference Hit Rate 0506 レポートは、過去 1 日の 1 時間ごとの HiRDB (v0506) で使用している全グローバルバッファ参照要求ヒット率についての情報をグラフ表示します。

格納先

Reports/HiRDB>Status Reporting/Daily Trend/Advanced/Drilldown Only/

レコード

PI Global Buffer Status 0506 (PI_GB05)

フィールド

フィールド名	説明
Buffer Name	グローバルバッファ名。
Reference Hit Rate	参照要求のヒット率。
Server Name	サーバ名。

Buffer Daily Detail Chart for Update Hit Rate

概要

Buffer Daily Detail Chart for Update Hit Rate レポートは、過去 1 日の 1 時間ごとの HiRDB (v0600 以降) で使用している全グローバルバッファ更新要求ヒット率についての情報をグラフ表示します。

格納先

Reports/HiRDB/Status Reporting/Daily Trend/Advanced/Drilldown Only/

レコード

PI Global Buffer Status above 05 (PI_GBUF)

フィールド

フィールド名	説明
Buffer Name	グローバルバッファ名。
Server Name	サーバ名。
Update Hit Rate	更新要求のヒット率。

Buffer Daily Detail Chart for Update Hit Rate 0506

概要

Buffer Daily Detail Chart for Update Hit Rate 0506 レポートは、過去 1 日の 1 時間ごとの HiRDB (v0506) で使用している全グローバルバッファ更新要求ヒット率についての情報をグラフ表示します。

格納先

Reports/HiRDB>Status Reporting/Daily Trend/Advanced/Drilldown Only/

レコード

PI Global Buffer Status 0506 (PI_GB05)

フィールド

フィールド名	説明
Buffer Name	グローバルバッファ名。
Server Name	サーバ名。
Update Hit Rate	更新要求のヒット率。

Buffer Flush

概要

Buffer Flush レポートは、HiRDB (v0600 以降) で使用している全グローバルバッファのバッファフラッシュ回数についての情報をリスト表示します。

格納先

Reports/HiRDB/Troubleshooting/Real-Time/Advanced/

レコード

PI Global Buffer Status above 05 (PI_GBUF)

フィールド

フィールド名	説明
Buffer Name	グローバルバッファ名。
Reference Buffer Flushes	参照バッファフラッシュ回数。
Server Name	サーバ名。
Update Buffer Flushes	更新バッファフラッシュ回数。
Waits	バッファ排他待ち発生回数。

ドリルダウンレポート（フィールドレベル）

レポート名	説明
Buffer Flush Detail	指定したグローバルバッファのバッファフラッシュの履歴をリスト表示する。このレポートを表示するには、Buffer Name フィールドをクリックする。

Buffer Flush 0506

概要

Buffer Flush 0506 レポートは、HiRDB (v0506) で使用している全グローバルバッファのバッファフラッシュ回数についての情報をリスト表示します。

格納先

Reports/HiRDB/Troubleshooting/Real-Time/Advanced/

レコード

PI Global Buffer Status 0506 (PI_GB05)

フィールド

フィールド名	説明
Buffer Name	グローバルバッファ名。
Reference Buffer Flushes	参照バッファフラッシュ回数。
Server Name	サーバ名。
Update Buffer Flushes	更新バッファフラッシュ回数。
Waits	バッファ排他待ち発生回数。

ドリルダウンレポート（フィールドレベル）

レポート名	説明
Buffer Flush Detail 0506	指定したグローバルバッファのバッファフラッシュの履歴をリスト表示する。このレポートを表示するには、Buffer Name フィールドをクリックする。

Buffer Flush Detail

概要

Buffer Flush Detail レポートは、過去 1 日の 1 時間ごとの HiRDB (v0600 以降) で使用している全グローバルバッファのバッファフラッシュ回数についての情報をリスト表示します。

格納先

Reports/HiRDB/Troubleshooting/Real-Time/Advanced/Drilldown Only/

レコード

PI Global Buffer Status above 05 (PI_GBUF)

フィールド

フィールド名	説明
Buffer Name	グローバルバッファ名。
Reference Buffer Flushes	参照バッファフラッシュ回数。
Server Name	サーバ名。
Update Buffer Flushes	更新バッファフラッシュ回数。
Waits	バッファ排他待ち発生回数。

Buffer Flush Detail 0506

概要

Buffer Flush Detail 0506 レポートは、過去 1 日の 1 時間ごとの HiRDB (v0506) で使用している全グローバルバッファのバッファフラッシュ回数についての情報をリスト表示します。

格納先

Reports/HiRDB/Troubleshooting/Real-Time/Advanced/Drilldown Only/

レコード

PI Global Buffer Status 0506 (PI_GB05)

フィールド

フィールド名	説明
Buffer Name	グローバルバッファ名。
Reference Buffer Flushes	参照バッファフラッシュ回数。
Server Name	サーバ名。
Update Buffer Flushes	更新バッファフラッシュ回数。
Waits	バッファ排他待ち発生回数。

Buffer Monthly Detail

概要

Buffer Monthly Detail レポートは、最近 1 か月間の 1 日ごとの HiRDB (v0600 以降) で使用している全グローバルバッファのバッファヒット率についての情報をリスト表示します。

格納先

Reports/HiRDB/Monthly Trend/Advanced/Drilldown Only/

レコード

PI Global Buffer Status above 05 (PI_GBUF)

フィールド

フィールド名	説明
Buffer Name	グローバルバッファ名。
Buffer Pool Hit Rate	グローバルバッファプールのヒット率。Buffer Monthly Detail Chart を表示するには、このフィールドをクリックする。
Reference Hit Rate	参照要求のヒット率。Buffer Monthly Detail Chart for Reference Hit Rate を表示するには、このフィールドをクリックする。
Server Name	サーバ名。
Update Hit Rate	更新要求のヒット率。Buffer Monthly Detail Chart for Update Hit Rate を表示するには、このフィールドをクリックする。

ドリルダウンレポート（フィールドレベル）

レポート名	説明
Buffer Monthly Detail Chart	指定したグローバルバッファヒット率の履歴をグラフ表示する。このレポートを表示するには、Buffer Pool Hit Rate フィールドをクリックする。
Buffer Monthly Detail Chart for Reference Hit Rate	指定したグローバルバッファ参照要求ヒット率の履歴をグラフ表示する。このレポートを表示するには、Reference Hit Rate フィールドをクリックする。
Buffer Monthly Detail Chart for Update Hit Rate	指定したグローバルバッファ更新要求ヒット率の履歴をグラフ表示する。このレポートを表示するには、Update Hit Rate フィールドをクリックする。

Buffer Monthly Detail 0506

概要

Buffer Monthly Detail 0506 レポートは、最近 1 か月間の 1 日ごとの HiRDB (v0506) で使用している全グローバルバッファのバッファヒット率についての情報をリスト表示します。

格納先

Reports/HiRDB/Monthly Trend/Advanced/Drilldown Only/

レコード

PI Global Buffer Status 0506 (PI_GB05)

フィールド

フィールド名	説明
Buffer Name	グローバルバッファ名。
Buffer Pool Hit Rate	グローバルバッファプールのヒット率。Buffer Monthly Detail Chart を表示するには、このフィールドをクリックする。
Reference Hit Rate	参照要求のヒット率。Buffer Monthly Detail Chart for Reference Hit Rate を表示するには、このフィールドをクリックする。
Server Name	サーバ名。
Update Hit Rate	更新要求のヒット率。Buffer Monthly Detail Chart for Update Hit Rate を表示するには、このフィールドをクリックする。

ドリルダウンレポート（フィールドレベル）

レポート名	説明
Buffer Monthly Detail Chart 0506	指定したグローバルバッファヒット率の履歴をグラフ表示する。このレポートを表示するには、Buffer Pool Hit Rate フィールドをクリックする。
Buffer Monthly Detail Chart for Reference Hit Rate 0506	指定したグローバルバッファ参照要求ヒット率の履歴をグラフ表示する。このレポートを表示するには、Reference Hit Rate フィールドをクリックする。
Buffer Monthly Detail Chart for Update Hit Rate 0506	指定したグローバルバッファ更新要求ヒット率の履歴をグラフ表示する。このレポートを表示するには、Update Hit Rate フィールドをクリックする。

Buffer Monthly Detail Chart

概要

Buffer Monthly Detail Chart レポートは、最近 1 か月間の 1 日ごとの HiRDB (v0600 以降) で使用している全グローバルバッファのバッファヒット率についての情報をグラフ表示します。

格納先

Reports/HiRDB/Monthly Trend/Advanced/Drilldown Only/

レコード

PI Global Buffer Status above 05 (PI_GBUF)

フィールド

フィールド名	説明
Buffer Name	グローバルバッファ名。
Buffer Pool Hit Rate	グローバルバッファプールのヒット率。
Server Name	サーバ名。

Buffer Monthly Detail Chart 0506

概要

Buffer Monthly Detail Chart 0506 レポートは、最近 1 か月間の 1 日ごとの HiRDB (v0506) で使用している全グローバルバッファのバッファヒット率についての情報をグラフ表示します。

格納先

Reports/HiRDB/Monthly Trend/Advanced/Drilldown Only/

レコード

PI Global Buffer Status 0506 (PI_GB05)

フィールド

フィールド名	説明
Buffer Name	グローバルバッファ名。
Buffer Pool Hit Rate	グローバルバッファプールのヒット率。
Server Name	サーバ名。

Buffer Monthly Detail Chart for Reference Hit Rate

概要

Buffer Monthly Detail Chart for Reference Hit Rate レポートは、最近 1 か月間の 1 日ごとの HiRDB (v0600 以降) で使用している全グローバルバッファ参照要求ヒット率についての情報をグラフ表示します。

格納先

Reports/HiRDB/Monthly Trend/Advanced/Drilldown Only/

レコード

PI Global Buffer Status above 05 (PI_GBUF)

フィールド

フィールド名	説明
Buffer Name	グローバルバッファ名。
Reference Hit Rate	参照要求のヒット率。
Server Name	サーバ名。

Buffer Monthly Detail Chart for Reference Hit Rate 0506

概要

Buffer Monthly Detail Chart for Reference Hit Rate 0506 レポートは、最近 1 か月間の 1 日ごとの HiRDB (v0506) で使用している全グローバルバッファ参照要求ヒット率についての情報をグラフ表示します。

格納先

Reports/HiRDB/Monthly Trend/Advanced/Drilldown Only/

レコード

PI Global Buffer Status 0506 (PI_GB05)

フィールド

フィールド名	説明
Buffer Name	グローバルバッファ名。
Reference Hit Rate	参照要求のヒット率。
Server Name	サーバ名。

Buffer Monthly Detail Chart for Update Hit Rate

概要

Buffer Monthly Detail Chart for Update Hit Rate レポートは、最近 1 か月間の 1 日ごとの HiRDB (v0600 以降) で使用している全グローバルバッファ更新要求ヒット率についての情報をグラフ表示します。

格納先

Reports/HiRDB/Monthly Trend/Advanced/Drilldown Only/

レコード

PI Global Buffer Status above 05 (PI_GBUF)

フィールド

フィールド名	説明
Buffer Name	グローバルバッファ名。
Server Name	サーバ名。
Update Hit Rate	更新要求のヒット率。

Buffer Monthly Detail Chart for Update Hit Rate 0506

概要

Buffer Monthly Detail Chart for Update Hit Rate 0506 レポートは、最近 1 か月間の 1 日ごとの HiRDB (v0506) で使用している全グローバルバッファ更新要求ヒット率についての情報をグラフ表示します。

格納先

Reports/HiRDB/Monthly Trend/Advanced/Drilldown Only/

レコード

PI Global Buffer Status 0506 (PI_GB05)

フィールド

フィールド名	説明
Buffer Name	グローバルバッファ名。
Server Name	サーバ名。
Update Hit Rate	更新要求のヒット率。

Buffer Status

概要

Buffer Status レポートは、HiRDB (v0600 以降) で使用している全グローバルバッファのバッファヒット率についての情報をリスト表示します。

格納先

Reports/HiRDB>Status Reporting/Daily Trend/Advanced/

レコード

PI Global Buffer Status above 05 (PI_GBUF)

フィールド

フィールド名	説明
Buffer Name	グローバルバッファ名。Buffer Daily Detail を表示するには、このフィールドをクリックする。
Buffer Pool Hit Rate	グローバルバッファプールのヒット率。Buffer Daily Detail Chart を表示するには、このフィールドをクリックする。
Reference Hit Rate	参照要求のヒット率。Buffer Daily Detail Chart for Reference Hit Rate を表示するには、このフィールドをクリックする。
Server Name	サーバ名。
Update Hit Rate	更新要求のヒット率。Buffer Daily Detail Chart for Update Hit Rate を表示するには、このフィールドをクリックする。

ドリルダウンレポート（フィールドレベル）

レポート名	説明
Buffer Daily Detail	指定したグローバルバッファヒット率の履歴をリスト表示する。このレポートを表示するには、Buffer Name フィールドをクリックする。
Buffer Daily Detail Chart	指定したグローバルバッファヒット率の履歴をグラフ表示する。このレポートを表示するには、Buffer Pool Hit Rate フィールドをクリックする。
Buffer Daily Detail Chart for Reference Hit Rate	指定したグローバルバッファ参照要求ヒット率の履歴をグラフ表示する。このレポートを表示するには、Reference Hit Rate フィールドをクリックする。
Buffer Daily Detail Chart for Update Hit Rate	指定したグローバルバッファ更新要求ヒット率の履歴をグラフ表示する。このレポートを表示するには、Update Hit Rate フィールドをクリックする。

Buffer Status 0506

概要

Buffer Status 0506 レポートは、HiRDB (v0506) で使用している全グローバルバッファのバッファヒット率についての情報をリスト表示します。

格納先

Reports/HiRDB>Status Reporting/Daily Trend/Advanced/

レコード

PI Global Buffer Status 0506 (PI_GB05)

フィールド

フィールド名	説明
Buffer Name	グローバルバッファ名。Buffer Daily Detail を表示するには、このフィールドをクリックする。
Buffer Pool Hit Rate	グローバルバッファプールのヒット率。Buffer Daily Detail Chart を表示するには、このフィールドをクリックする。
Reference Hit Rate	参照要求のヒット率。Buffer Daily Detail Chart for Reference Hit Rate を表示するには、このフィールドをクリックする。
Server Name	サーバ名。
Update Hit Rate	更新要求のヒット率。Buffer Daily Detail Chart for Update Hit Rate を表示するには、このフィールドをクリックする。

ドリルダウンレポート（フィールドレベル）

レポート名	説明
Buffer Daily Detail 0506	指定したグローバルバッファヒット率の履歴をリスト表示する。このレポートを表示するには、Buffer Name フィールドをクリックする。
Buffer Daily Detail Chart 0506	指定したグローバルバッファヒット率の履歴をグラフ表示する。このレポートを表示するには、Buffer Pool Hit Rate フィールドをクリックする。
Buffer Daily Detail Chart for Reference Hit Rate 0506	指定したグローバルバッファ参照要求ヒット率の履歴をグラフ表示する。このレポートを表示するには、Reference Hit Rate フィールドをクリックする。
Buffer Daily Detail Chart for Update Hit Rate 0506	指定したグローバルバッファ更新要求ヒット率の履歴をグラフ表示する。このレポートを表示するには、Update Hit Rate フィールドをクリックする。

Buffer Status Chart

概要

Buffer Status Chart レポートは、HiRDB（v0600 以降）で使用している全グローバルバッファのバッファヒット率についての情報をグラフ表示します。

格納先

Reports/HiRDB>Status Reporting/Daily Trend/Advanced/

レコード

PI Global Buffer Status above 05 (PI_GBUF)

フィールド

フィールド名	説明
Buffer Name	グローバルバッファ名。
Buffer Pool Hit Rate	グローバルバッファプールのヒット率。Buffer Daily Detail Chart を表示するには、このフィールドをクリックする。
Reference Hit Rate	参照要求のヒット率。Buffer Daily Detail Chart for Reference Hit Rate を表示するには、このフィールドをクリックする。
Server Name	サーバ名。
Update Hit Rate	更新要求のヒット率。Buffer Daily Detail Chart for Update Hit Rate を表示するには、このフィールドをクリックする。

ドリルダウンレポート（フィールドレベル）

レポート名	説明
Buffer Daily Detail Chart	指定したグローバルバッファヒット率の履歴をグラフ表示する。このレポートを表示するには、Buffer Pool Hit Rate フィールドをクリックする。
Buffer Daily Detail Chart for Reference Hit Rate	指定したグローバルバッファ参照要求ヒット率の履歴をグラフ表示する。このレポートを表示するには、Reference Hit Rate フィールドをクリックする。
Buffer Daily Detail Chart for Update Hit Rate	指定したグローバルバッファ更新要求ヒット率の履歴をグラフ表示する。このレポートを表示するには、Update Hit Rate フィールドをクリックする。

Buffer Status Chart 0506

概要

Buffer Status Chart 0506 レポートは、HiRDB (v0506) で使用している全グローバルバッファのバッファヒット率についての情報をグラフ表示します。

格納先

Reports/HiRDB>Status Reporting/Daily Trend/Advanced/

レコード

PI Global Buffer Status 0506 (PI_GB05)

フィールド

フィールド名	説明
Buffer Name	グローバルバッファ名。
Buffer Pool Hit Rate	グローバルバッファプールのヒット率。Buffer Daily Detail Chart を表示するには、このフィールドをクリックする。
Reference Hit Rate	参照要求のヒット率。Buffer Daily Detail Chart for Reference Hit Rate を表示するには、このフィールドをクリックする。
Server Name	サーバ名。
Update Hit Rate	更新要求のヒット率。Buffer Daily Detail Chart for Update Hit Rate を表示するには、このフィールドをクリックする。

ドリルダウンレポート（フィールドレベル）

レポート名	説明
Buffer Daily Detail Chart 0506	指定したグローバルバッファヒット率の履歴をグラフ表示する。このレポートを表示するには、Buffer Pool Hit Rate フィールドをクリックする。
Buffer Daily Detail Chart for Reference Hit Rate 0506	指定したグローバルバッファ参照要求ヒット率の履歴をグラフ表示する。このレポートを表示するには、Reference Hit Rate フィールドをクリックする。
Buffer Daily Detail Chart for Update Hit Rate 0506	指定したグローバルバッファ更新要求ヒット率の履歴をグラフ表示する。このレポートを表示するには、Update Hit Rate フィールドをクリックする。

Buffer Trend

概要

Buffer Trend レポートは、HiRDB (v0600 以降) で使用している全グローバルバッファのバッファヒット率についての情報をリスト表示します。

格納先

Reports/HiRDB/Monthly Trend/Advanced/

レコード

PI Global Buffer Status above 05 (PI_GBUF)

フィールド

フィールド名	説明
Buffer Name	グローバルバッファ名。Buffer Monthly Detail を表示するには、このフィールドをクリックする。
Buffer Pool Hit Rate	グローバルバッファプールのヒット率。Buffer Monthly Detail Chart を表示するには、このフィールドをクリックする。
Reference Hit Rate	Buffer Monthly Detail Chart for Reference Hit Rate を表示するには、このフィールドをクリックする。
Server Name	サーバ名。
Update Hit Rate	更新要求のヒット率。Buffer Monthly Detail Chart for Update Hit Rate を表示するには、このフィールドをクリックする。

ドリルダウンレポート（フィールドレベル）

レポート名	説明
Buffer Monthly Detail	指定したグローバルバッファヒット率の履歴をリスト表示する。このレポートを表示するには、Buffer Name フィールドをクリックする。
Buffer Monthly Detail Chart	指定したグローバルバッファヒット率の履歴をグラフ表示する。このレポートを表示するには、Buffer Pool Hit Rate フィールドをクリックする。
Buffer Monthly Detail Chart for Reference Hit Rate	指定したグローバルバッファ参照要求ヒット率の履歴をグラフ表示する。このレポートを表示するには、Reference Hit Rate フィールドをクリックする。
Buffer Monthly Detail Chart for Update Hit Rate	指定したグローバルバッファ更新要求ヒット率の履歴をグラフ表示する。このレポートを表示するには、Update Hit Rate フィールドをクリックする。

Buffer Trend 0506

概要

Buffer Trend 0506 レポートは、HiRDB (v0506) で使用している全グローバルバッファのバッファヒット率についての情報をリスト表示します。

格納先

Reports/HiRDB/Monthly Trend/Advanced/

レコード

PI Global Buffer Status 0506 (PI_GB05)

フィールド

フィールド名	説明
Buffer Name	グローバルバッファ名。Buffer Monthly Detail を表示するには、このフィールドをクリックする。
Buffer Pool Hit Rate	グローバルバッファプールのヒット率。Buffer Monthly Detail Chart を表示するには、このフィールドをクリックする。
Reference Hit Rate	Buffer Monthly Detail Chart for Reference Hit Rate を表示するには、このフィールドをクリックする。
Server Name	サーバ名。
Update Hit Rate	更新要求のヒット率。Buffer Monthly Detail Chart for Update Hit Rate を表示するには、このフィールドをクリックする。

ドリルダウンレポート（フィールドレベル）

レポート名	説明
Buffer Monthly Detail 0506	指定したグローバルバッファヒット率の履歴をリスト表示する。このレポートを表示するには、Buffer Name フィールドをクリックする。
Buffer Monthly Detail Chart 0506	指定したグローバルバッファヒット率の履歴をグラフ表示する。このレポートを表示するには、Buffer Pool Hit Rate フィールドをクリックする。
Buffer Monthly Detail Chart for Reference Hit Rate 0506	指定したグローバルバッファ参照要求ヒット率の履歴をグラフ表示する。このレポートを表示するには、Reference Hit Rate フィールドをクリックする。
Buffer Monthly Detail Chart for Update Hit Rate 0506	指定したグローバルバッファ更新要求ヒット率の履歴をグラフ表示する。このレポートを表示するには、Update Hit Rate フィールドをクリックする。

Buffer Trend Chart

概要

Buffer Trend Chart レポートは、HiRDB（v0600 以降）で使用している全グローバルバッファのバッファヒット率についての情報をグラフ表示します。

格納先

Reports/HiRDB/Monthly Trend/Advanced/

レコード

PI Global Buffer Status above 05 (PI_GBUF)

フィールド

フィールド名	説明
Buffer Name	グローバルバッファ名。
Buffer Pool Hit Rate	グローバルバッファプールのヒット率。Buffer Monthly Detail Chart を表示するには、このフィールドをクリックする。
Reference Hit Rate	参照要求のヒット率。Buffer Monthly Detail Chart for Reference Hit Rate を表示するには、このフィールドをクリックする。
Server Name	サーバ名。
Update Hit Rate	更新要求のヒット率。Buffer Monthly Detail Chart for Update Hit Rate を表示するには、このフィールドをクリックする。

ドリルダウンレポート（フィールドレベル）

レポート名	説明
Buffer Monthly Detail Chart	指定したグローバルバッファヒット率の履歴をグラフ表示する。このレポートを表示するには、Buffer Pool Hit Rate フィールドをクリックする。
Buffer Monthly Detail Chart for Reference Hit Rate	指定したグローバルバッファ参照要求ヒット率の履歴をグラフ表示する。このレポートを表示するには、Reference Hit Rate フィールドをクリックする。
Buffer Monthly Detail Chart for Update Hit Rate	指定したグローバルバッファ更新要求ヒット率の履歴をグラフ表示する。このレポートを表示するには、Update Hit Rate フィールドをクリックする。

Buffer Trend Chart 0506

概要

Buffer Trend Chart 0506 レポートは、HiRDB (v0506) で使用している全グローバルバッファのバッファヒット率についての情報をグラフ表示します。

格納先

Reports/HiRDB/Monthly Trend/Advanced/

レコード

PI Global Buffer Status 0506 (PI_GB05)

フィールド

フィールド名	説明
Buffer Name	グローバルバッファ名。
Buffer Pool Hit Rate	グローバルバッファプールのヒット率。Buffer Monthly Detail Chart を表示するには、このフィールドをクリックする。
Reference Hit Rate	参照要求のヒット率。Buffer Monthly Detail Chart for Reference Hit Rate を表示するには、このフィールドをクリックする。
Server Name	サーバ名。
Update Hit Rate	更新要求のヒット率。Buffer Monthly Detail Chart for Update Hit Rate を表示するには、このフィールドをクリックする。

ドリルダウンレポート（フィールドレベル）

レポート名	説明
Buffer Monthly Detail Chart 0506	指定したグローバルバッファヒット率の履歴をグラフ表示する。このレポートを表示するには、Buffer Pool Hit Rate フィールドをクリックする。
Buffer Monthly Detail Chart for Reference Hit Rate 0506	指定したグローバルバッファ参照要求ヒット率の履歴をグラフ表示する。このレポートを表示するには、Reference Hit Rate フィールドをクリックする。
Buffer Monthly Detail Chart for Update Hit Rate 0506	指定したグローバルバッファ更新要求ヒット率の履歴をグラフ表示する。このレポートを表示するには、Update Hit Rate フィールドをクリックする。

Commit Chart (4.5)

概要

Commit Chart (4.5) レポートは、サーバごとにコミット数の平均値を折れ線グラフ表示およびリスト表示します。最近 1か月間の 1日ごとに集計された情報を表示します。

格納先

Reports/HiRDB/Monthly Trend/Advanced/

レコード

PI Statistical Information SYS (PI_SSYS)

フィールド

フィールド名	説明
Commit	コミット数の平均値。
Host	ホスト名。
Server Name	サーバ名。

ドリルダウンレポート（レポートレベル）

レポート名	説明
Commit Daily Chart (4.5)	コミット数の平均値を折れ線グラフ表示およびリスト表示する。

ドリルダウンレポート（フィールドレベル）

レポート名	説明
Commit Daily Chart (4.5)	指定したコミット数の平均値の履歴を折れ線グラフ表示およびリスト表示する。

Commit Daily Chart (4.5)

概要

Commit Daily Chart (4.5) レポートは、サーバごとにコミット数の平均値を折れ線グラフ表示およびリスト表示します。過去 1 日の 1 時間ごとに集計された情報を表示します。

格納先

Reports/HiRDB/Status Reporting/Daily Trend/Advanced/

レコード

PI Statistical Information SYS (PI_SSYS)

フィールド

フィールド名	説明
Commit	コミット数の平均値。
Host	ホスト名。
Server Name	サーバ名。

Connect Requests Chart (4.5)

概要

Connect Requests Chart (4.5) レポートは、サーバごとに HiRDB コネクト要求回数を折れ線グラフ表示およびリスト表示します。最近 1 か月間の 1 日ごとに集計された情報を表示します。

格納先

Reports/HiRDB/Monthly Trend/Advanced/

レコード

PI Statistical Information SYS (PI_SSYS)

フィールド

フィールド名	説明
Dic CON/DBA Def Get Req	ユーザー権限情報取得要求回数の平均値 (HiRDB コネクト要求回数)。
Host	ホスト名。
Server Name	サーバ名。

ドリルダウンレポート（レポートレベル）

レポート名	説明
Connect Requests Daily Chart (4.5)	HiRDB コネクト要求回数を折れ線グラフ表示およびリスト表示する。

ドリルダウンレポート（フィールドレベル）

レポート名	説明
Connect Requests Daily Chart (4.5)	指定した HiRDB コネクト要求回数の履歴を折れ線グラフ表示およびリスト表示する。

Connect Requests Daily Chart (4.5)

概要

Connect Requests Daily Chart (4.5) レポートは、サーバごとに HiRDB コネクト要求回数を折れ線グラフ表示およびリスト表示します。過去 1 日の 1 時間ごとに集計された情報を表示します。

格納先

Reports/HiRDB>Status Reporting/Daily Trend/Advanced/

レコード

PI Statistical Information SYS (PI_SSYS)

フィールド

フィールド名	説明
Dic CON/DBA Def Get Req	ユーザー権限情報取得要求回数の平均値 (HiRDB コネクト要求回数)。
Host	ホスト名。
Server Name	サーバ名。

DB Maintenance Info ROT1 (5.0)

概要

DB Maintenance Info ROT1 (5.0) レポートは、予測レベル 1 の再編成時期予測機能の実行結果を基に、メンテナンスが必要なリソースおよびメンテナンスに必要な情報をリスト形式で表示します。

格納先

Reports/HiRDB>Status Reporting/Real-Time/Advanced/

レコード

PD Forecast Time of Reorg 1 (PD_ROT1)

フィールド

フィールド名	説明
Analytical No	解析結果番号。
Author ID	認可識別子。
Maintenance Date	データベースのメンテナンス予定日。
Maintenance Method	メンテナンス方法の番号。 0 : メンテナンス不要 1 : ReclaimS (使用中空きセグメントの解放) 2 : ReclaimP (使用中空きページの解放) 3 : Reorganize (再編成) 4 : Expand (RD エリアの拡張) 5 : Extend (RD エリアの自動増分 (メンテナンス不要)) 6 : Reinit (RD エリアの再初期化)
Maintenance Necessity	メンテナンスが必要かどうか。 Y : メンテナンスが必要 N : メンテナンスは不要
Maintenance Object Name	表またはインデクスの名称。
Maintenance Object Type	対象種別。 T : 表 I : インデクス L : LOB 用 RD エリア R : データディクショナリ用 RD エリア、ユーザ用 RD エリアまたはレジストリ用 RD エリア
Output Kind	出力種別。 p : DB メンテナンス予定日の情報 m : メンテナンス方法の情報
Predict Reclaim	使用中空きセグメントの解放での解放セグメント予測数。

フィールド名	説明
Predict Reorganize	再編成での解放セグメント予測数。
RDAREA Name	RD エリア名。
Released Segment	解放セグメント数。

データフィルタ

詳細項目	内容
種別	基本フィルター
表示時に指定	なし
フィールド	Maintenance Necessity
条件	=
値	"Y"

DB Maintenance Info ROT2 (5.0)

概要

DB Maintenance Info ROT2 (5.0) レポートは、予測レベル 2 の再編成時期予測機能の実行結果を基に、メンテナンスが必要なリソースおよびメンテナンスに必要な情報をリスト形式で表示します。

格納先

Reports/HiRDB>Status Reporting/Real-Time/Advanced/

レコード

PD Forecast Time of Reorg 2 (PD_ROT2)

フィールド

フィールド名	説明
Analytical No	解析結果番号。
Author ID	認可識別子。
Information No	解析項目種別の番号。 1 : Empty Page Ratio 2 : Unused Page Ratio 3 : Number of Branch Row 8 : Used Segment for LOB Columns 10 : Used Segment for Cluster 11 : Unused Page Differ From PCTFREE 13 : Used Segment Ratio
Maintenance Date	データベースのメンテナンス予定日。
Maintenance Method	メンテナンス方法の番号。 0 : メンテナンス不要 1 : ReclaimS (使用中空きセグメントの解放) 2 : ReclaimP (使用中空きページの解放) 3 : Reorganize (再編成) 4 : Expand (RD エリアの拡張) 5 : Extend (RD エリアの自動増分 (メンテナンス不要)) 6 : Reinit (RD エリアの再初期化)
Maintenance Necessity	メンテナンスが必要かどうか。 Y : メンテナンスが必要 N : メンテナンスは不要
Maintenance Object Name	表またはインデックスの名称。
Maintenance Object Type	対象種別。

フィールド名	説明
Maintenance Object Type	T : 表 I : インデックス L : LOB 用 RD エリア R : データディクショナリ用 RD エリア, ユーザ用 RD エリアまたはレジストリ用 RD エリア
Output Kind	出力種別。 p : DB メンテナンス予定日の情報 m : メンテナンス方法の情報 d : 解析項目別情報
Predict Reclaim	使用中空きセグメントの解放での解放セグメント予測数。
Predict Reorganize	再編成での解放セグメント予測数。
RDAREA Name	RD エリア名。
Released Segment	解放セグメント数。

データフィルタ

詳細項目	内容
種別	基本フィルター
表示時に指定	なし
フィールド	Maintenance Necessity
条件	=
値	"Y"

HiRDB Message Log (4.0)

概要

HiRDB Message Log (4.0) レポートは、HiRDB サーバが出力するメッセージを監視してリスト表示します。

格納先

Reports/HiRDB/Troubleshooting/Advanced/

レコード

PD HiRDB Message (PD_MLOG)

フィールド

フィールド名	説明
HiRDB ID	HiRDB 識別子。
Host	要求元ホスト名。
Message Date	メッセージ出力年月日。
Message ID	メッセージ ID。
Message Text	メッセージテキスト。
Message Time	メッセージ出力時分秒。
Unit ID	ユニット識別子。

HiRDB Message Log 1 Hour (4.0)

概要

HiRDB Message Log 1 Hour (4.0) レポートは、最近 1 時間以内の HiRDB サーバが出力するメッセージを監視してリスト表示します。

格納先

Reports/HiRDB/Troubleshooting/Recent Past/Advanced/

レコード

PD HiRDB Message (PD_MLOG)

フィールド

フィールド名	説明
HiRDB ID	HiRDB 識別子。
Host	要求元ホスト名。
Message Date	メッセージ出力年月日。
Message ID	メッセージ ID。
Message Text	メッセージテキスト。
Message Time	メッセージ出力時分秒。
Unit ID	ユニット識別子。

Process Request Over Chart (4.5)

概要

Process Request Over Chart (4.5) レポートは、サーバごとに最大起動プロセス数を超えたサービス要求数を折れ線グラフ表示およびリスト表示します。最近 1か月間の 1日ごとに集計された情報を表示します。

このレポートに表示される値は HiRDB システム定義の次のオペランドに関するチューニングに使用します。具体的なチューニング方法については、マニュアル「HiRDB システム運用ガイド」の常駐プロセス数のチューニングの説明を参照してください。

- pd_process_count

格納先

Reports/HiRDB/Monthly Trend/Advanced/

レコード

PI Statistical Information SYS (PI_SSYS)

フィールド

フィールド名	説明
Host	ホスト名。
Process Request Over	最大起動プロセス数を超えたサービス要求数。
Server Name	サーバ名。

ドリルダウンレポート（レポートレベル）

レポート名	説明
Process Request Over Daily Chart (4.5)	最大起動プロセス数を超えたサービス要求数を折れ線グラフ表示およびリスト表示する。

ドリルダウンレポート（フィールドレベル）

レポート名	説明
Process Request Over Daily Chart (4.5)	指定した最大起動プロセス数を超えたサービス要求数の履歴を折れ線グラフ表示およびリスト表示する。

Process Request Over Daily Chart (4.5)

概要

Process Request Over Daily Chart (4.5) レポートは、サーバごとに最大起動プロセス数を超えたサービス要求数を折れ線グラフ表示およびリスト表示します。過去1日の1時間ごとに集計された情報を表示します。

このレポートに表示される値は HiRDB システム定義の次のオペランドに関するチューニングに使用します。具体的なチューニング方法については、マニュアル「HiRDB システム運用ガイド」の常駐プロセス数のチューニングの説明を参照してください。

- pd_process_count

格納先

Reports/HiRDB/Status Reporting/Daily Trend/Advanced/

レコード

PI Statistical Information SYS (PI_SSYS)

フィールド

フィールド名	説明
Host	ホスト名。
Process Request Over	最大起動プロセス数を超えたサービス要求数。
Server Name	サーバ名。

Rdarea Available Space Daily (4.5)

概要

Rdarea Available Space Daily (4.5) レポートは、過去 1 日の 1 時間ごとの HiRDB で使用している全 RD エリアの使用中空きページの比率についての情報を、折れ線グラフ表示およびリスト表示します。

格納先

Reports/HiRDB>Status Reporting/Daily Trend/Advanced/Drilldown Only/

レコード

PI RDArea Detailed Status (PI_RDDS)

フィールド

フィールド名	説明
Available Used Page %	使用中空きページの割合。このフィールド値を折れ線グラフの縦軸とする。
Available Used Pages	使用中空きページ数。
Full Used Pages	満杯ページ数。
RDAREA Name	RD エリア名。
Server Name	サーバ名。
Total Pages	RD エリア内のセグメントの中にあるページ数の合計（使用中ページ数+未使用ページ数）。
Unused Pages	未使用ページ数。
Used Pages	使用中ページ数。

ドリルダウンレポート（レポートレベル）

レポート名	説明
Rdarea File Space Monthly (4.5)	RD エリアを格納している HiRDB ファイルシステム領域の容量についての情報を、折れ線グラフ表示およびリスト表示する。

ドリルダウンレポート（フィールドレベル）

レポート名	説明
Rdarea File Space Monthly (4.5)	指定した RD エリアを格納している HiRDB ファイルシステム領域の容量の履歴を、折れ線グラフ表示およびリスト表示する。

Rdarea Available Space Monthly (4.5)

概要

Rdarea Available Space Monthly (4.5) レポートは、最近 1 か月間の 1 日ごとの HiRDB で使用している全 RD エリアの使用中空きページの比率についての情報を、折れ線グラフ表示およびリスト表示します。

インデックス用 RD エリアについては満杯ページが作成されにくいので、RD エリアの使用できる領域の目安としては Available Pages ではなくて Unused Pages を参照してください。

格納先

Reports/HiRDB>Status Reporting/Daily Trend/Advanced/Drilldown Only/

レコード

PI RDArea Detailed Status (PI_RDDS)

フィールド

フィールド名	説明
Available Used Page %	使用中空きページの割合。このフィールド値を折れ線グラフの縦軸とする。
Available Used Pages	使用中空きページ数。
Full Used Pages	満杯ページ数。
RDAREA Name	RD エリア名。
Server Name	サーバ名。
Total Pages	RD エリア内のセグメントの中にあるページ数の合計（使用中ページ数+未使用ページ数）。
Unused Pages	未使用ページ数。
Used Pages	使用中ページ数。

ドリルダウンレポート（レポートレベル）

レポート名	説明
Rdarea Available Space Daily (4.5)	全 RD エリアの使用中空きページの比率についての情報を、折れ線グラフ表示およびリスト表示する。

ドリルダウンレポート（フィールドレベル）

レポート名	説明
Rdarea Available Space Daily (4.5)	指定した RD エリアの使用中空きページの比率の履歴を、折れ線グラフ表示およびリスト表示する。

Rdarea File I/O Daily (4.5)

概要

Rdarea File I/O Daily (4.5) レポートは、過去 1 日の 1 時間ごとの RD エリアを格納している HiRDB ファイルシステム領域の I/O についての情報を、折れ線グラフ表示およびリスト表示します。

格納先

Reports/HiRDB>Status Reporting/Daily Trend/Advanced/Drilldown Only/

レコード

PI HiRDB File System Area Status (PI_RDFS)

フィールド

フィールド名	説明
HiRDB File System Area Name	HiRDB ファイルシステム領域名（絶対パス表示）。
HiRDB File System Area Type	HiRDB ファイルシステム領域種別。
Host	ホスト名。
I/O Ops/sec	1 秒当たりの I/O 回数。
RDAREA Name	RD エリア名。
Reads/sec	1 秒当たりの読み込み処理回数。
Server Name	サーバ名。
Writes/sec	1 秒当たりの書き込み処理回数。

ドリルダウンレポート（レポートレベル）

レポート名	説明
Rdarea Status (4.0)	全 RD エリアのステータスを監視してステータス情報をリスト表示する。

ドリルダウンレポート（フィールドレベル）

レポート名	説明
Rdarea Status (4.0)	指定した RD エリアのステータス情報の履歴をリスト表示する。

Rdarea File I/O Monthly (4.5)

概要

Rdarea File I/O Monthly (4.5) レポートは、最近 1 か月間の 1 日ごとの RD エリアを格納している HiRDB ファイルシステム領域の I/O についての情報を、折れ線グラフ表示およびリスト表示します。

格納先

Reports/HiRDB/Monthly Trend/Advanced/Drilldown Only/

レコード

PI HiRDB File System Area Status (PI_RDFS)

フィールド

フィールド名	説明
HiRDB File System Area Name	HiRDB ファイルシステム領域名（絶対パス表示）。
HiRDB File System Area Type	HiRDB ファイルシステム領域種別。
Host	ホスト名。
I/O Ops/sec	1 秒当たりの I/O 回数。
RDAREA Name	RD エリア名。
Reads/sec	1 秒当たりの読み込み処理回数。
Server Name	サーバ名。
Writes/sec	1 秒当たりの書き込み処理回数。

ドリルダウンレポート（レポートレベル）

レポート名	説明
Rdarea File Space Daily (4.5)	RD エリアを格納している HiRDB ファイルシステム領域の容量についての情報を、折れ線グラフ表示およびリスト表示する。
Rdarea Status (4.0)	全 RD エリアのステータスを監視してステータス情報をリスト表示する。

ドリルダウンレポート（フィールドレベル）

レポート名	説明
Rdarea Status (4.0)	指定した RD エリアのステータス情報の履歴をリスト表示する。

Rdarea File Space Daily (4.5)

概要

Rdarea File Space Daily (4.5) レポートは、過去 1 日の 1 時間ごとの RD エリアを格納している HiRDB ファイルシステム領域の容量についての情報を、折れ線グラフ表示およびリスト表示します。

格納先

Reports/HiRDB>Status Reporting/Daily Trend/Advanced/Drilldown Only/

レコード

PI HiRDB File System Area Status (PI_RDFS)

フィールド

フィールド名	説明
Free %	ユーザー領域中の未使用領域 (HiRDB ファイルとして割り当てられていない領域) の容量のユーザー領域の総量に対する比率。
Free Mbytes	ユーザー領域中の未使用領域 (HiRDB ファイルとして割り当てられていない領域) の容量。
HiRDB File System Area Name	HiRDB ファイルシステム領域名 (絶対パス表示)。
HiRDB File System Area Type	HiRDB ファイルシステム領域種別。
Host	ホスト名。
Mbytes	HiRDB ファイルシステム領域中のユーザー領域の総量。
RDAREA Name	RD エリア名。
Server Name	サーバ名。
Used Mbytes	ユーザー領域中の使用中領域の容量。

ドリルダウンレポート (レポートレベル)

レポート名	説明
Rdarea Available Space Daily (4.5)	全 RD エリアの使用中空きページの比率についての情報を、折れ線グラフ表示およびリスト表示する。
Rdarea Space Daily (4.0)	全 RD エリアの未使用セグメント率についてリスト表示する。
Rdarea Space Daily Chart (4.0)	全 RD エリアの未使用セグメント率について折れ線グラフ表示する。

ドリルダウンレポート（フィールドレベル）

レポート名	説明
Rdarea Available Space Daily (4.5)	指定した RD エリアの使用中空きページの比率の履歴を、折れ線グラフ表示およびリスト表示する。

Rdarea File Space Monthly (4.5)

概要

Rdarea File Space Monthly (4.5) レポートは、最近 1 か月間の 1 日ごとの RD エリアを格納している HiRDB ファイルシステム領域の容量についての情報を、折れ線グラフ表示およびリスト表示します。

格納先

Reports/HiRDB/Monthly Trend/Advanced/Drilldown Only/

レコード

PI HiRDB File System Area Status (PI_RDFS)

フィールド

フィールド名	説明
Free %	ユーザー領域中の未使用領域 (HiRDB ファイルとして割り当てられていない領域) の容量のユーザー領域の総量に対する比率。
Free Mbytes	ユーザー領域中の未使用領域 (HiRDB ファイルとして割り当てられていない領域) の容量。
HiRDB File System Area Name	HiRDB ファイルシステム領域名 (絶対パス表示)。
HiRDB File System Area Type	HiRDB ファイルシステム領域種別。
Host	ホスト名。
Mbytes	HiRDB ファイルシステム領域中のユーザー領域の総量。
RDAREA Name	RD エリア名。
Server Name	サーバ名。
Used Mbytes	ユーザー領域中の使用中領域の容量。

ドリルダウンレポート (レポートレベル)

レポート名	説明
Rdarea File Space Daily (4.5)	RD エリアを格納している HiRDB ファイルシステム領域の容量についての情報を、折れ線グラフ表示およびリスト表示する。

ドリルダウンレポート (フィールドレベル)

レポート名	説明
Rdarea File Space Daily (4.5)	指定した RD エリアを格納している HiRDB ファイルシステム領域の容量の履歴を、折れ線グラフ表示およびリスト表示する。

Rdarea Space Daily (4.0)

概要

Rdarea Space Daily (4.0) レポートは、過去 1 日の 1 時間ごとの HiRDB で使用している全 RD エリアの未使用セグメント率についてリスト表示します。

格納先

Reports/HiRDB>Status Reporting/Daily Trend/Advanced/Drilldown Only/

レコード

PI RDArea Status (PI_RDST)

フィールド

フィールド名	説明
Free %	未使用セグメントの割合。
RDAREA Name	RD エリア名。
Server Name	サーバ名。
Total RDAREA Segments	RD エリア内の全セグメント数。
Unused RDAREA Segments	RD エリア内の未使用セグメント数。

ドリルダウンレポート（レポートレベル）

レポート名	説明
Rdarea Space Daily Chart (4.0)	全 RD エリアの未使用セグメント率を折れ線グラフ表示する。

Rdarea Space Daily (4.5)

概要

Rdarea Space Daily (4.5) レポートは、過去 1 日の 1 時間ごとの HiRDB で使用している全 RD エリアの未使用セグメント率についてリスト表示します。

格納先

Reports/HiRDB>Status Reporting/Daily Trend/Advanced/Drilldown Only/

レコード

PI RDArea Status (PI_RDST)

フィールド

フィールド名	説明
Free %	未使用セグメントの割合。
RDAREA Name	RD エリア名。
Server Name	サーバ名。
Total RDAREA Segments	RD エリア内の全セグメント数。
Unused RDAREA Segments	RD エリア内の未使用セグメント数。

ドリルダウンレポート（レポートレベル）

レポート名	説明
Rdarea Available Space Daily (4.5)	全 RD エリアの使用中空きページの比率を折れ線グラフ表示およびリスト表示する。
Rdarea File Space Monthly (4.5)	RD エリアを格納している HiRDB ファイルシステム領域の容量を折れ線グラフ表示およびリスト表示する。
Rdarea Space Daily Chart (4.0)	全 RD エリアの未使用セグメント率を折れ線グラフ表示する。

ドリルダウンレポート（フィールドレベル）

レポート名	説明
Rdarea Available Space Daily (4.5)	指定した RD エリアの使用中空きページの比率の履歴を折れ線グラフ表示およびリスト表示する。

Rdarea Space Daily Chart (4.0)

概要

Rdarea Space Daily Chart (4.0) レポートは、過去 1 日の 1 時間ごとの HiRDB で使用している全 RD エリアの未使用セグメント率について折れ線グラフ表示します。

格納先

Reports/HiRDB>Status Reporting/Daily Trend/Advanced/Drilldown Only/

レコード

PI RDArea Status (PI_RDST)

フィールド

フィールド名	説明
Free %	未使用セグメントの割合。
RDAREA Name	RD エリア名。
Server Name	サーバ名。

ドリルダウンレポート（レポートレベル）

レポート名	説明
Rdarea Space Daily (4.0)	全 RD エリアの未使用セグメント率をリスト表示する。

Rdarea Space Daily Chart (4.5)

概要

Rdarea Space Daily Chart (4.5) レポートは、過去 1 日の 1 時間ごとの HiRDB で使用している全 RD エリアの未使用セグメント率について折れ線グラフ表示します。

格納先

Reports/HiRDB>Status Reporting/Daily Trend/Advanced/Drilldown Only/

レコード

PI RDArea Status (PI_RDST)

フィールド

フィールド名	説明
Free %	未使用セグメントの割合。
RDAREA Name	RD エリア名。
Server Name	サーバ名。

ドリルダウンレポート（レポートレベル）

レポート名	説明
Rdarea Available Space Daily (4.5)	全 RD エリアの使用中空きページの比率を折れ線グラフ表示およびリスト表示する。
Rdarea File Space Monthly (4.5)	RD エリアを格納している HiRDB ファイルシステム領域の容量を折れ線グラフ表示およびリスト表示する。
Rdarea Space Daily (4.0)	全 RD エリアの未使用セグメント率をリスト表示する。

ドリルダウンレポート（フィールドレベル）

レポート名	説明
Rdarea Available Space Daily (4.5)	指定した RD エリアの使用中空きページの比率の履歴を折れ線グラフ表示およびリスト表示する。

Rdarea Space Monthly (4.0)

概要

Rdarea Space Monthly (4.0) レポートは、最近 1 か月間の 1 日ごとの HiRDB で使用している全 RD エリアの未使用セグメント率についてリスト表示します。

格納先

Reports/HiRDB/Monthly Trend/Advanced/Drilldown Only/

レコード

PI RDArea Status (PI_RDST)

フィールド

フィールド名	説明
Free %	未使用セグメントの割合。
RDAREA Name	RD エリア名。
Server Name	サーバ名。
Total RDAREA Segments	RD エリア内の全セグメント数。
Unused RDAREA Segments	RD エリア内の未使用セグメント数。

Rdarea Space Monthly (4.5)

概要

Rdarea Space Monthly (4.5) レポートは、最近 1 か月間の 1 日ごとの HiRDB で使用している全 RD エリアの未使用セグメント率についてリスト表示します。

格納先

Reports/HiRDB/Monthly Trend/Advanced/Drilldown Only/

レコード

PI RDArea Status (PI_RDST)

フィールド

フィールド名	説明
Free %	未使用セグメントの割合。
RDAREA Name	RD エリア名。
Server Name	サーバ名。
Total RDAREA Segments	RD エリア内の全セグメント数。
Unused RDAREA Segments	RD エリア内の未使用セグメント数。

ドリルダウンレポート（レポートレベル）

レポート名	説明
Rdarea Available Space Monthly (4.5)	全 RD エリアの使用中空きページの比率を折れ線グラフ表示およびリスト表示する。

ドリルダウンレポート（フィールドレベル）

レポート名	説明
Rdarea Available Space Monthly (4.5)	指定した RD エリアの使用中空きページの比率の履歴を折れ線グラフ表示およびリスト表示する。

Rdarea Space Monthly Chart (4.0)

概要

Rdarea Space Monthly Chart (4.0) レポートは、最近 1 か月間の 1 日ごとの HiRDB で使用している全 RD エリアの未使用セグメント率について折れ線グラフ表示します。

格納先

Reports/HiRDB/Monthly Trend/Advanced/Drilldown Only/

レコード

PI RDArea Status (PI_RDST)

フィールド

フィールド名	説明
Free %	未使用セグメントの割合。
RDAREA Name	RD エリア名。
Server Name	サーバ名。

Rdarea Space Monthly Chart (4.5)

概要

Rdarea Space Monthly Chart (4.5) レポートは、最近 1 か月間の 1 日ごとの HiRDB で使用している全 RD エリアの未使用セグメント率について折れ線グラフ表示します。

格納先

Reports/HiRDB/Monthly Trend/Advanced/Drilldown Only/

レコード

PI RDArea Status (PI_RDST)

フィールド

フィールド名	説明
Free %	未使用セグメントの割合。
RDAREA Name	RD エリア名。
Server Name	サーバ名。

ドリルダウンレポート（レポートレベル）

レポート名	説明
Rdarea Available Space Monthly (4.5)	全 RD エリアの使用中空きページの比率を折れ線グラフ表示およびリスト表示する。

ドリルダウンレポート（フィールドレベル）

レポート名	説明
Rdarea Available Space Monthly (4.5)	指定した RD エリアの使用中空きページの比率の履歴を折れ線グラフ表示およびリスト表示する。

Rdarea Space Status (4.0)

概要

Rdarea Space Status (4.0) レポートは、HiRDB で使用している全 RD エリアの未使用セグメント率についての情報をリスト表示します。

格納先

Reports/HiRDB>Status Reporting/Daily Trend/Advanced/

レコード

PI RDArea Status (PI_RDST)

フィールド

フィールド名	説明
Free %	未使用セグメントの割合。Rdarea Space Daily Chart (4.0) を表示するには、このフィールドをクリックする。
RDAREA Name	RD エリア名。Rdarea Space Daily (4.0) を表示するには、このフィールドをクリックする。
RDAREA Status	RD エリアの状態。
RDAREA Type	RD エリア種別。
Server Name	サーバ名。
Total RDAREA Segments	RD エリア内の全セグメント数。
Unused RDAREA Segments	RD エリア内の未使用セグメント数。

ドリルダウンレポート（レポートレベル）

レポート名	説明
Rdarea Space Status Chart (4.0)	全 RD エリアの未使用セグメント率をグラフ表示する。

ドリルダウンレポート（フィールドレベル）

レポート名	説明
Rdarea Space Daily (4.0)	指定した RD エリアの未使用セグメント率の履歴をリスト表示する。このレポートを表示するには、RDAREA Name フィールドをクリックする。
Rdarea Space Daily Chart (4.0)	指定した RD エリアの未使用セグメント率の履歴をグラフ表示する。このレポートを表示するには、Free % フィールドをクリックする。

Rdarea Space Status Chart (4.0)

概要

Rdarea Space Status Chart (4.0) レポートは、HiRDB で使用している全 RD エリアの未使用セグメント率についての情報をグラフ表示します。

格納先

Reports/HiRDB>Status Reporting/Daily Trend/Advanced/

レコード

PI RDArea Status (PI_RDST)

フィールド

フィールド名	説明
Free %	未使用セグメントの割合。Rdarea Space Daily Chart (4.0) を表示するには、このフィールドをクリックする。
RDAREA Name	RD エリア名。
Server Name	サーバ名。
Used %	使用中セグメントの割合。Rdarea Space Daily Chart (4.0) を表示するには、このフィールドをクリックする。

ドリルダウンレポート（レポートレベル）

レポート名	説明
Rdarea Space Status (4.0)	全 RD エリアの未使用セグメント率などをリスト表示する。

ドリルダウンレポート（フィールドレベル）

レポート名	説明
Rdarea Space Daily Chart (4.0)	指定した RD エリアの未使用セグメント率の履歴をグラフ表示する。このレポートを表示するには、Free %またはUsed %フィールドをクリックする。

Rdarea Space Status Chart Worst 5 (4.0)

概要

Rdarea Space Status Chart Worst 5 (4.0) レポートは、HiRDB で使用している全 RD エリアの未使用セグメント率についての情報を、未使用セグメント率の低い方から 5 件グラフ表示します。

格納先

Reports/HiRDB>Status Reporting/Daily Trend/Advanced/

レコード

PI RDArea Status (PI_RDST)

フィールド

フィールド名	説明
Free %	未使用セグメントの割合。Rdarea Space Daily Chart (4.0) を表示するには、このフィールドをクリックする。
RDAREA Name	RD エリア名。
Server Name	サーバ名。
Used %	使用中セグメントの割合。Rdarea Space Daily Chart (4.0) を表示するには、このフィールドをクリックする。

ドリルダウンレポート（レポートレベル）

レポート名	説明
Rdarea Space Status Worst 5 (4.0)	RD エリアの未使用セグメント率など、未使用セグメント率の低い方から 5 件リスト表示する。

ドリルダウンレポート（フィールドレベル）

レポート名	説明
Rdarea Space Daily Chart (4.0)	指定した RD エリアの未使用セグメント率の履歴をグラフ表示する。このレポートを表示するには、Free %またはUsed %フィールドをクリックする。

Rdarea Space Status Worst 5 (4.0)

概要

Rdarea Space Status Worst 5 (4.0) レポートは、HiRDB で使用している全 RD エリアの未使用セグメント率についての情報を、未使用セグメント率の低い方から 5 件リスト表示します。

格納先

Reports/HiRDB>Status Reporting/Daily Trend/Advanced/

レコード

PI RDArea Status (PI_RDST)

フィールド

フィールド名	説明
Free %	未使用セグメントの割合。Rdarea Space Daily Chart (4.0) を表示するには、このフィールドをクリックする。
RDAREA Name	RD エリア名。Rdarea Space Daily (4.0) を表示するには、このフィールドをクリックする。
RDAREA Status	RD エリアの状態。
RDAREA Type	RD エリア種別。
Server Name	サーバ名。
Total RDAREA Segments	RD エリア内の全セグメント数。
Unused RDAREA Segments	RD エリア内の未使用セグメント数。

ドリルダウンレポート（レポートレベル）

レポート名	説明
Rdarea Space Status Chart Worst 5 (4.0)	全 RD エリアの未使用セグメント率を未使用セグメント率の低い方から 5 件グラフ表示する。

ドリルダウンレポート（フィールドレベル）

レポート名	説明
Rdarea Space Daily (4.0)	指定した RD エリアの未使用セグメント率の履歴をリスト表示する。このレポートを表示するには、RDAREA Name フィールドをクリックする。
Rdarea Space Daily Chart (4.0)	指定した RD エリアの未使用セグメント率の履歴をグラフ表示する。このレポートを表示するには、Free % フィールドをクリックする。

Rdarea Space Trend (4.0)

概要

Rdarea Space Trend (4.0) レポートは、HiRDB で使用している全 RD エリアの未使用セグメント率についての情報をリスト表示します。

格納先

Reports/HiRDB/Monthly Trend/Advanced/

レコード

PI RDArea Status (PI_RDST)

フィールド

フィールド名	説明
Free %	未使用セグメントの割合。Rdarea Space Monthly Chart (4.0) を表示するには、このフィールドをクリックする。
RDAREA Name	RD エリア名。Rdarea Space Monthly (4.0) を表示するには、このフィールドをクリックする。
RDAREA Status	RD エリアの状態。
RDAREA Type	RD エリア種別。
Server Name	サーバ名。
Total RDAREA Segments	RD エリア内の全セグメント数。
Unused RDAREA Segments	RD エリア内の未使用セグメント数。

ドリルダウンレポート（レポートレベル）

レポート名	説明
Rdarea Space Trend Chart (4.0)	全 RD エリアの未使用セグメント率をグラフ表示する。

ドリルダウンレポート（フィールドレベル）

レポート名	説明
Rdarea Space Monthly (4.0)	指定した RD エリアの未使用セグメント率の履歴をリスト表示する。このレポートを表示するには、RDAREA Name フィールドをクリックする。
Rdarea Space Monthly Chart (4.0)	指定した RD エリアの未使用セグメント率の履歴をグラフ表示する。このレポートを表示するには、Free % フィールドをクリックする。

Rdarea Space Trend Chart (4.0)

概要

Rdarea Space Trend Chart (4.0) レポートは、HiRDB で使用している全 RD エリアの未使用セグメント率についての情報をグラフ表示します。

格納先

Reports/HiRDB/Monthly Trend/Advanced/

レコード

PI RDArea Status (PI_RDST)

フィールド

フィールド名	説明
Free %	未使用セグメントの割合。Rdarea Space Monthly Chart (4.0) を表示するには、このフィールドをクリックする。
RDAREA Name	RD エリア名。
Server Name	サーバ名。
Used %	使用中セグメントの割合。Rdarea Space Monthly Chart (4.0) を表示するには、このフィールドをクリックする。

ドリルダウンレポート（レポートレベル）

レポート名	説明
Rdarea Space Trend (4.0)	全 RD エリアの未使用セグメント率などをリスト表示する。

ドリルダウンレポート（フィールドレベル）

レポート名	説明
Rdarea Space Monthly Chart (4.0)	指定した RD エリアの未使用セグメント率の履歴をグラフ表示する。このレポートを表示するには、Free %またはUsed %フィールドをクリックする。

Rdarea Space Trend Chart Worst 5 (4.0)

概要

Rdarea Space Trend Chart Worst 5 (4.0) レポートは、HiRDB で使用している全 RD エリアの未使用セグメント率についての情報を、未使用セグメント率の低い方から 5 件グラフ表示します。

格納先

Reports/HiRDB/Monthly Trend/Advanced/

レコード

PI RDArea Status (PI_RDST)

フィールド

フィールド名	説明
Free %	未使用セグメントの割合。Rdarea Space Monthly Chart (4.0) を表示するには、このフィールドをクリックする。
RDAREA Name	RD エリア名。
Server Name	サーバ名。
Used %	使用中セグメントの割合。Rdarea Space Monthly Chart (4.0) を表示するには、このフィールドをクリックする。

ドリルダウンレポート（レポートレベル）

レポート名	説明
Rdarea Space Trend Worst 5 (4.0)	RD エリアの未使用セグメント率など、未使用セグメント率の低い方から 5 件リスト表示する。

ドリルダウンレポート（フィールドレベル）

レポート名	説明
Rdarea Space Monthly Chart (4.0)	指定した RD エリアの未使用セグメント率の履歴をグラフ表示する。このレポートを表示するには、Free %またはUsed %フィールドをクリックする。

Rdarea Space Trend Worst 5 (4.0)

概要

Rdarea Space Trend Worst 5 (4.0) レポートは、HiRDB で使用している全 RD エリアの未使用セグメント率についての情報を、未使用セグメント率の低い方から 5 件リスト表示します。

格納先

Reports/HiRDB/Monthly Trend/Advanced/

レコード

PI RDArea Status (PI_RDST)

フィールド

フィールド名	説明
Free %	未使用セグメントの割合。Rdarea Space Monthly Chart (4.0) を表示するには、このフィールドをクリックする。
RDAREA Name	RD エリア名。Rdarea Space Monthly (4.0) を表示するには、このフィールドをクリックする。
Server Name	サーバ名。
RDAREA Status	RD エリアの状態。
RDAREA Type	RD エリア種別。
Total RDAREA Segments	RD エリア内の全セグメント数。
Unused RDAREA Segments	RD エリア内の未使用セグメント数。

ドリルダウンレポート（レポートレベル）

レポート名	説明
Rdarea Space Trend Chart Worst 5 (4.0)	全 RD エリアの未使用セグメント率を未使用セグメント率の低い方から 5 件グラフ表示する。

ドリルダウンレポート（フィールドレベル）

レポート名	説明
Rdarea Space Monthly (4.0)	指定した RD エリアの未使用セグメント率の履歴をリスト表示する。このレポートを表示するには、RDAREA Name フィールドをクリックする。
Rdarea Space Monthly Chart (4.0)	指定した RD エリアの未使用セグメント率の履歴をグラフ表示する。このレポートを表示するには、Free % フィールドをクリックする。

Rdarea Status (4.0)

概要

Rdarea Status (4.0) レポートは、HiRDB で使用している全 RD エリアのステータスを監視してステータス情報をリスト表示します。

格納先

Reports/HiRDB>Status Reporting/Real-Time/Advanced/

レコード

PI RDArea Status (PI_RDST)

フィールド

フィールド名	説明
Buffer Name	グローバルバッファ名。
RDAREA Name	RD エリア名。
RDAREA Status	RD エリアの状態。
RDAREA Type	RD エリア種別。
Server Name	サーバ名。

ドリルダウンレポート（レポートレベル）

レポート名	説明
Buffer Trend	全グローバルバッファのバッファヒット率についての情報をリスト表示する。
Buffer Trend 0506	全グローバルバッファのバッファヒット率についての情報をリスト表示する。

ドリルダウンレポート（フィールドレベル）

レポート名	説明
Buffer Trend	指定したグローバルバッファのバッファヒット率の履歴をリスト表示する。

Rollback Chart (4.5)

概要

Rollback Chart (4.5) レポートは、サーバごとにロールバック数を折れ線グラフ表示およびリスト表示します。最近 1 か月間の 1 日ごとに集計された情報を表示します。

格納先

Reports/HiRDB/Monthly Trend/Advanced/

レコード

PI Statistical Information SYS (PI_SSYS)

フィールド

フィールド名	説明
Host	ホスト名。
Rollback	ロールバック数の平均値。
Server Name	サーバ名。

ドリルダウンレポート（レポートレベル）

レポート名	説明
Rollback Daily Chart (4.5)	ロールバック数を折れ線グラフ表示およびリスト表示する。

ドリルダウンレポート（フィールドレベル）

レポート名	説明
Rollback Daily Chart (4.5)	指定したロールバック数の履歴を折れ線グラフ表示およびリスト表示する。

Rollback Daily Chart (4.5)

概要

Rollback Daily Chart (4.5) レポートは、サーバごとにロールバック数を折れ線グラフ表示およびリスト表示します。過去 1 日の 1 時間ごとに集計された情報を表示します。

格納先

Reports/HiRDB/Status Reporting/Daily Trend/Advanced/

レコード

PI Statistical Information SYS (PI_SSYS)

フィールド

フィールド名	説明
Host	ホスト名。
Rollback	ロールバック数の平均値。
Server Name	サーバ名。

Server Calls From Others (4.5)

概要

Server Calls From Others (4.5) レポートは、サーバごとにサーバプロセスコール数を折れ線グラフ表示およびリスト表示します。最近 1 か月間の 1 日ごとに集計された情報を表示します。

格納先

Reports/HiRDB/Monthly Trend/Advanced/

レコード

PI Statistical Information SYS (PI_SSYS)

フィールド

フィールド名	説明
Exec Time from Other Unit Freq	他ユニットのサーバからの 1 サービス当たりの実行回数の平均値。
Host	ホスト名。
Server Name	サーバ名。

ドリルダウンレポート（レポートレベル）

レポート名	説明
Server Calls From Others Daily (4.5)	サーバプロセスコール数を折れ線グラフ表示およびリスト表示する。
Server Calls On Unit (4.5)	自ユニットサーバからの 1 サービス当たりの実行回数の平均値を折れ線グラフ表示およびリスト表示する。
Server Exec Time On Unit (4.5)	自ユニットサーバからの 1 サービス当たりの実行時間の平均値を折れ線グラフ表示およびリスト表示する。
Server Exec Time From Others (4.5)	他ユニットサーバからの 1 サービス当たりの実行時間の平均値を折れ線グラフ表示およびリスト表示する。
System Summary SYS (4.5)	HiRDB の sys 統計情報から得られるサーバごとのシステムの稼働についての統計情報をリスト表示する。

ドリルダウンレポート（フィールドレベル）

レポート名	説明
Server Calls From Others Daily (4.5)	指定したサーバプロセスコール数の履歴を折れ線グラフ表示およびリスト表示する。

Server Calls From Others Daily (4.5)

概要

Server Calls From Others Daily (4.5) レポートは、サーバごとにサーバプロセスコール数を折れ線グラフ表示およびリスト表示する。過去 1 日の 1 時間ごとに集計された情報を表示します。

格納先

Reports/HiRDB/Status Reporting/Daily Trend/Advanced/

レコード

PI Statistical Information SYS (PI_SSYS)

フィールド

フィールド名	説明
Exec Time from Other Unit Freq	他ユニットのサーバからの 1 サービス当たりの実行回数の平均値。
Host	ホスト名。
Server Name	サーバ名。

Server Calls On Unit (4.5)

概要

Server Calls On Unit (4.5) レポートは、サーバごとに自ユニットサーバからの 1 サービス当たりの実行回数の平均値を折れ線グラフ表示およびリスト表示します。最近 1 か月間の 1 日ごとに集計された情報を表示します。

格納先

Reports/HiRDB/Monthly Trend/Advanced/

レコード

PI Statistical Information SYS (PI_SSYS)

フィールド

フィールド名	説明
Exec Time on Own Unit Freq	自ユニットサーバからの 1 サービス当たりの実行回数の平均値。
Host	ホスト名。
Server Name	サーバ名。

ドリルダウンレポート（レポートレベル）

レポート名	説明
Server Calls From Others (4.5)	サーバプロセスコール数を折れ線グラフ表示およびリスト表示する。
Server Calls On Unit Daily (4.5)	自ユニットサーバからの 1 サービス当たりの実行回数の平均値を折れ線グラフ表示およびリスト表示する。
Server Exec Time From Others (4.5)	他ユニットサーバからの 1 サービス当たりの実行時間の平均値を折れ線グラフ表示およびリスト表示する。
Server Exec Time On Unit (4.5)	自ユニットサーバからの 1 サービス当たりの実行時間の平均値を折れ線グラフ表示およびリスト表示する。
System Summary SYS (4.5)	HiRDB の sys 統計情報から得られるサーバごとのシステムの稼働についての統計情報をリスト表示する。

ドリルダウンレポート（フィールドレベル）

レポート名	説明
Server Calls On Unit Daily (4.5)	指定した自ユニットサーバからの 1 サービス当たりの実行回数の平均値の履歴を折れ線グラフ表示およびリスト表示する。

Server Calls On Unit Daily (4.5)

概要

Server Calls On Unit Daily (4.5) レポートは、サーバごとに自ユニットサーバからの 1 サービス当たりの実行回数の平均値を折れ線グラフ表示およびリスト表示します。過去 1 日の 1 時間ごとに集計された情報を表示します。

格納先

Reports/HiRDB>Status Reporting/Daily Trend/Advanced/

レコード

PI Statistical Information SYS (PI_SSYS)

フィールド

フィールド名	説明
Exec Time on Own Unit Freq	自ユニットサーバからの 1 サービス当たりの実行回数の平均値。
Host	ホスト名。
Server Name	サーバ名。

Server Exec Time From Others (4.5)

概要

Server Exec Time From Others (4.5) レポートは、サーバごとに他ユニットサーバからの 1 サービス当たりの実行時間の平均値を折れ線グラフ表示およびリスト表示します。最近 1 か月間の 1 日ごとに集計された情報を表示します。

格納先

Reports/HiRDB/Monthly Trend/Advanced/

レコード

PI Statistical Information SYS (PI_SSYS)

フィールド

フィールド名	説明
Exec Time from Other Unit Avg	他ユニットサーバからの 1 サービス当たりの実行時間の平均値。
Host	ホスト名。
Server Name	サーバ名。

ドリルダウンレポート（レポートレベル）

レポート名	説明
Server Calls From Others (4.5)	サーバプロセスコール数を折れ線グラフ表示およびリスト表示する。
Server Calls On Unit (4.5)	自ユニットサーバからの 1 サービス当たりの実行回数の平均値を折れ線グラフ表示およびリスト表示する。
Server Exec Time From Others Daily (4.5)	他ユニットサーバからの 1 サービス当たりの実行時間の平均値を折れ線グラフ表示およびリスト表示する。
Server Exec Time On Unit (4.5)	自ユニットサーバからの 1 サービス当たりの実行時間の平均値を折れ線グラフ表示およびリスト表示する。
System Summary SYS (4.5)	HiRDB の sys 統計情報から得られるサーバごとのシステムの稼働についての統計情報をリスト表示する。

ドリルダウンレポート（フィールドレベル）

レポート名	説明
Server Exec Time From Others Daily (4.5)	指定した他ユニットサーバからの 1 サービス当たりの実行時間の平均値の履歴を折れ線グラフ表示およびリスト表示する。

Server Exec Time From Others Daily (4.5)

概要

Server Exec Time From Others Daily (4.5) レポートは、サーバごとに他ユニットサーバからの 1 サービス当たりの実行時間の平均値を折れ線グラフ表示およびリスト表示します。過去 1 日の 1 時間ごとに集計された情報を表示します。

格納先

Reports/HiRDB>Status Reporting/Daily Trend/Advanced/

レコード

PI Statistical Information SYS (PI_SSYS)

フィールド

フィールド名	説明
Exec Time from Other Unit Avg	他ユニットサーバからの 1 サービス当たりの実行時間の平均値。
Host	ホスト名。
Server Name	サーバ名。

Server Exec Time On Unit (4.5)

概要

Server Exec Time On Unit (4.5) レポートは、サーバごとに自ユニットサーバからの 1 サービス当たりの実行時間の平均値を折れ線グラフ表示およびリスト表示します。最近 1 か月間の 1 日ごとに集計された情報を表示します。

格納先

Reports/HiRDB/Monthly Trend/Advanced/

レコード

PI Statistical Information SYS (PI_SSYS)

フィールド

フィールド名	説明
Exec Time on Own Unit Avg	自ユニットサーバからの 1 サービス当たりの実行時間の平均値。
Host	ホスト名。
Server Name	サーバ名。

ドリルダウンレポート（レポートレベル）

レポート名	説明
Server Calls From Others (4.5)	サーバプロセスコール数を折れ線グラフ表示およびリスト表示する。
Server Calls On Unit (4.5)	自ユニットサーバからの 1 サービス当たりの実行回数の平均値を折れ線グラフ表示およびリスト表示する。
Server Exec Time From Others (4.5)	他ユニットサーバからの 1 サービス当たりの実行時間の平均値を折れ線グラフ表示およびリスト表示する。
Server Exec Time On Unit Daily (4.5)	自ユニットサーバからの 1 サービス当たりの実行時間の平均値を折れ線グラフ表示およびリスト表示する。
System Summary SYS (4.5)	HiRDB の sys 統計情報から得られるサーバごとのシステムの稼働についての統計情報をリスト表示する。

ドリルダウンレポート（フィールドレベル）

レポート名	説明
Server Exec Time On Unit Daily (4.5)	指定した自ユニットサーバからの 1 サービス当たりの実行時間の平均値の履歴を折れ線グラフ表示およびリスト表示する。

Server Exec Time On Unit Daily (4.5)

概要

Server Exec Time On Unit Daily (4.5) レポートは、サーバごとに自ユニットサーバからの 1 サービス当たりの実行時間の平均値を折れ線グラフ表示およびリスト表示します。過去 1 日の 1 時間ごとに集計された情報を表示します。

格納先

Reports/HiRDB>Status Reporting/Daily Trend/Advanced/

レコード

PI Statistical Information SYS (PI_SSYS)

フィールド

フィールド名	説明
Exec Time on Own Unit Avg	自ユニットサーバからの 1 サービス当たりの実行時間の平均値。
Host	ホスト名。
Server Name	サーバ名。

Server Process Count Chart (4.5)

概要

Server Process Count Chart (4.5) レポートは、サーバごとにサービス実行中のサーバプロセス数の最大値を折れ線グラフ表示およびリスト表示します。最近 1か月間の 1日ごとに集計された情報を表示します。

このレポートに表示される値は HiRDB システム定義の次のオペランドに関するチューニングに使用します。具体的なチューニング方法については、マニュアル「HiRDB システム運用ガイド」の最大起動プロセス数のチューニングの説明を参照してください。

- pd_max_users
- pd_max_bes_process
- pd_max_dic_process

格納先

Reports/HiRDB/Monthly Trend/Advanced/

レコード

PI Statistical Information SYS (PI_SSYS)

フィールド

フィールド名	説明
Host	ホスト名。
Process Service Count Max	サービス実行中のサーバプロセス数の最大値。
Server Name	サーバ名。

ドリルダウンレポート（レポートレベル）

レポート名	説明
Server Process Count Daily Chart (4.5)	サービス実行中のサーバプロセス数の最大値を折れ線グラフ表示およびリスト表示する。

ドリルダウンレポート（フィールドレベル）

レポート名	説明
Server Process Count Daily Chart (4.5)	指定したサービス実行中のサーバプロセス数の最大値の履歴を折れ線グラフ表示およびリスト表示する。

Server Process Count Daily Chart (4.5)

概要

Server Process Count Daily Chart (4.5) レポートは、サーバごとにサービス実行中のサーバプロセス数の最大値を折れ線グラフ表示およびリスト表示します。過去1日の1時間ごとに集計された情報を表示します。

このレポートに表示される値は HiRDB システム定義の次のオペランドに関するチューニングに使用します。具体的なチューニング方法については、マニュアル「HiRDB システム運用ガイド」の最大起動プロセス数のチューニングの説明を参照してください。

- pd_max_users
- pd_max_bes_process
- pd_max_dic_process

格納先

Reports/HiRDB/Status Reporting/Daily Trend/Advanced/

レコード

PI Statistical Information SYS (PI_SSYS)

フィールド

フィールド名	説明
Host	ホスト名。
Process Service Count Max	サービス実行中のサーバプロセス数の最大値。
Server Name	サーバ名。

Server Status (4.0)

概要

Server Status (4.0) レポートは、HiRDB サーバとユニットの状態を監視してリスト表示します。

格納先

Reports/HiRDB>Status Reporting/Real-Time/Advanced/

レコード

PD HiRDB Server Status (PD_SVST)

フィールド

フィールド名	説明
Host	ホスト名。
Server Name	サーバ名。
Start Time	各サーバ/ユニットの起動時間。
Status	サーバ/ユニット状態。
Unit ID	ユニット識別子。

System Daily Summary SYS (4.5)

概要

System Daily Summary SYS (4.5) レポートは、過去 1 日の 1 時間ごとの HiRDB の sys 統計情報から得られるサーバごとのシステムの稼働についての統計情報をリスト表示します。

格納先

Reports/HiRDB/Status Reporting/Daily Trend/Advanced/Drilldown Only/

レコード

PI Statistical Information SYS (PI_SSYS)

フィールド

フィールド名	説明
Commit (Total)	コミット数の合計。
Deadlock (Total)	デッドロック件数の合計値。
Dic Access Cache Hit (Total)	表アクセス権限情報用バッファヒット回数の合計値。※1
Dic Access Priv Check (Total)	表アクセス権限情報取得回数の合計値。
Dic CON/DBA Cache Hit (Total)	ユーザー権限情報用バッファヒット回数の合計値。※2
Dic CON/DBA Def Get Req	ユーザー権限情報取得要求回数の平均値。
Dic CON/DBA Def Get Req (Max)	ユーザー権限情報取得要求回数の最大値。
Dic CON/DBA Def Get Req (Total)	ユーザー権限情報取得要求数の合計値。
Dic Table Cache Hit (Total)	表定義情報用バッファヒット回数の合計値。※3
Dic TBL-DEF Get Req (Total)	表定義情報取得要求回数の合計値。
Dic View Def Cache Hit (Total)	ビュー解析情報用バッファヒット回数の合計値。※4
Dic View Def Get Req (Total)	ビュー解析情報取得要求回数の合計値。
Exec Time on Own Unit Avg	自ユニットサーバからの 1 サービス当たりの実行時間の平均値。
Exec Time on Own Unit Freq	自ユニットサーバからの 1 サービス当たりの実行回数の平均値。
Exec Time on Own Unit Freq (Max)	自ユニットサーバからの 1 サービス当たりの実行回数の最大値。

フィールド名	説明
Exec Time on Own Unit Freq (Min)	自ユニットサーバからの 1 サービス当たりの実行回数の最小値。
Host	ホスト名。
Lock Queue Len Max	排他待ちになったユーザー数の最大値。
Lock Wait Time Freq (Total)	排他取得待ち発生件数の合計値。
Lock Wait Time Max	排他待ち時間の最大値。
Lock Wait Time Sum (Total)	排他待ち時間の合計値。※5
Log Buffer Full (Total)	ログバッファ満杯回数の合計値。
Log File Swap Time Freq (Total)	ログファイルスワップ回数の合計値。
Log Output Block Len Freq (Total)	ログブロック出力回数の合計値。
Log Read Error (Total)	ログ読み出しエラー回数の合計値。
Log Wait Thread (Total)	カレントバッファなしによるログ出力待ち回数（合計）。
Log Write Error (Total)	ログ書き込みエラー回数の合計値。
PLG-RTN Cache Hit (Total)	プラグイン提供関数のルーチン定義情報用バッファヒット回数の合計値。※6
PLG-RTN Get Req (Total)	プラグイン提供関数のルーチン定義取得要求回数の合計値。
Process Request Over (Total)	最大起動プロセス数を超えたサービス要求数。
Process Service Count Max	サービス実行中のサーバプロセス数の最大値。
Registry Cache Hit (Total)	レジストリ情報用バッファヒット回数の合計値。※7
Registry Get Req (Total)	レジストリ情報取得要求回数の合計値。
Rollback (Total)	ロールバック数の合計。
RTN-DEF Cache Hit (Total)	ルーチン定義情報用バッファヒット回数の合計値。※8
RTN-DEF Get Req (Total)	ルーチン定義情報取得要求回数の合計値。
Server Name	サーバ名。
SQLOBJ Cache Hit (Total)	SQL オブジェクト用バッファヒット回数。※9
SQLOBJ Get Req (Total)	SQL オブジェクト取得要求回数（SQL オブジェクトバッファアクセス回数）の合計。
Sync Get Interval Time Freq (Total)	シンクポイントダンプの取得件数の合計値。
Sync Get Interval Time Min	シンクポイントダンプ取得間隔時間の最小値。
Sync Get Interval Time Sum (Total)	シンクポイントダンプ取得間隔時間の合計値。※10

5. 監視テンプレート

フィールド名	説明
Sync Get Time Freq (Total)	シンクポイントダンプの取得件数の合計値。
Sync Get Time Sum (Total)	シンクポイントダンプ取得時間の合計値。※11
TYPE-DEF Cache Hit (Total)	ユーザー定義型情報用バッファヒット回数の合計値。※12
TYPE-DEF Get Req (Total)	型定義情報取得要求回数の合計値。

注※1

Dic Access Priv Check (Total) で割って 100 を掛けると表アクセス権限情報バッファヒット率 (%) が算出されます。

注※2

Dic CON/DBA Def Get Req (Total) で割って 100 を掛けるとユーザー権限情報バッファヒット率 (%) が算出されます。

注※3

Dic TBL-DEF Get Req (Total) で割って 100 を掛けると表定義情報バッファヒット率 (%) が算出されます。

注※4

Dic View Def Get Req (Total) で割って 100 を掛けるとビュー解析情報バッファヒット率 (%) が算出されます。

注※5

Lock Wait Time Freq (Total) の値で割ると平均待ち時間 (msec) が算出されます。

注※6

PLG-RTN Get Req (Total) で割って 100 を掛けるとプラグイン提供関数のルーチン定義情報バッファヒット率 (%) が算出されます。

注※7

Registry Get Req (Total) で割って 100 を掛けるとレジストリ情報バッファヒット率 (%) が算出されます。

注※8

RTN-DEF Get Req (Total) で割って 100 を掛けるとルーチン定義情報バッファヒット率 (%) が算出されます。

注※9

SQLOBJ Get Req (Total) で割って 100 を掛けると SQL オブジェクト用バッファヒット率 (%) が算出されます。

注※10

Sync Get Interval Time Freq (Total) で割るとシンクポイント平均間隔時間 (msec) が算出されます。

注※11

Sync Get Time Freq (Total) で割るとシンクポイント平均取得時間 (msec) が算出されます。

注※12

TYPE-DEF Get Req (Total) で割って 100 を掛けると型定義情報バッファヒット率 (%) が算出されます。

System Monthly Summary SYS (4.5)

概要

System Monthly Summary SYS (4.5) レポートは、最近 1 か月間の 1 日ごとの HiRDB の sys 統計情報から得られるサーバごとのシステムの稼働についての統計情報をリスト表示します。

格納先

Reports/HiRDB/Monthly Trend/Advanced/Drilldown Only/

レコード

PI Statistical Information SYS (PI_SSYS)

フィールド

フィールド名	説明
Commit (Total)	コミット数の合計。
Deadlock (Total)	デッドロック件数の合計値。
Dic Access Cache Hit (Total)	表アクセス権限情報用バッファヒット回数の合計値。※1
Dic Access Priv Check (Total)	表アクセス権限情報取得回数の合計値。
Dic CON/DBA Cache Hit (Total)	ユーザー権限情報用バッファヒット回数の合計値。※2
Dic CON/DBA Def Get Req	ユーザー権限情報取得要求回数の平均値。
Dic CON/DBA Def Get Req (Max)	ユーザー権限情報取得要求回数の最大値。
Dic CON/DBA Def Get Req (Total)	ユーザー権限情報取得要求数の合計値。
Dic Table Cache Hit (Total)	表定義情報用バッファヒット回数の合計値。※3
Dic TBL-DEF Get Req (Total)	表定義情報取得要求回数の合計値。
Dic View Def Cache Hit (Total)	ビュー解析情報用バッファヒット回数の合計値。※4
Dic View Def Get Req (Total)	ビュー解析情報取得要求回数の合計値。
Exec Time on Own Unit Avg	自ユニットサーバからの 1 サービス当たりの実行時間の平均値。
Exec Time on Own Unit Freq	自ユニットサーバからの 1 サービス当たりの実行回数の平均値。
Exec Time on Own Unit Freq (Max)	自ユニットサーバからの 1 サービス当たりの実行回数の最大値。

フィールド名	説明
Exec Time on Own Unit Freq (Min)	自ユニットサーバからの 1 サービス当たりの実行回数の最小値。
Host	ホスト名。
Lock Queue Len Max	排他待ちになったユーザー数の最大値。
Lock Wait Time Freq (Total)	排他取得待ち発生件数の合計値。
Lock Wait Time Max	排他待ち時間の最大値。
Lock Wait Time Sum (Total)	排他待ち時間の合計値。※5
Log Buffer Full (Total)	ログバッファ満杯回数の合計値。
Log File Swap Time Freq (Total)	ログファイルスワップ回数の合計値。
Log Output Block Len Freq (Total)	ログブロック出力回数の合計値。
Log Read Error (Total)	ログ読み出しエラー回数の合計値。
Log Wait Thread (Total)	カレントバッファなしによるログ出力待ち回数（合計）。
Log Write Error (Total)	ログ書き込みエラー回数の合計値。
PLG-RTN Cache Hit (Total)	プラグイン提供関数のルーチン定義情報用バッファヒット回数の合計値。※6
PLG-RTN Get Req (Total)	プラグイン提供関数のルーチン定義取得要求回数の合計値。
Process Request Over (Total)	最大起動プロセス数を超えたサービス要求数。
Process Service Count Max	サービス実行中のサーバプロセス数の最大値。
Registry Cache Hit (Total)	レジストリ情報用バッファヒット回数の合計値。※7
Registry Get Req (Total)	レジストリ情報取得要求回数の合計値。
Rollback (Total)	ロールバック数の合計。
RTN-DEF Cache Hit (Total)	ルーチン定義情報用バッファヒット回数の合計値。※8
RTN-DEF Get Req (Total)	ルーチン定義情報取得要求回数の合計値。
Server Name	サーバ名。
SQLOBJ Cache Hit (Total)	SQL オブジェクト用バッファヒット回数。※9
SQLOBJ Get Req (Total)	SQL オブジェクト取得要求回数（SQL オブジェクトバッファアクセス回数）の合計。
Sync Get Interval Time Freq (Total)	シンクポイントダンプの取得件数の合計値。
Sync Get Interval Time Min	シンクポイントダンプ取得間隔時間の最小値。
Sync Get Interval Time Sum (Total)	シンクポイントダンプ取得間隔時間の合計値。※10

5. 監視テンプレート

フィールド名	説明
Sync Get Time Freq (Total)	シンクポイントダンプの取得件数の合計値。
Sync Get Time Sum (Total)	シンクポイントダンプ取得時間の合計値。※11
TYPE-DEF Cache Hit (Total)	ユーザー定義型情報用バッファヒット回数の合計値。※12
TYPE-DEF Get Req (Total)	型定義情報取得要求回数の合計値。

注※1

Dic Access Priv Check (Total) で割って 100 を掛けると表アクセス権限情報バッファヒット率 (%) が算出されます。

注※2

Dic CON/DBA Def Get Req (Total) で割って 100 を掛けるとユーザー権限情報バッファヒット率 (%) が算出されます。

注※3

Dic TBL-DEF Get Req (Total) で割って 100 を掛けると表定義情報バッファヒット率 (%) が算出されます。

注※4

Dic View Def Get Req (Total) で割って 100 を掛けるとビュー解析情報バッファヒット率 (%) が算出されます。

注※5

Lock Wait Time Freq (Total) の値で割ると平均待ち時間 (msec) が算出されます。

注※6

PLG-RTN Get Req (Total) で割って 100 を掛けるとプラグイン提供関数のルーチン定義情報バッファヒット率 (%) が算出されます。

注※7

Registry Get Req (Total) で割って 100 を掛けるとレジストリ情報バッファヒット率 (%) が算出されます。

注※8

RTN-DEF Get Req (Total) で割って 100 を掛けるとルーチン定義情報バッファヒット率 (%) が算出されます。

注※9

SQLOBJ Get Req (Total) で割って 100 を掛けると SQL オブジェクト用バッファヒット率 (%) が算出されます。

注※10

Sync Get Interval Time Freq (Total) で割るとシンクポイント平均間隔時間 (msec) が算出されます。

注※11

Sync Get Time Freq (Total) で割るとシンクポイント平均取得時間 (msec) が算出されます。

注※12

TYPE-DEF Get Req (Total) で割って 100 を掛けると型定義情報バッファヒット率 (%) が算出されます。

ドリルダウンレポート（レポートレベル）

レポート名	説明
Commit Chart (4.5)	コミット数の平均値を折れ線グラフ表示およびリスト表示する。
Connect Requests Chart (4.5)	HiRDB コネクト要求回数を折れ線グラフ表示およびリスト表示する。
Process Request Over Chart (4.5)	最大起動プロセス数を超えたサービス要求数を折れ線グラフ表示およびリスト表示する。
Rollback Chart (4.5)	ロールバック数を折れ線グラフ表示およびリスト表示する。
Server Process Count Chart (4.5)	サービス実行中のサーバプロセス数の最大値を折れ線グラフ表示およびリスト表示する。
Server Calls From Others (4.5)	サーバプロセスコール数を折れ線グラフ表示およびリスト表示する。
Server Calls On Unit (4.5)	自ユニットサーバからの 1 サービス当たりの実行回数の平均値を折れ線グラフ表示およびリスト表示する。
Server Exec Time From Others (4.5)	他ユニットサーバからの 1 サービス当たりの実行時間の平均値を折れ線グラフ表示およびリスト表示する。
Server Exec Time On Unit (4.5)	自ユニットサーバからの 1 サービス当たりの実行時間の平均値を折れ線グラフ表示およびリスト表示する。
System Daily Summary SYS (4.5)	HiRDB の sys 統計情報から得られるサーバごとのシステムの稼働についての統計情報をリスト表示する。

ドリルダウンレポート（フィールドレベル）

レポート名	説明
Commit Chart (4.5)	指定したコミット数の平均値の履歴を折れ線グラフ表示およびリスト表示する。
Connect Requests Chart (4.5)	指定した HiRDB コネクト要求回数の履歴を折れ線グラフ表示およびリスト表示する。
Process Request Over Chart (4.5)	指定した最大起動プロセス数を超えたサービス要求数の履歴を折れ線グラフ表示およびリスト表示する。
Rollback Chart (4.5)	指定したロールバック数の履歴を折れ線グラフ表示およびリスト表示する。
Server Calls From Others (4.5)	指定したサーバプロセスコール数の履歴を折れ線グラフ表示およびリスト表示する。
Server Calls On Unit (4.5)	指定した自ユニットサーバからの 1 サービス当たりの実行回数の平均値の履歴を折れ線グラフ表示およびリスト表示する。

レポート名	説明
Server Exec Time From Others (4.5)	指定した他ユニットサーバからの 1 サービス当たりの実行時間の平均値の履歴を折れ線グラフ表示およびリスト表示する。
Server Exec Time On Unit (4.5)	指定した自ユニットサーバからの 1 サービス当たりの実行時間の平均値の履歴を折れ線グラフ表示およびリスト表示する。
Server Process Count Chart (4.5)	指定したサービス実行中のサーバプロセス数の最大値の履歴を折れ線グラフ表示およびリスト表示する。
System Daily Summary SYS (4.5)	指定した HiRDB の sys 統計情報から得られるサーバごとのシステムの稼働についての統計情報の履歴をリスト表示する。

System Summary SYS (4.5)

概要

System Summary SYS (4.5) レポートは、HiRDB の sys 統計情報から得られるサーバごとのシステムの稼働についての統計情報をリスト表示します。

格納先

Reports/HiRDB/Monthly Trend/Advanced/

レコード

PI Statistical Information SYS (PI_SSYS)

フィールド

フィールド名	説明
Commit (Total)	コミット数の合計。
Deadlock (Total)	デッドロック件数の合計値。
Dic Access Cache Hit (Total)	表アクセス権限情報用バッファヒット回数の合計値。※1
Dic Access Priv Check (Total)	表アクセス権限情報取得回数の合計値。
Dic CON/DBA Cache Hit (Total)	ユーザー権限情報用バッファヒット回数の合計値。※2
Dic CON/DBA Def Get Req	ユーザー権限情報取得要求回数の平均値。
Dic CON/DBA Def Get Req (Max)	ユーザー権限情報取得要求回数の最大値。
Dic CON/DBA Def Get Req (Total)	ユーザー権限情報取得要求数の合計値。
Dic Table Cache Hit (Total)	表定義情報用バッファヒット回数の合計値。※3
Dic TBL-DEF Get Req (Total)	表定義情報取得要求回数の合計値。
Dic View Def Cache Hit (Total)	ビュー解析情報用バッファヒット回数の合計値。※4
Dic View Def Get Req (Total)	ビュー解析情報取得要求回数の合計値。
Exec Time on Own Unit Avg	自ユニットサーバからの 1 サービス当たりの実行時間の平均値。
Exec Time on Own Unit Freq	自ユニットサーバからの 1 サービス当たりの実行回数の平均値。
Exec Time on Own Unit Freq (Max)	自ユニットサーバからの 1 サービス当たりの実行回数の最大値。

フィールド名	説明
Exec Time on Own Unit Freq (Min)	自ユニットサーバからの 1 サービス当たりの実行回数の最小値。
Host	ホスト名。
Lock Queue Len Max	排他待ちになったユーザー数の最大値。
Lock Wait Time Freq (Total)	排他取得待ち発生件数の合計値。
Lock Wait Time Max	排他待ち時間の最大値。
Lock Wait Time Sum (Total)	排他待ち時間の合計値。※5
Log Buffer Full (Total)	ログバッファ満杯回数の合計値。
Log File Swap Time Freq (Total)	ログファイルスワップ回数の合計値。
Log Output Block Len Freq (Total)	ログブロック出力回数の合計値。
Log Read Error (Total)	ログ読み出しエラー回数の合計値。
Log Wait Thread (Total)	カレントバッファなしによるログ出力待ち回数（合計）。
Log Write Error (Total)	ログ書き込みエラー回数の合計値。
PLG-RTN Cache Hit (Total)	プラグイン提供関数のルーチン定義情報用バッファヒット回数の合計値。※6
PLG-RTN Get Req (Total)	プラグイン提供関数のルーチン定義取得要求回数の合計値。
Process Request Over (Total)	最大起動プロセス数を超えたサービス要求数。
Process Service Count Max	サービス実行中のサーバプロセス数の最大値。
Registry Cache Hit (Total)	レジストリ情報用バッファヒット回数の合計値。※7
Registry Get Req (Total)	レジストリ情報取得要求回数の合計値。
Rollback (Total)	ロールバック数の合計。
RTN-DEF Cache Hit (Total)	ルーチン定義情報用バッファヒット回数の合計値。※8
RTN-DEF Get Req (Total)	ルーチン定義情報取得要求回数の合計値。
Server Name	サーバ名。
SQLOBJ Cache Hit (Total)	SQL オブジェクト用バッファヒット回数。※9
SQLOBJ Get Req (Total)	SQL オブジェクト取得要求回数（SQL オブジェクトバッファアクセス回数）の合計。
Sync Get Interval Time Freq (Total)	シンクポイントダンプの取得件数の合計値。
Sync Get Interval Time Min	シンクポイントダンプ取得間隔時間の最小値。
Sync Get Interval Time Sum (Total)	シンクポイントダンプ取得間隔時間の合計値。※10

5. 監視テンプレート

フィールド名	説明
Sync Get Time Freq (Total)	シンクポイントダンプの取得件数の合計値。
Sync Get Time Sum (Total)	シンクポイントダンプ取得時間の合計値。※11
TYPE-DEF Cache Hit (Total)	ユーザー定義型情報用バッファヒット回数の合計値。※12
TYPE-DEF Get Req (Total)	型定義情報取得要求回数の合計値。

注※1

Dic Access Priv Check (Total) で割って 100 を掛けると表アクセス権限情報バッファヒット率 (%) が算出されます。

注※2

Dic CON/DBA Def Get Req (Total) で割って 100 を掛けるとユーザー権限情報バッファヒット率 (%) が算出されます。

注※3

Dic TBL-DEF Get Req (Total) で割って 100 を掛けると表定義情報バッファヒット率 (%) が算出されます。

注※4

Dic View Def Get Req (Total) で割って 100 を掛けるとビュー解析情報バッファヒット率 (%) が算出されます。

注※5

Lock Wait Time Freq (Total) の値で割ると平均待ち時間 (msec) が算出されます。

注※6

PLG-RTN Get Req (Total) で割って 100 を掛けるとプラグイン提供関数のルーチン定義情報バッファヒット率 (%) が算出されます。

注※7

Registry Get Req (Total) で割って 100 を掛けるとレジストリ情報バッファヒット率 (%) が算出されます。

注※8

RTN-DEF Get Req (Total) で割って 100 を掛けるとルーチン定義情報バッファヒット率 (%) が算出されます。

注※9

SQLOBJ Get Req (Total) で割って 100 を掛けると SQL オブジェクト用バッファヒット率 (%) が算出されます。

注※10

Sync Get Interval Time Freq (Total) で割るとシンクポイント平均間隔時間 (msec) が算出されます。

注※11

Sync Get Time Freq (Total) で割るとシンクポイント平均取得時間 (msec) が算出されます。

注※12

TYPE-DEF Get Req (Total) で割って 100 を掛けると型定義情報バッファヒット率 (%) が算出されます。

ドリルダウンレポート（レポートレベル）

レポート名	説明
Commit Chart (4.5)	コミット数の平均値を折れ線グラフ表示およびリスト表示する。
Connect Requests Chart (4.5)	HiRDB コネクト要求回数を折れ線グラフ表示およびリスト表示する。
Process Request Over Chart (4.5)	最大起動プロセス数を超えたサービス要求数を折れ線グラフ表示およびリスト表示する。
Rollback Chart (4.5)	ロールバック数を折れ線グラフ表示およびリスト表示する。
Server Process Count Chart (4.5)	サービス実行中のサーバプロセス数の最大値を折れ線グラフ表示およびリスト表示する。
Server Calls From Others (4.5)	サーバプロセスコール数を折れ線グラフ表示およびリスト表示する。
Server Calls On Unit (4.5)	自ユニットサーバからの 1 サービス当たりの実行回数の平均値を折れ線グラフ表示およびリスト表示する。
Server Exec Time From Others (4.5)	他ユニットサーバからの 1 サービス当たりの実行時間の平均値を折れ線グラフ表示およびリスト表示する。
Server Exec Time On Unit (4.5)	自ユニットサーバからの 1 サービス当たりの実行時間の平均値を折れ線グラフ表示およびリスト表示する。
System Monthly Summary SYS (4.5)	HiRDB の sys 統計情報から得られるサーバごとのシステムの稼働についての統計情報をリスト表示する。

ドリルダウンレポート（フィールドレベル）

レポート名	説明
Commit Chart (4.5)	指定したコミット数の平均値の履歴を折れ線グラフ表示およびリスト表示する。
Connect Requests Chart (4.5)	指定した HiRDB コネクト要求回数の履歴を折れ線グラフ表示およびリスト表示する。
Process Request Over Chart (4.5)	指定した最大起動プロセス数を超えたサービス要求数の履歴を折れ線グラフ表示およびリスト表示する。
Rollback Chart (4.5)	指定したロールバック数の履歴を折れ線グラフ表示およびリスト表示する。
Server Calls From Others (4.5)	指定したサーバプロセスコール数の履歴を折れ線グラフ表示およびリスト表示する。
Server Calls On Unit (4.5)	指定した自ユニットサーバからの 1 サービス当たりの実行回数の平均値の履歴を折れ線グラフ表示およびリスト表示する。

レポート名	説明
Server Exec Time From Others (4.5)	指定した他ユニットサーバからの 1 サービス当たりの実行時間の平均値の履歴を折れ線グラフ表示およびリスト表示する。
Server Exec Time On Unit (4.5)	指定した自ユニットサーバからの 1 サービス当たりの実行時間の平均値の履歴を折れ線グラフ表示およびリスト表示する。
Server Process Count Chart (4.5)	指定したサービス実行中のサーバプロセス数の最大値の履歴を折れ線グラフ表示およびリスト表示する。

Work File Chart (4.5)

概要

Work File Chart (4.5) レポートは、最近 1 か月間の 1 日ごとの作業表用ファイル用の HiRDB ファイルシステム領域についての情報を折れ線グラフ表示およびリスト表示します。

格納先

Reports/HiRDB/Monthly Trend/Advanced/

レコード

PI File System Area Status (PI_FSST)

フィールド

フィールド名	説明
Available File Size	HiRDB ファイルシステム領域で一つのファイルとして確保できる容量の最大値。
HiRDB File System Area Name	HiRDB ファイルシステム領域名（絶対パス表示）。
Peak Capacity	HiRDB ファイルシステム領域中に割り当てられた領域の最大値を 0 にリセットした時点から現在までの期間のユーザー最大使用量。
Peak Usage %	HiRDB ファイルシステム領域で一つのファイルとして確保できる容量の最大値に対する現時点でのユーザー最大使用量の使用率。このフィールド値を折れ線グラフの縦軸とする。
Server Name	サーバ名。
User Area Capacity	ユーザー領域の HiRDB ファイルシステム領域の容量。

ドリルダウンレポート（レポートレベル）

レポート名	説明
Work File Daily Chart (4.5)	作業表用ファイル用の HiRDB ファイルシステム領域についての情報を折れ線グラフ表示およびリスト表示する。

ドリルダウンレポート（フィールドレベル）

レポート名	説明
Work File Daily Chart (4.5)	指定した作業表用ファイル用の HiRDB ファイルシステム領域についての情報の履歴を折れ線グラフ表示およびリスト表示する。

Work File Daily Chart (4.5)

概要

Work File Daily Chart (4.5) レポートは、過去 1 日の 1 時間ごとの作業表用ファイル用の HiRDB ファイルシステム領域についての情報を折れ線グラフ表示およびリスト表示します。

格納先

Reports/HiRDB>Status Reporting/Daily Trend/Advanced/

レコード

PI File System Area Status (PI_FSST)

フィールド

フィールド名	説明
Available File Size	HiRDB ファイルシステム領域で一つのファイルとして確保できる容量の最大値。
HiRDB File System Area Name	HiRDB ファイルシステム領域名（絶対パス表示）。
Peak Capacity	HiRDB ファイルシステム領域中に割り当てられた領域の最大値を 0 にリセットした時点から現在までの期間のユーザー最大使用量。
Peak Usage %	HiRDB ファイルシステム領域で一つのファイルとして確保できる容量の最大値に対する現時点でのユーザー最大使用量の使用率。このフィールド値を折れ線グラフの縦軸とする。
Server Name	サーバ名。
User Area Capacity	ユーザー領域の HiRDB ファイルシステム領域の容量。

6

レコード

この章では、PFM - Agent for HiRDB のレコードについて説明します。各レコードのパフォーマンスデータの収集方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の Performance Management の機能について説明している章、またはマニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の稼働監視データの管理について説明している章を参照してください。

データモデルについて

各 PFM - Agent が持つレコードおよびフィールドの総称を「データモデル」と呼びます。各 PFM - Agent と、その PFM - Agent が持つデータモデルには、それぞれ固有のバージョン番号が与えられています。11-00 版 PFM - Agent for HiRDB のデータモデルのバージョンは 5.0 です。

各 PFM - Agent のデータモデルのバージョンは、PFM - Web Console の [エージェント階層] タブでエージェントアイコンをクリックし、[プロパティの表示] メソッドをクリックして表示される [プロパティ] 画面で確認してください。

データモデルについては、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、Performance Management の機能について説明している章を参照してください。

レコードの記載形式

この章では、PFM - Agent for HiRDB のレコードをアルファベット順に記載しています。各レコードの説明は、次の項目から構成されています。

機能

各レコードに格納されるパフォーマンスデータの概要および注意事項について説明します。

デフォルト値および変更できる値

各レコードに設定されているパフォーマンスデータの収集条件のデフォルト値およびユーザーが変更できる値を表で示します。「デフォルト値および変更できる値」に記載している項目とその意味を次の表に示します。この表で示す各項目については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、稼働監視データの管理について説明している章を参照してください。

表 6-1 デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	パフォーマンスデータの収集間隔（秒単位）。	○：変更できる ×：変更できない
Collection Offset ^{※1}	パフォーマンスデータの収集を開始するオフセット値（秒単位）。 オフセット値については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、稼働監視データの管理について説明している章を参照のこと。 また、パフォーマンスデータの収集開始時刻については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、Performance Management の機能について説明している章を参照のこと。	○：変更できる ×：変更できない
Log	収集したパフォーマンスデータを Store データベースに記録するかどうか。 Yes：記録する。ただし、「Collection Interval=0」の場合、記録しない。 No：記録しない。	
LOGIF	収集したパフォーマンスデータを Store データベースに記録するかどうかの条件。	
Over 10 Sec Collection Time ^{※2}	システム構成によって、レコードの収集に 10 秒以上掛かることがあるかどうか。 Yes：10 秒以上掛かることがある。 No：10 秒掛からない。	

注※1

指定できる値は、0~32,767 秒（Collection Interval で指定した値の範囲内）です。これは、複数のデータを収集する場合に、1 回にデータの収集処理が実行されると負荷が集中するので、収集処理の負

荷を分散するために使用します。なお、データ収集の記録時間は、Collection Offset の値に関係なく、Collection Interval と同様の時間となります。

Collection Offset の値を変更する場合は、収集処理の負荷を考慮した上で値を指定してください。

注※2

履歴収集優先機能が有効の場合に表示されます。

ODBC キーフィールド

PFM - Manager または PFM - Base で、Store データベースに格納されているレコードのデータを利用する場合に必要な主キーを示します。ODBC キーフィールドには、各レコード共通のものと各レコード固有のものとがあります。ここで示すのは、各レコード固有の ODBC キーフィールドです。複数インスタンスレコードだけが、固有の ODBC キーフィールドを持っています。各レコード共通の ODBC キーフィールドについては、「表 6-2 各レコード共通の ODBC キーフィールド一覧」を参照してください。

ライフタイム

各レコードに収集されるパフォーマンスデータの一貫性が保証される期間を示します。ライフタイムについては、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、Performance Management の機能について説明している章を参照してください。

レコードサイズ

1 回の収集で各レコードに格納されるパフォーマンスデータの容量を示します。

フィールド

各レコードのフィールドについて表で説明します。表の各項目について次に説明します。

- PFM - View 名 (PFM - Manager 名)

- PFM - View 名

PFM - Web Console で表示されるフィールド名を示します。

- PFM - Manager 名

PFM - Manager で、SQL を使用して Store データベースに格納されているフィールドのデータを利用する場合、SQL 文で記述するフィールド名を示します。

SQL 文では、先頭に各レコードのレコード ID を付けた形式で記述します。例えば、HiRDB Server Status (PD_SVST) レコードの Host (HOST) フィールドの場合、「PD_SVST_HOST」と記述します。

- 説明

各フィールドに格納されるパフォーマンスデータについて説明します。

各フィールドのパフォーマンスデータの求め方には、次の種類があります。

- 今回収集したデータと前回のインターバルで収集したデータによって求められた平均や割合を求めるもの。

- ・今回収集したデータだけで求められるもの。
- ・ほかのフィールドのデータから求めるもの（各レコードのフィールドの表にある「データソース」参照）。

特に断り書きがない場合、データの収集間隔によって求められる値となります。

履歴レポートで、PI レコードタイプのレコードを、レポート間隔に「分」以外を設定して要約した場合に表示される値には、次の種類があります。

- ・要約した間隔の平均値を表示するもの。
- ・最後に収集した値を表示するもの。
- ・合計値を表示するもの。
- ・最小値を表示するもの。
- ・最大値を表示するもの。

特に断り書きがないフィールドの値は、要約した間隔の平均値が表示されます。

- ・要約

Agent Store がデータを要約するときの方法（要約ルール）を示します。要約ルールについては、「要約ルール」を参照してください。

- ・形式

char 型や float 型など、各フィールドの値のデータ型を示します。データ型については、「[表 6-5 データ型一覧](#)」を参照してください。

- ・デルタ

累積値として収集するデータに対し、変化量でデータを表すことを「デルタ」と呼びます。デルタについては、「[フィールドの値](#)」を参照してください。

- ・データソース

該当するフィールドの値の計算方法または取得先を示します。フィールドの値については、「[フィールドの値](#)」を参照してください。

ODBC キーフィールド一覧

ODBC キーフィールドには、各レコード共通のものと各レコード固有のものとがあります。ここで示すのは、各レコード共通の ODBC キーフィールドです。PFM - Manager で Store データベースに格納されているレコードのデータを利用する場合、ODBC キーフィールドが必要です。

各レコード共通の ODBC キーフィールド一覧を次の表に示します。各レコード固有の ODBC キーフィールドについては、各レコードの説明を参照してください。

表 6-2 各レコード共通の ODBC キーフィールド一覧

ODBC キーフィールド	ODBC フォーマット	データ	説明
レコード ID_DATE	SQL_INTEGER	内部	レコードが生成された日付を表すレコードのキー。
レコード ID_DATETIME	SQL_INTEGER	内部	レコード ID_DATE フィールドとレコード ID_TIME フィールドの組み合わせ。
レコード ID_DEVICEID	SQL_VARCHAR	内部	インスタンス名[ホスト名]。
レコード ID_DRAWER_TYPE	SQL_VARCHAR	内部	区分。有効な値を次に示す。 m : 分 H : 時 D : 日 W : 週 M : 月 Y : 年
レコード ID_PROD_INST	SQL_VARCHAR	内部	PFM - Agent のインスタンス名。
レコード ID_PRODID	SQL_VARCHAR	内部	PFM - Agent のプロダクト ID。
レコード ID_RECORD_TYPE	SQL_VARCHAR	内部	レコードタイプを表す識別子 (4 バイト)。
レコード ID_TIME	SQL_INTEGER	内部	レコードが生成された時刻 (グリニッジ標準時)。

要約ルール

要約レコードは、収集したデータを一定の時間単位（分・時・日・週・月・年）ごとに要約して Store データベースに格納します。要約は、フィールドごとに定められた演算の定義に基づいて行われます。この演算の定義を「要約ルール」と呼びます。

要約によって Store データベースに追加されるフィールドを「追加フィールド」と呼びます。追加フィールドの有無や種類は要約ルールごとに異なります。追加フィールドの一部は、PFM - Web Console でレコードのフィールドとして表示されます。PFM - Web Console に表示される追加フィールドは、履歴レポートに表示するフィールドとして使用できます。

なお、要約によって追加される「追加フィールド」と区別するために、ここでは、この章の各レコードの説明に記載されているフィールドを「固有フィールド」と呼びます。

追加フィールドのフィールド名は次のようにになります。

- Store データベースに格納される追加フィールド名
固有フィールドの PFM - Manager 名にサフィックスが付加されたフィールド名になります。
- PFM - Web Console で表示される追加フィールド名
固有フィールドの PFM - View 名にサフィックスが付加されたフィールド名になります。

PFM - Manager 名に付加されるサフィックスと、それに対応する PFM - View 名に付加されるサフィックス、およびフィールドに格納されるデータを次の表に示します。

表 6-3 追加フィールドのサフィックス一覧

PFM - Manager 名 に付加されるサ フィックス	PFM - View 名に 付加されるサ フィックス	格納データ
_TOTAL	(Total)	要約期間内のレコードのフィールドの値の総和
_TOTAL_SEC	(Total)	要約期間内のレコードのフィールドの値の総和 (utime 型の場合)
_COUNT	-	要約期間内の収集レコード数
_HI	(Max)	要約期間内のレコードのフィールド値の最大値
_LO	(Min)	要約期間内のレコードのフィールド値の最小値

(凡例)

- : 追加フィールドがないことを示します。

要約ルールの一覧を次の表に示します。

表 6-4 要約ルール一覧

要約ルール名	要約ルール
COPY	要約期間内の最新のレコードのフィールド値がそのまま格納される。
AVG	<p>要約期間内のフィールド値の平均値が格納される。 次に計算式を示す。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 5px;"> $(\text{フィールド値の総和}) / (\text{収集レコード数})$ </div> <p>追加フィールド (Store データベース)</p> <ul style="list-style-type: none"> • _TOTAL • _TOTAL_SEC (utime 型の場合) • _COUNT <p>追加フィールド (PFM - Web Console) ※1※2</p> <ul style="list-style-type: none"> • (Total)
HILO	<p>要約期間内のデータの最大値、最小値、および平均値が格納される。 固有フィールドには平均値が格納される。 次に計算式を示す。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 5px;"> $(\text{フィールド値の総和}) / (\text{収集レコード数})$ </div> <p>追加フィールド (Store データベース)</p> <ul style="list-style-type: none"> • _HI • _LO • _TOTAL • _TOTAL_SEC (utime 型の場合) • _COUNT <p>追加フィールド (PFM - Web Console) ※1※2</p> <ul style="list-style-type: none"> • (Max) • (Min) • (Total)
HI	要約期間内のフィールド値の最大値が格納される。
LO	要約期間内のフィールド値の最小値が格納される。
—	要約されないことを示す。

注※1

Manager 名に「_AVG」が含まれる utime 型のフィールドは、PFM - Web Console に追加される「(Total)」フィールドを履歴レポートで利用できません。

注※2

Manager 名に次の文字列が含まれるフィールドは、PFM - Web Console に追加される (Total) フィールドを履歴レポートで利用できません。

「_PER_」, 「PCT」, 「PERCENT」, 「_AVG」, 「_RATE_TOTAL」

データ型一覧

各フィールドの値のデータ型と、対応する C および C++ のデータ型の一覧を次の表に示します。この表で示す「データ型」の「フィールド」の値は、各レコードのフィールドの表にある「形式」の列に示されています。

表 6-5 データ型一覧

データ型		バイト	説明
フィールド	C および C++		
char(n)	char()	()内の数	n バイトの長さを持つ文字データ。
double	double	8	数値 (1.7E±308 (15桁))。
float	float	4	数値 (3.4E±38 (7桁))。
long	long	4	数値 (-2,147,483,648~2,147,483,647)。
short	short	2	数値 (-32,768~32,767)。
string(n)	char[]	()内の数	n バイトの長さを持つ文字列 (7 ビットアスキー以外は格納できない)。最後の文字は、「null」。
time_t	unsigned long	4	数値 (0~4,294,967,295)。
timeval	構造体	8	数値 (最初の 4 バイトは秒、次の 4 バイトはマイクロ秒を表す)。
ulong	unsigned long	4	数値 (0~4,294,967,295)。
ushort	unsigned short	2	数値 (0~65,535)。
utime	構造体	8	数値 (最初の 4 バイトは秒、次の 4 バイトはマイクロ秒を表す)。
word	unsigned short	2	数値 (0~65,535)。
(該当なし)	unsigned char	1	数値 (0~255)。

注

現在のデータモデルでは、これらのデータ型の範囲を超える値の監視はできません。もし、データソースが範囲を超える値だった場合、そのフィールドの値は不定となります。また、そのフィールドの値をデータソースとして使用しているフィールドの値も不定となります。

フィールドの値

ここでは、各フィールドに格納される値について説明します。

データソース

各フィールドには、Performance Management や監視対象プログラムから取得した値や、これらの値がある計算式に基づいて計算した値が格納されます。各フィールドの値の取得先または計算方法は、フィールドの表の「データソース」列で示します。

PFM - Agent for HiRDB の「データソース」列の文字列は、HiRDB から取得したパフォーマンスデータを加工してフィールドの値を設定している場合、そのフィールドに設定される値の計算方法を示します。

- ・「Agent Collector」と書かれている場合

そのフィールドに格納される値の取得先は、Agent Collector サービスです。

- ・「-」と書かれている場合

パフォーマンスデータを加工してフィールドの値を設定していないことを示します。

デルタ

変化量でデータを表すことを「デルタ」と呼びます。例えば、1回目に収集されたパフォーマンスデータが「3」、2回目に収集されたパフォーマンスデータが「4」とすると、変化量として「1」が格納されます。各フィールドの値がデルタかどうかは、フィールドの表の「デルタ」列で示します。

PFM - Agent for HiRDB で収集されるパフォーマンスデータは、次の表のように異なります。

表 6-6 PFM - Agent for HiRDB で収集されるパフォーマンスデータ

レコードタイプ	デルタ	データ種別	[デルタ値で表示] の チェック*	レコードの値
PI レコードタイプ	Yes	リアルタイムデータ	あり	変化量が表示される。
			なし	収集時点の値が表示される。
		・履歴データ ・アラームの監視データ	—	変化量が表示される。
	No	リアルタイムデータ	あり	収集時点の値が表示される。
			なし	収集時点の値が表示される。
		・履歴データ ・アラームの監視データ	—	収集時点の値が表示される。
PD レコードタイプ	Yes	リアルタイムデータ	あり	変化量が表示される。
			なし	収集時点の値が表示される。
		・履歴データ	—	収集時点の値が表示される。

レコードタイプ	デルタ	データ種別	[デルタ値で表示] の チェック※	レコードの値
PD レコードタ イプ	Yes	・アラームの監視データ	—	収集時点の値が表示される。
	No	リアルタイムデータ	あり	収集時点の値が表示される。
			なし	収集時点の値が表示される。
		・履歴データ ・アラームの監視データ	—	収集時点の値が表示される。

(凡例)

—：該当しない

注※

次に示す PFM - Web Console の画面の項目でチェックされていることを示します。

- レポートウィザードの [編集 > 表示設定 (リアルタイムレポート)] 画面の [デルタ値で表示]
- レポートウィンドウの [Properties] タブの [表示設定 (リアルタイムレポート)] の [デルタ値で表示]

パフォーマンスデータが収集される際の注意事項を次に示します。

- PI レコードタイプのレコードが保存されるためには、2回以上パフォーマンスデータが収集されている必要があります。

PI レコードタイプのレコードには、PFM - Web Console で設定した収集間隔ごとにパフォーマンスデータが収集されます。しかし、パフォーマンスデータの Store データベースへの格納は、PFM - Web Console でパフォーマンスデータの収集の設定をした時点では実行されません。

PI レコードタイプの履歴データには、前回の収集データとの差分を必要とするデータ（デルタ値など）が含まれているため、2回分のデータが必要になります。このため、履歴データが Store データベースに格納されるまでには、設定した時間の最大 2 倍の時間が掛かります。

例えば、PFM - Web Console でパフォーマンスデータの収集間隔を、18:32 に 300 秒 (5 分) で設定した場合、最初のデータ収集は 18:35 に開始されます。次のデータ収集は 18:40 に開始されます。その後、18:35 と 18:40 に収集されたデータを基に履歴のデータが作成され、8 分後に履歴データとして Store データベースに格納されます。

- リアルタイムレポートには、最初にデータが収集されたときから値が表示されます。ただし、前回のデータを必要とするレポートの場合、初回の値は「0」で表示されます。2回目以降のデータ収集は、レポートによって動作が異なります。
- 次の場合、2回目のデータ収集以降は、収集データの値が表示されます。
 - PI レコードのリアルタイムレポートの設定で、[デルタ値で表示] がチェックされていない場合
 - PD レコードのリアルタイムレポートの設定で、[デルタ値で表示] がチェックされている場合
- 次の場合、2回目のデータ収集では、1回目のデータと2回目のデータの差分が表示されます。3回目以降のデータ収集では、収集データの値が表示されます。

- PI レコードタイプのリアルタイムレポートの設定で、[デルタ値で表示] がチェックされている場合

Store データベースに記録されるときだけ追加されるフィールド

Store データベースに記録されるときだけ追加されるフィールドを次の表に示します。

表 6-7 Store データベースに記録されるときだけ追加されるフィールド

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	形式	デルタ	データソース
Agent Host (DEVICEID)	PFM - Agent が動作しているホスト名。	string(256)	No	—
Agent Instance (PROD_INST)	PFM - Agent のインスタンス名。	string(256)	No	—
Agent Type (PRODID)	PFM - Agent のプロダクト ID。1 バイトの識別子で表される。	char	No	—
Date (DATE)	レコードが作成された日。グリニッジ標準時。 ※1※2※3	char(3)	No	—
Date and Time (DATETIME)	Date (DATE) フィールドと Time (TIME) フィールドの組み合わせ。 ※2	char(6)	No	—
Drawer Type (DRAWER_TYPE)	PI レコードタイプのレコードの場合、データが要約される区分。	char	No	—
GMT Offset (GMD_ADJUST)	グリニッジ標準時とローカル時間の差。秒単位。	long	No	—
Time (TIME)	レコードが作成された時刻。グリニッジ標準時。 ※1※2※3	char(3)	No	—

(凡例)

– : HiRDB から取得したパフォーマンスデータを加工してフィールドの値を設定していないことを意味します。

注※1

PI レコードタイプのレコードでは、データが要約されるため、要約される際の基準となる時刻が設定されます。レコード区分ごとの設定値を次の表に示します。

表 6-8 レコード区分ごとの設定値

区分	レコード区分ごとの設定値
分	レコードが作成された時刻の 0 秒
時	レコードが作成された時刻の 0 分 0 秒
日	レコードが作成された日の 0 時 0 分 0 秒
週	レコードが作成された週の月曜日の 0 時 0 分 0 秒

区分	レコード区分ごとの設定値
月	レコードが作成された月の 1 日の 0 時 0 分 0 秒
年	レコードが作成された年の 1 月 1 日の 0 時 0 分 0 秒

注※2

レポートによるデータ表示を行った場合、Date フィールドは YYYYMMDD 形式で、Date and Time フィールドは YYYYMMDD hh:mm:ss 形式で、Time フィールドは hh:mm:ss 形式で表示されます。

注※3

PI_SSYS レコード、PI_RDFL レコード、および PI_RDFS レコードの場合は Record Time (RECORD_TIME) フィールドの値です。

レコードの収集に関する注意事項

レコードの収集に関する注意事項については、次のマニュアルを参照してください。

- ・マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」
- ・マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」
- ・マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」

HiRDB からデータを取得できない場合のレコード生成結果

HiRDB のファイルパス変更コマンドに関する注意事項

ファイルパス変更コマンドを使用してデータベースをほかのディスクに移動する場合、作業前に PFM - Agent for HiRDB を停止させ、作業が完了するまでは PFM - Agent for HiRDB を起動しないでください。作業中に PFM - Agent for HiRDB を動作させた場合、誤った情報を収集するなどの不具合が生じるおそれがあります。

HiRDB 構成変更中のレコード収集

PFM - Agent for HiRDB は複数の HiRDB コマンドの実行結果を合成して 1 つのレコードを生成します。このため、オンライン中に RD エリアを移動するなど HiRDB 構成変更中にレコード収集を行った場合に、不整合なレコードを生成、またはレコード自体が欠落するおそれがあります。また、構成変更中は HiRDB 内の排他の影響によってレコード収集に時間が掛かることがあります。HiRDB 構成変更中に収集したレコードは無視してください。

HiRDB 停止中のレコード収集

PFM - Agent for HiRDB は HiRDB コマンドの実行結果を基にレコードを生成します。このため、HiRDB 停止中にレコード収集を行った場合に、不整合なレコードを生成、またはレコード自体が欠落するおそれがあります。なお、不整合なレコードはアラーム誤発報の原因となります。

同一ホスト、同時刻のレコード収集

同一ホストで、同じ時刻に、複数の PFM - Agent for HiRDB のインスタンスが PI_SSYS レコード、PI_RDFS レコード、および PI_RDFL レコードの収集を行わないように、収集レコードの Collection Interval と Collection Offset を設定してください。インスタンスのセットアップを行っていない HiRDB のシステムマネジャ以外のユニットを含むホストに対してもインスタンスによる収集を行いますので、該当する場合は上記対策を実施してください。

レコード一覧

ここでは、PFM - Agent for HiRDB で収集できるレコードの一覧を記載します。

PFM - Agent for HiRDB で収集できるレコードおよびそのレコードに格納される情報を、レコード名順で次の表に示します。

ある一定の時間を単位としたパフォーマンスデータには変化量を示す値と収集時点の値とがあります。データがどちらに該当するかについては、「[フィールドの値](#)」を参照してください。

表 6-9 PFM - Agent for HiRDB のレコード一覧

レコード名	レコード ID	格納される情報
DB Global Buffer Status for version 05-06	PI_GB05	HiRDB 05-06 以降かつ 06-00 より前のグローバルバッファについての、ある一定の時間を単位としたパフォーマンスデータ。
DB Global Buffer Status for version 06-00, or later	PI_GBUF	HiRDB 06-00 以降のグローバルバッファについての、ある一定の時間を単位としたパフォーマンスデータ。
Detail Communication Control Status	PD_CNST	コネクションが確立しているサーバプロセスについての、ある時点での状態を示すパフォーマンスデータ。
Forecast Time of DB Reorg.Function Level 1	PD_ROT1	予測レベル 1 の再編成時期予測機能の実行結果。
Forecast Time of DB Reorg.Function Level 2	PD_ROT2	予測レベル 2 の再編成時期予測機能の実行結果。
HiRDB File System Area Status	PI_FSST	作業表用ファイル用の HiRDB ファイルシステム領域についての、ある一定の時間を単位としたパフォーマンスデータ。
HiRDB Message	PD_MLOG	HiRDB メッセージについての、ある一定の時間を単位としたパフォーマンスデータ。
HiRDB Product Detail	PD	予約レコードのため使用できません。
HiRDB Server Status	PD_SVST	HiRDB ユニットおよびサーバについての、ある時点での状態を示すパフォーマンスデータ。
HiRDB Statistical Information SYS	PI_SSYS	統計情報種別が sys である統計情報。
HiRDB System	PD_HRDS	予約レコードのため使用できません。
RDAREA Detailed Status	PI_RDDS	RD エリアについての、ある一定の時間を単位としたパフォーマンスデータ。
RDAREA HiRDB File	PI_RDFL	RD エリア用に割り当てられた HiRDB ファイルについての、ある一定の時間を単位としたパフォーマンスデータ。

レコード名	レコード ID	格納される情報
RDAREA HiRDB File System Area	PI_RDFS	RD エリア用 HiRDB ファイルシステム領域についての、ある一定の時間を単位としたパフォーマンスデータ。
RDAREA Status	PI_RDST	RD エリアについての、ある一定の時間を単位としたパフォーマンスデータ。
Server Lock Control Status	PI_LKST	各サーバの排他資源管理テーブルの使用率についての、ある一定の時間を単位としたパフォーマンスデータ。
System Summary Record	PI	次の HiRDB パフォーマンス統計情報についての、ある一定の時間を単位としたパフォーマンスデータ。 <ul style="list-style-type: none"> • 排他資源管理テーブルの使用率 • 状態別のプロセス数

DB Global Buffer Status for version 05-06 (PI_GB05)

機能

DB Global Buffer Status for version 05-06 (PI_GB05) レコードには、グローバルバッファについての、ある一定の時間を単位としたパフォーマンスデータが格納されます。このレコードは、複数インスタンスレコードです。グローバルバッファとサーバの組み合わせごとに 1 行作成されます。このレコードは、HiRDB 05-06 以降かつ 06-00 より前で使用できます。

注意

- サーバまたはユニットの構成を変更した場合、最新の構成を反映するためにエージェントを再起動してください。
- HiRDB の性能に影響を与えないために、Collection Interval は少なくとも 60 秒以上に設定してください。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	3600	○
Collection Offset	720	○
Log	No	○
LOGIF	空白	○
Over 10 Sec Collection Time	No	×

ODBC キーフィールド

- PI_GB05_BUFFER_NAME
- PI_GB05_SERVER_NAME

ライフタイム

HiRDB の開始から停止まで。

レコードサイズ

- 固定部：681 バイト
- 可変部：118 バイト

フィールド

各項目の詳細については、マニュアル「HiRDB コマンドリファレンス」の `pdbuf ls -k sts` コマンドの実行結果の説明を参照してください。

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
Buffer Name (BUFFER_NAME)	グローバルバッファ名。	COPY	string(17)	No	pdbufls -k sts のBUFFNAME値
Buffer Pool Hit Rate (BUFPOOL_HITRATE)	グローバルバッファプールのヒット率（単位は%）。	COPY	short	No	pdbufls -k sts のHIT値
Current Reference Buffers (CURR_REF_BUFFERS)	カレントの参照バッファ数。	COPY	long	No	pdbufls -k sts のREFBUF値
Current Update Buffers (CURR_UPD_BUFFERS)	カレントの更新バッファ数。	COPY	long	No	pdbufls -k sts のUPBUF値
DB Syncs (DB_SYNCS)	DB シンクポイント発生回数。	COPY	ulong	No	pdbufls -k sts のSYNC値
Interval (INTERVAL)	情報が収集される期間（単位は秒）。	COPY	ulong	No	Agent Collector
LOB Buffer Input Pages (LOB_BUF_IN_PAGES)	LOB バッファ一括入力ページ数。	COPY	ulong	No	pdbufls -k sts のLRPAG値
LOB Buffer Output Pages (LOB_BUF_OUT_PAGES)	LOB バッファ一括出力ページ数。	COPY	ulong	No	pdbufls -k sts のLWPAG値
LOB Buffer Read Requests (LOB_BUF_READ_REQS)	LOB バッファ READ 要求回数。	COPY	ulong	No	pdbufls -k sts のLRREQ値
LOB Buffer Write Requests (LOB_BUF_WRITE_REQS)	LOB バッファ WRITE 要求回数。	COPY	ulong	No	pdbufls -k sts のLWREQ値
Out Of Buffer (OUT_OF_BUF)	バッファ不足発生回数。	COPY	ulong	No	pdbufls -k sts のINSB値
Prefetch Buffer Shortages (PREFETCH_BUF_SHORTAGES)	プリフェッチバッファ不足発生回数。	COPY	ulong	No	pdbufls -k sts のPRINS値

6. レコード

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
Prefetch Hit Rate (PREFETCH_HITRATE)	プリフェッチヒット率 (単位は%)。	COPY	short	No	pdbufls -k sts のPRHIT値
Prefetch Input Pages (PREFETCH_INPUT_PAGES)	プリフェッチ入力ページ数。	COPY	ulong	No	pdbufls -k sts のPRRED値
Prefetch Read Requests (PREFETCH_READREQ)	プリフェッチ READ 要求回数。	COPY	ulong	No	pdbufls -k sts のPRREQ値
Reads (READS)	ディスクからの実 READ 回数。	COPY	ulong	No	pdbufls -k sts のREAD値
Reads/sec (READS_RATE)	1 秒当たりの読み込み処理件数。	COPY	float	No	READS/INTERVAL
Record Time (RECORD_TIME)	レコードが作成された時刻。	COPY	time_t	No	Agent Collector
Record Type (INPUT_RECORD_TYPE)	レコードタイプ識別子。	COPY	char(8)	No	Agent Collector
Reference Buffer Flushes (REFBUF_FLUSHES)	参照バッファフラッシュ回数。	COPY	ulong	No	pdbufls -k sts のRFFLS値
Reference Gets (REF_GETS)	参照 GET 回数。	COPY	ulong	No	pdbufls -k sts のRGGET値
Reference Hit Rate (REF_HITRATE)	参照要求のヒット率 (単位は%)。	COPY	short	No	pdbufls -k sts のREF値
Server Name (SERVER_NAME)	サーバ名。	COPY	string(9)	No	pdbufls -k sts のSVID値
Update Buffer Flushes (UPDBUF_FLUSHES)	更新バッファフラッシュ回数。	COPY	ulong	No	pdbufls -k sts のUPFLS値
Update Gets (UPD_GETS)	更新 GET 回数。	COPY	ulong	No	pdbufls -k sts のUPGET値
Update Hit Rate (UPD_HITRATE)	更新要求のヒット率 (単位は%)。	COPY	short	No	pdbufls -k sts のUPD値
Updated Buffer Trigger (UPD_BUF_TRG)	デファードライトトリガ時の出力契機となる更新バッファ数。	COPY	long	No	pdbufls -k sts のTRG値

6. レコード

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
Waits (WAITS)	バッファ排他待ち発生回数。	COPY	ulong	No	pdbufls -k sts のWAITL値
Writes (WRITES)	ディスクへの実 WRITE 回数。	COPY	ulong	No	pdbufls -k sts のWRITE値
Writes/sec (WRITES_RATE)	1 秒当たりの書き込み処理件数。	COPY	float	No	WRITES/ INTERVAL

DB Global Buffer Status for version 06-00, or later (PI_GBUF)

機能

DB Global Buffer Status for version 06-00, or later (PI_GBUF) レコードには、グローバルバッファについての、ある一定の時間を単位としたパフォーマンスデータが格納されます。このレコードは、複数インスタンスレコードです。グローバルバッファとサーバの組み合わせごとに 1 行作成されます。このレコードは、HiRDB 06-00 以降で使用できます。

注意

- サーバまたはユニットの構成を変更した場合、最新の構成を反映するためにエージェントを再起動してください。
- HiRDB の性能に影響を与えないために、Collection Interval は少なくとも 60 秒以上に設定してください。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	3600	○
Collection Offset	720	○
Log	No	○
LOGIF	空白	○
Over 10 Sec Collection Time	No	×

ODBC キーフィールド

- PI_GBUF_BUFFER_NAME
- PI_GBUF_SERVER_NAME

ライフタイム

HiRDB の開始から停止まで。

レコードサイズ

- 固定部：681 バイト
- 可変部：118 バイト

フィールド

各項目の詳細については、マニュアル「HiRDB コマンドリファレンス」の `pdbufcls -k sts -d` コマンドの実行結果の説明を参照してください。

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース	
					HiRDB 08-03 まで	HiRDB 08-04 以降
Buffer Name (BUFFER_NAME)	グローバルバッファ名。	COPY	string(17)	No	pdbufils -k sts -d の BUFFNAME値	pdbufils -k sts -d -x の BUFFNAME値
Buffer Pool Hit Rate (BUFPOOL_HITRATE)	グローバルバッファプールのヒット率 (単位は%)。	COPY	short	No	pdbufils -k sts -d の HIT値	pdbufils -k sts -d -x の ((△RFHITR+△ UPHITR)/(△RFGETR+△ UPGETR))*100の値※2※3
Current Reference Buffers (CURR_REF_BUFFERS)	カレントの参照バッファ数。	COPY	long	No	pdbufils -k sts -d の REFBUF値※4	pdbufils -k sts -d -x の REFBUF値※4
Current Update Buffers (CURR_UPD_BUFFERS)	カレントの更新バッファ数。	COPY	long	No	pdbufils -k sts -d の UPBUF値※4	pdbufils -k sts -d -x の UPBUF値※4
DB Syncs (DB_SYNCNS)	DB シンクポイント発生回数。	COPY	ulong	Yes	pdbufils -k sts -d の SYNC値※2	pdbufils -k sts -d -x の SYNC値※2
Interval (INTERVAL)	情報が収集される期間 (単位は秒)。	COPY	ulong	No	Agent Collector	
LOB Buffer Input Pages (LOB_BUF_IN_PAGES)	LOB バッファー括入力ページ数。	COPY	ulong	Yes	pdbufils -k sts -d の△ LRPAG値※2	pdbufils -k sts -d -x の △LRPAGR値※2
LOB Buffer Output Pages (LOB_BUF_OUT_PAGES)	LOB バッファー括出力ページ数。	COPY	ulong	Yes	pdbufils -k sts -d の△ LWPAG値※2	pdbufils -k sts -d -x の △LWPAGR値※2
LOB Buffer Read Requests (LOB_BUF_READ_REQ)	LOB バッファ READ 要求回数。	COPY	ulong	Yes	pdbufils -k sts -d の△ LRREQ値※2	pdbufils -k sts -d -x の △LRREQR値※2
LOB Buffer Write Requests (LOB_BUF_WRITE_REQ)	LOB バッファ WRITE 要求回数。	COPY	ulong	Yes	pdbufils -k sts -d の△ LWREQ値※2	pdbufils -k sts -d -x の △LWREQR値※2
Out Of Buffer (OUT_OF_BUF)	バッファ不足発生回数。	COPY	ulong	Yes	pdbufils -k sts -d の△ INSB値※2	pdbufils -k sts -d -x の △INSBR値※2
Prefetch Buffer Shortages (PREFETCH_BUF_SHOR TAGES)	プリフェッチバッファ不足発生回数。	COPY	ulong	Yes	pdbufils -k sts -d の△ PRINS値※2	pdbufils -k sts -d -x の △PRINSR値※2
Prefetch Hit Rate (PREFETCH_HITRATE)	プリフェッチヒット率 (単位は%)。	COPY	short	No	pdbufils -k sts -d の PRHIT値※2	pdbufils -k sts -d -x の (△PRHITR/△ PRREDR)*100の値※2※3

6. レコード

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース	
					HiRDB 08-03 まで	HiRDB 08-04 以降
Prefetch Input Pages (PREFETCH_INPUT_PAGES)	プリフェッチ入力ページ数。	COPY	ulong	Yes	pdbufils -k sts -d の△ PRRED値※2	pdbufils -k sts -d -x の△ PRREDR値※2
Prefetch Read Requests (PREFETCH_READ_REQ)	プリフェッチREAD要求回数。	COPY	ulong	Yes	pdbufils -k sts -d の△ PRREQ値※2	pdbufils -k sts -d -x の△ PRREQR値※2
Reads (READS)	ディスクからの実READ回数。	COPY	ulong	Yes	pdbufils -k sts -d の△ READ値※2	pdbufils -k sts -d -x の△ READR値※2
Reads/sec (READS_RATE)	1秒当たりの読み込み処理件数。	COPY	float	No	READS/INTERVAL	
Record Time (RECORD_TIME)	レコードが作成された時刻。	COPY	time_t	No	Agent Collector	
Record Type (INPUT_RECORD_TYPE)	レコードタイプ識別子。	COPY	char(8)	No	Agent Collector	
Reference Buffer Flushes (REFBUF_FLUSHES)	参照バッファフラッシュ回数。	COPY	ulong	Yes	pdbufils -k sts -d の△ RFFLS値※2	pdbufils -k sts -d -x の△ RFFLSR値※2
Reference Gets (REF_GETS)	参照GET回数。	COPY	ulong	Yes	pdbufils -k sts -d の△ RFGET値※2	pdbufils -k sts -d -x の△ RFGETR値※2
Reference Hit Rate (REF_HITRATE)	参照要求のヒット率(単位は%)。	COPY	short	No	pdbufils -k sts -d の△ REF値※1	pdbufils -k sts -d -x の△ (△RFHITR/△ RFGETR)*100の値※2※3
Server Name (SERVER_NAME)	サーバ名。	COPY	string(9)	No	pdbufils -k sts -d の△ SVID値	pdbufils -k sts -d -x の△ SVID値
Update Buffer Flushes (UPDBUF_FLUSHES)	更新バッファフラッシュ回数。	COPY	ulong	Yes	pdbufils -k sts -d の△ UPFLS値※2	pdbufils -k sts -d -x の△ UPFLSR値※2
Update Gets (UPD_GETS)	更新GET回数。	COPY	ulong	Yes	pdbufils -k sts -d の△ UPGET値※2	pdbufils -k sts -d -x の△ UPGETR値※2
Update Hit Rate (UPD_HITRATE)	更新要求のヒット率(単位は%)。	COPY	short	No	pdbufils -k sts -d の△ UPD値※1	pdbufils -k sts -d -x の△ (△UPHITR/△ UPGETR)*100の値※2※3
Updated Buffer Trigger (UPD_BUF_TRG)	デファードライトトリガ時の出力契機と	COPY	long	No	pdbufils -k sts -d の△ TRG値※4	pdbufils -k sts -d -x の△ TRG値※4

6. レコード

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース	
					HiRDB 08-03 まで	HiRDB 08-04 以降
Updated Buffer Trigger (UPD_BUF_TRG)	なる更新バッファ数。	COPY	long	No	pdbufls -k sts -d の TRG 値※4	pdbufls -k sts -d -x の TRG 値※4
Waits (WAITS)	バッファ排他待ち発生回数。	COPY	ulong	Yes	pdbufls -k sts -d の△ WAITL 値※2	pdbufls -k sts -d の△ WAITLR 値※2
Writes (WRITES)	ディスクへの実 WRITE 回数。	COPY	ulong	Yes	pdbufls -k sts -d の△ WRITE 値※2	pdbufls -k sts -d -x の△ WRITER 値※2
Writes/sec (WRITES_RATE)	1 秒当たりの書き込み処理件数。	COPY	float	No	WRITES/INTERVAL	

注※1

HiRDB が起動してから、レコードが作成される時刻までの通算のヒット率が設定されます。

注※2

記号△は「今回の収集値-前回の収集値」を意味します。ただし、初回収集時および前回の収集が失敗した場合は、HiRDB が起動してから、レコードが作成される時刻までの通算の値が設定されます。

注※3

計算式の分母が 0 となる場合は、0 を設定します。

注※4

スナップショット値が設定されます。

Detail Communication Control Status (PD_CNST)

機能

Detail Communication Control Status (PD_CNST) レコードには、コネクションが確立しているサーバプロセスについての、ある時点での状態を示すパフォーマンスデータが格納されます。このレコードは、複数インスタンスレコードです。コネクションが確立しているサーバプロセスごとに 1 行作成されます。

注意

- ・ サーバまたはユニットの構成を変更した場合、最新の構成を反映するためにエージェントを再起動してください。
- ・ レコード収集時に、HiRDB 内で処理状態を更新しているプロセスが存在すると、情報が取得できない場合があります。この場合、そのプロセスの情報は収集しません。
- ・ Type4 JDBC ドライバから接続しているプロセスについては収集できません。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	3600	○
Collection Offset	240	○
Log	No	○
LOGIF	空白	○
Over 10 Sec Collection Time	No	×

ODBC キーフィールド

- PD_CNST_SERVER_PID

ライフタイム

インスタンスの作成から削除まで。

レコードサイズ

- ・ 固定部：681 バイト
- ・ 可変部：240 バイト

フィールド

各項目の詳細については、マニュアル「HiRDB コマンドリファレンス」の `pdls -d rpc -a` コマンドの実行結果の説明を参照してください。

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
Activity ID (ACTIVITY_ID)	アクティビティ ID。	—	string(19)	No	pdls -d rpc -a のACTID値
Client IP Address (CLIENT_IP)	サーバプロセスに接続されたクライアントの IP アドレス。	—	string(16)	No	pdls -d rpc -a のCLTADDR値
Client Operating System (CLIENT_OS)	クライアントプロセスの OS。Workstation, PC, または Mainframe のどれか。	—	string(12)	No	pdls -d rpc -a のOS値
Client Process ID (CLIENT_PID)	クライアントプロセスのプロセス ID。	—	string(11)	No	pdls -d rpc -a のCLTPID値
Client Type (CLIENT_TYPE)	クライアント種別。Client, Utility, または Other のどれか。	—	string(8)	No	pdls -d rpc -a のCLTKIND値
Client UAP Name (CLIENT_UAP)	クライアント UAP の名称。	—	string(31)	No	pdls -d rpc -a のCLTNAME値
Critical Information Display (CRITICAL_INFORMATION_DISPLAY)	クリティカル情報表示。	—	string(9)	No	pdls -d rpc -a のMASK値
Critical Status (CRITICAL_STATUS)	プロセスはクリティカルであるかどうか (Yes または No)。	—	string(4)	No	pdls -d rpc -a のCRITICAL値
Host (HOST)	ホスト名。	—	string(33)	No	pdls -d rpc -a のHOSTNAME値
Interval (INTERVAL)	情報が収集される間隔 (単位は秒)。	—	ulong	No	Agent Collector
Process Status Detail (PROCESS_STATUS_DETAILS)	プロセス状態詳細内部コード。	—	string(27)	No	pdls -d rpc -a のSYS_EVENT値
Record Time (RECORD_TIME)	レコードが作成された時刻。	—	time_t	No	Agent Collector
Record Type (INPUT_RECORD_TYPE)	レコードタイプ識別子。	—	char(8)	No	Agent Collector
Server Name (SERVER_NAME)	サーバ名。	—	string(9)	No	pdls -d rpc -a のSVID値
Server Process ID (SERVER_PID)	サーバプロセスのプロセス ID。	—	string(11)	No	pdls -d rpc -a のPID値

6. レコード

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
Server Process Status (PROCESS_STATUS)	プロセス状態 (ACTIVE, SUSPEND (QUE), SUSPEND (CLT), SUSPEND (SVR))。	—	string(13)	No	pdls -d rpc -a のSTATUS値
Server Type (SERVER_TYPE)	サーバ種別。FES, BES, DIC, SDS のどれか (クライアント種別が Client の場合だけ有効な値が設定される)。	—	string(4)	No	pdls -d rpc -a のSVRKIND値
Service Name Display (SERVICE_NAME_DISPLAY)	サービス名表示。	—	string(33)	No	pdls -d rpc -a のSERVICE値

Forecast Time of DB Reorg.Function Level 1 (PD_ROT1)

機能

Forecast Time of DB Reorg.Function Level 1 (PD_ROT1) レコードには、予測レベル 1 の再編成時期予測機能によって出力された CSV ファイルを基に、データが格納されます。このレコードは、RD エリアの容量不足を監視するために収集します。このレコードは、複数インスタンスレコードです。

注意

- サーバまたはユニットの構成を変更した場合、最新の構成を反映するためにエージェントを再起動してください。
- このレコードは、HiRDB 07-02 以降の場合にだけ収集されます。
- 再編成時期予測機能については、マニュアル「HiRDB システム運用ガイド」の再編成時期予測機能について説明している章を参照してください。
- レコードを収集するには、DB 状態解析蓄積機能を有効にし、情報を蓄積させておく必要があります。
- このレコードは、jpcagtbdef.ini ファイルによって pddbst コマンドのコマンドオプションを設定できます。jpcagtbdef.ini ファイルの設定方法については、「[2.4 セットアップ](#)」(Windows の場合) または「[3.4 セットアップ](#)」(UNIX の場合) のインスタンス設定ファイルの設定に関する説明を参照してください。
- このレコードは、インスタンスで設定した Collection Interval ごとに pddbst -k pred -r ALL -e 1 -m を実行しています。環境設定のときには、Collection Interval はオンライン業務に影響しない時間で指定してください。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Log	N	○
Collection Interval	86400	○
Collection Offset from Top of Minute	640	○
LOGIF	空白	○
Over 10 Sec Collection Time	No	×

ODBC キーフィールド

- PD_ROT1_OUTPUT_KIND
- PD_ROT1_ANALYTICAL_NO
- PD_ROT1_MAINTENANCE_OBJECT_TYPE
- PD_ROT1_AUTHOR_ID
- PD_ROT1_RDAREA_NAME

ライフタイム

予測レベル1の再編成時期の予測データが取得されている間。

レコードサイズ

- 固定部：681 バイト
- 可変部：246 バイト

フィールド

各項目の詳細については、マニュアル「HiRDB コマンドリファレンス」の pddbst -k pred コマンドの実行結果の説明を参照してください。

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
Analytical No (ANALYTICAL_NO)	解析結果番号。	—	double	No	pddbst -k pred CSV出力中のNo 値
Analytical Value (ANALYTICAL_VALUE)	解析項目種別に対する解析値。	—	string(7)	No	pddbst -k pred CSV出力中の Value 値※4
Author ID (AUTHOR_ID)	認可識別子。	—	string(31)	No	pddbst -k pred CSV出力中の AuthID 値※3
Check 1 (CHECK_1)	解析に使用した解析項目種別のチェック用基準値。	—	string(7)	No	pddbst -k pred CSV出力中の Check1 値※4
Check 2 (CHECK_2)	解析に使用した解析項目種別のチェック用基準値。	—	string(7)	No	pddbst -k pred CSV出力中の Check2 値※4
Check No (CHECK_NO)	チェック用基準値数。	—	string(6)	No	pddbst -k pred CSV出力中の CheckNo 値 値※4
Information No (INFORMATION_NO)	解析項目種別の番号。 8 : Used Segment for LOB Columns 13 : Used Segment Ratio	—	string(6)	No	pddbst -k pred CSV出力中の InfoNo 値※4
Interval (INTERVAL)	情報が収集される間隔（単位は秒）。	—	ulong	No	Agent Collector
Item Method No (ITEM_METHOD_NO)	解析項目ごとのメンテナンス方法の番号。	—	string(7)	No	pddbst -k pred

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
Item Method No (ITEM_METHOD_NO)	解析項目ごとのメンテナンス方法の番号。	—	string(7)	No	pddbst -k pred CSV出力中の ItemMethod 値※4
Maintenance Date (MAINTENANCE_DATE)	データベースのメンテナンス予定日。	—	time_t	No	pddbst -k pred CSV出力中の Date 値※1
Maintenance Method (MAINTENANCE_METHOD)	メンテナンス方法の番号。 0 : メンテナンス不要 1 : ReclaimS (使用中空きセグメントの解放) 2 : ReclaimP (使用中空きページの解放) 3 : Reorganize (再編成) 4 : Expand (RD エリアの拡張) 5 : Extend (RD エリアの自動増分 (メンテナンス不要)) 6 : Reinit (RD エリアの再初期化)	—	string(7)	No	pddbst -k pred CSV出力中の Method 値※4
Maintenance Necessity (MAINTENANCE_NECESSTY)	メンテナンスが必要かどうか。 Y : メンテナンスが必要 N : メンテナンス不要	—	char(1)	No	pddbst -k pred CSV出力中の * 値※2
Maintenance Object Name (MAINTENANCE_OBJECT_NAME)	表またはインデクスの名称。	—	string(31)	No	pddbst -k pred CSV出力中の Name 値※3
Maintenance Object Type (MAINTENANCE_OBJECT_TYPE)	対象種別。 T : 表 I : インデクス L : LOB 用 RD エリア R : データディクショナリ用 RD エリア, ユーザ用 RD エリアまたはレジストリ用 RD エリア	—	char(1)	No	pddbst -k pred CSV出力中の Type 値
Next Exec (NEXT_EXEC)	次回の状態解析結果蓄積機能の実行推奨時期。	—	string(11)	No	pddbst -k pred CSV出力中の NextExec 値※5
Output Kind (OUTPUT_KIND)	出力種別。 p : データベースのメンテナンス予定日の情報 m : メンテナンス方法の情報	—	string(9)	No	pddbst -k pred CSV出力中の Kind 値

6. レコード

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
Predict Base Value (PREDICT_BASE_VALUE)	解析に使用した解析項目種別の基準値。	—	string(7)	No	pddbst -k pred CSV出力中の PredictBase 値※4
Predict Reclaim (PREDICT_RECLAIM)	使用中空きセグメントの解放での解放セグメント予測数。	—	string(12)	No	pddbst -k pred CSV出力中の Reclaim 値※4
Predict Reorganize (PREDICT_REORGANIZE)	再編成での解放セグメント予測数。	—	string(12)	No	pddbst -k pred CSV出力中の Reorganize 値※4
RDAREA Name (RDAREA_NAME)	RD エリア名。	—	string(31)	No	pddbst -k pred CSV出力中の Rdarea 値
Record Time (RECORD_TIME)	レコードが作成されたグリニッジ時(秒)。	—	time_t	No	Agent Collector
Record Type (INPUT_RECORD_TYPE)	レコード・タイプ識別子。	—	char(8)	No	Agent Collector
Released Segment (RELEASED_SEGMENT)	解放セグメント数。	—	string(12)	No	pddbst -k pred CSV出力中の Segment 値※4
State Date (STATE_DATE)	解析情報取得日時。	—	string(20)	No	pddbst -k pred CSV出力中の StateDate 値※5
Stored Data Count (STORED_DATA_COUNT)	蓄積データ数。	—	string(7)	No	pddbst -k pred CSV出力中の Count 値※4

注※1

「YYYY/MM/DD」の形式を「YYYY/MM/DD hh:mm:ss」に補正します。

設定する時間は午前0時0分0秒です。

注※2

本来は「*」またはNULLですが、このレコードでは「*」は「Y」、NULLは「N」と設定します。

注※3

データソースがNULLの場合、値に「-」を設定します。

注※4

データソースは数値型ですが、このレコードでは String 型とし、NULL の場合は値に「-」を設定します。

注※5

データソースは日付型ですが、このレコードでは String 型とし、NULL の場合は値に「-」を設定します。

Forecast Time of DB Reorg.Function Level 2 (PD_ROT2)

機能

Forecast Time of DB Reorg.Function Level 2 (PD_ROT2) レコードには、予測レベル 2 の再編成時期予測機能によって出力された CSV ファイルを基に、データが格納されます。このレコードは、RD エリア容量不足に加え、データ格納効率によるオンライン性能への影響を監視するために収集します。このレコードは、複数インスタンスレコードです。

注意

- サーバまたはユニットの構成を変更した場合、最新の構成を反映するためにエージェントを再起動してください。
- このレコードは、HiRDB 07-03 以降の場合にだけ収集されます。
- 再編成時期予測機能については、マニュアル「HiRDB システム運用ガイド」の再編成時期予測機能について説明している章を参照してください。
- レコードを収集するには、DB 状態解析蓄積機能を有効にし、情報を蓄積しておく必要があります。
- このレコードは、jpcagtbdef.ini ファイルによって pddbstd コマンドのコマンドオプションを設定できます。jpcagtbdef.ini ファイルの設定方法については、「[2.4 セットアップ](#)」(Windows の場合) または「[3.4 セットアップ](#)」(UNIX の場合) のインスタンス設定ファイルの設定に関する説明を参照してください。
- このレコードは、インスタンスで設定した Collection Interval ごとに pddbstd -k pred -r ALL -e 2 を実行しています。環境設定のときには、Collection Interval はオンライン業務に影響しない時間で指定してください。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Log	N	○
Collection Interval	86400	○
Collection Offset from Top of Minute	1280	○
LOGIF	空白	○
Over 10 Sec Collection Time	No	×

ODBC キーフィールド

- PD_ROT2_OUTPUT_KIND
- PD_ROT2_ANALYTICAL_NO
- PD_ROT2_MAINTENANCE_OBJECT_TYPE
- PD_ROT2_AUTHOR_ID

- PD_ROT2_MAINTENANCE_OBJECT_NAME
- PD_ROT2_DAREA_NAME
- PD_ROT2_INFORMATION_NO

ライフタイム

予測レベル2の再編成時期の予測データが取得されている間。

レコードサイズ

- 固定部：681バイト
- 可変部：246バイト

フィールド

各項目の詳細については、マニュアル「HiRDB コマンドリファレンス」の pddbst -k pred コマンドの実行結果の説明を参照してください。

PFM - View名 (PFM - Manager名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
Analytical No (ANALYTICAL_NO)	解析結果番号。	—	double	No	pddbst -k pred CSV出力中のNo値
Analytical Value (ANALYTICAL_VALUE)	解析項目種別に対する解析値。	—	string(7)	No	pddbst -k pred CSV出力中のValue値※4
Author ID (AUTHOR_ID)	認可識別子。	—	string(31)	No	pddbst -k pred CSV出力中のAuthID値※3
Check 1 (CHECK_1)	解析に使用した解析項目種別のチェック用基準値。	—	string(7)	No	pddbst -k pred CSV出力中のCheck1値※4
Check 2 (CHECK_2)	解析に使用した解析項目種別のチェック用基準値。	—	string(7)	No	pddbst -k pred CSV出力中のCheck2値※4
Check No (CHECK_NO)	チェック用基準値数。	—	string(6)	No	pddbst -k pred CSV出力中のCheckNo値※4
Information No (INFORMATION_NO)	解析項目種別の番号。 1 : Empty Page Ratio 2 : Unused Page Ratio 3 : Number of Branch Row	—	string(6)	No	pddbst -k pred CSV出力中のInfoNo値※4

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
Information No (INFORMATION_N O)	8 : Used Segment for LOB Columns 10 : Used Segment for Cluster 11 : Unused Page Differ From PCTFREE 13 : Used Segment Ratio	—	string(6)	No	pddbst -k pred CSV出力中の InfoNo値※4
Interval (INTERVAL)	情報が収集される間隔（単位は秒）。	—	ulong	No	Agent Collector
Item Method No (ITEM_METHOD_N O)	解析項目ごとのメンテナンス方法の 番号。	—	string(7)	No	pddbst -k pred CSV出力中の ItemMethod値※4
Maintenance Date (MAINTENANCE_D ATE)	データベースのメンテナンス予定日。	—	time_t	No	pddbst -k pred CSV出力中の Date値※1
Maintenance Method (MAINTENANCE_M ETHOD)	メンテナンス方法の番号。 0 : メンテナンス不要 1 : ReclaimS (使用中空きセグメン トの解放) 2 : ReclaimP (使用中空きページの 解放) 3 : Reorganize (再編成) 4 : Expand (RD エリアの拡張) 5 : Extend (RD エリアの自動増分 (メンテナンス不要)) 6 : Reinit (RD エリアの再初期化)	—	string(7)	No	pddbst -k pred CSV出力中の Method値※4
Maintenance Necessity (MAINTENANCE_NE CESSITY)	メンテナンスが必要かどうか。 Y : メンテナンスが必要 N : メンテナンス不要	—	char(1)	No	pddbst -k pred CSV出力中の*値 ※2
Maintenance Object Name (MAINTENANCE_O BJECT_NAME)	表またはインデクスの名称。	—	string(31)	No	pddbst -k pred CSV出力中の Name値※3
Maintenance Object Type (MAINTENANCE_O BJECT_TYPE)	対象種別。 T : 表 I : インデクス L : LOB 用 RD エリア R : データディクショナリ用 RD エ リア, ユーザ用 RD エリアまたはレ ジストリ用 RD エリア	—	char(1)	No	pddbst -k pred CSV出力中の Type値

6. レコード

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
Next Exec (NEXT_EXEC)	次回の状態解析結果蓄積機能の実行推奨時期。	—	string(11)	No	pddbst -k pred CSV出力中の NextExec 値※5
Output Kind (OUTPUT_KIND)	出力種別。 p : データベースのメンテナンス予定日の情報 m : メンテナンス方法の情報 d : 解析項目別情報	—	string(9)	No	pddbst -k pred CSV出力中の Kind 値
Predict Base Value (PREDICT_BASE_VALUE)	解析に使用した解析項目種別の基準値。	—	string(7)	No	pddbst -k pred CSV出力中の PredictBase 値※4
Predict Reclaim (PREDICT_RECLAIM)	使用中空きセグメントの解放での解放セグメント予測数。	—	string(12)	No	pddbst -k pred CSV出力中の Reclaim 値※4
Predict Reorganize (PREDICT_REORGANIZE)	再編成での解放セグメント予測数。	—	string(12)	No	pddbst -k pred CSV出力中の Reorganize 値※4
RDAREA Name (RDAREA_NAME)	RD エリア名。	—	string(31)	No	pddbst -k pred CSV出力中の Rdarea 値
Record Time (RECORD_TIME)	レコードが作成されたグリニッジ時(秒)。	—	time_t	No	Agent Collector
Record Type (INPUT_RECORD_TYPE)	レコード・タイプ識別子。	—	char(8)	No	Agent Collector
Released Segment (RELEASED_SEGMENT)	解放セグメント数。	—	string(12)	No	pddbst -k pred CSV出力中の Segment 値※4
State Date (STATE_DATE)	解析情報取得日時。	—	string(20)	No	pddbst -k pred CSV出力中の StateDate 値※5
Stored Data Count (STORED_DATA_COUNT)	蓄積データ数。	—	string(7)	No	pddbst -k pred CSV出力中の Count 値※4

注※1

「YYYY/MM/DD」の形式を「YYYY/MM/DD hh:mm:ss」に補正します。

設定する時間は 午前 0 時 0 分 0 秒 です。

6. レコード

注※2

本来は「*」またはNULLですが、このレコードでは「*」は「Y」、NULLは「N」と設定します。

注※3

データソースがNULLの場合、値に「-」を設定します。

注※4

データソースは数値型ですが、このレコードではString型とし、NULLの場合は値に「-」を設定します。

注※5

データソースは日付型ですが、このレコードではString型とし、NULLの場合は値に「-」を設定します。

HiRDB File System Area Status (PI_FSST)

機能

HiRDB File System Area Status (PI_FSST) レコードには、作業表用ファイル用の HiRDB ファイルシステム領域についての、ある一定の時間を単位としたパフォーマンスデータが格納されます。このレコードは、複数インスタンスレコードです。作業表用ファイル用の HiRDB ファイルシステム領域とサーバの組み合わせごとに 1 行作成されます。

注意

- サーバまたはユニットの構成を変更した場合、最新の構成を反映するためにエージェントを再起動してください。
- HiRDB の性能に影響を与えないために、Collection Interval は少なくとも 600 秒以上に設定してください。
- 作業表用 HiRDB ファイルシステム領域の構成を変更した場合、最新の構成を反映するためにエージェントを再起動してください。
- HiRDB/パラレルサーバの場合、Agent Collector サービスが稼働するホストのうち、システムマネージャが稼働するホスト上の HiRDB ファイルシステム領域の情報だけを収集できます。稼働していない非マネージャユニットの情報は収集できません。
- 稼働 OS が Windows で、IP アドレス引き継ぎなしのスタンバイ型系切り替え、または 1:1 スタンバイレス型系切り替えのユニットの場合、HiRDB 07-00 以降の場合だけユニットの情報を収集できます。
- jpcagtbdef.ini ファイルの指定が間違っている場合、間違って指定したホストまたはユニットに存在する作業表用 HiRDB ファイルシステム領域の情報は収集しません。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	3600	○
Collection Offset	480	○
Log	No	○
LOGIF	空白	○
Over 10 Sec Collection Time	Yes	×

ODBC キーフィールド

- PI_FSST_FS_NAME
- PI_FSST_SERVER_NAME

ライフタイム

HiRDB ファイルシステム領域の作成から削除まで。

レコードサイズ

- 固定部 : 681 バイト
- 可変部 : 1,147 バイト

フィールド

各項目の詳細については、マニュアル「HiRDB コマンドリファレンス」の `pdfstatfs -d -b` コマンドの実行結果の説明を参照してください。

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
Available Expand Count (AVAIL_EXPAND_COUNT)	HiRDB ファイルシステム領域の増分回数の上限値。	COPY	long	No	<code>pdfstatfs -d -b</code> の available expand count 値
Available File Size (AVAIL_FILE_SIZE)	HiRDB ファイルシステム領域で 1 つのファイルとして確保できる容量の最大値（単位はメガバイト）。	HILO	double	No	<code>pdfstatfs -d -b</code> の available file size 値
Current Expand Count (CURRENT_EXPAND_COUNT)	HiRDB ファイルシステム領域の増分回数合計値。	COPY	long	No	<code>pdfstatfs -d -b</code> の current expand count 値
Current File Count (CURRENT_FILE_COUNT)	作成済みの HiRDB ファイルの数。	COPY	long	No	<code>pdfstatfs -d -b</code> の current file count 値
Free Area Count (FREE_AREA_COUNT)	不連続な空き領域の総数。	COPY	long	No	<code>pdfstatfs -d -b</code> の free area count 値
HiRDB File System Area Name (FS_NAME)	HiRDB ファイルシステム領域名。	COPY	string(1024)	No	<ul style="list-style-type: none">・ シングルサーバ定義の pdwork オペランドの -v 指定値・ ディクショナリサーバ定義の pdwork オペランドの -v 指定値

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
HiRDB File System Area Name (FS_NAME)	HiRDB ファイルシステム領域名。	COPY	string(1024)	No	• バックエンドサーバ定義のpdworkオペランドの-v指定値
Interval (INTERVAL)	情報が収集される間隔（単位は秒）。	COPY	ulong	No	Agent Collector
Peak Capacity (PEAK_CAPACITY)	HiRDB ファイルシステム領域中に割り当てられた領域の最大値を 0 にリセットした時点から現在までの期間のユーザー最大使用量（単位はメガバイト）。※1	COPY	double	No	pdfstatfs -d -bのpeak capacity値
Peak Usage % (PERCENT_PEAK_USAGE)	HiRDB ファイルシステム領域で 1 つのファイルとして確保できる容量の最大値に対する現時点でのユーザー最大使用量の使用率（単位は%）。※1	COPY	float	No	100 * PEAK_CAPACITY / USER_AREA_CAPACITY
Record Time (RECORD_TIME)	レコードが作成された時刻。	COPY	time_t	No	Agent Collector
Record Type (INPUT_RECORD_TYPE)	レコードタイプ識別子。	COPY	char(8)	No	Agent Collector
Remaining File Count (REMAINING_FILE_COUNT)	作成できる HiRDB ファイルの数（最大作成可能ファイル数-作成済みファイル数）。	COPY	long	No	pdfstatfs -d -bのremain file count値
Remaining User Area (REMAIN_USER_AREA)	ユーザーに割り当てられた領域の中で、未使用領域（HiRDB ファイルとして割り当てられていない領域）の容量（単位はメガバイト）。	HILO	double	No	pdfstatfs -d -bのremain user area capacity値
Sector Size (SECTOR_SIZE)	HiRDB ファイルシステム領域のセクタ長。pdfmkfs コマンドの-s オプションで指定したセクタ長（省略時は 1,024）となる（単位はバイト）。	COPY	short	No	pdfstatfs -d -bのsector size値※2
Server Name (SERVER_NAME)	サーバ名。	COPY	string(9)	No	• pdls -d svr のOSVID値 • pdsys
User Area Capacity (USER_AREA_CAPACITY)	ユーザー領域の HiRDB ファイルシステム領域の容量（単位はメガバイト）。	COPY	double	No	pdfstatfs -d -bのuser area capacity値

6. レコード

注※1

該当する HiRDB ファイルシステム領域に対して、`pdfstatfs` コマンドを`-c` オプション指定で実行するまでは PEAK_CAPACITY 値がクリアされないため、このフィールドが減少することはありません。

注※2

HiRDB 06-00 以前のバージョンの HiRDB では 0 になります。

HiRDB Message (PD_MLOG)

機能

HiRDB Message (PD_MLOG) レコードには、HiRDB メッセージについての、ある一定の時間を単位としたパフォーマンスデータが格納されます。このレコードは複数インスタンスレコードです。メッセージごとに 1 行作成されます。

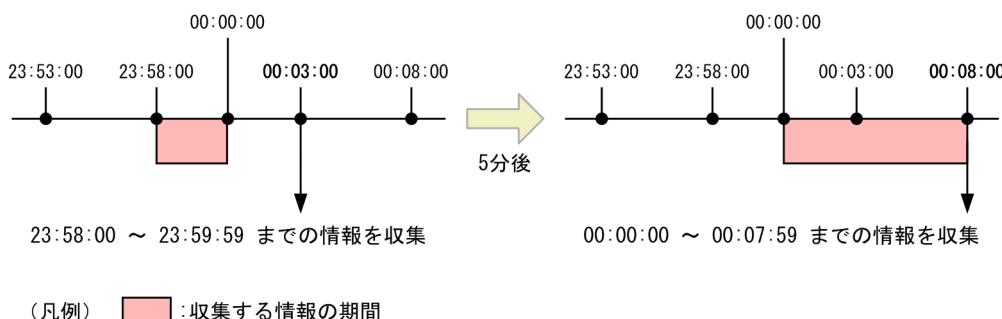
注意

- サーバまたはユニットの構成を変更した場合、最新の構成を反映するためにエージェントを再起動してください。
- このレコードは、HiRDB のサーバが稼働するすべてのホストで収集できます。
- Collection Interval は 39,600 秒 (11 時間) 以下にしてください。
- Collection Interval の値を設定するときは、設定した値の最大 2 倍の収集間隔でこのレコードを収集する場合があるため、次のことに注意してください。

1. このレコードを使用してアラームを設定する場合、HiRDB のメッセージが出力されてからそのメッセージが収集されるまで、このレコードの Collection Interval 値の最大 2 倍の時間が必要になる場合があります。

2. このレコードの Collection Interval 値の 2 倍以上の時間はメッセージが残るように、HiRDB のメッセージログファイルサイズを設定してください。

- このレコードに対しては、リアルタイムレポートを作成しないでください。リアルタイムレポートを作成した場合は何も表示されません。
- このレコードが午前 0 時 (00:00:00) をわたった期間の情報を収集しようとするときは、その収集契機では前日分の情報しか収集されません。ただし、その次の収集契機で、午前 0 時 (00:00:00) から現在時刻よりも 1 秒前までの情報は過不足なく収集します。Collection Interval=300 で、23:58:00 に収集契機が訪れた場合の収集内容を次の図に示します。



- HiRDB メッセージに含まれるプロセス ID が 6 桁以上の場合、そのメッセージは収集しません。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	300	<input type="radio"/>

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Offset	1320	○
Log	No	○
LOGIF	空白	○
Over 10 Sec Collection Time	No	×

ODBC キーフィールド

- PD_MLOG_MESSAGE_NO

ライフタイム

なし。

レコードサイズ

- 固定部：681 バイト
- 可変部：316 バイト

フィールド

各項目の詳細については、マニュアル「HiRDB コマンドリファレンス」の pdcat コマンドの実行結果の説明を参照してください。

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
HiRDB ID (HIRDB_ID)	HiRDB 識別子。	—	string(5)	No	pdcat -y 取得 開始年月日 -t 取得開始時分秒 -T 取得終了時 分秒
Host (HOST)	メッセージ出力要求元ホスト名（先頭 8 文字だけ）。	—	string(9)	No	pdcat -y 取得 開始年月日 -t 取得開始時分秒 -T 取得終了時 分秒
Inside Information (INSIDE_INFORMATION)	システムが使用する内部情報。	—	string(4)	No	pdcat -y 取得 開始年月日 -t 取得開始時分秒 -T 取得終了時 分秒
Interval (INTERVAL)	情報が収集される間隔（単位は秒）。	—	ulong	No	Agent Collector

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
Message Date (MSG_DATE)	年月日 (yyyy/mm/dd)。	—	string(11)	No	pdcat -y 取得 開始年月日 -t 取得開始時分秒 -T 取得終了時 分秒
Message ID (MESSAGE_ID)	メッセージ ID。	—	string(12)	No	pdcat -y 取得 開始年月日 -t 取得開始時分秒 -T 取得終了時 分秒
Message No (MESSAGE_NO)	メッセージ通番。	—	string(9)	No	pdcat -y 取得 開始年月日 -t 取得開始時分秒 -T 取得終了時 分秒
Message Text (MESSAGE_TEXT)	メッセージテキスト。	—	string(224)	No	pdcat -y 取得 開始年月日 -t 取得開始時分秒 -T 取得終了時 分秒
Message Time (MSG_TIME)	時分秒 (hh:mm:ss)。	—	string(9)	No	pdcat -y 取得 開始年月日 -t 取得開始時分秒 -T 取得終了時 分秒
Process Message No (PROCESS_MESSAGE_NO)	プロセス内メッセージ通番。	—	string(8)	No	pdcat -y 取得 開始年月日 -t 取得開始時分秒 -T 取得終了時 分秒
Record Time (RECORD_TIME)	レコードが作成されたグリニッジ標準時。	—	time_t	No	Agent Collector
Record Type (INPUT_RECORD_TYPE)	レコード・タイプ識別子。	—	char(8)	No	Agent Collector
Server Name (SERVER_NAME)	メッセージ出力要求元サーバ名。	—	string(9)	No	pdcat -y 取得 開始年月日 -t 取得開始時分秒 -T 取得終了時 分秒
Server Process ID (SERVER_PID)	プロセス ID。	—	string(11)	No	pdcat -y 取得 開始年月日 -t

6. レコード

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
Server Process ID (SERVER_PID)	プロセス ID。	—	string(11)	No	取得開始時分秒 -T 取得終了時分秒
Unit ID (UNIT_ID)	ユニット識別子。	—	string(5)	No	pdcat -y 取得開始年月日 -t 取得開始時分秒 -T 取得終了時分秒

HiRDB Product Detail (PD)

HiRDB Product Detail (PD) レコードは、予約レコードのため使用できません。

HiRDB Server Status (PD_SVST)

機能

HiRDB Server Status (PD_SVST) レコードには、サーバの稼働状態についての、ある時点での状態を示すパフォーマンスデータが格納されます。このレコードは、複数インスタンスレコードです。HiRDB ユニットおよびサーバごとに 1 行作成されます。

注意

- HiRDB の性能に影響を与えないために、Collection Interval は少なくとも 60 秒以上に設定してください。
- サーバまたはユニットの構成を変更した場合、最新の構成を反映するためにエージェントを再起動してください。
- Status フィールドの値で、STOP (SYS) および STOP (UNIT) は HiRDB の pdls -d svr コマンドが output しない情報を PFM - Agent for HiRDB が補完しています。
- 稼働 OS が Windows で、かつ IP アドレス引き継ぎなしのスタンバイ型系切り替えまたは 1:1 スタンバイレス型系切り替えのユニットの場合、07-00 より前のバージョンでは、Active Host (ACTIVE_HOST) と Active Unit ID (ACTIVE_UNIT_ID) は空白となります。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	3600	○
Collection Offset	120	○
Log	No	○
LOGIF	空白	○
Over 10 Sec Collection Time	No	×

ODBC キーフィールド

- PD_SVST_SERVER_NAME
- PD_SVST_UNIT_ID

ライフタイム

サーバの作成から削除まで。

レコードサイズ

- 固定部：681 バイト
- 可変部：105 バイト

フィールド

各項目の詳細については、マニュアル「HiRDB コマンドリファレンス」の `pdls -d svr` コマンドの実行結果の説明を参照してください。

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
Active Host (ACTIVE_HOST)	実行系のホスト名。	—	string(33)	No	<ul style="list-style-type: none"> <code>pdls -d svr</code> のHOSTNAME 値 <code>pdls -d ha</code> のSTATUSが ONLである INITIAL-HOST値またはRESERVED-HOST値 <code>pdsys</code>
Active Unit ID (ACTIVE_UNIT_ID)	実行系のユニット識別子。	—	string(5)	No	<code>pdls -d svr</code> のUNITID値
Host (HOST)	現用系のホスト名。	—	string(33)	No	<ul style="list-style-type: none"> <code>pdls -d svr</code> のHOSTNAME 値 <code>pdsys</code>
Interval (INTERVAL)	情報が収集される間隔（単位は秒）。	—	ulong	No	Agent Collector
Record Time (RECORD_TIME)	レコードが作成された時刻。	—	time_t	No	Agent Collector
Record Type (INPUT_RECORD_TYPE)	レコードタイプ識別子。	—	char(8)	No	Agent Collector
Server Name (SERVER_NAME)	サーバ名。 ユニットの状態を表す場合は***** が表示される。	—	string(9)	No	<ul style="list-style-type: none"> <code>pdls -d svr</code> のSVID値 <code>pdsys</code>
Start Time (START_TIME)	各サーバ/ユニットの起動時刻。 該当サーバまたはユニットが停止中の場合は 999999 が表示される。	—	string(9)	No	<code>pdls -d svr</code> のSTARTTIME値
Status (STATUS)	サーバ/ユニット状態。表示される値は次のとおり。 ACTIVE, STOP, STOP (N), STOP (F), STOP (A), START (I), SUSPEND, STARTING,	—	string(11)	No	<code>pdls -d svr</code> の STATUS値

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
Status (STATUS)	STOPPING, TRNPAUSE, STOP (SYS), STOP (UNIT) ※1	—	string(11)	No	pdls -d svrの STATUS値
Unit ID (UNIT_ID)	現用系のユニット識別子。	—	string(5)	No	<ul style="list-style-type: none"> • pdls -d svr のUNITID値 • pdsys

注※1

STOP (SYS) および STOP (UNIT) は pdls -d svr から状態が取得できない場合、次のように設定されます。

STOP (SYS) :

HiRDB システム全体が停止中の場合、HiRDB システム定義上にあるすべての HiRDB ユニットおよび HiRDB サーバについて設定されます。

STOP (UNIT) :

HiRDB システムは停止していないが HiRDB サーバの状態がまったく表示されない場合、HiRDB ユニットに HiRDB システム定義上にあるすべての HiRDB サーバについて設定されます。

HiRDB Statistical Information SYS (PI_SSYS)

機能

HiRDB Statistical Information SYS (PI_SSYS) レコードには、統計情報種別が sys である統計情報がサーバ単位に格納されます。このレコードは、複数インスタンスレコードです。サーバごとに 1 行作成されます。

このレコードは、HiRDB が出力する DAT 形式ファイルの次の情報を収集します。

- DAT 形式ファイルのレコード形式（システムの稼働に関する統計情報（その 1））内の「システム固有情報」を除くすべての情報
- DAT 形式ファイルのレコード形式（システムの稼働に関する統計情報（その 2））内のすべての情報
- DAT 形式ファイルのレコード形式（システムの稼働に関する統計情報（その 3））内の「ディクショナリ情報(DICTIONARY)」、「RPC 情報(RPC)」、「ディクショナリ情報(DICTIONARY)」の情報

詳細については、マニュアル「HiRDB コマンドリファレンス」の DAT 形式ファイルのレコード形式について説明している章を参照してください。

注意

- サーバまたはユニットの構成を変更した場合、最新の構成を反映するためにエージェントを再起動してください。
- このレコードに対してはリアルタイムレポートを作成しないでください。リアルタイムレポートを作成した場合には何も表示されません。
- Collection Interval は 25920000 秒（約 10 か月）以下にしてください。
- このレコードは HiRDB の sys 統計情報が収集されている期間だけ収集できます。収集開始、収集停止の契機はそれぞれ次のとおりです。

<HiRDB の統計情報の出力が開始される契機>

- HiRDB 稼働中に pdstbegin コマンドを実行した時。
- システム共通定義 pdsys で、pdstbegin オペランドを指定して HiRDB を開始した時。

<HiRDB の統計情報の出力が停止される契機>

- HiRDB 稼働中に pdstend コマンドを実行した時。
- HiRDB を停止した時。
- 稼働していないユニットの情報は収集できません。
- 稼働 OS が Windows で、IP アドレス引き継ぎなしのスタンバイ型系切り替え、または 1：1 スタンバイレス型系切り替えのユニットの場合、HiRDB 07-00 以降の場合だけユニットの情報を収集できます。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	3600	○
Collection Offset	180	○
Log	No	○
LOGIF	空白	○
Over 10 Sec Collection Time	Yes	×

ODBC キーフィールド

- PI_SSYS_SERVER_NAME

ライフタイム

統計情報が出力開始されてから出力停止されるまで。

レコードサイズ

- 固定部：681 バイト
- 可変部：5198 バイト

フィールド

`pdstedit` コマンドは統計解析ユーティリティを示し、括弧の中は編集項目を示します。

各項目の詳細については、マニュアル「HiRDB コマンドリファレンス」の `pdstedit` コマンドの実行結果の説明を参照してください。

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
Assigned Ports Avg (ASSIGNED_PORTS_AVG) ※11	予備領域。	AVG	double	No	常に0
Assigned Ports Freq (ASSIGNED_PORTS_FREQ) ※12	予備領域。	HILO	double	No	常に0
Assigned Ports Max (ASSIGNED_PORTS_MAX) ※9	予備領域。	HI	double	No	常に0
Assigned Ports Min (ASSIGNED_PORTS_MIN) ※10	予備領域。	LO	double	No	常に0

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
Cached REGISTRY-DEF Avg (CACHED_REGISTRY_DEF_AVG) ※11	レジストリ情報用バッファ中のレジストリ情報数の平均値。※7	AVG	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARYの CACHED REGISTRY-DEFの AVG値
Cached REGISTRY-DEF Freq (CACHED_REGISTRY_DEF_FREQ) ※12	レジストリ情報用バッファ中のレジストリ情報数。※7	HILO	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARYの CACHED REGISTRY-DEFの FREQ値
Cached REGISTRY-DEF Max (CACHED_REGISTRY_DEF_MAX) ※9	レジストリ情報用バッファ中のレジストリ情報数の最大値。※7	HI	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARYの CACHED REGISTRY-DEFの MAX値
Cached REGISTRY-DEF Min (CACHED_REGISTRY_DEF_MIN) ※10	レジストリ情報用バッファ中のレジストリ情報数の最小値。※7	LO	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARYの CACHED REGISTRY-DEFの MIN値
Cached RTN-DEF Avg (CACHED_RTN_DEF_AVG) ※11	ルーチン定義情報用バッファ中のルーチン定義情報数の平均値。※5	AVG	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARYの CACHED RTN-DEF のAVG値
Cached RTN-DEF Freq (CACHED_RTN_DEF_FREQ) ※12	ルーチン定義情報用バッファ中のルーチン定義情報数。※5	HILO	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARYの CACHED RTN-DEF のFREQ値
Cached RTN-DEF Max (CACHED_RTN_DEF_MAX) ※9	ルーチン定義情報用バッファ中のルーチン定義情報数の最大値。※5	HI	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARYの CACHED RTN-DEF のMAX値
Cached RTN-DEF Min (CACHED_RTN_DEF_MIN) ※10	ルーチン定義情報用バッファ中のルーチン定義情報数の最小値。※5	LO	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARYの CACHED RTN-DEF のMIN値

6. レコード

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
Cached SQLOBJ Avg (CACHED_SQLOBJ_AVG) ^{*11}	SQL オブジェクト用バッファ中の SQL オブジェクト数の平均値。	AVG	double	No	pdstedit (sys) のFES-BES-DIC (SDS) INFORMATION の CACHED_SQLOBJ の AVG 値
Cached SQLOBJ Freq (CACHED_SQLOBJ_FREQ) ^{*12}	SQL オブジェクト用バッファ中の SQL オブジェクト数。	HILO	double	No	pdstedit (sys) のFES-BES-DIC (SDS) INFORMATION の CACHED_SQLOBJ の FREQ 値
Cached SQLOBJ Max (CACHED_SQLOBJ_MAX) ^{*9}	SQL オブジェクト用バッファ中の SQL オブジェクト数の最大値。	HI	double	No	pdstedit (sys) のFES-BES-DIC (SDS) INFORMATION の CACHED_SQLOBJ の MAX 値
Cached SQLOBJ Min (CACHED_SQLOBJ_MIN) ^{*10}	SQL オブジェクト用バッファ中の SQL オブジェクト数の最小値。	LO	double	No	pdstedit (sys) のFES-BES-DIC (SDS) INFORMATION の CACHED_SQLOBJ の MIN 値
Cached SQLOBJ Size Avg (CACHED_SQLOBJ_SIZE_AVG) ^{*11}	SQL オブジェクト用バッファ中の SQL オブジェクトの合計長の平均値 (単位はキロバイト)。	AVG	double	No	pdstedit (sys) のFES-BES-DIC (SDS) INFORMATION の CACHED_SQLOBJ SIZE の AVG 値
Cached SQLOBJ Size Freq (CACHED_SQLOBJ_SIZE_FREQ) ^{*12}	SQL オブジェクト用バッファ中の SQL オブジェクト数。	HILO	double	No	pdstedit (sys) のFES-BES-DIC (SDS) INFORMATION の CACHED_SQLOBJ SIZE の FREQ 値
Cached SQLOBJ Size Max (CACHED_SQLOBJ_SIZE_MAX) ^{*9}	SQL オブジェクト用バッファ中の SQL オブジェクトの合計長の最大値 (単位はキロバイト)。	HI	double	No	pdstedit (sys) のFES-BES-DIC (SDS) INFORMATION の CACHED_SQLOBJ SIZE の MAX 値

6. レコード

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
Cached SQLOBJ Size Min (CACHED_SQLOBJ_SIZE_MIN) ※10	SQL オブジェクト用バッファ中の SQL オブジェクトの合計長の最小値(単位はキロバイト)。	LO	double	No	pdstedit (sys) のFES-BES-DIC (SDS) INFORMATION の CACHED SQLOBJ SIZE のMIN値
Cached STROBJ Avg (CACHED_STROBJ_AVG) ※11	SQL オブジェクト用バッファ中のストアドプロシージャのオブジェクト数の平均値。	AVG	double	No	pdstedit (sys) のFES-BES-DIC (SDS) INFORMATION の CACHED STROBJ のAVG値
Cached STROBJ Freq (CACHED_STROBJ_REQ) ※12	SQL オブジェクト用バッファ中のストアドプロシージャのオブジェクト数。	HILO	double	No	pdstedit (sys) のFES-BES-DIC (SDS) INFORMATION の CACHED STROBJ のFREQ値
Cached STROBJ Max (CACHED_STROBJ_MAX) ※9	SQL オブジェクト用バッファ中のストアドプロシージャのオブジェクト数の最大値。	HI	double	No	pdstedit (sys) のFES-BES-DIC (SDS) INFORMATION の CACHED STROBJ のMAX値
Cached STROBJ Min (CACHED_STROBJ_MIN) ※10	SQL オブジェクト用バッファ中のストアドプロシージャのオブジェクト数の最小値。	LO	double	No	pdstedit (sys) のFES-BES-DIC (SDS) INFORMATION の CACHED STROBJ のMIN値
Cached STROBJ Size Avg (CACHED_STROBJ_SIZE_AVG) ※11	SQL オブジェクト用バッファ中のストアドプロシージャのオブジェクトの合計長の平均値(単位はキロバイト)。	AVG	double	No	pdstedit (sys) のFES-BES-DIC (SDS) INFORMATION の CACHED STROBJ SIZE のAVG値
Cached STROBJ Size Freq (CACHED_STROBJ_SIZE_FREQ) ※12	SQL オブジェクト用バッファ中のストアドプロシージャのオブジェクト数。	HILO	double	No	pdstedit (sys) のFES-BES-DIC (SDS) INFORMATION の CACHED STROBJ SIZE のFREQ値
Cached STROBJ Size Max	SQL オブジェクト用バッファ中のストアドプロシージャのオブジェクトの	HI	double	No	pdstedit (sys) のFES-

6. レコード

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
(CACHED_STROBJ_SIZE_MAX) ※9	合計長の最大値（単位はキロバイト）。	HI	double	No	BES-DIC (SDS) INFORMATIONの CACHED STROBJ SIZEのMAX値
Cached STROBJ Size Min (CACHED_STROBJ_SIZE_MIN) ※10	SQL オブジェクト用バッファ中のストアドプロシージャのオブジェクトの合計長の最小値（単位はキロバイト）。	LO	double	No	pdstedit (sys) の FES-BES-DIC (SDS) INFORMATIONの CACHED STROBJ SIZEのMIN値
Cached TYPE-DEF_Avg (CACHED_TYPE_DEF_AVG) ※11	ユーザー定義型情報用バッファ中の型定義情報数の平均値。※4	AVG	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARYの CACHED TYPE-DEFのAVG値
Cached TYPE-DEF_Freq (CACHED_TYPE_DEF_FREQ) ※12	ユーザー定義型情報用バッファ中の型定義情報数。※4	HILO	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARYの CACHED TYPE-DEFのFREQ値
Cached TYPE-DEF_Max (CACHED_TYPE_DEF_MAX) ※9	ユーザー定義型情報用バッファ中の型定義情報数の最大値。※4	HI	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARYの CACHED TYPE-DEFのMAX値
Cached TYPE-DEF_Min (CACHED_TYPE_DEF_MIN) ※10	ユーザー定義型情報用バッファ中の型定義情報数の最小値。※4	LO	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARYの CACHED TYPE-DEFのMIN値
Commit (COMMIT) ※12	コミット回数。	HILO	double	No	pdstedit (sys) の TRANSACTIONの COMMITのFREQ値
Commit Rate (COMMIT_RATE)	コミット率（単位は%）。	HILO	float	No	100*COMMIT/TRANS※13
Deadlock (DEADLOCK) ※12	デッドロック件数。	HILO	double	No	pdstedit (sys) の LOCK のDEADLOCKの FREQ値
Dic Access Cache Hit	表アクセス権限情報用バッファヒット回数。	HILO	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARYの

6. レコード

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
(DIC_ACCESS_CAC HE_HIT) ※12	表アクセス権限情報用バッファヒット回数。	HILO	double	No	CACHE HIT(ACCESS)の FREQ値
Dic Access Priv Check (DIC_ACCESS_PRIV_ CHECK) ※12	表アクセス権限情報取得回数。	HILO	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARYの ACCESS PRIV CHECKのFREQ値
Dic Cache Miss View Size Avg (DIC_CACHE_MISS_ VIEW_SIZE_AVG) ※ 11	バッファミスとなったビュー解析情報長の平均値 (単位はバイト)。	AVG	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARYの CACHE MISS VIEW SIZEのAVG 値
Dic Cache Miss View Size Max (DIC_CACHE_MISS_ VIEW_SIZE_MAX) ※ 9	バッファミスとなったビュー解析情報長の最大値 (単位はバイト)。	HI	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARYの CACHE MISS VIEW SIZEのMAX 値
Dic Cache Miss View Size Min (DIC_CACHE_MISS_ VIEW_SIZE_MIN) ※ 10	バッファミスとなったビュー解析情報長の最小値 (単位はバイト)。	LO	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARYの CACHE MISS VIEW SIZEのMIN 値
Dic Cache Miss View Size_Freq (DIC_CACHE_MISS_ VIEW_SIZE_FREQ) ※12	ビュー解析情報バッファミス回数。	HILO	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARYの CACHE MISS VIEW SIZEの FREQ値
Dic Cached TBL-DEF Size Avg (DIC_CACHED_TBL_ DEF_SIZE_AVG) ※11	表定義情報用バッファ使用領域長の 平均値 (単位はバイト)。※2	AVG	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARYの CACHED TBL-DEF SIZEのAVG値
Dic Cached TBL-DEF Size Freq (DIC_CACHED_TBL_ DEF_SIZE_FREQ) ※ 12	表定義情報用バッファ上の表定義情 報件数。※2	HILO	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARYの CACHED TBL-DEF SIZEのFREQ値

6. レコード

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
Dic Cached TBL-DEF Size Max (DIC_CACHED_TBL_DEF_SIZE_MAX) ※9	表定義情報用バッファ使用領域長の最大値（単位はバイト）。※2	HI	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARYの CACHED TBL-DEF SIZEのMAX値
Dic Cached TBL-DEF Size Min (DIC_CACHED_TBL_DEF_SIZE_MIN) ※10	表定義情報用バッファ使用領域長の最小値（単位はバイト）。※2	LO	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARYの CACHED TBL-DEF SIZEのMIN値
Dic Cached TBL-DEF Avg (DIC_CACHED_TBL_DEF_AVG) ※11	表定義情報用バッファ中の定義情報数の平均値。※2	AVG	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARYの CACHED TBL-DEF のAVG値
Dic Cached TBL-DEF Freq (DIC_CACHED_TBL_DEF_FREQ) ※12	表定義情報用バッファ中の定義情報数。※2	HILO	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARYの CACHED TBL-DEF のFREQ値
Dic Cached TBL-DEF Max (DIC_CACHED_TBL_DEF_MAX) ※9	表定義情報用バッファ中の定義情報数の最大値。※2	HI	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARYの CACHED TBL-DEF のMAX値
Dic Cached TBL-DEF Min (DIC_CACHED_TBL_DEF_MIN) ※10	表定義情報用バッファ中の定義情報数の最小値。※2	LO	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARYの CACHED TBL-DEF のMIN値
Dic CON/DBA Cache Hit (DIC_CON_DBIA_CACHE_HIT) ※12	ユーザー権限情報用バッファヒット回数。※3	HILO	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARYの CON/DBA CACHE HITのFREQ値
Dic CON/DBA Cached User Avg (DIC_CON_DBIA_CACHED_USER_AVG) ※11	ユーザー権限情報用バッファ使用ユーザー数の平均値。※3	AVG	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARYの CON/DBA CACHED USERのAVG値
Dic CON/DBA Cached User Freq	ユーザー権限情報用バッファ使用ユーザー数。※3	HILO	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARYの

6. レコード

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
(DIC_CON_DBA_CACHED_USER_FREQ) ※12	ユーザー権限情報用バッファ使用ユーザー数。※3	HILO	double	No	CON/DBA CACHED USERのFREQ値
Dic CON/DBA Cached User Max (DIC_CON_DBA_CACHED_USER_MAX) ※9	ユーザー権限情報用バッファ使用ユーザー数の最大値。※3	HI	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARYの CON/DBA CACHED USERのMAX値
Dic CON/DBA Cached User Min (DIC_CON_DBA_CACHED_USER_MIN) ※10	ユーザー権限情報用バッファ使用ユーザー数の最小値。※3	LO	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARYの CON/DBA CACHED USERのMIN値
Dic CON/DBA Def Get Req (DIC_CON_DBA_DEF_GET_REQ) ※12	ユーザー権限情報取得要求数。※3	HILO	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARYの CON/DBA DEF GET REQのFREQ値
Dic Table Cache Hit (DIC_TABLE_CACHE_HIT) ※12	表定義情報用バッファヒット回数。	HILO	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARYの TABLE CACHE HITのFREQ値
Dic TBL-DEF Get Req (DIC_TBL_DEF_GET_REQ) ※12	表定義情報取得要求回数。※2	HILO	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARYの TBL-DEF GET REQのFREQ値
Dic Trans (DIC_TRANS) ※12	ディクショナリサーバとの通信回数。	HILO	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARYの TRANSのFREQ値
Dic Trans Data Len Avg (DIC_TRANS_DATA_LEN_AVG) ※11	ディクショナリサーバとの通信長の平均値（単位はバイト）。	AVG	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARYの DIC TRANS DATA LENのAVG値
Dic Trans Data Len Freq (DIC_TRANS_DATA_LEN_FREQ) ※12	表定義情報取得の要求件数。	HILO	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARYの DIC TRANS DATA LENのFREQ値

6. レコード

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
Dic Trans Data Len Max (DIC_TRANS_DATA_LEN_MAX) ※9	ディクショナリサーバとの通信長の最大値（単位はバイト）。	HI	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARYの DIC TRANS DATA LENのMAX値
Dic Trans Data Len Min (DIC_TRANS_DATA_LEN_MIN) ※10	ディクショナリサーバとの通信長の最小値（単位はバイト）。	LO	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARYの DIC TRANS DATA LENのMIN値
Dic Use TBL-DEF Size Avg (DIC_USE_TBL_DEF_SIZE_AVG) ※11	表定義情報用バッファに取得した 1 表定義情報当たりの表定義情報用バッファ使用領域長の平均値（単位はバイト）。※2	AVG	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARYの USE TBL-DEF SIZEのAVG値
Dic Use TBL-DEF Size Freq (DIC_USE_TBL_DEF_SIZE_FREQ) ※12	表定義情報用バッファに取得された表定義情報件数。※2	HILO	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARYの USE TBL-DEF SIZEのFREQ値
Dic Use TBL-DEF Size Max (DIC_USE_TBL_DEF_SIZE_MAX) ※9	表定義情報用バッファに取得した 1 表定義情報当たりの表定義情報用バッファ使用領域長の最大値（単位はバイト）。※2	HI	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARYの USE TBL-DEF SIZEのMAX値
Dic Use TBL-DEF Size Min (DIC_USE_TBL_DEF_SIZE_MIN) ※10	表定義情報用バッファに取得した 1 表定義情報当たりの表定義情報用バッファ使用領域長の最小値（単位はバイト）。※2	LO	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARYの USE TBL-DEF SIZEのMIN値
Dic Used View Size Avg (DIC_USED_VIEW_SIZE_AVG) ※11	ビュー解析情報用バッファに取得した 1 ビュー当たりのビュー解析情報用バッファ使用領域長の平均値（単位はバイト）。	AVG	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARYの USED VIEW SIZE のAVG値
Dic Used View Size Freq (DIC_USED_VIEW_SIZE_FREQ) ※12	ビュー解析情報用バッファ上に取得したビュー解析情報件数。	HILO	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARYの USED VIEW SIZE のFREQ値
Dic Used View Size Max	ビュー解析情報用バッファに取得した 1 ビュー当たりのビュー解析情報	HI	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARYの

6. レコード

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
(DIC_USED_VIEW_SIZE_MAX) ※9	用バッファ使用領域長の最大値（単位はバイト）。	HI	double	No	USED VIEW SIZE のMAX値
Dic Used View Size Min (DIC_USED_VIEW_SIZE_MIN) ※10	ビュー解析情報用バッファに取得した1ビュー当たりのビュー解析情報用バッファ使用領域長の最小値（単位はバイト）。	LO	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARYの USED VIEW SIZE のMIN値
Dic View Cache Size Avg (DIC_VIEW_CACHE_SIZE_AVG) ※11	使用したビュー解析情報用バッファ長の平均値（単位はバイト）。	AVG	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARYの VIEW CACHE SIZEのAVG値
Dic View Cache Size Freq (DIC_VIEW_CACHE_SIZE_FREQ) ※12	ビュー解析情報用バッファ上にあったビュー解析情報件数。	HILO	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARYの VIEW CACHE SIZEのFREQ値
Dic View Cache Size Max (DIC_VIEW_CACHE_SIZE_MAX) ※9	使用したビュー解析情報用バッファ長の最大値（単位はバイト）。	HI	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARYの VIEW CACHE SIZEのMAX値
Dic View Cache Size Min (DIC_VIEW_CACHE_SIZE_MIN) ※10	使用したビュー解析情報用バッファ長の最小値（単位はバイト）。	LO	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARYの VIEW CACHE SIZEのMIN値
Dic View Cached Def (DIC_VIEW_CACHE_D_DEF) ※12	ビュー解析情報用バッファ中の解析情報数。	HILO	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARYの VIEW CACHED DEFのFREQ値
Dic View Def Cache Hit (DIC_VIEW_DEF_CACHE_HIT) ※12	ビュー解析情報用バッファヒット回数。	HILO	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARYの VIEW DEF CACHE HITのFREQ値
Dic View Def Get Req (DIC_VIEW_DEF_GET_REQ) ※12	ビュー解析情報取得要求回数。	HILO	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARYの VIEW DEF GET REQのFREQ値

6. レコード

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
Directory User Check Time Avg (DIRECTORY_USER_CHECK_TIME_AVG) ※11	ディレクトリ登録のユーザー認証時間の平均値（単位はマイクロ秒）。	AVG	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARY の DIRECTORY USER CHECK TIME の AVG 値※8
Directory User Check Time Freq (DIRECTORY_USER_CHECK_TIME_FREQ) ※12	ディレクトリ登録のユーザー認証要求回数。	HILO	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARY の DIRECTORY USER CHECK TIME の FREQ 値※8
Directory User Check Time Max (DIRECTORY_USER_CHECK_TIME_MAX) ※9	ディレクトリ登録のユーザー認証時間の最大値（単位はマイクロ秒）。	HI	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARY の DIRECTORY USER CHECK TIME の MAX 値※8
Directory User Check Time Min (DIRECTORY_USER_CHECK_TIME_MIN) ※10	ディレクトリ登録のユーザー認証時間の最小値（単位はマイクロ秒）。	LO	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARY の DIRECTORY USER CHECK TIME の MIN 値※8
Dyanamic Size Avg (DYNAMIC_SIZE_AVG) ※11	予備領域。	AVG	double	No	常に0
Exec Time from Other Unit Avg (EXEC_TIME_FROM_OTHER_UNIT_AVG) ※11	他ユニットサーバからの1サービス当たりの実行時間の平均値（単位は100マイクロ秒）。	AVG	double	No	pdstedit (sys) のRPCの EXEC TIME FROM OTHER UNIT の AVG 値
Exec Time from Other Unit Freq (EXEC_TIME_FROM_OTHER_UNIT_FREQ) ※12	他ユニットサーバからの1サービス当たりの実行回数。	HILO	double	No	pdstedit (sys) のRPCの EXEC TIME FROM OTHER UNIT の FREQ 値
Exec Time from Other Unit Max (EXEC_TIME_FROM_OTHER_UNIT_MAX) ※9	他ユニットサーバからの1サービス当たりの実行時間の最大値（単位は100マイクロ秒）。	HI	double	No	pdstedit (sys) のRPCの EXEC TIME FROM OTHER UNIT の MAX 値

6. レコード

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
Exec Time from Other Unit Min (EXEC_TIME_FROM_OTHER_UNIT_MIN) ※10	他ユニットサーバからの 1 サービス当たりの実行時間の最小値（単位は 100 マイクロ秒）。	LO	double	No	pdstedit (sys) のRPCの EXEC TIME FROM OTHER UNITの MIN値
Exec Time on Own Unit Avg (EXEC_TIME_ON_OWN_UNIT_AVG) ※11	自ユニットサーバからの 1 サービス当たりの実行時間の平均値（単位は 100 マイクロ秒）。	AVG	double	No	pdstedit (sys) のRPCの EXEC TIME ON OWN UNITの AVG 値
Exec Time on Own Unit Freq (EXEC_TIME_ON_OWN_UNIT_FREQ) ※12	自ユニットサーバからの 1 サービス当たりの実行回数。	HILO	double	No	pdstedit (sys) のRPCの EXEC TIME ON OWN UNITの FREQ 値
Exec Time on Own Unit Max (EXEC_TIME_ON_OWN_UNIT_MAX) ※9	自ユニットサーバからの 1 サービス当たりの実行時間の最大値（単位は 100 マイクロ秒）。	HI	double	No	pdstedit (sys) のRPCの EXEC TIME ON OWN UNITの MAX 値
Exec Time on Own Unit Min (EXEC_TIME_ON_OWN_UNIT_MIN) ※10	自ユニットサーバからの 1 サービス当たりの実行時間の最小値（単位は 100 マイクロ秒）。	LO	double	No	pdstedit (sys) のRPCの EXEC TIME ON OWN UNITの MIN 値
Group Check Time Avg (GROUP_CHECK_TIME_AVG) ※11	グループ判定実行時間の平均値（単位はマイクロ秒）。	AVG	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARYの GROUP CHECK TIMEの AVG 値※8
Group Check Time Freq (GROUP_CHECK_TIME_FREQ) ※12	グループ判定実行要求回数。	HILO	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARYの GROUP CHECK TIMEの FREQ 値※8
Group Check Time Max (GROUP_CHECK_TIME_MAX) ※9	グループ判定実行時間の最大値（単位はマイクロ秒）。	HI	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARYの GROUP CHECK TIMEの MAX 値※8
Group Check Time Min	グループ判定実行時間の最小値（単位はマイクロ秒）。	LO	double	No	pdstedit (sys) の

6. レコード

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
(GROUP_CHECK_TIME_MIN) ※10	グループ判定実行時間の最小値（単位はマイクロ秒）。	LO	double	No	DICTIONARYの GROUP CHECK TIMEのMIN値※8
Host (HOST)	ホスト名。	COPY	string(33)	No	pdstedit (sys) のHOST 値
Interval (INTERVAL)	情報が収集される間隔（単位は秒）。	COPY	ulong	No	Agent Collector
Lock Queue Len Avg (LOCK_QUEUE_LEN_AVG) ※11	排他待ちになったユーザー数の平均値。	AVG	double	No	pdstedit (sys) のLOCK のQUEUE LENの AVG値
Lock Queue Len Freq (LOCK_QUEUE_LEN_FREQ) ※12	排他待ちになったユーザー数。	HILO	double	No	pdstedit (sys) のLOCK のQUEUE LENの FREQ値
Lock Queue Len Max (LOCK_QUEUE_LEN_MAX) ※9	排他待ちになったユーザー数の最大値。	HI	double	No	pdstedit (sys) のLOCK のQUEUE LENの MAX値
Lock Queue Len Min (LOCK_QUEUE_LEN_MIN) ※10	排他待ちになったユーザー数の最小値。	LO	double	No	pdstedit (sys) のLOCK のQUEUE LENの MIN値
Lock Wait Time Avg (LOCK_WAIT_TIME_AVG) ※11	排他待ち時間の平均値（単位はミリ秒）。	AVG	double	No	pdstedit (sys) のLOCK のWAIT TIMEの AVG値
Lock Wait Time Freq (LOCK_WAIT_TIME_FREQ) ※12	排他取得待ち発生件数。	HILO	double	No	pdstedit (sys) のLOCK のWAIT TIMEの FREQ値
Lock Wait Time Max (LOCK_WAIT_TIME_MAX) ※9	排他待ち時間の最大値（単位はミリ秒）。	HI	double	No	pdstedit (sys) のLOCK のWAIT TIMEの MAX値
Lock Wait Time Min (LOCK_WAIT_TIME_MIN) ※10	排他待ち時間の最小値（単位はミリ秒）。	LO	double	No	pdstedit (sys) のLOCK のWAIT TIMEの MIN値

6. レコード

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
Lock Wait Time Sum (LOCK_WAIT_TIME_SUM) ^{*12}	排他待ち時間の合計値（単位はミリ秒）。	HILO	double	No	LOCK_WAIT_TIME_AVG * LOCK_WAIT_TIME_FREQ
Log Buffer Full (LOG_BUFFER_FULL) ^{*12}	ログバッファ満杯回数。	HILO	double	No	pdstedit (sys) のLOGのBUFFER FULLのFREQ値
Log File Swap Time Avg (LOG_FILE_SWAP_TIME_AVG) ^{*11}	ログファイルスワップ時間の平均値（単位はミリ秒）。	AVG	double	No	pdstedit (sys) のLOGのLOG FILE SWAP TIMEのAVG値
Log File Swap Time Freq (LOG_FILE_SWAP_TIME_FREQ) ^{*12}	ログファイルスワップ回数。	HILO	double	No	pdstedit (sys) のLOGのLOG FILE SWAP TIMEのFREQ値
Log File Swap Time Max (LOG_FILE_SWAP_TIME_MAX) ^{*9}	ログファイルスワップ時間の最大値（単位はミリ秒）。	HI	double	No	pdstedit (sys) のLOGのLOG FILE SWAP TIMEのMAX値
Log File Swap Time Min (LOG_FILE_SWAP_TIME_MIN) ^{*10}	ログファイルスワップ時間の最小値（単位はミリ秒）。	LO	double	No	pdstedit (sys) のLOGのLOG FILE SWAP TIMEのMIN値
Log Input Data Avg (LOG_INPUT_DATA_AVG) ^{*11}	ロールバック時のログ入力データ長の平均値（単位はバイト）。	AVG	double	No	pdstedit (sys) のLOGのLOG INPUT DATAのAVG値
Log Input Data Freq (LOG_INPUT_DATA_FREQ) ^{*12}	ロールバック時のログ入力件数。	HILO	double	No	pdstedit (sys) のLOGのLOG INPUT DATAのFREQ値
Log Input Data Max (LOG_INPUT_DATA_MAX) ^{*9}	ロールバック時のログ入力データ長の最大値（単位はバイト）。	HI	double	No	pdstedit (sys) のLOGのLOG INPUT DATAのMAX値
Log Input Data Min (LOG_INPUT_DATA_MIN) ^{*10}	ロールバック時のログ入力データ長の最小値（単位はバイト）。	LO	double	No	pdstedit (sys) のLOGのLOG INPUT DATAのMIN値

6. レコード

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
Log Not Bus Len Avg (LOG_NOT_BUS_LEN_AVG) ※11	非バス部分のログブロック長の平均値（単位はバイト）。	AVG	double	No	pdstedit (sys) のLOGのNOT BUS LENのAVG値
Log Not Bus Len Freq (LOG_NOT_BUS_LEN_FREQ) ※12	非バス部分のログ出力回数。	HILO	double	No	pdstedit (sys) のLOGのNOT BUS LENのFREQ値
Log Not Bus Len Max (LOG_NOT_BUS_LEN_MAX) ※9	非バス部分のログブロック長の最大値（単位はバイト）。	HI	double	No	pdstedit (sys) のLOGのNOT BUS LENのMAX値
Log Not Bus Len Min (LOG_NOT_BUS_LEN_MIN) ※10	非バス部分のログブロック長の最小値（単位はバイト）。	LO	double	No	pdstedit (sys) のLOGのNOT BUS LENのMIN値
Log Output Block Len Avg (LOG_OUTPUT_BLOCK_LEN_AVG) ※11	ログ出力ブロック長の平均値（単位はバイト）。	AVG	double	No	pdstedit (sys) のLOGのOUTPUT BLOCK LENのAVG値
Log Output Block Len Freq (LOG_OUTPUT_BLOCK_LEN_FREQ) ※12	ログブロック出力回数。	HILO	double	No	pdstedit (sys) のLOGのOUTPUT BLOCK LENのFREQ値
Log Output Block Len Max (LOG_OUTPUT_BLOCK_LEN_MAX) ※9	ログ出力ブロック長の最大値（単位はバイト）。	HI	double	No	pdstedit (sys) のLOGのOUTPUT BLOCK LENのMAX値
Log Output Block Len Min (LOG_OUTPUT_BLOCK_LEN_MIN) ※10	ログ出力ブロック長の最小値（単位はバイト）。	LO	double	No	pdstedit (sys) のLOGのOUTPUT BLOCK LENのMIN値
Log Read Error (LOG_READ_ERROR) ※12	ログ読み出しエラー回数。	HILO	double	No	pdstedit (sys) のLOGのREAD ERRORのFREQ値
Log Read from File (LOG_READ_FROM_FILE) ※12	ロールバック時のログ読み出し回数。	HILO	double	No	pdstedit (sys) のLOGのREAD FROM FILE のFREQ値

6. レコード

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
Log Wait Buffer for IO Avg (LOG_WAIT_BUFFER_FOR_IO_AVG) ※11	ログ入出力待ちバッファ面数の平均値。	AVG	double	No	pdstedit (sys) のLOGの WAIT BUFFER FOR IOのAVG値
Log Wait Buffer for IO Freq (LOG_WAIT_BUFFER_FOR_IO_FREQ) ※12	ログ入出力完了待ち件数。	HILO	double	No	pdstedit (sys) のLOGの WAIT BUFFER FOR IOのFREQ値
Log Wait Buffer for IO Max (LOG_WAIT_BUFFER_FOR_IO_MAX) ※9	ログ入出力待ちバッファ面数の最大値。	HI	double	No	pdstedit (sys) のLOGの WAIT BUFFER FOR IOのMAX値
Log Wait Buffer for IO Min (LOG_WAIT_BUFFER_FOR_IO_MIN) ※10	ログ入出力待ちバッファ面数の最小値。	LO	double	No	pdstedit (sys) のLOGの WAIT BUFFER FOR IOのMIN値
Log Wait Thread (LOG_WAIT_THREAD) ※12	カレントバッファなしによるログ出力待ち回数。	HILO	double	No	pdstedit (sys) のLOGの WAIT THREADの FREQ値
Log Write Error (LOG_WRITE_ERROR) ※12	ログ書き込みエラー回数。	HILO	double	No	pdstedit (sys) のLOGの WRITE ERRORの FREQ値
Log Write to File (LOG_WRITE_TO_FILE) ※12	システムログファイルへの書き込み回数。	HILO	double	No	pdstedit (sys) のLOGの WRITE TO FILE のFREQ値
Message Len Avg (MESSAGE_LEN_AVG) ※11	スケジュールメッセージ長の平均値(単位はバイト)。	AVG	double	No	pdstedit (sys) の SCHEDULEの MESSAGE LENの AVG値
Message Len Freq (MESSAGE_LEN_FREQ) ※12	スケジュールメッセージの発生件数。	HILO	double	No	pdstedit (sys) の SCHEDULEの MESSAGE LENの FREQ値
Message Len Max	スケジュールメッセージ長の最大値(単位はバイト)。	HI	double	No	pdstedit (sys) の

6. レコード

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
(MESSAGE_LEN_MA_X) ※9	スケジュールメッセージ長の最大値(単位はバイト)。	HI	double	No	SCHEDULEのMESSAGE LENのMAX値
Message Len Min (MESSAGE_LEN_MI_N) ※10	スケジュールメッセージ長の最小値(単位はバイト)。	LO	double	No	pdstedit(sys) のSCHEDULEのMESSAGE LENのMIN値
PLG-RTN Cache Hit (PLG_RTN_CACHE_HIT) ※12	プラグイン提供関数のルーチン定義情報用バッファヒット回数。※6	HILO	double	No	pdstedit(sys) のDICTIONARYのPLG-RTN CACHE HITのFREQ値
PLG-RTN Get Req (PLG_RTN_GET_REQ) ※12	プラグイン提供関数のルーチン定義取得要求回数。※6	HILO	double	No	pdstedit(sys) のDICTIONARYのPLG-RTN GET REQのFREQ値
Process Count Avg (PROCESS_COUNT_AVG) ※11	予備領域。	AVG	double	No	常に0
Process Count Max (PROCESS_COUNT_MAX) ※9	予備領域。	HI	double	No	常に0
Process Count Min (PROCESS_COUNT_MIN) ※10	予備領域。	LO	double	No	常に0
Process Request Over (PROCESS_REQUEST_OVER) ※12	最大起動プロセス数を超えたサービス要求数。	HILO	double	No	pdstedit(sys) のPROCESSのREQUEST OVERのFREQ値
Process Service Count Avg (PROCESS_SERVICE_COUNT_AVG) ※11	サービス実行中のサーバプロセス数の平均値。	AVG	double	No	pdstedit(sys) のPROCESSのSERVICE COUNTのAVG値
Process Service Count Max (PROCESS_SERVICE_COUNT_MAX) ※9	サービス実行中のサーバプロセス数の最大値。	HI	double	No	pdstedit(sys) のPROCESSのSERVICE COUNTのMAX値

6. レコード

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
Process Service Count Min (PROCESS_SERVICE_COUNT_MIN) ※10	サービス実行中のサーバプロセス数の最小値。	LO	double	No	pdstedit (sys) の PROCESS の SERVICE COUNT のMIN値
Receive from Other Prcs (RECEIVE_FROM_OTHER_PRCs) ※12	自ユニットの他プロセスからの RECEIVE 回数。	HILO	double	No	pdstedit (sys) のRPCの RECEIVE FROM OTHER PRCs の FREQ 値
Receive from Other Unit (RECEIVE_FROM_OTHER_UNIT) ※12	他ユニットからの RECEIVE 回数。	HILO	double	No	pdstedit (sys) のRPCの RECEIVE FROM OTHER UNIT の FREQ 値
Receive from Own Prcs (RECEIVE_FROM_OWN_PRCs) ※12	自プロセスからの RECEIVE 回数。	HILO	double	No	pdstedit (sys) のRPCの RECEIVE FROM OWN PRCs の FREQ 値
Record Time (RECORD_TIME)	統計ログレコードが出力されたグリニッジ標準時。	COPY	time_t	No	pdstedit (sys) のSTART 値※1
Record Type (INPUT_RECORD_TYPE)	レコード・タイプ識別子。	COPY	char(8)	No	Agent Collector
Registered Ports Avg (REGISTERED_PORTS_AVG) ※11	予備領域。	AVG	double	No	常に0
Registered Ports Freq (REGISTERED_PORTS_FREQ) ※12	予備領域。	HILO	double	No	常に0
Registered Ports Max (REGISTERED_PORTS_MAX) ※9	予備領域。	HI	double	No	常に0
Registered Ports Min (REGISTERED_PORTS_MIN) ※10	予備領域。	LO	double	No	常に0
Registry Cache Hit (REGISTRY_CACHE_HIT) ※12	レジストリ情報用バッファヒット回数。	HILO	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARY の

6. レコード

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
Registry Cache Hit (REGISTRY_CACHE_HIT) ※12	レジストリ情報用バッファヒット回数。	HILO	double	No	REGISTRY CACHE HITのFREQ値
Registry Cache Size Avg (REGISTRY_CACHE_SIZE_AVG) ※11	1 レジストリ情報当たりのレジストリ情報用バッファ長の平均値（単位はバイト）。	AVG	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARYの REGISTRY CACHE SIZEのAVG値
Registry Cache Size Freq (REGISTRY_CACHE_SIZE_FREQ) ※12	レジストリ情報用バッファ中のレジストリ情報数。	HILO	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARYの REGISTRY CACHE SIZEのFREQ値
Registry Cache Size Max (REGISTRY_CACHE_SIZE_MAX) ※9	1 レジストリ情報当たりのレジストリ情報用バッファ長の最大値（単位はバイト）。	HI	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARYの REGISTRY CACHE SIZEのMAX値
Registry Cache Size Min (REGISTRY_CACHE_SIZE_MIN) ※10	1 レジストリ情報当たりのレジストリ情報用バッファ長の最小値（単位はバイト）。	LO	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARYの REGISTRY CACHE SIZEのMIN値
Registry Cache Total Size Avg (REGISTRY_CACHE_TOTAL_SIZE_AVG) ※11	レジストリ情報用バッファ総使用領域長の平均値（単位はバイト）。	AVG	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARYの REGISTRY CACHE TOTAL SIZEの AVG値
Registry Cache Total Size Freq (REGISTRY_CACHE_TOTAL_SIZE_FREQ) ※12	レジストリ情報用バッファ中のレジストリ情報数。	HILO	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARYの REGISTRY CACHE TOTAL SIZEの FREQ値
Registry Cache Total Size Max (REGISTRY_CACHE_TOTAL_SIZE_MAX) ※9	レジストリ情報用バッファ総使用領域長の最大値（単位はバイト）。	HI	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARYの REGISTRY CACHE TOTAL SIZEの MAX値
Registry Cache Total Size Min	レジストリ情報用バッファ総使用領域長の最小値（単位はバイト）。	LO	double	No	pdstedit (sys) の

6. レコード

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
(REGISTRY_CACHE_TOTAL_SIZE_MIN) ※10	レジストリ情報用バッファ総使用領域長の最小値（単位はバイト）。	LO	double	No	DICTIIONARYのREGISTRY CACHE TOTAL SIZEのMIN値
Registry Get Req (REGISTRY_GET_REQ) ※12	レジストリ情報取得要求回数。	HILO	double	No	pdstedit (sys) のDICTIIONARYのREGISTRY GET REQのFREQ値
Response on Own Unit Avg (RESPONSE_ON_OWN_UNIT_AVG) ※11	自ユニットサーバへのサービスレスポンス時間の平均値（単位は 100 マイクロ秒）。	AVG	double	No	pdstedit (sys) のRPCのRESPONSE ON OWN UNITのAVG 値
Response on Own Unit Freq (RESPONSE_ON_OWN_UNIT_FREQ) ※12	自ユニットサーバへのサービスレスポンス回数。	HILO	double	No	pdstedit (sys) のRPCのRESPONSE ON OWN UNITのFREQ 値
Response on Own Unit Max (RESPONSE_ON_OWN_UNIT_MAX) ※9	自ユニットサーバへのサービスレスポンス時間の最大値（単位は 100 マイクロ秒）。	HI	double	No	pdstedit (sys) のRPCのRESPONSE ON OWN UNITのMAX 値
Response on Own Unit Min (RESPONSE_ON_OWN_UNIT_MIN) ※10	自ユニットサーバへのサービスレスポンス時間の最小値（単位は 100 マイクロ秒）。	LO	double	No	pdstedit (sys) のRPCのRESPONSE ON OWN UNITのMIN 値
Response to Other Unit Avg (RESPONSE_TO_OTHER_UNIT_AVG) ※11	他ユニットサーバへのサービスレスポンス時間の平均値（単位は 100 マイクロ秒）。	AVG	double	No	pdstedit (sys) のRPCのRESPONSE TO OTHER UNITのAVG 値
Response to Other Unit Freq (RESPONSE_TO_OTHER_UNIT_FREQ) ※12	他ユニットサーバへのサービスレスポンス回数。	HILO	double	No	pdstedit (sys) のRPCのRESPONSE TO OTHER UNITのFREQ 値
Response to Other Unit Max	他ユニットサーバへのサービスレスポンス時間の最大値（単位は 100 マイクロ秒）。	HI	double	No	pdstedit (sys) のRPCのRESPONSE TO

6. レコード

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
(RESPONSE_TO_OTHER_UNIT_MAX) ※9	他ユニットサーバへのサービスレスポンス時間の最大値（単位は 100 マイクロ秒）。	HI	double	No	OTHER UNIT の MAX 値
Response to Other Unit Min (RESPONSE_TO_OTHER_UNIT_MIN) ※10	他ユニットサーバへのサービスレスポンス時間の最小値（単位は 100 マイクロ秒）。	LO	double	No	pdstedit (sys) の RPC の RESPONSE TO OTHER UNIT の MIN 値
Rollback (ROLLBACK) ※12	ロールバック回数。	HILO	double	No	pdstedit (sys) の TRANSACTION の ROLLBACK の FREQ 値
Rollback Rate (ROLLBACK_RATE)	ロールバック率（単位は%）。	HILO	float	No	100*ROLLBACK/TRANS ※14
RTN-DEF Cache Total Size Avg (RTN_DEF_CACHE_TOTAL_SIZE_AVG) ※11	ルーチン定義情報用バッファ総使用長の平均値（単位はバイト）。※5	AVG	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARY の RTN-DEF CACHE TOTAL SIZE の AVG 値
RTN-DEF Cache Total Size Freq (RTN_DEF_CACHE_TOTAL_SIZE_FREQ) ※12	ルーチン定義情報用バッファ中のルーチン定義情報数。※5	HILO	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARY の RTN-DEF CACHE TOTAL SIZE の FREQ 値
RTN-DEF Cache Total Size Max (RTN_DEF_CACHE_TOTAL_SIZE_MAX) ※9	ルーチン定義情報用バッファ総使用長の最大値（単位はバイト）。※5	HI	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARY の RTN-DEF CACHE TOTAL SIZE の MAX 値
RTN-DEF Cache Total Size Min (RTN_DEF_CACHE_TOTAL_SIZE_MIN) ※10	ルーチン定義情報用バッファ総使用長の最小値（単位はバイト）。※5	LO	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARY の RTN-DEF CACHE TOTAL SIZE の MIN 値
RTN-DEF Cache Alloc Size Avg	確保したルーチン定義情報用バッファ長の平均値（単位はバイト）。※5	AVG	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARY の RTN-DEF CACHE

6. レコード

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
(RTN_DEF_CACHE_ALLOC_SIZE_AVG) ※11	確保したルーチン定義情報用バッファ長の平均値 (単位はバイト)。※5	AVG	double	No	ALLOC SIZEのAVG値
RTN-DEF Cache Alloc Size Freq (RTN_DEF_CACHE_ALLOC_SIZE_FREQ) ※12	確保したルーチン定義情報用バッファ個数。※5	HILO	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARYの RTN-DEF CACHE ALLOC SIZEの FREQ値
RTN-DEF Cache Alloc Size Max (RTN_DEF_CACHE_ALLOC_SIZE_MAX) ※9	確保したルーチン定義情報用バッファ長の最大値 (単位はバイト)。※5	HI	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARYの RTN-DEF CACHE ALLOC SIZEの MAX値
RTN-DEF Cache Alloc Size Min (RTN_DEF_CACHE_ALLOC_SIZE_MIN) ※10	確保したルーチン定義情報用バッファ長の最小値 (単位はバイト)。※5	LO	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARYの RTN-DEF CACHE ALLOC SIZEの MIN値
RTN-DEF Cache Hit (RTN_DEF_CACHE_HIT) ※12	ルーチン定義情報用バッファヒット回数。※5	HILO	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARYの RTN-DEF CACHE HITのFREQ値
RTN-DEF Cache Size Avg (RTN_DEF_CACHE_SIZE_AVG) ※11	ルーチン定義情報用バッファに取得した 1 ルーチン定義情報当たりのルーチン定義情報用バッファ使用領域長の平均値 (単位はバイト)。※5	AVG	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARYの RTN-DEF CACHE SIZEのAVG値
RTN-DEF Cache Size Freq (RTN_DEF_CACHE_SIZE_FREQ) ※12	ルーチン定義情報用バッファ中のルーチン定義情報数。※5	HILO	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARYの RTN-DEF CACHE SIZEのFREQ値
RTN-DEF Cache Size Max (RTN_DEF_CACHE_SIZE_MAX) ※9	ルーチン定義情報用バッファに取得した 1 ルーチン定義情報当たりのルーチン定義情報用バッファ使用領域長の最大値 (単位はバイト)。※5	HI	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARYの RTN-DEF CACHE SIZEのMAX値
RTN-DEF Cache Size Min	ルーチン定義情報用バッファに取得した 1 ルーチン定義情報当たりの	LO	double	No	pdstedit (sys) の

6. レコード

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
(RTN_DEF_CACHE_SIZE_MIN) ※10	ルーチン定義情報用バッファ使用領域長の最小値（単位はバイト）。※5	LO	double	No	DICTIIONARYのRTN-DEF CACHE SIZEのMIN値
RTN-DEF Get Req (RTN_DEF_GET_REQ) ※12	ルーチン定義情報取得要求回数。※5	HILO	double	No	pdstedit (sys) の DICTIIONARYの RTN-DEF GET REQのFREQ値
Schedule Queue Len Avg (SCHEDULE_QUEUE_LEN_AVG) ※11	スケジュール待ち行列数の平均値。	AVG	double	No	pdstedit (sys) の SCHEDULEの QUEUE LEN(SCH) のAVG値
Schedule Queue Len Freq (SCHEDULE_QUEUE_LEN_FREQ) ※12	スケジュール待ち行列数の発生件数。	HILO	double	No	pdstedit (sys) の SCHEDULEの QUEUE LEN(SCH) のFREQ値
Schedule Queue Len Max (SCHEDULE_QUEUE_LEN_MAX) ※9	スケジュール待ち行列数の最大値。	HI	double	No	pdstedit (sys) の SCHEDULEの QUEUE LEN(SCH) のMAX値
Schedule Queue Len Min (SCHEDULE_QUEUE_LEN_MIN) ※10	スケジュール待ち行列数の最小値。	LO	double	No	pdstedit (sys) の SCHEDULEの QUEUE LEN(SCH) のMIN値
Segment Size Avg (SEGMENT_SIZE_AVG) ※11	予備領域。	AVG	double	No	常に0
Send to Other Procs (SEND_TO_OTHER_PRCS) ※12	自ユニットの他プロセスへの SEND 回数。	HILO	double	No	pdstedit (sys) のRPCの SEND TO OTHER PRCSのFREQ値
Send to Other Unit (SEND_TO_OTHER_UNIT) ※12	他ユニットへの SEND 回数。	HILO	double	No	pdstedit (sys) のRPCの SEND TO OTHER UNITのFREQ値
Send to Own Procs (SEND_TO_OWN_PRCS) ※12	自プロセスへの SEND 回数。	HILO	double	No	pdstedit (sys) のRPCの SEND TO OWN PRCSのFREQ値

6. レコード

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
Server Abort (SERVER_ABORT) ※ 12	予備領域。	HILO	double	No	常に0
Server Name (SERVER_NAME)	サーバ名。	COPY	string(9)	No	pdstedit (sys) の SERVER値
Size for Buffer Avg (SIZE_FOR_BUFFER_AVG) ※11	予備領域。	AVG	double	No	常に0
SQLOBJ Cache Hit (SQLOBJ_CACHE_HIT) ※12	SQL オブジェクト用バッファヒット回数。	HILO	double	No	pdstedit (sys) のFES-BES-DIC (SDS) INFORMATIONの SQLOBJ CACHE HITのFREQ値
SQLOBJ Get Req (SQLOBJ_GET_REQ) ※12	SQL オブジェクト取得要求回数。	HILO	double	No	pdstedit (sys) のFES-BES-DIC (SDS) INFORMATIONの SQLOBJ GET REQ のFREQ値
SQLOBJ Len Avg (SQLOBJ_LEN_AVG) ※11	SQL オブジェクト用バッファ中の SQL オブジェクト長の平均値 (単位はバイト)。	AVG	double	No	pdstedit (sys) のFES-BES-DIC (SDS) INFORMATIONの STROBJ LENの AVG値
SQLOBJ Len Freq (SQLOBJ_LEN_FREQ) ※12	SQL オブジェクト用バッファ中の SQL オブジェクト数。	HILO	double	No	pdstedit (sys) のFES-BES-DIC (SDS) INFORMATIONの SQLOBJ LENの FREQ値
SQLOBJ Len Max (SQLOBJ_LEN_MAX) ※9	SQL オブジェクト用バッファ中の SQL オブジェクト長の最大値 (単位はバイト)。	HI	double	No	pdstedit (sys) のFES-BES-DIC (SDS) INFORMATIONの SQLOBJ LENの MAX値
SQLOBJ Len Min (SQLOBJ_LEN_MIN) ※10	SQL オブジェクト用バッファ中の SQL オブジェクト長の最小値 (単位はバイト)。	LO	double	No	pdstedit (sys) のFES-BES-DIC (SDS) INFORMATIONの

6. レコード

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
SQLOBJ Len Min (SQLOBJ_LEN_MIN) ※10	SQL オブジェクト用バッファ中の SQL オブジェクト長の最小値（単位はバイト）。	LO	double	No	SQLOBJ LEN の MIN 値
Static Size Avg (STATIC_SIZE_AVG) ※11	予備領域。	AVG	double	No	常に0
STROBJ Cache Hit (STROBJ_CACHE_HIT) ※12	ストアドプロシージャのオブジェクトの SQL オブジェクト用バッファヒット回数。	HILO	double	No	pdstedit (sys) の FES-BES-DIC (SDS) INFORMATION の STROBJ CACHE HIT の FREQ 値
STROBJ Get Req (STROBJ_GET_REQ) ※12	ストアドプロシージャのオブジェクトの取得要求回数。	HILO	double	No	pdstedit (sys) の FES-BES-DIC (SDS) INFORMATION の STROBJ GET REQ の FREQ 値
STROBJ Len Avg (STROBJ_LEN_AVG) ※11	SQL オブジェクト用バッファ中のストアドプロシージャのオブジェクト長の平均値（単位はバイト）。	AVG	double	No	pdstedit (sys) の FES-BES-DIC (SDS) INFORMATION の SQLOBJ LEN の AVG 値
STROBJ Len Freq (STROBJ_LEN_FREQ) ※12	SQL オブジェクト用バッファ中のストアドプロシージャのオブジェクト数。	HILO	double	No	pdstedit (sys) の FES-BES-DIC (SDS) INFORMATION の STROBJ LEN の FREQ 値
STROBJ Len Max (STROBJ_LEN_MAX) ※9	SQL オブジェクト用バッファ中のストアドプロシージャのオブジェクト長の最大値（単位はバイト）。	HI	double	No	pdstedit (sys) の FES-BES-DIC (SDS) INFORMATION の STROBJ LEN の MAX 値
STROBJ Len Min (STROBJ_LEN_MIN) ※10	SQL オブジェクト用バッファ中のストアドプロシージャのオブジェクト長の最小値（単位はバイト）。	LO	double	No	pdstedit (sys) の FES-BES-DIC (SDS) INFORMATION の STROBJ LEN の MIN 値

6. レコード

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
STROBJ Recompile (STROBJ_RECOMPILE) ※12	ストアドプロシージャのオブジェクトのリコンパイル回数。	HILO	double	No	pdstedit (sys) のFES-BES-DIC (SDS) INFORMATION の STROBJ RECOMPILE の FREQ 値
Swap Out SQLOBJ (SWAP_OUT_SQLOBJ) ※12	SQL オブジェクト用バッファから出された SQL オブジェクトの数。	HILO	double	No	pdstedit (sys) のFES-BES-DIC (SDS) INFORMATION の SWAP OUT SQLOBJ の FREQ 値
Swap Out STROBJ (SWAP_OUT_STROBJ) ※12	SQL オブジェクト用バッファから出されたストアドプロシージャのオブジェクトの数。	HILO	double	No	pdstedit (sys) のFES-BES-DIC (SDS) INFORMATION の SWAP OUT STROBJ の FREQ 値
Sync Get Interval Time Avg (SYNC_GET_INTERVAL_TIME_AVG) ※11	シンクポイントダンプ取得間隔時間の平均値 (単位はミリ秒)。	AVG	double	No	pdstedit (sys) のSYNC POINT の GET INTERVAL TIME の AVG 値
Sync Get Interval Time Freq (SYNC_GET_INTERVAL_TIME_FREQ) ※12	シンクポイントダンプの取得件数。	HILO	double	No	pdstedit (sys) のSYNC POINT の GET INTERVAL TIME の FREQ 値
Sync Get Interval Time Max (SYNC_GET_INTERVAL_TIME_MAX) ※9	シンクポイントダンプ取得間隔時間の最大値 (単位はミリ秒)。	HI	double	No	pdstedit (sys) のSYNC POINT の GET INTERVAL TIME の MAX 値
Sync Get Interval Time Min (SYNC_GET_INTERVAL_TIME_MIN) ※10	シンクポイントダンプ取得間隔時間の最小値 (単位はミリ秒)。	LO	double	No	pdstedit (sys) のSYNC POINT の GET INTERVAL TIME の MIN 値
Sync Get Interval Time Sum (SYNC_GET_INTERVAL_TIME_SUM) ※12	シンクポイントダンプ取得間隔時間の合計値 (単位はミリ秒)。	HILO	double	No	SYNC_GET_INTERVAL_TIME_AVG * SYNC_GET_INTERVAL_TIME_FREQ

6. レコード

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
Sync Get Time Avg (SYNC_GET_TIME_AVG) ※11	シンクポイントダンプ取得時間の平均値（単位はミリ秒）。	AVG	double	No	pdstedit (sys) のSYNC POINTのGET TIMEのAVG値
Sync Get Time Freq (SYNC_GET_TIME_FREQ) ※12	シンクポイントダンプの取得件数。	HILO	double	No	pdstedit (sys) のSYNC POINTのGET TIMEのFREQ値
Sync Get Time Max (SYNC_GET_TIME_MAX) ※9	シンクポイントダンプの取得所要時間の最大値（単位はミリ秒）。	HI	double	No	pdstedit (sys) のSYNC POINTのGET TIMEのMAX値
Sync Get Time Min (SYNC_GET_TIME_MIN) ※10	シンクポイントダンプ取得時間の最小値（単位はミリ秒）。	LO	double	No	pdstedit (sys) のSYNC POINTのGET TIMEのMIN値
Sync Get Time Sum (SYNC_GET_TIME_SUM) ※12	シンクポイントダンプ取得時間の合計値（単位はミリ秒）。	HILO	double	No	SYNC_GET_TIME_AVG * SYNC_GET_TIME_FREQ
System Server Abort (SYSTEM_SERVER_ABORT) ※12	予備領域。	HILO	double	No	常に0
Trans (TRANS)	トランザクション数。	HILO	double	No	COMMIT+ROLLBACK
Trans/sec (TRANS_RATE)	1秒当たりのトランザクション数。	HILO	float	No	TRANS/INTERVAL
TYPE-DEF Cache Alloc Size Avg (TYPE_DEF_CACHE_ALLOC_SIZE_AVG) ※11	確保したユーザー定義型情報用バッファ長の平均値（単位はバイト）。※4	AVG	double	No	pdstedit (sys) のDICTIONARYのTYPE-DEF CACHE ALLOC SIZEのAVG値
TYPE-DEF Cache Alloc Size Freq (TYPE_DEF_CACHE_ALLOC_SIZE_FREQ) ※12	確保したユーザー定義型情報用バッファ個数。※4	HILO	double	No	pdstedit (sys) のDICTIONARYのTYPE-DEF CACHE ALLOC SIZEのFREQ値

6. レコード

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
TYPE-DEF Cache Alloc Size Max (TYPE_DEF_CACHE_ALLOC_SIZE_MAX) ※9	確保したユーザー定義型情報用バッファ長の最大値 (単位はバイト)。※4	HI	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARYの TYPE-DEF CACHE ALLOC SIZEの MAX値
TYPE-DEF Cache Alloc Size Min (TYPE_DEF_CACHE_ALLOC_SIZE_MIN) ※10	確保したユーザー定義型情報用バッファ長の最小値 (単位はバイト)。※4	LO	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARYの TYPE-DEF CACHE ALLOC SIZEの MIN値
TYPE-DEF Cache Hit (TYPE_DEF_CACHE_HIT) ※12	ユーザー定義型情報用バッファヒット回数。※4	HILO	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARYの TYPE-DEF CACHE HITのFREQ値
TYPE-DEF Cache Size Avg (TYPE_DEF_CACHE_SIZE_AVG) ※11	ユーザー定義型情報用バッファに取得した 1 型定義情報用バッファ使用領域長の平均値 (単位はバイト)。※4	AVG	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARYの TYPE-DEF CACHE SIZEのAVG値
TYPE-DEF Cache Size Freq (TYPE_DEF_CACHE_SIZE_FREQ) ※12	ユーザー定義型情報用バッファ中の型定義情報数。※4	HILO	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARYの TYPE-DEF CACHE SIZEのFREQ値
TYPE-DEF Cache Size Max (TYPE_DEF_CACHE_SIZE_MAX) ※9	ユーザー定義型情報用バッファに取得した 1 型定義情報用バッファ使用領域長の最大値 (単位はバイト)。※4	HI	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARYの TYPE-DEF CACHE SIZEのMAX値
TYPE-DEF Cache Size Min (TYPE_DEF_CACHE_SIZE_MIN) ※10	ユーザー定義型情報用バッファに取得した 1 型定義情報用バッファ使用領域長の最小値 (単位はバイト)。※4	LO	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARYの TYPE-DEF CACHE SIZEのMIN値
TYPE-DEF Cache Total Size Avg (TYPE_DEF_CACHE_TOTAL_SIZE_AVG) ※11	ユーザー定義型情報用バッファ総使用領域長の平均値 (単位はバイト)。※4	AVG	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARYの TYPE-DEF CACHE TOTAL SIZEの AVG値

6. レコード

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
TYPE-DEF Cache Total Size Freq (TYPE_DEF_CACHE_TOTAL_SIZE_FREQ) ※12	ユーザー定義型情報取得した件数。※4	HILO	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARYの TYPE-DEF CACHE TOTAL SIZEの FREQ値
TYPE-DEF Cache Total Size Max (TYPE_DEF_CACHE_TOTAL_SIZE_MAX) ※9	ユーザー定義型情報用バッファ総使用領域長の最大値 (単位はバイト)。※4	HI	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARYの TYPE-DEF CACHE TOTAL SIZEの MAX値
TYPE-DEF Cache Total Size Min (TYPE_DEF_CACHE_TOTAL_SIZE_MIN) ※10	ユーザー定義型情報用バッファ総使用領域長の最小値 (単位はバイト)。※4	LO	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARYの TYPE-DEF CACHE TOTAL SIZEの MIN値
TYPE-DEF Get Req (TYPE_DEF_GET_REQ) ※12	型定義情報取得要求回数。※4	HILO	double	No	pdstedit (sys) の DICTIONARYの TYPE-DEF GET REQのFREQ値
Use Lock Table Avg (USE_LOCK_TABLE_AVG) ※11	排他資源管理テーブル使用率の平均値 (単位は%)。	AVG	double	No	pdstedit (sys) のLOCK のUSE LOCK TABLEのAVG値
Use Lock Table Freq (USE_LOCK_TABLE_FREQ) ※12	排他資源管理テーブルの使用率が 5% 増加する事象の発生件数。	HILO	double	No	pdstedit (sys) のLOCK のUSE LOCK TABLEのFREQ値
Use Lock Table Max (USE_LOCK_TABLE_MAX) ※9	排他資源管理テーブル使用率の最大値 (単位は%)。	HI	double	No	pdstedit (sys) のLOCK のUSE LOCK TABLEのMAX値
Use Lock Table Min (USE_LOCK_TABLE_MIN) ※10	排他資源管理テーブル使用率の最小値 (単位は%)。	LO	double	No	pdstedit (sys) のLOCK のUSE LOCK TABLEのMIN値

6. レコード

注※1

sys_DAT 内のフィールド START は「MM/DD/hh:mm」の形式で出力されますが、 PFM-Agent for HiRDB では、 time_t 型に変換して PI_SSYS レコードを作成します。その場合、 年は現在時刻を基に、 年のまたがりを考慮して設定してください。また、 秒は 0 秒に設定してください。

注※2

HiRDB マニュアルでは「TBL-DEF」ですが、 PFM - Manager 名は「TBL_DEF」となっています。

注※3

HiRDB マニュアルでは「CON/DBA」ですが、 PFM - Manager 名は「CON_DBA」となっています。

注※4

HiRDB マニュアルでは「TYPE-DEF」ですが、 PFM - Manager 名は「TYPE_DEF」となっています。

注※5

HiRDB マニュアルでは「RTN-DEF」ですが、 PFM - Manager 名は「RTN_DEF」となっています。

注※6

HiRDB マニュアルでは「PLG-RTN」ですが、 PFM - Manager 名は「PLG_RTN」となっています。

注※7

HiRDB マニュアルでは「REGISTRY-DEF」ですが、 PFM - Manager 名は「REGISTRY_DEF」となっています。

注※8

このフィールドは HiRDB 06-00 で追加されたので、 HiRDB 05-06 では固定値 0 が設定されます。

注※9

履歴レポートで複数レコードの値を集約する場合（例えば、 1 時間単位に収集したレコードを 1 日単位に表示する場合）、 集約されるレコードに含まれる値の上限値を保持します。

注※10

履歴レポートで複数レコードの値を集約する場合（例えば、 1 時間単位に収集したレコードを 1 日単位に表示する場合）、 集約されるレコードに含まれる値の下限値を保持します。

注※11

履歴レポートで複数レコードの値を集約する場合（例えば、 1 時間単位に収集したレコードを 1 日単位に表示する場合）、 集約されるレコードに含まれる値の平均を計算します。Store データベースには末尾に _TOTAL, _COUNT が付いたフィールドが追加されます。集約された値が表す平均値は、 集約期間内でのフィールド値の総和 (_TOTAL が付いたフィールドの値) を収集レコード数 (_COUNT が付いたフィールドの値) で割ったものとして定義されます。

注※12

履歴レポートで複数レコードの値を集約する場合（例えば、 1 時間単位に収集したレコードを 1 日単位に表示する場合）、 集約されるレコードに含まれる値の平均を計算します。Store データベースには末尾に _HI, _LO, _TOTAL, _COUNT が付いたフィールドが追加されます。また、 View には (Max), (Min), (Total) が付いたフィールドが追加され、 履歴レポートで利用できます。集約された

値が表す平均値は、集約期間内のフィールド値の総和（_TOTAL が付いたフィールドの値）を収集レコード数（_COUNT が付けられたフィールドの値）で割ったものとして定義されます。

注※13

TRANS の値が 0 の場合、COMMIT_RATE は 100 を設定する。

注※14

TRANS の値が 0 の場合、ROLLBACK_RATE は 0 を設定する。

HiRDB System (PD_HRDS)

HiRDB System (PD_HRDS) レコードは、予約レコードのため使用できません。

RDAREA Detailed Status (PI_RDDS)

機能

RDAREA Detailed Status (PI_RDDS) レコードには、RD エリアについての、ある一定の時間を単位としたパフォーマンスデータが格納されます。このレコードは、複数インスタンスレコードです。RD エリアごとに 1 行作成されます。

注意

- サーバまたはユニットの構成を変更した場合、最新の構成を反映するためにエージェントを再起動してください。
- HiRDB の性能に影響を与えないために、Collection Interval は少なくとも 3600 秒以上に設定してください。
- データソースが pddbstd コマンドのフィールドの値を収集する場合、HiRDB 07-01-/A より前のバージョンの HiRDB では、レコード収集時にグローバルバッファの性能が劣化するおそれがあります。
- 共用 RD エリアの場合、更新できるバックエンドサーバについての情報だけが収集されます。
- pddbstd コマンドから取得されるフィールドは、次に示す場合以外では、pddbstd コマンドを実行できないため取得されません。

1. 収集対象 RD エリア種別が、データディクショナリ用 RD エリア、データディクショナリ LOB 用 RD エリア、ユーザ用 RD エリア、ユーザ LOB 用 RD エリア、レジストリ用 RD エリア、およびレジストリ LOB 用 RD エリアの場合。

2. マニュアル「HiRDB コマンドリファレンス」の「RD エリアの状態によるユティリティ及び UAP の実行可否」で説明している、RD エリアがデータベース状態解析ユティリティを実行できる状態である場合。

この場合、数値フィールドは 0 に、文字列フィールドは空白に設定されます。

- RD エリア名の前方および後方に空白文字を含む RD エリアについては、動作が保証されません。
- このレコードを収集すると、pddbstd コマンドを同時に最大 1 個加算して実行します。マニュアル「HiRDB システム定義」の pd_utl_exec_mode の説明を参照して、設定を見直してください。
- このレコードは、jpcagtbdef.ini ファイルによって収集対象の RD エリアを選択できます。jpcagtbdef.ini ファイルを編集しない場合は、すべての RD エリアに関するパフォーマンスデータを収集します。

jpcagtbdef.ini ファイルの設定方法については、「[2.4 セットアップ](#)」または「[3.4 セットアップ](#)」のインスタンス設定ファイルの設定に関する説明を参照してください。

- このレコードは、PI_RDST レコードで収集するすべての情報を含みますが、情報量が多い分、収集に時間と負荷が掛かります。PI_RDST レコードで収集する情報で監視できるようであれば PI_RDST レコードで収集することを推奨します。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	3600	○
Collection Offset	1400	○
Log	No	○
LOGIF	空白	○
Over 10 Sec Collection Time	Yes	×

ODBC キーフィールド

- PI_RDDS_RDAREA_NAME

ライフタイム

RD エリアの作成から削除まで。

レコードサイズ

- 固定部：681 バイト
- 可変部：341 バイト

フィールド

各項目の詳細については、マニュアル「HiRDB コマンドリファレンス」の pddbts -r ALL -a コマンドと pddbst -k phys -f コマンドの実行結果の説明を参照してください。

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
Auto Extend Error Code (AUTO_EXTEND_ER ROR_CODE)	自動増分ができなかった場合のエラーコード。	COPY	ulong	No	pddbst -k phys -f -bのError Code 値※13※16
Auto Extend Status (AUTO_EXTEND_ST ATUS)	自動増分機能の抑止状態。 SUP : 抑止されている状態。 NOSUP : 抑止されていない状態。	COPY	string(8)	No	pddbst -k phys -f -bのAuto Extend Status 値※13※16
Auto Extend Use (AUTO_EXTEND_US E)	自動増分機能の使用状況。 USE : 自動増分機能を使用している。 NOUSE : 自動増分機能を使用していない。	COPY	string(8)	No	pddbst -k phys -f -bのAuto Extend Use 値※13※16
Available Used Page %	使用中空きページ数の比率（単位は%）。	COPY	short	No	PERCENT_USED_PAGES-

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
(PERCENT_AVAIL_USED_PAGES)	使用中空きページ数の比率（単位は%）。	COPY	short	No	PERCENT_FULL_USED_PAGES※11※16
Available Used Pages (AVAIL_USED_PAGES)	使用中空きページ数。	COPY	ulong	No	USED_PAGES-FULL_USED_PAGES※11※16
Buffer Name (BUFFER_NAME)	グローバルバッファ名。	COPY	string(17)	No	pdbuf ls -k def のBUFFNAME値※15
Extension Segment Size (EXTENSION_SEGMENT_SIZE)	増分セグメント数。RD エリアの増分指定がない場合は 0。	COPY	ulong	No	ディクショナリ表※1
File Count (FILE_COUNT)	HiRDB ファイル数。	COPY	ulong	No	ディクショナリ表※1
Free % (PERCENT_FREE)	未使用セグメントの割合（単位は%）。	COPY	float	No	100 * UNUSED_AREA_SEGMENT / TOTAL_AREA_SEGMENT ※14
Free MBytes (FREE_BYTES)	未使用セグメントの総容量（単位はメガバイト）。	COPY	double	No	UNUSED_AREA_SEGMENT * SIZE_OF_PAGE * SEGMENT_SIZE※14
Freeze Specified (FREEZE_SPECIFIED)	RD エリアが更新凍結されているかどうかの情報。	COPY	string(2)	No	pddbst -k phys -f -b の Freeze Specified 値※4※13※16
Full Used Page % (PERCENT_FULL_USED_PAGES)	満杯ページ数の比率（単位は%）。	COPY	short	No	pddbst -k phys -f -b の Page の Full 列(%) の 値※11※13※16
Full Used Pages (FULL_USED_PAGES)	満杯ページ数。	COPY	ulong	No	pddbst -k phys -f -b の Page の Full 列の 値※11※13※16
Gen Number (GEN_NUMBER)	該当する RD エリアの世代番号。	COPY	short	No	pddbst -k phys -f -b の Generation

6. レコード

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
Gen Number (GEN_NUMBER)	該当する RD エリアの世代番号。	COPY	short	No	Number 値※6※13※16
Hold Code 1 (HOLD_CODE1)	該当する RD エリアの閉塞要因コード。	COPY	short	No	pddbst -k phys -f -b の History1 の Hold Code 値※3※13※16
Hold Code 2 (HOLD_CODE2)	Hold Status 1 の 1 つ前の閉塞要因コード情報。	COPY	short	No	pddbst -k phys -f -b の History2 の Hold Code 値※3※13※16
Hold Status 1 (HOLD_STATUS1)	該当する RD エリアの閉塞種別。 1. 「Error Shutdown」(障害閉塞) 2. 「Command Shutdown」(HiRDB の障害検知によるコマンド閉塞) 3. pddbst が出力した値(「FLT」または「CMD」以外の値の場合) 4. 空白(それ以外の場合)	COPY	string(4)	No	pddbst -k phys -f -b の History1 の Hold Status 値※2※13※16
Hold Status 2 (HOLD_STATUS2)	Hold Status 1 の 1 つ前の閉塞情報。	COPY	string(4)	No	pddbst -k phys -f -b の History2 の Hold Status 値※2※13※16
Hold Time 1 (HOLD_TIME1)	該当する RD エリアの閉塞時刻。	COPY	time_t	No	pddbst -k phys -f -b の History1 の Hold Time 値※3※13※16
Hold Time 2 (HOLD_TIME2)	Hold Status 1 の 1 つ前の閉塞時刻情報。	COPY	time_t	No	pddbst -k phys -f -b の History2 の Hold Time 値※3※13※16
I/O Ops/sec (IO_RATE)	予備領域。	HILO	float	No	常に 0
Index Count (N_INDEX)	格納インデックス数(定義数)。	COPY	ulong	No	ディクショナリ表※1
Interval	情報が収集される間隔(単位は秒)。	COPY	ulong	No	Agent Collector

6. レコード

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
(INTERVAL)	情報が収集される間隔（単位は秒）。	COPY	ulong	No	pddbst -k phys -f -bのLast Segment値の分子※8※13※16
Last Segment (LAST_SEGMENT)	使用されているセグメントの最後を示す位置情報。Segment Over が Y のときは、常に最後のセグメントを示す。	COPY	ulong	No	pddbst -k phys -f -bのLast Segment値の分子※8※13※16
Lobmap Over (LOBMAP_OVER)	LOB 管理エントリがすべて使用されているかどうかの情報。 Y：すべて使用されている。 N：未使用のエントリが残っている。	COPY	string(2)	No	pddbst -k phys -f -bのLobmap Over値※7※13※16
Mbytes (BYTES)	RD エリア容量（単位はメガバイト）。	COPY	double	No	TOTAL_AREA_SEG * SIZE_OF_PAGE * SEGMENT_SIZE ※14
Original RDAREA Name (ORIG_RDAREA_NAME)	オリジナル RD エリア名。	COPY	string(31)	No	pddbst -k phys -f -bのOriginal RD Area Name値※5※13※16
Page Size (SIZE_OF_PAGE)	ページ長（単位はバイト）。	COPY	ulong	No	ディクショナリ表※1
RDAREA Name (RDAREA_NAME)	RD エリア名。	COPY	string(31)	No	pddbts -r ALL -aのRDAREA値
RDAREA Status (RDAREA_STATUS)	RD エリアの状態。表示される値は次のとおり。 CLOSE, CLOSE HOLD, CLOSE HOLD (INQ), CLOSE HOLD (CMD), CLOSE HOLD (BU), CLOSE HOLD (BU I), CLOSE HOLD (BU W), CLOSE HOLD (BU IW), CLOSE HOLD (SYNC), CLOSE HOLD (ORG), CLOSE ACCEPT-HOLD, HOLD, HOLD (INQ), HOLD (CMD), HOLD (BU), HOLD (BU I), HOLD (BU W), HOLD (BU IW), HOLD (SYNC), HOLD (ORG), ACCEPT-HOLD, OPEN	COPY	string(18)	No	pddbts -r ALL -aのSTATUS値
RDAREA Type (RDAREA_TYPE)	RD エリア種別。表示される値は次のとおり。	COPY	string(5)	No	pddbts -r ALL -aのTYPE値

6. レコード

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
RDAREA Type (RDAREA_TYPE)	MAST, DDIR, DDIC, DLOB, USER, ULOB, LIST, RGST, RLOB	COPY	string(5)	No	pddbls -r ALL -aのTYPE値
Reads/sec (READS_RATE)	予備領域。	HILO	float	No	常に 0
Record Time (RECORD_TIME)	レコードが作成された時刻。	COPY	time_t	No	Agent Collector
Record Type (INPUT_RECORD_T YPE)	レコードタイプ識別子。	COPY	char(8)	No	Agent Collector
Replica RDAREAs (REPLICA_RDAREAS)	レプリカ RD エリアの数。	COPY	short	No	pddbstd -k phys -f -bのReplica RD Area Count 値※6※13※16
Segment Over (SEGMENT_OVER)	LOB 用 RD エリアが乱れているかど うかの情報。 Y : 亂れている。 N : 亂れていない。	COPY	string(2)	No	pddbstd -k phys -f -bのSegment Over 値※7※13※ 16
Segment Size (SEGMENT_SIZE)	セグメントサイズ (単位はページ)。	COPY	ulong	No	ディクショナリ 表※1
Server Name (SERVER_NAME)	サーバ名。	COPY	string(9)	No	pddbls -r ALL -aのSERVER値
Table Count (N_TABLE)	格納表数 (定義数)。	COPY	ulong	No	ディクショナリ 表※1
Total Pages (TOTAL_PAGES)	RD エリア内のセグメント中のペー ジ数の合計 (使用中ページ数+未使 用ページ数)。	COPY	ulong	No	pddbstd -k phys -f -bのPageの Sum列の値※12※ 13※16
Total RDAREA Segments (TOTAL_AREA_SEG)	RD エリア内の全セグメント数。	COPY	double	No	pddbls -r ALL -aのSEGMENT値 の分母※14
Unused Page % (PERCENT_UNUSED _PAGES)	未使用ページ数の比率 (単位は%)。	COPY	short	No	100- PERCENT_USED_P AGES※16
Unused Pages (UNUSED_PAGES)	未使用ページ数。	COPY	ulong	No	TOTAL_PAGES- USED_PAGES※16

6. レコード

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
Unused RDAREA Segments (UNUSED_AREA_SEG)	RD エリア内の未使用セグメント数。	COPY	double	No	pddbls -r ALL -aのSEGMENT値の分子※14
Used % (PERCENT_USED)	使用中セグメントの割合（単位は%）。	COPY	float	No	$100 * (\text{TOTAL_AREA_SEG} - \text{UNUSED_AREA_SEG}) / \text{TOTAL_AREA_SEG}$ ※14
Used MBytes (USED_BYTES)	使用中セグメントの総容量（単位はメガバイト）。	COPY	double	No	$(\text{TOTAL_AREA_SEG} - \text{UNUSED_AREA_SEG}) * \text{SIZE_OF_PAGE} * \text{SEGMENT_SIZE}$ ※14
Used Page % (PERCENT_USED_PAGES)	使用中ページ数の比率（単位は%）。	COPY	short	No	pddbst -k phys -f -bのPageのUsed列(%)の値※10※13※16
Used Pages (USED_PAGES)	使用中ページ数。	COPY	ulong	No	pddbst -k phys -f -bのPageのUsed列の値※9※13※16
Used RDAREA Segments (USED_AREA_SEG)	RD エリア内の使用中セグメント数。	COPY	ulong	No	TOTAL_AREA_SEG - UNUSED_AREA_SEG ※14
Writes/sec (WRITES_RATE)	予備領域。	HILO	float	No	常に 0

注※1

次に示す SQL 文の結果です。

```
select
RDAREA_NAME, RDAREA_ID, RDAREA_TYPE, PAGE_SIZE, SEGMENT_SIZE, FILE_COUNT, N_TABLE, N_INDEX, EXTENSION_SEGMENT_SIZE from "MASTER".SQL_RDAREAS
```

注※2

HiRDB 06-00 以前のバージョンの HiRDB では空白になります。

注※3

HiRDB 06-00 以前のバージョンの HiRDB では 0 になります。

注※4

LOB 用 RD エリア以外の場合は空白になります。

HiRDB 06-01 以前のバージョンの HiRDB では必ず空白になります。

注※5

HiRDB Staticizer Option がインストールされていない場合は空白になります。

HiRDB 06-00 以前のバージョンの HiRDB では必ず空白になります。

注※6

HiRDB Staticizer Option がインストールされていない場合は 0 になります。

HiRDB 06-00 以前のバージョンの HiRDB では必ず 0 になります。

注※7

LOB 用 RD エリア以外の場合は空白になります。

注※8

LOB 用 RD エリア以外の場合は 0 になります。

注※9

LOB 用 RD エリアの場合は USED_AREA_SEG の値と等しくなります。

注※10

LOB 用 RD エリアの場合は PERCENT_USED の値と等しくなります。

注※11

LOB 用 RD エリアの場合は必ず 0 になります。

注※12

LOB 用 RD エリアの場合は TOTAL_AREA_SEG の値と等しくなります。

注※13

pddbst の-b オプションは、HiRDB 07-01-/A 以降の HiRDB で指定されます。

注※14

RD エリアの状態によって pddbls の出力結果に SEGMENT 情報が出力されない場合があります。このときのフィールドの設定値は次のようになります。なお、RD エリアの状態に対する SEGMENT 行の表示有無については、マニュアル「HiRDB コマンドリファレンス」の pddbls について説明している章を参照してください。

フィールド名	設定値
Free %	0
Free MBytes	0
Mbytes	Page Size * Segment Size / 1048576

フィールド名	設定値
Total RDAREA Segments	0
Unused RDAREA Segments	0
Used %	100
Used MBytes	Page Size * Segment Size / 1048576
Used RDAREA Segments	1

注※15

RD エリア種別が次のどれかである場合には、ディレクトリ部のグローバルバッファ名だけを格納します。ディレクトリ部については、マニュアル「HiRDB システム定義」のグローバルバッファに関するオペランドについて説明している章を参照してください。

- データディクショナリ LOB 用 RD エリア
- ユーザー LOB 用 RD エリア
- レジストリ LOB 用 RD エリア

注※16

pddbst コマンドは RD エリアの状態によって動作しない場合があります。このとき、レコードのフィールドの設定値は次のようにになります。pddbst のコマンド仕様については、マニュアル「HiRDB コマンドリファレンス」を参照してください。

フィールド名	設定値
Auto Extend Error Code	0
Auto Extend Status	空白
Auto Extend Use	空白
Available Used Page %	0
Available Used Pages	0
Freeze Specified	空白
Full Used Page %	0
Full Used Pages	0
Gen Number	0
Hold Code 1	0
Hold Code 2	0
Hold Status 1	空白
Hold Status 2	空白
Hold Time 1	0
Hold Time 2	0

6. レコード

フィールド名	設定値
Last Segment	0
Lobmap Over	空白
Original RDAREA Name	空白
Replica RDAREAs	0
Segment Over	空白
Total Pages	0
Unused Page %	0
Unused Pages	0
Used Page %	0
Used Pages	0

RDAREA HiRDB File (PI_RDFL)

機能

RDAREA HiRDB File (PI_RDFL) レコードには、RD エリア用に割り当てられた HiRDB ファイルについての、ある一定の時間を単位としたパフォーマンスデータが格納されます。このレコードは、複数インスタンスレコードです。HiRDB ファイルと RD エリアの組み合わせごとに 1 行作成されます。

注意

- サーバまたはユニットの構成を変更した場合、最新の構成を反映するためにエージェントを再起動してください。
- このレコードに対してはリアルタイムレポートを作成しないでください。リアルタイムレポートを作成した場合には何も表示されません。
- Collection Interval は 25920000 秒（約 10 か月）以下にしてください。
- Collection Interval は次のように設定してください。

Collection Interval > 監視対象 HiRDB のシンクポイント発生間隔

このように設定しない場合、収集間隔中に fil の統計情報が出力されず、レコードの情報が取得できない場合があります。HiRDB のシンクポイント発生間隔については、マニュアル「HiRDB システム定義」のシンクポイントダンプの取得間隔に関する説明を参照してください。

- このレコードは HiRDB の fil 統計情報が収集されている期間だけ収集できます。収集開始、収集停止の契機はそれぞれ次のとおりです。

<HiRDB の統計情報の出力が開始される契機>

- HiRDB 稼働中に pdstbegin コマンドを実行した時。
- システム共通定義 pdsys で、pdstbegin オペランドを指定して HiRDB を開始した時。

<HiRDB の統計情報の出力が停止される契機>

- HiRDB 稼働中に pdstend コマンドを実行した時。
- HiRDB を停止した時。
- 共用 RD エリアの場合、サーバごとに別の行として収集されます。
- 稼働していない非マネジャユニットの情報は収集できません。
- 稼働 OS が Windows で、IP アドレス引き継ぎなしのスタンバイ型系切り替え、または 1:1 スタンバイレス型系切り替えのユニットの場合、HiRDB 07-00 以降の場合だけユニットの情報を収集できます。
- pdfstatfs コマンド出力をデータソースとするフィールドについては、以下の注意事項があります。
 - 影響分散スタンバイレス型、あるいは 1:1 スタンバイレス型系切り替えを適用しているユニットにおいて、当該レコード収集と系切り替えが重なり pdfstatfs コマンドがエラーとなった場合、エラーとなったファイルシステム領域レコードの特定のフィールドの値は次の表に示す値となります。
 - 影響分散スタンバイレス型、あるいは 1:1 スタンバイレス型系切り替えを適用しているユニットにおいて、当該レコード収集と系切り替えが重なった場合、共通メッセージログに KAVF15071-

W メッセージを出力する場合があります。その場合、メッセージに出力されたサーバに該当するレコードの特定のフィールドの値は次の表に示す値となります。

・影響分散スタンバイレス型、あるいは 1:1 スタンバイレス型系切り替えを適用しているユニットにおいて、fil の統計情報を取得しているサーバが停止している場合、そのサーバに属するファイルシステム領域レコードの特定のフィールドの値は次の表に示す値となります。

・jpcagtbdef.ini ファイルの PDCONFPATH セクションの指定が誤っている場合、誤って指定したユニットに存在する HiRDB ファイルシステム領域レコードの特定のフィールドの値は次の表に示す値となります。

Manager 名(View 名)	値
HiRDB File System Area Type	空白

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	3600	○
Collection Offset	200	○
Log	No	○
LOGIF	空白	○
Over 10 Sec Collection Time	Yes	×

ODBC キーフィールド

- PI_RDFL_FS_NAME
- PI_RDFL_HIRDB_FILE_NAME
- PI_RDFL_RDAREA_NAME
- PI_RDFL_SERVER_NAME

ライフタイム

統計情報が出力開始されてから出力停止されるまで。

レコードサイズ

- 固定部：681 バイト
- 可変部：416 バイト

フィールド

pdstedit コマンドは統計解析ユーティリティを示し、括弧の中は編集項目を示します。

各項目の詳細については、マニュアル「HiRDB コマンドリファレンス」の `pdstedit` コマンドの実行結果の説明を参照してください。

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
AIO Read (AIO_READ)	非同期 READ 回数。	COPY	double	No	<code>pdstedit</code> (fil) のAIO READ値※4
AIO Write (AIO_WRITE)	非同期 WRITE 回数。	COPY	double	No	<code>pdstedit</code> (fil) のAIO WRITE値※4
Close (CLOSE)	クローズ発生回数。	COPY	double	No	<code>pdstedit</code> (fil) のCLOSE 値※4
HiRDB File Name (HIRDB_FILE_NAME)	HiRDB ファイル名。	COPY	string(31)	No	<code>pdstedit</code> (fil) のFILE NAME値から HiRDBファイル 名を取り出した 値※3
HiRDB File System Area Name (FS_NAME)	HiRDB ファイルシステム名（絶対 パス表示）。	COPY	string(166)	No	<code>pdstedit</code> (fil) のFILE NAME値から HiRDBファイル 名を取り除いた パス※2
HiRDB File System Area Type (FS_TYPE)	HiRDB ファイルシステム領域種別 (DB, DB (NOLOB), SDB, SVR)。	COPY	string(10)	No	<code>pdfstatfs -d</code> <code>-b FS_NAME</code> の initialize area kind 値
Host (HOST)	ホスト名。	COPY	string(33)	No	<code>pdstedit</code> (fil) のHOST 値
I/O Ops/sec (IO_RATE) ※6	1 秒当たりの I/O 回数。	HILO	float	No	$(\text{SYNC_READ} + \text{SYNC_WRITE} + \text{AIO_READ} + \text{AIO_WRITE}) / \text{divisor}$ ※5
Interval (INTERVAL)	情報が収集される間隔（単位は秒）。	COPY	ulong	No	Agent Collector
IO Error (IO_ERROR)	入出力エラー発生回数。	COPY	double	No	<code>pdstedit</code> (fil) のI/O ERROR値※4

6. レコード

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
List IO (LIST_IO)	システム固有情報。	COPY	double	No	pdstedit (fil) のLIST IO値※4
Open (OPEN)	オープン発生回数。	COPY	double	No	pdstedit (fil) のOPEN 値※4
RDAREA Name (RDAREA_NAME)	RD エリア名。	COPY	string(31)	No	pdstedit (fil) の RDAREA NAME値
Reads/sec (READS_RATE) ※6	1 秒当たりの読み込み処理回数。	HILO	float	No	(SYNC_READ + AIO_READ) / divisor ※5
Record Time (RECORD_TIME)	fil_DAT の LOG GET TIME で最初に出力されたグリニッジ標準時。	COPY	time_t	No	pdstedit (fil) のLOG GET TIME値※1
Record Type (INPUT_RECORD_TYPE)	レコード・タイプ識別子。	COPY	char(8)	No	Agent Collector
Server Name (SERVER_NAME)	サーバ名。	COPY	string(9)	No	pdstedit (fil) の SERVER値
Sync Read (SYNC_READ)	同期 READ 発生回数。	COPY	double	No	pdstedit (fil) のSYNC READ値※4
Sync Write (SYNC_WRITE)	同期 WRITE 回数。	COPY	double	No	pdstedit (fil) のSYNC WRITE値※4
Writes/sec (WRITES_RATE) ※6	1 秒当たりの書き込み処理回数。	HILO	float	No	(SYNC_WRITE + AIO_WRITE) / divisor ※5

注※1

fil_DAT 内のフィールド HOST, SERVER, FILE NAME, RDAREA NAME の組でグループ分けをしたとき、各グループで最初の LOG GET TIME を設定します。

fil_DAT 内のフィールド LOG GET TIME は「MM/DD/hh:mm:ss」の形式で出力されますが、PFM-Agent for HiRDB では time_t 型に変換して PI_RDFL レコードを作成します。そのとき、年は現在時刻を基に年のまたがりを考慮して設定されます。

注※2

絶対パス表示の HiRDB ファイル名から HiRDB ファイル名を取り除いて作成します。

(例) 「/users/hirdb_s/area/rdsys04/rddata01」から「/users/hirdb_s/area/rdsys04」を取得します。

注※3

絶対パス表示の HiRDB ファイル名から絶対パス表示の HiRDB ファイルシステム領域名を取り除いて作成します。

注※4

fil_DAT 内の HOST, SERVER, FILE NAME, RDAREA NAME の組でグループ分けをして、各フィールドの数値データを合算します。数値データではなく「*****」が出力されている場合はオーバーフローを意味しているので、固定値 0 が設定されます。

注※5

divisor は、次に示す算出式で計算します。

fil_DAT 内のフィールド HOST, SERVER, FILE NAME, RDAREA NAME の組でグループ分けをしたとき、各グループでの最後の LOG GET TIME – 前回収集時刻 + 1

注※6

履歴レポートで複数レコードの値を集約する場合（例えば、1 時間単位に収集したレコードを 1 日単位に表示する場合）、集約されるレコードに含まれる値の平均を計算します。Store データベースには末尾に_HI, _LO, _TOTAL, _COUNT が付いたフィールドが追加されます。また、View には (Max), (Min), (Total) が付いたフィールドが追加され、履歴レポートで利用できます。集約された値が表す平均値は、集約期間内でのフィールド値の総和 (_TOTAL が付いたフィールドの値) を収集レコード数 (_COUNT が付けられたフィールドの値) で割ったものとして定義されます。

RDAREA HiRDB File System Area (PI_RDFS)

機能

RDAREA HiRDB File System Area (PI_RDFS) レコードには、RD エリア用 HiRDB ファイルシステム領域についての、ある一定の時間を単位としたパフォーマンスデータが格納されます。このレコードは、複数インスタンスレコードです。HiRDB ファイルシステム領域と RD エリアの組み合わせごとに 1 行作成されます。

注意

- サーバまたはユニットの構成を変更した場合、最新の構成を反映するためにエージェントを再起動してください。
- このレコードに対してはリアルタイムレポートを作成しないでください。リアルタイムレポートを作成した場合には何も表示されません。
- Collection Interval は 25920000 秒（約 10 か月）以下にしてください。
- Collection Interval は次のように設定してください。

Collection Interval > 監視対象 HiRDB のシンクポイント発生間隔

このように設定しない場合、収集間隔中に fil の統計情報が出力されず、レコードの情報が取得できない場合があります。HiRDB のシンクポイント発生間隔については、マニュアル「HiRDB システム定義」のシンクポイントダンプの取得間隔に関する説明を参照してください。

- このレコードは HiRDB の fil 統計情報が収集されている期間だけ収集できます。収集開始、収集停止の契機はそれぞれ次のとおりです。

<HiRDB の統計情報の出力が開始される契機>

- HiRDB 稼働中に pdstbegin コマンドを実行した時。
- システム共通定義 pdsys で、pdstbegin オペランドを指定して HiRDB を開始した時。

<HiRDB の統計情報の出力が停止される契機>

- HiRDB 稼働中に pdstend コマンドを実行した時。
- HiRDB を停止した時。

- 共用 RD エリアの場合、サーバごとに別の行として収集されます。

- 稼働していないユニットの情報は収集できません。

- 稼働 OS が Windows で、IP アドレス引き継ぎなしのスタンバイ型系切り替え、または 1:1 スタンバイレス型系切り替えのユニットの場合、HiRDB 07-00 以降の場合だけユニットの情報を収集できます。

- pdfstatfs コマンド出力をデータソースとするフィールドについては、以下の注意事項があります。
 - 影響分散スタンバイレス型、あるいは 1:1 スタンバイレス型系切り替えを適用しているユニットにおいて、当該レコード収集と系切り替えが重なり pdfstatfs コマンドがエラーとなった場合、エラーとなったファイルシステム領域レコードの特定のフィールドの値は次の表に示す値となります。

- ・影響分散スタンバイレス型、あるいは1:1スタンバイレス型系切り替えを適用しているユニットにおいて、当該レコード収集と系切り替えが重なった場合、共通メッセージログにKAVF15071-Wメッセージを出力する場合があります。その場合、メッセージに出力されたサーバに該当するコードの特定のフィールドの値は次の表に示す値となります。
- ・影響分散スタンバイレス型、あるいは1:1スタンバイレス型系切り替えを適用しているユニットにおいて、filの統計情報を取得しているサーバが停止している場合、そのサーバに属するファイルシステム領域レコードの特定のフィールドの値は次の表に示す値となります。
- ・jpcagtbdef.iniファイルのPDCONFPATHセクションの指定が誤っている場合、誤って指定したユニットに存在するHiRDBファイルシステム領域レコードの特定のフィールドの値は次の表に示す値となります。

Manager名(View名)	値
HiRDB File System Area Type	空白
Mbytes	0
Free Mbytes	0
Used Mbytes	0
Free %	0
Used %	0

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	3600	○
Collection Offset	220	○
Log	No	○
LOGIF	空白	○
Over 10 Sec Collection Time	Yes	×

ODBC キーフィールド

- PI_RDFS_FS_NAME
- PI_RDFS_RDAREA_NAME
- PI_RDFS_SERVER_NAME

ライフタイム

統計情報が出力開始されてから出力停止されるまで。

レコードサイズ

- 固定部：681 バイト
- 可変部：417 バイト

フィールド

`pdstedit` コマンドは統計解析ユーティリティを示し、括弧の中は編集項目を示します。

各項目の詳細については、マニュアル「HiRDB コマンドリファレンス」の `pdstedit` コマンドの実行結果の説明を参照してください。

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
AIO Read (AIO_READ)	非同期 READ 回数。	COPY	double	No	<code>pdstedit</code> (fil) の AIO READ 値※3
AIO Write (AIO_WRITE)	非同期 WRITE 回数。	COPY	double	No	<code>pdstedit</code> (fil) の AIO WRITE 値※3
Close (CLOSE)	クローズ発生回数。	COPY	double	No	<code>pdstedit</code> (fil) の CLOSE 値※3
Free % (PERCENT_FREE_US AGE)	(ユーザー領域中の未使用領域 (HiRDB ファイルとして割り当てら れていない領域) の容量/ユーザー領 域の総量) *100 (単位は%)。	COPY	float	No	100 * FREE_BYTES/ BYTES
Free MBytes (FREE_BYTES)	ユーザー領域中の未使用領域 (HiRDB ファイルとして割り当てら れていない領域) の容量 (単位はメ ガバイト)。	COPY	double	No	<code>pdfstatfs</code> -d -b FS_NAME の remain user area capacity 値
HiRDB File System Area Name (FS_NAME)	HiRDB ファイルシステム領域名 (絶 対パス表示)。	COPY	string(166)	No	<code>pdstedit</code> (fil) の FILE NAME 値から HiRDB ファイル 名を取り除いた パス※2
HiRDB File System Area Type (FS_TYPE)	HiRDB ファイルシステム領域種別 (DB, DB (NOLOB), SDB, SVR)。	COPY	string(10)	No	<code>pdfstatfs</code> -d -b FS_NAME の initialize area kind 値
Host (HOST)	ホスト名。	COPY	string(33)	No	<code>pdstedit</code> (fil) の HOST 値

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
I/O Ops/sec (IO_RATE) ^{※5}	1 秒当たりの I/O 回数。	HILO	float	No	(SYNC_READ + SYNC_WRITE + AIO_READ + AIO_WRITE) / divisor ^{※4}
Interval (INTERVAL)	情報が収集される間隔（単位は秒）。	COPY	ulong	No	Agent Collector
IO Error (IO_ERROR)	入出力エラー発生回数。	COPY	double	No	pdstedit (fil) の IO ERROR 値 ^{※3}
List IO (LIST_IO)	システム固有情報。	COPY	double	No	pdstedit (fil) の LIST IO 値 ^{※3}
Mbytes (BYTES)	HiRDB ファイルシステム領域中の ユーザー領域の総量（単位はメガバ イト）。	COPY	double	No	pdfstatfs -d -b FS_NAME の user area capacity 値
Open (OPEN)	オープン発生回数。	COPY	double	No	pdstedit (fil) の OPEN 値 ^{※3}
RDAREA Name (RDAREA_NAME)	RD エリア名。	COPY	string(31)	No	pdstedit (fil) の RDAREA NAME 値
Reads/sec (READS_RATE) ^{※5}	1 秒当たりの読み込み処理回数。	HILO	float	No	(SYNC_READ + AIO_READ) / divisor
Record Time (RECORD_TIME)	fil_DAT の LOG GET TIME で最 初に出力されたグリニッジ標準時。	COPY	time_t	No	pdstedit (fil) の LOG GET TIME 値 ^{※1}
Record Type (INPUT_RECORD_T YPE)	レコードタイプ識別子。	COPY	char(8)	No	Agent Collector
Server Name (SERVER_NAME)	サーバ名。	COPY	string(9)	No	pdstedit (fil) の SERVER 値
Sync Read (SYNC_READ)	同期 READ 発生回数。	COPY	double	No	pdstedit (fil) の SYNC READ 値 ^{※3}

6. レコード

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
Sync Write (SYNC_WRITE)	同期 WRITE 回数。	COPY	double	No	pdstedit (fil) のSYNC WRITE 値※3
Used % (PERCENT_USED)	(ユーザー領域中の使用中領域の容量/ユーザー領域の総量) *100 (単位は%)。	COPY	float	No	100 * USED_BYTES/ BYTES
Used MBytes (USED_BYTES)	ユーザー領域中の使用中領域の容量(単位はメガバイト)。	COPY	double	No	BYTES- FREE_BYTES
Writes/sec (WRITES_RATE) ※5	1 秒当たりの書き込み処理回数。	HILO	float	No	(SYNC_WRITE + AIO_WRITE) / divisor※4

注※1

fil_DAT 内のフィールド HOST, SERVER, FILE NAME から HiRDB ファイル名を取り除いた HiRDB ファイルシステム領域名, RDAREA NAME の組でグループ分けをしたとき, 各グループで最初の LOG GET TIME を設定します。

fil_DAT 内のフィールド LOG GET TIME は「MM/DD/hh:mm:ss」の形式で出力されますが, PFM-Agent for HiRDB では time_t 型に変換して PI_RDFS レコードを作成します。そのとき, 年は現在時刻を基に年のまたがりを考慮して設定されます。

注※2

絶対パス表示の HiRDB ファイル名から HiRDB ファイル名を取り除いて作成します。

(例) 「/users/hirdb_s/area/rdsys04/rddata01」から「/users/hirdb_s/area/rdsys04」を取得します。

注※3

fil_DAT 内の HOST, SERVER, FILE NAME から HiRDB ファイル名を取り除いた HiRDB ファイルシステム領域名, RDAREA NAME の組でグループ分けをして, 各フィールドの数値データを合算します。数値データでなく「*****」が出力されている場合はオーバーフローを意味しているので, 固定値 0 が設定されます。

注※4

divisor は, 次に示す算出式で計算します。

fil_DAT 内のフィールド HOST, SERVER, FILE NAME, RDAREA NAME の組でグループ分けをしたとき, 各グループでの最後の LOG GET TIME

- 統計情報管理テーブル内の最終統計ログレコードの取得時刻

+ 1

注※5

履歴レポートで複数レコードの値を集約する場合(例えば, 1 時間単位に収集したレコードを 1 日単位に表示する場合), 集約されるレコードに含まれる値の平均を計算します。Store データベースには未

尾に_HI, _LO, _TOTAL, _COUNT が付いたフィールドが追加されます。また、View には (Max), (Min), (Total) が付いたフィールドが追加され、履歴レポートで利用できます。集約された値が表す平均値は、集約期間内でのフィールド値の総和 (_TOTAL が付いたフィールドの値) を収集レコード数 (_COUNT が付けられたフィールドの値) で割ったものとして定義されます。

RDAREA Status (PI_RDST)

機能

RDAREA Status (PI_RDST) レコードには、RD エリアについての、ある一定の時間を単位としたパフォーマンスデータが格納されます。このレコードは、複数インスタンスレコードです。RD エリアごとに 1 行作成されます。

注意

- サーバまたはユニットの構成を変更した場合、最新の構成を反映するためにエージェントを再起動してください。
 - HiRDB の性能に影響を与えないために、Collection Interval は少なくとも 600 秒以上に設定してください。
 - 共用 RD エリアの場合、更新できるバックエンドサーバについての情報だけが収集されます。
 - RD エリア名の前方および後方に空白文字を含む RD エリアについては、動作が保証されません。
 - このレコードは、jpcagtbdef.ini ファイルによって収集対象の RD エリアを選択できます。
jpcagtbdef.ini ファイルを編集しない場合は、すべての RD エリアに関するパフォーマンスデータを収集します。
- jpcagtbdef.ini ファイルの設定方法については、「[2.4 セットアップ](#)」または「[3.4 セットアップ](#)」のインスタンス設定ファイルの設定に関する説明を参照してください。
- PI_RDDS レコードは、このレコードで収集するすべての情報を含みます。このため、PI_RDDS レコードで収集している場合は、このレコードを収集する必要はありません。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	3600	○
Collection Offset	600	○
Log	No	○
LOGIF	空白	○
Over 10 Sec Collection Time	No	×

ODBC キーフィールド

- PI_RDST_RDAREA_NAME

ライフタイム

RD エリアの作成から削除まで。

レコードサイズ

- 固定部：681 バイト
- 可変部：228 バイト

フィールド

各項目の詳細については、マニュアル「HiRDB コマンドリファレンス」の `pddb1s -r ALL -a` コマンドの実行結果の説明を参照してください。

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
Buffer Name (BUFFER_NAME)	グローバルバッファ名。	COPY	string(17)	No	<code>pdbuf1s -k def</code> のBUFFNAME値※3
Extension Segment Size (EXTENSION_SEGM ENT_SIZE)	増分セグメント数。RD エリアの増分指定がない場合は 0。	COPY	ulong	No	ディクショナリ表※1
File Count (FILE_COUNT)	HiRDB ファイル数。	COPY	ulong	No	ディクショナリ表※1
Free % (PERCENT_FREE)	未使用セグメントの割合（単位は%）。	COPY	float	No	$100 * \frac{\text{Unused Area Seg}}{\text{Total Area Seg}}$ ※2
Free MBytes (FREE_BYTES)	未使用セグメントの総容量（単位はメガバイト）。	COPY	double	No	$\text{Unused Area Seg} * \text{Size Of Page} * \text{Segment Size}$ ※2
I/O Ops/sec (IO_RATE)	予備領域。	HILO	float	No	常に 0
Index Count (N_INDEX)	格納インデックス数（定義数）。	COPY	ulong	No	ディクショナリ表※1
Interval (INTERVAL)	情報が収集される間隔（単位は秒）。	COPY	ulong	No	Agent Collector
Mbytes (BYTES)	RD エリア容量（単位はメガバイト）。	COPY	double	No	$\text{Total Area Seg} * \text{Size Of Page} * \text{Segment Size}$ ※2
Page Size (SIZE_OF_PAGE)	ページ長（単位はバイト）。	COPY	ulong	No	ディクショナリ表※1

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
RDAREA Name (RDAREA_NAME)	RD エリア名。	COPY	string(31)	No	pddb1s -r ALL -aのRDAREA値
RDAREA Status (RDAREA_STATUS)	RD エリアの状態。表示される値は次のとおり。 CLOSE, CLOSE HOLD, CLOSE HOLD (INQ), CLOSE HOLD (CMD), CLOSE HOLD (BU), CLOSE HOLD (BU I), CLOSE HOLD (BU W), CLOSE HOLD (BU IW), CLOSE HOLD (SYNC), CLOSE HOLD (ORG), CLOSE ACCEPT-HOLD, HOLD, HOLD (INQ), HOLD (CMD), HOLD (BU), HOLD (BU I), HOLD (BU W), HOLD (BU IW), HOLD (SYNC), HOLD (ORG), ACCEPT-HOLD, OPEN	COPY	string(18)	No	pddb1s -r ALL -aのSTATUS値
RDAREA Type (RDAREA_TYPE)	RD エリア種別。表示される値は次のとおり。 MAST, DDIR, DDIC, DLOB, USER, ULOB, LIST, RGST, RLOB	COPY	string(5)	No	pddb1s -r ALL -aのTYPE値
Reads/sec (READS_RATE)	予備領域。	HILO	float	No	常に 0
Record Time (RECORD_TIME)	レコードが作成された時刻。	COPY	time_t	No	Agent Collector
Record Type (INPUT_RECORD_TYPE)	レコードタイプ識別子。	COPY	char(8)	No	Agent Collector
Segment Size (SEGMENT_SIZE)	セグメントサイズ (単位はページ)。	COPY	ulong	No	ディクショナリ表※1
Server Name (SERVER_NAME)	サーバ名。	COPY	string(9)	No	pddb1s -r ALL -aのSERVER値
Table Count (N_TABLE)	格納表数 (定義数)。	COPY	ulong	No	ディクショナリ表※1
Total RDAREA Segments (TOTAL_AREA_SEG)	RD エリア内の全セグメント数。	COPY	double	No	pddb1s -r ALL -aのSEGMENT値の分母※2

6. レコード

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
Unused RDAREA Segments (UNUSED_AREA_SEG)	RD エリア内の未使用セグメント数。	COPY	double	No	pddbls -r ALL -aのSEGMENT値の分子※2
Used % (PERCENT_USED)	使用中セグメントの割合（単位は%）。	COPY	float	No	$100 * (TOTAL_AREA_SEG - UNUSED_AREA_SEG) / TOTAL_AREA_SEG$ ※2
Used MBytes (USED_BYTES)	使用中セグメントの総容量（単位はメガバイト）。	COPY	double	No	$(TOTAL_AREA_SEG - UNUSED_AREA_SEG) * SIZE_OF_PAGE * SEGMENT_SIZE$ ※2
Used RDAREA Segments (USED_AREA_SEG)	RD エリア内の使用中セグメント数。	COPY	ulong	No	$TOTAL_AREA_SEG - UNUSED_AREA_SEG$ ※2
Writes/sec (WRITES_RATE)	予備領域。	HILO	float	No	常に 0

注※1

次に示す SQL 文の結果です。

```
select RDAREA_NAME, RDAREA_ID, RDAREA_TYPE, PAGE_SIZE, SEGMENT_SIZE, FILE_COUNT, N_TABLE,
N_INDEX, EXTENSION_SEGMENT_SIZE from "MASTER".SQL_RDAREAS
```

注※2

RD エリアの状態によって pddbls の出力結果に SEGMENT 情報が出力されない場合があります。このときのフィールドの設定値は次のようになります。なお、RD エリアの状態に対する SEGMENT 行の表示有無については、マニュアル「HiRDB コマンドリファレンス」の pddbls について説明している章を参照してください。

フィールド名	設定値
Free %	0
Free MBytes	0
Mbytes	Page Size * Segment Size / 1048576
Total RDAREA Segments	0

6. レコード

フィールド名	設定値
Unused RDAREA Segments	0
Used %	100
Used MBytes	Page Size * Segment Size / 1048576
Used RDAREA Segments	1

注※3

RD エリア種別が次のどれかである場合には、ディレクトリ部のグローバルバッファ名だけを格納します。ディレクトリ部については、マニュアル「HiRDB システム定義」のグローバルバッファに関するオペランドについて説明している章を参照してください。

- データディクショナリ LOB 用 RD エリア
- ユーザー LOB 用 RD エリア
- レジストリ LOB 用 RD エリア

Server Lock Control Status (PI_LKST)

機能

Server Lock Control Status (PI_LKST) レコードには、各サーバの排他資源管理テーブルの使用率についての、ある一定の時間を単位としたパフォーマンスデータが格納されます。このレコードは、複数インスタンスレコードです。サーバごとに 1 行作成されます。

注意

- ・ サーバまたはユニットの構成を変更した場合、最新の構成を反映するためにエージェントを再起動してください。
- ・ HiRDB の性能に影響を与えないために、Collection Interval は少なくとも 60 秒以上に設定してください。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	3600	○
Collection Offset	840	○
Log	Yes	○
LOGIF	空白	○
Over 10 Sec Collection Time	No	×

ODBC キーフィールド

- ・ PI_LKST_HOST
- ・ PI_LKST_SERVER_NAME

ライフタイム

サーバの作成から削除まで。

レコードサイズ

- ・ 固定部：681 バイト
- ・ 可変部：52 バイト

フィールド

各項目の詳細については、マニュアル「HiRDB コマンドリファレンス」の `pdls -d lck -p` コマンドの実行結果の説明を参照してください。

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
Host (HOST)	ホスト名。	COPY	string(33)	No	<code>pdls -d lck -p</code> のHOSTNAME値
Interval (INTERVAL)	情報が収集される間隔（単位は秒）。	COPY	ulong	No	Agent Collector
Max Lock Tables (MAX_LOCK_TABLES)	使用できる最大排他資源管理テーブル数。	COPY	long	No	<code>pdls -d lck -p</code> のTOTAL値
Record Time (RECORD_TIME)	レコードが作成された時刻。	COPY	time_t	No	Agent Collector
Record Type (INPUT_RECORD_TYPE)	レコードタイプ識別子。	COPY	char(8)	No	Agent Collector
Server Name (SERVER_NAME)	サーバ名。	COPY	string(9)	No	<code>pdls -d lck -p</code> のSVID値
Used Lock Tables (USED_LOCK_TABLES)	現在使用中の排他資源管理テーブル数。	COPY	long	No	<code>pdls -d lck -p</code> のUSED値
Utilization % (UTILIZATION_PERCENT)	排他資源管理テーブル使用率（単位は%）。	COPY	short	No	<code>pdls -d lck -p</code> のRATE値

System Summary Record (PI)

機能

System Summary Record (PI) レコードには、次の HiRDB パフォーマンス統計情報についての、ある一定の時間を単位としたパフォーマンスデータが格納されます。このレコードは、単数インスタンスレコードです。

- ・ 排他資源管理テーブルの使用率
- ・ 状態別のプロセス数

注意

- ・ サーバまたはユニットの構成を変更した場合、最新の構成を反映するためにエージェントを再起動してください。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	60	○
Collection Offset	0	○
Log	Yes	○
LOGIF	空白	○
Over 10 Sec Collection Time	No	×

ODBC キーフィールド

なし。

ライフタイム

なし。

レコードサイズ

- ・ 固定部：771 バイト
- ・ 可変部：0 バイト

フィールド

各項目の詳細については、マニュアル「HiRDB コマンドリファレンス」の `pdl s -d lck -p` コマンドと `pdl s -d rpc -a` コマンドとの実行結果の説明を参照してください。

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
Active Server Processes (ACTIVE_SERVER_P ROCESSES)	処理動作中のサーバプロセスの総数。	COPY	long	No	<code>pdls -d rpc -a</code> のSTATUS値が ACTIVEである行数※
Avg Lock Tables (AVG_LOCK_TABLE S)	すべてのサーバ内の排他資源テーブルの平均数。	HILO	long	No	<code>pdls -d lck -p</code> のUSED値の平均値
Avg Utilization % (AVG_UTILIZATION _PERCENT)	各サーバ内の排他資源テーブルの平均使用率（単位は%）。	COPY	short	No	$100 * \text{pdls -d lck -p}$ のUSED値の総和/ pdls -d lck -p のTOTAL値の総和
Client Processes (CLIENT_PROCESSE S)	サーバに接続されたクライアントプロセスの総数。	COPY	long	No	<code>pdls -d rpc -a</code> のCLTPID値が空白でないプロセス数※
Interval (INTERVAL)	情報が収集される間隔（単位は秒）。	COPY	ulong	No	Agent Collector
Max Lock Tables (MAX_LOCK_TABLE S)	すべてのサーバ内の排他資源テーブルの最大数。	HILO	long	No	<code>pdls -d lck -p</code> のUSED値の最大値
Max Utilization % (MAX_UTILIZATION _PERCENT)	各サーバ内の排他資源テーブルの最大使用率（単位は%）。	COPY	short	No	<code>pdls -d lck -p</code> のRATE値の最大値
Min Lock Tables (MIN_LOCK_TABLES)	すべてのサーバ内の排他資源テーブルの最小数。	HILO	long	No	<code>pdls -d lck -p</code> のUSED値の最小値
Min Utilization % (MIN_UTILIZATION _PERCENT)	各サーバ内の排他資源テーブルの最小使用率（単位は%）。	COPY	short	No	<code>pdls -d lck -p</code> のRATE値の最小値
Processes in Queue (PROCESSES_IN_QUE UE)	キュー待ちで処理中断中のサーバプロセスの総数。	COPY	long	No	<code>pdls -d rpc -a</code> のSTATUS値が SUSPEND(QUE)である行数※
Record Time (RECORD_TIME)	レコードが作成された時刻。	COPY	time_t	No	Agent Collector
Record Type (INPUT_RECORD_T YPE)	レコードタイプ識別子。	COPY	char(8)	No	Agent Collector

6. レコード

注※

レコード収集時に、HiRDB 内で処理状態を更新中のプロセスが存在し、情報が取得できない場合があります。この場合そのプロセスの情報は収集しないため、プロセス数が実際の数より少なくなる場合があります。

7

メッセージ

この章では、PFM - Agent for HiRDB のメッセージ形式、出力先一覧、syslog と Windows イベントログの一覧、およびメッセージ一覧について説明します。

7.1 メッセージの出力形式

PFM - Agent for HiRDB が output するメッセージの形式を説明します。メッセージは、メッセージ ID とそれに続くメッセージテキストで構成されます。形式を次に示します。

KAVFnnnnn-Yメッセージテキスト

メッセージ ID は、次の内容を示しています。

K

システム識別子を示します。

AVF

PFM - Agent のメッセージであることを示します。

nnnnn

メッセージの通し番号を示します。PFM - Agent for HiRDB のメッセージ番号は、「15xxx」です。

Y

メッセージの種類を示します。

- E : エラー

処理は中止されます。

- W : 警告

メッセージ出力後、処理は続けられます。

- I : 情報

ユーザーに情報を知らせます。

- Q : 応答

ユーザーに応答を促します。

メッセージの種類と syslog の priority レベルとの対応を次に示します。

-E

- レベル : LOG_ERR
- 意味 : エラーメッセージ。

-W

- レベル : LOG_WARNING
- 意味 : 警告メッセージ。

-I

- レベル : LOG_INFO
- 意味 : 付加情報メッセージ。

-Q

(出力されない)

メッセージの種類と Windows イベントログの種類との対応を次に示します。

-E

- レベル：エラー
- 意味：エラーメッセージ。

-W

- レベル：警告
- 意味：警告メッセージ。

-I

- レベル：情報
- 意味：附加情報メッセージ。

-Q

(出力されない)

7.2 メッセージの記載形式

このマニュアルでのメッセージの記載形式を示します。メッセージテキストで太字になっている部分は、メッセージが表示される状況によって表示内容が変わることを示しています。また、メッセージをメッセージ ID 順に記載しています。記載形式の例を次に示します。

メッセージ ID

英語メッセージテキスト

日本語メッセージテキスト

メッセージの説明文

(S)

システムの処置を示します。

(O)

メッセージが表示されたときの、オペレーターの処置を示します。

参考

システム管理者がオペレーターから連絡を受けた場合は、「8. トラブルへの対処方法」を参照してログ情報を採取し、初期調査をしてください。

トラブル要因の初期調査をする場合は、OS のログ情報（Windows の場合は Windows イベントログ、UNIX の場合は syslog）や、PFM - Agent for HiRDB が出力する各種ログ情報を参照してください。これらのログ情報でトラブル発生時間帯の内容を参照して、トラブルを回避したり、トラブルに対処したりしてください。また、トラブルが発生するまでの操作方法などを記録してください。同時に、できるだけ再現性の有無を確認するようにしてください。

注意事項

メッセージ中で使用する「システム管理者に連絡してください。」とは、システム運用管理者、システム責任者、システムエンジニアまたは問い合わせ窓口に連絡することを示します。

7.3 メッセージの出力先一覧

ここでは、PFM - Agent for HiRDB が出力する各メッセージの出力先を一覧で示します。

表中では、出力先を凡例のように表記しています。

(凡例)

○：出力する

-：出力しない

表 7-1 PFM - Agent for HiRDB のメッセージの出力先一覧

メッセージ ID	出力先				
	syslog	Windows イベントログ	共通メッセージログ	標準出力	標準エラー出力
KAVF15001	○	○	○	-	-
KAVF15004	○	○	○	-	-
KAVF15005	○	○	○	-	-
KAVF15006	○	○	○	-	-
KAVF15007	○	○	○	-	-
KAVF15008	-	-	○	-	-
KAVF15009	-	-	○	-	-
KAVF15010	○	○	○	-	-
KAVF15012	○	○	○	-	-
KAVF15013	○	○	○	-	-
KAVF15018	-	-	○	-	-
KAVF15019	-	-	○	-	-
KAVF15020	○	○	○	-	-
KAVF15022	-	-	○	-	-
KAVF15023	○	○	○	-	-
KAVF15024	○	○	-	-	-
KAVF15025	○	○	○	-	-
KAVF15026	-	-	○	-	-
KAVF15027	○	○	○	-	-
KAVF15028	○	○	○	-	-
KAVF15029	○	○	○	-	-
KAVF15030	○	○	○	-	-

メッセージID	出力先				
	syslog	Windows イベントログ	共通メッセージログ	標準出力	標準エラー出力
KAVF15031	○	○	○	—	—
KAVF15033	○	○	○	—	—
KAVF15035	○	○	○	—	—
KAVF15036	—	—	○	—	—
KAVF15040	○	○	○	—	—
KAVF15041	○	○	○	—	—
KAVF15043	○	○	○	—	—
KAVF15044	○	○	○	—	—
KAVF15045	○	○	○	—	—
KAVF15046	○	○	○	—	—
KAVF15047	—	—	○	—	—
KAVF15048	—	—	○	—	—
KAVF15049	○	○	○	—	—
KAVF15050	○	○	○	—	—
KAVF15051	○	○	○	—	—
KAVF15052	○	○	○	—	—
KAVF15053	—	—	○	—	—
KAVF15054	—	—	○	—	—
KAVF15055	—	—	○	—	—
KAVF15056	○	○	○	—	—
KAVF15057	○	○	○	—	—
KAVF15058	○	○	○	—	—
KAVF15059	○	○	○	—	—
KAVF15060	○	○	○	—	—
KAVF15061	○	○	○	—	—
KAVF15062	○	○	○	—	—
KAVF15063	○	○	○	—	—
KAVF15065	○	○	○	—	—
KAVF15066	—	—	○	—	—
KAVF15068	○	○	○	—	—

メッセージID	出力先				
	syslog	Windows イベントログ	共通メッセージログ	標準出力	標準エラー出力
KAVF15071	—	—	○	—	—
KAVF15073	—	—	○	—	—
KAVF15076	○	○	○	—	—
KAVF15077	○	○	○	—	—
KAVF15078	○	○	○	—	—

7.4 syslog と Windows イベントログの一覧

PFM - Agent for HiRDB が UNIX の syslog と Windows イベントログに出力するメッセージ情報の一覧を示します。

syslog は、syslog ファイルに出力されます。syslog ファイルの格納場所については、syslog デーモンコンフィギュレーションファイル（デフォルトは /etc/syslogd.conf）を参照してください。

Windows イベントログは、[イベントビューア] ウィンドウのアプリケーションログに表示されます。

参考

[イベントビューア] ウィンドウは、Windows の [スタート] メニューから表示される [管理ツール] – [イベントビューア] を選択することで表示できます。

PFM - Agent for HiRDB が output するイベントの場合、[イベントビューア] ウィンドウの [ソース] に識別子「PFM-HiRDB」が表示されます。

PFM - Agent for HiRDB が syslog と Windows イベントログに出力するメッセージ情報の一覧を次の表に示します。

表 7-2 syslog と Windows イベントログ出力メッセージ情報一覧

メッセージ ID	syslog		Windows イベントログ	
	ファシリティ	レベル	イベント ID	種類
KAVF15001-E	LOG_DAEMON	LOG_ERR	15001	エラー
KAVF15004-I	LOG_DAEMON	LOG_INFO	15004	情報
KAVF15005-I	LOG_DAEMON	LOG_INFO	15005	情報
KAVF15006-E	LOG_DAEMON	LOG_ERR	15006	エラー
KAVF15007-E	LOG_DAEMON	LOG_ERR	15007	エラー
KAVF15010-E	LOG_DAEMON	LOG_ERR	15010	エラー
KAVF15012-E	LOG_DAEMON	LOG_ERR	15012	エラー
KAVF15013-E	LOG_DAEMON	LOG_ERR	15013	エラー
KAVF15020-W	LOG_DAEMON	LOG_WARNING	15020	警告
KAVF15023-E	LOG_DAEMON	LOG_ERR	15023	エラー
KAVF15024-E	LOG_DAEMON	LOG_ERR	15024	エラー
KAVF15025-E	LOG_DAEMON	LOG_ERR	15025	エラー
KAVF15027-E	LOG_DAEMON	LOG_ERR	15027	エラー
KAVF15028-E	LOG_DAEMON	LOG_ERR	15028	エラー

メッセージID	syslog		Windows イベントログ	
	ファシリティ	レベル	イベントID	種類
KAVF15029-E	LOG_DAEMON	LOG_ERR	15029	エラー
KAVF15030-E	LOG_DAEMON	LOG_ERR	15030	エラー
KAVF15031-E	LOG_DAEMON	LOG_ERR	15031	エラー
KAVF15033-E	LOG_DAEMON	LOG_ERR	15033	エラー
KAVF15035-E	LOG_DAEMON	LOG_ERR	15035	エラー
KAVF15040-E	LOG_DAEMON	LOG_ERR	15040	エラー
KAVF15041-E	LOG_DAEMON	LOG_ERR	15041	エラー
KAVF15043-W	LOG_DAEMON	LOG_WARNING	15043	警告
KAVF15044-W	LOG_DAEMON	LOG_WARNING	15044	警告
KAVF15045-E	LOG_DAEMON	LOG_ERR	15045	エラー
KAVF15046-E	LOG_DAEMON	LOG_ERR	15046	エラー
KAVF15049-E	LOG_DAEMON	LOG_ERR	15049	エラー
KAVF15050-E	LOG_DAEMON	LOG_ERR	15050	エラー
KAVF15051-E	LOG_DAEMON	LOG_ERR	15051	エラー
KAVF15052-E	LOG_DAEMON	LOG_ERR	15052	エラー
KAVF15056-E	LOG_DAEMON	LOG_ERR	15056	エラー
KAVF15057-E	LOG_DAEMON	LOG_ERR	15057	エラー
KAVF15058-E	LOG_DAEMON	LOG_ERR	15058	エラー
KAVF15059-W	LOG_DAEMON	LOG_WARNING	15059	警告
KAVF15060-W	LOG_DAEMON	LOG_WARNING	15060	警告
KAVF15061-E	LOG_DAEMON	LOG_ERR	15061	エラー
KAVF15062-W	LOG_DAEMON	LOG_WARNING	15062	警告
KAVF15063-W	LOG_DAEMON	LOG_WARNING	15063	警告
KAVF15065-W	LOG_DAEMON	LOG_WARNING	15065	警告
KAVF15068-W	LOG_DAEMON	LOG_WARNING	15068	警告
KAVF15076-I	LOG_DAEMON	LOG_INFO	15076	情報
KAVF15077-W	LOG_DAEMON	LOG_WARNING	15077	警告
KAVF15078-W	LOG_DAEMON	LOG_WARNING	15078	警告

7.5 メッセージ一覧

PFM - Agent for HiRDB が出力するメッセージと対処方法について説明します。PFM - Agent for HiRDB のメッセージ一覧を次に示します。

KAVF15001-E

The PFM Agent for HiRDB does not support this HiRDB version. HiRDB version: aa...aa
PFM Agent for HiRDB はこのバージョンの HiRDB をサポートしていません。HiRDB バージョン: aa...aa

05-06 より前の HiRDB バージョンに対して PFM - Agent for HiRDB が実行されました。

aa...aa :

HiRDB バージョン

(S)

Agent Collector の処理を終了します。

(O)

05-06 以降のバージョンの HiRDB を使用してください。

KAVF15004-I

Agent Collector has started.

Agent Collector が起動しました。

エージェントコレクタ・サービスが開始しました。

KAVF15005-I

Agent Collector has stopped.

Agent Collector が停止しました。

エージェントコレクタ・サービスが停止しました。

KAVF15006-E

HiRDB command aa...aa returned an error. message ID : bb...bb

HiRDB コマンド aa...aa がエラーを返しました。メッセージ ID : bb...bb

HiRDB コマンドがエラーを返しました。コマンド実行が終了したあとに表示されます。

HiRDB コマンドがデータを得られないでエラーメッセージを返す場合、PFM - Agent for HiRDB が実行するメッセージだけがログファイルへ出力されます。HiRDB 自体はシステムログへエラーメッセージを出

力します。メッセージが HiRDB フォーマットで表示されます。エラーメッセージの記述については、HiRDB のマニュアルを参照してください。

aa...aa :

パラメーター付き HiRDB コマンド名

bb...bb :

HiRDB に返されたメッセージ ID

(S)

PFM - Web Console では収集データは表示されません。PFM - Web Console のグラフ上では、取得に失敗したデータは表示されません。PFM - Web Console の表でも、そのデータに関する行は表示されません。

(O)

HiRDB が起動されているかどうかを確認してください。

KAVF15007-E

Could not allocate memory.

メモリーを割り当てられませんでした。

メモリー不足です。

(S)

Agent Collector の処理を終了します。

(O)

システム資源が十分であるかどうかを確認してください。

KAVF15008-I

NotifyEvent for aa...aa arrived, date : bb...bb, time : cc...cc.

NotifyEvent が呼ばされました。イベント=aa...aa, 日付：bb...bb, 時刻：cc...cc

ConfigRequest, または ConfigUpdate リクエストが到着しました。

aa...aa :

イベント (ini ファイル読み込み, ini ファイル書き込み)

bb...bb :

日付 (YYYYMMDD フォーマット)

cc...cc :

時刻 (HH:MM:SS フォーマット)

KAVF15009-I

NotifyEvent for aa...aa was completed, date : bb...bb, time : cc...cc.

NotifyEvent が終了しました。イベント=aa...aa, 日付：bb...bb, 時刻：cc...cc

ConfigRequest, または ConfigUpdate リクエストに対する処理が終了しました。

aa...aa :

イベント (ini ファイル読み込み, ini ファイル書き込み)

bb...bb :

日付 (YYYYMMDD フォーマット)

cc...cc :

時刻 (HH:MM:SS フォーマット)

KAVF15010-E

Command executable not found : aa...aa

コマンドの実行可能ファイルが見つかりませんでした : aa...aa

コマンドの実行可能ファイルが見つかりません。コマンド実行前に表示されます。

aa...aa :

オプションなしのコマンド名

(S)

リクエストを無視して、実行を続行します。

(O)

- コマンドの実行可能ファイルがあるかどうかを確認してください。
- HiRDB が起動されているかどうかを確認してください。

KAVF15012-E

Writing to file aa...aa failed.

ファイル aa...aa への書き込みに失敗しました。

あるファイルに対して書き込みができません (jpcagt.ini またはデータ検証ファイル)。

aa...aa :

ファイル名

(S)

処理を続行します。

(O)

ファイルの権限を確認してください。また、ファイル容量を超えていないか、ディスクが満杯でないかどうかを確認してください。

KAVF15013-E

File not found. Filename : aa...aa

ファイルが見つかりませんでした。ファイル名：aa...aa

ファイルが見つかりませんでした。

aa...aa :

ファイル名

(S)

Agent Collector の処理を終了します。

(O)

監視対象 HiRDB のシステムマネージャが稼働していないホスト（非マネージャホスト）に PFM - Agent for HiRDB がインストールされていることを確認してください。インストールされている場合は、保守資料を採取したあと、システム管理者に連絡してください。

KAVF15018-I

Started processing request for record: aa...aa, time: bb...bb, instance: cc...cc, type: dd...dd.

収集を開始しました。レコード: aa...aa, 時刻: bb...bb, インスタンス: cc...cc, 種別: dd...dd

レコード取得処理を開始しました。

aa...aa :

レコード ID

bb...bb :

時刻 (HH:MM:SS フォーマット)

cc...cc :

インスタンス名

dd...dd :

収集タイプ (リアルタイムデータの場合は"realtime", その他の場合は"historical")

KAVF15019-I

Finished processing request for record: aa...aa, time: bb...bb, instance: cc...cc, type: dd...dd.

収集が終了しました。レコード: aa...aa, 時刻: bb...bb, インスタンス: cc...cc, 種別: dd...dd

レコード取得処理が終了しました。

aa...aa :

レコード ID

bb...bb :

時刻 (HH:MM:SS フォーマット)

cc...cc :

インスタンス名

dd...dd :

収集タイプ (リアルタイムデータの場合は"realtime", その他の場合は"historical")

KAVF15020-W

Record not collected for record type aa...aa.

レコードタイプ aa...aa に対するレコードを収集できませんでした。

レコードが収集されませんでした。

aa...aa : レコード ID

レコード ID によって次の原因が考えられます。

- レコード ID が PI_RDFS, PI_RDFL の場合
 - ・監視対象 HiRDB が, fil の統計情報を出力する設定になっていない。
HiRDB コマンド「pdls -d stj」により確認できます。
 - ・前回のレコード収集時から今回までの間に, 監視対象 HiRDB において fil の統計情報が出力されていない。
 - ・レコード収集時, 監視対象 HiRDB または fil の統計情報出力対象ユニットが起動していなかった。
 - ・インスタンス設定ファイル(jpcagtbdef.ini)の REMOTE_OPERATION_FOR_ACTIVITY セクションの SETTING の値が ON になっている場合, PFM - Agent for HiRDB サービス起動後, レコード初回収集時に HiRDB が起動していなかった。または fil の統計情報出力対象ユニットが起動していなかった。
 - レコード ID が PI_SSYS の場合
 - ・監視対象 HiRDB が, sys の統計情報を出力する設定になっていない。
HiRDB コマンド「pdls -d stj」により確認できます。
 - ・前回のレコード収集時から今回までの間に, 監視対象 HiRDB において sys の統計情報が出力されていない。
 - ・レコード収集時, 監視対象 HiRDB が起動していなかった。
 - ・インスタンス設定ファイル(jpcagtbdef.ini)の REMOTE_OPERATION_FOR_ACTIVITY セクションの SETTING の値が ON になっている場合, PFM - Agent for HiRDB サービス起動後, PI_SSYS レコード初回収集時に HiRDB が起動していなかった。

(O)

- レコード ID が PI_RDFS, PI_RDFL の場合
 - ・ HiRDB が起動されているかどうかを確認してください。
 - ・ PFM - Agent for HiRDB の起動直後に一度だけ出力される場合は、このメッセージを無視してください。
 - ・ 監視対象 HiRDB に対し、fil の統計情報を出力するように設定してください。
 - ・ PI_RDFS または PI_RDFL の Collection Interval > 監視対象 HiRDB のシンクポイント発生間隔となるように、PFM - Agent for HiRDB または監視対象 HiRDB の設定を見直してください。
 - ・ インスタンス設定ファイル(jpcagtbdef.ini)の REMOTE_OPERATION_FOR_ACTIVITY セクションの SETTING の値が ON になっている場合、HiRDB および fil の統計情報出力対象ユニットの起動後に PFM - Agent for HiRDB サービスを起動するようにしてください。
- レコード ID が PI_SSYS の場合
 - ・ HiRDB が起動されているかどうかを確認してください。
 - ・ PFM - Agent for HiRDB の起動直後に一度だけ出力される場合は、このメッセージを無視してください。
 - ・ 監視対象 HiRDB に対し、sys の統計情報を出力するように設定してください。
 - ・ PI_SSYS の Collection Interval \geq pdstbegin コマンドの-m に指定した値 * 60 となるように、PFM - Agent for HiRDB または監視対象 HiRDB の設定を見直してください。
 - ・ インスタンス設定ファイル(jpcagtbdef.ini)の REMOTE_OPERATION_FOR_ACTIVITY セクションの SETTING の値が ON になっている場合、HiRDB の起動後に PFM - Agent for HiRDB サービスを起動するようにしてください。
- 上記以外のレコードの場合
 - ・ HiRDB が起動されているかどうかを確認してください。
 - ・ PFM - Agent for HiRDB の起動直後に一度だけ出力される場合は、このメッセージを無視してください。
 - ・ 正常運用中であってもタイミングによってレコード収集に失敗することがあります。頻発するなど、監視に影響が出る場合は、保守資料を採取したあと、システム管理者に連絡してください。

KAVF15022-W

The specified record cannot be collected for the installed HiRDB version.

この HiRDB のバージョンに対して、指定されたレコードは収集できません。

収集できないレコードを収集しようとしました。

HiRDB のバージョンによって収集できないレコードは次のとおりです。

HiRDB のバージョン	収集できないレコード
06-00 以降	PI_GB05

HiRDB のバージョン	収集できないレコード
06-00 未満	PI_GBUF
07-02 未満	PD_ROT1
07-03 未満	PD_ROT2

(S)

要求を無視して、Agent Collector の処理を続行します。

KAVF15023-E

File format error : aa...aa
ファイルフォーマットエラー : aa...aa

ファイルのフォーマットが不正です。

aa...aa : ファイルフォーマットエラーになったファイル名

ファイル名によって以下の原因が考えられます。

- ファイル名が pdsys の場合
 - ・監視対象 HiRDB のシステム共通定義に pdunit オペランドが指定されていない。
 - ・監視対象 HiRDB のシステム共通定義の pdunit オペランドに-x オプションが指定されていない。
 - ・HiRDB が起動していない。
- ファイル名が jpcagtbdef.ini の場合
 - ・監視対象 HiRDB のシステム共通定義 (pdsys) の pdunit オペランドに-d オプションが指定されていない。
 - ・インスタンス設定ファイル (jpcagtbdef.ini) の指定に誤りがある。
 - ・HiRDB が起動していない。
- ファイル名が jpcagt.ini の場合
 - ・jpcconf inst setup コマンドでセットアップしたインスタンス環境に誤りがある。
 - ・HiRDB が起動していない。
- ファイル名が上記以外の場合
 - ・HiRDB が起動していない。

(S)

Agent Collector の処理を終了します。または、処理を続行します。

(O)

- ファイル名が pdsys の場合
 - ・監視対象 HiRDB のシステム共通定義に pdunit オペランドを指定し、-x オプションを指定してください。
 - ・HiRDB が起動されていることを確認してください。

- ファイル名が jpcagtbdef.ini の場合
 - ・監視対象 HiRDB のシステム共通定義の pdunit オペランドに -d オプションを指定してください。
 - ・「[2.4.3 インスタンス環境の設定](#)」、または「[3.4.3 インスタンス環境の設定](#)」を参照して、インスタンス設定ファイル (jpcagtbdef.ini) を再作成してください。

[AGTBPATH]セクションには、監視対象 HiRDB のシステムマネージャが稼働するホストは指定しないでください。

[PDDIR]セクション、および[PDCONFPATH]セクションのユニット識別子に小文字を指定する場合は引用符で囲んでください。

[AGTBPATH]セクション、[PDDIR]セクション、および[PDCONFPATH]セクションに記述するパスは絶対パス名で指定してください。

[REMOTE_OPERATION_FOR_ACTIVITY]セクション、および
[NOT_EXECUTE_PDSTJSYNC]セクションの SETTING ラベルに OFF は指定できません。

[COMMON_OPTION]セクションの OPTIMIZE_LEVEL ラベルには半角数字を指定してください。

 - ・HiRDB が起動されていることを確認してください。
 - ファイル名が jpcagt.ini の場合
 - ・「[2.4.3 インスタンス環境の設定](#)」、または「[3.4.3 インスタンス環境の設定](#)」を参照して、インスタンス環境を再セットアップしてください。

PDDIR、PDCONFPATH、HiRDB_user、HiRDB_admin、および HiRDB_password の各項目は省略できません。

PDDIR、および PDCONFPATH の末尾はに「/」(Windows の場合は「¥」) を指定しないでください。

 - ・HiRDB が起動されていることを確認してください。
 - ファイル名が上記以外の場合
 - ・HiRDB が起動されていることを確認してください。
- 上記対策を実施しても問題が解決しない場合は、保守資料を採取したあと、システム管理者に連絡してください。

KAVF15024-E

Could not write message to log file : aa...aa.

ログファイル aa...aa へメッセージを書き込むことができませんでした。

ログファイルにメッセージを出力できません。

aa...aa :

ログファイル (共通メッセージログまたはサービスメッセージログ)

(S)

Agent Collector の処理を終了します。

(O)

パスにファイルが存在する場合は、書き込み権限を確認してください。パスにファイルが存在しない場合は、指定したパスに読み書き権限があるかどうかを確認してください。

KAVF15025-E

File does not have read permission. File name : aa...aa

ファイルに読み取り権限がありません。ファイル名：aa...aa

ファイルに読み取り権限がありません。

aa...aa :

ファイル名

(S)

Agent Collector の処理を終了します。

(O)

ファイルの権限を確認してください。

KAVF15026-E

command aa...aa does not have execute permission.

コマンド aa...aa には実行権限がありません。

コマンドには実行権限がありません。

aa...aa :

実行可能ファイルのコマンド名

(S)

Agent Collector の処理を続行します。

(O)

- コマンドの実行権限を確認してください。
- HiRDB が起動されているかどうかを確認してください。

KAVF15027-E

Invalid command line options.

コマンドラインオプションが不正です。

コマンドラインオプションが不正です。

(S)

Agent Collector の処理を終了します。

(O)

コマンドラインオプションを確認してください。

KAVF15028-E

Agent execution directory path specified with -d option does not exist.

-d オプションで指定されたエージェント実行ディレクトリパスが存在しません。

コマンドラインで-d オプションに指定したパスが不正です。

(S)

Agent Collector の処理を終了します。

(O)

-d オプションの値を確認してください。

KAVF15029-E

Failure in the execution of command : aa...aa

コマンド : aa...aa の実行で失敗しました。

コマンド実行時にエラーが発生しました。

aa...aa :

コマンド名

(S)

要求を無視して、Agent Collector の処理を続行します。

(O)

- システムの資源が不足していないかどうかを確認してください。

- HiRDB が起動されているかどうかを確認してください。

KAVF15030-E

Could not get the HiRDB version.

HiRDB バージョンが見つかりませんでした。

(S)

Agent Collector の処理を終了します。

(O)

HiRDB がインストールされているかどうかを確認してください。

KAVF15031-E

Initialization of Agent Collector failed.
Agent Collector の初期化で失敗しました。

Agent Collector の初期化で失敗しました。

(S)

Agent Collector の処理を終了します。

(O)

Agent Collector のすべての初期化構成を確認してください。

KAVF15033-E

Unable to get the system information.
システム情報を取得できません。

ホスト名などのシステム情報を取得できません。

(S)

Agent Collector の処理を終了します。

(O)

正しいバージョンの winsock.dll が存在するかどうかを確認してください。

KAVF15035-E

Incorrect value specified for HiRDB parameters in jpcagt.ini. Incorrect parameter : aa...aa
jpcagt.ini で HiRDB パラメーターに指定された値が不正です。不正パラメーター : aa...aa

PDDIR, PDCONFPATH の HiRDB 環境変数に対して指定された値が不正です。

aa...aa :

不正パラメーター名

(S)

Agent Collector の処理を終了します。

(O)

jpcagt.ini ファイルで指定される PDDIR, PDCONFPATH のパスが存在するかどうかを確認してください。

KAVF15036-W

Segment information could not be obtained for RDAREA : aa...aa
RD エリア : aa...aa に対してセグメント情報を取得できませんでした。

次のどれかの状態になっている RD エリアのセグメント情報を取得できませんでした。

CLOSE HOLD, CLOSE HOLD (INQ), CLOSE HOLD (CMD), CLOSE ACCEPT - HOLD,
HOLD

aa...aa :

RD エリア名

(S)

ほかの RD エリア情報を収集して処理を続行します。

(O)

RD エリアの状態を確認してください。

KAVF15040-E

Execution of getpwnam failed.

getpwnam の実行が失敗しました。

Agent Collector のプロセスユーザー ID を HiRDB 管理者に変更できませんでした。

(S)

処理を続行します。

(O)

jpcconf inst setup コマンドで設定した HiRDB 管理者の値が正しいかどうかを確認してください。

HiRDB 管理者の値を再設定するには、問題となったインスタンスに対して再度 jpcconf inst setup を実行してから Agent Collector を再起動してください。

KAVF15041-E

Execution of setuid failed. errno : aa...aa

setuid の実行が失敗しました。errno : aa...aa

Agent Collector のプロセスユーザー ID を HiRDB 管理者に変更できませんでした。

aa...aa :

errno

(S)

処理を続行します。

(O)

jpcconf inst setup コマンドで設定した HiRDB 管理者の値が正しいかどうかを確認してください。

HiRDB 管理者の値を再設定するには、問題となったインスタンスに対して再度 jpcconf inst setup を実行してから Agent Collector を再起動してください。

KAVF15043-W

Incorrect value specified for PFM install directory in jpcagtbdef.ini. Hostname : aa...aa

jpcagtbdef.ini で PFM インストール先ディレクトリに指定された値が不正です。ホスト名 : aa...aa

ホストの情報が取得できませんでした。

aa...aa : ホスト名

次の原因が考えられます。

- jpcagtbdef.ini ファイルに PFM インストール先ディレクトリが設定されていない。または、誤っている。
- 当該ユニットの存在するホストが停止している。
- 「PFM - Agent for HiRDB」サービスのアカウントがローカルシステムアカウントになっている。
- ネットワーク障害

(S)

処理を続行します。

(O)

- jpcagtbdef.ini ファイルに正しい PFM インストール先ディレクトリを設定してください。エラーとなったホストから稼働情報を収集するには、Agent Collector を再起動してください。
- 当該ユニットの存在するホストが起動しているか、また論理 IP アドレスが有効か確認してください。
- 「PFM - Agent for HiRDB」サービスのアカウントを HiRDB パラレルサーバのサービスのアカウントと同じにしてください。

KAVF15044-W

Incorrect value specified for PDCONFPATH in jpcagtbdef.ini. Unit : aa...aa

jpcagtbdef.ini で PDCONFPATH に指定された値が不正です。ユニット : aa...aa

ユニットの情報が取得できませんでした。

aa...aa : ユニット名

次の原因が考えられます。

- jpcagtbdef.ini ファイルに PDCONFPATH の値が設定されていない。または、誤っている。
- 当該ユニットの存在するホストが停止している。
- 当該ユニットの存在するホストの論理 IP アドレスが無効となっている。
- Windows の場合、「PFM - Agent for HiRDB」サービスのアカウントがローカルシステムアカウントになっている。
- ネットワーク障害

(S)

処理を続行します。

(O)

- `jpcagtbdef.ini` ファイルに `PDCONFPATH` の値を設定してください。エラーとなったユニットから稼働情報を収集するには、Agent Collector を再起動してください。
- 当該ユニットの存在するホストが起動しているか、また論理 IP アドレスが有効か確認してください。
- Windows の場合、「PFM - Agent for HiRDB」サービスのアカウントを HiRDB パラレルサーバのサービスのアカウントと同じにしてください。

KAVF15045-E

Command aa...aa returned an error.
コマンド aa...aa がエラーを返しました。

コマンド実行に失敗しました。

aa...aa :

コマンド名

(S)

処理を続行します。

(O)

`rsh` (`remsh`) コマンド、`rcp` コマンド、`ssh` コマンド、および `scp` コマンドが失敗した場合、次の点を確認してください。

- HiRDB のシステム定義で論理ホスト名を使用している場合、その論理ホスト名は使用できる状態かどうか、その論理ホストの論理 IP アドレスは活性化されているかどうか。
- HiRDB/パラレルサーバの場合、HiRDB システムを構成するホスト間で HiRDB 管理者および `root` がリモートシェルを実行できるように設定されているかどうか。

`jpcagtbstedit` コマンド、および `jpcagtbstsrch` コマンドが失敗した場合、次の点を確認してください。

- HiRDB/パラレルサーバの場合は、HiRDB システムを構成するすべてのホストに PFM - Agent for HiRDB がインストールされていること。
- HiRDB のユニットが稼働していること (HiRDB のサービスが起動していてもすべての HiRDB のユニットが稼働しているとは限りません。PI_SSYS レコード、PI_RDFL レコード、および PI_RDFS レコードはユニットが稼働しているときだけ収集されます)。
- `jpcagtbdef.ini` ファイルの `PDDIR` セクションに指定した値が「環境変数 `PDDIR`」の値であること。
- `jpcagtbdef.ini` ファイルの `PDCONFPATH` セクションに指定した値が「環境変数 `PDCONFPATH`」の値であること。

`pddbst` コマンドが失敗した場合、次の点を確認してください。

- HiRDB で RD エリアの再編成時期予測機能を使用していること。

pddbst コマンドが失敗した場合、HiRDB で再編成時期予測機能を使用していない状態で、アラーム条件式に PD_ROT1 レコード、または PD_ROT2 レコードのフィールドを指定したアラーム（監視テンプレート）をバインドした、もしくは、PD_ROT1 レコード、または PD_ROT2 レコードを収集しようとしたことが考えられます。再編成時期予測機能については、マニュアル「HiRDB システム運用ガイド」の再編成時期予測機能について説明している章を参照してください。

上記対策を実施しても問題が解決しない場合は、PFM - Agent for HiRDB のインスタンスを再起動してください。

PFM - Agent for HiRDB は、ユニットの活性・非活性などの動的な HiRDB の構成変更に追随しながらパフォーマンス監視をしているため、PFM - Agent for HiRDB 内で管理している HiRDB の構成と実際の HiRDB の構成とが不一致となる場合があります。

インスタンスを再起動して現在の HiRDB の構成を再取得します。

KAVF15046-E

Environment variable PDNAMEPORT could not be obtained. Cause : aa...aa

PDNAMEPORT の取得でエラーが発生しました。要因 : aa...aa

PDNAMEPORT の取得処理に失敗しました。

aa...aa :

エラーの詳細

(S)

Agent Collector の処理を終了します。

(O)

- pdsys の pd_name_port の指定が正しいかどうかを確認してください。pdsys の pd_name_port の設定を変更した場合は、Agent Collector を再起動してください。
- HiRDB が起動されているかどうかを確認してください。

KAVF15047-W

Reception of a signal caused the service to stop. (signal=aa...aa)

シグナル受信によってサービスは停止処理を実行します。(signal=aa...aa)

シグナル受信によってサービスが停止しました。

aa...aa :

シグナルの値

(S)

Agent Collector の処理を終了します。

KAVF15048-E

Reception of a signal interrupted service processing. (signal=aa...aa)
シグナル受信によってサービスの処理は中断されました。(signal=aa...aa)

シグナル受信によってサービスの処理が中断されました。

aa...aa :

シグナルの値

(S)

Agent Collector の処理を終了します。

(O)

保守資料を採取したあと、システム管理者に連絡してください。

KAVF15049-E

An attempt to start Agent Collector has failed. (host=aa...aa, service=bb...bb)
Agent Collector が起動失敗しました。(host=aa...aa, service=bb...bb)

aa...aa :

ホスト名

bb...bb :

サービス名

(S)

Agent Collector の処理を終了します。

(O)

共通メッセージログに出力されている要因を確認してください。シグナルの受信によって停止した場合は、共通メッセージログに KAVF15048-E が出力されます。

KAVF15050-E

Agent Collector stopped abnormally. (host=aa...aa, service=bb...bb)
Agent Collector が異常停止しました。(host=aa...aa, service=bb...bb)

aa...aa :

ホスト名

bb...bb :

サービス名

(S)

Agent Collector の処理を終了します。

(O)

共通メッセージログに出力されている要因を確認してください。シグナルの受信によって停止した場合は、共通メッセージログに KAVF15048-E が出力されます。

KAVF15051-E

Error occurred in system call aa...aa. errno : bb...bb

システムコール aa...aa でエラーが発生しました。errno : bb...bb

システムコール aa...aa でエラーが発生しました。

aa...aa :

システムコール名

bb...bb :

OS 詳細コード

(S)

要求を無視し、Agent Collector の処理を続行します。

(O)

主な原因は次のとおりです。原因を取り除いてください。または、エラーを無視してください。

- HiRDB が起動していません。HiRDB を起動してください。
- 論理ホストが切り替わり、監視中の HiRDB と接続できなくなりました。共有ディスクにアクセスできること、および論理 IP アドレスが活性状態であることを確認してください。
HiRDB の切り替えと同期して PFM - Agent for HiRDB も切り替わるように設計してください。
- 論理ホストの切り替えで、監視中の HiRDB の一部のユニットと接続できなくなりました。ただし、これが想定されている運用であれば無視しても差し支えありません。
- root ユーザーの nproc 値が不足しています。nproc 値を変更して Agent Collector を再起動してください。nproc 値の詳細は「[3.2.7 インストール前の注意事項](#)」を参照してください。
- 2 ユニット以上の HiRDB/パラレルサーバを監視する際のリモート接続に失敗しました。root 権限で、rsh (rcp)、または ssh (scp) 接続できるように変更してください。
- 2 ユニット以上の HiRDB/パラレルサーバを監視する場合に実行する、rsh (rcp) のポートが枯渇しています。収集するレコードの種類、および収集間隔をチューニングしてポートの枯渇を回避してください。
- レコード収集時、EX 排他の RD エリアに対して pdbst コマンドを実行しました。これは通常の運用でも発生しうるため無視しても差し支えありません。RD エリアは、ほかのトランザクションに占有されている場合や、pdrorg ユティリティでインデックス再編成中などの場合に EX 排他となります。

要因が判明しない場合、保守資料を採取したあと、システム管理者に連絡してください。

KAVF15052-E

Unable to open file.

ファイルのオープンに失敗しました。

(S)

要求を無視し、Agent Collector の処理を続行します。

(O)

システムの資源が不足していないかどうかを確認してください。

- 直後に KAVF15029-E メッセージが出力された場合は、次のディレクトリにアクセスできることを確認してください。

/opt/jplpc/agtbt/cmdtmp/インスタンス名

- PD_ROT1 レコード、または PD_ROT2 レコードを収集している場合は、次のディレクトリにアクセスできることを確認してください。

/opt/jplpc/agtbt/agtbttmp/インスタンス名

KAVF15053-E

Overflow occurred at the time of field substitution. (field=aa...aa)

フィールド代入時にバッファオーバーフローが発生しました。 (field=aa...aa)

不定サイズの値をフィールドにする際、該当するフィールドの最大サイズよりも代入する値のサイズが上回った場合に発生します。

aa...aa :

該当するフィールド名称

(O)

保守資料を採取したあと、システム管理者に連絡してください。

KAVF15054-E

The data type substituted for the field differ. (field=aa...aa)

フィールドに代入するデータ型が異なっています。 (field=aa...aa)

フィールドに代入するデータの型がフィールドの型と異なっていた場合に発生します。

aa...aa :

該当するフィールド名称

(O)

保守資料を採取したあと、システム管理者に連絡してください。

KAVF15055-E

Unable to convert CSV data. (row=aa...aa, column=bb...bb)
CSV データの変換に失敗しました。 (row=aa...aa, column=bb...bb)

KAVF15053-E または KAVF15054-E のどちらかが出力された場合に発生します。

aa...aa :

変換に失敗した CSV データの行

bb...bb :

変換に失敗した CSV データの列

(S)

要求を無視し、Agent Collector の処理を続行します。このエラー通知までに収集した CSV データは破棄され、収集失敗とみなされます。

(O)

保守資料を採取したあと、システム管理者に連絡してください。

KAVF15056-E

The output result by HiRDB command aa...aa is invalid. (command line option=bb...bb)
HiRDB コマンド aa...aa によって得られた出力結果が不正です。 (command line option=bb...bb)

HiRDB コマンドの実行で得られたデータを解析した場合に、意図しないフォーマットのデータが出力されていたときや、適正に処理されなかった（例：ファイルがoutputされていなかった）ときに通知されます。

aa...aa :

コマンド名

bb...bb :

コマンドラインオプション

(S)

システムの動作は、レコードによって異なります。

(O)

保守資料を採取したあと、システム管理者に連絡してください。

KAVF15057-E

The output result by command is invalid.
コマンドによって得られた出力結果が不正です。

コマンドの実行で得られた出力結果が不正です。

PFM - Agent for HiRDB は定期的に HiRDB コマンドを発行し HiRDB を監視しており、発行したコマンドの実行結果が想定していた体裁と異なる場合にこのメッセージを出力します。このメッセージはデータベースそのものに不具合が検出されたわけではないため、通常は無視しても問題ありません。

(S)

要求を無視し、Agent Collector の処理を続行します。

(O)

一時的な要因であればパフォーマンス監視に影響を与えることはないため無視してください。

パフォーマンス監視に影響が出るほど頻出する場合は、保守資料を採取したあと、システム管理者に連絡してください。

KAVF15058-E

A fatal error occurred.

致命的なエラーが発生しました。

(S)

Agent Collector の処理を終了します。

(O)

エラーメッセージの内容から障害原因を取り除いてください。原因が判明しない場合、保守資料を採取したあと、システム管理者に連絡してください。

KAVF15059-W

The specified RDAREA for RDST_RDAREA in jpcagtbdef.ini does not exist. RDAREA NAME : aa...aa

jpcagtbdef.ini の RDST_RDAREA に指定された RD エリアが存在しません。RD エリア名 : aa...aa

jpcagtbdef.ini ファイルの RDAREA_NAME に存在しない RD エリア名が指定されています。

aa...aa :

RD エリア名

(S)

処理を続行します。

(O)

jpcagtbdef.ini ファイルの RDAREA_NAME に存在する RD エリア名を指定してください。

KAVF15060-W

The specified RDAREA for RDDS_RDAREA in jpcagtbdef.ini does not exist. RDAREA NAME : aa...aa

jpcagtbdef.ini の RDDS_RDAREA に指定された RD エリアが存在しません。RD エリア名 : aa...aa

jpcagtbdef.ini ファイルの RDAREA_NAME に存在しない RD エリア名が指定されています。

aa...aa :

RD エリア名

(S)

処理を続行します。

(O)

jpcagtbdef.ini ファイルの RDAREA_NAME に存在する RD エリア名を指定してください。

KAVF15061-E

Unable to open file. File name : aa...aa

ファイルのオープンに失敗しました。ファイル名 : aa...aa

ファイルのオープンに失敗しました。

aa...aa :

ファイル名

(S)

処理を続行します。

(O)

システムの資源が不足していないかどうかを確認してください。

KAVF15062-W

Output of statistical information stops. Unit : aa...aa, record type : bb...bb, Statistical-information-type : cc...cc

統計情報が出力されていません。ユニット名 : aa...aa, レコード ID : bb...bb, 統計情報種別 : cc...cc

統計情報が出力されていません。

レコード ID で示すレコードは HiRDB の統計情報が収集されている期間だけ収集できます。

aa...aa :

ユニット名

bb...bb :

レコード ID

cc...cc :

統計情報種別

(S)

処理を続行します。

(O)

「6. レコード」の対象レコードの注意事項を参照して、HiRDB の統計情報が出力される状態かどうかを確認してください。

KAVF15063-W

Unable to connect to HiRDB.

HiRDB に接続できませんでした。

PFM - Agent for HiRDB から HiRDB へ接続しようとしましたが、HiRDB が接続を拒否しました。

(S)

処理を続行します。

(O)

HiRDB のログなどから接続に失敗した原因を調べ、原因を取り除いてから Agent Collector を再起動してください。

HiRDB の接続に失敗する主な原因は次のとおりです。

- jpcconf inst setup コマンドで設定した HiRDB_user の値に誤りがあります。HiRDB_user が小文字の場合は引用符で囲む必要があります。HiRDB_user には、OS のユーザー アカウントではなく HiRDB の DBA 権限を持つ認可識別子を指定します。設定方法の詳細は「[2.4.3 インスタンス環境の設定](#)」、または「[3.4.3 インスタンス環境の設定](#)」を参照してください。jpcagt.ini ファイルは、直接編集しないでください。
- jpcconf inst setup コマンドで設定した HiRDB_password の値に誤りがあります。HiRDB_password が小文字の場合は引用符で囲む必要があります。HiRDB_password には、OS ユーザーのパスワードではなく HiRDB の認可識別子のパスワードを指定します。設定方法の詳細は「[2.4.3 インスタンス環境の設定](#)」、または「[3.4.3 インスタンス環境の設定](#)」を参照してください。jpcagt.ini ファイルは、直接編集しないでください。
- jpcconf inst setup コマンドで設定した LANG、HiRDB クライアント環境定義 PDLANG、および環境変数 LANG の組み合わせに誤りがあります。起動シェルなどのシェルから jpcspm start で起動している場合は、そのシェル内で環境変数 PDLANG を設定して PDLANG が有効な状態で jpcspm start を実行する必要があります。設定方法の詳細は「[3.4.3 インスタンス環境の設定](#)」を参照してください。jpcagt.ini ファイルは、直接編集しないでください。

- pd_max_users で指定する最大同時接続数が不足しています。PFM - Agent for HiRDB は HiRDB サーバに対して 1 ユーザー分の接続をするため、必要に応じて pd_max_users の設定を見直してください。pd_max_users については「[3.2.4 前提プログラム](#)」を参照してください。

KAVF15065-W

Necessary information is not accumulated to predict reorganization time.

再編成時期を予測するために必要な情報が蓄積されていません。

(S)

処理を続行します。

(O)

DB 状態解析蓄積機能を有効にして、再編成時期を予測するための状態解析結果を蓄積させてください。

再編成時期予測機能については、マニュアル「HiRDB システム運用ガイド」の再編成時期予測機能について説明している章を参照してください。

KAVF15066-E

Invalid data detected, exceeds the maximum definition length. (host=aa...aa, record type=bb...bb, field=cc...cc, line number=dd...dd)

最大定義長を超える不正なデータを検知しました。 (host=aa...aa, record type=bb...bb, field=cc...cc, line number=dd...dd)

PI_SSYS または PI_RDFL または PI_RDFS レコードの収集時に生成する一時ファイル内の文字列データのデータ長が最大定義長を超えました。

aa...aa :

最大定義長を超える不正データが生成されたホスト名

bb...bb :

レコード ID

cc...cc :

フィールド名称

dd...dd :

行番号

(S)

不正データを無視して、Agent Collector の処理を続行します。

(O)

保守資料を採取したあと、システム管理者に連絡してください。

KAVF15068-W

Incorrect value specified in jpcagtbdef.ini. (section=aa...aa, label=bb...bb, value=cc...cc)
jpcagtbdef.ini ファイルに指定された値が不正です。(セクション=aa...aa, ラベル=bb...bb, 値=cc...cc)

jpcagtbdef.ini ファイルに設定された値が不正です。

aa...aa :

セクション名

bb...bb :

ラベル名

cc...cc :

設定値

(S)

Agent Collector の処理を続行します。

(O)

jpcagtbdef.ini ファイルに設定した値を確認してください。

KAVF15071-W

Unable to get the file system area information since the HiRDB server is not active.
(server=aa...aa)

HiRDB サーバが稼動していないためファイルシステム領域情報を取得できません。(サーバ=aa...aa)

監視対象 HiRDB がスタンバイレス型系切り替え機能を適用している場合、PI_RDFS または PI_RDFL レコード収集時に稼動していなかったサーバのファイルシステム領域情報が取得できませんでした。

aa...aa :

HiRDB サーバ名

(S)

該当するサーバのファイルシステム領域情報に次の値を設定し、Agent Collector の処理を続行します。

- レコード ID が PI_RDFS の場合

フィールド	値
HiRDB File System Area Type	空白
Free MBytes	0
Mbytes	0
Used MBytes	0
Free %	0

フィールド	値
Used %	0

- レコード ID が PI_RDFL の場合

フィールド	値
HiRDB File System Area Type	空白

KAVF15073-I

The file system area information was blank, but processing continued without executing the pdfstatfs command.

統計ログ上の HiRDB ファイルシステム領域名が空白であったため、pdfstatfs コマンドを実行せずに処理を続行しました。

レコードを収集できない HiRDB ファイルシステム領域を検出しました。

(S)

レコード情報については、数値の場合 0、文字列の場合 0 長文字列を設定し、処理を続行します。

KAVF15076-I

Label aa...aa is bb...bb.

ラベル aa...aa は bb...bb です。

インスタンス設定ファイル (jpcagtbdef.ini) に指定したラベル名とその指定値です。

aa...aa :

ラベル名

bb...bb :

指定値

(S)

起動処理を続行します。

KAVF15077-W

The aa...aa is invalid. Start with assumed value bb...bb. Cause: cc...cc

aa...aa が無効です。仮定値 bb...bb で開始します。要因: cc...cc

インスタンス設定ファイル (jpcagtbdef.ini) に誤りがあります。

aa...aa :

無効となったラベル名

bb...bb :

ラベルの仮定値

cc...cc :

無効となった要因

(S)

ラベルの指定値を無視し、仮定値で起動処理を続行します。

(O)

インスタンス設定ファイル (jpcagtbdef.ini) を修正して、PFM - Agent for HiRDB を再起動してください。

KAVF15078-W

The aa...aa is invalid. Starts ignoring this specification. Cause: bb...bb

aa...aa が無効です。指定を無視して開始します。要因: bb...bb

インスタンス設定ファイル (jpcagtbdef.ini) に誤りがあります。

aa...aa :

無効となったラベル名

bb...bb :

無効となった要因

(S)

ラベルの指定値を無視して起動処理を続行します。

(O)

インスタンス設定ファイル (jpcagtbdef.ini) を修正して、PFM - Agent for HiRDB を再起動してください。

8

トラブルへの対処方法

この章では、Performance Management の運用中にトラブルが発生した場合の対処方法などについて説明します。ここでは、主に PFM - Agent でトラブルが発生した場合の対処方法について記載しています。Performance Management システム全体のトラブルへの対処方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、トラブルへの対処方法について説明している章を参照してください。

8.1 対処の手順

Performance Management でトラブルが起きた場合の対処の手順を次に示します。

現象の確認

次の内容を確認してください。

- トラブルが発生したときの現象
- メッセージの内容（メッセージが出力されている場合）
- 共通メッセージログなどのログ情報

各メッセージの要因と対処方法については、「[7. メッセージ](#)」を参照してください。また、Performance Management が出力するログ情報については、「[8.3 トラブルシューティング時に採取するログ情報](#)」を参照してください。

資料の採取

トラブルの要因を調べるために資料の採取が必要です。「[8.4 トラブル発生時に採取が必要な資料](#)」および「[8.5 資料の採取方法](#)」を参照して、必要な資料を採取してください。

問題の調査

採取した資料を基に問題の要因を調査し、問題が発生している部分、または問題の範囲を切り分けてください。

8.2 トラブルシューティング

ここでは、Performance Management 使用時のトラブルシューティングについて記述します。Performance Management を使用しているときにトラブルが発生した場合、まず、この節で説明している現象が発生していないか確認してください。

Performance Management に発生する主なトラブルの内容を次の表に示します。

表 8-1 トラブルの内容

分類	トラブルの内容	記述箇所
セットアップやサービスの起動について	<ul style="list-style-type: none">Performance Management のプログラムのサービスが起動しないサービスの起動要求をしてからサービスが起動するまで時間が掛かるPerformance Management のプログラムのサービスを停止した直後に、別のプログラムがサービスを開始したとき、通信が正しく実行されない「ディスク容量が不足しています」というメッセージが出力されたあと Master Store サービスまたは Agent Store サービスが停止するHiRDB が停止しない	マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、トラブルシューティングの章を参照してください。
	<ul style="list-style-type: none">PFM - Agent for HiRDB エージェントが起動しない	8.2.2
コマンドの実行について	<ul style="list-style-type: none"><code>jpctool service list</code> コマンドを実行すると稼働していないサービス名が出力される<code>jpctool db dump</code> コマンドを実行すると、指定した Store データと異なるデータが出力される	マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、トラブルシューティングの章を参照してください。
レポートの定義について	<ul style="list-style-type: none">履歴レポートに表示されない時間帯がある	
アラームの定義について	<ul style="list-style-type: none">アクション実行で定義したプログラムが正しく動作しないアラームイベントが表示されないアラームしきい値を超えてるのに、エージェント階層の「アラームの状態の表示」に表示されているアラームアイコンの色が緑のまま変わらない	
パフォーマンスデータの収集と管理について	<ul style="list-style-type: none">データの保存期間を短く設定したにも関わらず、PFM - Agent の Store データベースのサイズが小さくならない共通メッセージログに「Store データベースに不正なデータが検出されました」というメッセージが出力される	
	<ul style="list-style-type: none">PFM - Agent を起動してもパフォーマンスデータが収集されない	8.2.1
	<ul style="list-style-type: none">HiRDB のシステムマネジャ以外のユニットの情報が収集されない	
	<ul style="list-style-type: none">識別子付きセットアップでセットアップした HiRDB の情報が正しく収集されない	

分類	トラブルの内容	記述個所
パフォーマンスデータの収集と管理について	• 正常稼働時にアラームを通知する	8.2.1
	• KAVE00213-W が出力されて収集がスキップされる	
	• 一時的にパフォーマンスデータを収集できないときがある	
サービスの異常終了	• 内部ファイルの競合が発生しサービスが異常終了する	2.4.3, 3.4.3

8.2.1 パフォーマンスデータの収集と管理に関するトラブルシューティング

(1) PFM - Agent を起動してもパフォーマンスデータが収集されない

考えられる主な要因は次のとおりです。

- HiRDB が停止している。
HiRDB の起動状態を確認し、停止している場合は起動してください。
- インスタンス環境のセットアップ時の設定に誤りがある。
jpcconf inst setup コマンドを実行して、各項目の値を確認してください。HiRDB_user, および HiRDB_password に小文字を指定する場合は、引用符で囲む必要があります。インスタンス環境のセットアップについては、「[2.4.3 インスタンス環境の設定](#)」または「[3.4.3 インスタンス環境の設定](#)」を参照してください。
- Type4 JDBC ドライバから接続している。
PD_CNST レコードでは、Type4 JDBC ドライバから接続しているプロセスについては収集できません。
- 文字コードの定義に誤りがある。
HiRDB サーバ、HiRDB クライアント間の文字コード、または PFM - Agent for HiRDB の文字コードの定義に誤りがある場合、一部のレコードの収集に失敗することがあります。HiRDB サーバ、HiRDB クライアント間の文字コードの定義については、マニュアル「HiRDB UAP 開発ガイド」の UAP 実行時の注意事項について説明している章を参照してください。PFM - Agent for HiRDB の文字コードの定義については「[3.4.3 インスタンス環境の設定](#)」を参照してください。
- rsh (remsh) および rcp サービスが機能していない。
PFM - Agent for HiRDB は 2 ユニット以上の HiRDB/パラレルサーバを監視する場合、rsh (remsh) および rcp サービスを使用します。2 ユニット以上の HiRDB/パラレルサーバを監視する場合は rsh (remsh) および rcp サービスを停止しないでください。

(2) HiRDB のシステムマネジャ以外のユニットの情報が収集されない

考えられる主な要因は次のとおりです。

- インスタンスのアカウントと HiRDB のアカウントが異なっている。

アカウントの設定方法については、「[2.4.3\(2\) 2 ユニット以上の HiRDB/パラレルサーバを監視する場合の設定](#)」を参照してください。

- IP アドレス接続制限機能によって接続が制限されている。

IP アドレス接続制限機能については、「[2.2.4\(1\) 監視対象プログラム](#)」または「[3.2.4\(1\) 監視対象プログラム](#)」の注意事項を参照してください。

- root 権限でログインを許可する設定になっていない。

権限の設定方法については、「[3.4.3\(2\) 2 ユニット以上の HiRDB/パラレルサーバを監視する場合の設定](#)」を参照してください。

(3) 識別子付きセットアップでセットアップした HiRDB の情報が正しく収集されない

考えられる主な要因は次のとおりです。

- HiRDB のクライアント環境定義に誤りがある。

HiRDB のクライアント環境定義の設定方法については、「[2.4.3 インスタンス環境の設定](#)」を参照してください。

(4) 正常稼働時にアラームを通知する

考えられる主な要因は次のとおりです。

- PI_RDFL または PI_RDFS レコードの Collection Interval が HiRDB のシンクポイント間隔よりも短い。

監視対象 HiRDB の各サーバのシンクポイント発生間隔を PI_RDFL または PI_RDFS レコードの Collection Interval よりも小さな値にしてください。HiRDB のシンクポイントの詳細は、マニュアル「[HiRDB システム運用ガイド](#)」を参照してください。

- HiRDB から SEGMENT 情報が取得できなかった。

RD エリアの状態によっては、pddbts の出力結果に SEGMENT 情報が出力されない場合があります。このとき、PI_RDDS レコードまたは PI_RDST レコードの SEGMENT 情報に関するフィールドには仮定値を設定します。PI_RDDS レコードおよび PI_RDST レコードの詳細は「[6. レコード](#)」を参照してください。

- HiRDB の pddbts コマンドが失敗した。

pddbts コマンドは RD エリアの状態によって動作しない場合があります。このとき、PI_RDDS レコードの pddbts コマンドから取得する情報に関するフィールドには仮定値を設定します。PI_RDDS レコードの詳細は「[6. レコード](#)」を参照してください。

(5) KAVE00213-W が output されて収集がスキップされる

考えられる主な要因は次のとおりです。

- 同じインスタンスのほかのレコードの収集や前回の収集が完了していない。
収集のスキップが多発する場合、メッセージ KAVF15018-I, KAVF15019-I からレコード収集に必要な時間を計算し、Collection Interval, Collection Offset の値を調整してください。

(6) 一時的にパフォーマンスデータを収集できないときがある

考えられる主な要因は次のとおりです。

- 1つのホスト内で複数の PFM - Agent for HiRDB のインスタンスが動作する環境で、同時に PI_SSYS レコード、PI_RDFS レコード、または PI_RDFL レコードを収集する設定になっている。
Collection Interval と Collection Offset を見直し、各レコードを同時に収集しないように設定してください。詳しくは「[6. レコード](#)」のレコードの注意事項を参照してください。
- レコード収集中にフェールオーバーが発生した。
PI_SSYS レコード、PI_RDFS レコードまたは PI_RDFL レコードの収集中に系切り替えが発生すると、統計情報を収集できないことがあります。詳しくは「[4.7.2 レコード収集中のフェールオーバー](#)」を参照してください。

(7) 定義変更などをしていないにも関わらず、PI_RDST レコード、および PI_RDDS レコードの収集に失敗するようになった

考えられる主な要因は次のとおりです。

- HiRDB_user に指定した HiRDB 認可識別子のパスワード有効期間を超えた。
CREATE CONNECTION SECURITY で HiRDB_user に指定した HiRDB 認可識別子のパスワード有効期間を設定している場合は、この有効期間を確認してください。HiRDB_user については、「[2.4.3 インスタンス環境の設定](#)」または「[3.4.3 インスタンス環境の設定](#)」を参照してください。CREATE CONNECTION SECURITY については、マニュアル「HiRDB SQL リファレンス」を参照してください。

(8) レコード収集のタイミングで、rsh (remsh, rcp) 用のポートが枯渇することがある

考えられる主な要因は次のとおりです。

- レコードを収集する間隔が短い、または短期間に多種のレコードを収集したことによって、TIME-WAIT 状態のコネクションが解放される前に次のレコードを収集した。
netstat コマンドなどで rsh (remsh, rcp) 用のポートの使用状況を確認して、レコードの収集間隔を調整してください。
また、HiRDB 10-03 以降のバージョンでは、pd_cmd_rmode で ssh を指定することも検討してください。pd_cmd_rmode の詳細はマニュアル「HiRDB システム定義」を参照してください。

(9) KAVF15020-W メッセージなどのワーニングメッセージやエラーメッセージが出力され続ける

PFM - Agent for HiRDB をクラスタシステムで運用しないで HiRDB の系切り替え機能を使用している場合、HiRDB の待機系で PFM - Agent for HiRDB を起動すると、PFM - Agent for HiRDB は待機系の（停止している）HiRDB に対してパフォーマンスデータを収集しようとするため、このような現象が発生します。待機系で出力されたメッセージを無視するか、待機系の PFM - Agent for HiRDB を停止してください。

(10) KAVF15063-W が出力されて収集がスキップされる

考えられる主な要因は次のとおりです。

- PFM - Agent for HiRDB 起動時に、HiRDB クライアント環境定義 PDLANG が有効になっていない。シェルなどから起動コマンドを実行している場合は、シェル内で環境変数 PDLANG を有効にして起動コマンドを実行してください。

8.2.2 セットアップやサービスの起動に関するトラブルシューティング

(1) PFM - Agent for HiRDB エージェントが起動しない

考えられる主な要因は次のとおりです。

- インスタンス作成時に指定した PDDIR に誤りがある。
インスタンス作成時に PDDIR を誤って指定した場合、エージェントが起動しないでメッセージも出力されません。インスタンス作成については、「[2.4.3 インスタンス環境の設定](#)」または「[3.4.3 インスタンス環境の設定](#)」を参照してください。
- プログラムの動作に必要なパッケージが不足している。
プログラムの動作に必要なパッケージが不足している場合、KAVE05033-E メッセージを出力してエージェントの起動に失敗します。必要なパッケージについてはリリースノートをご確認ください。
- root の最大プロセス数が不足している。
root の最大プロセス数が不足している場合、KAVE05033-E メッセージを出力してエージェントの起動に失敗します。詳細は「[3.2.7 インストール前の注意事項](#)」を参照してください。
- HiRDB がセットアップされていない。
HiRDB をインストールしていない、またはセットアップしていないと PFM - Agent for HiRDB は起動しません。PFM - Agent for HiRDB を起動する前に、HiRDB をインストールおよびセットアップしてください。

8.2.3 その他のトラブルに関するトラブルシューティング

トラブルが発生したときの現象を確認してください。メッセージが出力されている場合は、メッセージの内容を確認してください。また、Performance Management が出力するログ情報については、「[8.3 トラブルシューティング時に採取するログ情報](#)」を参照してください。

マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、トラブルへの対処方法について説明している章、および「[8.2.1 パフォーマンスデータの収集と管理に関するトラブルシューティング](#)」に示した対処をしても、トラブルが解決できなかった場合、または、これら以外のトラブルが発生した場合、トラブルの要因を調査するための資料を採取し、システム管理者に連絡してください。

採取が必要な資料および採取方法については、「[8.4 トラブル発生時に採取が必要な資料](#)」および「[8.5 資料の採取方法](#)」を参照してください。

8.3 トラブルシューティング時に採取するログ情報

Performance Management でトラブルが発生した場合、ログ情報を確認して対処方法を検討します。Performance Management を運用しているときに出力されるログ情報には、次の 4 種類があります。

- ・ システムログ
- ・ 共通メッセージログ
- ・ 稼働状況ログ
- ・ トレースログ

ここでは、各ログ情報について説明します。

8.3.1 トラブルシューティング時に採取するログ情報の種類

(1) システムログ

システムログとは、システムの状態やトラブルを通知するログ情報のことです。このログ情報は次のログファイルに出力されます。

- ・ Windows の場合
 - イベントログファイル
- ・ UNIX の場合
 - syslog ファイル

出力形式については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、ログ情報について説明している章を参照してください。

論理ホスト運用の場合の注意事項

Performance Management のシステムログのほかに、クラスタソフトによる Performance Management の制御などを確認するためにクラスタソフトのログが必要です。

(2) 共通メッセージログ

共通メッセージログとは、システムの状態やトラブルを通知するログ情報のことです。システムログよりも詳しいログ情報が出力されます。共通メッセージログの出力先ファイル名やファイルサイズについては、「8.3.2 ログファイルおよびディレクトリー一覧」を参照してください。また、出力形式については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、ログ情報について説明している章を参照してください。

論理ホスト運用の場合の注意事項

論理ホスト運用の Performance Management の場合、共通メッセージログは共有ディスクに出力されます。共有ディスク上にあるログファイルは、フェールオーバーするときにシステムとともに引き継がれますので、メッセージは同じログファイルに記録されます。

(3) 稼働状況ログ

稼働状況ログとは、PFM - Web Console が output するログ情報のことです。稼働状況ログの出力先ファイル名やファイルサイズについては、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、トラブルへの対処方法について説明している章を参照してください。また、出力形式については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、ログ情報について説明している章を参照してください。

(4) トレースログ

トレースログとは、トラブルが発生した場合に、トラブル発生の経緯を調査したり、各処理の処理時間を測定したりするために採取するログ情報のことです。

トレースログは、Performance Management のプログラムの各サービスが持つログファイルに出力されます。

論理ホスト運用の場合の注意事項

論理ホスト運用の Performance Management の場合、トレースログは共有ディスクに出力されます。共有ディスク上にあるログファイルは、フェールオーバーするときにシステムとともに引き継がれますので、メッセージは同じログファイルに記録されます。

8.3.2 ログファイルおよびディレクトリ一覧

ここでは、Performance Management のプログラムから出力されるログ情報について説明します。

稼働状況ログの出力先ファイル名やファイルサイズについては、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、トラブルへの対処方法について説明している章を参照してください。

(1) 共通メッセージログ

共通メッセージログの詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、ログ情報の詳細について説明している章を参照してください。

(2) トレースログ

ここでは、Performance Management のログ情報のうち、PFM - Agent のトレースログの出力元であるサービス名または制御名、および格納先ディレクトリ名を、OS ごとに表に示します。

表 8-2 トレースログの格納先フォルダ名 (Windows の場合)

ログ情報の種類	出力元	フォルダ名
トレースログ	Action Handler サービス	インストール先フォルダ¥bin¥action¥log¥
	Performance Management コマンド	インストール先フォルダ¥tools¥log¥
	Agent Collector サービス	インストール先フォルダ¥agtb¥agent¥インスタンス名¥log¥
	Agent Store サービス	インストール先フォルダ¥agtb¥store¥インスタンス名¥log¥
トレースログ (論理ホスト運用の場合)	Action Handler サービス	環境フォルダ※¥jp1pc¥bin¥action¥log¥
	Performance Management コマンド	環境フォルダ※¥jp1pc¥tools¥log¥
	Agent Collector サービス	環境フォルダ※¥jp1pc¥agtb¥agent¥インスタンス名¥log¥
	Agent Store サービス	環境フォルダ※¥jp1pc¥agtb¥store¥インスタンス名¥log¥

注※

環境フォルダは、論理ホスト作成時に指定した共有ディスク上のフォルダです。

表 8-3 トレースログの格納先ディレクトリ名 (UNIX の場合)

ログ情報の種類	出力元	ディレクトリ名
トレースログ	Action Handler サービス	/opt/jp1pc/bin/action/log/
	Performance Management コマンド	/opt/jp1pc/tools/log/
	Agent Collector サービス	/opt/jp1pc/agtb/agent/インスタンス名/log/
	Agent Store サービス	/opt/jp1pc/agtb/store/インスタンス名/log/
トレースログ (論理ホスト運用の場合)	Action Handler サービス	環境ディレクトリ*/jp1pc/bin/action/log/
	Performance Management コマンド	環境ディレクトリ*/jp1pc/tools/log/
	Agent Collector サービス	環境ディレクトリ*/jp1pc/agtb/agent/インスタンス名/log/
	Agent Store サービス	環境ディレクトリ*/jp1pc/agtb/store/インスタンス名/log/

注※

環境ディレクトリは、論理ホスト作成時に指定した共有ディスク上のディレクトリです。

8.4 トラブル発生時に採取が必要な資料

「8.2 トラブルシューティング」に示した対処をしてもトラブルを解決できなかった場合、トラブルの要因を調べるために資料を採取し、システム管理者に連絡する必要があります。この節では、トラブル発生時に採取が必要な資料について説明します。

Performance Management では、採取が必要な資料を一括採取するためのコマンドを用意しています。PFM - Agent の資料を採取するには、`jpcras` コマンドを使用します。`jpcras` コマンドを使用して採取できる資料については、表中に記号で示しています。

注意

`jpcras` コマンドで採取できる資料は、コマンド実行時に指定するオプションによって異なります。コマンドに指定するオプションと採取できる資料については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」を参照してください。

論理ホスト運用の場合の注意事項

論理ホスト運用の場合の注意事項を次に示します。

- 論理ホスト運用する場合の Performance Management のログは、共有ディスクに格納されます。なお、共有ディスクがオンラインになっている場合（Windows）、またはマウントされている場合（UNIX）は、`jpcras` コマンドで共有ディスク上のログも一括して採取できます。
- フェールオーバー時の問題を調査するには、フェールオーバーの前後の資料が必要です。このため、実行系と待機系の両方の資料が必要になります。
- 論理ホスト運用の Performance Management の調査には、クラスタソフトの資料が必要です。論理ホスト運用の Performance Management は、クラスタソフトから起動や停止を制御されているので、クラスタソフトの動きと Performance Management の動きを対比して調査するためです。

8.4.1 トラブル発生時に Windows 環境で採取が必要な資料

(1) OS のログ情報

OS のログ情報で、採取が必要な情報を次の表に示します。

表 8-4 OS のログ情報（Windows の場合）

情報の種類	概要	デフォルトのファイル名	jpcras コマンドでの採取
システムログ	Windows イベントログ	—	○
プロセス情報	プロセスの一覧	—	○
システムファイル	hosts ファイル	システムフォルダ¥system32¥drivers¥etc¥hosts	○
	services ファイル	システムフォルダ¥system32¥drivers¥etc¥services	○

情報の種類	概要	デフォルトのファイル名	jpcras コマンドでの採取
OS 情報	システム情報	—	○
	ネットワークステータス	—	○
	ホスト名	—	○
ダンプ情報	問題のレポートと解決策のログファイル	ユーザー モード プロセス ダンプ の出力先 フォルダ￥ プログラム名. プロセス ID. dmp 例: jpcagtt.exe.2420.dmp	×

(凡例)

○ : 採取できる

× : 採取できない

注※

別のフォルダにログファイルが出力されるように設定している場合は、該当するフォルダから資料を採取してください。

(2) Performance Management の情報

Performance Management に関する情報で、採取が必要な情報を次の表に示します。また、ネットワーク接続でのトラブルの場合、接続先マシン上のファイルの採取も必要です。

表 8-5 Performance Management の情報 (Windows の場合)

情報の種類	概要	デフォルトのファイル名	jpcras コマンドでの採取
共通メッセージログ	インストール先 フォルダ￥ log￥ jpclog{01 02}※ ¹	インストール先 フォルダ￥ log￥ jpclog{01 02}※ ¹	○
	インストール先 フォルダ￥ log￥ jpclogw{01 02}※ ¹	インストール先 フォルダ￥ log￥ jpclogw{01 02}※ ¹	○
構成情報	各構成情報 ファイル	—	○
	jptool service list コマンドの出力結果	—	○
バージョン情報	製品バージョン	—	○
	履歴情報	—	○
データベース情報	Agent Store サービス	• Store バージョン 1.0 の場合 インストール先 フォルダ￥ agtb￥ store￥ インスタンス名￥*.DB	○

情報の種類	概要	デフォルトのファイル名	jpcras コマンドでの採取
データベース情報	Agent Store サービス	インストール先フォルダ¥agtb¥store¥インスタンス名*. IDX • Store バージョン 2.0 の場合 インストール先フォルダ¥agtb¥store¥インスタンス名¥STPD インストール先フォルダ¥agtb¥store¥インスタンス名¥STPI フォルダ下の次に示すファイル。 *.DB *.IDX	○
トレースログ	Performance Management のプログラムで動作する各サービスのトレース情報	—※2	○
インストールログ※3	インストール時のメッセージログ	システムフォルダ¥TEMP¥HCDINST¥*.LOG	×

(凡例)

- ：採取できる
- ×：採取できない
- －：該当しない

注※1

ログファイルの出力方式については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の障害検知について説明している章を参照してください。

注※2

トレースログの格納先フォルダについては、「8.3.2 ログファイルおよびディレクトリ一覧」を参照してください。

注※3

インストールに失敗した場合に採取してください。

(3) オペレーション内容

トラブル発生時のオペレーション内容について、次に示す情報が必要です。

- オペレーション内容の詳細
- トラブル発生時刻
- マシン構成（各OSのバージョン、ホスト名、PFM - Manager と PFM - Agent の構成など）
- 再現性の有無

- PFM - Web Console からログインしている場合は、ログイン時の Performance Management ユーザー名

(4) 画面上のエラー情報

次に示すハードコピーを採取してください。

- アプリケーションエラーが発生した場合は、操作画面のハードコピー
- エラーメッセージダイアログボックスのハードコピー（詳細ボタンがある場合はその内容を含む）
- コマンド実行時にトラブルが発生した場合は、[コマンドプロンプト] ウィンドウまたは [管理者コンソール] ウィンドウのハードコピー

(5) ユーザーモードプロセスダンプ

Performance Management のプロセスがアプリケーションエラーで停止した場合は、ユーザーダンプを採取してください。

(6) 問題レポートの採取

Performance Management のプロセスがアプリケーションエラーで停止した場合は、問題レポートを採取してください。

(7) その他の情報

上記以外で必要な情報を次に示します。

- コマンド実行時にトラブルが発生した場合は、コマンドに指定した引数
- [アクセサリ] – [システムツール] – [システム情報] の内容
- Windows の [イベントビューア] ウィンドウを開き、左ペイン [Windows ログ] の、[システム] および [アプリケーション] の内容

8.4.2 トラブル発生時に UNIX 環境で採取が必要な資料

(1) OS のログ情報

OS のログ情報で、採取が必要な情報を次の表に示します。

表 8-6 OS のログ情報 (UNIX の場合)

情報の種類	概要	デフォルトのファイル名	jpcras コマンドでの採取
システムログ	syslog	• HP-UX の場合	○※1

情報の種類	概要	デフォルトのファイル名	jpcras コマンドでの採取
システムログ	syslog	/var/adm/syslog/syslog.log • AIX の場合 /var/adm/syslog* • Linux の場合 /var/log/messages*	○※1
プロセス情報	プロセスの一覧	—	○
システムファイル	hosts ファイル	/etc/hosts	○
	services ファイル	/etc/services	○
OS 情報	パッチ情報	—	○
	カーネル情報	—	○
	バージョン情報	—	○
	ネットワークステータス	—	○
	環境変数	—	○
	ホスト名	—	○
ダンプ情報	core ファイル※2	—	○

(凡例)

- : 採取できる
- － : 該当しない

注※1

デフォルトのパスおよびファイル名以外に出力されるように設定されているシステムでは、収集できません。手動で収集してください。

注※2

HP-UX 11i V3 (IPF)では、coreadm コマンドによって core ファイルの名称を任意に変更できます。ファイル名の先頭が「core」以外に変更されたファイルについては、jpcras コマンドでは収集できません。手動で収集してください。

(2) Performance Management の情報

Performance Management に関する情報で、採取が必要な情報を次の表に示します。また、ネットワーク接続でのトラブルの場合、接続先マシン上のファイルの採取も必要です。

表 8-7 Performance Management の情報 (UNIX の場合)

情報の種類	概要	デフォルトのファイル名	jpcras コマンドでの採取
共通メッセージログ	インストール先フォルダから出力されるメッセージログ (シーケンシャルファイル方式)	/opt/jp1pc/log/jpclog{01 02}※1	○
	インストール先フォルダから出力されるメッセージログ (ラップアラウンドファイル方式)	/opt/jp1pc/log/jpclogw{01 02}※1	○
構成情報	各構成情報ファイル	—	○
	jptool service list コマンドの出力結果	—	○
バージョン情報	製品バージョン	—	○
	履歴情報	—	○
データベース情報	Agent Store サービス	<ul style="list-style-type: none"> Store バージョン 1.0 の場合 /opt/jp1pc/agtb/store/インスタンス名/*.DB /opt/jp1pc/agtb/store/インスタンス名/*.IDX Store バージョン 2.0 の場合 /opt/jp1pc/agtb/store/インスタンス名/STPD /opt/jp1pc/agtb/store/インスタンス名/STPI ディレクトリ下の次に示すファイル。 *.DB *.IDX 	○
トレースログ	Performance Management のプログラムで動作する各サービスのトレース情報	—※2	○
インストールログ※3	Hitachi PP Installer の標準ログ	/etc/.hitachi/.hitachi.log /etc/.hitachi/.hitachi.log{01 02 03 04 05} /etc/.hitachi/.install.log /etc/.hitachi/.install.log{01 02 03 04 05}	×

(凡例)

- ：採取できる
- ×：採取できない
- －：該当しない

注※1

ログファイルの出力方式については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の障害検知について説明している章を参照してください。

注※2

トレースログの格納先ディレクトリについては、「8.3.2 ログファイルおよびディレクトリー一覧」を参照してください。

注※3

インストールに失敗した場合に採取してください。

(3) オペレーション内容

トラブル発生時のオペレーション内容について、次に示す情報が必要です。

- オペレーション内容の詳細
- トラブル発生時刻
- マシン構成（各OSのバージョン、ホスト名、PFM - ManagerとPFM - Agentの構成など）
- 再現性の有無
- PFM - Web Consoleからログインしている場合は、ログイン時のPerformance Managementユーザー名

(4) エラー情報

次に示すエラー情報を採取してください。

- コマンド実行時にトラブルが発生した場合は、コンソールに出力されたメッセージ

(5) その他の情報

上記以外で必要な情報を次に示します。

- コマンド実行時にトラブルが発生した場合は、コマンドに指定した引数

8.5 資料の採取方法

トラブルが発生したときに資料を採取する方法を次に示します。

8.5.1 トラブルシューティング時に Windows 環境で採取する資料の採取方法

(1) ダンプ情報を採取する

ダンプ情報の採取手順を次に示します。

1. タスクマネージャーを開く。
2. プロセスのタブを選択する。
3. ダンプを取得するプロセス名を右クリックし、「ダンプファイルの作成」を選択する。

次のフォルダに、ダンプファイルが格納されます。

```
システムドライブ¥Users¥ユーザー名¥AppData¥Local¥Temp
```

4. 手順 3 のフォルダからダンプファイルを採取する。

手順 3 と異なるフォルダにダンプファイルが出力されるように環境変数の設定を変更している場合は、変更先のフォルダからダンプファイルを採取してください。

(2) 資料採取コマンドを実行する

トラブルの要因を調べるための資料の採取には、`jpcras` コマンドを使用します。資料採取コマンドの実行手順を次に示します。なお、ここで説明する操作は、OS ユーザーとして Administrators 権限を持つユーザーが実行してください。

1. 資料採取するサービスがインストールされているホストにログオンする。
2. コマンドプロンプトで次に示すコマンドを実行して、コマンドインターフリタの「コマンド拡張機能」を有効にする。

```
cmd /E:ON
```

3. 採取する資料および資料の格納先フォルダを指定して、`jpcras` コマンドを実行する。

`jpcras` コマンドで、採取できるすべての情報を `c:\tmp\jpc\agt` フォルダに格納する場合の、コマンドの指定例を次に示します。

```
jpcras c:\tmp\jpc\agt all all
```

`jpcras` コマンドを実行すると、PFM サービスの一覧取得および起動状態の確認のため、内部的に `jptool service list -id * -host *` コマンドが実行されます。コマンド実行ホストとほかの Performance

Management システムのホストとの間にファイアウォールが設定されていたり、システム構成が大規模だったりすると、`jpcctl service list -id * -host *`コマンドの実行に時間が掛かる場合があります。そのような場合は、環境変数 `JPC_COLCTRLNOHOST` に 1 を設定することで `jpcctl service list -id * -host *`コマンドの処理を抑止し、コマンドの実行時間を短縮できます。

`jpcras` コマンドの詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、コマンドについて説明している章を参照してください。

注意

OS のユーザーアカウント制御機能 (UAC) を有効にしている場合は、コマンド実行時にユーザーアカウント制御のダイアログが表示されることがあります。ダイアログが表示された場合は、[続行] ボタンをクリックして資料採取を続行してください。[キャンセル] ボタンをクリックした場合は、資料採取が中止されます。

(3) 資料採取コマンドを実行する (論理ホスト運用の場合)

論理ホスト運用の Performance Management の資料は共有ディスクにあり、資料は実行系と待機系の両方で採取する必要があります。

トラブルの要因を調べるための資料の採取には、`jpcras` コマンドを使用します。資料採取コマンドの実行手順を次に示します。なお、ここで説明する操作は、OS ユーザーとして Administrators 権限を持つユーザーが実行してください。

論理ホスト運用の場合に、資料採取コマンドを実行する手順を説明します。

1. 共有ディスクをオンラインにする。

論理ホストの資料は共有ディスクに格納されています。実行系ノードでは、共有ディスクがオンラインになっていることを確認して資料を採取してください。

2. 実行系と待機系の両方で、採取する資料および資料の格納先フォルダを指定して、`jpcras` コマンドを実行する。

`jpcras` コマンドで、採取できるすべての情報を `c:\tmp\jpc\agt` フォルダに格納する場合の、コマンドの指定例を次に示します。

```
jpcras c:\tmp\jpc\agt all all
```

`jpcras` コマンドを `lhost` の引数を指定しないで実行すると、そのノードの物理ホストと論理ホストの Performance Management の資料が一とおり採取されます。論理ホスト環境の Performance Management がある場合は、共有ディスク上のログファイルが取得されます。

なお、共有ディスクがオフラインになっているノードで `jpcras` コマンドを実行すると、共有ディスク上のファイルを取得できませんが、エラーは発生しないで正常終了します。

注意

実行系ノードと待機系ノードの両方で、資料採取コマンドを実行して資料採取をしてください。フェールオーバーの前後を調査するには、実行系と待機系の両方の資料が必要です。

`jpcras` コマンドを実行すると、PFM サービスの一覧取得および起動状態の確認のため、内部的に `jpctool service list -id * -host *` コマンドが実行されます。コマンド実行ホストとほかの Performance Management システムのホストとの間にファイアウォールが設定されていたり、システム構成が大規模だったりすると、`jpctool service list -id * -host *` コマンドの実行に時間が掛かる場合があります。そのような場合は、環境変数 `JPC_COLCTRLNOHOST` に 1 を設定することで `jpctool service list -id * -host *` コマンドの処理を抑止し、コマンドの実行時間を短縮できます。`jpcras` コマンドの詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、コマンドについて説明している章を参照してください。

注意

OS のユーザーアカウント制御機能 (UAC) を有効にしている場合は、コマンド実行時にユーザーアカウント制御のダイアログが表示されることがあります。ダイアログが表示された場合は、[続行] ボタンをクリックして資料採取を続行してください。[キャンセル] ボタンをクリックした場合は、資料採取が中止されます。

3. クラスタソフトの資料を採取する。

この資料は、クラスタソフトと Performance Management のどちらでトラブルが発生しているのかを調査するために必要になります。クラスタソフトから Performance Management への起動停止などの制御要求と結果を調査できる資料を採取してください。

(4) Windows イベントログを採取する

Windows の [イベントビューア] ウィンドウで、Windows イベントログをファイルに出力してください。

(5) オペレーション内容を確認する

トラブル発生時のオペレーション内容を確認し、記録しておいてください。確認が必要な情報を次に示します。

- オペレーション内容の詳細
- トラブル発生時刻
- マシン構成（各 OS のバージョン、ホスト名、PFM - Manager と PFM - Agent の構成など）
- 再現性の有無
- PFM - Web Console からログインしている場合は、ログイン時の Performance Management ユーザー名

(6) 画面上のエラー情報を採取する

次に示すハードコピーを採取してください。

- アプリケーションエラーが発生した場合は、操作画面のハードコピー
- エラーメッセージダイアログボックスのハードコピー
詳細情報がある場合はその内容をコピーしてください。

- コマンド実行時にトラブルが発生した場合は、[コマンドプロンプト] ウィンドウまたは [管理者コンソール] ウィンドウのハードコピー

[コマンドプロンプト] ウィンドウまたは [管理者コンソール] ウィンドウのハードコピーを採取するときは、["コマンドプロンプト"のプロパティ] に次のように設定しておいてください。
 - [オプション] タブの [編集オプション]

[簡易編集モード] がチェックされた状態にする。
 - [レイアウト] タブ

[画面バッファのサイズ] の [高さ] に「500」を設定する。

(7) その他の情報を採取する

上記以外で必要な情報を採取してください。

- コマンド実行時にトラブルが発生した場合は、コマンドに指定した引数
- [アクセサリ] – [システムツール] – [システム情報] の内容
- Windows の [イベントビューア] ウィンドウを開き、左ペイン [Windows ログ] の、[システム] および [アプリケーション] の内容

8.5.2 トラブルシューティング時に UNIX 環境で採取する資料の採取方法

(1) 資料採取コマンドを実行する

トラブルの要因を調べるために資料の採取には、jpcras コマンドを使用します。資料採取コマンドの実行手順を次に示します。なお、ここで説明する操作は、OS ユーザーとして root ユーザー権限を持つユーザーが実行してください。

1. 資料採取するサービスがインストールされているホストにログインする。

2. 採取する資料および資料の格納先ディレクトリを指定して、jpcras コマンドを実行する。

jpcras コマンドで、採取できるすべての情報を /tmp/jpc/agt ディレクトリに格納する場合の、コマンドの指定例を次に示します。

```
jpcras /tmp/jpc/agt all all
```

資料採取コマンドで収集された資料は、tar コマンドおよび compress コマンドで圧縮された形式で、指定されたディレクトリに格納されます。ファイル名を次に示します。

jpcrasYYMMDD.tar.Z

YYMMDD には年月日が付加されます。

jpcras コマンドを実行すると、PFM サービスの一覧取得および起動状態の確認のため、内部的に jpctool service list -id * -host * コマンドが実行されます。コマンド実行ホストとほかの Performance

Management システムのホストとの間にファイアウォールが設定されていたり、システム構成が大規模だったりすると、`jpctool service list -id * -host *`コマンドの実行に時間が掛かる場合があります。そのような場合は、環境変数 `JPC_COLCTRLNOHOST` に 1 を設定することで `jpctool service list -id * -host *`コマンドの処理を抑止し、コマンドの実行時間を短縮できます。

`jpcras` コマンドの詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」を参照してください。

(2) 資料採取コマンドを実行する（論理ホスト運用の場合）

論理ホスト運用の Performance Management の資料は共有ディスクにあり、資料は実行系と待機系の両方で採取する必要があります。

トラブルの要因を調べるための資料の採取には、`jpcras` コマンドを使用します。資料採取コマンドの実行手順を次に示します。なお、ここで説明する操作は、OS ユーザーとして root 権限を持つユーザーが実行してください。

論理ホスト運用の場合の、資料採取コマンドの実行について、手順を説明します。

1. 共有ディスクをマウントする。

論理ホストの資料は共有ディスクに格納されています。実行系ノードでは、共有ディスクがマウントされていることを確認して資料を採取してください。

2. 実行系と待機系の両方で、採取する資料および資料の格納先ディレクトリを指定して、`jpcras` コマンドを実行する。

`jpcras` コマンドで、採取できるすべての情報を /tmp/jpc/agt ディレクトリに格納する場合の、コマンドの指定例を次に示します。

```
jpcras /tmp/jpc/agt all all
```

資料採取コマンドで収集された資料は、`tar` コマンドおよび `compress` コマンドで圧縮された形式で、指定されたディレクトリに格納されます。ファイル名を次に示します。

`jpcrasYYMMDD.tar.Z`

`YYMMDD` には年月日が付加されます。

`jpcras` コマンドを `lhost` の引数を指定しないで実行すると、そのノードの物理ホストと論理ホストの Performance Management の資料が一とおり採取されます。論理ホスト環境の Performance Management がある場合は、共有ディスク上のログファイルが取得されます。

なお、共有ディスクがマウントされていないノードで `jpcras` コマンドを実行すると、共有ディスク上のファイルを取得できませんが、エラーは発生しないで正常終了します。

注意

実行系ノードと待機系ノードの両方で、資料採取コマンドを実行して資料採取をしてください。フェールオーバーの前後を調査するには、実行系と待機系の両方の資料が必要です。

`jpcras` コマンドを実行すると、PFM サービスの一覧取得および起動状態の確認のため、内部的に `jpctool service list -id * -host *` コマンドが実行されます。コマンド実行ホストとほかの Performance Management システムのホストとの間にファイアウォールが設定されていたり、システム構成が大規模だったりすると、`jpctool service list -id * -host *` コマンドの実行に時間が掛かる場合があります。そのような場合は、環境変数 `JPC_COLCTRLNOHOST` に 1 を設定することで `jpctool service list -id * -host *` コマンドの処理を抑止し、コマンドの実行時間を短縮できます。`jpcras` コマンドの詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」を参照してください。

3. クラスタソフトの資料を採取する。

この資料は、クラスタソフトと Performance Management のどちらでトラブルが発生しているのかを調査するために必要になります。クラスタソフトから Performance Management への起動停止などの制御要求と結果を調査できる資料を採取してください。

(3) オペレーション内容を確認する

トラブル発生時のオペレーション内容を確認し、記録しておいてください。確認が必要な情報を次に示します。

- オペレーション内容の詳細
- トラブル発生時刻
- マシン構成（各 OS のバージョン、ホスト名、PFM - Manager と PFM - Agent の構成など）
- 再現性の有無
- PFM - Web Console からログインしている場合は、ログイン時の Performance Management ユーザー名

(4) エラー情報を採取する

次に示すエラー情報を採取してください。

- コマンド実行時にトラブルが発生した場合は、コンソールに出力されたメッセージ

(5) その他の情報を採取する

上記以外で必要な情報を次に示します。

- コマンド実行時にトラブルが発生した場合は、コマンドに指定した引数

8.6 Performance Management の障害検知

Performance Management では、ヘルスチェック機能を利用することで Performance Management 自身の障害を検知できます。ヘルスチェック機能では、監視エージェントや監視エージェントが稼働するホストの稼働状態を監視し、監視結果を監視エージェントの稼働状態の変化として PFM - Web Console 上に表示します。

また、PFM サービス自動再起動機能を利用することで、PFM サービスが何らかの原因で異常停止した場合に自動的に PFM サービスを再起動したり、定期的に PFM サービスを再起動したりできます。

ヘルスチェック機能によって監視エージェントの稼働状態を監視したり、PFM サービス自動再起動機能によって PFM サービスを自動再起動したりするには、Performance Management のサービスの詳細な状態を確認するステータス管理機能を使用します。このため、対象となる監視エージェントがステータス管理機能に対応したバージョンであり、ステータス管理機能が有効になっている必要があります。ホストの稼働状態を監視する場合は前提となる条件はありません。

また、Performance Management のログファイルをシステム統合監視製品である JP1/Base で監視することによっても、Performance Management 自身の障害を検知できます。これによって、システム管理者は、トラブルが発生したときに障害を検知し、要因を特定して復旧の対処をします。

Performance Management 自身の障害検知の詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の障害検知について説明している章を参照してください。

8.7 Performance Management の障害回復

Performance Management のサーバで障害が発生したときは、バックアップファイルを基にして、障害が発生する前の正常な状態に回復する必要があります。

障害が発生する前の状態に回復する手順については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、トラブルへの対処方法について説明している章を参照してください。

付録

付録 A システム見積もり

PFM - Agent for HiRDB を使ったシステムを構築する前に、使用するマシンの性能が、 PFM - Agent for HiRDB を運用するのに十分であるか、見積もっておくことをお勧めします。

見積もり項目を次に説明します。

付録 A.1 メモリー所要量

メモリー所要量は、 PFM - Agent for HiRDB の設定状況や使用状況によって変化します。メモリー所要量の見積もり式については、リリースノートを参照してください。

付録 A.2 ディスク占有量

ディスク占有量は、パフォーマンスデータを収集するレコード数によって変化します。ディスク占有量の見積もりには、システム全体のディスク占有量、Store データベース（Store バージョン 1.0）のディスク占有量、または Store データベース（Store バージョン 2.0）の見積もりが必要になります。これらの見積もり式については、リリースノートを参照してください。

付録 A.3 クラスタ運用時のディスク占有量

クラスタ運用時のディスク占有量の見積もりは、クラスタシステムで運用しない場合のディスク占有量の見積もりと同じです。ディスク占有量については、リリースノートを参照してください。

付録 B カーネルパラメーター

PFM - Agent for HiRDB をインストールしたマシンのカーネルパラメーター nproc は、root ユーザーの nproc の値 \geq HiRDB 管理者ユーザーの nproc の値となるように設定してください。この設定をしない場合、PFM - Agent for HiRDB のサービスが起動しない、または一部のレコードの収集に失敗するおそれがあります。

なお、UNIX 環境で PFM - Manager および PFM - Web Console を使用する場合の、カーネルパラメーターの調整については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、付録に記載されているカーネルパラメーター一覧を参照してください。

付録 C 識別子一覧

PFM - Agent for HiRDB を操作したり、 PFM - Agent for HiRDB の Store データベースからパフォーマンスデータを抽出したりする際、 PFM - Agent for HiRDB であることを示す識別子が必要な場合があります。 PFM - Agent for HiRDB の識別子を次の表に示します。

表 C-1 PFM - Agent for HiRDB の識別子一覧

用途	名称	識別子	説明
コマンドなど	プロダクト ID	B	プロダクト ID とは、サービス ID の一部。サービス ID は、コマンドを使用して Performance Management のシステム構成を確認する場合や、パフォーマンスデータをバックアップする場合などに必要。サービス ID については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の付録を参照のこと。
	サービスキー	agtB または HiRDB	コマンドを使用して PFM - Agent for HiRDB を起動する場合や、終了する場合などに必要。サービスキーについては、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の付録を参照のこと。
ヘルプ	ヘルプ ID	pcab	PFM - Agent for HiRDB のヘルプであることを表す。

付録 D プロセス一覧

ここでは、PFM - Agent for HiRDB のプロセス一覧を記載します。

PFM - Manager, PFM - Web Console, および PFM - Base のプロセスについては、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の付録を参照してください。

PFM - Agent for HiRDB のプロセス一覧を次の表に示します。なお、プロセス名の後ろに記載されている値は、同時に起動できるプロセス数です。

注意

論理ホストの PFM - Agent でも、動作するプロセスおよびプロセス数は同じです。

表 D-1 PFM - Agent for HiRDB のプロセス一覧 (Windows 版)

プロセス名 (プロセス数)	機能
jpcagtb.exe(n)	パフォーマンスデータ収集プロセス。このプロセスはインスタンスごとに 1 つ起動する。
jpcagtb_main.exe(n)	jpcagtb プロセスの子プロセス。このプロセスはインスタンスごとに 1 つ起動する。
jpcsto_インスタンス名.exe(n)	Agent Store サービスプロセス。このプロセスは、PFM - Agent for HiRDB のインスタンスごとに 1 つ起動する。

表 D-2 PFM - Agent for HiRDB のプロセス一覧 (UNIX 版)

プロセス名 (プロセス数)	機能
jpcagtb(n)	パフォーマンスデータ収集プロセス。このプロセスはインスタンスごとに 1 つ起動する。
jpcagtb_main(n)	jpcagtb プロセスの子プロセス。このプロセスはインスタンスごとに 1 つ起動する。
agtbt/jpcsto_インスタンス名 (n)	Agent Store サービスプロセス。このプロセスは、PFM - Agent for HiRDB のインスタンスごとに 1 つ起動する。

付録 E ポート番号一覧

ここでは、PFM - Agent for HiRDB で使用するポート番号と、ファイアウォール環境での設定・削除方法について説明します。

PFM - Manager, PFM - Web Console, PFM - Base のポート番号およびファイアウォールの通過方向については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の付録を参照してください。

ポート番号は、ユーザー環境に合わせて任意の番号に変更することもできます。

ポート番号の変更方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。なお、使用するプロトコルは TCP/IP です。

注意

Performance Management は、1 対 1 のアドレス変換をする静的 NAT (Basic NAT) に対応しています。

動的 NAT や、ポート変換機能を含む NAPT (IP Masquerade, NAT+) には対応していません。

付録 E.1 PFM - Agent for HiRDB のポート番号

PFM - Agent for HiRDB で使用するポート番号を次の表に示します。

表 E-1 PFM - Agent for HiRDB で使用するポート番号

ポート番号	サービス名	パラメーター	用途
自動※1	Agent Store サービス	jp1pcstob[nnn]※2	パフォーマンスデータを記録したり、履歴レポートを取得したりするときに使用する。
自動※1	Agent Collector サービス	jp1pcagtb[nnn]※2	アラームをバインドしたり、リアルタイムレポートを取得したりするときに使用する。

注※1

サービスが再起動されるたびに、システムで使用されていないポート番号が自動的に割り当てられます。

注※2

複数インスタンスを作成している場合、2 番目以降に作成したインスタンスに通番 (nnn) が付加されます。最初に作成したインスタンスには、通番は付加されません。

付録 E.2 ファイアウォールの通過方向

ファイアウォールを挟んで PFM - Manager と PFM - Agent for HiRDB を配置する場合は、PFM - Manager と PFM - Agent のすべてのサービスにポート番号を固定値で設定してください。

詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、ファイアウォールの通過方向について説明している個所を参照してください。

付録 E.3 Windows ファイアウォール環境での設定方法

(1) 規則を登録する

(a) [管理ツール] で登録する場合

1. [コントロールパネル] – [管理ツール] – [セキュリティが強化された Windows ファイアウォール] を選択します。
2. 画面左側メニューの [受信の規則] を選択し、[操作] メニューから [新しい規則] または [新規の規則] を選択します。
3. [新規の受信の規則ウィザード] の [規則の種類] でポートを選択し、次の表に示す受信の規則を登録します。

表 E-2 受信規則の登録内容

サービス	プロトコルおよびポート	操作	プロファイル	名前
Agent Collector サービス	TCP 特定のローカルポート : xxxx*	接続を許可する	すべてチェック	PFM - Agent for HiRDB <インスタンス名>
Agent Store サービス	TCP 特定のローカルポート : yyyy*	接続を許可する	すべてチェック	PFM - Agent Store for HiRDB <インスタンス名>

注※

設定したポート番号を指定してください。

(b) コマンドで登録する場合

1. 次の表に示すサービスのポートを登録します。

表 E-3 コマンドでの登録内容

サービス	ポート番号	サービスの名前	ポートの説明*1
Agent Collector サービス	xxxx*2	PFM - Agent for HiRDB <インスタンス名>	jplpcagtb
Agent Store サービス	yyyy*2	PFM - Agent Store for HiRDB <インスタンス名>	jplpcstob

注※1

ポートの説明は任意のため省略できます。

注※2

設定したポート番号を指定してください。

2. 次のコマンドを実行します。

```
netsh△advfirewall△firewall△add△rule△name="<サービスの名前>"△dir=in△  
action=allow△protocol=TCP△localport=<登録するポート番号>△  
description※="<ポートの説明>"△enable=yes
```

(凡例)

△：スペース

注※

description パラメーターは任意のため省略できます。

実施例

```
>netsh advfirewall firewall add rule name="PFM - Agent for HiRDB HDR1" dir=in action=allo  
w protocol=TCP localport=20281 description="jp1pcagtb" enable=yes  
>netsh advfirewall firewall add rule name="PFM - Agent Store for HiRDB HDR1" dir=in actio  
n=allow protocol=TCP localport=20282 description="jp1pcstob" enable=yes
```

注

設定したポート番号を指定してください。

(2) 登録を確認する

1. [コントロールパネル] – [管理ツール] – [セキュリティが強化された Windows ファイアウォール] を選択します。

[受信の規則] に登録内容が表示され、有効になっていることを確認してください。

付録 E.4 Linux 環境でのファイアウォール設定方法 (iptables, ip6tables が有効な場合)

ip6tables が有効な場合は、iptables の設定とは別に ip6tables の設定が必要です。

ip6tables の設定を実施する場合は、次の手順にあるコマンドの「iptables」を「ip6tables」に読み替えてください。

(1) 規則を登録する

次のコマンドを実行して、受信の規則を登録します。

```
iptables△-I△INPUT△-p△tcp△-m△tcp△--dport△<登録するポート番号>△-j△ACCEPT
```

(凡例)

△：スペース

実施例

```
# iptables -I INPUT -p tcp -m tcp --dport 20281 -j ACCEPT  
# iptables -I INPUT -p tcp -m tcp --dport 20282 -j ACCEPT
```

注

設定したポート番号を指定してください。

(2) 登録した規則を反映する

次のコマンドを実行して、登録した規則を反映します。

```
service△iptables△save
```

(凡例)

△：スペース

実施例

```
# service iptables save  
iptables: Saving firewall rules to /etc/sysconfig/iptables: [ OK ]
```

(3) 登録を確認する

次のコマンドを実行して、指定したポートが許可されていること（ACCEPT になっていること）を確認してください。

```
iptables△-L
```

(凡例)

△：スペース

実施例

```
# iptables -L  
Chain INPUT (policy ACCEPT)  
target     prot opt source          destination  
ACCEPT    tcp  --  anywhere        anywhere         tcp dpt:20282  
ACCEPT    tcp  --  anywhere        anywhere         tcp dpt:20281  
ACCEPT    all  --  anywhere        anywhere         state RELATED,ESTABLISHED  
ACCEPT    icmp --  anywhere       anywhere  
ACCEPT    all  --  anywhere        anywhere  
ACCEPT    tcp  --  anywhere        anywhere         state NEW tcp dpt:ssh  
REJECT    all  --  anywhere        anywhere         reject-with icmp-host-prohibited  
  
Chain FORWARD (policy ACCEPT)  
target     prot opt source          destination
```

```

REJECT      all  --  anywhere          anywhere          reject-with icmp-host-prohi
bited

Chain OUTPUT (policy ACCEPT)
target     prot opt source           destination

```

付録 E.5 Linux 環境でのファイアウォール設定方法 (firewalld が有効な場合)

(1) 規則を登録する

次のコマンドを実行して、受信の規則を登録します。

```
firewall-cmd△--permanent△--add-port=<登録するポート番号>/tcp
```

(凡例)

△：スペース

参考

サービス名で登録および削除する場合は、次のコマンドを実行してください。

```
firewall-cmd△--permanent△--add-service=<パラメーター※＞
```

```
firewall-cmd△--permanent△--remove-service=<パラメーター※＞
```

(凡例) △：スペース

注※

指定するパラメーターは「[付録 E.1 PFM - Agent for HiRDB のポート番号](#)」の「[表 E-1 PFM - Agent for HiRDB で使用するポート番号](#)」を参照してください。

実施例

```
# firewall-cmd --permanent --add-port=20281/tcp
success
# firewall-cmd --permanent --add-port=20282/tcp
success
```

注

設定したポート番号を指定してください。

(2) 登録した規則を反映する

次のコマンドを実行して、登録した規則を反映します。

```
firewall-cmd△--reload
```

(凡例)

△：スペース

実施例

```
# firewall-cmd --reload  
success
```

(3) 登録を確認する

次のコマンドを実行して、指定したポート番号が許可されていることを確認してください。

```
firewall-cmd△--list-all
```

(凡例)

△：スペース

実施例

```
# firewall-cmd --list-all  
public (default, active)  
  interfaces: ens32  
  sources:  
  services: dhcpcv6-client ssh  
  ports: 20282/tcp 20281/tcp  
  masquerade: no  
  forward-ports:  
  icmp-blocks:  
  rich rules:
```

付録 E.6 Windows ファイアウォール環境での設定削除方法

登録した規則を削除します。

1. [コントロールパネル] – [管理ツール] – [セキュリティが強化された Windows ファイアウォール] を選択します。
2. 画面左側メニューの [受信の規則] に表示されている登録情報を選択し、[操作] メニューの [削除] を選択します。

規則を削除しないで一時的に登録情報を無効にする場合は、[操作] メニューの [規則の無効化] を選択します。

付録 E.7 Linux 環境でのファイアウォール設定削除方法 (iptables, ip6tables が有効な環境)

登録した規則を次のコマンドを実行して削除および反映してください。

なお、ip6tables が有効な場合は、次のコマンドの「iptables」を「ip6tables」に読み替えて実施してください。

```
iptables -D INPUT -p tcp -m tcp --dport <登録したポート番号> -j ACCEPT  
service iptables save
```

(凡例)

△：スペース

実施例

```
# iptables -D INPUT -p tcp -m tcp --dport 20281 -j ACCEPT  
# iptables -D INPUT -p tcp -m tcp --dport 20282 -j ACCEPT  
# service iptables save
```

注

登録したポート番号を指定してください。

付録 E.8 Linux 環境でのファイアウォール設定削除方法 (firewalld が有効な環境)

登録した規則を次のコマンドを実行して削除および反映してください。

```
firewall-cmd --permanent --remove-port=<登録したポート番号>/tcp  
firewall-cmd --reload
```

(凡例)

△：スペース

実施例

```
# firewall-cmd --permanent --remove-port=20281/tcp  
success  
# firewall-cmd --permanent --remove-port=20282/tcp  
success  
# firewall-cmd --reload  
success
```

注

登録したポート番号を指定してください。

付録 F PFM - Agent for HiRDB のプロパティ

ここでは、PFM - Web Console で表示される PFM - Agent for HiRDB の Agent Store サービスのプロパティ一覧、および Agent Collector サービスのプロパティ一覧を記載します。

付録 F.1 Agent Store サービスのプロパティ一覧

PFM - Agent for HiRDB の Agent Store サービスのプロパティ一覧を次の表に示します。

表 F-1 PFM - Agent for HiRDB の Agent Store サービスのプロパティ一覧

フォルダ名	プロパティ名	説明
-	First Registration Date	サービスが PFM - Manager に認識された最初の日時が表示される。
	Last Registration Date	サービスが PFM - Manager に認識された最新の日時が表示される。
General	-	ホスト名やディレクトリなどの情報が格納されている。このフォルダに格納されているプロパティは変更できない。
	Directory	サービスの動作するカレントディレクトリ名が表示される。
	Host Name	サービスが動作する物理ホスト名が表示される。
	Process ID	サービスのプロセス ID が表示される。
	Physical Address	サービスが動作するホストの IP アドレスおよびポート番号が表示される。
	User Name	サービスプロセスを実行したユーザー名が表示される。
	Time Zone	サービスで使用されるタイムゾーンが表示される。
System	-	サービスが起動されている OS の、OS 情報が格納されている。このフォルダに格納されているプロパティは変更できない。
	CPU Type	CPU の種類が表示される。
	Hardware ID	ハードウェア ID が表示される。
	OS Type	OS の種類が表示される。
	OS Name	OS 名が表示される。
	OS Version	OS のバージョンが表示される。
Network Services	-	Performance Management 通信共通ライブラリーについての情報が格納されている。このフォルダに格納されているプロパティは変更できない。

フォルダ名	プロパティ名	説明
Network Services	Build Date	Agent Store サービスの作成日が表示される。
	INI File	jpcns.ini ファイルの格納ディレクトリ名が表示される。
Network Services	Service	— サービスについての情報が格納されている。このフォルダに格納されているプロパティは変更できない。 Description 次の形式でホスト名が表示される。 インスタンス名_ホスト名 Local Service Name サービス ID が表示される。 Remote Service Name 接続先 PFM - Manager ホストの Master Manager サービスのサービス ID が表示される。 EP Service Name 接続先 PFM - Manager ホストの Correlator サービスのサービス ID が表示される。
	Retention	— Store バージョン 1.0 を使用している場合にデータの保存期間を設定する。 データの保存期間の設定方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、稼働監視データの管理について説明している章を参照のこと。
	Product Interval - Minute Drawer	分ごとの PI レコードタイプのレコードの保存期間を設定する。 次のリストから選択できる。 <ul style="list-style-type: none">• Minute• Hour• Day• 2 Days• 3 Days• 4 Days• 5 Days• 6 Days• Week• Month• Year
	Product Interval - Hour Drawer	時間ごとの PI レコードタイプのレコードの保存期間を設定する。 次のリストから選択できる。 <ul style="list-style-type: none">• Hour• Day• 2 Days• 3 Days• 4 Days

フォルダ名	プロパティ名	説明
Retention	Product Interval - Hour Drawer	<ul style="list-style-type: none"> • 5 Days • 6 Days • Week • Month • Year
	Product Interval - Day Drawer	<p>日ごとの PI レコードタイプのレコードの保存期間を設定する。</p> <p>次のリストから選択できる。</p> <ul style="list-style-type: none"> • Day • 2 Days • 3 Days • 4 Days • 5 Days • 6 Days • Week • Month • Year
	Product Interval - Week Drawer	<p>週ごとの PI レコードタイプのレコードの保存期間を設定する。</p> <p>次のリストから選択できる。</p> <ul style="list-style-type: none"> • Week • Month • Year
	Product Interval - Month Drawer	<p>月ごとの PI レコードタイプのレコードの保存期間を設定する。</p> <p>次のリストから選択できる。</p> <ul style="list-style-type: none"> • Month • Year
	Product Interval - Year Drawer	<p>年ごとの PI レコードタイプのレコードの保存期間。Year で固定。</p>
RetentionEx	Product Detail - PD レコードタイプ のレコード ID	<p>PD レコードタイプの各レコードの保存レコード数を設定する。</p> <p>0~2,147,483,647 の整数が指定できる。</p> <p>注意：範囲外の数値、またはアルファベットなどの文字を指定した場合、エラーメッセージが表示される。</p>
	—	<p>Store バージョン 2.0 を使用している場合にデータの保存期間を設定する。</p> <p>データの保存期間の設定方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、稼働監視データの管理について説明している章を参照のこと。</p>

フォルダ名	プロパティ名	説明
RetentionEx	Product Interval - PI レコードタイプのレコード ID	Period - Minute Drawer (Day) PI レコードタイプのレコード ID ごとに、分単位のパフォーマンスデータの保存期間を設定する。 保存期間（日数）を 0～366 の整数で指定できる。
		Period - Hour Drawer (Day) PI レコードタイプのレコード ID ごとに、時間単位のパフォーマンスデータの保存期間を設定する。 保存期間（日数）を 0～366 の整数で指定できる。
		Period - Day Drawer (Week) PI レコードタイプのレコード ID ごとに、日単位のパフォーマンスデータの保存期間を設定する。 保存期間（週の数）を 0～522 の整数で指定できる。
		Period - Week Drawer (Week) PI レコードタイプのレコード ID ごとに、週単位のパフォーマンスデータの保存期間を設定する。 保存期間（週の数）を 0～522 の整数で指定できる。
		Period - Month Drawer (Month) PI レコードタイプのレコード ID ごとに、月単位のパフォーマンスデータの保存期間を設定する。 保存期間（月の数）を 0～120 の整数で指定できる。
	Product Detail - PD レコードタイプのレコード ID	Period - Year Drawer (Year) PI レコードタイプのレコード ID ごとに、年単位のパフォーマンスデータの保存期間が表示される。表示される値は 10 で固定。 Period (Day) PD レコードタイプのレコード ID ごとに、パフォーマンスデータの保存期間を設定する。 保存期間（日数）を 0～366 の整数で指定できる。
Disk Usage	—	各データベースが使用しているディスク容量が格納されている。このフォルダに格納されているプロパティには、プロパティを表示した時点でのディスク使用量が表示される。このフォルダに格納されているプロパティは変更できない。
	Product Interval	PI レコードタイプのレコードで使用されるディスク容量が表示される。
	Product Detail	PD レコードタイプのレコードで使用されるディスク容量が表示される。
	Product Alarm	PA レコードタイプのレコードで使用されるディスク容量が表示される。PFM - Agent for HiRDB では使用しない。
	Product Log	PL レコードタイプのレコードで使用されるディスク容量が表示される。PFM - Agent for HiRDB では使用しない。
	Total Disk Usage	データベース全体で使用されるディスク容量が表示される。
Configuration	—	Agent Store サービスのプロパティが表示される。
	Store Version	Store データベースのバージョンが表示される。

フォルダ名	プロパティ名	説明
Configuration	Store Version	<ul style="list-style-type: none"> • Store バージョン 1.0 の場合 「1.0」 • Store バージョン 2.0 の場合 「2.0」
Multiple Manager Configuration	Primary Manager	監視二重化の場合、プライマリーに設定しているマネージャーのホスト名が表示される。 このプロパティは変更できない。
	Secondary Manager	監視二重化の場合、セカンダリーに設定しているマネージャーのホスト名が表示される。 このプロパティは変更できない。

(凡例)

– : 該当しない

付録 F.2 Agent Collector サービスのプロパティ一覧

PFM - Agent for HiRDB の Agent Collector サービスのプロパティ一覧を次の表に示します。

表 F-2 PFM - Agent for HiRDB の Agent Collector サービスのプロパティ一覧

フォルダ名	プロパティ名	説明
-	First Registration Date	サービスが PFM - Manager に認識された最初の日時が表示される。
	Last Registration Date	サービスが PFM - Manager に認識された最新の日時が表示される。
	Data Model Version	データモデルのバージョンが表示される。
General	–	ホスト名やディレクトリなどの情報が格納されている。 このフォルダに格納されているプロパティは変更できない。
	Directory	サービスの動作するカレントディレクトリ名が表示される。
	Host Name	サービスが動作する物理ホスト名が表示される。
	Process ID	サービスのプロセス ID が表示される。
	Physical Address	サービスが動作するホストの IP アドレスが表示される。
	User Name	サービスプロセスを実行したユーザー名が表示される。
	Time Zone	サービスで使用されるタイムゾーンが表示される。

フォルダ名	プロパティ名	説明	
System	—	サービスが起動している OS の、OS 情報が格納されている。このフォルダに格納されているプロパティは変更できない。	
	CPU Type	CPU の種類が表示される。	
	Hardware ID	ハードウェア ID が表示される。	
	OS Type	OS の種類が表示される。	
	OS Name	OS 名が表示される。	
	OS Version	OS のバージョンが表示される。	
Network Services	—	Performance Management 通信共通ライブラリーについての情報が格納されている。このフォルダに格納されているプロパティは変更できない。	
	Build Date	Performance Management 通信共通ライブラリーの作成日が表示される。	
	INI File	jpcns.ini ファイルの格納フォルダ名が表示される。	
Network Services	Service	—	サービス名（サービス ID）についての情報が格納されている。このフォルダに格納されているプロパティは変更できない。
		Description	次の形式でホスト名が表示される。 インスタンス名_ホスト名
		Local Service Name	サービス ID が表示される。
		Remote Service Name	接続先 PFM - Manager ホストの Master Manager サービスのサービス ID が表示される。
		EP Service Name	接続先 PFM - Manager ホストの Correlator サービスのサービス ID が表示される。
		AH Service Name	同一ホストにある Action Handler サービスのサービス ID が表示される。
Detail Records		—	PD レコードタイプのレコードのプロパティが格納されている。収集されているレコードのレコード ID は、太字で表示される。
Detail Records	レコード ID*	—	レコードのプロパティが格納されている。
		Description	レコードタイプの説明が表示される。このプロパティは変更できない。
		Log	リスト項目から「Yes」または「No」を選択し、レコードを Store データベースに記録するかどうかを指定する。この値が「Yes」でかつ、Collection Interval が 0 より大きい値であれば、データベースに記録される。指定がない場合は「No」が設定される。

フォルダ名	プロパティ名	説明
Detail Records	レコード ID*	Log(ITSLM) JP1/SLM - Manager と連携する場合に、JP1/SLM - Manager からレコードを PFM - Agent for HiRDB の Store データベースに記録するかどうかについて「Yes」または「No」で表示される。連携しない場合は「No」固定で表示される。このプロパティは変更できない。
	Monitoring(ITSLM)	JP1/SLM - Manager と連携する場合に、レコードを JP1/SLM - Manager に送信するかどうかについて、JP1/SLM - Manager での設定が「Yes」または「No」で表示される。連携しない場合は「No」固定で表示される。このプロパティは変更できない。
	Collection Interval ※2	データの収集間隔を指定する。指定できる値は 0~2,147,483,647 秒で、1 秒単位で指定できる。なお、指定がない場合、または 0 と指定した場合は 0 秒となり、データは収集されない。
	Collection Offset※ 2	データの収集を開始するオフセット値を指定する。指定できる値は、Collection Interval で指定した値の範囲内で、0~32,767 秒の 1 秒単位で指定できる。なお、データ収集の記録時間は、Collection Offset の値によらないで、Collection Interval と同様の時間となる。
	Over 10 Sec Collection Time	履歴データの収集をリアルタイムレポートの表示処理より優先する場合（履歴収集優先機能が有効な場合）にだけ表示される。 レコードの収集に 10 秒以上掛かることがあるかどうかが「Yes」または「No」で表示される。 <ul style="list-style-type: none">• Yes : 10 秒以上掛かることがある• No : 10 秒掛からない このプロパティは変更できない。
	Realtime Report Data Collection Mode	履歴データの収集をリアルタイムレポートの表示処理より優先する場合（履歴収集優先機能が有効な場合）にだけ表示される。 リアルタイムレポートの表示モードを指定する。 <ul style="list-style-type: none">• Reschedule : 再スケジュールモードの場合• Temporary Log : 一時保存モードの場合 なお、Over 10 Sec Collection Time の値が「Yes」のレコードには、一時保存モード（Temporary Log）を指定する必要がある。
	LOGIF	レコードをデータベースに記録するときの条件を指定する。条件に合ったレコードだけがデータベースに記録される。PFM - Web Console の [サービス階層] 画面で表示されるサービスのプロパティ画面の、下部フレームの [LOGIF] をクリックすると表示される [ログ収集条件設定] ウィンドウで作成した条件式（文字列）が表示される。

フォルダ名	プロパティ名	説明	
Interval Records	—	PI レコードタイプのレコードのプロパティが格納されている。収集されているレコードのレコード ID は、太字で表示される。	
Interval Records	レコード ID*	<p>—</p> <p>Description</p> <p>Log</p> <p>Log(ITSLM)</p> <p>Monitoring(ITSLM)</p> <p>Collection Interval</p> <p>Collection Offset</p> <p>Over 10 Sec Collection Time</p> <p>Realtime Report Data Collection Mode</p>	<p>レコードのプロパティが格納されている。</p> <p>レコードタイプの説明が表示される。このプロパティは変更できない。</p> <p>リスト項目から「Yes」または「No」を選択し、レコードを Store データベースに記録するかどうかを指定する。この値が「Yes」でかつ、Collection Interval が 0 より大きい値であれば、データベースに記録される。指定がない場合は「No」が設定される。</p> <p>JP1/SLM - Manager と連携する場合に、JP1/SLM - Manager からレコードを PFM - Agent for HiRDB の Store データベースに記録するかどうかについて「Yes」または「No」で表示される。連携しない場合は「No」固定で表示される。このプロパティは変更できない。</p> <p>JP1/SLM - Manager と連携する場合に、レコードを JP1/SLM - Manager に送信するかどうかについて、JP1/SLM - Manager での設定が「Yes」または「No」で表示される。連携しない場合は「No」固定で表示される。このプロパティは変更できない。</p> <p>データの収集間隔を指定する。指定できる値は 0~2,147,483,647 秒で、1 秒単位で指定できる。なお、指定がない場合、または 0 と指定した場合は 0 秒となり、データは収集されない。</p> <p>データの収集を開始するオフセット値を指定する。指定できる値は、Collection Interval で指定した値の範囲内で、0~32,767 秒の 1 秒単位で指定できる。なお、データ収集の記録時間は、Collection Offset の値によらないで、Collection Interval と同様の時間となる。</p> <p>履歴データの収集をリアルタイムレポートの表示処理より優先する場合（履歴収集優先機能が有効な場合）にだけ表示される。 レコードの収集に 10 秒以上掛かることがあるかどうかが「Yes」または「No」で表示される。 <ul style="list-style-type: none"> • Yes : 10 秒以上掛かることがある • No : 10 秒掛からない このプロパティは変更できない。</p> <p>履歴データの収集をリアルタイムレポートの表示処理より優先する場合（履歴収集優先機能が有効な場合）にだけ表示される。 リアルタイムレポートの表示モードを指定する。 <ul style="list-style-type: none"> • Reschedule : 再スケジュールモードの場合 </p>

フォルダ名		プロパティ名	説明	
Interval Records	レコード ID*	Realtime Report Data Collection Mode	<ul style="list-style-type: none"> Temporary Log : 一時保存モードの場合 なお、Over 10 Sec Collection Time の値が「Yes」のレコードには、一時保存モード (Temporary Log) を指定する必要がある。 	
		LOGIF	レコードをデータベースに記録するときの条件を指定する。条件に合ったレコードだけがデータベースに記録される。PFM - Web Console の [サービス階層] 画面で表示されるサービスのプロパティ画面の、下部フレームの [LOGIF] をクリックすると表示される [ログ収集条件設定] ウィンドウで作成した条件式 (文字列) が表示される。	
Log Records		—	PL レコードタイプのレコードのプロパティが格納されている。PFM - Agent for HiRDB ではこのレコードをサポートしていないため使用しない。	
Restart Configurations		—	<p>PFM サービス自動再起動の条件を設定する。PFM - Manager または PFM - Base が 08-50 以降の場合に設定できる。</p> <p>PFM サービス自動再起動機能については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、Performance Management の機能について説明している章を参照のこと。</p>	
		Restart when Abnormal Status	Status Server サービスが Action Handler サービス、Agent Collector サービス、および Agent Store サービスの状態を正常に取得できない場合にサービスを自動再起動するかどうかを設定する。	
		Restart when Single Service Running	Agent Store サービスと Agent Collector サービスのどちらかしか起動していない場合にサービスを自動再起動するかどうかを設定する。	
Restart Configurations	Agent Collector	Auto Restart	Agent Collector サービスに対して自動再起動機能を利用するかどうかを設定する。	
		Auto Restart - Interval (Minute)	自動再起動機能を利用する場合、サービスの稼働状態を確認する間隔を設定する。設定できる値は 1~1,440 分で、1 分単位で設定できる。	
		Auto Restart - Repeat Limit	自動再起動機能を利用する場合、連続して再起動を試行する回数を 1~10 の整数で設定する。	
		Scheduled Restart	リスト項目から「Yes」または「No」を選択し、Agent Collector サービスに対して、定期再起動機能を利用するかどうかを設定する。	
		Scheduled Restart - Interval	定期再起動機能を利用する場合、再起動間隔を 1~1,000 の整数で設定する。	

フォルダ名	プロパティ名	説明
Restart Configurations	Agent Collector	Scheduled Restart - Interval Unit 定期再起動機能を利用する場合、リスト項目から「Hour」、「Day」、「Week」または「Month」を選択し、再起動間隔の単位を設定する。
		Scheduled Restart - Origin - Year 再起動する年を 1971～2035 の整数で指定できる。
		Scheduled Restart - Origin - Month 再起動する月を 1～12 の整数で指定できる。
		Scheduled Restart - Origin - Day 再起動する日を 1～31 の整数で指定できる。
		Scheduled Restart - Origin - Hour 再起動する時間（時）を 0～23 の整数で指定できる。
		Scheduled Restart - Origin - Minute 再起動する時間（分）を 0～59 の整数で指定できる。
	Agent Store	Auto Restart Agent Store サービスに対して自動再起動機能を利用するかどうかを設定する。
		Auto Restart - Interval (Minute) 自動再起動機能を利用する場合、サービスの稼働状態を確認する間隔を設定する。設定できる値は 1～1,440 分で、1 分単位で設定できる。
		Auto Restart - Repeat Limit 自動再起動機能を利用する場合、連続して再起動を試行する回数を 1～10 の整数で設定する。
		Scheduled Restart リスト項目から「Yes」または「No」を選択し、Agent Store サービスに対して、定期再起動機能を利用するかどうかを設定する。
		Scheduled Restart - Interval 定期再起動機能を利用する場合、再起動間隔を 1～1,000 の整数で設定する。
		Scheduled Restart - Interval Unit 定期再起動機能を利用する場合、リスト項目から「Hour」、「Day」、「Week」または「Month」を選択し、再起動間隔の単位を設定する。
		Scheduled Restart - Origin - Year 再起動する年を 1971～2035 の整数で指定できる。
		Scheduled Restart - Origin - Month 再起動する月を 1～12 の整数で指定できる。
		Scheduled Restart - Origin - Day 再起動する日を 1～31 の整数で指定できる。
		Scheduled Restart - Origin - Hour 再起動する時間（時）を 0～23 の整数で指定できる。
		Scheduled Restart - Origin - Minute 再起動する時間（分）を 0～59 の整数で指定できる。

フォルダ名		プロパティ名	説明
Restart Configurations	Action Handler	Auto Restart	Action Handler サービスに対して自動再起動機能を利用するかどうかを設定する。
		Auto Restart - Interval (Minute)	自動再起動機能を利用する場合、サービスの稼働状態を確認する間隔を設定する。設定できる値は 1~1,440 分で、1 分単位で設定できる。
		Auto Restart - Repeat Limit	自動再起動機能を利用する場合、連続して再起動を試行する回数を 1~10 の整数で設定する。
		Scheduled Restart	リスト項目から「Yes」または「No」を選択し、Action Handler サービスに対して、定期再起動機能を利用するかどうかを設定する。
		Scheduled Restart - Interval	定期再起動機能を利用する場合、再起動間隔を 1~1,000 の整数で設定する。
		Scheduled Restart - Interval Unit	定期再起動機能を利用する場合、リスト項目から「Hour」、「Day」、「Week」または「Month」を選択し、再起動間隔の単位を設定する。
		Scheduled Restart - Origin - Year	再起動する年を 1971~2035 の整数で指定できる。
		Scheduled Restart - Origin - Month	再起動する月を 1~12 の整数で指定できる。
		Scheduled Restart - Origin - Day	再起動する日を 1~31 の整数で指定できる。
		Scheduled Restart - Origin - Hour	再起動する時間（時）を 0~23 の整数で指定できる。
		Scheduled Restart - Origin - Minute	再起動する時間（分）を 0~59 の整数で指定できる。
ITSLM Connection Configuration		—	連携する JP1/SLM - Manager に関する情報が表示される。
ITSLM Connection Configuration	ITSLM Connection	—	接続先 JP1/SLM - Manager に関する情報が表示される。
		ITSLM Host	接続している JP1/SLM - Manager のホスト名が表示される。JP1/SLM - Manager と接続していない場合、本プロパティは表示されない。
		ITSLM Port	接続している JP1/SLM - Manager のポート番号が表示される。JP1/SLM - Manager と接続していない場合、本プロパティは表示されない。
	MANAGE ITSLM CONNECTION	—	JP1/SLM - Manager との接続を停止するかどうかを設定する。
	DISCONNECT ITSLM CONNECTION		接続を停止する JP1/SLM - Manager のホスト名をリスト項目から指定する。リスト項目から「(空文字)」を指定した場合は何もしない。JP1/SLM - Manager と接続

フォルダ名		プロパティ名	説明
ITSLM Connection Configuration	MANAGE ITSLM CONNECTION	DISCONNECT ITSLM CONNECTION	していない場合、リスト項目には「(空文字)」だけが表示される。
Multiple Manager Configuration		Primary Manager	監視二重化の場合、プライマリーに設定しているマネージャーのホスト名が表示される。 このプロパティは変更できない。
		Secondary Manager	監視二重化の場合、セカンダリーに設定しているマネージャーのホスト名が表示される。 このプロパティは変更できない。
AGENT		—	エージェントの設定用プロパティ。
		Instance_name	HiRDB のエージェントのインスタンス名が表示される。
		Instance	HiRDB のエージェントのインスタンス名が表示される。
AGENT/PARAMETERS		—	Agent Collector サービスのデータ収集プログラムのプロパティが表示される。
		PDDIR	HiRDB の環境変数「PDDIR」の値が表示される。
		PDCONFPATH	HiRDB の環境変数「PDCONFPATH」の値が表示される。
JP1 Event Configurations		—	JP1 イベントの発行条件を設定する。
		各サービス	Agent Collector サービス、Agent Store サービス、Action Handler サービス、および Status Server サービスのリスト項目から「Yes」または「No」を選択し、サービスごとに JP1 システムイベントを発行するかどうかを指定する。
		JP1 Event Send Host	JP1/Base の接続先イベントサーバ名を指定する。ただし、Action Handler サービスと同一マシンの論理ホストまたは物理ホストで動作しているイベントサーバだけ指定できる。指定できる値は 0~255 バイトの半角英数字、「.」および「-」である。範囲外の値を指定した場合は、省略したと仮定される。値を省略した場合は、Action Handler サービスが動作するホストがイベント発行元ホストとして使用される。 「localhost」を指定した場合は、物理ホストを指定したものと仮定される。
		Monitoring Console Host	JP1/IM - Manager のモニター起動で PFM - Web Console を起動する場合、起動する PFM - Web Console ホストを指定する。指定できる値は 0~255 バイトの半角英数字、「.」および「-」である。範囲外の値を指定した場合は、省略したと仮定される。値を省略した場合は、接続先の PFM - Manager ホストが仮定される。

フォルダ名	プロパティ名	説明
JP1 Event Configurations	Monitoring Console Port	起動する PFM - Web Console のポート番号 (http リクエストポート番号) を指定する。指定できる値は 1~65535 である。範囲外の値を指定した場合は、省略したと仮定される。値を省略した場合は、20358 が設定される。
JP1 Event Configurations	Alarm	JP1 Event Mode アラームの状態が変化した場合に、次のどちらのイベントを発行するか設定する。 <ul style="list-style-type: none">• JP1 User Event : JP1 ユーザーイベントを発行する• JP1 System Event : JP1 システムイベントを発行する

(凡例)

－：該当しない

注※1

フォルダ名には、データベース ID を除いたレコード ID が表示されます。各レコードのレコード ID については、「[6. レコード](#)」を参照してください。

注※2

Sync Collection With が表示されている場合、Collection Interval と Collection Offset は表示されません。

付録 G ファイルおよびディレクトリー一覧

ここでは、PFM - Agent for HiRDB のファイルおよびディレクトリー一覧を記載します。

Performance Management のインストール先ディレクトリを OS ごとに示します。

Windows の場合

Performance Management のインストール先フォルダは、任意です。デフォルトのインストール先フォルダは次のとおりです。

システムドライブ¥Program Files(x86)¥Hitachi¥jp1pc¥

UNIX の場合

Performance Management のインストール先ディレクトリは、「/opt/jp1pc/」です。

付録 G.1 PFM - Agent for HiRDB のファイルおよびディレクトリー一覧

(1) Windows の場合

Windows 版 PFM - Agent for HiRDB のファイルおよびフォルダ一覧を次の表に示します。

表 G-1 PFM - Agent for HiRDB のファイルおよびフォルダ一覧 (Windows 版)

フォルダ名	ファイル名	説明
インストール先フォルダ¥agtb¥	—	PFM - Agent for HiRDB のルートフォルダ
	readme_ja.txt	README (日本語)
	readme_en.txt	README (英語)
	version.txt	バージョン情報
	.	PFM - Agent for HiRDB (Windows) 各種ファイル
インストール先フォルダ¥agtb¥agent¥	—	Agent Collector サービスのルートフォルダ
	jpcagtb.exe	Agent Collector サービス実行プログラム
	jpcagtb_main.exe	Agent Collector サービス実行プログラムの子プロセス
	*.instmpl	内部処理用中間ファイル
インスタンス環境のフォルダ※1¥agent¥インスタンス名¥	—	Agent Collector サービスのルートフォルダ (インスタンスごと) ※2
	jpcagt.ini	Agent Collector サービス起動情報ファイル (インスタンスごと) ※2

フォルダ名	ファイル名	説明
インスタンス環境のフォルダ※1¥agent¥インスタンス名¥	jpcagt.ini.model	Agent Collector サービス起動情報ファイルのモデルファイル（インスタンスごと）※2
	jpcagtbdef.ini	インスタンス設定ファイル（インスタンスごと）※2
	jpcagtbdef.ini.model	インスタンス設定ファイルのモデルファイル（インスタンスごと）※2
	.	PFM - Agent for HiRDB (Windows) 各種ファイル（インスタンスごと）※2
インスタンス環境のフォルダ※1¥agent¥インスタンス名¥log¥	-	Agent Collector サービス内部ログファイル格納フォルダ（インスタンスごと）※2
インストール先フォルダ¥agtb¥lib¥	-	メッセージカタログ格納フォルダ
インストール先フォルダ¥agtb¥store¥	-	Agent Store サービスのルートフォルダ
	*.DAT	データモデル定義ファイル
インスタンス環境のフォルダ※1¥store¥インスタンス名¥	-	Agent Store サービスのルートフォルダ（インスタンスごと）※2
	*.DB	パフォーマンスデータファイル（インスタンスごと）※3
	*.IDX	パフォーマンスデータファイルのインデックスファイル（インスタンスごと）※3
	*.LCK	パフォーマンスデータファイルのロックファイル（インスタンスごと）※3
	jpcsto.ini	Agent Store サービス起動情報ファイル（インスタンスごと）※2
	jpcsto.ini.model	Agent Store サービス起動情報ファイルのモデルファイル（インスタンスごと）※2
	*.DAT	データモデル定義ファイル（インスタンスごと）※2
インスタンス環境のフォルダ※1¥store¥インスタンス名¥backup¥	-	標準のデータベースバックアップ先フォルダ（インスタンスごと）※2
インスタンス環境のフォルダ※1¥store¥インスタンス名¥dump¥	-	標準のデータベースエクスポート先フォルダ（インスタンスごと）※2
インスタンス環境のフォルダ※1¥store¥インスタンス名¥import¥	-	標準のデータベースインポート先フォルダ（インスタンスごと）※2
インスタンス環境のフォルダ※1¥store¥インスタンス名¥log¥	-	Agent Store サービス内部ログファイル格納フォルダ（インスタンスごと）※2

フォルダ名	ファイル名	説明
インスタンス環境のフォルダ※ ¹ ¥store¥インスタンス名¥partial¥	-	標準のデータベース部分バックアップ先フォルダ（インスタンスごと）※ ²
インスタンス環境のフォルダ※ ¹ ¥store¥インスタンス名¥STPD¥	-	PDデータベース固有のフォルダ
インスタンス環境のフォルダ※ ¹ ¥store¥インスタンス名¥STPI¥	-	PIデータベース固有のフォルダ
インスタンス環境のフォルダ※ ¹ ¥store¥インスタンス名¥STPL¥	-	PLデータベース固有のフォルダ
インストール先フォルダ¥auditlog¥	-	動作ログファイルの標準の出力フォルダ
	jpcauditn.log※ ⁴	動作ログファイル
インストール先フォルダ¥setup¥	-	セットアップファイル格納フォルダ
	jpcagtbu.Z	PFM - Agent for HiRDB セットアップ用アーカイブファイル (UNIX)
	jpcagtbw.EXE	PFM - Agent for HiRDB セットアップ用アーカイブファイル (Windows)

(凡例)

- : 該当しない

注※1

物理ホストの場合：インストール先フォルダ¥agtbt

論理ホストの場合：論理ホスト作成時に指定した共有ディスク上の環境フォルダ¥agtbt

注※2

jpcconf inst setup コマンドの実行で作成されます。

注※3

Agent Store サービス起動時に作成されます。

注※4

nは数値です。ログファイル数は、jpccomm.ini ファイルで変更できます。

(2) UNIX の場合

UNIX 版 PFM - Agent for HiRDB のファイルおよびディレクトリ一覧を次の表に示します。

表 G-2 PFM - Agent for HiRDB のファイルおよびディレクトリ一覧 (UNIX 版)

ディレクトリ名	ファイル名	説明
/opt/jp1pc/agtbt/	-	PFM - Agent for HiRDB のルートディレクトリ
/opt/jp1pc/agtbt/agent/	-	Agent Collector サービスのルートディレクトリ

ディレクトリ名	ファイル名	説明
/opt/jp1pc/agtbt/agent/	jpcagtb	Agent Collector サービス実行プログラム
	jpcagtb_main	Agent Collector サービス実行プログラムの子プロセス
	*.instmpl	内部処理用中間ファイル
インスタンス環境のディレクトリ※1/agent/ インスタンス名/	—	Agent Collector サービスのルートディレクトリ（インスタンスごと）※2
	jpcagt.ini	Agent Collector サービス起動情報ファイル（インスタンスごと）※2
	jpcagt.ini.lck	Agent Collector サービス起動情報ファイル（インスタンスごと）のロックファイル※3
	jpcagt.ini.model	Agent Collector サービス起動情報ファイルのモデルファイル（インスタンスごと）※2
	jpcagtbdef.ini	インスタンス設定ファイル（インスタンスごと）※2
	jpcagtbdef.ini.model	インスタンス設定ファイルのモデルファイル（インスタンスごと）※2
	*	PFM - Agent for HiRDB (UNIX) 各種ファイル（インスタンスごと）※2
インスタンス環境のディレクトリ※1/agent/ インスタンス名/log/	—	Agent Collector サービス内部ログファイル格納ディレクトリ（インスタンスごと）※2
/opt/jp1pc/agtbt/nls/	—	メッセージカタログ格納ディレクトリ
/opt/jp1pc/agtbt/store/	—	Agent Store サービスのルートディレクトリ
	*.DAT	データモデル定義ファイル
インスタンス環境のディレクトリ※1/store/ インスタンス名/	—	Agent Store サービスのルートディレクトリ（インスタンスごと）※2
	*.DB	パフォーマンスデータファイル（インスタンスごと）※4
	*.IDX	パフォーマンスデータファイルのインデックスファイル（インスタンスごと）※4
	*.LCK	パフォーマンスデータファイルのロックファイル（インスタンスごと）※4
	jpcsto.ini	Agent Store サービス起動情報ファイル（インスタンスごと）※2
	jpcsto.ini.model	Agent Store サービス起動情報ファイルのモデルファイル（インスタンスごと）※2
	*.DAT	データモデル定義ファイル（インスタンスごと）※2

ディレクトリ名	ファイル名	説明
インスタンス環境のディレクトリ※1 /store/ インスタンス名/backup/	—	標準のデータベースバックアップ先ディレクトリ（インスタンスごと）※2
インスタンス環境のディレクトリ※1 /store/ インスタンス名/dump/	—	標準のデータベースエクスポート先ディレクトリ（インスタンスごと）※2
インスタンス環境のディレクトリ※1 /store/ インスタンス名/import/	—	標準のデータベースインポート先ディレクトリ（インスタンスごと）※2
インスタンス環境のディレクトリ※1 /store/ インスタンス名/log/	—	Agent Store サービス内部ログファイル格納ディレクトリ（インスタンスごと）※2
インスタンス環境のディレクトリ※1 /store/ インスタンス名/partial/	—	標準のデータベース部分バックアップ先ディレクトリ（インスタンスごと）※2
インスタンス環境のディレクトリ※1 /store/ インスタンス名/STPD/	—	PD データベース固有のディレクトリ
インスタンス環境のディレクトリ※1 /store/ インスタンス名/STPI/	—	PI データベース固有のディレクトリ
インスタンス環境のディレクトリ※1 /store/ インスタンス名/STPL/	—	PL データベース固有のディレクトリ
/opt/jp1pc/auditlog/	—	動作ログファイルの標準の出力ディレクトリ
	jpcauditn.log※5	動作ログファイル
/opt/jp1pc/setup/	—	セットアップファイル格納ディレクトリ
	jpcagtbu.Z	PFM - Agent for HiRDB セットアップ用アーカイブファイル (UNIX)
	jpcagtbw.EXE	PFM - Agent for HiRDB セットアップ用アーカイブファイル (Windows)

(凡例)

—：該当しない

注※1

物理ホストの場合 : /opt/jp1pc/agtb

論理ホストの場合 : 論理ホスト作成時に指定した共有ディスク上の環境ディレクトリ/agtb

注※2

jpcconf inst setup コマンドの実行で作成されます。

注※3

PFM - Agent が内部で使用しているファイルです。変更または削除しないでください。

注※4

Agent Store サービス起動時に作成されます。

注※5

nは数値です。ログファイル数は、jpccomm.ini ファイルで変更できます。

付録 H バージョンアップ手順とバージョンアップ時の注意事項

PFM - Agent for HiRDB をバージョンアップするには、PFM - Agent for HiRDB を上書きインストールします。インストールの操作の詳細については、次に示す説明を参照してください。

Windows の場合

「[2. インストールとセットアップ \(Windows の場合\)](#)」

UNIX の場合

「[3. インストールとセットアップ \(UNIX の場合\)](#)」

Performance Management プログラムをバージョンアップする場合の注意事項については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」のインストールとセットアップの章および付録にある、バージョンアップの注意事項について説明している個所を参照してください。

ここでは、PFM - Agent for HiRDB をバージョンアップする場合の注意事項を示します。

- バージョンアップする際には、古いバージョンの PFM - Agent for HiRDB をアンインストールしないでください。アンインストールすると、古いバージョンで作成したパフォーマンスデータなども一緒に削除されてしまうため、新しいバージョンで使用できなくなります。
- PFM - Agent for HiRDB のプログラムを上書きインストールすると、次の項目が自動的に更新されます。
 - Agent Store サービスの Store データベースファイル
 - ini ファイル
 - PFM - Agent for HiRDB のインスタンス環境
- 論理ホスト環境を作成済みの環境へバージョンアップインストールする場合には、事前に共有ディスクをオンラインにしておく必要があります。ただし、実行系、または待機系のどちらか一方で共有ディスクをオンラインにしてバージョンアップインストールを行った場合、もう一方でのバージョンアップインストール時には、共有ディスクをオンラインにする必要はありません。

付録I バージョン互換

PFM - Agent には、 製品のバージョンのほかに、 データモデルのバージョンがあります。

データモデルは、 上位互換を保っているため、 古いバージョンで定義したレポートの定義やアラームの定義は、 新しいバージョンのデータでも使用できます。

PFM - Agent for HiRDB のバージョンの対応を次の表に示します。

表 I-1 PFM - Agent for HiRDB のバージョン対応表

PFM - Agent for HiRDB のバージョン	データモデルのバージョン	監視テンプレートのアラームテーブルのバージョン
06-70	3.0	6.70
07-00	4.0, 4.1	7.00
07-10	4.5	7.10
07-50	4.7	7.50
08-00, 08-10, 08-50	5.0	8.00
09-00, 10-00, 11-00, 12-00	5.0	09.00

バージョン互換については、 マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、 付録を参照してください。

付録 J 動作ログの出力

Performance Management の動作ログとは、システム負荷などのしきい値オーバーに関するアラーム機能と連動した動作情報の履歴を出力するログ情報です。

例えば、PFM サービスの起動・停止時や、PFM - Manager との接続状態の変更時に動作ログに出力されます。

動作ログは、PFM - Manager または PFM - Base が 08-10 以降の場合に出力できます。

動作ログは、CSV 形式で出力されるテキストファイルです。定期的に保存して表計算ソフトで加工することで、分析資料として利用できます。

動作ログは、jpccomm.ini の設定によって出力されるようになります。ここでは、PFM - Agent および PFM - Base が出力する動作ログの出力内容と、動作ログを出力するための設定方法について説明します。

付録 J.1 動作ログに出力される事象の種別

動作ログに出力される事象の種別および PFM - Agent および PFM - Base が動作ログを出力する契機を次の表に示します。事象の種別とは、動作ログに出力される事象を分類するための、動作ログ内での識別子です。

表 J-1 動作ログに出力される事象の種別

事象の種別	説明	PFM - Agent および PFM - Base が出力する契機
StartStop	ソフトウェアの起動と終了を示す事象。	<ul style="list-style-type: none">PFM サービスの起動・停止スタンダロンモードの開始・終了
ExternalService	JP1 製品と外部サービスとの通信結果を示す事象。 異常な通信の発生を示す事象。	PFM - Manager との接続状態の変更
ManagementAction	プログラムの重要なアクションの実行を示す事象。 ほかの監査カテゴリーを契機にアクションが実行されたことを示す事象。	自動アクションの実行

付録 J.2 動作ログの保存形式

ここでは、動作ログのファイル保存形式について説明します。

動作ログは規定のファイル（カレント出力ファイル）に出力され、満杯になった動作ログは別のファイル（シフトファイル）として保存されます。動作ログのファイル切り替えの流れは次のとおりです。

1. 動作ログは、カレント出力ファイル「jpcaudit.log」に順次出力されます。

2. カレント出力ファイルが満杯になると、その動作ログはシフトファイルとして保存されます。シフトファイル名は、カレント出力ファイル名の末尾に数値を付加した名称です。シフトファイル名は、カレント出力ファイルが満杯になるたびにそれぞれ「ファイル名末尾の数値+1」へ変更されます。つまり、ファイル末尾の数値が大きいほど、古いログファイルとなります。

例

カレント出力ファイル「jpcaudit.log」が満杯になると、その内容はシフトファイル「jpcaudit1.log」へ保管されます。

カレント出力ファイルが再び満杯になると、そのログは「jpcaudit1.log」へ移され、既存のシフトファイル「jpcaudit1.log」は「jpcaudit2.log」へリネームされます。

なお、ログファイル数が保存面数（jpccomm.ini ファイルで指定）を超えると、古いログファイルから削除されます。

3. カレント出力ファイルが初期化され、新たな動作ログが書き込まれます。

動作ログの出力要否、出力先および保存面数は、jpccomm.ini ファイルで設定します。jpccomm.ini ファイルの設定方法については、「[付録 J.4 動作ログを出力するための設定](#)」を参照してください。

付録 J.3 動作ログの出力形式

Performance Management の動作ログには、監査事象に関する情報が出力されます。動作ログは、ホスト（物理ホスト・論理ホスト）ごとに 1 ファイル出力されます。動作ログの出力先ホストは次のようにになります。

- サービスを実行した場合：実行元サービスが動作するホストに出力
- コマンドを実行した場合：コマンドを実行したホストに出力

動作ログの出力形式、出力先、出力項目について次に説明します。

(1) 出力形式

CALFHM x.x, 出力項目1=値1, 出力項目2=値2, …, 出力項目n=値n

(2) 出力先

Windows の場合

インストール先フォルダ¥auditlog¥

UNIX の場合

/opt/jp1pc/auditlog/

動作ログの出力先は、jpccomm.ini ファイルで変更できます。jpccomm.ini ファイルの設定方法については、「[付録 J.4 動作ログを出力するための設定](#)」を参照してください。

(3) 出力項目

出力項目には二つの分類があります。

- ・共通出力項目

動作ログを出力する JP1 製品が共通して出力する項目です。

- ・固有出力項目

動作ログを出力する JP1 製品が任意に出力する項目です。

(a) 共通出力項目

共通出力項目に出力される値と項目の内容を次の表に示します。なお、この表は PFM - Manager が出力する項目や内容も含みます。

表 J-2 動作ログの共通出力項目

項目番	出力項目		値	内容
	項目名	出力される属性名		
1	共通仕様識別子	—	CALFHM	動作ログフォーマットであることを示す識別子
2	共通仕様リビジョン番号	—	X.X	動作ログを管理するためのリビジョン番号
3	通番	seqnum	通し番号	動作ログレコードの通し番号
4	メッセージ ID	msgid	KAVXXXXX-X	製品のメッセージ ID
5	日付・時刻	date	YYYY-MM-DDThh:mm:ss.sssTZD*	動作ログの出力日時およびタイムゾーン
6	発生プログラム名	progid	JP1PFM	事象が発生したプログラムのプログラム名
7	発生コンポーネント名	compid	サービス ID	事象が発生したコンポーネント名
8	発生プロセス ID	pid	プロセス ID	事象が発生したプロセスのプロセス ID
9	発生場所	ocp:host	<ul style="list-style-type: none">ホスト名IP アドレス	事象が発生した場所
10	事象の種別	ctgry	<ul style="list-style-type: none">StartStopAuthenticationConfigurationAccessExternalServiceAnomalyEvent	動作ログに出力される事象を分類するためのカテゴリ名

項目番	出力項目		値	内容
	項目名	出力される属性名		
10	事象の種別	ctgry	• ManagementAction	動作ログに出力される事象を分類するためのカテゴリ名
11	事象の結果	result	• Success (成功) • Failure (失敗) • Occurrence (発生)	事象の結果
12	サブジェクト識別情報	subj:pid	プロセス ID	次のどれかの情報 • ユーザー操作によって動作するプロセス ID • 事象を発生させたプロセス ID • 事象を発生させたユーザー名 • ユーザーに 1 : 1 で対応づけられた識別情報
		subj:uid	アカウント識別子 (PFM ユーザー/JP1 ユーザー)	
		subj:euid	実効ユーザー ID (OS ユーザー)	

(凡例)

– : なし。

注※

T は日付と時刻の区切りです。

ZD はタイムゾーン指定子です。次のどれかが出力されます。

+hh:mm : UTC から hh:mm だけ進んでいることを示す。

-hh:mm : UTC から hh:mm だけ遅れていることを示す。

Z : UTC と同じであることを示す。

(b) 固有出力項目

固有出力項目に出力される値と項目の内容を次の表に示します。なお、この表は PFM - Manager が出力する項目や内容も含みます。

表 J-3 動作ログの固有出力項目

項目番	出力項目		値	内容
	項目名	出力される属性名		
1	オブジェクト情報	obj	• PFM - Agent のサービス ID • 追加、削除、更新されたユーザー名 (PFM ユーザー)	操作の対象
		obj:table	アラームテーブル名	
		obj:alarm	アラーム名	

項目番	出力項目		値	内容
	項目名	出力される属性名		
2	動作情報	op	<ul style="list-style-type: none"> • Start (起動) • Stop (停止) • Add (追加) • Update (更新) • Delete (削除) • Change Password (パスワード変更) • Activate (有効化) • Inactivate (無効化) • Bind (バインド) • Unbind (アンバインド) 	事象を発生させた動作情報
3	権限情報	auth	<ul style="list-style-type: none"> • 管理者ユーザー Management • 一般ユーザー Ordinary • Windows Administrator • UNIX SuperUser 	操作したユーザーの権限情報
		auth:mode	<ul style="list-style-type: none"> • PFM 認証モード pfm • JP1 認証モード jp1 • OS ユーザー os 	操作したユーザーの認証モード
4	出力元の場所	outp:host	PFM - Manager のホスト名	動作ログの出力元のホスト
5	指示元の場所	subjp:host	<ul style="list-style-type: none"> • ログイン元ホスト名 • 実行ホスト名 (jpctool alarm コマンド実行時だけ) 	操作の指示元のホスト
6	自由記述	msg	メッセージ	アラーム発生時、および自動アクションの実行時に出力されるメッセージ

固有出力項目は、出力契機ごとに出力項目の有無や内容が異なります。出力契機ごとに、メッセージ ID と固有出力項目の内容を次に説明します。

■ PFM サービスの起動・停止 (StartStop)

- 出力ホスト：該当するサービスが動作しているホスト
- 出力コンポーネント：起動・停止を実行する各サービス

項目名	属性名	値
メッセージ ID	msgid	起動 : KAVE03000-I 停止 : KAVE03001-I
動作情報	op	起動 : Start 停止 : Stop

■ スタンドアロンモードの開始・終了 (StartStop)

- 出力ホスト : PFM - Agent ホスト
- 出力コンポーネント : Agent Collector サービス, Agent Store サービス

項目名	属性名	値
メッセージ ID	msgid	スタンドアロンモードを開始 : KAVE03002-I スタンドアロンモードを終了 : KAVE03003-I

注 1 固有出力項目は出力されない。

注 2 PFM - Agent の各サービスは、起動時に PFM - Manager ホストに接続し、ノード情報の登録、最新のアラーム定義情報の取得などを行う。PFM - Manager ホストに接続できない場合、稼働情報の収集など一部の機能だけが有効な状態（スタンドアロンモード）で起動する。その際、スタンドアロンモードで起動することを示すため、KAVE03002-I が出力される。その後、一定期間ごとに PFM - Manager への再接続を試み、ノード情報の登録、定義情報の取得などに成功すると、スタンドアロンモードから回復し、KAVE03003-I が出力される。この動作ログによって、KAVE03002-I と KAVE03003-I が出力されている間は、PFM - Agent が不完全な状態で起動していることを知ることができる。

■ PFM - Manager との接続状態の変更 (ExternalService)

- 出力ホスト : PFM - Agent ホスト
- 出力コンポーネント : Agent Collector サービス, Agent Store サービス

項目名	属性名	値
メッセージ ID	msgid	PFM - Manager へのイベントの送信に失敗 (キューイングを開始) : KAVE03300-I PFM - Manager へのイベントの再送が完了 : KAVE03301-I

注 1 固有出力項目は出力されない。

注 2 Agent Store サービスは、PFM - Manager へのイベント送信に失敗すると、イベントのキューイングを開始し、以降はイベントごとに最大 3 件がキューにためられる。KAVE03300-I は、イベント送信に失敗し、キューイングを開始した時点で出力される。PFM - Manager との接続が回復したあと、キューイングされたイベントの送信が完了した時点で、KAVE03301-I が出力される。この動作ログによって、KAVE03300-I と KAVE03301-I が出力されている間は、PFM - Manager へのイベント送信がリアルタイムでできていなかった期間と知ることができる。

注 3 Agent Collector サービスは、通常、Agent Store サービスを経由して PFM - Manager にイベントを送信する。何らかの理由で Agent Store サービスが停止している場合だけ、直接 PFM - Manager にイベントを送信するが、失敗した場合に KAVE03300-I が出力される。この場合、キューイングを開始しないため、KAVE03301-I は出力されない。この動作ログによって、PFM - Manager に送信されなかったイベントがあることを知ることができる。

■ 自動アクションの実行 (ManagementAction)

- 出力ホスト : アクションを実行したホスト
- 出力コンポーネント : Action Handler サービス

項目名	属性名	値
メッセージ ID	msgid	コマンド実行プロセス生成に成功 : KAVE03500-I コマンド実行プロセス生成に失敗 : KAVE03501-W E-mail 送信に成功 : KAVE03502-I E-mail 送信に失敗 : KAVE03503-W
自由記述	msg	コマンド実行 : cmd=実行したコマンドライン E-mail 送信 : mailto=送信先メールアドレス

注 コマンド実行プロセスの生成に成功した時点で KAVE03500-I が output される。その後、コマンドが実行できたかどうかのログ、および実行結果のログは、動作ログには出力されない。

(4) 出力例

動作ログの出力例を次に示します。

```
CALFHM 1.0, seqnum=1, msgid=KAVE03000-I, date=2007-01-18T22:46:49.682+09:00,
progid=JP1PFM, compid=BA1host01, pid=2076,
ocp:host=host01, ctgry=StartStop, result=Occurrence,
subj:pid=2076, op=Start
```

付録 J.4 動作ログを出力するための設定

動作ログを出力するための設定は、jpccomm.ini ファイルで定義します。設定しない場合、動作ログは出力されません。動作ログを出力するための設定内容とその手順について次に示します。

(1) 設定手順

動作ログを出力するための設定手順を次に示します。

- ホスト上の全 PFM サービスを停止させる。
- テキストエディターなどで、jpccomm.ini ファイルを編集する。
- jpccomm.ini ファイルを保存して閉じる。

(2) jpccomm.ini ファイルの詳細

jpccomm.ini ファイルの詳細について説明します。

(a) 格納先フォルダ

Windows の場合

インストール先フォルダ

UNIX の場合

/opt/jp1pc/

(b) 形式

jpccomm.ini ファイルには、次の内容を定義します。

- 動作ログの出力の有無
- 動作ログの出力先
- 動作ログの保存面数
- 動作ログのファイルサイズ

指定形式は次のとおりです。

"項目名"=値

設定項目を次の表に示します。

表 J-4 jpccomm.ini ファイルで設定する項目および初期値

項目番	項目	説明
1	[Action Log Section]	セクション名です。変更はできません。
2	Action Log Mode	<p>動作ログを出力するかどうかを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none">初期値 0 (出力しない)指定できる値 0 (出力しない), 1 (出力する) これ以外の値を指定すると、エラーメッセージが出力され、動作ログは出力されません。
3	Action Log Dir	<p>動作ログの出力先を指定します。</p> <p>論理ホスト環境の場合は共有ディスク上のディレクトリを指定します。共有ディスク上にないディレクトリを指定した場合、論理ホストを構成する各物理ホストへ動作ログが出力されます。</p> <p>なお、制限長を超えるパスを設定した場合や、ディレクトリへのアクセスが失敗した場合は、共通ログにエラーメッセージが出力され、動作ログは出力されません。</p> <ul style="list-style-type: none">初期値 省略省略した場合に適用される値（デフォルト値） Windows の場合 インストール先フォルダ￥auditlog￥ UNIX の場合 /opt/jp1pc/auditlog/指定できる値 1~185 バイトの文字列

項目番	項目	説明
4	Action Log Num	<p>ログファイルの総数の上限（保存面数）を指定します。カレント出力ファイルとソフトファイルの合計を指定してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> 初期値 省略 省略した場合に適用される値（デフォルト値） 5 指定できる値 2~10 の整数 <p>数値以外の文字列を指定した場合、エラーメッセージが出力され、デフォルト値である 5 が設定されます。</p> <p>範囲外の数値を指定した場合、エラーメッセージが出力され、指定値に最も近い 2~10 の整数値が設定されます。</p>
5	Action Log Size	<p>ログファイルのサイズをキロバイト単位で指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> 初期値 省略 省略した場合に適用される値（デフォルト値） 2048 指定できる値 512~2096128 の整数 <p>数値以外の文字列を指定した場合、エラーメッセージが出力され、デフォルト値である 2048 が設定されます。</p> <p>範囲外の数値を指定した場合、エラーメッセージが出力され、指定値に最も近い 512~2096128 の整数値が設定されます。</p>

付録 K JP1/SLM との連携

PFM - Agent for HiRDB は、JP1/SLM と連携することで監視を強化できます。

JP1/SLM 上で監視できる PFM - Agent for HiRDB のデフォルト監視項目を次に示します。

表 K-1 JP1/SLM 上で監視できる PFM - Agent for HiRDB のデフォルト監視項目

JP1/SLM での表 示名	説明	レコード (レコード ID)	キー (PFM - Manager 名)	フィールド名
グローバルバッ ファヒット率	グローバル バッファの ヒット率 (%)	Global Buffer Status above 0506 (PI_GBUF)	Buffer Name (BUFFER_NAME) Server Name (SERVER_NAME)	BUFPOOL_HITRATE

JP1/SLM 上での監視を実現するには、デフォルト監視項目を PFM - Manager に登録する必要があります。セットアップファイルをコピーして、セットアップコマンドを実行してください。詳細については、「2.4.2 PFM - Manager および PFM - Web Console への PFM - Agent for HiRDB の登録」または「3.4.2 PFM - Manager および PFM - Web Console への PFM - Agent for HiRDB の登録」を参照してください。

付録 L 各バージョンの変更内容

各バージョンのマニュアルの変更内容を示します。

付録 L.1 12-00 訂正版の変更内容

- リモート実行およびファイル転送コマンド選択機能をサポートしました。
これによって、PI_FSST, PI_SSYS, PI_RDFL, または PI_RDFS レコードを収集する場合に、コマンドのリモート実行やファイル転送で使用する OS コマンドを指定できるようにしました。
- PFM - Agent for HiRDB のメッセージの出力先一覧に次のメッセージを追加しました。
 - KAVF15076, KAVF15077, KAVF15078
- syslog と Windows イベントログ出力メッセージ情報一覧に次のメッセージを追加しました。
 - KAVF15076-I, KAVF15077-W, KAVF15078-W
- 次のメッセージを追加しました。
 - KAVF15076-I, KAVF15077-W, KAVF15078-W
- 次のメッセージの説明を変更しました。
 - KAVF15010-E, KAVF15013-E, KAVF15020-W, KAVF15022-W, KAVF15023-E, KAVF15026-E, KAVF15029-E, KAVF15045-E, KAVF15046-E, KAVF15051-E, KAVF15052-E, KAVF15057-E, KAVF15062-W, KAVF15063-W, KAVF15065-W,
- 適用 OS に次の OS を追加しました。
 - Windows Server 2019
 - Windows Server 2022
 - SUSE Linux 15
 - Linux 8
 - Oracle Linux 8
 - Linux 9
 - AIX 7.3
- 次の OS をサポートする OS から削除しました。
 - Windows Server 2008

付録 L.2 12-00 の変更内容

- 適用 OS に次の OS を追加しました。
 - AIX V7.2

- Microsoft(R) Windows Server(R) 2016
- 次のOSをサポートするOSから削除しました。
 - Microsoft(R) Windows Server(R) 2008 R2
 - AIX V6.1
- Linux環境、およびWindows環境でのファイアウォールの設定方法を追加しました。
- 次のメッセージを追加しました。
 - KAVF15073-I
- 次のメッセージの説明を変更しました。
 - KAVF15020-W
 - KAVF15045-E

付録 L.3 11-00 の変更内容

- 適用OSに次のOSを追加しました。
 - Red Hat Enterprise Linux(R) Server 7.1以降
 - Microsoft(R) Windows Server(R) 2012
- 次のOSをサポートするOSから削除しました。
 - Red Hat Enterprise Linux(R) Server 6 (32-bit x86)
 - Solaris
 - Microsoft(R) Windows Server(R) 2003
 - Microsoft(R) Windows Server(R) 2008 (R2以外)
- 次のプロパティを追加しました。

Agent Store サービスのプロパティ

 - Multiple Manager Configuration

Agent Collector サービスのプロパティ

 - Multiple Manager Configuration
 - Over 10 Sec Collection Time
 - Realtime Report Data Collection Mode
- 製品の名称を、JP1/ITSLMからJP1/SLMに変更しました。
- ネットワーク管理製品 (NNM)との連携を廃止しました。
- ODBC準拠のアプリケーションプログラムを廃止しました。
- 次のメッセージを追加しました。

- KAVF15071-W, KAVF15018-I, KAVF15019-I

付録 L.4 10-00 の変更内容

- 次の OS を削除しました。
 - AIX 5L V5.3
 - HP-UX 11i V2 (IPF)
 - Solaris 9 (SPARC)
 - Red Hat Enterprise Linux(R) 5 Advanced Platform (IPF)
 - Red Hat Enterprise Linux(R) 5 (IPF)
 - Red Hat Enterprise Linux(R) AS 4 (IPF)
 - Red Hat Enterprise Linux(R) 5 Advanced Platform (AMD/Intel 64)
 - Red Hat Enterprise Linux(R) 5 (AMD/Intel 64)
 - Red Hat Enterprise Linux(R) AS 4 (AMD64 & Intel EM64T)
 - Red Hat Enterprise Linux(R) ES 4 (AMD64 & Intel EM64T)
 - Red Hat Enterprise Linux(R) 5 Advanced Platform (x86)
 - Red Hat Enterprise Linux(R) 5 (x86)
 - Red Hat Enterprise Linux(R) AS 4 (x86)
 - Red Hat Enterprise Linux(R) ES 4 (x86)
- プロセスの監視条件を 4,096 バイトまで設定できるようにしました。
- 次のデフォルト監視項目を PFM-Manager に提供することによって、JP1/IT Service Level Management との連携を強化しました。
 - BUFPOOL_HITRATE
- インスタンス設定ファイルに次のセクションを追加しました。
 - COMMON_OPTION
- 次のメッセージを追加しました。
 - KAVF15066-E, KAVF15068-W

付録 M このマニュアルの参考情報

このマニュアルを読むに当たっての参考情報を示します。

付録 M.1 関連マニュアル

関連マニュアルを次に示します。必要に応じてお読みください。

JP1/Performance Management 関連

- JP1 Version 12 パフォーマンス管理 基本ガイド (3021-3-D75)
- JP1 Version 12 JP1/Performance Management 設計・構築ガイド (3021-3-D76)
- JP1 Version 12 JP1/Performance Management 運用ガイド (3021-3-D77)
- JP1 Version 12 JP1/Performance Management リファレンス (3021-3-D78)

JP1 関連

- JP1 Version 10 JP1/NETM/DM 運用ガイド 1 (Windows(R)用) (3021-3-177)
- JP1 Version 10 JP1/NETM/DM Client (UNIX(R)用) (3021-3-181)
- JP1 Version 6 JP1/NETM/DM Manager (3000-3-841)
- JP1 Version 9 JP1/NETM/DM Client (UNIX(R)用) (3020-3-S85)

HiRDB 関連

- HiRDB Version 8 解説 (UNIX(R)用) (3000-6-351) ※2
- HiRDB Version 8 システム導入・設計ガイド (UNIX(R)用) (3000-6-352) ※2
- HiRDB Version 8 システム定義 (UNIX(R)用) (3000-6-353) ※2
- HiRDB Version 8 システム運用ガイド (UNIX(R)用) (3000-6-354) ※2
- HiRDB Version 8 コマンドリファレンス (UNIX(R)用) (3000-6-355) ※2
- HiRDB Version 8 解説 (Windows(R)用) (3020-6-351) ※1
- HiRDB Version 8 システム導入・設計ガイド (Windows(R)用) (3020-6-352) ※1
- HiRDB Version 8 システム定義 (Windows(R)用) (3020-6-353) ※1
- HiRDB Version 8 システム運用ガイド (Windows(R)用) (3020-6-354) ※1
- HiRDB Version 8 コマンドリファレンス (Windows(R)用) (3020-6-355) ※1
- HiRDB Version 8 UAP 開発ガイド (3020-6-356) ※3
- HiRDB Version 8 SQL リファレンス (3020-6-357) ※3
- HiRDB Version 8 メッセージ (3020-6-358) ※3

- HiRDB Version 9 解説 (3020-6-450) ※3
- HiRDB Version 9 システム導入・設計ガイド (UNIX(R)用) (3000-6-452) ※2
- HiRDB Version 9 システム定義 (UNIX(R)用) (3000-6-453) ※2
- HiRDB Version 9 システム運用ガイド (UNIX(R)用) (3000-6-454) ※2
- HiRDB Version 9 コマンドリファレンス (UNIX(R)用) (3000-6-455) ※2
- HiRDB Version 9 システム導入・設計ガイド (Windows(R)用) (3020-6-452) ※1
- HiRDB Version 9 システム定義 (Windows(R)用) (3020-6-453) ※1
- HiRDB Version 9 システム運用ガイド (Windows(R)用) (3020-6-454) ※1
- HiRDB Version 9 コマンドリファレンス (Windows(R)用) (3020-6-455) ※1
- HiRDB Version 9 UAP 開発ガイド (3020-6-456) ※3
- HiRDB Version 9 SQL リファレンス (3020-6-457) ※3
- HiRDB Version 9 メッセージ (3020-6-458) ※3
- HiRDB Version 10 解説 (3020-6-551) ※3
- HiRDB Version 10 システム導入・設計ガイド (UNIX(R)用) (3000-6-552) ※2
- HiRDB Version 10 システム定義 (UNIX(R)用) (3000-6-554) ※2
- HiRDB Version 10 システム運用ガイド (UNIX(R)用) (3000-6-556) ※2
- HiRDB Version 10 コマンドリファレンス (UNIX(R)用) (3000-6-558) ※2
- HiRDB Version 10 システム導入・設計ガイド (Windows(R)用) (3020-6-553) ※1
- HiRDB Version 10 システム定義 (Windows(R)用) (3020-6-555) ※1
- HiRDB Version 10 システム運用ガイド (Windows(R)用) (3020-6-557) ※1
- HiRDB Version 10 コマンドリファレンス (Windows(R)用) (3020-6-559) ※1
- HiRDB Version 10 UAP 開発ガイド (3020-6-560) ※3
- HiRDB Version 10 SQL リファレンス (3020-6-561) ※3
- HiRDB Version 10 メッセージ (3020-6-562) ※3

注

このマニュアルの HiRDB マニュアルへの参照指示では、HiRDB のバージョンと OS 名は省略して表記しています。HiRDB マニュアルを参照するときは、該当するバージョンと該当する OS のマニュアルをご利用ください。

注※1

Windows 用の HiRDB マニュアルです。HiRDB サーバの OS が Windows のときにご利用ください。

注※2

UNIX 用の HiRDB マニュアルです。HiRDB サーバの OS が UNIX のときにご利用ください。

注※3

UNIX, Windows 共通の HiRDB マニュアルです。HiRDB サーバの OS が UNIX または Windows のときにご利用ください。

付録 M.2 このマニュアルでの表記

このマニュアルでは、製品名を次のように表記しています。

このマニュアルでは、日立製品およびその他の製品の名称を省略して表記しています。製品の正式名称と、このマニュアルでの表記を次に示します。

表記		製品名
AIX		AIX V7.1
		AIX V7.2
		AIX 7.3
HP-UX	HP-UX 11i	HP-UX 11i V3 (IPF)
JP1/IM	JP1/IM - Manager	JP1/Integrated Management - Manager
	JP1/IM - View	JP1/Integrated Management - View
JP1/ITSLM (10-50 以前)	JP1/ITSLM - Manager	JP1/IT Service Level Management - Manager
	JP1/ITSLM - UR	JP1/IT Service Level Management - User Response
JP1/NETM/DM		JP1/NETM/DM Client
		JP1/NETM/DM Manager
		JP1/NETM/DM SubManager
JP1/SLM		JP1/IT Service Level Management
Linux	Linux 6 (x64)	Red Hat Enterprise Linux(R) Server 6.1 (64-bit x86_64) 以降
	Linux 7	Red Hat Enterprise Linux(R) Server 7.1 以降

表記			製品名
Linux	Linux 8		Red Hat Enterprise Linux(R) Server 8.1 以降
	Linux 9		Red Hat Enterprise Linux(R) Server 9.1 以降
HiRDB			HiRDB Server Version 10
			HiRDB Server Version 9
			HiRDB Server Version 9(32)
			HiRDB Server with Additional Function Version 9
			HiRDB Server with Additional Function Version 9(32)
			HiRDB/Parallel Server Plus Version 8
			HiRDB/Parallel Server Plus Version 8(64)
			HiRDB/Parallel Server Version 8
			HiRDB/Parallel Server Version 8(64)
			HiRDB/Single Server Plus Version 8
Performance Management			HiRDB/Single Server Plus Version 8(64)
			HiRDB/Single Server Version 8
PFM - Agent	PFM - Agent for JP1/AJS*	PFM - Agent for JP1/AJS2	JP1/Performance Management - Agent Option for JP1/AJS2
		PFM - Agent for JP1/AJS3	JP1/Performance Management - Agent Option for JP1/AJS3

表記	製品名	
PFM - Agent	PFM - Agent for Cosminexus*	JP1/Performance Management - Agent Option for uCosminexus Application Server
	PFM - Agent for DB2	JP1/Performance Management - Agent Option for IBM DB2
	PFM - Agent for Domino	JP1/Performance Management - Agent Option for IBM Lotus Domino
	PFM - Agent for Enterprise Applications	JP1/Performance Management - Agent Option for Enterprise Applications
	PFM - Agent for Exchange Server*	JP1/Performance Management - Agent Option for Microsoft(R) Exchange Server
	PFM - Agent for HiRDB	JP1/Performance Management - Agent Option for HiRDB
	PFM - Agent for WebSphere MQ*	JP1/Performance Management - Agent Option for IBM WebSphere MQ
	PFM - Agent for IIS*	JP1/Performance Management - Agent Option for Microsoft(R) Internet Information Server
	PFM - Agent for Microsoft SQL Server	JP1/Performance Management - Agent Option for Microsoft(R) SQL Server
	PFM - Agent for OpenTP1*	JP1/Performance Management - Agent Option for OpenTP1
	PFM - Agent for Oracle	JP1/Performance Management - Agent Option for Oracle
PFM - Agent for Platform	PFM - Agent for Platform (UNIX)	JP1/Performance Management - Agent

表記			製品名
PFM - Agent	PFM - Agent for Platform	PFM - Agent for Platform (UNIX)	Option for Platform (UNIX 用)
		PFM - Agent for Platform (Windows)	JP1/Performance Management - Agent Option for Platform (Windows 用)
	PFM - Agent for Service Response		JP1/Performance Management - Agent Option for Service Response
	PFM - Agent for WebLogic Server*		JP1/Performance Management - Agent Option for Oracle(R) WebLogic Server
	PFM - Agent for WebSphere Application Server*		JP1/Performance Management - Agent Option for IBM WebSphere Application Server
PFM - Base			JP1/Performance Management - Base
PFM - Manager			JP1/Performance Management - Manager
PFM - RM	PFM - RM for Microsoft SQL Server		JP1/Performance Management - Remote Monitor for Microsoft(R) SQL Server
	PFM - RM for Oracle		JP1/Performance Management - Remote Monitor for Oracle
	PFM - RM for Platform		JP1/Performance Management - Remote Monitor for Platform
	PFM - RM for Virtual Machine		JP1/Performance Management - Remote Monitor for Virtual Machine
PFM - Web Console			JP1/Performance Management - Web Console

注 1

PFM - Manager, PFM - Agent, PFM - Base, PFM - Web Console および PFM - RM を総称して、Performance Management と表記することがあります。

注 2

HP-UX, AIX, および Linux を総称して、UNIX と表記することがあります。

注※

この製品は日本語環境だけで動作する製品です。

付録 M.3 このマニュアルで使用する英略語

このマニュアルで使用する英略語を、次の表に示します。

英略語	英字での表記
CPU	Central Processing Unit
CSV	Comma Separated Values
DDL	Data Define Language
DHCP	Dynamic Host Configuration Protocol
DNS	Domain Name System
FQDN	Fully Qualified Domain Name
HTML	Hyper Text Markup Language
IP	Internet Protocol
IPF	Itanium Processor Family
LAN	Local Area Network
NAPT	Network Address Port Translation
NAT	Network Address Translation
ODBC	Open Database Connectivity
OS	Operating System
SMTP	Simple Mail Transfer Protocol
SNMP	Simple Network Management Protocol
TCP	Transmission Control Protocol
TCP/IP	Transmission Control Protocol/Internet Protocol
UAC	User Access Control
Web	World Wide Web

付録 M.4 このマニュアルでのプロダクト名, サービス ID, およびサービスキーの表記

Performance Management 09-00 以降では、プロダクト名表示機能を有効にすることで、サービス ID およびサービスキーをプロダクト名で表示できます。

識別子	プロダクト名表示機能	
	無効	有効
サービス ID	BS1 インスタンス名[ホスト名]	インスタンス名[ホスト名]<HiRDB>(Store)
	BA1 インスタンス名[ホスト名]	インスタンス名[ホスト名]<HiRDB>
サービスキー	agtb	HiRDB

このマニュアルでは、プロダクト名表示機能を有効としたときの形式で表記しています。

なお、プロダクト名表示機能を有効にできるのは、次の条件を同時に満たす場合です。

- PFM - Agent の同一装置内の前提プログラム (PFM - Manager または PFM - Base) のバージョンが 09-00 以降
- PFM - Web Console および接続先の PFM - Manager のバージョンが 09-00 以降

付録 M.5 Performance Management のインストール先フォルダの表記

このマニュアルでは、Windows 版 Performance Management のインストール先フォルダをインストール先フォルダ、UNIX 版 Performance Management のインストール先ディレクトリをインストール先ディレクトリと表記しています。

Windows 版 Performance Management のデフォルトのインストール先フォルダは、次のとおりです。

PFM - Base のインストール先フォルダ

システムドライブ¥Program Files (x86)¥Hitachi¥jp1pc

このマニュアルでは、PFM - Base のインストール先フォルダを、インストール先フォルダと表記しています。

PFM - Manager のインストール先フォルダ

システムドライブ¥Program Files (x86)¥Hitachi¥jp1pc

PFM - Web Console のインストール先フォルダ

システムドライブ¥Program Files (x86)¥Hitachi¥jp1pcWebCon

UNIX 版 Performance Management のデフォルトのインストール先ディレクトリは、次のとおりです。

PFM - Base のインストール先ディレクトリ

/opt/jp1pc

PFM - Manager のインストール先ディレクトリ

/opt/jp1pc

PFM - Web Console のインストール先ディレクトリ

/opt/jp1pcwebcon

付録 M.6 KB (キロバイト) などの単位表記について

1KB (キロバイト), 1MB (メガバイト), 1GB (ギガバイト), 1TB (テラバイト) はそれぞれ 1,024 バイ特, 1,024² バイト, 1,024³ バイト, 1,024⁴ バイトです。

(英字)

Action Handler

PFM - Manager または PFM - Agent のサービスの一つです。アクションを実行するサービスのことです。

Agent Collector

PFM - Agent のサービスの一つです。パフォーマンスデータを収集したり、アラームに設定されたしきい値で、パフォーマンスデータを評価したりするサービスのことです。

Agent Store

PFM - Agent のサービスの一つです。パフォーマンスデータを格納するサービスのことです。Agent Store サービスは、パフォーマンスデータの記録のためにデータベースを使用します。各 PFM - Agent に対応して、各 Agent Store サービスがあります。

Correlator

PFM - Manager のサービスの一つです。サービス間のイベント配信を制御するサービスのことです。アラームの状態を評価して、しきい値を超過するとアラームを Trap Generator サービスおよび PFM - Web Console に送信します。

HiRDB 運用ディレクトリ

HiRDB の各種ディレクトリおよびファイルが格納されるディレクトリのことです。

HiRDB 管理者

システム管理者用のユーザ ID で OS にログインしたユーザのうち、HiRDB を操作する権利があるユーザのことです。HiRDB のコマンドを実行する権限があり、HiRDB のディレクトリおよびファイルの所有者です。

JP1/SLM

業務システムをサービス利用者が体感している性能などの視点で監視し、サービスレベルの維持を支援する製品です。

JP1/SLM と連携することで、稼働状況の監視を強化できます。

Master Manager

PFM - Manager のサービスの一つです。PFM - Manager のメインサービスのことです。

Master Store

PFM - Manager のサービスの一つです。各 PFM - Agent から発行されたアラームイベントを管理するサービスのことです。Master Store サービスはイベントデータの保持のためにデータベースを使用します。

Name Server

PFM - Manager のサービスの一つです。システム内のサービス構成情報を管理するサービスのことです。

ODBC キーフィールド

PFM - Manager または PFM - Base で、Store データベースに格納されているレコードのデータを利用する場合に必要な主キーです。ODBC キーフィールドには、各レコード共通のものと各レコード固有のものとがあります。

PD レコードタイプ

→ 「Product Detail レコードタイプ」を参照してください。

Performance Management

システムのパフォーマンスに関する問題を監視および分析するために必要なソフトウェア群の総称です。Performance Management は、次の 5 つのプログラムプロダクトで構成されます。

- PFM - Manager
- PFM - Web Console
- PFM - Base
- PFM - Agent
- PFM - RM

PFM - Agent

Performance Management を構成するプログラムプロダクトの一つです。PFM - Agent は、システム監視機能に相当し、監視対象となるアプリケーション、データベース、OS によって、各種の PFM - Agent があります。PFM - Agent には、次の機能があります。

- 監視対象のパフォーマンスの監視
- 監視対象のデータの収集および記録

PFM - Base

Performance Management を構成するプログラムプロダクトの一つです。Performance Management の稼働監視を行うための基盤機能を提供します。PFM - Agent を動作させるための前提製品です。PFM - Base には、次の機能があります。

- 各種コマンドなどの管理ツール

- Performance Management と他システムとの連携に必要となる共通機能

PFM - Manager

Performance Management を構成するプログラムプロダクトの一つです。PFM - Manager は、マネージャー機能に相当し、次の機能があります。

- Performance Management のプログラムプロダクトの管理
- イベントの管理

PFM - Manager 名

Store データベースに格納されているフィールドを識別するための名称です。コマンドでフィールドを指定する場合などに使用します。

PFM - View 名

PFM - Manager 名の別名です。PFM - Manager 名に比べ、より直感的な名称になっています。例えば、PFM - Manager 名の「INPUT_RECORD_TYPE」は、PFM - View 名で「Record Type」です。PFM - Web Console の GUI 上でフィールドを指定する場合などに使用します。

PFM - Web Console

Performance Management を構成するプログラムプロダクトの一つです。ブラウザーで Performance Management システムを一元的に監視するため Web アプリケーションサーバの機能を提供します。PFM - Web Console には、次の機能があります。

- GUI の表示
- 統合監視および管理機能
- レポートの定義およびアラームの定義

PI レコードタイプ

→ 「Product Interval レコードタイプ」を参照してください。

PL レコードタイプ

→ 「Product Log レコードタイプ」を参照してください。

Product Detail レコードタイプ

現在起動しているプロセスの詳細情報など、ある時点でのシステムの状態を示すパフォーマンスデータが格納されるレコードタイプのことです。PD レコードタイプは、次のような、ある時点でのシステムの状態を知りたい場合に使用します。

- システムの稼働状況
- 現在使用しているファイルシステム容量

Product Interval レコードタイプ

1分ごとのプロセス数など、ある一定の時間（インターバル）ごとのパフォーマンスデータが格納されるレコードタイプのことです。PI レコードタイプは、次のような、時間の経過に伴うシステムの状態の変化や傾向を分析したい場合に使用します。

- 一定時間内に発生したシステムコール数の推移
- 使用しているファイルシステム容量の推移

Product Log レコードタイプ

UNIX 上で実行されているアプリケーションまたはデータベースのログ情報が格納されるレコードタイプのことです。

RD エリア

データの格納単位の一つで、1~16 個の HiRDB ファイルから構成されます。RD エリアには、次に示すものがあります。

- マスタディレクトリ用 RD エリア
- データディレクトリ用 RD エリア
- データディクショナリ用 RD エリア
- データディクショナリ LOB 用 RD エリア
- ユーザ用 RD エリア
- ユーザLOB 用 RD エリア
- リスト用 RD エリア
- レジストリ用 RD エリア
- レジストリ LOB 用 RD エリア

Store データベース

Agent Collector サービスが収集したパフォーマンスデータが格納されるデータベースのことです。

Trap Generator

PFM - Manager のサービスの一つです。SNMP トラップを発行するサービスのことです。

(ア行)

アクション

監視するデータがしきい値に達した場合に、Performance Management によって自動的に実行される動作のことです。次の動作があります。

- E メールの送信
- コマンドの実行
- SNMP トランプの発行
- JP1 イベントの発行

アラーム

監視するデータがしきい値に達した場合のアクションやイベントメッセージを定義した情報のことです。

アラームテーブル

次の情報を定義した 1 つ以上のアラームをまとめたテーブルです。

- 監視するオブジェクト (Process, TCP, WebService など)
- 監視する情報 (CPU 使用率, 1 秒ごとの受信バイト数など)
- 監視する条件 (しきい値)

インスタンス

このマニュアルでは、インスタンスという用語を次のように使用しています。

- レコードの記録形式を示す場合
1 行で記録されるレコードを「単数インスタンスレコード」、複数行で記録されるレコードを「複数インスタンスレコード」、レコード中の各行を「インスタンス」と呼びます。
- PFM - Agent の起動方式を示す場合
同一ホスト上の監視対象を 1 つのエージェントで監視する方式のエージェントを「シングルインスタンスエージェント」と呼びます。これに対して監視対象がマルチインスタンスをサポートする場合、監視対象のインスタンスごとにエージェントで監視する方式のエージェントを「マルチインスタンスエージェント」と呼びます。マルチインスタンスエージェントの各エージェントを「インスタンス」と呼びます。

エージェント

パフォーマンスデータを収集する PFM - Agent のサービスのことです。

(力行)

監視テンプレート

PFM - Agent に用意されている、定義済みのアラームとレポートのことです。監視テンプレートを使用することで、複雑な定義をしなくても PFM - Agent の運用状況を監視する準備が容易にできるようになります。

管理ツール

サービスの状態の確認やパフォーマンスデータを操作するために使用する各種のコマンドまたは GUI 上の機能のことです。次のことができます。

- サービスの構成および状態の表示
- パフォーマンスデータの退避および回復
- パフォーマンスデータのテキストファイルへのエクスポート
- パフォーマンスデータの消去

(サ行)

サービス ID

Performance Management プログラムのサービスに付加された、一意の ID のことです。コマンドを使用して Performance Management のシステム構成を確認する場合、または個々のエージェントのパフォーマンスデータをバックアップする場合などは、Performance Management プログラムのサービス ID を指定してコマンドを実行します。サービス ID は、次の 4 種類から構成されます。

- プロダクト ID
- 機能 ID
- インスタンス番号
- デバイス ID

サービス ID の形式は、プロダクト名表示機能の設定によって異なります。サービス ID の形式については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、Performance Management の機能について説明している章を参照してください。

スタンドアロンモード

PFM - Agent 単独で起動している状態のことです。PFM - Manager の Master Manager サービスおよび Name Server サービスが、障害などのため起動できない状態でも、PFM - Agent だけを起動して、パフォーマンスデータを収集できます。

(タ行)

単数インスタンスレコード

1 行で記録されるレコードです。このレコードは、固有の ODBC キーフィールドを持ちません。

→ 「インスタンス」を参照してください。

データベース ID

PFM - Agent の各レコードに付けられた、レコードが格納されるデータベースを示す ID です。データベース ID は、そのデータベースに格納されるレコードの種類を示しています。データベース ID を次に示します。

- PI : PI レコードタイプのレコードのデータベースであることを示します。
- PD : PD レコードタイプのレコードのデータベースであることを示します。

データモデル

各 PFM - Agent が持つレコードおよびフィールドの総称のことです。データモデルは、バージョンで管理されています。

ドリルダウンレポート

レポートまたはレポートのフィールドに関連づけられたレポートです。あるレポートの詳細情報や関連情報を表示したい場合に使用します。

(八行)

バインド

アラームをエージェントと関連づけることです。バインドすると、エージェントによって収集されているパフォーマンスデータが、アラームで定義したしきい値に達した場合、ユーザーに通知できるようになります。

パフォーマンスデータ

監視対象システムから収集したリソースの稼働状況データのことです。

フィールド

レコードに含まれる個々の稼働情報です。Performance Management での監視項目に該当します。例えば、System Summry(PI) レコードの場合は、Active Server Processes や Avg Utilization % などがフィールドに相当します。

複数インスタンスレコード

複数行で記録されるレコードです。このレコードは、固有の ODBC キーフィールドを持っています。

→ 「インスタンス」を参照してください。

物理ホスト

クラスタシステムを構成する各サーバに固有な環境のことです。物理ホストの環境は、フェールオーバー時にもほかのサーバに引き継がれません。

(ラ行)

ライフタイム

各レコードに収集されるパフォーマンスデータの一貫性が保証される期間のことです。

リアルタイムレポート

監視対象の現在の状況を示すレポートです。

履歴レポート

監視対象の過去から現在までの状況を示すレポートです。

レコード

目的ごとに分類された稼働情報の集まりです。例えば、System Summry (PI) レコードは、処理動作中のサーバプロセスの総数や各サーバ内の排他資源テーブルの平均使用率など、HiRDB パフォーマンス統計を把握するための稼働情報の集まりです。監視エージェントは、レコードの単位で稼働情報を収集します。収集できるレコードは、エージェントプログラムによって異なります。

レポート

PFM - Agent が収集したパフォーマンスデータをグラフィカルに表示する際の情報を定義したもので、主に、次の情報を定義します。

- レポートに表示させるレコード
- パフォーマンスデータの表示項目
- パフォーマンスデータの表示形式（表、グラフなど）

索引

数字

- 10-00 の変更内容 534
- 11-00 の変更内容 533
- 12-00 訂正版の変更内容 532
- 12-00 の変更内容 532

A

- Action Handler 544
- Agent Collector 544
- Agent Collector サービスのプロパティー一覧 505
- Agent Store 544
- Agent Store サービスのプロパティー一覧 501

B

- Buffer Daily Detail 221
- Buffer Daily Detail 0506 222
- Buffer Daily Detail 0506 レポート 222
- Buffer Daily Detail Chart 223
- Buffer Daily Detail Chart 0506 224
- Buffer Daily Detail Chart 0506 レポート 224
- Buffer Daily Detail Chart for Reference Hit Rate 225
- Buffer Daily Detail Chart for Reference Hit Rate 0506 226
- Buffer Daily Detail Chart for Reference Hit Rate 0506 レポート 226
- Buffer Daily Detail Chart for Reference Hit Rate レポート 225
- Buffer Daily Detail Chart for Update Hit Rate 227
- Buffer Daily Detail Chart for Update Hit Rate 0506 228
- Buffer Daily Detail Chart for Update Hit Rate 0506 レポート 228
- Buffer Daily Detail Chart for Update Hit Rate レポート 227
- Buffer Daily Detail Chart レポート 223
- Buffer Daily Detail レポート 221
- Buffer Flush 229

- Buffer Flush 0506 230
- Buffer Flush 0506 レポート 230
- Buffer Flush Detail 231
- Buffer Flush Detail 0506 232
- Buffer Flush Detail 0506 レポート 232
- Buffer Flush Detail レポート 231
- Buffer Flush レポート 229
- Buffer Hit Rate 183
- Buffer Hit Rate 0506 185
- Buffer Hit Rate 0506 アラーム 185
- Buffer Hit Rate アラーム 183
- Buffer Monthly Detail 233
- Buffer Monthly Detail 0506 234
- Buffer Monthly Detail 0506 レポート 234
- Buffer Monthly Detail Chart 235
- Buffer Monthly Detail Chart 0506 236
- Buffer Monthly Detail Chart 0506 レポート 236
- Buffer Monthly Detail Chart for Reference Hit Rate 237
- Buffer Monthly Detail Chart for Reference Hit Rate 0506 238
- Buffer Monthly Detail Chart for Reference Hit Rate 0506 レポート 238
- Buffer Monthly Detail Chart for Reference Hit Rate レポート 237
- Buffer Monthly Detail Chart for Update Hit Rate 239
- Buffer Monthly Detail Chart for Update Hit Rate 0506 240
- Buffer Monthly Detail Chart for Update Hit Rate 0506 レポート 240
- Buffer Monthly Detail Chart for Update Hit Rate レポート 239
- Buffer Monthly Detail Chart レポート 235
- Buffer Monthly Detail レポート 233
- Buffer Status 241
- Buffer Status 0506 242
- Buffer Status 0506 レポート 242

Buffer Status Chart 243
Buffer Status Chart 0506 244
Buffer Status Chart 0506 レポート 244
Buffer Status Chart レポート 243
Buffer Status レポート 241
Buffer Trend 245
Buffer Trend 0506 246
Buffer Trend 0506 レポート 246
Buffer Trend Chart 247
Buffer Trend Chart 0506 248
Buffer Trend Chart 0506 レポート 248
Buffer Trend Chart レポート 247
Buffer Trend レポート 245

C

Commit Chart (4.5) 249
Commit Chart (4.5) レポート 249
Commit Daily Chart (4.5) 250
Commit Daily Chart (4.5) レポート 250
Connect Requests Chart (4.5) 251
Connect Requests Chart (4.5) レポート 251
Connect Requests Daily Chart (4.5) 252
Connect Requests Daily Chart (4.5) レポート 252
Correlator 544

D

DB Global Buffer Status for version 05-06
(PI_GB05) レコード 331
DB Global Buffer Status for version 06-00, or
later (PI_GBUF) レコード 335
DB Maintenance Info ROT1 (5.0) 253
DB Maintenance Info ROT1 (5.0) レポート 253
DB Maintenance Info ROT2 (5.0) 255
DB Maintenance Info ROT2 (5.0) レポート 255
Detail Communication Control Status
(PD_CNST) レコード 339

F

Forecast Time of DB Reorg.Function Level 1
(PD_ROT1) レコード 342
Forecast Time of DB Reorg.Function Level 2
(PD_ROT2) レコード 347

H

HA クラスタシステム 133
HiRDB/シングルサーバ, HiRDB/パラレルサーバのど
ちらの構成でも運用できます 22
HiRDB File System Area Status (PI_FSST) レ
コード 352
HiRDB Message (PD_MLOG) レコード 356
HiRDB Message Log (4.0) 257
HiRDB Message Log (4.0) レポート 257
HiRDB Message Log 1 Hour (4.0) 258
HiRDB Message Log 1 Hour (4.0) レポート 258
HiRDB Product Detail (PD) レコード 360
HiRDB Server Status (PD_SVST) レコード 361
HiRDB Statistical Information SYS (PI_SSYS) 364
HiRDB System (PD_HRDS) レコード 396
HiRDB 運用ディレクトリ [用語解説] 544
HiRDB 管理者 544
HiRDB の運用上の問題点を通知できます 21
HiRDB のパフォーマンスデータを収集できます 19
HiRDB ファイルシステム領域の稼働状況の監視 30

I

IP アドレスの設定 [UNIX の場合] 82
IP アドレスの設定 [Windows の場合] 34

J

JP1/SLM 544
JP1/SLM との連携 531
jpccconf db define コマンド 68, 120
jpccconf inst list コマンド 116
jpccconf inst setup コマンド 48, 101
jpccconf inst unsetup コマンド 116
jphosts ファイル 143, 154
jpcras コマンド 481

jpcsto.ini ファイルの設定項目 [UNIX の場合] 121
jpcsto.ini ファイルの設定項目 [Windows の場合] 69
jpcsto.ini ファイルの編集手順 [UNIX の場合] 122
jpcsto.ini ファイルの編集手順 [Windows の場合] 70
jpcsto.ini ファイルの編集前の準備 [UNIX の場合] 122
jpcsto.ini ファイルの編集前の準備 [Windows の場合] 70
jpcsto.ini ファイルを編集して設定を変更する [UNIX の場合] 121
jpcsto.ini ファイルを編集して設定を変更する [Windows の場合] 69

K

KB (キロバイト) などの単位表記について 543

L

LANG 環境変数の設定 95
Linux 環境でのファイアウォール設定削除方法 (firewalld が有効な環境) 500
Linux 環境でのファイアウォール設定削除方法 (iptables, ip6tables が有効な環境) 500
Linux 環境でのファイアウォール設定方法 (firewalld が有効な場合) 498
Linux 環境でのファイアウォール設定方法 (iptables, ip6tables が有効な場合) 496
Log Read Error 187
Log Read Error アラーム 187
Log Wait Thread 189
Log Wait Thread アラーム 189
Log Write Error 191
Log Write Error アラーム 191

M

Master Manager 544
Master Store 545

N

Name Server 545

O

ODBC キーフィールド 545
ODBC キーフィールド一覧 319

P

PD 360
PD_CNST 339
PD_HRDS 396
PD_MLOG 356
PD_ROT1 342
PD_ROT2 347
PD_SVST 361
PD レコードタイプ 20, 545
Performance Management 545
Performance Management インストール時の注意事項 [インストール・セットアップ:UNIX の場合] 88
Performance Management インストール時の注意事項 [インストール・セットアップ:Windows の場合] 40
Performance Management のインストール先フォルダの表記 542
Performance Management の障害回復 488
Performance Management の障害検知 487
Performance Management プログラム [UNIX の場合] 85
Performance Management プログラム [Windows の場合] 37
PFM - Agent 545
PFM - Agent for HiRDB のインストール手順 [UNIX の場合] 91
PFM - Agent for HiRDB のインストール手順 [Windows の場合] 42
PFM - Agent for HiRDB の運用方式の変更 [UNIX の場合] 120
PFM - Agent for HiRDB の運用方式の変更 [Windows の場合] 68
PFM - Agent for HiRDB の概要 18
PFM - Agent for HiRDB のシステム構成の変更 [UNIX の場合] 119
PFM - Agent for HiRDB のシステム構成の変更 [Windows の場合] 67

PFM - Agent for HiRDB のシステム構成の変更 [クラスタ運用時] 175
PFM - Agent for HiRDB の接続先 PFM - Manager の設定 [UNIX の場合] 114
PFM - Agent for HiRDB の接続先 PFM - Manager の設定 [Windows の場合] 61
PFM - Agent for HiRDB のセットアップファイルをコピーする [UNIX の場合] 98
PFM - Agent for HiRDB のセットアップファイルをコピーする [Windows の場合] 46
PFM - Agent for HiRDB の特長 19
PFM - Agent for HiRDB のファイルおよびディレクトリ一覧 514
PFM - Agent for HiRDB のポート番号 494
PFM - Agent の登録 141, 152
PFM - Agent の論理ホストのアンセットアップ 161, 168
PFM - Agent の論理ホストのセットアップ 142, 153
PFM - Agent ホストに障害が発生した場合のフェールオーバー 135
PFM - Base 545
PFM - Manager 546
PFM - Manager および PFM - Web Console への PFM - Agent for HiRDB の登録 [UNIX の場合] 96
PFM - Manager および PFM - Web Console への PFM - Agent for HiRDB の登録 [Windows の場合] 44
PFM - Manager が停止した場合の影響 136
PFM - Manager での設定の削除 164, 170
PFM - Manager 名 546
PFM - View 名 546
PFM - Web Console 546
PI 425
PI_FSST 352
PI_GB05 331
PI_GBUF 335
PI_LKST 423
PI_RDDS 397
PI_RDFL 407
PI_RDFS 412
PI_RDST 418

PI_SSYS 364
PI レコードタイプ 20, 546
PL レコードタイプ 546
Process Request Over Chart (4.5) 259
Process Request Over Chart (4.5) レポート 259
Process Request Over Daily Chart (4.5) 260
Process Request Over Daily Chart (4.5) レポート 260
Product Detail レコードタイプ 546
Product Interval レコードタイプ 547
Product Log レコードタイプ 547

R

Rdarea Available Space Daily (4.5) 261
Rdarea Available Space Daily (4.5) レポート 261
Rdarea Available Space Monthly (4.5) 262
Rdarea Available Space Monthly (4.5) レポート 262
RDAREA Detailed Status (PI_RDDS) レコード 397
Rdarea File I/O Daily (4.5) 263
Rdarea File I/O Daily (4.5) レポート 263
Rdarea File I/O Monthly (4.5) 264
Rdarea File I/O Monthly (4.5) レポート 264
Rdarea File Space 193
Rdarea File Space Daily (4.5) 265
Rdarea File Space Daily (4.5) レポート 265
Rdarea File Space Monthly (4.5) 267
Rdarea File Space Monthly (4.5) レポート 267
Rdarea File Space アラーム 193
RDAREA HiRDB File (PI_RDFL) レコード 407
RDAREA HiRDB File System Area (PI_RDFS) レコード 412
Rdarea Space 195
Rdarea Space Daily (4.0) 268
Rdarea Space Daily (4.0) レポート 268
Rdarea Space Daily (4.5) 269
Rdarea Space Daily (4.5) レポート 269
Rdarea Space Daily Chart (4.0) 270
Rdarea Space Daily Chart (4.0) レポート 270

Rdarea Space Daily Chart (4.5) 271
Rdarea Space Daily Chart (4.5) レポート 271
Rdarea Space Monthly (4.0) 272
Rdarea Space Monthly (4.0) レポート 272
Rdarea Space Monthly (4.5) 273
Rdarea Space Monthly (4.5) レポート 273
Rdarea Space Monthly Chart (4.0) 274
Rdarea Space Monthly Chart (4.0) レポート 274
Rdarea Space Monthly Chart (4.5) 275
Rdarea Space Monthly Chart (4.5) レポート 275
Rdarea Space Status (4.0) 276
Rdarea Space Status (4.0) レポート 276
Rdarea Space Status Chart (4.0) 277
Rdarea Space Status Chart (4.0) レポート 277
Rdarea Space Status Chart Worst 5 (4.0) 278
Rdarea Space Status Chart Worst 5 (4.0) レポート 278
Rdarea Space Status Worst 5 (4.0) 279
Rdarea Space Status Worst 5 (4.0) レポート 279
Rdarea Space Trend (4.0) 280
Rdarea Space Trend (4.0) レポート 280
Rdarea Space Trend Chart (4.0) 281
Rdarea Space Trend Chart (4.0) レポート 281
Rdarea Space Trend Chart Worst 5 (4.0) 282
Rdarea Space Trend Chart Worst 5 (4.0) レポート 282
Rdarea Space Trend Worst 5 (4.0) 283
Rdarea Space Trend Worst 5 (4.0) レポート 283
Rdarea Space アラーム 195
Rdarea Status 197
Rdarea Status (4.0) 284
Rdarea Status (4.0) レポート 284
RDAREA Status (PI_RDST) レコード 418
Rdarea Status アラーム 197
RD エリア 547
RD エリアの稼働状況の監視 28
Reorg Resource ROT1 199
Reorg Resource ROT1 アラーム 199
Reorg Resource ROT2 201

Reorg Resource ROT2 アラーム 201
Rollback Chart (4.5) 285
Rollback Chart (4.5) レポート 285
Rollback Daily Chart (4.5) 286
Rollback Daily Chart (4.5) レポート 286
Rollback Rate 203
Rollback Rate アラーム 203

S

Server Calls From Others (4.5) 287
Server Calls From Others (4.5) レポート 287
Server Calls From Others Daily (4.5) 288
Server Calls From Others Daily (4.5) レポート 288
Server Calls On Unit (4.5) 289
Server Calls On Unit (4.5) レポート 289
Server Calls On Unit Daily (4.5) 290
Server Calls On Unit Daily (4.5) レポート 290
Server Exec Time From Others (4.5) 291
Server Exec Time From Others (4.5) レポート 291
Server Exec Time From Others Daily (4.5) 292
Server Exec Time From Others Daily (4.5) レポート 292
Server Exec Time On Unit (4.5) 293
Server Exec Time On Unit (4.5) レポート 293
Server Exec Time On Unit Daily (4.5) 294
Server Exec Time On Unit Daily (4.5) レポート 294
Server Lock Control Status (PI_LKST) レコード 423
Server Process Count Chart (4.5) 295
Server Process Count Chart (4.5) レポート 295
Server Process Count Daily Chart (4.5) 296
Server Process Count Daily Chart (4.5) レポート 296
Server Status (4.0) 297
Server Status (4.0) レポート 297
Store データベース 20, 547

Store データベースに記録されるときだけ追加される
フィールド 326

Store バージョン 2.0 への移行 71, 124

Sync Point Interval 205

Sync Point Interval アラーム 205

syslog と Windows イベントログの一覧 435

System Daily Summary SYS (4.5) 298

System Daily Summary SYS (4.5) レポート 298

System Monthly Summary SYS (4.5) 302

System Monthly Summary SYS (4.5) レポート 302

System Summary Record (PI) レコード 425

System Summary SYS (4.5) 307

System Summary SYS (4.5) レポート 307

T

Trap Generator 547

W

Web ブラウザでマニュアルを参照するための設定
[UNIX の場合] 130

Web ブラウザでマニュアルを参照するための設定
[Windows の場合] 78

Windows ファイアウォール環境での設定削除方法
499

Windows ファイアウォール環境での設定方法 495

Work File 207

Work File Chart (4.5) 312

Work File Chart (4.5) レポート 312

Work File Daily Chart (4.5) 313

Work File Daily Chart (4.5) レポート 313

Work File アラーム 207

あ

アクション 21, 547

アラーム 21, 548

アラーム一覧 182

アラームおよびレポートを定義できます 21

アラームテーブル 21, 548

アラームの記載形式 181

アンインストール手順 [UNIX の場合] 118

アンインストール手順 [Windows の場合] 66

アンインストールに必要な OS ユーザー権限に関する
注意事項 [UNIX の場合] 115

アンインストールに必要な OS ユーザー権限に関する
注意事項 [Windows の場合] 63

アンインストール前の注意事項 [UNIX の場合] 115

アンインストール前の注意事項 [Windows の場合]
63

アンインストール [UNIX の場合] 115

アンインストール [Windows の場合] 63

い

インスタンス 548

インスタンス環境のアンセットアップ [UNIX の場
合] 116

インスタンス環境のアンセットアップ [Windows の
場合] 64

インスタンス環境の更新 73

インスタンス環境の更新 [UNIX の場合] 126

インスタンス環境の設定 143, 154

インスタンス環境の設定 [UNIX の場合] 99

インスタンス環境の設定 [Windows の場合] 47

インスタンス設定ファイルを作成する 50, 102

インストール手順 [UNIX の場合] 91

インストールとセットアップ (UNIX の場合) 80

インストールとセットアップ (Windows の場合) 32

インストールとセットアップの流れ [UNIX の場合] 81

インストールとセットアップの流れ [Windows の場
合] 33

インストールに必要な OS ユーザー権限について
[UNIX の場合] 84

インストールに必要な OS ユーザー権限について
[Windows の場合] 36

インストールの前に確認すること [UNIX の場合] 82

インストールの前に確認すること [Windows の場
合] 34

インストール前の注意事項 39, 86

インストール [Windows の場合] 42

え

エイリアス名 34, 82
エージェント 548

か

カーネルパラメーター 491
各バージョンの変更内容 532
稼働状況ログ 472
環境変数に関する注意事項 [UNIX の場合] 86
環境変数に関する注意事項 [Windows の場合] 39
監視対象プログラム [UNIX の場合] 84
監視対象プログラム [Windows の場合] 36
監視テンプレート 21, 179, 180, 548
監視テンプレートの概要 180
管理ツール 549
関連マニュアル 535

き

共通メッセージログ 471, 472
共有ディスクのアンマウント 156, 169
共有ディスクのオフライン 145, 163
共有ディスクのオンライン 141, 161
共有ディスクのマウント 152, 167

く

クラスタ運用時のディスク占有量 490
クラスタシステム運用時に収集するパフォーマンスデータ中のホスト名について 172
クラスタシステムで運用する場合の注意事項 172
クラスタシステムで運用できます 22
クラスタシステムでの PFM - Agent for HiRDB の運用方式の変更 176
クラスタシステムでのアンインストール手順 (UNIX の場合) 171
クラスタシステムでのアンインストール手順 (Windows の場合) 164
クラスタシステムでのアンインストールとアンセットアップ (UNIX の場合) 165
クラスタシステムでのアンインストールとアンセットアップ (Windows の場合) 159

クラスタシステムでのアンインストールとアンセットアップの流れ (UNIX の場合) 165
クラスタシステムでのアンインストールとアンセットアップの流れ (Windows の場合) 159
クラスタシステムでのアンセットアップ手順 (UNIX の場合) 166
クラスタシステムでのアンセットアップ手順 (Windows の場合) 160
クラスタシステムでのインスタンス環境の更新 176
クラスタシステムでのインストール手順 (UNIX の場合) 152
クラスタシステムでのインストール手順 (Windows の場合) 141
クラスタシステムでのインストールとセットアップ (UNIX の場合) 148
クラスタシステムでのインストールとセットアップ (Windows の場合) 137
クラスタシステムでのインストールとセットアップについて [UNIX の場合] 85
クラスタシステムでのインストールとセットアップについて [Windows の場合] 37
クラスタシステムでのインストールとセットアップの流れ (UNIX の場合) 150
クラスタシステムでのインストールとセットアップの流れ (Windows の場合) 139
クラスタシステムでのインストールとセットアップの前に確認すること (UNIX の場合) 148
クラスタシステムでのインストールとセットアップの前に確認すること (Windows の場合) 137
クラスタシステムでの運用 132
クラスタシステムでの環境設定 147, 158
クラスタシステムでのセットアップ手順 (UNIX の場合) 152
クラスタシステムでのセットアップ手順 (Windows の場合) 141
クラスタシステムでの論理ホスト環境定義ファイルのエクスポート・インポート 177
クラスタシステムの概要 133
クラスタソフトからの PFM - Agent の登録解除 164, 170
クラスタソフトからの起動・停止の確認 147, 158
クラスタソフトからの停止 161, 167

クラスタソフトへの PFM - Agent の登録 145, 157
グローバルバッファヒット率の監視 27

け

言語環境の設定 44

こ

このマニュアルで使用する英略語 541
このマニュアルでの表記 537
このマニュアルでのプロダクト名, サービス ID, およびサービスキーの表記 542
このマニュアルの参考情報 535

さ

サービス ID 549
サービスに関する注意事項 [UNIX の場合] 115
サービスに関する注意事項 [Windows の場合] 64

し

識別子一覧 492
システムの稼働に関する統計情報の監視 26
システム見積もり 490
システムログ 471
実行系ノード 22
実ホスト名 34, 82
障害発生時の資料採取の準備 38, 86
資料の採取方法 481

す

スキャン対象から除外されるフォルダおよびファイルに関する注意事項 [UNIX の場合] 89
スキャン対象から除外されるフォルダおよびファイルに関する注意事項 [Windows の場合] 41
スタンダロンモード 549
ステータス管理機能 487

せ

接続先 PFM - Manager の解除 65, 117
接続先 PFM - Manager の設定 142, 153

セットアップコマンドを実行する [PFM - Manager ホスト : UNIX の場合] 98

セットアップコマンドを実行する [PFM - Manager ホスト : Windows の場合] 46

セットアップコマンドを実行する [PFM - Web Console ホスト : UNIX の場合] 98

セットアップコマンドを実行する [PFM - Web Console ホスト : Windows の場合] 46

セットアップ [UNIX の場合] 95

セットアップ [Windows の場合] 44

前提 OS [UNIX の場合] 82

前提 OS [Windows の場合] 34

前提プログラム [UNIX の場合] 84

前提プログラム [Windows の場合] 36

そ

その他のトラブルに関するトラブルシューティング 470

た

他 Performance Management プログラムの論理ホストのアンセットアップ 162, 169
他 Performance Management プログラムの論理ホストのセットアップ 143, 154
待機系ノード 22
対処の手順 464
単数インスタンスレコード 549

て

ディスク占有量 490
データ型一覧 322
データベース ID 550
データモデル 20, 550
データモデルについて 315
デルタ 318

と

同一ホストに Performance Management プログラムを複数インストール, セットアップするときの注意事項 [UNIX の場合] 87

同一ホストに Performance Management プログラムを複数インストール、セットアップするときの注意事項 [Windows の場合] 39
動作ログ出力の設定 62, 114, 144, 155
動作ログに出力される事象の種別 522
動作ログの出力 522
動作ログの出力形式 523
動作ログの保存形式 522
動作ログを出力するための設定 528
トラブルシューティング 465
トラブルシューティング時に UNIX 環境で採取する資料の採取方法 484
トラブルシューティング時に Windows 環境で採取する資料の採取方法 481
トラブルシューティング時に採取するログ情報 471
トラブルシューティング時に採取するログ情報の種類 471
トラブル発生時に UNIX 環境で採取が必要な資料 477
トラブル発生時に Windows 環境で採取が必要な資料 474
トラブル発生時に採取が必要な資料 474
トラブルへの対処方法 463
ドリルダウンレポート 550
ドリルダウンレポート (フィールドレベル) 210
ドリルダウンレポート (レポートレベル) 209
トレースログ 472

ね

ネットワークに関する注意事項 [UNIX の場合] 115
ネットワークに関する注意事項 [Windows の場合] 63
ネットワークの環境設定 [UNIX の場合] 82
ネットワークの環境設定 [Windows の場合] 34
ネットワークの設定 143, 154
ネットワークの設定 [UNIX の場合] 112
ネットワークの設定 [Windows の場合] 59

は

バージョンアップ手順とバージョンアップ時の注意事項 520

バージョンアップの注意事項 [UNIX の場合] 88
バージョンアップの注意事項 [Windows の場合] 40
バージョン互換 521
バインド 21, 550
バックアップとリストア [UNIX の場合] 128
バックアップとリストア [Windows の場合] 76
バックアップ [UNIX の場合] 128
バックアップ [Windows の場合] 76
パフォーマンス監視の運用例 26
パフォーマンスデータ 550
パフォーマンスデータの格納先の変更 144, 155
パフォーマンスデータの格納先の変更 [UNIX の場合] 113, 120
パフォーマンスデータの格納先の変更 [Windows の場合] 60, 68
パフォーマンスデータの管理方法 25
パフォーマンスデータの収集と管理に関するトラブルシューティング 466
パフォーマンスデータの収集と管理の概要 25
パフォーマンスデータの収集方法 25
パフォーマンスデータの性質に応じた方法で収集できます 20
パフォーマンスデータを保存できます 20

ふ

ファイアウォールの通過方向 494
ファイルおよびディレクトリー覧 514
フィールド 20, 209, 550
フィールドの値 323
フェールオーバー時の処理 135
複数インスタンスレコード 550
物理ホスト 550
プログラムに関する注意事項 [UNIX の場合] 115
プログラムに関する注意事項 [Windows の場合] 63
プログラムのインストール順序 [UNIX の場合] 91
プログラムのインストール順序 [Windows の場合] 42
プロセス一覧 493
プロパティ 501

^

ベースラインの選定 26

ほ

ポート番号一覧 494

ポート番号の設定の解除 161, 167

ポート番号の設定 [UNIX の場合] 83

ポート番号の設定 [Windows の場合] 35

ま

マニュアルの参照手順 79, 131

マニュアルを参照するための設定 78, 130

め

メッセージ 428

メッセージ一覧 437

メッセージの記載形式 431

メッセージの出力形式 429

メッセージの出力先一覧 432

メモリー所要量 490

よ

用語解説 544

要約ルール 320

ら

ライフタイム 551

り

リアルタイムレポート 19, 551

リストア [UNIX の場合] 128

リストア [Windows の場合] 76

履歴レポート 20, 551

れ

レコード 20, 209, 314, 551

レコード一覧 329

レコードの記載形式 316

レコードの収集に関する注意事項 328

レポート 19, 551

レポート一覧 214

レポートの記載形式 209

レポートのフォルダ構成 211

ろ

ログのファイルサイズ変更 144, 155

ログのファイルサイズ変更 [UNIX の場合] 113

ログのファイルサイズ変更 [Windows の場合] 60

ログファイルおよびディレクトリー一覧 472

論理ホスト環境定義ファイルのインポート 145, 156, 163, 170

論理ホスト環境定義ファイルのエクスポート 144, 155, 162, 169

論理ホスト環境定義ファイルの待機系ノードへのコピー 144, 155, 163, 169